

博士学位論文（東京外国語大学）
Doctoral Thesis (Tokyo University of Foreign Studies)

氏名	匹田 剛
学位の種類	博士（学術）
学位記番号	博乙第 32 号
学位授与の日付	2023 年 2 月 15 日
学位授与大学	東京外国語大学
博士学位論文題目	ロシア語の名詞句における格と一致をめぐって

Name	Hikita, Go
Name of Degree	Doctor of Philosophy (Humanities)
Degree Number	Otsu-no.32
Date	February 15,2023
Grantor	Tokyo University of Foreign Studies, JAPAN
Title of Doctoral Thesis	Case Marking and Agreement in Russian Noun Phrases

東京外国語大学 博士学位論文

ロシア語の名詞句における格と一致をめぐって

東京外国語大学大学院総合国際学研究院

匹田 剛

2023年2月

目次

略記一覧	vii
謝辞	ix
1. はじめに	1
1.1. 基本的な考え方	1
1.2. 典型的な名詞句と非典型的な名詞句	3
1.3. 数量詞と数量詞句	7
1.3.1. 連続体としての数量詞とその含意するもの	7
1.3.2. 数量詞と数量詞句とは何か	14
2. いくつかの記述的・理論的前提	16
2.1. 文法素性と素性のスロット	16
2.1.1. 関連する文法素性	16
2.1.1.1. 性・数・格	16
2.1.1.2. 有生性	17
2.1.1.3. 屈折タイプ	18
2.1.1.4. 関係する素性のまとめ	19
2.1.2. 名詞と一致定語の文法素性	19
2.1.3. 数量詞の文法素性	21
2.2. 一致素性のコピー	24
2.3. 格	26
2.3.1. 格と一致素性の違い	26
2.3.2. Babby の格に関する理論とQPにおける格の分布	28
2.3.3. 格の上書き	34
2.3.4. 主格の付与について	37
2.3.5. 格境界について	39
2.4. 複数における性	40
2.5. 複数における屈折タイプ	44
3. 主語・述語の一致	48
3.1. QP 主語に対する述語の3つの一致パターン	48
3.2. 意味的一致か形式的的一致か？	50
3.3. 数量的集合名詞	52
3.3.1. QCNと7つの特徴	54
3.3.2. QCNと述語の一致	57

3.3.3.	pl.3 での一致が「形式的-一致」であること	61
3.4.	可能な一致のパターン	64
3.4.1.	形式的-一致とする先行研究	65
3.4.2.	複数の格の存在	68
3.4.3.	一致の controller のあいまいさ	70
3.4.4.	いくつかの一致の controller の存在	71
3.4.4.1.	典型的 NP の場合	71
3.4.4.2.	QP の場合	72
3.4.4.2.1.	NQ の場合	72
3.4.4.2.2.	PcQ と HQ の場合	76
3.4.4.2.3.	「1」の場合	77
3.4.4.2.4.	QCN の場合	77
3.4.4.3.	否定属格の主語	78
3.4.5.	全体と部分が一致の Ctrl になり得る他の NP	79
3.5.	本章のまとめ	80
4.	ロシア語の数体系をめぐって	83
4.1.	PcQ の概要	85
4.2.	歴史的背景	89
4.2.1.	「単数属格」形について	89
4.2.2.	形容詞性の消失	90
4.3.	先行研究における共時的説明	90
4.4.	説明すべき問題	92
4.4.1.	単数と考える場合	92
4.4.1.1.	意味的な問題	92
4.4.1.2.	数を「支配する」数量詞	92
4.4.1.3.	N のそれぞれの格環境における形態	93
4.4.1.4.	一致定語の数	94
4.4.1.5.	形容詞タイプの名詞	96
4.4.1.6.	単数属格とは異なる形態	97
4.4.2.	複数と考えた場合の問題	97
4.4.2.1.	性の対立	98
4.4.2.2.	異形態の生じる理由	98
4.4.2.3.	絶対複数名詞との結合	98
4.5.	少数の導入	100
4.5.1.	秋山 (2002) の提案	100
4.5.2.	少数の理論的整備	102

4.5.2.1.	少数における性と屈折タイプの対立	103
4.5.2.2.	説明するべき問題	105
4.5.2.2.1.	意味的な問題	105
4.5.2.2.2.	数を「支配」する数量詞	106
4.5.2.2.3.	Nのそれぞれの格環境における形態	106
4.5.2.2.4.	一致定語の数	107
4.5.2.2.5.	形容詞タイプの名詞	109
4.5.2.2.6.	性の対立	110
4.5.2.2.7.	単数属格とは異なる形態	110
4.5.2.2.8.	絶対複数名詞との結合	111
4.5.3.	PcQPを主語とする述語の一致	118
4.5.4.	Nが女性名詞の場合	120
4.6.	本章のまとめ	123
5.	有生性の一致について	125
5.1.	対格の3つの形態法	125
5.2.	属格化の条件	128
5.2.1.	典型的 NP の場合	129
5.2.2.	属格化はどこで起こるのか？	134
5.2.2.1.	どちらでも問題無い場合	136
5.2.2.2.	末端で適用されなければならない場合	137
5.2.2.3.	QP の場合	138
5.2.3.	属格化の場所	140
5.2.3.1.	典型的 NP の場合	140
5.2.3.2.	QP の場合	142
5.2.4.	Qの素性の整理	146
5.2.4.1.	一致素性とCBを越えさせる素性	146
5.2.4.2.	Qの素性と実際の形態	149
5.2.4.2.1.	典型的 NP と「1」の場合	149
5.2.4.2.2.	PcQ「2」の場合	151
5.2.4.2.3.	PcQ「3, 4」の場合	152
5.2.4.2.4.	HQ の場合	153
5.2.4.2.5.	NQ の場合	154
5.2.4.2.6.	QCN の場合	155
5.3.	主格化	157
5.4.	本章のまとめ	162
6.	語彙で予め付与されている数量属格	165

6.1.	過去の提案	166
6.1.1.	匹田 (2018)の改定	166
6.1.2.	匹田 (2019)での再改定	171
6.2.	PcQ の格	173
6.2.1.	通時的変化	174
6.2.2.	具体例での検証	176
6.2.2.1.	格環境によるちがい	176
6.2.2.1.1.	主格環境	176
6.2.2.1.2.	語彙格環境	177
6.2.2.1.3.	対格環境	179
6.2.2.2.	述語の一致	180
6.3.	分配の前置詞 по をめぐって	185
6.3.1.	по が付与する格について	185
6.3.2.	通時的に見た по пять/пяти という2つのバリエーション	189
6.3.3.	Franks (1995)による説明	191
6.3.4.	PreGenQ と DatQ	193
6.4.	ロシア語の数量詞の受けている言語変化	197
6.5.	PreGenQ を持つ他の Q	199
6.6.	本章のまとめ	200
7.	N の素性に CB を越えさせる素性をめぐって	202
7.1.	NP 内部での CB を越える素性のコピーに関して	202
7.1.1.	横方向のコピーについて	203
7.1.2.	上方向のコピー	207
7.2.	述語との一致をめぐって	208
7.2.1.	[±upNum]について	208
7.2.2.	いくつかの例の確認: PcQP と HQP	209
7.2.3.	AM の存在と述語の一致	215
7.2.3.1.	[+upNum]の代わりに	215
7.2.3.2.	AM のない場合	217
7.2.3.3.	AM の存在する場合	220
7.2.3.3.1.	PcQ と HQ の場合	220
7.2.3.3.2.	対格の形態法について	223
7.2.4.	NQ をめぐる問題	227
7.2.4.1.	AM の複数での一致の可否	228
7.2.4.2.	AM の一致形態と述語の一致形態	229
7.3.	本章のまとめ	233

8.	典型から逸脱する性の一致	235
8.1.	性の一致についての非典型的ふるまい	235
8.2.	光井 (2018a)らによる記述と説明	239
8.3.	理論的整備	243
8.3.1.	これまでの確認	243
8.3.2.	意味的一致に関わる新しい提案	245
8.3.2.1.	Pesetsky (2013)の \mathcal{K} について	246
8.3.2.2.	光井 (2018a)の \mathcal{K} の非活性化にかわる提案	247
8.3.2.2.1.	記述的観点からの検討	248
8.3.2.2.2.	具体例の確認	254
8.4.	本章のまとめ	261
9.	ロシア語の Q の連続体性と本稿の説明の妥当性	262
9.1.	連続体としての Q の中での PcQ	262
9.1.1.	本稿での連続体の改訂	262
9.1.2.	ColQ について	264
9.2.	Pesetsky (2013)と本稿の比較	271
9.2.1.	Pesetsky (2013)の概要	272
9.2.1.1.	“You are what you assign.”	272
9.2.1.2.	The One-Suffix Rule	272
9.2.1.3.	NBR features and NBR morphology	273
9.2.2.	本稿のここまでの要点	274
9.2.3.	PcQ に関わるいくつかの現象をめぐって	277
9.2.3.1.	数と格の不一致	277
9.2.3.1.1.	Pesetsky (2013)の説明	277
9.2.3.1.2.	本稿での説明	280
9.2.3.2.	女性の一致を引き起こす男性名詞	282
9.2.3.2.1.	Pesetsky (2013)の説明	283
9.2.3.2.2.	本稿での説明	287
9.2.3.3.	PcQP のいわゆる単数属格形	289
9.2.3.3.1.	Pesetsky (2013)による説明	289
9.2.3.3.2.	本稿での説明	290
9.2.3.4.	対格の形態	290
9.2.3.4.1.	Pesetsky (2013)による説明	290
9.2.3.4.2.	本稿での説明	293
9.2.3.5.	女性名詞を含む PcQP の形容詞の形態	295
9.2.3.5.1.	Pesetsky (2013)の説明	295

9.2.3.5.2. 本稿と匹田 (2019)での説明	296
9.2.3.6. 述語の一致	298
9.2.3.7. 絶対複数名詞との結合	300
9.2.3.7.1. Pesetsky (2013)の説明	300
9.2.3.7.2. 本稿での説明	301
9.2.3.8. Qに先行する добрых, целых などの形容詞	303
9.2.3.8.1. Pesetsky (2013)の説明	303
9.2.3.8.2. 本稿での説明	304
9.3. 本章のまとめ	306
10. まとめと残された課題	307
10.1. まとめ	307
10.2. 残された課題と展望	324
10.2.1. оба について	324
10.2.2. полтора について	326
10.2.3. 複数における性の対立	327
10.2.4. 数詞「2~4」の animacy での一致について	329
10.2.5. 分割文	330
10.2.6. その他本稿が研究対象としなかったこと	331
文献	332

略記一覧

例文のグロスや樹形図などで用いる文法素性等の略記は以下の通り。ただし、それぞれの例において示すのは、議論に関係するもののみである。なお、()内に示したものは文中で素性に言及する場合に用いるもの、「/」で区切られ複数の形が示されているのは複数の用語が認められるもので、先頭に示したものが本稿で使用したものである。

- nom (Nom) = nominative, 主格
- acc (Acc) = accusative, 対格
- gen (Gen) = genitive, 属格/生格
- loc (Loc) = locative / prepositional, 処格/前置格
- dat (Dat) = dative, 与格
- ins (Ins) = instrumental, 具格/造格
- genq (GenQ) = genitive of quantification, 数量属格
- datq (DatQ) = dative of quantification, 数量与格
- sg = singular, 単数
- pl = plural, 複数
- du = dual, 双数
- pc = paucal, 少数
- m = masculine, 男性
- n = neuter, 中性
- f = feminine, 女性
- an = animate, 有生/活動体
- in = inanimate, 無生/不活動体
- I = first declension type, 第1変化
- II = second declension type, 第2変化
- III = third declension type, 第3変化
- indc = indeclinable, 不変化
- pr = nonpast/present, 非過去/現在
- pa = past, 過去
- 1 = first person, 1人称
- 2 = second person, 2人称
- 3 = third person, 3人称

略記一覧

inf = infinitive, 不定法
imp = imperative, 命令法
sbj = subjunctive, 假定法
dist = distributive preposition *po*, 分配の前置詞 *po*
ap = active participle, 能動形動詞/能動分詞
pp = passive participle, 受動形動詞/受動分詞
advp = adverbial participle, 副動詞/副分詞
emph = emphatic particle, 強調の助詞
N = noun, 名詞
A = adjective, 形容詞
V = verb, 動詞
Q = quantifier, 数量詞
PcQ = paucal quantifier, 少数数量詞
HQ = high quantifier, 上位数量詞
NQ = nominal quantifier, 名詞的数量詞
QCN = quantificational collective noun, 数量的集合名詞
ColQ = collective quantifier, 集合数量詞
AM = agreeing modifier, 一致定語
NM = non-agreeing modifier, 不一致定語
Ctrl = controller, (一致の)コントローラー
CB = case boundary, 格境界
MR = Modern Russian, 現代ロシア語
OR = Old Russian, 古ロシア語
pers.com. = personal communication, 私信/個人談話/談

謝辞

謝辞

本論文執筆にあたり、様々な方にお世話になった。ここにお礼申し上げたい。

審査委員をお引き受け下さった川口裕司先生(東京外国語大学教授)、箕浦信勝先生(東京外国語大学准教授)、野元裕樹先生(東京外国語大学准教授)、井上幸義先生(上智大学名誉教授)、秋山真一先生(上智大学教授)にはご多忙の中審査に加わって下さったことに心より御礼申し上げたい。とりわけ主査をお引き受け下さった川口先生には外大での最後の年に煩わしい仕事をお引き受け頂き、申し訳ない気持ちで一杯である。また、ロシア語の数詞関係の研究者として我が国最高クラスの重要な研究をなされた井上先生と秋山先生に拙稿を読んで頂いたことは大きな喜びであった。また、川口先生だけでなく箕浦先生と野元先生には一般言語学の立場から貴重なご意見を頂くことができた。審査委員の先生方から最終口頭試験において頂いたコメントは今後の研究において得がたい指針となった。

中川裕先生(東京外国語大学教授)には審査に加わって頂くことはかなわなかったが、そもそも本論文執筆を決心したのは先生に背中を押して頂いたからである。作業に入ってから時折励ましの言葉を下さり、先生がいらっしゃらなかつたら本論文は完成しなかったと思う。

本論文執筆に際して、なるべく悪い影響がないように心がけたつもりではあるが、通常の業務に様々な影響があったと思われる。色々ご迷惑をおかけしたと思われるが、何もおっしゃらず御容赦下さったロシア語をはじめとする同僚の先生方と学生諸君には心よりお詫びとお礼を申し上げたい。

本テーマでの私の研究は 2007 年に発表した論文に始まり、紆余曲折を経て本論文の形にまとまるまで、我が国の多くのロシア語学・スラブ語学研究者から様々なご教示と刺激を頂いた。その中に私の恩師や先輩方が含まれるのは言うまでもないが、同様にあるいは時にそれ以上に、若い研究者たちから多くの刺激を受けた。とりわけロシア語研究会「木二会」の参加者、外大の大学院生諸氏には感謝している。彼らとの議論がなければ本研究はこのような形にはならなかったと思う。

なお、本研究は JSPS 科研費 18K00526 の支援を受けたものである。

最後に、2022 年 2 月に他界した父に。私がこの世界の住人になったのはやっぱり父の影響だったのだと思う。

2023 年 2 月

匹田 剛

1. はじめに

1. はじめに

ロシア語には形態的な格があり全ての名詞句は格が付与されている。またその名詞句の内部ではは性、数などのいわゆる一致素性に関して一致が行われる。またその名詞句が主語として機能している場合、述語はその名詞句と一致を行う¹。

(1)(a) [интересная книга]
interesting-nom.sg.f book-nom.sg.f
「面白い本」

(b) Он начал лекцию.
he-nom.sg.m start-pa.sg.m lecture-acc
「彼は講義を始めた。」

上の例で(a)では名詞句内部で名詞 *книга*「本」と形容詞 *интересная*「面白い」の両者に格が表示され、かつ形容詞が主要部名詞に一致を行っているのが観察され、(b)では述語動詞が主格の主語名詞句 *он*「彼」に対して一致しているのが見て取れる。

本稿の目的はこのようなロシア語の名詞句において起こる形態的な格表示とその内と外で起こる一致について整理して、より単純な形でその規則性を明らかにすることにある。上記の様な言語事実は初級の教科書にも必ず明記されている程度の極々基本的でかつ単純と言えるものであるが、その一方でこれら「典型」からはずれ、複雑な振る舞いを示す「非典型」と言うべき名詞句もロシア語には存在する。本稿では典型的・非典型的に関わらず統一的な説明の探求を目的として、一見説明がつかない不合理とも見える言語現象を可能な限り多く説明できる理論の構築を目指す。

以下、本章では議論を始めるにあたって、いくつかの前提となる考え方や言語事実をまとめていく。1.1.では議論を展開するための基本的な考え方を整理し、1.2.では説明が比較的明快に行える典型的な名詞句と、そうではない非典型的な名詞句について概観し、1.3.では非典型的な名詞句の中でも本稿でとくに注目する数量詞句と数量詞についていくつかの点を押さえ、本稿の目的を明確にする。

1.1. 基本的な考え方

本節では、本稿で議論を展開するにあたって、筆者の基本的な考え方をいくつか確認したい：

(2)基本的な考え方

(a) 同じ現象を説明できるのなら説明はできるだけ単純な方が良い。

¹ 例文に出典がとくに示されていないものは著者が作例し母語話者に確認を取ったものである。

1. はじめに

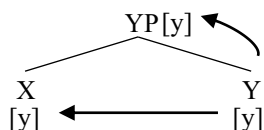
- (b) 見えない範疇など抽象的な想定物はなるべく少なめの方が良い.
- (c) できるだけ早期適用原理(Earliness Principle)に従う.
- (d) 先読みはできるだけしない.
- (e) 抽象理論ではなくできれば具体的記述的事実に基づいている方が良い.
- (f) 具体的形式に支えられていない素性の想定はなるべく避ける. (シンクレティズムはなるべくない方が良い.)

(a)は説明理論はより単純なものの方が好ましい, ということであるが, 当然ながら説明できる範囲がより広ければそちらが優先される.

それに関係するのが(b)だが, これは実際に観察されないものが実はそこに「ある」という想定は極力行わない, ということである. 当然ながら現代の言語学でゼロ範疇を想定しないことは現実問題あり得ず, これもそれを想定することでより単純な理論構築が可能となるのなら, それを優先するのは当然である.

(c)も(a)に大きく関係する. Pesetsky (1989)から始まるいわゆる早期適用原理に従い, 可能な操作は可能になった時点でできる限り速やかに行う, ということである. 例えば, 以下の例をご覧ください.

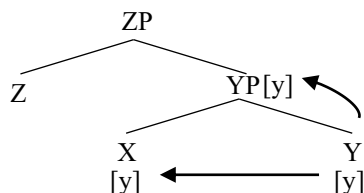
(3)



ここで, 主要部の素性はその指定部とそれらを支配する句節点にコピーされるとすると, X(指定部)と Y(主要部)が併合(merge)して YPができあがると, Yから即座に Xと YPに素性[y]がコピーされる. その場合, 条件が揃ってる以上, 例えば YPがさらに他の範疇と併合するのを, 待ったりはしない.

(d)はそれと密接に関わるが, この後何が起こるかを予測することで行う操作が変わったり, あるいはそれを待つことはない.

(4)



例えば, 上述の YP がさらに格付与子となる Z と併合して ZP を形成するとして, そのことを見越して YP が形成された時点での素性[y]のコピーが行われなかったり, あるいは他の操作に置き換えられることはない.

さらに, (e)については, たとえ理論的な理由で規則や空範疇などを想定したとしても, その正当性は純粋に理論のみによって論じるのではなく, できるだけ具体的な言語現象によって記述的にも支持されるものである方がより好ましい. 例えば,

1. はじめに

理論言語学以外の言語学で想定されているゼロ範疇は基本的に記述的言語事実を説明するために多くは想定されているはずである。

(f)は(e)と関わるもので、文法素性を想定する場合、できる限りそれは形態的に顕在化するのが好ましく、逆に形態的に顕在化しない素性の対立は消失するのが好ましいと考えるものである。ただ、実際に顕在化しない文法素性の違い、すなわちシンクレティズム(syncretism)は全て否定できる訳ではないのもまた事実である。例えば、以下の形態が素性的にも同じであると考えすることは極めて難しいと思われる。

(5)(a)「本」：книге [dat.sg] / книге [loc.sg]

(b)「新聞」：газеты [gen.sg] / газеты [nom.pl]

(c)「美しい」：красивой [gen.sg.f] / красивой [loc.sg.f] / красивой [dat.sg.f]

以上の考え方は、「物事を説明する際に、必要以上に多くのものを想定するべきではない。想定されるものがより少なく、より簡単にことが説明できる方が良い」という「最節約性原理(principle of parsimony)」あるいはいわゆる「オッカムの剃刀(Ockham's razor)」に従うものである(最節約性原理についての詳細は例えば Sober 2012, 2015 や森元 2019などを参照)。そして、これらの主張にはあくまでも「できるだけ」、「極力」、「可能な限り」という限定がつく。従って何らかの別の事情から(とりわけ、記述的言語事実の説明の範囲が狭くなる場合)これらの考え方に対する例外が生じることは仕方の無いことであると考えられる。

なお、本稿は形式主義的に言語の文法を構築することを目指し、生成文法の理論の中で提案された様々な形式や操作をしばしば利用するが、生成文法の一般理論の構築の取り組みに加わり貢献する意図は全くない。またこれまでに構築されてきた一般理論を理由なく前提とすることもない。ここで試みるのはあくまでもロシア語という一つの個別言語の記述的説明であり、個々の言語事実を説明し、説明できる範囲を可能な限り広げていくことを目指す。むしろ、生成文法を一回「リセット」して、そこから必要なものは(必要な場合に限り)取り入れながら、ゼロから文法を構築し直す作業、と言えるかも知れない。

1.2. 典型的名詞句と非典型的名詞句

まず、ロシア語の典型的な名詞句(NP)²の大まかな構造について概観したい。ロシア語では一致定語(agreeing modifier, AM)³は主要部名詞に先行し、不一致定語

²本稿ではDPは想定しない。積極的にDPを否定する根拠はないが、積極的にDPを考えなければならない理由も現時点ではないからである。なお、ロシア語のような明示的な冠詞を持たない言語においてDPを想定するべきかどうかについての議論は例えば宮内(2016a, 2016b, 2022)を参照。

³一致定語(AM)は文の中でどのような統語的位置・機能で用いられているかで決まる文の成分の一つとして捉えるのが本来であるが、本稿では以下、そのような位置・機能で用いられる品詞の一つに

1. はじめに

(nonagreeing modifier, NM)は主要部名詞に後置される。

(6) На английском языке вышла [замечательная книга Солженицына](...)⁴.
in_English come_out-pa.f wonderful-nom.f book-nom.f Solzhenitsyn-gen
「ソルジェニーツインの素晴らしい本が英語で出た。」 (НКРЯ 2021.08.02)⁵

この場合、形容詞の *замечательная*「素晴らしい」が AM で、名詞 *Солженицына*「ソルジェニーツインの」が NM である。AM は主要部名詞 *книга*「本」と性・数・格で一致している⁶。NM は一致は行わないが、格を付与されている⁷。

本稿では典型的な NP は以下の様な構造になっていると考えて議論を進める。AM になり得るもの、つまり主要部名詞と形態的な一致を示しうものには様々なものがあるが、例えば(8a, d)の形容詞、(8b)の指示代名詞、(8c)の所有代名詞などがある。

(7)(a) [AM [N [NM]]]

まとめた語類の名称としても用いることとする。AM に含まれるられる品詞には、形容詞、指示代名詞、所有代名詞、所有形容詞などがある。

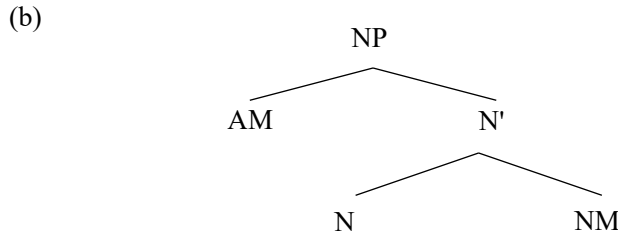
⁴ 次章 2. で示すように、ロシア語の性は単数では対立があるものの、複数ではその対立が消失する。以下、単数の場合は性のみ示し数[sg]は示さないこととする。

⁵ ロシア語ナショナルコーパス(Национальный корпус русского языка, НКРЯ, <https://ruscorpora.ru/new/>)から例文を引用する場合は НКРЯ と記した上で最終確認年月日を記すこととする。ロシア語ナショナルコーパスについては、小林潔(2003)や佐山(2018)などに詳細な情報がある。

⁶ 「一致」という概念については、いくつかのとらえ方が存在する。例えば Шведова и др.(1980)などは名詞句内の主要部名詞と定語の一致を *согласование* 「一致」、主語と述語の一致を *координация* 「呼応」と区別しているが、一方で Crockett (1976), Timberlake (2004), 光井 (2014a, 2014b, 2015) などこれらを同様に *agreement* 「一致」として扱っているものも多い。さらには Corbett (1979b, 1983, 2006) のように一致定語、述語、関係代名詞、人称代名詞などの形式選択の原理を全て同じ *agreement* であるとするものもある。なお、Baker (2008) は用語としての *agreement* と *concord* を区別しながらも、これらは同一の理論で説明するべきであると主張する。また、Bloomfield (1984:191-194) は *concord*, *government*, *cross-reference* をいずれも *agreement* のタイプであると捉えている。さらに Зализняк (2002) は一致を定語におけるものに限定しながらも、*это дело считают безнадежным* 「この件は絶望的と考えられている」(Зализняк 2002: 69) や *Я доволен этими домами, каждый из которых по-своему хорош* 「私はそれぞれがそれなりに良いそれらの家に満足している」(Зализняк 2002: 71) などの下線部どうしの関係も射程に入れるなど、伝統的な一致とは異なったとらえ方をしていることが伺える。また、生成文法の理論においてはしばしば一致と格の付与が同じものとして扱われる。そのことは例えば Chomsky (1981: 170) の “NP is nominative if governed by AGR” 「NP は AGR に統率されている場合主格になる」や Chomsky (1993: 7) の “We now regard both agreement and structural Case as manifestations of the Spec-head relation (NP, Agr).” 「我々は今一致と構造格の両方を (NP, Agr) という Spec-head の関係の現れたものと見なす」などという言葉に現れている。

⁷ この例では与えられているのは属格だが、与格や具格の場合もあるし、名詞句ではなく前置詞句の場合もある。

1. はじめに



(8)(a)(...)[_{NP} [_{AM} новая [_{N'} [_N книга [_{NM} Федорова]]]] (...)
new-nom.f book-nom.sg Fedorov-gen

「新しいフョードロフの本」 (НКРЯ 2021.08.03)

(b)(...)[_{NP} [_{AM} этот [_{N'} [_N памятник [_{NM} поэту]]]] (...)
this-nom.m monument-nom.sg poet-dat

「詩人のこの像」 (НКРЯ 2021.08.03)

(c)(...)[_{NP} [_{AM} моё [_{N'} [_N открытие [_{NM} Америки]]]](...)
my-nom.n discovery-nom.sg America-gen

「私のアメリカ発見」 (НКРЯ 2021.08.03)

(d)(...)[_{NP} [_{AM} последние [_{N'} [_N новости [_{NM} о России]]]](...)
latest-nom.pl news-nom.pl about Russia-loc

「最新のロシアに関するニュース」 (НКРЯ 2021.08.03)

このような典型的 NP については、以下の一般化が可能である：

(9)(a)AM は主要部名詞 N に、性、数、格、有生性に関して一致する。

(b)NP を主語とする述語は主要部名詞 N と一致する。

(c)NM は AM、主要部名詞 N、述語といかなる素性に関しても一致しない。

(d)主要部名詞 N は NM に格付与することが可能である。

ちなみに、多くの文献(例えば Шведова и др. 1980: II: 20 など)で AM と N の一致が性・数・格について行われるとの記述があるが、厳密に考えると(形態的に顕在化するの是对格のみではあるが)一致に関わる文法素性として有生性も想定すべきである(例えば Зализняк 2002, Mel'čuk 1980, Иомдин 1990 など参照)。Иомдин (1990: 91)は以下の様に明確に述べている(下線は匹田)：

(10) (...) а_дъ_кт_ив с_ог_лас_уе_тся с с_ущ_ест_ви_тель_ным п_о р_од_у, ч_исл_у, п_аде_жу и о_ду_ше_вл_ен_но_ст_и (...)

「形容詞は名詞と性、数、格、有生性に関して一致する」

本稿ではそれらに従い、有生性も一致に関わる文法素性であると考え。 (有生性の一致に関しては 5. で詳しく議論する。)

なお(7)の構造の AM と NM は、一般的に認められている X'式型(X'-scheme)における指定部(specifier, spec)と補部(complement, comp)にあたる。(一般理論としては例えば Jackendoff 1977, Chomsky 1981, 1986, 1995, などを参照。ロシア語についても Franks

1. はじめに

1986, 2017, King 1995 など参照.)

また, 7. で一致は探索子(probe)がそれによって c 統御(c-command)される goal から一致素性を受け取ることによって行われるとするが, AM が主要部名詞 N を c 統御する位置にあるこの構造はその考え方に矛盾しない⁸. また本稿では格付与の厳密な定式化は議論の対象にしないが, 主要部名詞 N と NM の位置関係は Chomsky (1981, 1986)のいずれの統率(government)の定義でも N が NM に対して格付与するのに問題が無い.

本稿では, 典型的 NP 内において, 主要部名詞 N が示す振る舞いを N の持つ「主要部的振る舞い=主要部性(headhood)」であると考えて議論を展開する. しかし, ロシア語の NP には, これらの主要部性が典型とは異なった現れ方をして, その結果典型的 NP の性質から逸脱したものが, 以下の様に種々見られる.

(11)数量詞句

Прошло/ Прошли [два месяца]. (НКРЯ 2021.08.06)
pass-pa.n pass-pa.pl two-nom.m month-gen.m
「2ヶ月が過ぎた. 」

(12)人間を表す男性名詞

[Новая / Новый врач] пришла / пришёл. (Pesetsky 2013: 40-41)
new-nom.f -nom.m doctor-nom.m come-pa.f -pa.m
「新しい医師が来た. 」

(13)等位接続構造と擬似的等位接続構造

(a) Пришли / пришёл [машинист и помощник]. (Граудина и др. 1976: 31)
come-pa.pl -pa.m driver-nom.m and assistant-nom.m
「操縦士と助手が来た. 」

(b)[Брат с сестрой] уехали / уехали в деревню.
brother-nom.m with sister-ins.f go_away-pa.pl -pa.pl to village
「兄と妹は村へ行ってしまった. 」 (Кохтев и Розенталь 1984: 152)

まず, (11)は数量詞 *два* と名詞 *месяца* からなる数量詞句の例である. ここで数量詞 *два* は名詞 *месяца* に対する属格の付与子となっている(つまり, 数量詞が主要部的に振る舞っている)一方, 名詞と性に関して一致を示している(つまり AM 的に振る舞っている). また, 述語の一致も2つの形態が可能であり, 典型的 NP とは大きく異なっている. この数量詞句は本稿の議論の中で非常に重要な役割を果たし, 数量詞句の奇妙とも言える文法的振る舞いをいかに全体と矛盾せずに説明するかが本稿の最大

⁸ 本稿での c 統御の定義は以下に示す Reinhart (1976: 32)によるものを採用する. 本稿の範囲内ではこれで問題ない.

(i) Node A c(onstituent)-commands node B if neither A nor B dominates the other and the first branching node which dominates A dominates B.
「A, B いずれも他方を支配せず A を支配する最初の枝分かれ節点が B を支配するなら, A は B を c 統御する」

1. はじめに

の課題である。数量詞と数量詞句の性質については議論が始まる前に次節 1.3.でもう少し詳しく見る。

(12)は人間を表す男性名詞が実際は女性を指示している場合である。主語名詞句の主要部名詞 *врачи* は男性名詞であるが、AM や述語は女性形だけでなく男性形を示すことも可能である。この問題は 8.で詳しく議論する。

(13)は等位接続構造(a)と擬似的等位接続構造(b)をもつ名詞句を主語とした例である。この場合、主語となり得る主格名詞句の中にある名詞はいずれも単数形であるが、述語は単数形にも複数形にもなり得る。本稿では等位接続構造についてはあまり言及しないが、匹田 (2011)で論じたように、等位接続構造は主要部性について議論するために非常に重要な意味を持つ。

1.3. 数量詞と数量詞句

本節では前節で見た典型的な名詞句とは異なった振る舞いを示すもののうち、本稿で議論の中心的な役割を担う数量詞と数量詞句について概観する。まず、数量詞のうちいわゆる個数詞を以下の表にまとめる：

(14) ロシア語の個数詞

1	один	11	одиннадцать	30	тридцать	400	четыреста
2	два	12	двенадцать	40	сорок	500	пятьсот
3	три	13	тринадцать	50	пятьдесят	600	шестьсот
4	четыре	14	четыренадцать	60	шестьдесят	700	семьсот
5	пять	15	пятнадцать	70	семьдесят	800	восемьсот
6	шесть	16	шестнадцать	80	восемьдесят	900	девятьсот
7	семь	17	семнадцать	90	девяносто	1,000	тысяча
8	восемь	18	восемнадцать	100	сто	2,000	две тысячи
9	девять	19	девятнадцать	200	двести	100 万	миллион
10	десять	20	двадцать	300	триста	10 億	миллиард

これらの個数詞のうち、網掛けがないものは単一の語根からなるのもので単純数詞(простые числительные)と呼ばれ、網掛けがあるものは複数の語根からなる複合数詞(сложные числительные)である⁹。他に複数の語からなる合成数詞(составные числительные)もあるが、本稿では複合数詞、合成数詞は議論の対象にしない。以下、単純数詞から議論を始めることとする。

1.3.1. 連続体としての数量詞とその含意するもの

個数詞を含め数量詞のとくに注目すべき点として、その不均質性がある。たとえば、*миллион*「100 万」はそれ自身の性と数をもち、数は単複の形態的对立もある。そ

⁹ただし *сорок*「40」は古来の個数詞が置き換えられたものであり、単一の語根からなる。Фасмер (1986-1987: III: 722)には、*сорокъ*「クロテンの毛皮 40 枚からなる束」を語源とする旨記述がある。本稿ではこれも複合数詞と同列と考え、当座議論の対象としない。

1. はじめに

れに対して, *один*「1」は自身の性も数もなく, それらは名詞との一致によって得るものである. また, *два*「2」は性に関する形態的表示は不完全なものであり, 数の形態的対立はない.

このような状況を Corbett (1978a, 1978b, 1978c)は整理して, ロシア語の個数詞が形容詞¹⁰から名詞へと連なるなだらかな連続体を成していることを示した.

(15) Corbett (1978b: 64, 1978c: 2)における数詞の連続体¹¹

	1	2	3, 4	5	100	1,000	100万
(i) 名詞と数で一致する	+	-	-	-	-	-	-
(ii) 全ての格で格が一致する	+	-	-	-	-	-	-
(iii) 性で一致する	+	(+)	-	-	-	-	-
(iv) 有生性を表示する	+	+	+	-	-	-	-
(v) 自身の複数形を持たない	+	+	+	+	(-)	-	-
(vi) 一致する定語を持たない	+	+	+	+	+	-	-
(vii) 常に属格名詞を支配するわけではない	+	+	+	+	+	±	-

(i)名詞との数で一致する

先ず第一に, 名詞を修飾する形容詞は通常数において名詞と一致する.

(16) интересная книга

interesting-sg book-sg

「面白い本」

従って, 数詞が特徴(i)を示す場合, それは形容詞的に振る舞っていることになる. 数詞は1のみが名詞と数の一致を行うが, それ以外の数詞は一致しない.

(17) один журнал / одни сани

one-sg magazine-sg one-pl sled-pl

「1冊の雑誌」 / 「1つの橇¹²」

すなわち, 数詞「1」のみこの点において形容詞的に振る舞っていることになる.

(ii) 全ての格で格が一致する

第二に, 形容詞はその修飾する名詞と全ての格において一致する.

(18) хороший журнал, хорошего журнала, хорошему журналу ...

good-nom magazine-nom -gen -gen -dat -dat

「良い雑誌」

¹⁰ ここでの「形容詞」とは「形容詞的な品詞」と言うことで本稿での一致定語(AM)と同義と考えるも本稿の議論にとっては問題ない.

¹¹ 性の一致における数詞「2」の「+」が()に入っているのは「2」が「女性とそれ以外」という部分的な対立しか示さないからである. 「±」と「(-)」、 「(+）」は環境によって形態的にバリエーションがあり得ることを示す. 本稿では以下「100」はそれ自身の複数形を持たないと考えて議論を進める. (具体的には Шведова и др. 1980: I: 575-576, Димитрова 1994: 92などを参照). この連続体としての数詞については秋山(2001)などにも分析がある.

¹² *сани*「橇」は絶対複数名詞(pluralia tantum)である.

1. はじめに

従って特徴(ii)「全ての格で名詞と格が一致する」は形容詞的特徴である。この特徴を示すのも「1」のみである。

- (19)(a) один журнал, одного журнала, одному журналу ...
one-nom/acc magazine-nom/acc -gen -gen -dat -dat
「1冊の雑誌」
- (b) три журнала, трех журналов, трем журналам ...
three-nom/acc -gen -gen -gen -dat -dat
「3冊の雑誌」

ここで、数詞「3」は名詞に属格を要求するがそれ自体は数量詞句全体と同じ格を示すので、数詞の示す格と名詞の示す格に違いが出ることもある。ただし、そのような違いが起こるのは主格と対格のみであり、それ以外の格、例えば与格では数量詞と名詞が同じ格を示すようになり格の違いは起こらない¹³。このパターンは2から100までの数詞が示す(1,000以上については特徴(vii)を参照)。

(iii) 第3に、ロシア語の形容詞は修飾する名詞と性に関して一致する。

- (20) красивый журнал, красивая книга, красивое окно
beautiful-m magazine-m -f book-f -n window-n
「美しい雑誌, 本, 窓」

性に関しては1が形容詞と同様に完全な一致を示す。

- (21) один журнал, одна книга, одно окно
one-m magazine-m one-f book-f one-n window-n
「1冊の雑誌, 本, 1つの窓」

そして2は男・女・中の3項では対立せずに、男性と中性が同じ *два*, 女性の時だけ *две* と変化し、部分的に性についての一致を示す¹⁴。

- (22) два журнала, две книги, два окна
two-m magazine-gen.m two-f book-gen.f two-n window-gen.n
「2冊の雑誌, 本, 2つの窓」

さらに、3以上の数詞は性に関して全く一致を行わない。この点名詞的である。

- (23) пять журналов, пять книг, пять окон
five magazine-gen.pl five book-gen.pl five window-gen.pl
「5冊の雑誌, 本, 5つの窓」

(iv) 有生性の標示

第4点目に形容詞は修飾する名詞と有生性(animacy)に関して一致する。有生性は

¹³ なぜこのように格が一致したりしなかったりするかについては2で議論する。

¹⁴ 数詞「2」は性の形態的対立がこのように部分的であるため、(15)では(+)とされている。

1. はじめに

基本的に男性・単数の名詞（及び若干の中性・単数）と複数の名詞の対格でのみ違いが顕在化し、それ以外の格では有生性の形態的対立はない¹⁵。

(24)(a) Там стоит японский мальчик.
there stand-pr.3.sg Japanese-nom.m boy-nom.m
「あそこに日本人の少年がいる」

(b) Я видел японского мальчика.
I see-pa.m. Japanese-acc.m.an boy-acc.m.an
「私は日本人の少年を見た」

(25)(a) Там стоит новый дом.
there stand-pr.3.sg new-nom.m house-nom.m
「あそこに新しい家がある」

(b) Я видел новый дом.
I see-pa.m new-acc.m house-acc.m.in
「私は新しい家を見た」

数詞「1, 2, 3, 4」は形容詞と同様に有生性の一致を示すが、5以上の数詞は有生性に関しては形態的一致を行わない¹⁶。

(26)(a) Я видел двух мальчиков / два журнала.
I see-pa.m two-acc.an boy-acc.pl.an two-acc.in magazine-acc.in
「私は2人の少年 / 2冊の雑誌を見た」 (Corbett 1978b:356)

(b) Я видел пять мальчиков / пять журналов.
I see-pa.m five-acc boys-gen.pl five-acc magazine-gen.pl
「私は5人の少年 / 5冊の雑誌を見た」 (Corbett 1978b:357)

¹⁵ 有生性の一致に関しては5.で詳細に議論するが、有生性を形態的に標示するのは、名詞とそれを修飾するAMがともに対格を属格形で標示することによる。(24b)では有生名詞の対格とそのAMが属格形で現れているが、無生名詞が用いられている(25b)では対格が属格形ではなく主格形で標示されている。このように主要部名詞と一致定語が多くの場合同じ標示パターンを取るため「有生性の一致」と呼ばれる。

¹⁶ なお、「2, 3, 4」についてはCorbett (1978b, 1978c)では(iv)の値が「+」となっているが、Corbett (1978a)では「+」と「(-)」が併記されている。また、Corbett (1978a, 1978b, 1978c)では触れられていないがTimberlake (2004)やBabby (1987)には数詞「5」～「100」の有生性の標示に関連してもう一つ記述的事実が触れられている。即ち、「5」～「100」はそれ自体は有生性に関して一致しないが、数詞の外側にあるAMは一致を行う。

(a) Я увидел этих / *эти пять мальчиков. (Babby 1987:109)
I saw this-acc.pl.an / -acc.pl.in five-acc boy-gen.pl
「私はこれら5人の少年を見た」

(b) Я увидел *этих / эти пять бутылок. (Babby 1987:109)
I saw this-acc.pl.an / -acc.in five-acc bottle-gen.pl.
「私はこれら5本の瓶を見た」

Timberlake (2004:204)によれば、このような external adjective の有生性に関する一致は1,000以上の数詞には見られなくなる。

1. はじめに

(a)の「2」の例では有生名詞の場合、数詞が属格形になっているが、(b)では有生名詞でも属格形にはならない。

(v) 自身の複数形

第5の特徴として小さい数詞は単数・複数の対立を示さないが、1,000以上の数詞はそれ自体の複数形を持ち、この点名詞的である。

(27)тысяча / тысячи, миллион / миллионы
thousand-sg. -pl. million-sg. -pl.
「千/数千, 百万/数百万」

ただし100は以下のようないくつかの構造でのみ複数形を持つ。

(28)много сот лет тому назад (和久利 1961:89)
many hundred-gen.pl year-gen.pl. before
「数百年前」

それ故、「100」の特徴(v)には「(-)」と記されている。

(vi)数詞に一致する AM

第6に、「1,000」以上の数詞は、通常の名詞と同様に、数詞に性・数・格で一致する定語を持つことができる。

(29)эта тысяча, этот миллион (Corbett 1978b)
this-f thousand-f this-m million-m
「これら1000, 100万」

ここで AM *этот*「この」は女性の *тысяча*「1,000」とは女性形で、男性の *миллион*「100万」とは男性形で一致している。「100」から下の数詞はそもそも性も数も持たないので、AMがそれらと一致することはあり得ない。

(vii)常に属格名詞を支配するか

Corbett(1978a, 1978b, 1978c)が挙げる最後の特徴は、後続する名詞が常に属格か否かという点である。例えば「5」は主格と対格の場合名詞に属格を付与するが、それ以外の斜格では、形容詞同様に名詞と同じ格を示すことを特徴(ii)で見た：

(30)(a)Я купил пять книг. (Babby 1980:14)
I-nom buy-pa.m five-acc book-gen.pl
「私は5冊の本を買った」

(b)с пятью книгами (Babby 1980:16)
with five-ins book-ins.pl
「5冊の本を持って」

それに対して「100万」は、数詞自体は6つの格に変化するものの、名詞の方は常に属格形を取り、この点名詞的である。

1. はじめに

- (31) о миллионе рублей / *рублях (Corbett 1978b:357)
about million-loc rouble-gen.pl rouble-loc.pl
「100万ルーブルについて」

ただし、「1,000」は名詞が常に属格の場合と、主格・対格以外で数詞と同じ格になる場合の両者が認められ、形容詞と名詞の両方の性質を示しており、それ故(15)の(vii)で「1,000」は「±」と記されている¹⁷。

- (32) о тысяче рублей / рублях (Corbett 1978b:357)
about thousand-loc rouble-gen.pl rouble-loc.pl
「1000ルーブルについて」

また、数詞「2, 3, 4」の場合、名詞は単数属格になり、それを修飾する形容詞は複数属格になるが、名詞が女性の場合、形容詞が複数主格になることが可能となる。

- (33) две молодые / молодых женщины (Шведова и др. 1980: II :57)
two-f young-nom.pl young-gen.pl woman-nom.pl/-gen.sg.
「2人の女性」

これは女性名詞の複数主格と単数属格が同形であることと関係していると思われるが、これらの数詞が属格支配という名詞的な性質を示す側面と、名詞と一致するという形容詞的な側面の境界線上にあることを示していると考えられよう¹⁸。

つまり Corbett (1978a, 1978b, 1978c)は、ロシア語の数詞は数詞が形容詞から名詞へと連なる連続体として存在していることを記述的に明らかにしたわけだが、このことは、以下に示すいくつかの言語学的に重要なことを含意する。

- (34)(a)品詞の境界線が曖昧なものでありうる
(b)主要部と従属部の境界線も曖昧なものでありうる
(c)X'-syntax の bar-level が曖昧なものでありうる

まず、これらの記述的事実は(34a)に示したように、数詞、形容詞、名詞という品詞がそれぞれ隣接する品詞との境界が離散的なものではなく、曖昧であることをしている¹⁹。

また、この連続体(15)は主要部名詞を修飾する形容詞(35aの *бутылочное*)と属格

¹⁷ 井上幸義(pers.com.)は現代では名詞的振る舞いが主流であるとの指摘を下された。

¹⁸ この問題については9で再度言及する。また、和久利(1961:163)が「単数主格と複数主格の力点が異なる名詞では定語は通常複数主格」と述べていることも興味深い。例えば *гора* の複数主格は *горы* である。ただし、この点は記述によってニュアンスが若干異なり、Розенталь (1998: 256)は、女性名詞の場合は形容詞が複数主格形になるとした上で女性名詞複数主格が単数属格とアクセントが異なる場合、定語は複数属格に「なることもある」としている。

¹⁹ 匹田 (2007a) ではこの他にロシア語の前置詞や副詞などが他の品詞との境界が曖昧なものとして指摘されている。

1. はじめに

名詞を支配する主要部名詞 (35b の *бутылка*) の間に横たわっているものと言える。

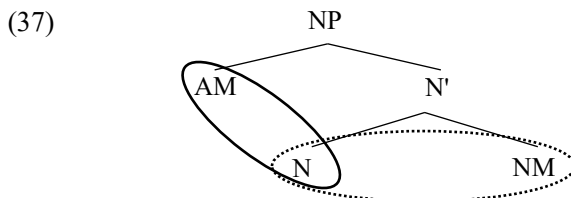
- (35)(a) *бутылочное пиво*
 bottled-nom.n beer-nom.n
 「ビン入りビール」
- (b) *бутылка пива*
 bottle-nom.f beer-gen.n
 「一本のビール」

このことはすなわち、「1」が最も従属部的である一方、「100万」が最も主要部的であり、その間にあるものはいずれかの程度においてその中間にあるということの意味する。すなわち、(34b)に示したように、主要部と従属部も離散的に明確に区別が可能とは限らない。言い換えると、複数認められる主要部的振る舞いあるいは従属部的振る舞いは2つの要素に時に混在し、時に分散して現れることが可能ということになる。例えば数詞「2」の場合、性における一致があるという点において従属部的であり、また有生性の一致が起こるといっても従属部的である。しかし、その一方で格付与を(少なくとも主格・対格においては)行うという点では主要部的であるが、それも斜格においては名詞と格の一致が起こり、むしろ従属部的な特徴を示す²⁰。

さらに、ロシア語の数詞が(35)の(a)の *бутылочное* から(b)の *бутылка* 間に横たわる連続体を成すと言うことは、典型的名詞句の構造を(7)とすると、[数詞+名詞]からなる句の構造は、以下の二つの構造の間にある、ということを含意する。



これはすなわち、それぞれの例における二つの要素の関係は(a)では実線で、(b)では点線で囲んだ関係にあることを意味する。



これはさらに、X'-syntax のいわゆる bar-level も離散的ではなく曖昧な中間が存在す

²⁰ 匹田 (2011) では等位接続構造も複数の要素に主要部的振る舞いが分散して、等位接続する要素双方が主要部である、と結論づけた。

1. はじめに

ることを含意してしまう。このことから、本稿では少なくとも名詞句内の中間的な bar-level は議論の対象とはせず、樹形図で bar-level を示すとしても樹形図内の節点を区別するためという便宜的な目的のためのみに利用する。

以上、Corbett (1978a, 1978b, 1978c) が明らかにしたロシア語の数詞が示す連続体性から浮かび上がった品詞、主要部性、bar-level、などに見られた非離散性・連続性を概観した。本稿は、この文法の非離散性・連続性を文法の説明理論に取り込みつつ名詞句の内外で起こる一致や格標示を説明する理論の構築を目的とする。

1.3.2. 数量詞と数量詞句とは何か

上記の様に数量詞(quantifier, Q)とは A と N の間になだらかな連続体として存在するので、Q の厳密な定義はあまり意味を成さない(34a)。従って、本稿では Q とは何か厳密な定義を試みることはない。むしろ、(15)の連続体に取り込むことができるものがどれだけあるか検討することによって、何がロシア語の Q に属するのかを考え、この連続体に組み込むことができるものが Q であると考え。現時点ではその完全なリストは示すことができないが、少なくとも(15)の連続体に示したいいわゆる個数詞はロシア語における Q と考えられる。なお、3.ではこのリストに他のものが加えられることになる。

実際に、*один* は形容詞、*миллион* などは名詞とする記述もあれば、いずれも数詞とするものもあり(Шведова и др. 1980, Шведова 1970, Виноградов 1972, Виноградов и др. 1960, Barnetová et al など参照)、その解釈は多様である。確かに、上の連続体でも *один* は全て形容詞的な特徴を示しており、*миллион* は全て名詞的な特徴を示している。しかし、例えば *миллион* などは次章で扱うように通常の名詞とは異なる特徴も示しているし、また *один* については Mel'čuk (1982) が通常の名詞と異なる特徴を多々示している。本稿ではいずれも連続体の端に位置する Q と考える。

また、本稿では *двадцать один*「21」や *сто пятьдесят два*「152」のように複数の数詞からなる合成数詞(составные числительные)や *восемьдесят*「80」や *двести*「200」などのように複数の語根からなる複合数詞(сложные числительные)は扱わない。合成数詞は複数の語がどのように結合されているのかその統語的構造を明らかにする必要があるし、複合数詞についても屈折すると *восемьюдесятью* のように語末だけでなく語中でも屈折が起こることがしばしばあり、そもそも1語なのかがはなはだ疑問だからである。まずこれらの点を明らかにする必要があるので、今後の課題とする。

なお、本稿で数量詞句(QP)というのは以下の様に Q と N からなる句のことである。

(38) [QP Q N]

また、QP とはこのような構成の NP のことであり NP の一部を指す便宜的な呼称であ

1. はじめに

る。この場合、Q と N のどちらが主要部かは問題にしない²¹。本稿では(15)から明らかかなように主要部性は複数の要素に分散していると考え。また、QP を構成するこれらの Q と N のことを本稿では単に Q または N とだけ呼ぶことがある。

以上、本稿では、(i)ロシア語の NP の内外における格や一致素性のやりとり・コピーを明らかにすることを目的とするが、その際、(ii)典型的な NP だけではなく QP などより多くの非典型的 NP も含めた説明を可能とすることを目指し、(iii)Q という語類がなだらかな連続体を成すいわば非離散的なものであることを離散的な説明理論に組み込むことを目指す。また、(iv)構築する説明理論は可能な限り最節約性原理に従ったものとする。

以下本稿では、先ず議論の前提となる記述的・理論的前提を 2.で確認することから始める。続いて 3.では主語・述語の一致について議論し、4.ではこの後の議論にとって不可欠な少数を想定する必要性を考える。さらに NP 内での一致素性のコピーと素性どうしの相関関係について明らかにするために、5.で有生性に関わる一致、すなわち対格の形態の問題を整理し、6.では Q では格が辞書で予め付与されていると考えると何が説明できるか議論し、7.では理論的により簡潔により広い範囲の言語事実が説明できるようにそこまでに構築した文法に修正を加える。8.では典型から逸脱した性の一致について考察し、その上で 9.でそこまでの議論をまとめた上で、類似した説明対象を持つ研究と比較することによって本稿の意義を確認する。ここまですべてが本稿の本論である。最後に 10.で本稿の見出したことをまとめ、本稿では説明できていない、残された問題を指摘し、今後の展望にも言及する。

²¹ 三谷(1998)や秋山 (2001, 2002, 2004) は「数詞句」という用語を用いるが、やはり数詞が主要部であることは含意しない。いずれとも本稿での議論と同様に数詞と名詞が様々な程度で主要部性を示すことを前提として議論を展開している。また、この後 2.1.3.で Q をその振る舞いによって PcQ, HQ, NQ などさらに細分化した名称をつけるが、その場合も PcQP, HQP, NQP などの句節点のラベルも同様に便宜的なものであり、QP の、そして NP の一種である。

2. いくつかの記述的・理論的前提

本章では、議論を進めるために前提となるロシア語の文法に関わるいくつかの記述的事実と、理論的前提を概観する。2.1.では名詞句の内部及び外部でコピーされる文法素性を概観し、2.2.では一致素性がどのようにコピーされるかを、続いて2.3.では名詞句に付与された格がその後どのようにコピーされるかを概観する。また、2.4.ではロシア語は複数において性の対立が消失することを、2.5.では屈折タイプの対立が複数において消失することをそれぞれ見る。

2.1. 文法素性と素性のスロット

本節では、ロシア語の名詞句内外の一致を考えるにあたって、まずロシア語の名詞が持つ一致素性にどのようなものがあるか、整理することを目的とする。

2.1.1. 関連する文法素性

本節ではロシア語の名詞句内でやりとりされる名詞の一致素性を整理する。ただし、いわゆる文法素性のうち格については、確かに下述のいくつかの先行研究にあるように性や数と同様しばしば「格について一致する」と表現されるものの、2.3.で述べるように格は他の一致素性とは異なる性質のものと本稿では考える。そのため本節では格については詳細を扱わず2.3.で別途議論することとする。

2.1.1.1. 性・数・格

まず、ロシア語のNP内部での主要部名詞と一致定語(AM)の一致に際してどのような情報がどのようにやりとりされているのか、と言う点に関してはそれぞれの文献で微妙に異なる記述が為されている。その中でも最も一般的で多く見られる記述は「形容詞などの一致定語は修飾する名詞に従って格、数、性に関して一致する。」というものであろう。Исаченко (1954: I: 228)、Шведова (1970: 488)、Шведова и др. (1980: II: 20)などをはじめとして多くの文献がこの点に言及している¹。

- (1) *Согласование* — это такой вид подчинительной связи, при котором формы рода, числа и падежа подчиняющегося имени predeterminedены формами рода, числа и падежа подчиняющего имени. (Шведова и др. 1980: II: 20)

¹ 厳密に言えば、Шведова и др. (1980)など多くのロシア語の伝統的な文法では「一致」は主要部名詞と一致定語の間にある関係のことであるが、本稿ではそのような関係に基づいて行われる一致定語の形態変化を生じさせるための操作のことと捉えている。ただ、ここで問題なのは何が具体的な一致素性かということなので議論上、その違いは問題にする必要は無いと考える。

2. いくつかの記述的・理論的前提

「一致とは従属する名辞類(имя)の性・数・格の形態が支配する名辞類の性・数・格によって決定づけられるような従属関係のことである。」

例えば以下の例では、主要部名詞と AM が性・数・格に関して同じ値を示しているのが見て取れる²：

- (2)(a) моя книга
 my-nom.sg.f book-nom.sg.f
 「私の本 (主格)」
- (b) японскую музыку
 Japanese-acc.sg.f music-acc.sg.f
 「日本の音楽 (対格)」
- (c) эти книги
 this-nom.pl book-nom.pl
 「これらの本 (主格)」

なお、ロシア語において一般に認められている数素性の値は単数 [sg]と複数 [pl]の2つ、文法性では男性 [m], 中性 [n], 女性 [f]の3つである。

本稿では数は厳密には [±pl]によって表し, [-pl]は単数 [sg]を, [+pl]が複数 [pl]を意味すると考える。また性は [±m]と [±f]の組み合わせによって表現し, [+m, -f]は男性 [m]を, [-m, -f]は中性 [n]を, [-m, +f]は女性 [f]をそれぞれ表す³。文中やグロスなどで素性の厳密なあり方がとくに重要ではない場合、簡便な後者を用いることもある。

2.1.1.2. 有生性

名詞句内の一致に関わる素性は性・数・格の3つであるように多くの文献でしばしば言及がされるものの、これはあくまでも便宜的なものであって、名詞句内での一致素性がこの3つで全てではないことはロシア語の初級文法でも学ぶことである。すなわち、有生性(animacy)⁴は対格においてのみその形態的な対立が顕在化するものの、主要部名詞とそれを修飾する AM 両者の形態に影響を与えるという点で、有生性も一致素性の一つと考えることができる⁵。例えば以下の例を参照：

²2.4.で論じるように、ロシア語において性の対立は複数で消失すると本稿では考える。従って、グロスにおいて複数で性を示すことはない。

³光井(2016)も[±masculine]と[±feminine]の2つの素性を組み合わせることによってロシア語の性を表現しているが、本稿はそれに従っている。光井(2016)は[+masculine, +feminine]は総性名詞(существительное общего рода)の持つ性素性であるとしているが、本稿では総性名詞を今のところ考察対象に入れていないので、この組み合わせは出てくることはない。

⁴日本におけるロシア語の伝統的な文法においては有生名詞のことを「活動体名詞」、無生名詞のことを「不活動体名詞」と呼ぶのが一般的であるが、本稿では広く言語学で用いられている用語を用いることとする。

⁵例えば、Шведова и др. (1980: I: 545-546)は形容詞の形態範疇についての節の冒頭において、先ず

2. いくつかの記述的・理論的前提

(3)(a) Я видел *новый* дом.

I-nom see-pa.m new-acc.sg.m.in house-acc.sg.m.in

「私は新しい家を見た。」

(b) Я видел *нового* президента.

I-nom see-pa.m new-acc.sg.m.an president-acc.sg.m.an

「私は新しい大統領を見た。」

それぞれ対格補語の AM と主要部名詞はいずれもグロスでは対格(acc)と記したが、形態的には主要部名詞が無生の(a)では主格と同形の形態が、有生の(b)では属格と同形の形態が主要部名詞、AM のいずれにも現れている。このように主要部名詞の有生性の値によって AM も同様の形態が見られることから AM は主要部名詞に有生性に関して一致していると言える。

以上、ロシア語では性・数・格に加えて有生性についても一致定語と主要部名詞は一致していると考えるのは合理的な帰結といえよう⁶。例えば、Белошапкина (1997: 468-469) ははっきりと名詞の一致カテゴリーに有生性を含めて議論しているし、Иомдин (1990: 91) も名詞とその一致定語の一致に関して以下のように述べている：

(4) (...) адъектив согласуется с существительным по роду, числу, падежу и одушевленности (...)

「形容詞は名詞と性、数、格、有生性に関して一致する」

また同様に Halle (1994b: 40) や Franks (1995: 17) も一致に関わる素性としての有生性に言及している。これらに従い、本稿ではロシア語の名詞句内でやりとりされる一致素性は性、数、格および有生性であると考えられる。なお、有生性の素性の値には有生[+an](=[an])と無生[-an](=[in])がある。

2.1.1.3. 屈折タイプ

以上のように一致素性として性、数、有生性を考えることは広く認められているが、本稿ではこれら以外に名詞の屈折タイプも NP の中でやりとりされる一致素性の一つと考える。ただ、AM に名詞の屈折タイプの素性がコピーされることはないと考えるのが無理が無いと思われる。形容詞、指示代名詞などの AM となりうる語彙項目には既にそれ自身の、名詞とは異なる屈折タイプがあるからである⁷。つまり、以

性・数・格の3つのみをあげながらも、節内の記述では名詞との一致範疇として有生性にも言及している。

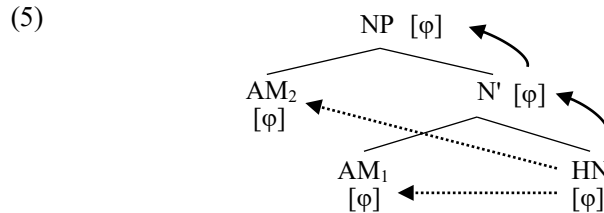
⁶ただし、実際有生性に関しては様々な要因が複雑に絡み合い、このように単純なものではない。

「有生性」の一致に関して詳細は5.で論じる。

⁷なお、名辞類(имя)として曲用(склонение)するものであっても、AM となり得る形容詞などの品詞、あるいは人称代名詞など名詞とは形態が大きく異なる屈折タイプを持つものはここでは別のものと扱う。以下、単に「屈折タイプ」と呼ぶ場合、それは名詞的な屈折タイプのことである。

2. いくつかの記述的・理論的前提

下の図で実線の矢印で示したような「上方向の」屈折タイプのコピーは行われるが、点線で示したような「横方向の」コピーは行われることはあり得ない。



ロシア語の名詞の屈折タイプは大きく分けて：第1変化[I], 第2変化[II], 第3変化[III]に分類されるが、その他に屈折しない不変化タイプ[indc]があり、またこれらに分類しきれない名詞も比較的少数ながらも存在する。本稿ではこれらに分類できない名詞は第4変化[IV]として一つにまとめるが⁸、本稿の議論に大きく関わるのはもっぱら第1変化かどうかで、本稿で第4変化と呼ぶ名詞の正確な分類はとりあえず議論に影響はない⁹。なお、屈折タイプは、5.と8.でとくに重要な役割を果たすので、詳細はそちらに譲ることとする。

2.1.1.4. 関係する素性のまとめ

以上、本稿での議論に関係し、名詞句に関わる一致素性をまとめると以下の通りとなる。なお、格については2.3.で見ることにする。

(6) 性=男性：[+m, -f](=[m]), 女性：[-m, +f](=[f]), 中性：[-m, -f](=[n])

数=単数：[-pl](=[sg]), 複数：[+pl](=[pl])

有生性=有生：[+an](=[an]), 無生[-an](=[in])

屈折タイプ=第1：[I], 第2：[II], 第3：[III], 第4：[IV], 不変化：[indc]

() 内に記したものは、簡易的な表記法で、文中やグロスなどで議論にとくに開わりなければこちらで記すこともある。

以上の一致素性は従来よりロシア語学で認められている伝統的なものと大きく異なることはない。しかし、4.で数に関する素性に修正を加えることになる。

2.1.2. 名詞と一致定語の文法素性

前節ではロシア語の名辞類 (=名詞やそれを修飾する AM となり得る形容詞や指示代名詞など)が持つ、格以外の文法素性をそれぞれ見たが、本節では名詞と AM がど

⁸各屈折タイプの具体例は2.5.で示す。

⁹ちなみに、光井(2018)でも規則の適用条件として屈折タイプ[I]が重要な役割を果たしている。さらに、光井(2014a, 2014b, 2015), Мицун(2019)などの一連の研究では屈折タイプ[II]が重要な役割を果たしていることも示唆されている。

2. いくつかの記述的・理論的前提

のような文法素性をもっているのかをざっと確認する。なお、AMとなりうる品詞には形容詞、指示代名詞、所有代名詞¹⁰、順序数詞、所有形容詞など多岐にわたるが、微妙に違いがあるもののほぼ類似のパターンの形態変化を示し、いずれも屈折に関わる文法範疇はまったく同じであり、また統語的には主要部名詞の前に置かれ¹¹、極めて似通った振る舞いを示す。そのため本稿ではAMとしてまとめて扱う。

Corbett (2012: 67)は一致素性をその語自身が本来的に持っている(a)本来的素性 (inherent features)と、別の語から一致によって受け取る(b)文脈的素性 (contextual features)に分類し¹²、さらに本来的素性には(i)意味的に選択されるもの (semantically selected)と(ii)語彙的に決まっているもの(lexically specified)があるとしている。

- (7) $\left\{ \begin{array}{l} \text{(a) 本来的素性} \\ \text{(b) 文脈的素性} \end{array} \right. \left\{ \begin{array}{l} \text{(i) 意味的に選択される} \\ \text{(ii) 語彙的に決まっている} \end{array} \right.$

例えば、名詞の数は本来的素性で意味的に選択されるもの、性は本来的素性で語彙的に決まっているものである。それに対してAMには本来的素性は一切無く、全てが主要部名詞との一致によって決まる文脈的素性である。

以下に名詞とAMの素性をまとめる。

(8)名詞の文法素性

数	[sg/pl]
性	[{m/n/f}]
有生性	[{an/in}]
屈折タイプ	[{I/II/III/IV/indc}]
格	[ø]

(9)AMの文法素性

数	[ø]
性	[ø]
有生性	[ø]
屈折タイプ	×
格	[ø]

[]内に、「/」で区切られた複数の値が示されている場合は、意味によって複数の値を

¹⁰ 所有代名詞のうち、3人称の所有者を表す *ezo*「彼の」、*ee*「彼女の」、*ux*「彼らの」は他と異なり、主要部名詞に対して少なくとも形態的には一致一致を行わない。これらは統語的には一致する他の人称の所有代名詞と極めて近い振る舞いを示すが、形態的には人称代名詞の属格形と同じである。これらをどう扱うかは議論の余地がある。

¹¹ 宮内 (2016a, 2016b, 2022), Miyauchi (2018)などの一連の研究において、AMが複数重なる出来事名詞などの場合、相互の前後関係が意味を持っていることが明らかにされている。本稿ではAMは主要部名詞の前に置かれるとのみ捉え、この問題には踏み込まない。

¹² 本来的素性と文脈的素性は Chomsky (1995: 277-278)の解釈可能素性 (interpretable features)と解釈不可能素性 (uninterpretable features)にほぼ相当するものと考えて良い。

2. いくつかの記述的・理論的前提

選択しシンタックスに入る前に値が決まるもの (すなわち意味的に選択される本来的素性), /で区切られた値が{}で囲まれているものは語彙項目ごとに本来的に値が決まっているもの (すなわち語彙的に決まっている本来的素性), 「ø」は素性を受け入れるスロットのみ持ち、シンタックスの中で他の語彙項目から値を受け取るもの (すなわち文脈的素性), []なしで「×」とのみ示されているものはそもそもその素性を持ち得ないものを表す。AM は少なくとも一致に関わる素性については [ø]であるが、屈折タイプについては名詞とはまったく異なる「形容詞的な」屈折タイプを持っているので「名詞的な」屈折タイプは×と言うことになる¹³。

いくつかの例を見てみよう¹⁴：

- (10) (a) интересная книга
interesting-nom.sg.f.in book-nom.sg.f.in.И
「面白い本 (主格)」
- (b) о моем папе
about my-loc.sg.m.an dad-loc.sg.m.an.И
「私のお父さんについて」
- (c) между этими группами
between this-ins.pl.in group-ins.pl.in
「これらのグループの間で」

これらの例において AM はいずれも主要部名詞から数・性・有生性の値を受け取っている。これらは AM にとっては全て文脈的素性、主要部名詞にとっては本来的素性である。AM にはそれ自体の (形容詞的な)変化タイプがあるので名詞的变化タイプの素性を受け取るためのスロットはない。AM と名詞が格をどのように受け取っているかについては 2.3.で見ると。

これらの文法素性とそのスロットのあり方は、この後の議論の中で必要に応じて若干の改訂が行われる。

2.1.3. 数量詞の文法素性

本節では、ロシア語の数量詞が一般的な解釈において、どのような文法素性を持っていると考えられているかを整理する。ロシア語の数量詞は名詞や形容詞と異なり、およそ均質とは言いがたく、形容詞的なものから名詞的なものへと連なる連続体の様相を呈していることは 1.3.1.で見た。以下、ロシア語の数量詞の文法素性とそ

¹³ 屈折タイプを持たないと考えずに、例えば「形容詞タイプ」という値を本来的に持つ、あるいは名詞の屈折タイプとは異なる、形容詞としての屈折タイプを持つと考えることも可能である。屈折タイプは 5.と 8.での議論において重要な役割を果たすが、本稿での議論では単純に屈折タイプを持たない、と考えることとする。詳細な議論は今後の課題としたい。

¹⁴ 前置詞 о「～について」は処格を支配する前置詞、между「～の間で」は具格支配の前置詞である。また、2.4., 2.5.で示すように、複数では性と屈折タイプの対立が失われる。

2. いくつかの記述的・理論的前提

のスロットのあり方を概観する。

数量詞「1」は形容詞と文法素性的には同じであり、格の他に数・性・有生性を文脈的素性として受け入れるためのスロットが用意されていると考えるのが適切と思われる。つまり、典型的な名詞句における AM と同様に性・数・格・有生性に関して N と一致する。(11)の(a)と(b)から格で一致していることが見て取れ、(a)と(c)の違いから性に関して一致しているのが見て取れる。また(a)と(d)を比べると数詞「1」は数によってNに一致することが見て取れる¹⁵。さらに、(a)は(e)と同じ男性名詞を修飾しているが対格の例である。ここではNが有生であるために対格の形がQ、Nともに属格と同形になっている。(a)は主格で男性の例であるが、無生である。この場合は、もし対格が付与される環境に置かれたとしても、対格形は主格形と変わることはない。このような形態的なパターンの使い分けによって有生と無生の区別を表し、QもNの有生性に従ってその形態法のパターンを選択するため、「有生性の一致」を行っていると言える¹⁶。

- (11)(a) один стол
 one-nom.sg.m.in desk-nom.sg.m.in.I
 「一台の机(主格)」
- (b) одного стола
 one-gen.sg.m.in desk-gen.sg.m.in.I
 「一台の机(属格)」
- (c) одна книга
 one-nom.sg.f.in book-nom.sg.f.in.II
 「一冊の本(主格)」
- (d) одни часы
 one-nom.pl.in clock-nom.pl.in
 「一つの時計(主格)」
- (e)(...)убил одного человека (...) (НКРЯ 2021.08.19)
 killed one-acc.sg.m.an person-acc.sg.m.an.I
 「一人を殺した」

数詞「1」についてまとめると以下の通りとなる。これは典型的な名詞句における形容詞などの AM と同じである。

(12) 「1」

数	[Ø]
性	[_(±m) Ø], [_(±f) Ø]
有生性	[Ø]
屈折タイプ	×
格	[Ø]

¹⁵ часы「時計」は絶対複数名詞である。

¹⁶ 有生性の一致については5.で詳しく論じる。

2. いくつかの記述的・理論的前提

数詞「2」は数の対立がない。そもそも後続する N が必ず単数属格形なので N の数に従って Q が変化することはあり得ない。性については男性と中性では同形となるものの、女性の N を伴うと性を形態的に区別する。

(13)(a) два стола / окна
two-nom.m/n desk-gen.sg.m window-gen.sg.n
「2つの机 / 窓」

(b) две книги
two-nom.f book-gen.sg.f
「2冊の本」

この数の対立がない点、及び性が不完全になる点が「1」との違いである。「2」において区別される性は[±m]と[±f]のうち[±f]のみとすることになり、素性のスロットは以下の通りにまとめられる。

(14)「2」

数	×
性	[±f ∅]
有生性	[∅]
屈折タイプ	×
格	[∅]

数詞「3, 4」はさらに性の対立が完全に消失するのでまとめると以下の通りである。

(15)「3, 4」

数	×
性	×
有生性	[∅]
屈折タイプ	×
格	[∅]

本稿では、これら数詞「2, 3, 4」など N が単数属格形になる数量詞をまとめて以下 PcQ (paucal quantifier) と呼ぶこととする。

「5~100」は有生性も消失する¹⁷。その代わり名詞的屈折タイプが生じる。*пять*「5」は[III]で同様に末尾が-ь のものは全て第3変化である。ただし数の区別がないので、複数形にあたるものがない。

(16)「5」の変化

主格	пять
対格	пять
生格	пяти
処格	пяти
与格	пяти
具格	пятью

¹⁷ただし、これらがそもそも有生性の素性やスロットが存在しないのか、あるいは無生[in]を持っているのかは議論しなければならない。

2. いくつかの記述的・理論的前提

сорок「40」と *сто*「100」は例外的な変化でここでは[IV]とする。以下の議論に主に関係するのは 2.1.1.3.でも触れたようにもっぱら第 1 変化かどうかなので、第 1 変化でないことが間違いなければ、それ以外の分類は議論に影響することはない。なお、「100」は一部の限られた環境でのみ数の対立があることが指摘されている(Corbett 1978a, 1978b)が、この点は本稿の議論にはとくに関係しないので以下では「100」は数の対立がないものと見なして議論を展開する。

以下に、「5~100」の素性とそのスロットのあり方をまとめる。

(17) 「5~100」 (HQ)

数	× / ([sg/pl])
性	×
有生性	×
屈折タイプ	[{III/IV}]
格	[ø]

なお、これら「5~100」は以下、まとめて HQ (higher quantifier)と呼ぶこととする。

тысяча「1,000」から上の数詞はこれらの少なくとも素性に関しては名詞と全く変わらない。つまり、数の区別があり、性も有生性(いずれも無生 [in])もある。屈折タイプは *тысяча*「1,000」は [II], *миллион*「100万」なら [I]である。

(18) 「1,000~」 (NQ)

数	[sg/pl]
性	[{m/f}]
有生性	[in]
屈折タイプ	[{I/II}]
格	[ø]

以下、本稿ではこれらの極めて名詞に近い Q をまとめて NQ (nominal quantifier)と呼ぶこととする。

2.2. 一致素性のコピー

文法素性のうち、格を除いた一致素性は主要部名詞からそれらを必要とする AM にコピーされる。上で見たようにここで用いられる一致素性は主要部名詞の本来的素性であり、主要部名詞に由来すると考えるのが最も自然であると思われる。Halle (1994b)も以下の様に述べている¹⁸：

(19) In an NP the gender, animacy, number and case of the head noun are copied onto the specifiers and adjectives that are in the head noun's domain. (Halle 1994b: 40)

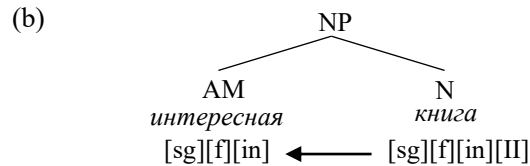
「NP において主要部名詞の性、有生性、数、および格は、その主要部名詞の領

¹⁸一つ本稿と異なるのは、格に関しては本稿では主要部名詞からコピーされるとは考えていない。詳細は 2.3.で議論する。

2. いくつかの記述的・理論的前提

域にある指定語や形容詞にコピーされる。」

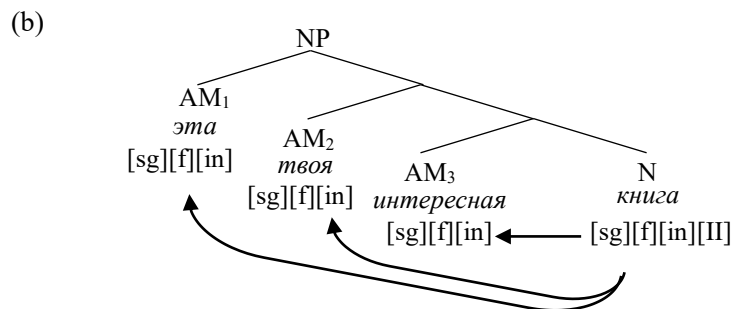
- (20)(a) интересная книга
 interesting-nom.sg.f.in book-nom.sg.f.in.II
 「面白い本」 (НКРЯ 2021.08.20)



ここで、主要部名詞の屈折タイプの素性は形容詞タイプの屈折を行う AM にはコピーされていない。また、AM にはこのような形で主要部名詞から一致素性が与えられなければその形態を保証することができない。

さらに、以下の様に AM は複数連続することが可能である。そのような場合にも全てに対して一致素性がコピーされると考える。

- (21)(a) эта твоя интересная книга
 this-nom.sg.f.in your-nom.sg.f.in interesting-nom.sg.f.in book-nom.sg.f.in.II
 「このあなたの面白い本」 (НКРЯ 2021.08.20)



AM はそれぞれ 1 つ目の *эта*「この」が指示代名詞、2 つめの *твоя*「あなたの」が所有代名詞、3 つめの *интересная*「面白い」が形容詞であるが、形態法は微妙に異なるものの、本稿の議論にこれらを区別する理由はないので、まとめて AM とする。(また、これらの間の語順については宮内 (2016b) などの研究がある。)

また、このように一致する具体的な語彙項目へのコピーを「横方向」のコピーだとすると、句節点への「上方向」のコピーもあると本稿では考える。Franks (1995) も以下の様に規定している：

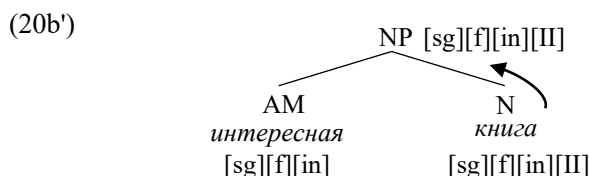
- (22) Everything else being equal, the values of the features of a node X and its phrasal projection XP are equivalent. (Franks 1995: 20)

「他の全てが同じであるなら、節点 X とその句投射 XP の素性の値は同一である。」

本稿ではこの考えに従って、主要部名詞から句節点への素性のコピーも行われると考える。横方向のコピーと異なるのは受け取る節点に形態法上の制

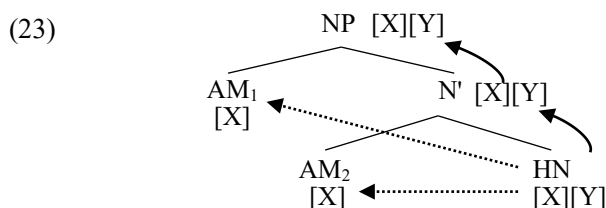
2. いくつかの記述的・理論的前提

約はなく、あらゆる素性を受け取ることができるということである。例えば、上掲の例で示すと以下の通り、AMは受け取ることがなかった屈折タイプも句節点へはコピーされる。具体的な語彙項目として受け入れられる素性を決定する空スロットはそもそも何も用意されていないからである：



AMには屈折タイプはコピーされないが、句節点へは問題無くコピーできる。また、3.以降のQPが関係する議論では、主要部性の分散の結果として句節点に複数の要素から素性のコピーが行われることもある。

以上、NPの内部で、主要部名詞の一致素性はそれを支配する句範疇と一致定語にコピーをされるが、AMが素性を受け入れるスロットを持っていなかった場合はコピーされることはない。



格に関しては2.3.で、主述の一致に関しては3.で議論する。

2.3. 格

2.3.1. 格と一致素性の違い

一致定語は以下の様に「性・数・格で一致する」と記されていることが多い：

(24) Среди словосочетаний с именем существительным в качестве главного слова выделяется большая и широко употребительная группа, объединенная общностью синтаксических связей между членами словосочетания. В эту группу входят словосочетания, в которых имена существительные присоединяют к себе согласуемые слова, обладающие формами рода, числа и падежа (...). (Виноградов 1960: II-1: 281)

「主要部としての名詞を含む句(словосочетание)の中には句の構成要素間の結びつきの共通性によってまとめられている大きく広く用いられるグループがある。このタイプの句には名詞が(名詞と同じ)性・数・格を持つ一致語を従えた句が

2. いくつかの記述的・理論的前提

含まれる。」¹⁹

確かに、AM は少なくとも典型的 NP においては、主要部名詞と性・数・格 (及び 2.1.1.2. で見たように有生性) に関して同じ値を示す。しかし、この一般化はいささかラフなものと考えるべきである。

主要部名詞の一致素性は AM にコピーされると考えるが、文法素性としての格はそれらとは性質が大きく異なるものであることはすぐにわかる。まず、格は NP 内部にある主要部名詞に由来するものではなく、NP の外にある何らかの要素 (=格付与子) に由来するものであると考えられる。

(25)(a) Я читаю [вашу книгу].

I-nom read-pr.1.sg your-acc.sg.f book-acc.sg.f.II

「私は貴方の本を読んでいる」

(b) Я занимаюсь [английским языком].

I-nom study-pr.1.sg English-ins.sg.m language-ins.sg.m.I

「私は英語を勉強している」

(c) Я работаю на [новом заводе].

I-nom work-pr.1.sg on new-loc.sg.m factory-loc.sg.m.I

「私は新しい工場働いている」

これらの例で、[]で示した NP の AM と主要部名詞の格は同一のものであり、それぞれ対格(a)、具格(b)、処格(c)であるが、それらはいずれも動詞あるいは前置詞が決定しており、主要部名詞が決めているものではない。

次に、一致素性は主要部名詞と AM の関係・結びつきを示すものであるが、格は NP の文中での役割、あるいは格付与子と NP 全体の関係・結びつきを示すものであり、主要部名詞のものではない。このことは、Chomsky (1981: 49, 1995: 110-111) などをはじめとする一連の生成文法の理論で格が NP に付与されるものであり、格フィルターが NP の格を問題としていることにも見て取れる。また、生成文法ではない伝統的な文法の中でも Шведова (1970: 326) も以下の様に述べている：

(26) Таким образом, категория падежа, в отличие от всех других категорий как имени, так и глагола, выступает как категория синтаксиса, а не морфологии. Выражаемое ею отвлеченное значение отношения складывается не в парадигме слова как системе его форм, а в словосочетании, т.е. является не парадигматическим, а синтагматическим.

「このように格の範疇は名詞や動詞の他のあらゆる範疇と異なり、形態的ではなく統語的カテゴリーとして現れる。それによって表現されている関係の抽象的な意味は語の形態のシステムとしてのパラダイムに形成されるのではなく、

¹⁹ 訳中の()内は匹田による。

2. いくつかの記述的・理論的前提

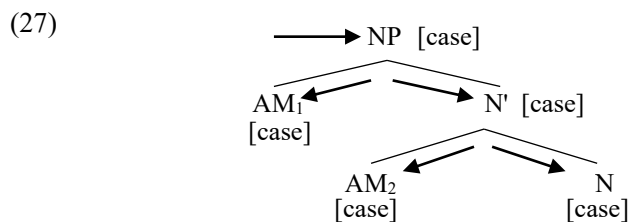
句に形成されている。つまり、それは連合的と言うより統合的なものなのである。」

本稿では、これらの考え方に則り、格はまず何らかの付与子によって節点 NP に付与されるものと考え²⁰、それが支配する AM や主要部名詞に対しては NP から下へ浸透(percolate)する²¹、と考える。この考え方を基にしたロシア語、とりわけ QP の格の分布の説明は Babby (1975, 1980a)などにその原型が見られ、Babby (1980b, 1984, 1985a, 1985b, 1986, 1987), Freidin & Babby (1984)などの一連の研究で発展した。2.3.2. では本稿の理論的出発点としてそれらの理論を概観する²²。

2.3.2. Babby の格に関する理論と QP における格の分布

以下、Babby (1980b, 1984, 1985a, 1985b, 1986, 1987), Freidin & Babby (1984)で議論されたロシア語の格付与と格に関する理論の主要な部分を概観し、それを本稿における議論の前提とする。上記の研究は相互に若干の相違点があるため、ここでは Babby (1987)におけるものをもとに理論の概略を紹介する。

まず、前節でも述べたように格は外から節点 NP に与えられ、その後それが支配する節点へと浸透して行くと考えられる。



このことは典型的な NP であれば、AM と主要部名詞は常に同じ格を示すのでまったく問題ないが、QP の振る舞いを観察するとことはそう単純ではないことがわかる。以下は *пять книг* 「5冊の本」を全ての格に変化させたものである。

(28) 「5冊の本」

- (a) 主格: ПЯТЬ КНИГ
five-nom book-genq.pl

²⁰ Freidin & Babby (1984)や Babby (1986)は何らかの付与子によって与えられたものではない「意味格 (semantic case)」もあると想定している。本稿では意味格については議論の対象外として今後の課題としたい。

²¹ Chomsky (1981: 49)も一般理論として格は NP に付与されてから浸透するとしている。ただし、浸透は主要部に向かって成されるとしているところが、AMにも浸透すると考えざるを得ないロシア語の場合と異なっている。

²² Franks (1995)も基本的にこれらの理論体系に基づいている。

2. いくつかの記述的・理論的前提

- (b) 対格：пять книг
five-acc book-genq.pl
- (c) 属格：пяти книг
five-gen book-gen.pl
- (d) 処格：пяти книгах
five-loc book-loc.pl
- (e) 与格：пяти книгам
five-dat book-dat.pl
- (f) 具格：пятью книгами
five-ins book-ins.pl

これらの例で Q と N の格を比べると(c-f)では格が合致しているが、(a-b)では異なっている²³。つまり Q と N の間でいわゆる「格の一致」が起こるのは属格・処格・与格・具格の場合のみであり、主格・対格では「格の一致」が起こらない。この一貫しない現象を説明するために、Babby (1987)はいくつかのことを仮定している²⁴。

まず Babby (1987)では、(28)の格を示すグロスにも見て取れるが、Q *пять* が付与する格は、通常の属格とは異なる格と考える。本稿ではこれを「数量属格(genitive of quantification, 以下 GenQ または genq と略す²⁵)」と呼び、「2~100」の数詞はいずれも GenQ を付与すると考える。この「7 つめの格」の存在が Babby (1987)の議論の大前提である²⁶。

Babby (1987)は GenQ, 主格 (Nom), 対格 (Acc)は構造格 (Structural case), 一方、属格 (Gen), 処格 (Loc), 与格 (Dat), 具格 (Ins)は語彙格 (Lexical case)²⁷と仮定した上で、語彙格の付与は構造格に優先されるという階層を考える。それに加えて階層上の優先順位が同じ場合は局所原理 (Locality principle)によってより近くものからの直接の付与はより遠いものから付与され浸透によって得られる格よりも優先されると考え、(28)に見られる首尾一貫しない格の現象を説明した。以上の仮定をまとめると以下の通りである：

²³ Babby (1987)は Q と N の格が合致している場合を homogeneous なパターン、合致していない場合を heterogeneous なパターンと呼んでいる。

²⁴ ここから先、とくに QP に関わる議論において句節点に付与される格と末端の語形が示す格が異なることが多く見られる。そのため、以下では句節点に付与される格によって決まるものを「格環境」と呼ぶ。すなわち、(28a)は「主格環境」にあり、(c)は「属格環境」にある、とする。

²⁵ Babby (1987)では数量属格の略記を Gen(Q^m)としているが、本稿では GenQ とする。

²⁶ 上の例で、主格及び対格環境の場合の N の形態 *книг* は[GenQ]である一方、属格環境の場合の *книг* も形態的には同じであるが通常の属格[Gen]であるとされている。この違いは PcQ を含む例だと主格・対格環境の場合 *книги*, 属格環境の場合 *книг* と形態が明確に異なるため確認できる。詳細な議論は 4.で行う。

²⁷ 構造格・語彙格ではなく配列格 (Configurational case)と内在格 (Inherent case)とする名称もあるが、本稿では構造格・語彙格という名称で統一する。

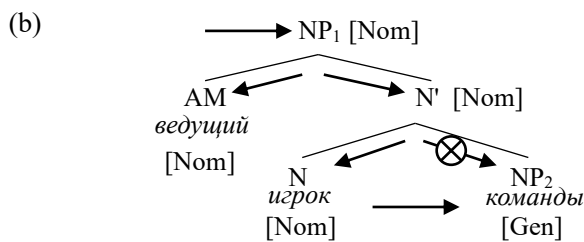
2. いくつかの記述的・理論的前提

(29) Babby (1987)の理論

- (a) GenQ という 7つめの格を想定
- (b) 構造格：Nom, Acc, GenQ
- (c) 語彙格：Gen, Loc, Dat, Ins
- (d) 語彙格 > 構造格
- (e) 局所性原理により近いものが優先

これらによって Babby (1987)は(28)の現象を以下の様に説明する。まず典型的 NP から見てみよう。NM がない場合は特段の問題は無い。(27)にあるように格は何にも妨げられずに全ての末端まで降りていくからである。構造格か語彙格かも関係が無い。しかし、NMがある場合は格の浸透を妨げるものが存在する。

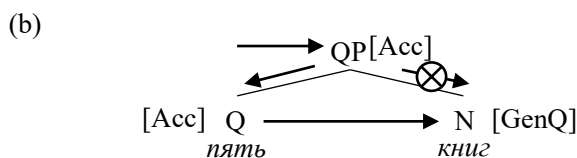
- (30)(a) ведущий игрок команды
 leading-nom.sg.m player-nom.sg.m team-gen
 「チームの主力選手」



例(30)では主要部名詞 *игрок* が NM である NP₂ の *команды* に属格を付与している。また、外部の何らかの格付与子によって主格が頂点の NP₁ に付与されている。この場合、属格の付与は(29a, b)によって主格の浸透に優先されるので、NP₂ は主格ではなく属格が付与されることになる²⁸。

では、QP の場合はどうであろうか。まずは対格、すなわち構造格環境の場合である。

- (31)(a)(...)мне довелось прочитать [пять книг] (...) (НКРЯ 2021.08.24)
 I-dat have_a_chance-ra read-inf five-acc book-genq.pl
 「私は 5 冊の本を読めた」



²⁸ Chomsky (1981, 1982, 1986)は最大投射 (maximal projection)や障壁 (barrier)の存在が統率 (government)を妨げると規定することで同様の結果をもたらそうとしているが、Babby (1987)の考え方だと少なくともとも格付与に関する限り、そのような規定は不要ということになる。

2. いくつかの記述的・理論的前提

この場合、Q によって N に付与される [GenQ] と QP 外部の動詞から QP に付与され下に浸透してくる [Acc] では (29d) の階層では違いが無いが、(29e) の局所性原理によって、より近いところから直接与えられる [GenQ] が優先される、と正しく予想される。

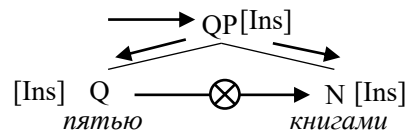
次の例は具格、すなわち語彙格環境の場合である。前置詞 *c*「〜と」は具格支配の前置詞である。

(32)(a)(...) ушла с [пятью книгами] (...) (НКРЯ 2021.08.24)

go_away with five-ins book-ins.pl

「5冊の本を持って立ち去った」

(b)



この例では前置詞 *c* が QP に [Ins] を付与するが、ここでは末端まで [Ins] が浸透している。それは (29d) により語彙格である [Ins] が構造格である [GenQ] に優先されるからである。

また、「1」は常に Q と N の格が同じである。

(33)「1つの机」

- (a) 主格：один стол
one-nom desk-nom
- (b) 対格：один стол
one-acc desk-acc
- (c) 属格：одного стола
one-gen desk-gen
- (d) 処格：одном столе
one-loc desk-loc
- (e) 具格：одному столу
one-dat desk-dat
- (f) 具格：одним столом
one-ins desk-ins

つまり、「1」を含む QP は常に homogeneous なパターンを示すということになる。このことについて Babby (1987) はとくに言及していないが、本稿では単純に「1」には形容詞などと同様に修飾する名詞に対する格付与能力がないからであると考えられる。

また、миллион「100万」などの NQ は格環境に従って Q は変化する一方、後続する N は常に属格形である。

(34)「100万ルーブル」

- (a) 主格：миллион рублей
million-nom rouble-gen.pl

2. いくつかの記述的・理論的前提

- (b) 対格：миллион рублей
million-acc rouble-gen.pl
- (c) 属格：миллиона рублей
million-gen rouble-gen.pl
- (d) 処格：миллионе рублей
million-loc rouble-loc.pl
- (e) 与格：миллиону рублей
million-dat rouble-dat.pl
- (f) 具格：миллионом рублей
million-ins rouble-ins.pl

つまり、NQ は常に heterogeneous な格のパターンを示すということである。この点についても Babby (1987)には明確な言及がないが、本稿ではやはり単純に NQ は通常の名詞と同様に[GenQ]ではなく通常の属格[Gen]を付与するからと考える。そうすれば(29d, e)によって、句の頂点に付与された語彙格が末端の N まで浸透してくることはないと正しく予測されるからである。

一方、тысяча「1,000」は状況が少々複雑で、複数の格のパターンが認められている。NQ のように全ての格環境で heterogeneous なパターンを示す場合と、HQ と同様に homogeneous な格のパターンと heterogeneous な格のパターンが混在する場合がどちらも可能とされている。

(35)「1,000 ルーブル」(全て heterogeneous なパターン)

- (a) 主格：тысяча рублей
thousand-nom rouble-gen.pl
- (b) 対格：тысячу рублей
thousand-acc rouble-gen.pl
- (c) 属格：тысячи рублей
thousand-gen rouble-gen.pl
- (d) 処格：тысяче рублей
thousand-loc rouble-gen.pl
- (e) 与格：тысяче рублей
thousand-dat rouble-gen.pl
- (f) 具格：тысячью рублей
thousand-ins rouble-gen.pl

(36)「1,000 ルーブル」(heterogeneous と homogeneous の両パターンが混在)

- (a) 主格：тысяча рублей
thousand-nom rouble-gen.pl
- (b) 対格：тысячу рублей
thousand-acc rouble-gen.pl
- (c) 属格：тысячи рублей
thousand-gen rouble-gen.pl
- (d) 処格：тысяче рублях
thousand-loc rouble-loc.pl
- (e) 与格：тысяче рублям
thousand-dat rouble-dat.pl

2. いくつかの記述的・理論的前提

(f) 具格：тысячью рублями
thousand-ins rouble-ins.pl

つまり、全て heterogeneous なパターンでは NQ 的な形態法を示し、heterogeneous なパターンと homogeneous なパターンが混在するパターンでは HQ と同じ形態法のパターンを示している。つまり格に関して *тысяча*「1,000」は NQ 的にも HQ 的にも振る舞うことができる、ということになる。この点についても Babby (1987)にはとくに言及がないが、本稿ではこれらの違いを、Q が付与する格の違いによるものとする。すなわち、全て heterogeneous なパターンを示す場合は *тысяча* は NQ 的に通常の属格 [Gen] の付与子であり、hetero-/homogeneous なパターンが混在する場合は HQ と同様に数量属格 [GenQ] の付与子である。

以上、ロシア語の格と Q の格付与能力についてまとめると以下の通りとなる：

(37) ロシア語の格

構造格			語彙格			
主格	対格	数量属格	属格	処格	与格	具格

(38) 数量詞が付与する格

один	PcQ	HQ	NQ
×	GenQ	GenQ	Gen

ただし、*тысяча*「1,000」は HQ 的に [GenQ] 付与と NQ 的に [Gen] 付与の両方が可能である。本稿では以下、便宜的に *тысяча* を NQ の一つと考えるが、一部 HQ 的な性質を示すこともある。

なお、この格付与能力に関する数量詞ごとの違いは(1-15)²⁹の連続体に矛盾なく入れ込むことができる。まず、匹田(2007: 32)では Corbett (1978b, 1978c)の連続体を以下のように改変した³⁰：

²⁹ 例文などの通し番号は章ごとに振ってあるが、文中でそれらに言及する場合、同じ章のものなら番号のみ、異なる章のものなら章番号を付してある。

³⁰ 「a」は形容詞の特徴を示すこと、あるいは名詞の特徴を示さないことを意味し、「n」は名詞の特徴を示す、あるいは形容詞の特徴を示さないことを意味する。改変はいずれも以下の議論のための便宜上のものであり、内容は全く同じと考えて差し支えない。

2. いくつかの記述的・理論的前提

(39)

		形容詞的(dependent) ← → (head)名詞的						
		1	2	3, 4	5	100	1,000	1,000,000
(i)	名詞との数の一致	a	n					
(ii)	全ての格で一致	a	n					
(iii)	性の一致	a	n					
(iv)	有生性の一致	a			n			
(v)	自身の複数形	a				n		
(vi)	数詞に対する一致定語	a				n		
(vii)	複数属格のみ支配	a				n		

この中で特徴(ii)と(vii)は「格を付与する」と「語彙格を付与する」に換えても結局同じことになる³¹。以下は匹田(2017, 2018, 2019)で示したものに表現の修正を加えたものである：

(40)

		形容詞的(dependent) ← → (head)名詞的						
		1	2	3, 4	5	100	1,000	1,000,000
(ii)	格を付与する	a	n					
(vii)	語彙格を付与する	a				n		

以上の様に, Babby (1980b, 1984, 1985, 1986, 1987), Freidin & Babby (1984)が提案する格付与の体系は, Corbett (1978a, 1978b, 1978c)の示した数詞のもつ連続体的性質と矛盾するものではない。

2.3.3. 格の上書き

Babby (1987)は構造格と語彙格の優先順位と局所性原理により Q が付与する格と上から浸透してくる格のどちらが優先されるかを定め, それによって QP 内の N の格のパターンを規則的に予測することに成功している。しかし, これには理論的に考慮しなければならない問題が含まれている。1.1.で基本的考え方として以下の点を前提とした：

(41)(a)=(1-2c) できるだけ早期適用原理に従う。

(b)=(1-2d) 先読みはできるだけしない。

しかし, Babby (1987)の理論だとこれらに従うことは難しい。以下の(42)では [GenQ]の付与が[Acc]の浸透に局所性原理に従い優先されている一方, (43)では[Ins]

³¹ この考え方をすると, 必然的に語彙格を付与する方が「より名詞的」であり, 構造格を付与する方が「より名詞的でない」ことになる。確かに N がその補語の位置にある N には語彙格である属格を付与するのがデフォルトであると言えるが, 構造格だとしてより名詞性が薄れるのかは問題である。

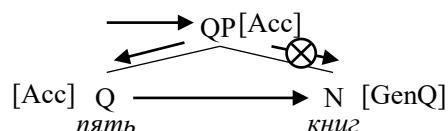
2. いくつかの記述的・理論的前提

の浸透が Q による[GenQ]の付与より優先順位が高いため、局所性原理に関係なく [Ins]が N まで浸透している。

(42)(=31)

(a)(...)мне довелось прочитать [пять книг] (...)
 I-dat have_a_chance-ра read-inf five-acc book-genq.pl
 「私は 5 冊の本を読めた」 (НКРЯ 2021.08.24)

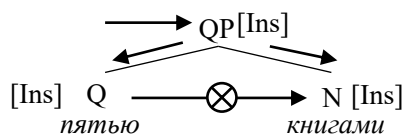
(b)



(43)(=32)

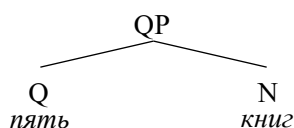
(a)(...) ушла с [пятью книгами] (...)
 go_away-ра with five-ins book-ins.pl
 「5 冊の本を持って立ち去った」 (НКРЯ 2021.08.24)

(b)



このことは Q と N が併合 (merge)した時点では、Q による格付与は QP に格付与を行う付与子が併合することを待たなければならないことを意味する。つまり、以下の状態になったとき、本来であれば[GenQ]の付与を妨げるものは何もないにも関わらず格付与を行わず何らかの格付与子によって QP に格が付与されるのを待たなければならない。

(44)



そうしなければこの後 QP から浸透してくる格が構造格か語彙格かがわからず、[GenQ]を付与して良いかわからないからである。即ち、[GenQ]の付与を一旦待つか、あるいは QP に付与される格が何かを先読みしなければならない。

本稿ではこの問題を解消するために、語彙格の浸透が構造格の付与に優先されるのではなく、条件によっては格の「上書き (overwrite)」が可能であると仮定する。要するに(29d)は優先順位ではなく上書きの可能性を示すのである。

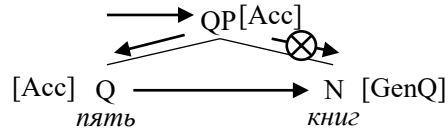
(45) 語彙格は構造格に上書きすることが可能であるが、他の上書は不可能である。

つまり、[GenQ]は付与が可能になった時点ですぐさま付与され、その後、構造格

2. いくつかの記述的・理論的前提

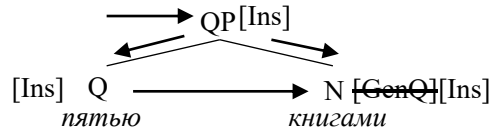
の付与子と QP が併合すると QP に構造格 (ここでは[Acc])が付与される。その場合は構造格の構造格への上書は不可能なので QP から N に[Acc]が浸透することはなく、[GenQ]はそのまま書き換えられることはない。

(46)



一方、QP が語彙格 (ここでは[Ins])の付与子と併合すると、語彙格を構造格に上書きすることは可能なので、Q と N が併合した時点で Q から付与された[GenQ]は、QP が[Ins]の付与子と併合し、QP に付与されたのちに N へと浸透してきた[Ins]によって上書きされる。

(47)



こうすることによって、他の操作を待ったりあるいは先読みしたりすることなく早期適用原理に従って、Q と N が併合するとすぐに[GenQ]が付与することができる。本稿では、早期適用原理にできるだけ従い、先読みも好ましくないとの観点から、Babby (1987)とは異なり格の上書きは場合によっては可能、という立場で以下論を進める³²。なお、早期適用原理に従う、という立場は次章以降のより具体的な議論においても有効である。

なお、Pesetsky (2013)は、格の上書きを想定しない代わりに、格語尾は付与されると語幹の末尾に順にスタックされ、その一番最後のもの以外は全て削除する、という考え方を提案している。格の理論自体は Babby (1987)とは大きく異なっているが、これを今回の考え方に適用すると *с пятью книгами* はまず[GenQ]を付与され、その後で[Ins]が付与され、最後は[Ins]を残して[GenQ]が削除されることで最終的な形態がもたらされる、ということになる。

(48) *книг-genq* → *книг-genq-ins* → *книг-genq-ins*

[Acc]はなぜ[GenQ]の後に付与されないのか、などの問題は起こるものの、上書きかスタックかの問題は詳細に検討するべきだと思われる。この件については今後の課題とするべきであるのはもちろんだが、本稿では格の上書きを前提として議論を展

³² Babby (1987)が格の上書きを想定していない、ということは後藤雄介 (pers.com.)が指摘してくれた。

2. いくつかの記述的・理論的前提

開する。

2.3.4. 主格の付与について

主格の付与がどのように行われるかには、問題が残る。明確な付与子が何なのか、あるいはそれはどこにあるかなど問題が種々残るからである。

いわゆる GB 理論の Chomsky (1981)で、主格の付与は AGR によって統率されることを条件に行われるとしている：

(49) NP is nominative if governed by AGR. (Chomsky 1981: 170)

「NP は AGR によって統率されていると主格になる」

その一方で以下の様にも規定している：

(50) AGR is coindexed with the NP it governs. (Chomsky 1981: 211)

「AGR はそれが統率する NP と同一指標になる」

これらから言えることは、主格の付与と主語・述語の一致を一つにまとめ、いわば同じコインの裏表と考えているということである。

このことは Chomsky (1993, 1995)などのいわゆるミニマリスト・プログラムになっても変わらず、それぞれ、以下の様に述べている：

(51) We now regard both agreement and structural Case as manifestations of the Spec-head relation (NP, AGR). (Chomsky 1993: 7)

「我々は一致と構造格の両者を Spec-head の関係の具現化したものとする」

(52) Structural Case in general is simply a manifestation of [Spec, Agr] relation, with realizations as Case or agreement, depending on language-particular morphology. (Chomsky 1995: 121)

「構造格は一般に[Spec, Agr]の関係の単に具現化したものであり、言語ごとの形態法に従って格または一致として具体化する」³³

このように、主格の付与と主語・述語の一致を一つにまとめた考え方は、少なくともロシア語ではにわかに認めがたいことを、匹田(1995, 1996, 1998)では主語・述語の一致と関わらない、あるいは一対一で主語と述語の一致と関わらない様々な主格名詞句の存在を示すことで論じた。以下はその一部である：

³³ この考え方に則ると他動詞の補語に対する対格の付与も同様に一致と同じに扱っていることになるが主格主語の場合と異なり、述語の一致が形態的に顕在化しないので、とりあえず本稿では問題とならない。

2. いくつかの記述的・理論的前提

(53)(a) 等位接続構造

Поехали / Поехал *машинист и помощник*. (Граудина и др. 1976: 31)
depart-pa.pl -pa.sg.m driver-nom.sg.m and assistant-nom.sg.m
「運転手と助手が出発した」

(b) 数量詞句³⁴

Пришло / Пришли *пять студентов*.
come-pa.sg.n -pa.pl five-nom student-genq.pl
「5人の学生がやってきた」

以上は主語・述語の一致が一つに定まらず、イタリックで示した主格 NP と一対一で対応していない例である。他にも述語と一致することがない主格 NP も存在する。

(54)(a) 指示代名詞 *это* 「これ」

Это была школа.
this-nom.sg.n be-pa.sg.f school-nom.sg.f
「これは学校だった」 (匹田 2016: 32)

(b) 左方転移化要素

Мария, все ее любят.
Marija-nom.sg.f everyone she-acc love-pr.1.sg
「マリヤのことは皆が愛している」 (匹田 2016: 36)

(c) 比喩を導く *как* 「～のような」³⁵

Я бы хотел иметь такого ученика как он.
I-nom sbj want-pa.sg.m have-inf such-acc.sg.m.an pupil-acc.sg.m.an like he-nom
「私は彼の様な生徒を持ちたいものである」 (Rappaport 1986: 244)

これらの例でイタリックで示した NP はいずれも主格であるが、述語の一致は他の主格 NP と行っているので、これらは一致対象がないことになる。これらについては様々な議論が可能だが、いずれにせよ、主格の付与と主語・述語の一致を一つにまとめて考えることはできないことを示している。従って、本稿では主格の付与と主語・述語の一致は別個に説明されるべき異なる現象と理解して議論を進め、もっぱら一致に議論を限定する。また主格の付与がどのように行われているかも本稿では明確化することも避け、NP 外部の「何か」によって付与されているとだけ考え³⁶、詳

³⁴ 数量詞句を主語とする場合の一致については 3. で詳細に議論する。

³⁵ これと非常に似通った振る舞いをするものに比較の基準を表す *чем* 「～より」がある。こちらについては中岩 (2020) が詳細に議論を行っている。中岩 (2020) は Rappaport (1986) と異なり、*как* と *чем* は従属接続詞で従属節を導き節内の動詞を含めた要素がしばしば削除されると結論づけている。だとするとこの主格 NP は削除された述語と一致していることになり、中岩 (2020) の考えに則れば主格付与と主語・述語の一致が一対一で対応していない、と言う問題は無くなることになる。

³⁶ その一方で Babby (1986: 210) は主格の付与を以下の様に規定している：

(i) Nominative Case Assignment

A noun phrase that is not governed by a lexical category is assigned the nominative case.

「語彙範疇に統率されていない名詞句は主格を付与される」

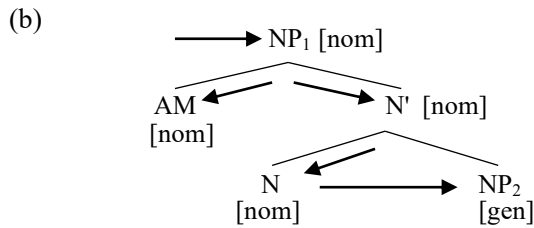
2. いくつかの記述的・理論的前提

細は今後の課題としたい。

2.3.5. 格境界について

前節までに示した Babby (1987)に基づく理論体系で、典型的 NP に付与された格が NM にまで浸透して行かないことは問題無く説明可能である。

(55)(a)(...)вышла [NP₁ замечательная книга [NP₂ Солженицына]] (...)
go_out-pa.sg.f wonderful-nom.sg.f book-nom.sg.f Solzhenitsyn-gen.sg.m
「ソルジェニーツインの素晴らしい本が出た」 (HKPЯ 2021.08.02)



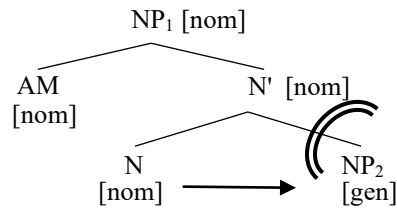
この例で、NP₂はNP₁の不一致定語NMの機能を果たしているが、Nによって[Gen]が先に付与されるためNP₁に外部から付与され、その後句内部に浸透してきた[Nom]はNP₂まで浸透することはできない。

その一方、格以外の一致素性のコピーに関してもNP₂は無関係である。Nを修飾するAM(及び、形には現れないがN', NP₁などの句範疇も)にコピーされる一致素性は全てNに由来するものであるし、また主語NPと一致している述語動詞に現れているのもNに由来するものである。つまり、NP₂から外に一致素性がコピーされることはない。これが何故起こるのか根本的な理由は今後の課題であるが、本稿ではこれは格の付与によって起こる現象であると仮に考える。つまり、NP₂に[Gen]が付与されることによって、いわば「蓋」がされると考える。この格付与によって塞がれた領域のことを格領域、その格領域の境界線を格境界(Case Boundary, CB)と呼ぶこととする。

その上で、これが「主語、主題、呼格、引用形の主格標示を説明できる」としている。これは「～されていない場合」と否定的な条件で付与されているとすることによって、主格をいわばデフォルトの格と捉えていることになる。主格が何によってどのように付与され、また主語・述語の一致がそれとどのような関係にあるのか、については本稿では明らかにすることはできない。今後の課題とする。ひょっとすると主格はデフォルトとして与えられる場合と何らかの付与子によって与えられる場合の両方があるのかも知れない。なお、5.において主格がデフォルトとしての性質を持っているようにも見える提案を行う。

2. いくつかの記述的・理論的前提

(56)



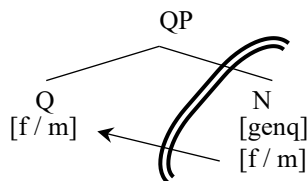
つまりこの場合、N によって NP₂ に [Gen] が付与された際に NP₂ が格領域を成すようになり、それを囲んで一致素性のコピーを妨げる CB が形成されると考える³⁷。

一つ注意すべきことは、QP の場合、この CB を越えて一致素性がコピーされることがある程度可能になる。

(57) две книги / два стола
 two-nom.f book-genq.f two-nom.m desk-genq.m
 「2冊の本 / 2つの机」

数量詞「2」は 2.3.2. で見たように N に対して数量属格 [GenQ] を付与する。と言うことは、上記の CB が N である *книги* や *стола* の上に形成され N から格境界を越えての一致素性のコピーは行われなければならないが、実際にはグロスに示したように Q が N と性に関して一致している。

(58)



このように、QP では一定の範囲において格境界を一致素性が越えることが可能である。本稿ではこのことがロシア語の QP における Q と N に主要部性が分散していることとの表れであると考え。次章以降はこの観点に立ち、Q によって異なる主要部性の様々な共有の方法を具体的かつ詳細に記述・整理することによって文法の構築を行う。

2.4. 複数における性

ロシア語の名詞の文法範疇としての性と数は多分に関係があり、性の対立は単数においてのみ存在し、複数になると消失することが知られている。このことを

³⁷ これが本当に格付与によって引き起こされるものなのか、それとも何か他の条件によるものなのかは今後慎重に議論する必要がある。例えば、最大投射であることが同じ結果をもたらすと考えることは可能かも知れない。ただ、1.3.1. で確認したように、QP が関わると句構造の bar-level が曖昧になってきてしまうことが考えられるので、できる限り bar-level に言及しない形で文法を構築したいということもあり、本稿では格付与の問題と捉えることにする。

2. いくつかの記述的・理論的前提

Шведова и др.(1980: I: 466)は以下のように表現している：

(59) Во мн. ч. грамматическое значение рода существительных не имеет выражения: оно не обозначается системами падежных флексий ни самих существительных, ни согласуемых с ними слов...

「名詞の性の文法的値は複数において表現されない：それは格変化のシステムで名詞自身によってもそれと一致する語によっても示されない。」

例えば、以下の(a)では指示代名詞 *этом* が修飾する名詞の性に合わせて *эта, это* と形態を変えているが、その複数形である(b)では名詞の性に関わらず指示代名詞は一貫して *эти* となり、性による違いは無い。

(60)(a) ЭТОТ мальчик / эта девочка / это письмо
 this-sg.m boy-sg.m this-sg.f girl-sg.f this-sg.n letter-sg.n
 「この少年 / この少女 / この手紙」

(b) ЭТИ мальчики / девочки / письма
 this-pl boy-pl girl-pl letter-pl
 「これらの少年 / 少女 / 手紙」

名詞を修飾する AM として用いられる語類の形態法を確認しよう。まず、名詞を修飾する AM と機能しうるものとして指示代名詞、形容詞、所有代名詞、定代名詞 (определенное местоимение) の例を、いずれも主格のみ示す：

(61) 指示代名詞 *этом* 「この」

	単数			複数
	男性	中性	女性	
主格	ЭТОТ	ЭТО	ЭТА	ЭТИ

(62) 形容詞 *красный* 「赤い」

	単数			複数
	男性	中性	女性	
主格	красный	красное	красная	красные

(63) 所有代名詞 *мой* 「私の」

	単数			複数
	男性	中性	女性	
主格	мой	моё	мая	мои

(64) 定代名詞 *весь* 「全ての」

	単数			複数
	男性	中性	女性	
主格	весь	всё	вся	все

これらはいずれも AM として機能しうる語類であり、主要部名詞と一致を示す。しかし、いずれの場合も形態的に性の対立があるのは単数の場合のみであり、複数で

2. いくつかの記述的・理論的前提

は性の形態的対立はない。また、AMなのかどうかは議論の余地があるが、やはり名詞に合わせて性・数の変化をするものに定代名詞 *сам* 「～自身」もある。

(65)(a) Это он сам мне объяснил (...)
this-acc he-nom self-nom.sg.m I-dat explain-pa.sg.m
 「そのことを彼自身が私に説明した」 (НКРЯ 2021.08.29)

(b) Она сама попросила показать (...)
she-nom self-nom.sg.f ask-pa.sg.f show-inf
 「彼女自身から見せるよう頼まれた」 (НКРЯ 2021.08.29)

(c) Они сами решают (...)
they-nom self-nom.pl decide-pr.3.pl
 「彼ら自身で決めている」 (НКРЯ 2021.08.29)

変化表を確認してみると、やはり複数で性の違いは形態的に示されることは無い。

(66) 定代名詞 *сам* 「～自身」

	単数			複数
	男性	中性	女性	
主格	сам	само	сама	сами

性という文法特徴は、指示対象の自然性や屈折タイプなどと大いに関連があることは事実であるものの、文法上は一致という形で現れてはじめて確認されるものである。それ故、上の記述的言語事実は少なくとも AM にとって、性は複数で消失するということの意味する。

また、ロシア語で伝統的に認められている一致にはもう一つ、主語と述語の一致があり、動詞の過去形、形容詞の短語尾形 (述語としてしか用いられることがない形態)も同様に複数では性の形態的違いはない。

(67) 動詞 *читать* 「読む」の過去形

	単数			複数
	男性	中性	女性	
主格	читал	читало	читала	читали

(68) 形容詞 *красивый* 「美しい」の短語尾形

	単数			複数
	男性	中性	女性	
主格	красив	красиво	красива	красивы

以上、AM および述語における一致について見ると、複数で性の形態的対立が見られるものはない。一方 Corbett (1979b, 1983, 2006)は、これら一般的にロシア語において「一致」と呼ばれる現象以外にも関係代名詞や人称代名詞の形態選択も一致と見なしている。

関係代名詞については、数の対立がある *который* は上記の形容詞と同じ屈折を行うので、やはり複数において性の区別は形態的に不可能である。また人称代名詞は 3

2. いくつかの記述的・理論的前提

人称のみ性と数の形態的区別があるが、やはり複数では以下の通り、性の区別が存在しない(例文 65 も参照).

(69) 3 人称人称代名詞

	単数			複数
	男性	中性	女性	
主格	он	оно	она	они

以上の様に、ロシア語には複数において性の形態的対立は全て存在しないと言える³⁸. 本稿では、ロシア語において性は単数でのみ対立し、複数では対立が消失するという前提で議論を進める³⁹. それ故、グロスなどではこれ以降、複数で性に関する一致情報は示さないし、また単数では性を示すだけで数に関する情報は省略する。性が示されていて数が示されていないければ単数であることを意味する。

以下、本稿では以上のことを踏まえて、以下の素性の削除規則を立てることで複数では性の対立が失われることを説明する⁴⁰.

³⁸ 語義に指示対象の自然性が含まれている場合は、別の問題である。例えば *студентка* 「女子学生」や *мама* 「お母さん」の複数形である *студентки, мамы* が複数の女子学生や複数の母親を示すものであり、女性を指示していることに変わりはないが、これは語義あるいは指示対象の自然性の問題であり文法性の問題ではない。当然これらに一致する要素は全て複数で性を区別することはない。

また、複数における性の対立はないと考えるが、これは名詞の複数形の形態法が一つに統一されていることを含意しない。名詞の複数主格形には大きく分けて *-i* と *-a* があるが、これらは前者が女性名詞と男性名詞(の大部分)、後者が中性名詞と少数の男性名詞となっており、性と対応しているわけではない。

³⁹ しかしその一方で、Зализняк (1964), Bailyn & Nevins (2008), Pereltsvaig (2010), 後藤 (2015a, 2015b) など、複数の名詞にも性はあると考える研究もある。確かに：

(i) Я доволен этими домами, каждый из которых по-своему хорош.
I-nom satisfied this-ins.pl house-ins.pl each-nom.m from which-gen.pl in_one's_own_way good-m
「私はそれぞれがそれなりに良いそれらの家に満足している。」(Зализняк 1964: 31)

という文における単数形の *каждый* 「それぞれ」、*хорош* 「良い」がなぜ男性形なのかは複数名詞 *домами* 「家」に性がないと考えると別の説明が必要になるし、また後藤(2015a: 15)が以下の等位接続された二つの形容詞によって一つの名詞を修飾している以下の例を引用して指摘するように：

(ii) географический и исторический факультеты
geographical-m and historical-m faculty-pl
「地理学部と歴史学部」(Кохтев и Розенталь 1984: 171)

において、複数形の名詞 *факультеты* 「学部」を修飾する単数形の形容詞 *географический* 「地理の」と *исторический* 「歴史の」がなぜ男性形なのか、複数では性の対立が失われていると考えると特別な説明が必要であることになる。今後の課題としたい。なお、Милославский (1988: 11-13) も名詞の複数形にも性はあると考えているが、*pluralia tantum* だけはいかなる性をも持ち得ないとしている。この問題には 10.2.3. で再度言及するが、本稿が解決できなかった問題である。

⁴⁰ ちなみに Corbett (2012: 35) ではドイツ語でやはり複数で性の対立が消失する、すなわち性別があることが単数であることを含意することを Feature Cooccurrence Restriction (FCR) として Gazdar *et al.* (1985: 27-29) での記法に従い以下の様に示している。

2. いくつかの記述的・理論的前提

(70) [gender x] → ∅, if [pl]

2.5. 複数における屈折タイプ

一方、名詞の屈折タイプも複数においては対立を失うとを指摘する研究者もいる。それらのうちのいくつかを以下に引用する：

(71) Levine (1978: 27)

... in the declension of Russian nouns there is one set of endings for each of the three major noun classes in the singular and one set of endings for the plural.

「ロシア語の曲用において、単数では主な3つの名詞クラスそれぞれに一つの語尾のセットがあるが、複数では一つの語尾のセットしかない。」

(72) Pesetsky (2013: 66)

Declension class distinctions are suppressed in plural forms (...)

「曲用クラスの違いは複数形においては抑えられている」

(73) Шведова и др. (1980: I: 483)

Типы склонения строго различаются только в падежных формах ед. ч. Во мн. ч. различия между типами склонения не столь определены, а в дат., тв. и предл. падежах различия флексий вообще отсутствуют.

「曲用タイプが厳密に異なっているのは単数の格形においてのみである。複数においては曲用タイプ間の違いはそれほどはっきりしたものではなく、与格、具格、処格においては屈折の違いは全く存在しない。」

(74) Barnetová et al. (1979: 1: 467)

В формах множественного числа, как уже отмечалось, в значительной степени стираются различия между формальными классами единственного числа (т.е. I–III склонениями)...

「上述のように、複数形において単数形の形式クラス間（すなわち第I–第III曲用）の違いはかなりの程度消え去っている」

(75) Bailyn & Nevins (2008: 248)

Gender and class distinctions are neutralized in oblique plural forms

「性と(屈折)クラスの区分は斜格の複数形で中和される」(カッコ内匹田)

つまり、いずれも複数ににおいて、屈折タイプの対立は消失すると考えているわけであ

(i)FCR: [GENDER] ⊃ [NUMBER: SG]

2. いくつかの記述的・理論的前提

る。Levine (1978:26)は以下の様に名詞の屈折タイプを示している⁴¹：

(76)

名詞の屈折タイプ				
	sg			pl
	I	II	III	
主格	-∅	-a	-∅	-i/-a
対格	↑	-u	-∅	↓
属格	-a	-i		-∅/-ej/-ov
処格	-e		-i	-ax
与格	-u	-e		-am
具格	-om	-oj	-ju	-ami

表中の対格の「↑」は条件によって主格と同形になったりあるいは属格と同形になったりする、ということを示す。つまり、ここには対格独自の形態はない⁴²。

以上を見ると、屈折の出発点としての主格形を除いて見ると、単数形では3つのパターンに分かれていることが見て取れる。その一方、複数では複数属格に3つの異形があることを除けば、一つにまとまっており、屈折タイプの対立が消失しているように見える。では、複数属格の異形はどう考えるべきであろう。主格は異形が存在していても変化の出発点として他の格に比べて特別であると考えられるが⁴³、複数属格はそう考えるには無理があると考えられるべきであろう。明らかに3つの形態が存在しており、これは複数における屈折タイプの存在を示しているのではないか？なお Шведова и др. (1980: I: 483)は、与格、具格、処格については屈折タイプが消失してい

⁴¹ ただし、Levine (1978)は屈折タイプとしてI、II、IIIではなくそれぞれ Nonfeminine, Nonneuter, Feminineと呼んでいる。また、屈折タイプを上記の様に番号で示す場合、多くの文献がこの番号の付け方に従っているが(例えば Исаченко 1954, Виноградов и др. 1960, Barnetová et al. 1979, Шведова и др. 1980, Шанский 1988, Timberlake 1993, 2004, Касаткин и др. 1995, Cubberley 2002 など)、IとIIが逆になっている文献も時に見られる(Милославский 1988, Савко 1999, Bailyn & Nevins 2008 など)。また、Янко-Триницкая (1982)は番号こそつけていないが、上記のタイプIIを1番目に、タイプ位置を2番目に列挙していることから、同様の整理をしているのかも知れない。なお、Савко (1999: 134)は本稿でのIIをIとし、本稿でのIをIIとしているが、多くの研究者が彼女のタイプIIをタイプIと呼んでいるのは「大多数の名詞が単数主格で ∅ 語尾を持つ男性名詞だから」としている。また、Ломоносов (2013)も Савко (1999)と同じナンバリングを行っているので、起源はひょっとするとここまで遡れるのかも知れない。(なお、Ломоносов の「ロシア文法 Российская грамматика」には様々なバージョンが存在することが知られているが、その点については恩田 2020 に詳しい。)

⁴² 対格の形態については5.で詳細に論じる。なお、Levine (1978)には複数属格について -ev についての言及はないが、-ov から音韻的に導き出されるものと見なしていると思われる。

⁴³ Levine (1978: 36-37)は単数主格形に性、アクセントパターン、出母音の有無などの予測不可能な情報を加えたものを「基底形 (base form)」と呼んでいる。また複数主格の屈折語尾 -i と -a は前者が第1変化の一部と第2変化、第3変化名詞で、後者が第1変化の一部で現れ、屈折タイプに対応しているとは言いがたい。性についても同様である。

2. いくつかの記述的・理論的前提

ると明言しているものの、複数属格形については何も述べていない。複数属格には- \emptyset , -ов, -ей と3つの形態が存在しているが、これらは複数でも屈折タイプが消えていないことにつながらないか？

Jakobson (1984b)や Levin (1978), Pertsova (2005, 2014), Bailyn & Nevins (2008), Nørgård-Sørensen (2011)などは、それぞれ定式化には違いがあるものの、複数属格の形態は屈折タイプとは全く関係なく純粋に音韻的な条件によってその形態が決まると考えている。たとえば Pertsova (2014: 4)は複数属格の語尾の異形態について以下のように論じている：

(77) While this allomorphy is historically related to the singular inflectional classes, this connection cannot be maintained synchronically.

「この異形態は歴史的には単数の屈折クラスに結びつけられるが、この結びつきは共時的に支持されうるわけではない。」

Pertsova (2005: 17)は Jakobson (1984b)に従い、様々な事情による例外はあるとしながら、概ね以下の様に一般化している：

(78) i) If the nominative singular ending is null, then the genitive plural will be overt (i.e. either -ej/ or -ov/ depending on the palatalization of the stem-final consonant).

ii) If the nominative singular ending is overt, then the genitive plural will be $-\emptyset$.

「 i) 単数主格の語尾がゼロであれば複数属格は顕在的な形態となる(すなわち、語幹の末尾の子音の口蓋化によって-*ej/*または-*ov/*となる).

ii) 単数主格の語尾が顕在的な形態であれば、複数属格は $-\emptyset$ となる。」

以上のように Jakobson (1984b), Levin (1978), Pertsova (2005, 2014)はいずれも、その定式化に違いはあるものの、単数主格の形態によって複数属格の形態が決まるとしていることが共通している。

一方、Bailyn & Nevins (2008)は分散形態論の以下の考え方に則って議論を展開する：

(79) Allomorphy can only be conditioned by the phonology in the current derivation, not by the phonology of other derivations. (Bailyn & Nevins 2008: 242)

「異形態が条件付けられるのはその派生の音韻によってのみ可能であり、他の派生の音韻によってではない」

要するに、ある形態が他の形態の派生のための条件になることは認めがたい、すなわち単数主格形を元に複数属格形を派生することは認めがたい、と言う考え方である。Bailyn & Nevins (2008: 256)はロシア語の単数主格の語尾と一般に考えられている母音/*-a/*や/*-o/*などは動詞にしばしば認められる語幹形成母音 (theme vowel)であるとし、一般に語尾と考えられている部分までを語幹であると考ええる。その結果として、複数属格の形成の元と

2. いくつかの記述的・理論的前提

なるのは(78)のように単数主格形ではなく、あくまでも語幹であるとする。それによって、単数主格形を複数属格形派生の条件とすることを避けている⁴⁴。

以上のように考え方に種々相違点があるものの、これらの議論はいずれもロシア語の名詞の複数属格形は、屈折タイプではなく音韻的な規則によってその形態の違いが決定づけられていると主張していることに変わりがない。

以上の考え方に従い本稿では、ロシア語の名詞の屈折タイプは、性と同様に単数においてのみ対立し、複数では失われると考える⁴⁵。また、このことを説明するために、以下本稿では次の素性の削除規則を立てる。

(80) $[\text{DecType X}] \rightarrow \emptyset, \text{if } [p]$

⁴⁴ Nørgård-Sørensen (2011: 54)も少なくとも -ov と -ej のどちらが用いられるかは語幹の末尾子音によって決まるとしている。

⁴⁵ ただし、ロシア語の名詞の屈折タイプには他にも *имя* タイプ、*путь* タイプ、のように上記の屈折タイプとは異なるもの、あるいは不変化タイプなど上記の屈折タイプとは異なるものがある。これら(不変化は除く)が上記いずれかのタイプのある種の変種なのか、それともそれ以外の何らかのタイプに属するのか、については議論がある。しかし、これらがいずれのタイプに属するものであっても(考えられるのは第3変化)、あるいはこれらが語彙的な特異性として説明されるべきであっても、以下の各節で見るように、本稿の議論に重要なのは「Iに属するか」、「IIに属するか」、それとも「それ以外か」であって、屈折タイプIとII以外については「それ以外」として処理したとしても議論上は特に問題とならない。従って、これらが属する正確な屈折タイプが何かについては本稿では議論しないこととする。この点は数詞の *сто* や *сорок* のようなやはり上記3つの屈折タイプとは異なるものに関しても同様でもある。

3. 主語・述語の一致

3. 主語・述語の一致

典型的 NP を主語とする場合，文の述語は主語 NP と同じ一致素性を持ち，述語 (及び AM) の一致は一義的に決まる．例えば，以下の例で述語動詞 *шла* に他の一致形態はあり得ない：

- (1)(...)молодая женщина шла по улице(...)
young-nom.f woman-nom.f go-pa.f along street-dat
「若い女性が通りを歩いていた」 (НКРЯ 2021.09.01)

一方，非典型的名詞句には，例えば以下の QP 主語の場合のように，一致が一義的に決まると言う原則から逸脱するものがある．

- (2)Миллион россиян посетило/посетил/посетили Америку.
million-nom.m Russian-gen.pl visit-pa.n -pa.m -pa.pl America-acc
「100万人のロシア人がアメリカを訪れた」 (匹田 2016: 366)

QP が主語の場合，述語は最大で 3 通りの一致を可能とするが，どのような一致の形態的パターンが何種類可能かは Q によって異なる．本章ではそれぞれの Q ごとにどのような一致パターンが何種類可能かを明らかにし，そしてそれらはどのようなメカニズムによって可能とされているかを明らかにすることを目的とする．

3.1. QP 主語に対する述語の 3 つの一致パターン

前述のように QP を主語とする述語には最大でその一致のパターンが 3 種類あり得るが，以下の例に見るように Q によってその可能な一致のパターンは異なっている．

- (3)(a) 「1」(N との一致)

Один студент пришел.
one-nom.m student-nom.m come-pa.m
「1人の学生が来た」 (匹田 2016: 365)

- (b) PcQ と HQ (複数，中性での一致)

Пришли / Пришло пять студентов.
come-pa.pl come-pa.n five-nom student-genq.pl
「5人の学生が来た」 (匹田 2016: 362)

- (c)(=2) NQ (複数，中性，Q との一致)

Миллион россиян посетило/посетил/посетили Америку.
million-nom.m Russian-gen.pl visit-pa.n -pa.m -pa.pl America-acc
「100万人のロシア人がアメリカを訪れた」 (匹田 2016: 366)

上の例で，(a)では Q として「1」が使われているが，この場合，述語は N と一致して

3. 主語・述語の一致

いる。すなわち、Q が「1」の場合、述語は常に主要部名詞 N と一致し、他の一致パターンはない。「1」の場合、述語は常に N と同じ特徴を示し、Q の *один* 自体も N に形態的に通常の AM と同じように一致する。また「1」は格付与も行わないことなども考えると、少なくともこれらの点に関しては、「1」は通常の AM と同じ振り舞いを見せられていると考えて問題無いようである。

また、(b)の Q として「2」～「100」(=PcQ と HQ)が用いられている場合、述語は複数形、中性形の 2 種類の一致が可能である。

さらに(c)は「1,000」以上(=NQ)の場合であるが、述語は複数形、中性形に加えて Q との一致という 3 種類の一致が可能である。上の例では *миллион* 「100 万」は男性なので *пришел* が男性形となっている。これが *тысяча* 「1,000」だと性が女性なので動詞の過去形は以下の様に女性形になる。

(4) На то была тысяча причин(...)
on that be-pa.f thousand-nom.f reason-gen.pl
「それに対しては 1,000 の理由があった」 (НКРЯ 2021.09.02)

さらに、これらの QR が主格環境にあり、かつ Q *миллион* 「100 万」は通常の第 1 変化の男性名詞と同じ、*тысяча* 「1,000」は通常の第 2 変化の女性名詞と同じ主格の形態を示していることを考えると、これらの動詞の形態は Q に一致していると考えて問題無いだろう。

なお、上記の例は全て動詞が過去時制なので単数では性のみ、複数では数のみ¹が形態的に示されているが、ロシア語の動詞は非過去時制では形態的に性・数ではなく人称・数が示される。そのため、例中の過去の動詞が複数で一致する例は非過去では 3 人称複数(a)に、中性で一致する例は 3 人称単数(b)になる。

(5)(a)(...) в двух комнатах живут пять человек. (НКРЯ 2021.03.06)
in two rooms live-pr.pl.3 five-nom person-genq.pl
「2つの部屋に 5 人が暮らしている」 (過去なら複数形)

(b)(...) у вас выйдет пять книг(...) (НКРЯ 2021.03.06)
at you go_out-pr.sg.3 five-nom book-genq.pl
「あなたのもとで 5 冊の本が出る」 (過去なら中性形)

これらの 2 つの述語の形態のバリエーションはしばしば「複数」と「単数」として言及される (例えば、Граудина и др. 1976, Crockett 1976, Розенталь 1998, Бельчиков 2008 など) が、これはややラフで不正確な言い方である。なぜなら、QR を主語とする文の述語が単数形で一致を示すのは(2)や(4)のように NQ を含む文では Q に一致する形態もあり得るからである。そこで以下、QR 主語との過去の場合の中性の一致と非過去の場

¹ ロシア語は 2.4 で論じたように複数においては性の対立が消失する。グロスなどで性が記されていれば数は単数であることを含意する。

3. 主語・述語の一致

合の3人称単数での一致を n.sg.3 とまとめ、過去での複数的一致と非過去の3人称複数での一致を pl.3 とまとめて略記することとする。

述語の一致が一義的に決まる「1」や NQ を含む QP における Q との一致の場合とは異なり、これらの PcQ 以上の数値を表す Q を含む QP を主語とする述語に見られる pl.3 と n.sg.3 の形態に関してはさらに議論する必要がある。

まず、pl.3 による一致はしばしば「意味的一致」と呼ばれており(Виноградов 1972: 377, Рознеталь и др. 1995: 151, Белошапкова 1997: 634, Розенталь 1998: 227, Comrie & Stone 1978: 110 など)、これは通常述語の一致の controller になる主格名詞(句)がなくても、QP が表している意味が複数の名詞(句)に相当する複数の対象を表しているため、複数での一致が生じるとする考え方である。つまり、意味的な条件によって引き起こされると考える。なお、この中でも Белошапкова ред. (1997: 634)はこのような一致を「意味的」とすることをロシア語文法の「伝統」的な見方であるとしている。

一方、Corbett (1983: 219-220), Babby (1987: 106-107)などは、pl.3 による述語の一致は N との一致であり、また n.sg.3 での一致は一致ができないため生じるデフォルトの一致形であるとしている。

(6)(=3b) Пришли / Пришло пять студентов.
come-pa.pl come-pa.n five-nom student-genq.pl
「5人の学生が来た」 (匹田 2016: 362)

上の例の pl.3 の述語 *пришли* は N *студентов* が複数であるため、これに一致して複数になっていると考える。一方 n.sg.3 の述語 *пришло* は N が属格であるため、通常の主格名詞との一致が不可能である。そのため、デフォルトの一致が生じているとしている。いわば、こちらの考え方は上記の様に意味的条件によって一致が引き起こされるのではなく、形式的な条件によって述語の一致が引き起こされていると考えている²。

次節ではまず意味的一致か形式的な一致か議論する。

3.2. 意味的一致か形式的な一致か？

QP を主語とする述語の pl.3 での一致は Виноградов (1972), Рознеталь и др. (1995), Белошапкова (1997), Розенталь (1998), Comrie & Stone (1978)などに見られるようにしばしば「意味的」な条件で行われる一致であると指摘される一方、Corbett (1983), Babby (1987)などの「形式的」な条件で N と一致しているとする考え方もあることは前

² ここでは、これらの2つの一致のバリエーションが意味的・用法的にどのように使い分けられているかを問題とはしていない。問題としているのは、同じ pl.3 の一致を取っている場合、意味的条件説では「指示している意味内容が複数の対象だから」と考え、形式的条件説は「複数の N があるから」と考えているという違いである。2つの一致のバリエーションの使い分けについては今後の課題としたい。

3. 主語・述語の一致

節で述べた。

しかし、一見ただけでもどちらの考え方にもそれなりに問題があることがわかる。例えば、Timberlake (2004: 352)は集合的な意味を持たない集合名詞 (collective noun)を主要部とするNPが主語となっても、ロシア語は英語と異なり、述語がpl.3の一致を行うことはないことを指摘している³。

(7)The committee believe/believes.

「委員会は信じている」(Corbett 1983: 1)

(8)Команда была достаточно сильна и хорошо подготовлена.

team-nom.f be-pa.f enough strong-f and well prepared-f

「チームは十分強くよく準備されていた」(Timberlake 2004: 352)

このことから、少なくともロシア語の場合、pl.3による一致を引き起こすには単に「意味的に」複数の対象物を指示しているだけでなく、Qを含む必要があると考えられ、単純に「意味的な一致」と断じるのには慎重さが必要であることを感じさせる。

一方、形式的にNと一致しているとも考えるにもそれなりに問題はある。

上述のように Corbett (1983: 219-220), Babby (1987: 106-107)は、pl.3による述語の一致素性はNに由来するものであるとしているが、では、何故(数量)属格の名詞と一致できるのか？例えば、属格の主語が見られるものとして他にいわゆる否定属格の構文がある。

(9)Студентов не было.

student-gen.pl not be-pa.n

「学生たちはそこにいなかった」(HKPЯ 2021.09.04)

こちらはQP主語の場合と異なり、述語の一致にpl.3はあり得ず、必ずn.sg.3に一義的に決まる。この違い、すなわちQP主語の場合なぜ2種類の一致パターンが可能なのかについて Corbett (1983), Babby (1987)はいずれも、否定属格の主語名詞句には属格以外の格がないが、QPの場合は主格と(数量)属格が混在していることに理由があるとしている。しかし、いずれにせよ、正確に議論する必要がある。

また、Corbett (1983), Babby (1987)はいずれもn.sg.3による一致は一致できないことによるデフォルトの形態であると主張している。一方で Corbett & Fraser (2000)が以下の様に述べる通り、デフォルトの形態はいわゆる「最後の手段 (last resort)」的な性質を持っているものと広く考えられている。

(10) the default is the last thing you get to. (Corbett & Fraser 2000: 71)

³ 英語のこの手の集合名詞については、例えば Quirk et al. (1972)や Huddleston & Pullum (2005)などの参照文法の他 den Dikken (2001), Sauerland & Elbourne (2002)などを参照。Quirk et al. (1972: 190)と Sauerland & Elbourne (2002: 289)には不完全ではあるものの、これらの名詞のリストがある。

3. 主語・述語の一致

「デフォルトは到達しうる最後のものである」

確かに、(9)では他に一致することができないので「最後の手段」としてデフォルトの形態が選択されたと言うことで問題は無い。では、QP 主語の場合、他の形態的手段が可能であるにもかかわらず、何故「最後の手段」を取ることがあり得るのであるか？つまり、この場合のデフォルトは「最後の手段」には見えない。この疑問に答える必要がある。

さらに、これらの最大で3種類ある一致のバリエーションを1.3.1.で示した数詞の連続体に当てはめると、以下の様になる。

(11)

		形容詞的(dependent) ← → (head)名詞的						
		1	2	3,4	5	100	1,000	100万
(viii)	述語の pl.3 での一致	+						
(ix)	述語の n.sg.3 での一致	-	+					
(x)	Q との一致	-				+		

この連続体で、n.sg.3 つまりデフォルトでの一致が認められるのは図の右側に寄っているとすることは、QP 主語がデフォルトの一致を認めるということは Q がより「名詞的」な性質を持っているということを含意するのだろうか？この問題も検討する必要がある。

以下、本節ではまず複数形での一致が「意味」か「形式」かを議論する。

3.3. 数量的集合名詞

pl.3 による述語の一致が意味的条件で引き起こされるものなのか、あるいは形式的に引き起こされるのかを議論するために、一点考慮しなければならない問題がある。ここまで議論の対象としてきた Q は全ていわゆる個数詞である。個数詞はその性質上、従える N が全て可算名詞であり、かつ「1」以外の場合その意味内容から複数形の名詞に従えることになる。すなわち、「個数詞+N」からなる QP の場合、N は必然的に複数形になる⁴。したがって形態的には必ず複数形で、意味的にも常に複数の対象物を指示することになり、このままでは述語の pl.3 の一致が意味的条件によるのか形式的条件によるのかが判然としないわけである。そこで、不可算名詞も従えることができる Q として、数量的集合名詞(Quantificational collective noun, QCN)を本節で議論に加え当該問題への手がかりとする。

例えば *ряд*「列, 多く」, *масса*「塊, 大量」, *большинство*「大多数」, *часть*「部品, 一部」などの一部の集合名詞は数量的意味で用いられている場合(2 つ意味を示したものはその後者)、すなわち数量詞的に用いられている場合、属格の名詞に従えその量を表すことがある。

⁴ただし、Q が PcQ の場合、N は単数形になると一般にされている。この問題については4.で議論して実際には単数ではないと結論づける。

3. 主語・述語の一致

- (12)(a) ряд ученых
series-nom.m scholar-gen.pl
「多くの・一連の学者」
- (b) большинство студентов
majority-nom.n student-gen.pl
「大多数の学生」
- (c) часть мужчин (НКРЯ 2021.09.11)
part-nom.f man-gen.pl
「一部の男性」

通常の典型的 NP であれば述語は主要部と考えられるこれら QCN に一致するはずであるが、QCN を含むこれらの NP, すなわち QCNP を主語とする場合、述語は QCN と一致し単数形となる場合と「意味的に」複数形で一致する場合の両方のパターンが可能であることは、一般的な参照文法を含む多くの文献で指摘されている (例えば: Виноградов и др. 1960, Виноградов 1972, Граудина и др. 1974, Barnetová et al 1979, Шведова и др. 1980, Кохтев & Розенталь 1984, Розенталь и др. 1995, Белошапкова 1997, Розенталь 1998, Comrie and Stone 1978, Timberlake 2004 など参照).

- (13)(a) Ряд экспертов считает, что (...)
series-nom.m expert-gen.pl consider-pr.3.sg that
「多くの専門家が(...)と考えている」 (НКРЯ 2021.02.21)
- (b)(...) ряд клиентов были вынуждены прибегнуть и к сокращению сотрудников.
series-nom.m client-gen.pl be-pa.pl forced-pl resort-inf also to reduction employee-gen.pl
「多くの顧客が従業員の削減という手段にも訴えざるを得なかった」
(НКРЯ 2021.02.21)
- (14)(a) Туда пришла масса рабочих (...)
there come-pa.f mass-nom.f worker-gen.pl
「そこへ大量の労働者がやってきた」 (НКРЯ 2021.02.21)
- (b)(...) огромная масса дилеров торгуют древностями(...)
huge-nom.f mass-nom.f dealer-gen.pl trade-pr.3.pl antiquity-ins.pl
「莫大な数の業者が骨董品を扱っている」 (НКРЯ 2021.02.21)
- (15)(a)(...) большинство москвичей знает (...)
majority-nom.n Muscovite-gen.pl know-pr.3.sg
「大多数のモスクワ子は(...)を知っている」 (НКРЯ 2021.02.21)
- (b)(...) большинство знакомых говорят именно так.
majority-nom.n acquaintance-gen.pl say-pr.3.pl exactly so
「大多数の知人がまさにそう言っている」 (НКРЯ 2021.02.21)
- (16)(a) Большая часть спутников стала сопровождать свои планеты (...)
bigger-nom.f part-nom.f satellite-gen.pl start-pa.f accompany-inf self's planet-pl
「大部分の衛星が自分の惑星を回り始めた」 (НКРЯ 2021.02.21)

3. 主語・述語の一致

(b)(...) большая часть студентов учатся и живут в (...)
 bigger-nom.f part-nom.f student-gen.pl study-pr.3.pl and live-pr.3.pl in
 「大多数の学生が(...)で学び暮らしてる」 (НКРЯ 2021.02.21)

これらの例はいずれも QCN を含む QP で、それぞれ(a)は述語が単数形で一致しているが、あくまで QCN との一致なので n.sg.3 での一致とは異なる。また(b)はいずれも複数形で pl.3 での一致、すなわち「意味的一致」を示している。

Corbett (1978a, 1978b, 1978c)がロシア語の数量詞がより形容詞的なものから名詞的なものへと連なる以下の様な連続体を成していると捉えたことは 1.3.1. で見た。

(17)(=1-15) Corbett (1978b: 64, 1978c: 2)における数詞の連続体

	1	2	3, 4	5	100	1,000	100 万
(i) 名詞と数で一致する	+	-	-	-	-	-	-
(ii) 全ての格で格が一致する	+	-	-	-	-	-	-
(iii) 性で一致する	+	(+)	-	-	-	-	-
(iv) 有生性を表示する	+	+	+	-	-	-	-
(v) 自身の複数形を持たない	+	+	+	+	(-)	-	-
(vi) 一致する定語を持たない	+	+	+	+	+	-	-
(vii) 常に属格名詞を支配するわけではない	+	+	+	+	+	±	-

匹田(2007b, 2008)は QCN がこの連続体の右端に位置すると考えた。以下、これら7つの点に関して QCN がどのように振る舞うか、一つ一つ見てみよう。

3.3.1. QCN と 7 つの特徴

(i)N との数での一致：QCN はそれ自身の数があるため、(13)以下の例でも明らかなように N と数に関して一致することはない。例えば、(13a)では N *экспертов* は複数だが、QCN *ряд* は単数である。従って、特徴(i)に対する QCN の値は「-」である。

(ii)全ての格環境での格の一致：以下の例から明らかなように、QCN を含む QP においては格環境にしたがって格が変わるのは QCN のみであり、N は全ての格環境で属格であり、両者は格で一致しない。このことは NQ と同様に QCN が付与する格が数量属格ではなく通常の属格であることを意味する。

(18)(a)(=13a)主格環境

[_{nom} Ряд экспертов] считает, что (...)
 series-nom.m expert-gen.pl consider-pr.3.sg that
 「多くの専門家が(...)と考えている」 (НКРЯ 2021.02.21)

(b)対格環境

(...)эта модель имеет [_{acc} ряд недостатков](...)
 this-nom.f model-nom.f have-pr.3.sg series-acc.m defect-gen.pl
 「このモデルには多くの欠陥がある」 (НКРЯ 2021.02.22)

3. 主語・述語の一致

(c) 属格環境

(...)в решении [_{gen} ряда народнохозяйственных задач] (...)
in solution series-gen national_economy-A.gen.pl problem-gen.pl
「一連の国民経済の問題の解決のため」 (НКРЯ 2021.02.22)

(d) 処格環境

В [_{loc} ряде эпидемиологических исследований] отмечается, что (...)
in series-loc epidemiological-gen.pl research-gen.pl be_noticed-pr that
「様々な疫学調査において(...)が指摘された」 (НКРЯ 2021.02.22)

(e) 与格環境

(...)такое решение отвечает [_{dat} ряду требований] (...)
such decision answer-pr series-dat request-gen.pl
「このような決定は一連の要求に応えるものだ」 (НКРЯ 2021.02.22)

(f) 具格環境

Однако мы сталкиваемся с [_{ins} рядом трудностей] (...)
however we-nom encounter-pr.1.pl with series-ins difficulty-gen.pl
「しかし我々は多くの困難に直面する」 (НКРЯ 2021.02.22)

いずれの格環境においても N は複数属格形であり、格が一致することはない⁵。従って特徴(ii)に関する QCN の値は「-」であり、2.3.2.でみた NQ の場合と同様に QCN の付与する格は構造格の数量属格ではなく、語彙格である通常の属格である。

(iii)N との性の一致：QCN は *ряд* なら男性、*масса* や *часть* なら女性、*большинство* なら中性と、全て通常の名詞と同様にそれ自身が本来的に文法性を持っている。従って、N と性に関して一致することはあり得ず、特徴(iii)に関する QCN の値は「-」である。

(iv)N との有生性の一致：以下の例は全て N が有生名詞であるが、QCN は無生名詞としての対格形になっている。つまり、QCN はそれ自身の有生性に関する素性[in]を持っており、N と有生性に関して一致することはない。従って特徴(iv)に関する QCN の値は「-」である(有生性の一致についての詳細は 5.を参照)。

(19)(a)(...) [_{acc} основную массу жителей] составляют представители
main-acc.f mass-acc.f inhabitant-gen.pl form-pr.3.pl representative-nom.pl
ОДНОГО ЭТНОСА.
one_race-gen
「住民の大多数を構成するのは一つの民族の人たちである」 (НКРЯ 2020.03.02)

(b)(...)они составляли [_{acc} подавляющее большинство переселенцев] (...)
they-nom form-pr.3.pl overwhelming-acc.n majority-acc.n immigrant-gen.pl

⁵ 属格の場合は N の属格は QCN によって与えられているものか格環境によって与えられているものかは一見ははっきりとしないが、仮に属格の場合だけ格環境によって与えられる属格が N にも及んでいると考えると、「何故属格環境でだけ」という問題が生じる。とくに理由がなければ、それよりも他の格環境の場合と同じように QCN による付与と考える方が合理的であろう。

3. 主語・述語の一致

「彼らは移民の圧倒的多数を構成していた」 (НКРЯ 2020.03.02)

(c) Сотрудники полиции (...) намерены задержать [acc ряд руководителей] (...)
worker-nom.pl police-gen intend-pl arrest-inf series-acc leader-gen.pl

「警察は様々な指導者を逮捕するつもりだ」(НКРЯ 2021.09.14)

(v)自身の複数形を持たない：QCN は基本それぞれが通常の名詞と同じ屈折を行う、それ故、*масса* は *массы*, *ряд* は *ряды* というふうに通常の名詞と同様に複数形を作ることが可能である。

ただし、集合名詞は基本的に不可算名詞であるため、QCN は複数形の場合、多くは数量的な意味を表さない。

(20) Справа ряды сейфов (НКРЯ 2021.09.14)

on_the_right row-nom.pl safe-gen.pl

「右手には金庫の列がある」

しかし、以下に示す例のように複数形でありながら数量的な意味を表していると思われる例も無いわけではないようだ⁶。

(21)(...) говорилось об использовании огромных масс заключённых

was_talked about utilization huge-gen.pl mass-gen.pl prisoner-gen.pl

「膨大な囚人を利用することについて語られた」 (НКРЯ 2021.09.14)

以上から、種々検討しなければならない問題はあるとしても、少なくとも形態法上は QCN はそれ自身の複数形を持っていると考え、特徴(v)の値は「-」であるとする。

(vi)自身に対する一致定語を持たない：((19a, b)の例を見ると QCN に一致する一致定語 *основную*「基本的・主要な」、*подавляющее*「圧倒的な」がある。このように QCN は自身に対する一致定語を持つことがある。従って、特徴(vi)の値は「-」となる。

(vii)全ての格環境で複数属格の N を支配するわけではない：これは特徴(ii)の真反対、つまり常に格で一致することが形容詞的であるとしたら常に属格の N を支配するのは名詞的な特徴である。(18)の例文で見たように QCN を含む QP は全ての格環境で変化するのは QCN のみで N は常に属格形である。従って特徴(vii)の値は「-」であ

⁶ また Зализняк (2008: 68, 447)は *большинство* の複数形は理論的に想定されたものであり、実際に使われることはほぼ無いとしている。ロシア語ナショナルコーパスでは *большинство* の複数形は少数ではあるものの確認できる。

(i) Нужно говорить не об одном, а о нескольких «большинствах» (...)

necessary talk-inf not about one but about some-loc.pl majority-loc.pl

「一つではなくいくつかの『多数派』について語る必要がある」 (НКРЯ 2021.09.14)

ちなみに同様に QCN としての振る舞いを指摘される *меньшинство*「少数」に関しては、その語形成的な成り立ちが極めて類似しているのにもかかわらず、Зализняк (2008: 447)には複数形の有無についての指摘がない。

3. 主語・述語の一致

る。このことは QCN は NQ や通常の名詞と同様に数量属格[GenQ]ではなく通常の属格[Gen]の付与子であることを意味する。

Corbett (1978a, 1978b, 1978c)の連続体(17)の右端に QCN を加え、かつ特徴(i-iv)がそれぞれ形容詞的な特徴であり、(v-vii)を肯定文に書き換えたものが名詞的な特徴であることを考慮してまとめたものが以下の通りになる。ただし、形容詞的な特徴を示す場合の値は「a」、名詞的な特徴を示す場合は「n」とした。また、形容詞的な特徴を示さない場合は「n」、名詞的な特徴を示さない場合は「a」と便宜的に記すこととする。

(22)Corbett の連続体(拡大版)

		形容詞的(dependent) ← → (head)名詞的						
		1	2	3, 4	5	100	1000	100万
(i)	数の一致	a	n					
(ii)	全ての格環境で格の一致	a	n					
(iii)	性の一致	a	n					
(iv)	有生性の一致	a		n				
(v)	自身の複数形	a			n			
(vi)	自身に対する一致定語	a			n			
(vii)	全ての格環境で属格 N を支配	a			n			

結果として QCN はここに示した 7 つ全ての特徴において NQ と同じ振る舞いを示していることがわかる。

3.3.2. QCN と述語の一致

次に、Corbett (1978a, 1978b, 1978c)で議論されている 7 つの特徴に関わるもの以外の振る舞い、すなわち述語との一致のパターンを見てみよう。(3)で見たように Q によって QP を主語とする述語の一致のパターンは異なる。

(23)(=3)

(a) 「1」(N との一致)

Один студент пришел.

one-nom.m student-nom.m come-pa.m

「1 人の学生が来た」 (匹田 2016: 365)

(b) PcQ と HQ (pl.3, n.sg.3 での一致)

Пришли / Пришло пять студентов.

come-pa.pl come-pa.n five-nom student-genq.pl

「5 人の学生が来た」 (匹田 2016: 362)

(c) NQ (pl.3, n.sg.3 での一致, Q との一致)

Миллион россиян посетило/ посетил/ посетили Америку.

million-nom.m Russian-gen.pl visit-pa.n -pa.m -pa.pl America-acc

「100 万人のロシア人がアメリカを訪れた」 (匹田 2016: 366)

3. 主語・述語の一致

通常の AM と同じように振る舞う「1」の場合を考慮に入れないと、QP 主語と述語の一致には pl.3, n.sg.3, Q との一致の最大で 3 パターンがあり得るが、QCN の場合はどうであろうか。まず、(13-16)で見たように Q との一致と pl.3 での一致は可能である。

- (24)(=14)(a) Туда *пришла* масса рабочих (...)
there come-pa.f mass-nom.f worker-gen.pl
 「そこへ大量の労働者がやってきた」 (НКРЯ 2021.02.21)
- (b)(...) огромная масса дилеров *торгуют* древностями(...)
huge-nom.f mass-nom.f dealer-gen.pl trade-pr.3.pl antiquity-ins.pl
 「莫大な数の業者が骨董品を扱っている」 (НКРЯ 2021.02.21)

例文の(a)で述語動詞は Q と一致して述語は女性形で、(b)では pl.3 で一致している。

ただし、Виноградов и др. (1960: 518)は QCN を含む QP との述語の pl.3 での一致は「正しく無い(неправильным)」としている。しかしその一方で、Пешковский (1956: 187-188)は pl.3 での一致が「時折(изредка)見られる」としており、また Граудина и др. (1976: 25-26)は Q との一致の頻度が 79.07%に対して pl.3 での一致が 15.12%であるとしている。さらに Кохтев и Розенталь (1984: 150-151), Розенталь и др. (1995: 151), Розенталь (1998: 228-229), Timerlake (2004: 357), Бельчиков (2008: 237-238)など様々な文献が、用いられている条件によって pl.3 と Q との一致のどちらが好ましいかが決まるとしている。これらを考え合わせると、Виноградов (1956)の言及は多分に規範的なもので、記述的実態とはまた異なった説明であると考えられるべきであろう⁷。この2つの一致パターンの可否について Q ごとにまとめると以下の通りとなる⁸。

(25)

		形容詞的(dependent) ← → (head)名詞的							
		1	2	3,4	5	100	1,000	100万	QCN
(viii)	Q との一致	-					+		
(ix)	pl.3 での一致	-	+						

では、考え得るもう一つのパターンである n.sg.3 での一致は可能であろうか？

Виноградов и др. (1960: II-1: 518)は pl.3 の一致を「正しくない」としていたが、n.sg.3 での述語の一致についても同様に「正しくない」と述べている。一方、Граудина и др.

⁷あるいは通時的な変化が起きているかも知れない。ここで挙げた文献のうち、出版年が新しいものほど pl.3 での一致を認める傾向があるように見える。ちなみに、Пешковский (1956)の初版の出版は 1914 年である。

⁸「1」の特徴 (ix)については pluralia tantum の N を伴った際に述語が複数形で一致することがありうるが、これは通常の形容詞が一致定語となっている場合と同様に完全に N に一致するので別の現象と捉え、値を「-」とした。

3. 主語・述語の一致

(1976: 26)は pl.3 での一致については否定的な判断は述べることがなかったものの、n.sg.3 の一致については「標準語の規範からの逸脱(отступление от литературной нормой)」と否定的な評価を加えている。さらに Граудина и др. (1976)の改訂版である Граудина и др. (2001: 34)には初版になかった「正しくない (неправильно)」という表現を付け加えている。また、匹田 (2007)におけるテュービンゲン大学のロシア語コーパスを利用した調査でも、n.sg.3 の一致は確認できなかった⁹。

一方、Crockett (1976: 390-391)はこのような n.sg.3 の一致に関して以下の例を示した上で「特異な例ではない (do not represent isolated instances)」とし、だからこそ Виноградов и др. (1960)もこの種の例に言及しているとしている。

(26)(a) Часть работников переведено.

part-nom.f worker-gen.pl be_transferred-n

「一部の労働者が移された」

(b) Комиссией отмечено ряд недостатков.

commission-ins be_noted-n series-nom deficiency-gen.pl

「委員会によって様々な欠陥が指摘された」

また、テュービンゲン大学のロシア語コーパスよりもはるかに大規模なロシア語ナショナルコーパス¹⁰でわずかであるが例が確認できた。網羅的な調査はできていないが、ряд, масса, часть について以下の形式に合致するものを検索した¹¹：

(27)(a) QCN + Ngen.pl + Vpa.n

(b) Vpa.n + QCN + Ngen.pl

ヒットしたものから、間にピリオドが挟まり込んでいるなど無関係な用例を排除したところ、結果は以下の数である。

⁹ テュービンゲン大学のロシア語コーパスは、ウプサラ・コーパスと同大学のプロジェクト B1 が作成したいくつかのロシア語コーパスが複数同時にオンライン上で検索できた

(<https://www.lingexp.uni-tuebingen.de/sfb441/b1/en/korpora.html>). ただし 2021 年現在同サイトでの検索は既にできなくなっている。同コーパスについては小林潔 (2003), 雲越 (2005)が詳しい。

¹⁰ テュービンゲン・コーパスの中核となるウプサラ・コーパスは 100 万語

(<https://snd.gu.se/en/catalogue/study/ext0071> による)に加えて、ロシア語インタビュー記事が 288,423 語 (小林潔 2003: 71)なのに対し、ロシア語ナショナルコーパスは 1,013,264,882 語 (2021.09.16 現在。 <https://ruscorpora.ru/new/corpora-stat.html> による)である。

¹¹ большинство などの中性の QCN は Q との一致と n.sg.3 での一致の区別がつかないので、検索からは除外した。

3. 主語・述語の一致

(28)

	述語動詞[pa.n]
<i>ряд</i>	6件
<i>масса</i>	8件
<i>часть</i>	3件

試しに *ряд* について同様に QCN + Ngen.pl + Vpl と QCN + Ngen.pl + Vm (語順は述語動詞が QP に後続するもののみ) で検索してみるとそれぞれ 90 件, 182 件あった。このことから上記の数字が少ないことがわかる。

しかも, *ряд* を含む QP が主語となる中性形の述語動詞は最も新しい例で 1968 年のものが 1 件あっただけで, 残りは全て 1930 年代以前といずれも比較的古いものであった。*масса* の場合だと 2011 年, 1999 年, 1953 年のものが 1 件ずつ見られたが, 残りはやはり 1930 年代以前, *часть* に関しては全て 1930 年代以前の例のみであった。このことと Граудина и др. (1976) から Граудина и др. (2001) にかけてこの手の n.sg.3 での一致が「正しく無い」という表現が付け加えられたことを考えると, 通時的に変化が生じた(つつある)のかも知れない。

また, NQ の *тысяча* と *миллион* についても同様の n.sg.3 の一致のヒット件数を調べると, 数は同様に少ないものの, 比較的新しい例も見られる。

以上の観察と上記の様に, 様々な文献が QCN を含む QP を主語とした述語の n.sg.3 での一致の可能性に関して否定的な見解を示していることを考え合わせ, 本稿では QCN を含む QP が主語の場合, n.sg.3 での一致は不可能であるとして議論を進める。これまでに見た述語の一致のパターンをまとめると以下の通りである:

(29)

		形容詞的(dependent) ← → (head)名詞的							
		1	2	3,4	5	100	1,000	100万	QCN
(viii)	Q との一致	-					+		
(ix)	pl.3 での一致	+							
(x)	n.sg.3 での一致	-	+					-	

ただし, *масса* には *ряд* や *часть* と比べて比較的新しい用例が見られることから, 語彙的に振る舞いの違いがあることも十分あり得る。またデータによって明確な可否が得られない上に通時的な変化が起りつつある可能性がある。従って, この後の議論は n.sg.3 の一致の可否の違いができるだけ少ない違いで説明できるように説明理論の構築を行う必要があると思われる。

この n.sg.3 での述語の一致に関連しては議論しなければならない問題がある。

3.1. で言及したように Corbett (1983), Babby (1987) などがロシア語の述語の n.sg.3 での一致をデフォルトの一致としている一方で 3.2. で触れたように Corbett & Fraser

3. 主語・述語の一致

(2000)は デフォルトは「最後の手段」であり、他が手詰まりになったときはじめて採用される方策である。このような考え方は直感的にも無理のない考え方だと思われる。

しかし、3.2.でも述べたように(9)の否定属格の場合と異なりなぜ他の一致パターンが可能であるにも関わらず「最後の手段」をとることがあり得るのか？これが1つ目の疑問点である。

また、(9)で見たように否定属格の主語の場合述語の一致は デフォルトの n.sg.3 のパターン以外あり得ないが、「2」以上の QP が主語の場合はそもそも何故複数の一致パターンが可能なのか？Corbett (1983), Babby (1987)は否定属格の場合は NP 中の格が属格しか無いのに対して、QP の場合は主格と(数量)属格が混在しているためである、としているが、では複数の格の混在が何故複数の一致のパターンを可能とするのであろうか？これが2つめの疑問である。

また、(29)で見た「連続体」の中で、なぜ デフォルトはこの位置にあるのか？つまり、なぜ連続体上の中央にデフォルトがあるのであろうか？「1」は デフォルトより形容詞的と言えるのか？QCN はデフォルトより名詞的なのだろうか？これが3つめの疑問である。

Q と一致すること(viii)が Q が主要部名詞的な性質を有していることを意味するというのはわかるが、pl.3 での一致(ix)はどうであらうか？pl.3 での一致が N が複数であることによって引き起こされるのであれば、それは N が主要部的振る舞いを示す、すなわち Q が従属部的に振る舞っていることを意味すると言えるが実際はどうであらうか？これが4つめの問題である。

以上の疑問点をまとめると以下の通り：

(30)

- (a) なぜ複数の一致のパターンが可能なのか？
- (b) 他の一致パターンが可能なのに何故「最後の手段」の デフォルトが可能なのか？
- (c) 連続体上でなぜ デフォルトがここに位置するのか？
- (d) pl.3 での一致は「形式的な一致」なのか？

次節ではまずこれらのうちの4つめの問題 (d)を議論し、pl.3 での一致が意味ではなく形式的に引き起こされるもので、N が複数でなければ起こらないものと結論づける。

3.3.3. pl.3 での一致が「形式的な一致」であること

QCN が連続体上の他の Q と異なる点として、他は今のところ全ていわゆる個数詞であるため、可算名詞しか伴うことができないのに対して、QCN は不可算名詞も伴

3. 主語・述語の一致

うことができるという点を指摘した。つまり、可算名詞は形態的に数の対立があるので QP の N として用いられれば意味的な理由から複数形でこの位置に入るしかあり得ないのに対し、不可算名詞は数の形態的対立がないため、複数形でこの位置に入ることにはあり得ない。言い換えると、QCN は単複両方の N を伴うことが可能と言うことになる。この際、N の数が述語の一致形態に影響を与えるのであれば、述語の pl.3 での一致が意味と言うより形式的条件によって決まることがわかる。

QP と述語の pl.3 での一致について、Babby (1987) や Corbett (1983) など N との一致としている。つまり、pl.3 で一致するかどうかは N によって決まると言うことで、形式的な一致と考えているわけである。しかし、これだけでは何故否定属格で不可能な pl.3 の一致が可能なかはまったく不明である。

一方、Corbett (1979a: 58) は複数形の N を伴う場合は、pl.3 の一致も可能だが、不可算名詞で単数形の N を伴うと pl.3 の一致は不可能だと指摘している。

(31)(a) Большинство приглашенных не явилось / явились. (Corbett 1979a: 58)

majority-nom.n invitee-gen.pl not appear-pa.n appear-pa.pl

「招待された人は大多数が現れなかった」

(b) Большинство населения собралось / *собрались. (Corbett 1979a: 58)

majority-nom.n inhabitant-gen.sg gather-pa.n *gather-pa.pl

「住民の大多数が集まった」

この指摘は pl.3 での一致が複数形の N の存在によってその可否が決まる、つまり形式的に条件付けられていることを明言している。また、Розенталь (1998: 228) は述語の一致形態が N の有無とその数で決まるとしている (Розенталь 1998 に従って匹田がまとめたもの)：

(32)(a) QCN + N なし → Pred[単数] / Pred[複数]

(b) QCN + N[単数] → Pred[単数]

(c) QCN + N[複数] → Pred[単数] / Pred[複数]

(a) は QCN が N を従えていない場合であるが、その場合は述語は単数、つまり Q との一致が可能であり、かつ pl.3 の一致も可能としている。ただし、pl.3 になるのは QCN の後に複数の N が省略されている場合のみであるとしている。

また、(b) では単数の N を従えている場合は述語は単数のみ可能としている。これは上記 Corbett (1979a) の指摘と等しい。

さらに(c)では QCN が複数形の N を伴う場合、Q との一致と pl.3 の一致が両方も可能としている。

Розенталь (1998) も pl.3 での述語の一致は N が複数形の場合のみ可能、という点で Corbett (1979a) と等しい。ただし、Q との一致は N が複数であろうと単数であろうと、あるいは N が存在しなくても可能であるとしている点で Corbett (1979a) の指摘より情

3. 主語・述語の一致

報が多いことになる。また、N が明示的に存在しなくても複数形の N が省略された場合のみ pl.3 の一致が可能であるという指摘は興味深い。つまりやはり複数形の N の存在が pl.3 での一致には必要だと言うことである。

これらの指摘を受け、匹田 (2007)ではチュービンゲン・コーパスの検索システムを利用していくつかの QCN についてどれだけの例があるか調査を行ったところ、以下の結果になった。

(33) большинство「大多数」の検索結果(件数)

	N _[gen.pl]	N _[gen.sg]	ø
Pred _[sg]	153	19	70
Pred _[pl]	260	0	30
計	413	19	100

(34) ряд「一連, 多数」の検索結果(件数)

	N _[gen.pl]	N _[gen.sg]	ø
Pred _[sg]	118	0	0
Pred _[pl]	26	0	0
計	144	0	0

(35) большая часть「大部分」, значительная часть「かなりの部分」の検索結果(件数)

	N _[gen.pl]	N _[gen.sg]	ø
Pred _[sg]	68	56	9
Pred _[pl]	7	0	1
計	75	56	10

(36) множество「多数」の検索結果(件数)

	N _[gen.pl]	N _[gen.sg]	ø
Pred _[sg]	199	8	0
Pred _[pl]	30	0	0
計	229	8	0

(37) масса「多量」の検索結果(件数)

	N _[gen.pl]	N _[gen.sg]	ø
Pred _[sg]	126	4	4
Pred _[pl]	5	0	0
計	131	4	4

ここで重要なのは、N が単数の場合だけ絶対に述語が複数形になることはあり得ない、と予想されている、ということである。つまり N が複数形の場合、述語は単複両方が可能であるし、また N が顕在的に存在していない場合も複数形の N が省略されている可能性を考慮すれば、単複両方の一致の可能性が予想されるからである。pl.3 での述語の一致が形式的条件(=複数形の N の存在)によって引き起こされるとしたら、単数の N を伴う場合、述語の pl.3 での一致はあり得ない。

つまり、上の(33-37)の検索結果で太枠で囲んだ部分がゼロ件であれば、形式的一致と考える根拠となるが、調査の結果は当該の枠は全てゼロ件であった。以上の点から、本稿では以下、QP と一致する述語の形態は意味と言うよりは形式的条件によ

3. 主語・述語の一致

って引き起こされると考えて議論を進める¹².

3.4. 可能な一致のパターン

既に繰り返し言及しているように、QP を主語とした述語の一致には Q によって様々な可能性があり、「1」の場合、PcQ と HQ の場合、NQ の場合で可能な述語の一致のパターンが異なっている。

(38)(=3)一致の可能なパターン

(a) 「1」(N との一致)

Пришел один студент.
come-pa.m one-nom.m student-nom.m

「1人の学生が来た」 (匹田 2016: 365)

(b) PcQ と HQ (pl.3, n.sg.3 での一致)

Пришли / Пришло пять студентов.
come-pa.pl come-pa.n five-nom student-genq.pl

「5人の学生が来た」 (匹田 2016: 362)

(c) NQ (pl.3, n.sg.3, Q との一致)

Миллион россиян посетило / посетил / посетили Америку.
million-nom.m Russian-gen.pl visit-pa.n -pa.m -pa.pl America-acc

「100万人のロシア人がアメリカを訪れた」 (匹田 2016: 366)

それに加えて、QCN の場合も可能な述語の一致のパターンが異なっており、さらにこの場合は N が可算名詞か不可算名詞かでも可能なパターンが異なっていることを見た：

(39)(=31)

(a) 可算名詞の場合 (pl.3, n.sg.3 での一致)

Большинство приглашенных не явилось / явились.
majority-nom.n invitee-gen.pl not appear-pa.n appear-pa.pl

「招待された人は大多数が現れなかった」 (Corbett 1979a: 58)

(b) 不可算名詞の場合 (n.sg.3 での一致)

Большинство населения собралось / *собрались.
majority-nom.n inhabitant-gen.sg gather-pa.n gather-pa.pl

「住民の大多数が集まった」 (Corbett 1979a: 58)

このように多様な述語の一致のパターンの可能性に対して、以下の様な疑問が生じる：

¹²ただし、より規模の大きい НКРЯ で検索すると N が単数形でも述語が複数形となっている例が少数ながら見られる(この点は井上幸義, 秋山真一(いずれも pers.com.)の両氏からもご指摘を頂いている。頻度に偏りが見られることもあるのでこれにわかに形式的な一致を否定することにはならないが、意味的一致も完全に否定できないのかも知れない。事実の確認も含め今後の課題である。

3. 主語・述語の一致

(40)(=30)

- (a) なぜ複数の一致のパターンが可能なのか？
- (b) 他的一致パターンが可能なのに何故「最後の手段」の デフォルトが可能なのか？
- (c) 連続体上でなぜ デフォルトがここに位置するのか？
- (d) pl.3 での一致は「形式的な一致」なのか？

このうち (d)については 3.3.3.で、pl.3 での一致は形式的に条件付けられているものであると結論づけた。しかし、それ故に新たな問題が生じる。QP における N は「1」の場合を除けば、[Gen]か[GenQ]を与えられているが、ロシア語で述語に主語との一致を生じさせるのは通常は主格の NP である。なぜ主格以外の格を付与されている N との一致が可能なのであろうか¹³。一方、複数の N の存在が pl.3 の一致に必要な条件であることは上で確認できている。そこで(d)を新しい疑問に入れ替える必要がある。

(41)

- (a) なぜ複数の一致のパターンが可能なのか？
- (b) 他的一致パターンが可能なのに何故「最後の手段」の デフォルトが可能なのか？
- (c) 連続体上でなぜ デフォルトがここに位置するのか？
- (d) pl.3 での一致で述語は N からどのように素性を得ているのか？

以下本節の目的は、(a)「なぜ複数の一致のパターンが可能なのか？」、言い換えれば「どのようなシステムを想定すればこれらの様々なパターンが説明できるか」を中心的な問題と考え、その際これらの一致パターンは全て形式的な条件で引き起こされるものであるとの前提の元、(b, c, d)にも適切な答えを見つけることである。

3.4.1. 形式的な一致とする先行研究

既に触れたように Babby (1987)や Corbett (1983)などは QP の主語と述語の pl.3 での一致は N との一致であると考え、また n.sg.3 での一致は デフォルトの一致であるとしている。これらの考え方は、いずれの一致のパターンも意味的な条件によって可能とされているものではなく、形式的に決まっていると考えており、上記の結論を説明することができるものであるとも言えるかも知れない。しかし、決して十分なものではない。

まず、n.sg.3 の一致が デフォルトによるものであるとしたら、以下の様に他に可能な形態が存在しない否定属格の場合ならば理解することはできるが、それと異なり

¹³ Bailyn & Nevins (2008: 265)は、主格以外の主語との動詞の一致は QP の場合以外にはない、と断言している。

3. 主語・述語の一致

他の述語の形態が可能な QP 主語の場合、何故デフォルトでの一致が可能になるのか？

(42)Ивана не было там. (Corbett 1983: 219)

Ivan-gen not be-pa.n there

「イワンはそこにいなかった」

このデフォルトの持つ「最後の手段」としての性質に矛盾することになる点は既に 3.2. で言及した。

さらに, Babby (1987)と Corbett (1983)の主張は非常にラフな形で述べられたものであり, 具体的に一致のメカニズムには一切言及がない. 通常起こらないはずの主格以外の N と述語が一致することが何故可能なのか? どのようにして N の素性が述語にコピーされるのか? どのようなメカニズムでデフォルトでの一致が実現されるのか? これらの一致のメカニズムに関する疑問に対する答えは示されていない.

Babby (1987: 107)は, Corbett (1983)に比べると多少具体的であり, 現代ロシア語では以下の文の主語となっている QP の主要部は N の方であると考える:

(43)Пять бутылок разбились / разбились.

five-nom bottle-genq.pl break-pa.pl break-pa.n

「5本のビンが割れた」

(Babby 1987: 107)

そのため, pl.3 の一致が可能になると考えている. 一方, n.sg.3 の一致については以下の様に述べている.

(44) (...) if the speaker had difficulty identifying a noun assigned GEN case as the head of the NOM subject NP, then predicate agreement failed to take place. This resulted in NEUT SG verb morphology, which is the default form automatically marked on verbs in subjectless and impersonal sentences. (Babby 1987: 107)

「話者が属格を付与された名詞を主格の主語 NP の主要部と見なすことが難しい場合, 述語の一致は生じることができない. その結果として動詞の形態は中性・単数になるが, それは主語がない, あるいは無人称の文の動詞に自動的に表示されるデフォルトの形態である。」

しかし, このような考え方では上記の疑問に答えることにはならない. QP の主要部が N だと考えるとどのようなメカニズムで属格名詞が一致を引き起こすのかはまったく不明だし, またどのような場合に属格名詞だと主要部と見なされないのかも具体的には一切提示されていないからである.

また, これらの考え方は 2 つの形態的バリエーションのみ念頭に置いており, (38c)の NQP の場合のように 3 つの形態的バリエーションがある例については一切説明がない. このことは研究対象としてより多くの数量詞について議論するためには避けて通る

3. 主語・述語の一致

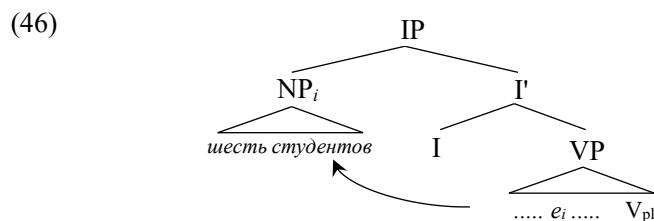
ことはできない問題である。

Pesetsky (1982)は異なるアプローチを試みている。Pesetsky (1982: 89)では HQP を主語とする述語に見られる2種類の一致を、以下に見るように主語となる句の範疇の違いによるものと考える：

- (45)(a)[_{QP} [Q шесть] [_N студентов]]
six students
 (b)[_{NP} [Q шесть] [_N студентов]]
six students
 「6人の学生」

ここで(a)で主語となる句を支配しているのはQPであり、(b)ではNPとなっている。そして、QPの場合は述語は一致せず、結果としてデフォルトの n.sg.3 の形態を取るのに対し、NPの場合は一致して pl.3 の形となると考えている。

Franks (1995)はこの考え方に対して更に理論的整備を進めているが、それによるとNPは格を必要とするため、主格が付与されかつ述語と一致を行うIPのSPECの位置に、以下に示すように移動する(図はFranks 1995: 119をもとに作成したが、本論の主旨に合わせて若干の単純化と修正を加えてある)¹⁴。



一方、QPはNPと異なり格を必要としないために、IPのSPECの位置に格を受け取るために移動する必要がなく、結果として述語との一致が起こらないため述語はデフォルトの n.sg.3 の形態となるとする。

Franks (1995)は更に、以下の例をこの考え方を支持するものとして示している：

- (47) Эти пять красивых девушек пришли / *пришло.
this-nom.pl five beautiful-genq.pl girl-genq.pl come-ra.pl come-ra.n
 「これら5人の女性がやってきた」

¹⁴ところで、この考え方は主格の付与と述語との一致を同じコインの裏表のように一つの現象と捉えている。匹田 (1995)は述語と一致することのない主格NPがいくつもあることを指摘することでそのやり方に異を唱え、この二つを別の操作と考えるべきと主張しているが、本稿ではこの点についてはこれ以上議論しない。ちなみにBabby (1986: 210)は主格の主語の付与を以下の様にある種のデフォルトの格と定義し、一致とは関係づけていない：

(i)Nominative Case Assignment
 A noun phrase that is not governed by a lexical category is assigned the nominative case.
 「語彙範疇に統率されない名詞句は主格を付与される」

3. 主語・述語の一致

すなわち、Qの前に複数主格形の指示代名詞などのAMがあるところの場合 pl.3 での一致だけが可能になり、n.sg.3 の一致は不可となる。Franks (1995: 112)はこの場合 pl.3 の一致のみが可能であるのは、指示代名詞の付加がNPのみに対して可能であり、QP に対しては不可であるから、として説明する。つまり、指示代名詞 *эму* が存在する以上、この句はQPではなくNPでなければならない。そしてNPの場合は述語は pl.3 の一致を行うから、と言う説明である。しかし、この考え方は「指示代名詞は NP にのみ付加が可能」といういかにも ad hoc な規定を必要としてしまうことは無視できない。(この問題に対する本稿での説明は7.で示す。)

また、QP と NP という 2 種類の構造の違いに述語の一致の形態を帰結させる考え方は、以下の 3 種類の一致が可能な NQ のパターンを説明することができない：

(48)(=38c)

Миллион россиян посетило/посетил/посетили Америку.
million-nom.m Russian-gen.pl visit-pa.n -pa.m -pa.pl America-acc
「100万人のロシア人がアメリカを訪れた」(匹田 2016: 366)

述語が男性形になっている場合は Q の *миллион* に一致していることは明らかであるが、この一致が行われる場合は上記の考え方だと当然 NP として IP の SPEC の位置に移動しなければ述語と一致することも主格を付与されることもできない。では、pl.3 での一致と男性形での一致はどのように選択されるのか？つまり、3 番目の一致について説明するためには、何か別の説明方法を考えなければならないのである。

以下、本章の残りの部分ではこれら3つの一致を全て説明できることを目指し、理論構築を行う。

3.4.2. 複数の格の存在

QP が主語となっている場合、述語の一致に複数のパターンが可能になるのに対して、同じ属格名詞が含まれている構文でも否定属格の主語を含む構文では述語はただ一つ n.sg.3 での一致以外はあり得ない¹⁵。

Corbett (1983: 219)と Babby (1987: 107)はこの違いは否定属格の例では NP 内にあるのは属格のみであるが、QP では主格の部分と(数量)属格の部分が両方あるからだ、と説明している。このような格のあり方の違いは 2.3.で概観した Babby (1975, 1980a, 1980b, 1984, 1985a, 1985b, 1986 1987), Freidin & Babby (1984)などで発展した格付与と

¹⁵ 否定属格はロシア語ではいくつかのパターンで現れる現象であり、この場合だと存在を表す文が否定文になると主語が[Gen]になり、対応する肯定文では Иван は[Nom]で述語はそれに一致する。

(i) Иван был там.
Ivan-nom.m be-pa there
「イワンはそこにいた」

それ故、否定文で[Gen]の *Ивана* が主語であると考えることにそれほど無理はないと思われる。

3. 主語・述語の一致

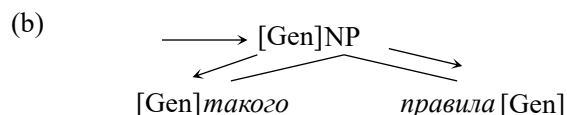
浸透の理論に基づいた理論体系でも問題無く予想ができる。

まず、否定属格の例から例を見てみよう：

(49)(a)(...)не было [такого правила] (...). (НКРЯ 2021.09.18)

not be-pa.n such-gen rule-gen

「このような規則はなかった」



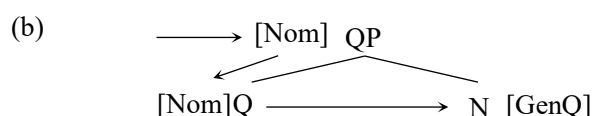
この場合、NP の頂点に属格 [Gen]が付与され¹⁶、それが下の節点に浸透して行く。頂点に格付与する以外の格付与は起こりえないので、他の格はありえない。

一方、QP の場合は、外部の格付与子から頂点に付与され可能なところに浸透する格と Q によって付与される[Gen]あるいは[GenQ]があり、それらが句の内部で混在することになる。例の場合では頂点に主格 [Nom]、Q から N に[GenQ]が付与される。

(50)(a)=(38b) Пришли / Пришло [пять студентов].

come-pa.pl come-pa.n five-nom student-genq.pl

「5人の学生が来た」 (匹田 2016: 362)



[GenQ]は 2.3.で見たように[Nom]の浸透を妨げるので、結果として頂点と Q には主格が浸透し、N は[GenQ]のままである。結果2つの格が句の中に混在していることになる¹⁷。

このようにして、QP の場合は句内部に複数の格が混在し、否定属格の場合は一つの格に統一されていると言うことは本稿の考え方で十分予測できることである。

ただし、Corbett (1983: 219)と Babby (1987: 107)は、具体的にどのような規則によって述語の一致の複数の可能性が保証されているのか、また Q による可能な一致のパターンのちがいなどについてほとんど説明をしていない¹⁸。以下、複数の格が混在す

¹⁶ この NP には平叙文であれば[Nom]が与えられるはずであるが、どのようなメカニズムで否定文で[Gen]になるのかは別途考えなければならないが、本稿では研究対象としない。

¹⁷ もちろん、この場合[Nom]は構造格なので[GenQ]に上書きすることはできないが、例えば具格 [Ins]のような語彙格であれば GenQ を書き換えてしまえるので格は一つに統一される。しかし述語との一致には関わらないのでここでは問題にならない。

¹⁸ Babby (1987: 107)は「話者が属格を与えられた名詞を主語 NP の主要部と捉えることができない場合、述語の一致が起こりえない」と述べ、それが結果としてデフォルトの形である n.sg.3 の

3. 主語・述語の一致

るQP主語の場合どのようにして複数のパターンの一致が可能になるのか考察する。

3.4.3. 一致の controller のあいまいさ

ロシア語において主語と述語の一致が存在することは当然のこととして広く認められている事実である(例えば *Виноградов и др.* 1960: II-1: 488, *Шведова* 1970: 548, *Шведова и др.* 1980: II: 242 など参照)。しかしその一方で、述語が何に一致しているのか、という点を厳密に考えると曖昧な点も多い。すなわち、伝統的にロシア語文法において主語と述語の一致が行われる際、その一致が行われる対象は主要部名詞と名詞句全体のどちらなのか(つまり、「主語」とは主要部名詞を指すのか、あるいは名詞句全体を指すのか)は、しばしば曖昧である。

例えば、*Баранов и др.* (1989)は以下の例を挙げながら、名詞句のうち主要部名詞 *звезды*「星」だけを主語であるとしている：

- (51)(a) *Задремали [звезды золотые].* (*Баранов и др.* 1989: 158)
doze_off-pa.pl star-nom.pl gold-nom.pl
「金色の星々がまどろみ始めた」

その一方で *Виноградов и др.* (1960: II-1)は以下の例を示し、(a)では主要部名詞だけが主語であり、(b)では名詞句全体が主語であるとしている。

- (52)(a) [*Долгая зимняя ночь*] *прошла незаметно...*
long-nom.f winter-nom.f night-nom.f pass-pa.f imperceptibly
「気づかぬうちに長い冬の夜が過ぎた」 (*Виноградов и др.* 1960:II-1: 369)
- (b) *Потом пришли [двое парней] (...)*
after_that come-pa.pl two-nom boy-genq.pl
「その後二人の青年が来た」 (*Виноградов и др.* 1960:II-1: 500)

また、*Боброва* (1999)は以下の例のうち、(a)は主要部名詞のみが主語、(b)と(c)では名詞句全体が主語であるとしている。

- (53)(a) *И глядят уныло [голые кусты].*
and seem-pr.3.pl despondent naked-nom.pl bush-nom.pl
「そして裸の藪は陰気に見える」 (*Боброва* 1999: 139)
- (b) *В кухню вошли [дед с матерью].*
into kitchen enter-pa.pl grandfather-nom with mother-ins
「キッチンにおじいさんとお母さんが入って来た」 (*Боброва* 1999: 141)
- (c) [*Каспийское море*] *мелеет с каждым годом.*
Caspian-nom.n sea-nom.n grow_shallow-pr.3.sg with every year
「カスピ海は年々浅くなっている」 (*Боброва* 1999: 140)

動詞の形態となる、としている。実用語学的には十分な説明かも知れないが、それだけでは上記(41)の疑問に答えるには不十分である。

3. 主語・述語の一致

これらの判断にはおそらくは、例えば述語の一致形態や概念的単一性など、著者に何らかの判断基準があった上で、どの部分が主語かを特定していると思われるが、少なくとも明確にはいかなる理由も述べられていないし、首尾一貫しているとも思えない。中には複数の一致パターンが可能なものもある。以下、本節では主語 NP と述語の一致はどのように決まるのかを明らかにすることを目指す。

3.4.4. いくつかの一致の controller の存在

3.4.4.1. 典型的 NP の場合

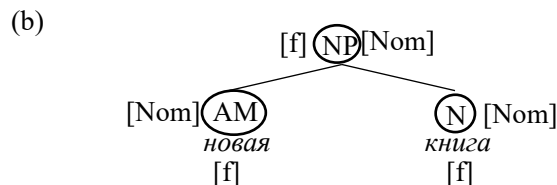
まず、上で言及した主語と述語の一致に関する疑問の一つ目を思い起こして頂きたい：

(54)(=41a) なぜ複数の一致のパターンが可能なのか？

匹田 (2007)はこの疑問に応えるために、NP 内で述語と一致するために必要な素性を持っている節点は全て一致のコントローラー(controller, 以下 Ctrl)になり得ると考えた。つまり、以下の例文において[]で示した主語 NP の内部にある全ての節点、すなわち AM, N 及びそれらを支配する NP が全て述語の一致の Ctrl になり得る(○で囲んだもの)：

(55)(a) [Новая книга] адресована студентам (...) (НКРЯ 2021.09.20)
new-nom.f book-nom.f address-pp.

「新しい本は学生たちに向けられたものである」



この例であれば、AM, N, NP 全てが N に由来し、一致するのに必要な素性[f]を持っているのでこれら全てが一致の Ctrl となり得る。そして、どれが Ctrl になっても典型的な名詞句の場合なら違いはない。全て同じ主要部名詞に由来する同じ一致素性を共有しているので¹⁹、どれが Ctrl であっても例文の通り述語 *адресована* は女性形となる。

ただし、NP 内の全ての節点が可能とは言え、2.3.5.で想定したように格境界(CB)より下にある要素から一致素性が出て来ることはない。それ故、以下の例で N によって属格を付与されている *Оруэлла* から一致素性が CB を越えて AM, NP, N'及び述語

¹⁹ AM と異なり、述語は例えば動詞の非過去形などでは人称による一致も行う。人称に関する素性に関しては本稿では詳しく検討しないが、3人称がデフォルトの人称であり、1人称代名詞と2人称代名詞以外は全てデフォルトの3人称であると考えて議論を進める。ちなみに、デフォルトの一致とされる n.sg.3 での一致も非過去形ではやはり3人称である。

3. 主語・述語の一致

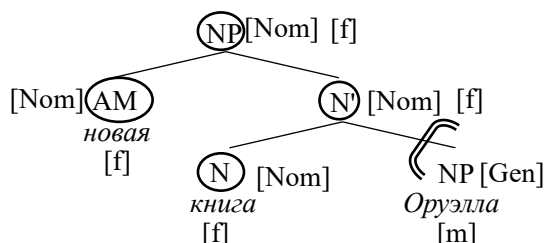
にコピーされることはない。

(56)(a) [Новая книга Оруэллa] встречена овациями (...). (НКРЯ 2021.09.20)

new-nom.f book-nom.f Orwell-gen meet-pp.f ovation-ins.pl

「オーウェルの新しい本は賞賛に迎えられた」

(b)



この場合、述語も含めて CB の上にある節点は全て N *книга* に由来する素性[f]を持っており、CB の下にある *Оруэллa* から素性[m]を受け取ることはない。CB の下にある要素は CB の上で起こる一致には無関係である。従って、*Оруэллa* は男性であるが、AM も述語も男性形になることはない。

なお、このように名詞もそれを修飾する AM も、また主要部も従属部も、あるいは句節点も末端節点も全て等しく述語の一致の Ctrl となり得ると言う考え方は、1.3.1. で見た Q の連続体的性質が含意する以下の各点となじむ考え方である。Q においては名詞とそれを修飾する一致定語の違い、主要部と従属部の違い、句節点と末端節点の違いが時に曖昧となるからである。

(57)(=1-34)

- (a) 品詞の境界線が曖昧なものでありうる；
- (b) 主要部と従属部の境界線も曖昧なものでありうる；
- (c) X'-syntax の bar-level が曖昧なものでありうる；

また、典型的 NP では一致素性が越えられない CB も QP においては時に越えることができる。以下、QP に関して見ていこう。

3.4.4.2. QP の場合

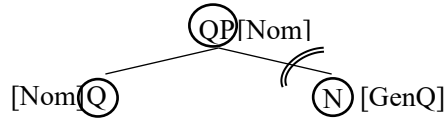
QP が主語となっている場合、どのようにそれぞれの述語の一致パターンが保証されるのかを以下見ていきたい。

3.4.4.2.1. NQ の場合

まず第一に NQ が主語の場合、述語は(38c)で見たように Q との一致、pl.3 での一致、n.sg.3 での一致と 3 通りの一致パターン全てが認められる。これは 3 つの節点全てが一致の Ctrl として指定できることを意味すると考える。

3. 主語・述語の一致

(58)



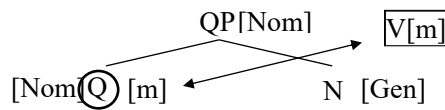
これら3つの候補のうち、Qが一致のCtrlに指定されると述語がQと一致して、例えば *миллион* であれば過去時制の動詞述語なら男性形になる²⁰。

(59)(a) *Миллион россиян посетил Америку.*

million-nom.m Russian-gen.pl visit-pa.m America-acc

「100万人のロシア人がアメリカを訪れた」 (匹田 2016: 366)

(b)



この場合、Qと一致していることはとくに議論の余地はないと思われる。Qが女性の *тысяча*「1,000」であれば述語も女性形になる。

検討が必要なのは、pl.3の一致と n.sg.3の一致である。まず、pl.3での一致の場合を検討しよう。

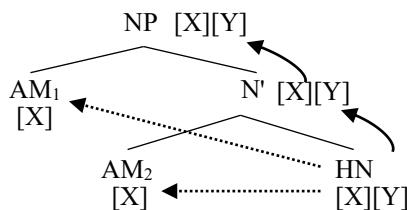
(60) *Миллион россиян посетили Америку.*

million-nom.m Russian-gen.pl visit-pa.pl America-acc

「100万人のロシア人がアメリカを訪れた」 (匹田 2016: 366)

本稿では 2.2. で見たように主要部名詞の一致素性は NP 内部で AM だけではなくそれを支配する句節点にもコピーされると考える(ただし、以下の通り AM にコピーできるのはその AM が受け入れるためのスロットを持っているもののみである)。

(61)

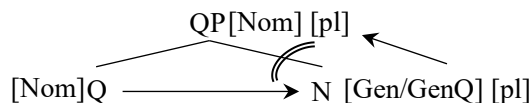


典型的な NP の場合、このようなコピーは CB を越えて行われることがないのは(56)でも見たが、ここで QP の場合は、条件次第では CB を越えた一致素性のコピーが可能になり、句節点 QP にも N の持つ数素性が上がっていけると考えてみよう。

²⁰ 述語動詞が非過去形なら3人称単数形になるが、それだと形態的に性の区別がなくなり n.sg.3の一致と区別が形態的に確認できなくなるので、以下では極力、性による一致を行う過去時制や形容詞述語の例を示すこととする。

3. 主語・述語の一致

(62)



句節点 QP に N の素性[pl]が CB を越えてコピーされうるとしたら、QP は主格でかつ素性[pl]を持っていることになる。この節点を一致の Ctrl に指定すれば、当然述語は複数形を示すはずである。つまり、pl.3 での述語の一致は N に一致しているのではなく、句節点 QP に一致していると考えられる。

(63)



この「CB の下から素性をコピーできる」という振る舞いは Q が持つ従属部的な特徴、すなわち形容詞的な特徴と考えられる。名詞であればその後に従属部として従えている属格名詞の素性が句節点にコピーされることはありえない。

疑問(41d)「pl.3 での一致で述語は N からどのように素性を得ているのか？」に対する答えは「QP に[pl]がコピーされた後に QP を一致の Ctrl に指定した上で述語が QP から[pl]を受け取っている」と言うことになる。QP の持つ主格[Nom]は句の外にある何らかの格付与子より与えられたものと考えられ、その[Nom]は Q には浸透して行くが、N には Q によって付与された[Gen]があるため浸透できない。結果、節点 QP は[Nom]を持っているのでロシア語における一般的原則として認められる「述語の一致は主格名詞句と行われる」と矛盾しないことになっており、特別の例外規定は不要である。

では、n.sg.3 での一致はどうであろうか。

(64)Миллион россиян посетило Америку.

million-nom.m Russian-gen.pl visit-pa.nl America-acc

「100万人のロシア人がアメリカを訪れた」(匹田 2016: 366)

既に触れたように、Corbett (1983), Babby (1987)はいずれも n.sg.3 による一致は一致できないことによるデフォルトの形態であるとしている。しかし、この考え方を認めると次の疑問が生じてしまうことも既に触れた：

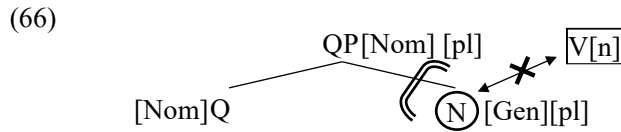
(65)(=41b)

他の一致パターンが可能なのに何故「最後の手段」のデフォルトが可能なのか？

匹田 (2007)は n.sg.3 での一致は CB の下にある N を Ctrl に指定することによって生じると考えた。しかし、CB の下にある N は Q によって属格あるいは数量属格を付与されているので実際に一致することはできない。ロシア語に一般原則である「述語の一致は主格名詞句と行われる」に反するからである。仕方ないのでデフォルトの形と

3. 主語・述語の一致

しての n.sg.3 で述語は一致することになる。



この考え方は Corbett (1983) や Babby (1987) とどう違うのか？この考え方のポイントは主語・述語の一致を (i)Ctrl として指定する、(ii)Ctrl から素性を受け取る、の 2 段階に分けて捉えていることである。つまり、まず「どの節点を Ctrl に指定するか決め」てから次に「一致のために必要な一致素性を受け取る²¹」わけである。このように 2 段階に分けることで疑問(41b)への答えとなり得る。すなわち、1 段階目で Ctrl の指定が終わった時点でもうやり直しはできないので、一致するには「最後の手段」のデフォルトに頼る以外手段がないわけである。本稿の基本的な考え方として 1.1. で述べたように「先読み」はできるだけ避けなければならない。でなければ「やり直す」という極めて特別な操作を想定する必要性が生じてしまう。これで(41b)に対する答えが得られたと思われる。

続いてもう一つの疑問について検討しよう。

(67)(=41c)連続体上でなぜ デフォルトがここに位置するのか？

先ず上で見た述語の一致のパターンを見てみよう。

(68)(=29)

		形容詞的(dependent) ← → (head)名詞的							
		1	2	3,4	5	100	1,000	100万	QCN
(viii)	Q との一致	-					+		
(ix)	pl.3 での一致	+							
(x)	n.sg.3 での一致	-	+					-	

ここまでの議論を踏まえていくつかの点を見直す必要がある。先ず(ix)は上で見たように、pl.3 での一致が可能であるということは、CB の下から素性のコピーが可能であると言うことを意味している。従って(ix)は「CB の下から素性のコピーが可」と考えよう。また(x)についても、n.sg.3 での一致が可能と言うことは、「CB の下にある要素を Ctrl として指定可」と言うことであることも上で見た。さらに、数詞「1」には格付与能力がないので格付与された句が格領域を形成し、その上に CB が形成されることもない。従って、CB に関する(ix)と(x)は「1」については無関係と考えるべきで

²¹ 実際に一致素性を何が受け取るのかは本稿では議論は行わない。本稿では以下、一致しているのは述語そのものであるかのように記述が行われているが、恐らく T のような何らかの空の機能範疇が必要だと思われる。今後の課題としたい。

3. 主語・述語の一致

ある。結果として以下の様に修正する必要がある：

(69)

		形容詞的(dependent) ←				→ (head)名詞的			
		1	2	3,4	5	100	1,000	100万	QCN
(viii)	Qとの一致	-				+			
(ix)	CBの下から素性のコピーが可		+						
(x)	CBの下の要素をCtrlとして指定可		+						-

この様に見直すことで、(41c)の疑問を解決することが可能になる。すなわち、まず、CBの下の素性から一致素性をコピーできるということ、CBの下の要素をCtrlとして指定できるということはいずれもNの主要部的振る舞いであり、Nの主要部性とQの従属性、つまりQの形容詞的特徴であると考えることができる。

また、「1」は無関係とした結果、特徴(x)を示すものが連続体上で左端に寄ったことになる。結果として連続体の左側に形容詞的な性質が見られ、右側に名詞的な性質が寄っており、連続体の上での位置も問題がなくなる。以上の様に、疑問(41c)に対する回答も得ることができた。

ここまでで得られた結果を一つの表にまとめると以下の通りである。ただし、(70)ではその振る舞いを示すか否かによって「+/-」で示したが、以下ではその振る舞いが「名詞的か(=形容詞的ではないか)」、あるいは「形容詞的か(=名詞的ではないか)」によって「a」または「n」と示した。

(70)

		形容詞的(dependent) ←				→ (head)名詞的			
		1	2	3,4	5	100	1,000	100万	QCN
(i)	数の一致	a	n						
(ii)	全ての格環境で格の一致	a	n						
(iii)	性の一致	a	n						
(iv)	有生性の一致	a		n					
(v)	自身の複数形	a			n				
(vi)	自身に対する一致定語	a				n			
(vii)	全ての格環境で属格Nを支配	a				n			
(viii)	Qとの一致	a				n			
(ix)	CBの下から素性のコピーが可		a						
(x)	CBの下の要素をCtrlとして指定可		a						n

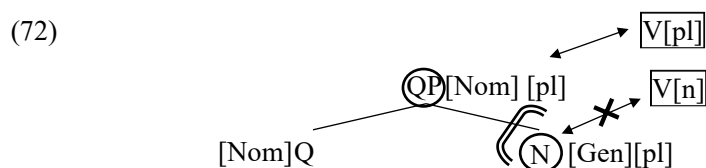
3.4.4.2.2. PcQとHQの場合

続いて、PcQとHQを含むQPが主語になっている場合の述語の一致について見てみよう。PcQとHQの場合はいずれも2パターン的一致が可能である。

3. 主語・述語の一致

(71)(=3b) Пришли / Пришло пять студентов.
 come-pa.pl come-pa.n five-nom student-genq.pl
 「5人の学生が来た」 (匹田 2016: 362)

PcQ と HQ の場合は, pl.3 と n.sg.3 での 2 パターンの述語の一致が可能である。つまり, Q との一致が不可能である。可能な 2 パターンについては NQ の場合と同じで, 節点 QP と N を一致の Ctrl に指定した場合と考える。つまり, CB の下から N の素性がコピーできるし, CB の下の要素を Ctrl に指定することができるのも同じである。

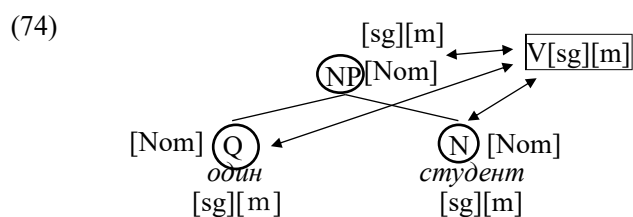


では, PcQ と HQ の場合は何故 Q との一致が不可能なのだろうか。これはこれらの Q は NQ や QCN と違い, 述語と一致するのに必要な全ての一致素性を持っていないことにその理由があると思われる。本稿では少なくとも数の素性がなければ述語の一致の Ctrl になり得ない, と当面考える。つまり, 連続体の特徴(viii)「Q との一致」は (v)「自身の複数形」によって説明がつけられることになる。

3.4.4.2.3. 「1」の場合

また, 「1」については典型的 NP の AM とまったく同じで N と全ての一致素性に関して一致するし, 格付与能力もないので CB も形成されない。従って, 典型的 NP の場合とまったく同じように Q, N, NP の全てが述語の一致の Ctrl になり得ると考える。

(73)(=3a) Один студент пришел .
 one-nom.m student-nom.m come-pa.m
 「1人の学生が来た」 (匹田 2016: 365)



3.4.4.2.4. QCN の場合

QCN については特徴(x)「CB の下の要素を Ctrl として指定可」について QCN は NQ と振る舞いが異なっていることにより, n.sg.3 での一致ができない。Q との一致と

3. 主語・述語の一致

pl.3 による一致については NQ と同じである²².

(75)(=31)

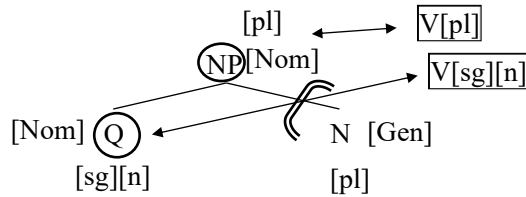
(a) Большинство приглашенных не явилось / явились. (Corbett 1979a: 58)

majority-nom.n invitee-gen.pl not appear-pa.n appear-pa.pl
「招待された人は大多数が現れなかった」

(b) Большинство населения собралось / *собрались. (Corbett 1979a: 58)

majority-nom.n inhabitant-gen.sg gather-pa.n gather-pa.pl
「住民の大多数が集まった」

(76)



このことは QCN が NQ と異なり、CB の下にある要素を述語の一致の Ctrl に指定することを認めないということであり、QCN が NQ よりも名詞的性質、つまり主要部性を持っているということの意味する。

3.4.4.3. 否定属格の主語

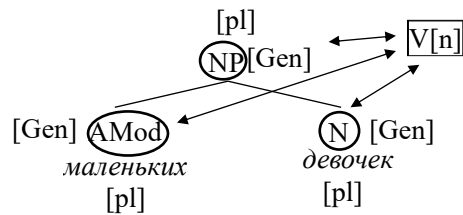
では、同じ属格の N を持つ否定属格の NP を主語とする場合も確認したい。こちらは QP の場合と異なり述語の形態が n.sg.3 での一致以外あり得なかった。

(77)(a) (...)маленьких девочек не было (...). (НКРЯ 2021.09.22)

little-gen.pl girl-gen.pl not be-pa.n

「小さな女の子はいなかった」

(b)



Corbett (1983), Babby (1987)は、QP は句の内部に複数の格が混在しているが、否定属格の場合は名詞句内に属格以外の格がないことが、否定属格の主語の場合は n.sg.3 の述語の一致しかない理由であるとしたが、まさにその通りである。NP 内部にとくに妨げるものがなく、いずれの節点も数の素性を持っているので、どの節点も一致の Ctrl になり得る。そして、いずれの節点も [Gen] を与えられているため、結果とし

²² これらの例で述語動詞の過去中性形は большинство に一致したものであり、N を Ctrl に指定した結果のデフォルトの n.sg.3 ではない。

3. 主語・述語の一致

て述語はデフォルトの *n.sg.3* での一致をすることになると考えられる。つまり、否定属格の主語の場合は主格の部分がどこにもないため、どれを一致の Ctrl に指定しようとも *n.sg.3* での一致以外はあり得ないと言える。

3.4.5. 全体と部分が一致の Ctrl になり得る他の NP

以上の様に匹田 (2007) は、述語の一致の Ctrl に句全体、つまり頂点の節点を選ぶことも、一部だけを選ぶことも可能であると考え、どれを選ぶかによって QP においては最大3つの一致パターンが可能となるとした。本稿はこの考え方に則って議論を進める。では、QP 以外に句の全体あるいは一部を述語の一致の Ctrl に選択することによって、一致の形態的パターンが異なってくることはあるのだろうか？

考えられるものとして、等位接続構造がある。

(78)(a) [Книга и тетрадь] лежали на столе.
book-nom.f and notebook-nom.f lie-pa.pl on desk-loc
「本とノートが机の上にあった」 (Кохтев & Розенталь 1984:153)

(b) В лесу была [тишина и прохлада].
in forest-loc be-pa.f silence-nom.f and coolness-nom.f
「森の中は静寂と清涼さが満ちていた」 (Кохтев & Розенталь 1984:153)

(c) На душе у Елены был [мир и тишина].
on heart at Elena-gen.f be-pa.m peace-nom.m and silence-nom.f
「エレナの内には平和と静寂があった」 (НКРЯ 2021.09.22)

例(78a)では述語動詞は複数形になっているが、主語として機能している等位接続構造の構成要素である *книга*「本」も *тетрадь*「ノート」も単数形であり、述語は等位接続構造全体に一致していると考えざるを得ない。一方、(b)では等位接続構造の片方だけに一致しているので述語は(単数)女性形になっている。また、片方だけに一致する場合、近い方に一致すると言うことが(c)からわかる。述語動詞は男性形で一致しているが、等位接続構造を構成する要素のうち男性なのは *мир*「平和」だけだからである。

他にも、擬似的等位接続構造 (pseudo-coordinate structure) とでも呼ぶべき構造がある。

(79) [Брат с сестрой] уехали / уехал в деревню.
brother-nom.m with sister-ins.f leave-pa.pl leave-pa.m to village
「兄と妹は田舎に行ってしまった」 (Кохтев & Розенталь 1984:152)

例(79)では述語が複数形と男性形で一致することが可能だが、前者の場合は NP 全体と一致していると考えべきだろうし、後者の場合は単数の *брат*「兄」のみと一致していると考えべきであろう。

以上の様に、主語を成す句全体に一致したり、あるいは一部のみ一致したりして、かつその選択によって述語の一致形態が変わると言うことは決して QP のみで見

3. 主語・述語の一致

られる現象ではない。

3.5. 本章のまとめ

以上本章では、主語・述語の一致に関わるいくつかの現象を確認した上でそれを説明するための提案を行った。以下、それをまとめる。

(80) 典型的な NP が主語の場合、主語に対する述語の形態的一致は一つのパターンに決まるが、QP が主語の場合いくつかのパターンが可能な場合があり、かつそのパターンのあり方は Q によって異なる。

(81)(=3)Q によって可能な述語の一致パターンは以下の通り：

(a) 「1」(N との一致)

Один студент пришел.
one-nom.m student-nom.m come-pa.m

「1人の学生が来た」 (匹田 2016: 365)

(b) PcQ と HQ (pl.3, n.sg.3 での一致)

Пришли / Пришло пять студентов.
come-pa.pl come-pa.n five-nom student-genq.pl

「5人の学生が来た」 (匹田 2016: 362)

(c) NQ (pl.3, n.sg.3, Q との一致)

Миллион россиян посетило / посетил / посетили Америку.
million-nom.m Russian-gen.pl visit-pa.n -pa.m -pa.pl America-acc

「100万人のロシア人がアメリカを訪れた」 (匹田 2016: 366)

(82) pl.3 の一致は意味的ではなく形式的条件(pl.の N の存在)によって可能となる。

(83) QCN は Corbett (1978a, 1978b, 1978c)の連続体の右端に位置する NQ よりさらに名詞的な特徴を示すものである。

(84) 述語の一致の Ctrl は主語 NP 内の全ての節点が指定されうる。

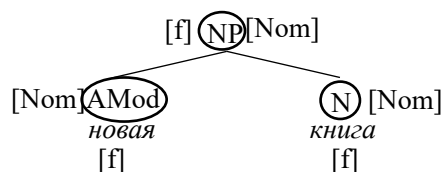
典型的 NP の場合はどれが Ctrl に指定されても述語の一致形態に違いはない。

(85)(=55) (a) [Новая книга] адресована студентам (...)

new-nom.f book-nom.f address-pp. student-dat.pl

「新しい本は学生たちに向けられたものである」 (НКРЯ 2021.09.20)

(b)

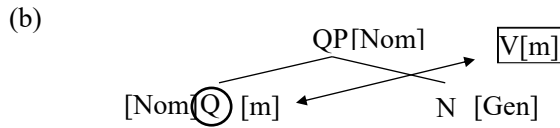


QP の場合はどれを Ctrl に指定するかで一致の形態が異なることがある。

3. 主語・述語の一致

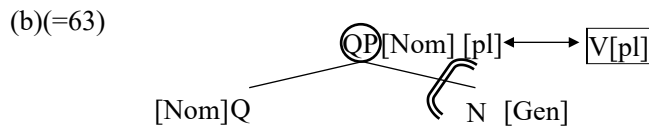
(86)(=59)QP 主語で Q に一致する場合

- (a) Миллион россиян посетил Америку.
 million-nom.m Russian-gen.pl visit-pa.m America-acc
 「100万人のロシア人がアメリカを訪れた」 (匹田 2016: 366)



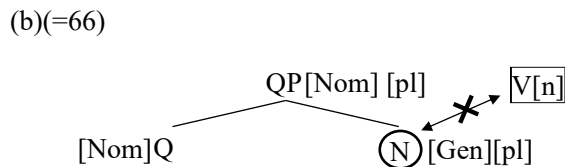
(87) QP 主語で pl.3 で一致する場合

- (a)(=60) Миллион россиян посетили Америку.
 million-nom.m Russian-gen.pl visit-pa.pl America-acc
 「100万人のロシア人がアメリカを訪れた」 (匹田 2016: 366)



(88) QP 主語で n.sg.3 で一致する場合

- (a)(=64) Миллион россиян посетило Америку.
 million-nom.m Russian-gen.pl visit-pa.n America-acc
 「100万人のロシア人がアメリカを訪れた」 (匹田 2016: 366)



(89) QP は CB の下にある要素から CB の外に一致素性のコピーが可能.

(90) QP は CB の下にある要素を述語の一致の Ctrl として指定が可

(91)(=70)

		形容詞的(dependent) ← → (head)名詞的							
		1	2	3,4	5	100	1,000	100万	QCN
(i)	数の一致	a	n						
(ii)	全ての格環境で格の一致	a	n						
(iii)	性の一致	a	n						
(iv)	有生性の一致	a		n					
(v)	自身の複数形	a		n					
(vi)	自身に対する一致定語	a		n					
(vii)	全ての格環境で属格 N を支配	a		n					
(viii)	Q との一致	a		n					
(ix)	CB の下から素性のコピーが可	a							
(x)	CB の下の要素を Ctrl として指定可	a						n	

3. 主語・述語の一致

ただし、ここまでの議論で pl.3 での述語の一致は意味ではなく形式的な条件で行われると結論づけたが(82), 実はこれでは説明がつかない問題がある. 次章 4.ではこの問題について議論を行う.

4. ロシア語の数体系をめぐって

4. ロシア語の数体系をめぐって¹

前章では、QP が主語となる場合、述語の pl.3 での一致は意味的に条件付けられて起こるのではなく、N が複数でなければならないという形式的条件によって引き起こされることを示した。以下の様に Q が QCN の場合、たとえ、意味的には複数の対象を表していたとしても、pl.3 での一致が不可能になることからそのことはわかる。

(1)(=3-31)

(a) Большинство приглашенных не явилось / явились.
majority-nom.n invitee-gen.pl not appear-pa.n appear-pa.pl
「招待された人は大多数が現れなかった」 (Corbett 1979a: 58)

(b) Большинство населения собралось / *собрались.
majority-nom.n inhabitant-gen.sg gather-pa.n *gather-pa.pl
「住民の大多数が集まった」 (Corbett 1979a: 58)

このことは PcQ や HQ, NQ の場合も同様である。ただし、QCN の場合と異なりこれらは個数詞という性質上、可算名詞しか従えることができないので、QCN の様に単数の N と複数の N を交替させることができず、pl.3 での一致が形式的条件と意味的条件のどちらによって引き起こされているのかを確認することはできない。

(2) (a) (=3-23b) PcQ と HQ (pl.3, n.sg.3 での一致)

Пришли / Пришло пять студентов.
come-pa.pl come-pa.n five-nom student-genq.pl
「5人の学生が来た」

(b) (=3-23c) NQ (pl.3, n.sg.3 での一致, Q との一致)

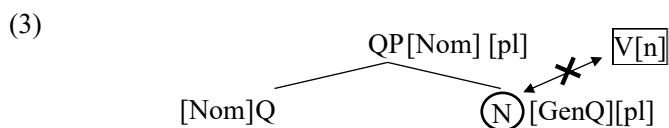
Пришли / Пришло / Пришел миллион студентов.
come-pa.pl come-pa.n come-pa.m million-nom.m student-gen.pl
「100万人の学生が来た」

PcQ, HQ を含む QP を主語とする場合、述語は(2)のように pl.3 で一致する場合と n.sg.3 で一致する2つのパターンが可能であり NQ の場合はそれに加えて Q と一致することが可能である。

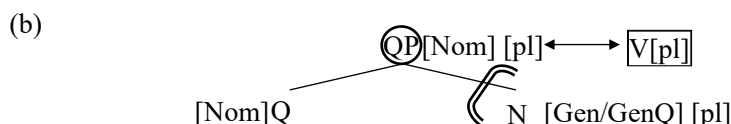
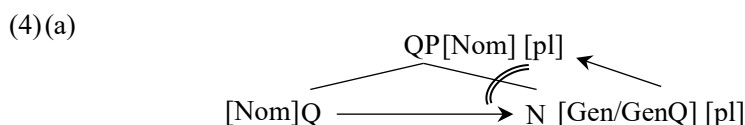
n.sg.3 の一致の場合は、PcQ の場合も HQ の場合でも 3.で論じたように、N が一致の Ctrl に指定されたものの N が主格でないため一致することができず、結果としてデフォルトの n.sg.3 となると考えることで説明ができる。

¹ 本章の内容は匹田 (2007b, 2010)に基づき、それに諸々の改訂や追加が加えられてたものである。

4. ロシア語の数体系をめぐって



問題となるのは pl.3 で一致する場合である。HQ や NQ の場合は問題がない。3で論じたように、(4a)の様に CB を越えて N から QP に数に関する素性がコピーされた上で、(4b)のように節点 QP を述語の一致の Ctrl に指定すれば pl.3 での一致が導き出される。HQ や NQ が従える N は必ず複数属格形なのでそこから素性[pl]が QP にコピーされ、結果正しく pl.3 の一致を予想できる。

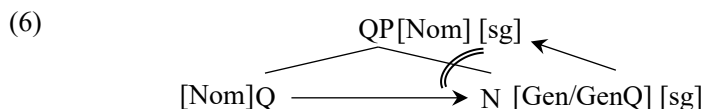


しかし、PcQ を含む QP を主語とする場合、述語の pl.3 での一致が可能であることは正しく予想することができない。

(5)(a) Перед ним были два человека (...)
 in_front_of he-ins be-pa.pl two-nom person-genq.sg
 「彼の前には 2 人の人がいた」(НКРЯ 2021.03.09)

(b)(...)в одном городе было два человека (...)
 in one-loc city-loc. be-pa.n two-nom person-genq.sg
 「ある町に 2 人の人がいた」(НКРЯ 2021.03.09)

上記のグロスにも示したように、PcQ が従える N は単数属格形にならなくてはならないことが一般に知られている。HQ や NQ の場合と同様に考えると、N から QP にコピーされる数素性は[sg]でなければならない。



すなわち、PcQ を含む QP を主語とする述語が pl.3 で一致することは予想されない。

一方、前章 3.では QP 主語との述語の pl.3 による一致は先行研究でしばしば述べられているように意味的に条件付けられたものではなく、形式的に条件付けられている、すなわち N が複数形であることによって可能となるものであると結論づけた。このことは PcQ が従える N が単数属格形になることと矛盾し、やはり pl.3 での一致

4. ロシア語の数体系をめぐって

は前章 3.での結論と異なり、意味的な条件によって引き起こされるものであるのかと考えさせる。

以下本章では、ここに見られる N の「単数」が秋山 (2002)に従ってロシア語における第 3 の数、すなわち「単数」でも「複数」でもない「少数」であると考えて、様々な問題が解決できることを見る。まず、4.1.では議論を始めるにあたって、PcQ の文法的特徴を概観することとする。

4.1. PcQ の概要

本稿では、個数詞 *два*「2」に代表され、以下の様に一般に N に「単数属格形」を要求するとされている数量詞を少数数量詞(PcQ)と呼んでいる。ただし、2.で見たように、本稿では Babby (1987)に従いこれらが付与する格は「属格」ではなく、「数量属格」であるとする。この点は本稿と一般的な理解との大きな違いである。

(7) *два студента; три студента; четыре студента*
two-nom student-genq.sg three-nom four-nom
「2人の学生；3人の学生；4人の学生」

上の例で明らかのように、数詞「2, 3, 4」はいずれも単数数量属格の N を従えており、PcQ であると考えて問題ない。その点では *оба*「両方」、*полтора*「1.5, 一つ半」なども同様に N に「単数数量属格形」を要求するので、匹田 (2019)はこれらも PcQ であると考えている²。

(8)(a) *оба мальчика*
both boy-genq.sg
「両方の少年」

(b) *полтора года*
one_and_a_half year-genq.sg
「1年半」

一方、*половина*「1/2」、*треть*「1/3」、*четверть*「1/4」はこの中に入らない。なぜなら、これらは以下の様に単数属格形だけではなく複数属格形を従えることもあるなど明らかに異なる振る舞いを示すからである(いずれも НКРЯ 2019.7.23)：

(9)(a) *половина/ треть / четверть минуты*
half third quarter minute-gen.sg.
「1分の半分/3分の1/4分の1」

(b) *половина/ треть / четверть россиян*
Russian-gen.pl.

²ただし、匹田(2019)で明らかにしたように、これらには語彙的な特殊性とも言うべき特異な現象が見られ、現時点ではまだ文法的な説明が完全にはできていない。そのため、本稿では「2, 3, 4」を中心に議論を進める。これらの不可解とも言える PcQ の問題は 10.でも再度触れる。

4. ロシア語の数体系をめぐって

「ロシア人の半分/3分の1/4分の1」

つまり、これらは実際に単数のものの半分・3分の1・4分の1なのか複数のもののそれなのかによって後続する名詞の数が変わり、PcQとは違って必ず単数属格のNを従えているわけではない。また、*половина, треть, четверть* は以下の様に処格環境においてもNの格が処格にならないことから、これらが付与する格が数量属格ではなく通常の属格であることもわかる。

(10)(a)(...)в половине субъектов РФ (...)

in half-loc.sg subject-gen.pl Russian_Federation-gen

「ロシア連邦構成主体の半数において」 (НКРЯ 2021.11.28)

(b)(...)в четверти субъектов РФ

in quarter-loc.sg subject-gen.pl Russian_Federation-gen

「ロシア連邦構成主体の1/4において」 (НКРЯ 2021.11.28)

ロシア語のPcQである*два*「2」は1.で見たように以下の特徴を持っている：

(11)(a)Nが単数数量属格形になることを要求する。

(b)女性かそれ以外かだけの部分的な性に関する形態的対立

(c)上記の性に関する対立は主格とそれと同形の対格でのみあらわれる。

(d)有生性の一致を行う。

(e)Nとの一致としても、あるいはQの本来素性としても数の区別がない。

まず、(11a)については上の(7)で見たとおりである。PcQPのNの形態は一般に「単数属格形」とされているが、本稿では2.3.2.で議論したように、格が通常の属格と異なり、「単数数量属格形」と解釈して議論を進める。

続いて(11b)についてであるが、*два*「2」は後続するNと性に関して一致する。

(12)два мальчика; два письма; две книги

two-nom.m boy-genq.m. two-nom.n letter-genq.sg.n two-nom.sg.f book-genq.sg.f

「2人の少年；2通の手紙；2冊の本」

以上の例で見ると、*два*はNの性別に従って形態を異にしている。ただし、男性名詞の*мальчик*「少年」と中性名詞の*письмо*「手紙」を従える場合は*два*に、女性名詞の*книга*「本」を従える場合は*две*という形態となっており、形態的には部分的にしか対立していないことがわかる³。すなわち「男性・中性」対「女性」という対立である。この点については次章で再度検討する。

また、(11c)の「性の対立は主格とそれと同形の対格のみ」という点であるが、個数詞「2」は、無生名詞を従える場合は対格形が主格と等しくなり、上記の性に関する形

³ *оба*「両方」、*полтора*「一つ半」も同様に部分的な性の形態的対立を示す。

4. ロシア語の数体系をめぐって

態的対立も保持される。

- (13) Написал [acc две книги].
write-pa.m two-acc.f.in book-genq.sg.f.in
「2冊の本を書いた」 (НКРЯ 2021.12.03)

この例で QR [две книги]は対格環境に置かれている。一方、(14)で見られるとおり有生名詞を従える場合、個数詞「2」は名詞に合わせて対格の形態が属格環境にある場合と同じになる。すなわち有生性の一致が見られるのである。

- (14) Я видел [acc двух мальчиков].
I see-pa.m two-gen.an boy-gen.pl.an
「私は2人の少年」 (Corbett 1978b:356)

この場合、すなわち対格が属格と同形になる場合は、性に関する形態的な対立は失われる。

- (15)(...)убил [acc двух уток].
kill-pa.m two-acc.an duck-gen.pl.an
「(...)2羽のカモを殺した。」 (НКРЯ 2014.09.19)

この例ではNが *утка*「カモ」は女性名詞であるが(14)の *мальчиков* は男性名詞である。それによる PcQ の形態に違いはない⁴。また、その他の、いわゆる「斜格」環境に置かれた場合も性による形態的対立は失われる。以下はいずれも具格支配の前置詞 *с*「〜と」に支配されている QR の例だが、(a)では男性名詞 *фильм*「映画」が、(b)では女性名詞 *птица*「鳥」が用いられているが、PcQ の形態に性に関する区別はない。

- (16)(a)(...)с [ins двумя фильмами]. (НКРЯ 2021.12.06)
with two-ins film-ins.pl
「2本の映画と」
(b)(...)с [ins двумя птицами](...) (НКРЯ 2021.12.06)
with two-ins bird-ins.pl
「2羽の鳥と」

この点に関しては具格以外の斜格、すなわち、属格、与格、処格環境の場合も同様に性に関する形態的対立は失われる。また、(11e)にあるように *два* には自身の複数形を示すこともないし、また N に数に関して形態的に一致することもない。つまり、数の素性を持っていないと考えられる。

⁴ 有生・無生に応じて名詞とそれを修飾する一致定語の対格の形態がともに主格と同形になったり属格と同形になったりするいわゆる「有生性の一致」については、次章 5. で詳しく論じる。なお、上の例で *уток*「カモ」が単数・数量属格形ではなく、複数・属格形になっている点についても次章で明らかにする。

4. ロシア語の数体系をめぐって

以上をまとめるとロシア語の PcQ *два* の形態法は以下の通りとなる：

(17) *два* の形態法

		m.	n.	f.
nom.		два		две
acc.	an.	двух		
	in.	два	две	
gen.		двух		
loc.		двух		
dat.		двум		
ins.		двумя		

また、2.1.3.でも示したように、本稿では以下、個数詞「2」は以下の文法素性とスロットを持っていると考えることとする。

(18)「2」の素性

数	×
性	[∅]
有生性	[∅]
屈折タイプ	×
格	[∅]

一方、同じ PcQ でも「3」や「4」は性に関する一致がない点で「2」と異なる。以下はそれぞれ男性、中性、女性名詞を従えている例であるが、PcQ *три* の形態に違いはない。

(19) три стола / окна / книги
three-nom. table-genq.sg.m window-genq.sg.n book-genq.sg.f
 「3つの机/窓/本」

「3」の形態法と素性のあり方は以下の通りとなる。

(20)「3」の形態法

		m.	n.	f.
nom.		три		
acc.	an.	трѐх		
	inan.	три		
gen.		трѐх		
loc.		трѐх		
dat.		трѐм		
ins.		тремя		

(21)「3」の素性

数	×
性	×
有生性	[∅]
屈折タイプ	×
格	[∅]

なお、「4」についても振る舞いは「3」と同様で、同じ素性のスロットを持っていると

4. ロシア語の数体系をめぐって

考えられる。

4.2. 歴史的背景

PcQ 及びそれと結合する N は様々な点で特異な振る舞いを示す。これらの点のいくつかについては、通時論的ないきさつが既に広く知られている。PcQ とそれが従える N が何故このような振る舞いを示すのかについて共時論的な説明を試みる前に、本節では、PcQ とそれが従える N がどのような歴史的いきさつで特異な振る舞いを示すようになったのか、広く受け入れられている通時的説明を概観する。

なお井上 (2019:5), 原 (1996b: 244) などによれば、16 世紀頃までにロシア語の数カテゴリーから双数が消失しており、そのことが PcQ をめぐっていくつかの特異な振る舞いを引き起こすきっかけとなっている。

4.2.1. 「単数属格」形について

そもそも PcQ が従える N が「単数」属格形になっているということは、ロシア語の数が一般的に言語外の指示対象の数量によって決まることを考えると、非常に特異な現象であると言える。この点について、以下の様な説明が広く成されている。

(22) Виноградов (1972: 238) :

Как известно, форма *два стола* представляет собою видоизмененный пережиток именительного-винительного падежа двойственного числа.

「知られているように、*два стола* 「2つの机」は双数主・対格の変質した遺物である。」

つまり、数詞「2」に後続する *стола*「机」の単数・属格形は歴史的には、双数主格形であったが言語変化に伴い、単数・属格形と再解釈された。このことは古ロシア語において o 語幹型男性名詞の双数主・対格形が単数属格形と同形であったことがその誘因となった。o 語幹型男性名詞の変化の例を以下に挙げる：

(23) o 語幹型男性名詞の変化の例 (佐藤 2012: 63-64)

「城市」			
	単数	双数	複数
主格	городъ	города	городи
属格	города	городоу	городъ
与格	городоу	городома	городомъ
対格	городъ	города	города
具格	городьмъ	городома	города
処格	городѣ	городоу	городѣхъ
呼格	городе	города	городи

網掛けの箇所(単数属格と双数主格)が同形であることがわかる。そして、その後中性

4. ロシア語の数体系をめぐって

名詞や女性名詞などにも拡大して、さらには「3」や「4」にもこの「単数属格形」を従えるという現象が拡大した(井上 2019: 5, Черных 2010: 233, 原 1996b: 244 など参照⁵).

4.2.2. 形容詞性の消失

また、多くの先行研究が現代語における数詞「2, 3, 4」はかつてはその主要部名詞と性や格で一致する形容詞的範疇であったことを指摘している。ただし、「2」は常に双数名詞に伴うので双数形、「3, 4」は複数名詞に伴うので常に複数形で一致していた(例えば: 三谷 1998: 10, Борковский и Кузнецов 2004: 248, Буслаев 2009: 188, Черных 2010: 235, 佐藤 2012: 79, 井上 2019: 4 など参照).

結果として数詞「2」+N, 「3」+N は以下の様に再解釈が起こったことになる (Babby 1987: 101 など参照⁶):

(24) PcQ と N の再解釈

(a) *два*[nom.du] + N[nom.du] → *два*[nom] + N[genq.sg]

(b) *три*[nom.pl] + N[nom.pl] → *три*[nom] + N[genq.sg]

現代語においては PcQ に数に関する形態的対立がなくなっていることは(11e)で見たとおりである。

さらにこの後、PcQ 「2, 3, 4」の形態法が統一され、現在のパラダイムに至ることとなることが指摘されている(Иванов 1983: 323, 井上 2019: 5, Борковский и Кузнецов 2004: 243, Черных 2011: 234).

4.3. 先行研究における共時的説明

この「単数属格」の N については、先行研究でも様々な指摘がなされている。

例えば, Corbett (1993)は以下のように指摘し、この形はあくまでも不規則なものであり、その不規則な形態は数詞 *два* によって要求されるものであると考えている。

(25) Corbett (1993: 15-16)

It⁷ governs the genitive singular of the noun (...) it seems that this government consists of imposing an irregular marker [dual] on the noun, which is normally realized as genitive singular. Note that 'dual' is no more than a mnemonic for an irregular marker

⁵ 井上(2001, 2006)及び Иноуэ (2006)では、「2」で生じたこの形態法が「3, 4」にまで拡大したのに、何故「5」から上に拡大しなかったのか、と言う問題に対して、「4」と「5」の間に数量の認識における根本的な相違の存在があると論じている。

⁶ ただし, Babby (1987)は全体では数量詞によって付与される格としてを数量属格を想定しているものの、少なくともここで言及した p.101 の時点では単なる属格としか記しておらず、数量属格には言及していないが、ここでは本稿の議論に合わせて数量属格 genq とした。

⁷ 数詞 *два* のこと。

4. ロシア語の数体系をめぐって

since *tri* 'three' and *četyre* 'four' are also involved; some prefer to call it 'paucal'.

「それは単数属格の名詞を支配し (...) この支配は名詞に不規則な標識 [dual] を持たせることから成り、その標識は通常単数属格形として顕在化する。「双数」というのは、*три*「3」と *четыре*「4」も関係するので不規則標識に対する単なる記憶のための方に過ぎないことは注意すべきである。これ以外に「少数」と呼ぶことを好む研究者もいる。」

この考え方では不規則なことが数詞によって引き起こされてはいるものの、この形態はあくまでも単数属格形であると考えている。ただし[dual]という不規則な「標識」とは何なのかについての説明はない。

Виноградов (1972: 238. 1947: 294)もこの現象を「文法的イディオム(грамматический идиом)」と呼び、あくまでも不規則な現象として捉えているという点は同じである。ただし、同じ箇所(Виноградов 1947: 295)には「単数属格と同音異義(омонимично родительному падежу единственного числа)」とあり、単数属格形そのものであるとは厳密にはしていないものの単数属格と同じ形態としている。しかしいずれにせよなぜこのような形態が引き起こされるのかについての厳密な理由付けは行われていない。

他にも Rappaport (2002)はこの現象について以下のように述べている：

(26) Rappaport(2002: 336)

We assume a paucal case for Russian which is spelled out on the head noun as the genitive singular.

「我々はロシア語に少数格を想定するが、それは主要部名詞に単数属格として排出 (spell out)される。」

こちらも同様に、単数属格形を「少数格」という条件によって引き起こされるイレギュラーな現象と捉えている。ただし、「少数格」という格自体の厳密な特徴付けは一切なされておらず、そもそもこの概念には格と数という本来全く異なった性質を持つはずの文法特徴を同一のレベルで捉えているようにも見える。

一方、Halle (1990, 1994a)は以下の様に規則を立てて、PcQを含むQPにおける格と数の振る舞いを説明しようと試みている。Halle (1990, 1994a)では形式化に不統一な点があるため、ここでは主張の本質を端的にまとめてくれている Rappaport (2003: 152)の定式化に従って記す：

(27)(a)Quantative Genitive Rule:

[Case: Nominative] ⇒ [Case: Genitive] / ___ + {Noun/Adjective}, to the right of any numeral in a direct case.

(b)Singular Assignment:

4. ロシア語の数体系をめぐって

[Number: Plural] ⇒ [Number: Singular] / ___ + Noun, to the right of a lower (i.e., adjectival) numeral in the nominative case

これらの規則のうち(b)では、PcQ に伴う N の数は本来は複数であると考えた上で、それを条件に応じて単数に書き換えることで単数属格形を導き出しているもので、少なくとも形態的には単数形であると考えていることになる。本来的に複数であるとするだけで現実の指示対象と異なる数を持っていると言う問題は解決できているものの、この規則による説明も少々 ad hoc であることは否定できない。また、次節 4.4. で述べるように、N が単数であると考えても、複数であると考えても様々な問題が生じてしまう。いずれにせよ、これらの説明には解決すべき問題点が多いことは否定できない。

4.4. 説明すべき問題

本節では、PcQ が従える N が単数であると考えた場合に生じる問題を整理し、さらに逆に複数であると考えるとやはり生じる問題を整理する。

4.4.1. 単数と考える場合

まず本節では伝統的な解釈通り PcQP の N が単数(数量属格)形であると考えた場合、どのような矛盾が生じ、別途説明が必要になるかを整理する。

4.4.1.1. 意味的な問題

第一に「2 つ、3 つ、4 つ」のもの、すなわち複数の指示対象を示しているにもかかわらず、それを表す名詞が「単数」になる、というのは意味と形式が矛盾していると言える。通常、ロシア語では不可算名詞などの場合をのぞき、文法的な数はその指示対象が実際に存在する数量を反映しているからである。2～4 個存在する指示対象を表しているにも関わらず、その名詞が単数形というのであればそれは当然意味的な矛盾を生んでいることになる。この問題は Виноградов (1972: 238) も「矛盾している」と指摘しているし、また秋山 (2002: 26) も以下の通り指摘している：

(28) 数詞 два(две), три, четыре と結合する語結合が主格として機能する際に現れる名詞の「単数」属格形という形態は、数詞によって規定される語彙的意味としての「複数」と矛盾する。

ロシア語の文法のあり方を考えるとこれらの名詞は単数形ではなく複数形にならなければならないはずである。

4.4.1.2. 数を「支配する」数量詞

PcQP の N が単数だと考えると生じる問題の第二として、ある語がその補語を支配

4. ロシア語の数体系をめぐって

する際、格を付与（あるいは要求？）することはあっても数を付与（要求？）することは通常無いということがある。名詞の数はその名詞が実際に存在する数量によって、つまり言語外的な事情で決まるのが通常であるからである。ここで N の指示対象が複数の対象を指示している以上、「単数」という文法素性は数詞「2～4」によって付与（要求？）されていると考えなければ説明がつかない。上記(25)の Corbett (1993)による、数詞「2～4」が dual（ないしは paucal）を名詞に与え、それが単数属格形として具現化するという説明や、Halle (1990, 1994a)による(27b)の規則などはそのことを具体化するための方策と言えよう⁸。

また、Rappaport (2002)は上記の(26)で見たように「少数格 (paucal case)」を想定することによってこの問題を説明しようとしている点で Corbett (1993)や Halle (1990, 1994a)と異なっている。そしてこの少数格が単数属格形として具体化されると言う考え方である。しかし、この少数格の性質は明らかにされていない。格と数をひとつにまとめたものなのかもしれない。

これらの説明の試みはいずれも PcQP の N が単数属格形であるという奇妙な現象を具体的に説明することを試みたものであることは間違いない。しかし、いずれも何故このような規則が必要となるのかを考えると、やはり ad hoc である点是否定できないし、またこれらの数(と格)の機械的な書き換え規則だけでは説明がつかない現象があることは以下の各節でも見ていく。

4.4.1.3. N のそれぞれの格環境における形態

次に PcQP が格に従いどのように変化するかを整理してみる。

	「2 脚の机」	「2 人の少年」	(29)
主格	два <i>стола</i> two-nom desk-genq.sg	два <i>мальчика</i> two-nom boy-genq.sg	
対格	два <i>стола</i> two-acc desk-genq.sg	двух <i>мальчиков</i> two-acc boy-acc.pl	
属格	двух <i>столов</i> two-gen desk-gen.pl	двух <i>мальчиков</i> two-gen boy-gen.pl	
処格	двух <i>столах</i> two-loc desk-loc.pl	двух <i>мальчиках</i> two-loc boy-loc.pl	
与格	двум <i>столам</i> two-dat desk-dat.pl	двум <i>мальчикам</i> two-dat boy-dat.pl	
具格	двумя <i>столами</i> two-ins desk-ins.pl	двумя <i>мальчиками</i> two-ins boy-ins.pl	

まずこの表で無生名詞 *стол*「机」を用いた PcQP の対格は主格とまったく同形であり、有生名詞 *мальчик*「少年」を用いた PcQP の対格は属格とまったく同形となる。これは

⁸なお、少なくとも Halle (1990, 1994a)では N の数は本来的には複数であることを前提としている。言ってみれば複数属格形の異形の現れ方を規定した規則と考えることもできるかも知れない。これらが複数属格の異形であると考えても解決できない問題が残る、と言うことは 4.4.2. で検討する。

4. ロシア語の数体系をめぐって

1.3.1.でも触れた有生性の一致に関わる現象で、詳しくは 5.で論じるが、有生性の一致を起こすと Q も属格形になり、起こさないと主格形になると大まかに捉えてここでは差し支えない。

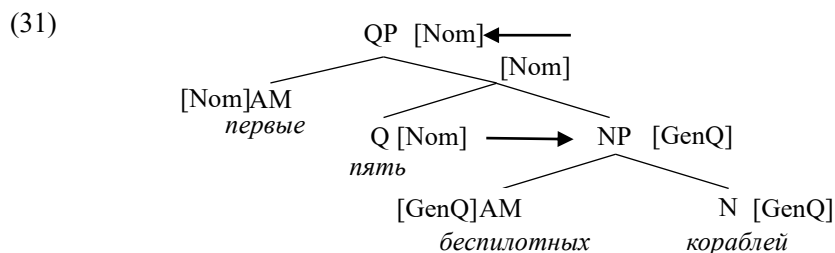
まず 2.1.3.で見たように PcQ は数に関する形態的対立を示さないので数に関する文法情報は示されていない。注目すべきは、実際に N に単数の形態が現れるのは、イタリックで示した箇所、すなわち PcQP が主格環境にある場合と、対格環境にあっても主格の場合と同じ形態を示す無生の N の場合だけ、という点である。つまり主格環境で見られる形態から外れると N は複数形になるのである。意味的には上述のように複数である方が自然であることを考えると、やはり N の単数形はここだけに生じる何か特殊な現象であると考えた方が良いと言えるだろう。また、格環境が変わると、なぜ数が変わるのかを ad hoc ではない方法で説明する必要がある⁹。

4.4.1.4. 一致定語の数

もう一つ注目すべきは PcQP における一致定語(AM)の示す数である。QP において AM は Q の前の位置と Q と N の間に置くことが可能である。

(30)(...)первые пять беспилотных кораблей(...) (НКРЯ 2022.01.21)
 first-nom.pl five-nom unmanned-genq.pl ship-genq.pl
 「最初の 5 隻の自動操縦艦」

この場合、Q の前に置かれた AM *первые*「最初の」と Q と N の間にある AM *беспилотных*「自動操縦の」で格が異なる。このことは 2.3.で示した格の付与と浸透に関する理論で正しく予測されることである。



まず、Q が NP に[GenQ]を付与しそれが NP に支配される節点へと浸透し降りていく。主格環境の場合は頂点の節点 QP に対して句の外から[Nom]が付与されるが、その

⁹ ここで、格が主格環境にあるか、対格環境にありかつ形態的に主格と同じ場合は、PcQ は主格形・対格形を示し N が数量属格形になる(すなわち格が heterogeneous なパターンを示す)が、それ以外の格環境では PcQ と N の格が一致する(すなわち homogeneous なパターンを示す)。この格のパターンについては 2.3.で示した方法で説明ができる。2.3.では PcQ を例として示すことはなかったが、少なくとも格に関しては HQ とまったく同じ振る舞いを見せる。違いは HQP では N の数に格環境の違いによる異同はないが、PcQP の場合は格環境によって数が変わる、という点である。

4. ロシア語の数体系をめぐって

[Nom]は節点 NP から下には[GenQ]があるために浸透して行くことができない。結果として *первые* は主格形, *беспилотных* は数量属格形となる。

ただし、主格・対格以外の語彙格環境にある場合は、語彙格が構造格を上書きするという原則に従い、[GenQ]は上から降りてくる格によって書き換えられてしまう。結果として全ての要素が語彙格(以下の例では具格)になる。

(32)c *этими двумя неприятными явлениями* (НКРЯ 2022.01.21)
 with this-ins.pl two-ins unpleasant-ins.pl phenomenon-ins.pl
 「これら二つの不愉快な現象と」

以上の例は HQ *пять* を用いたものであるが、PcQ についても格に関しては数に関して問題が生じる。

(33) *первые три американских самолета* (НКРЯ 2022.01.21)
 first-nom.pl three American-genq.pl airplane-genq.sg
 「最初の3台のアメリカ製飛行機」

すなわち、Nが単数形であるにもかかわらず、AMはQの前にある主格のものも後ろにある数量属格のものもいずれも複数形になる。数詞 *два* 「2」には数が無いことを考えるとこれらの複数形は名詞 *самолета* 「飛行機」がグロスに示したような単数・数量属格だと考えると説明がつかない。

ちなみに、上の例は主格環境にある場合のものであるが、AMは全ての格環境で同様に複数形となる。

(34)

	「これら2冊の面白い雑誌」			
主格	<i>эти</i>	<i>два</i>	<i>интересных</i>	<i>журнала</i>
	this-nom.pl	two-nom	interesting-genq.pl	magazine-genq.sg
対格	<i>эти</i>	<i>два</i>	<i>интересных</i>	<i>журнала</i>
	this-nom.pl	two-acc	interesting-genq.sg	magazine-genq.sg
属格	<i>этих</i>	<i>двух</i>	<i>интересных</i>	<i>журналов</i>
	this-gen.pl	two-gen	interesting-gen.pl	magazine-gen.pl
処格	<i>этих</i>	<i>двух</i>	<i>интересных</i>	<i>журналах</i>
	this-loc.pl	two-loc	interesting-loc.pl	magazine-loc.pl
与格	<i>этим</i>	<i>двум</i>	<i>интересным</i>	<i>журналам</i>
	this-dat.pl	two-dat	interesting-dat.pl	magazine-dat.pl
具格	<i>этими</i>	<i>двумя</i>	<i>интересными</i>	<i>журналами</i>
	this-ins.pl	two-ins	interesting-ins.pl	magazine-ins.pl

すなわち、AMは全ての格環境において複数の形態を示す。このことから、前節のNの形態も考慮に入れると主格及び対格環境におけるN以外、数の形態的対立を持つ要素は全て複数形になっていることになる(複数形のものはいタリックで示してある)¹⁰。やはり、単数になる方がむしろ特殊と考える必要があるし、単数に見える形

¹⁰ この例は無生名詞がNの位置に置かれているが、有生の場合、いわゆる有生の一致が起こり、属格環境にある場合と同じ形態になる。有生性の一致に関しては次章5.で詳しく議論する。

4. ロシア語の数体系をめぐって

は実は複数形であると考えるか、あるいはその特殊な現象を説明するための何らかの特別の仕組みが必要であると言えよう。

4.4.1.5. 形容詞タイプの名詞

ロシア語の AM は形態的に表示される文法素性として格の他に性, 数, 有生性があるが, これはロシア語の名詞が持つ文法素性にほぼ等しい。このことは 2.1.2. で見たとおりである。

(35)=(2-8)名詞の文法素性

数	[sg/pl]
性	[{m/n/f}]
有生性	[{an/in}]
屈折タイプ	[{I/II/III/IV/indc}]
格	[ø]

(36)=(2-9)AM の文法素性

数	[ø]
性	[ø]
有生性	[ø]
屈折タイプ	×
格	[ø]

ただし, 名詞の数, 性, 有生性, 屈折タイプは本来の素性であるのに対し, AM の数, 性, 有生性は修飾する主要部名詞などによって決まる文脈的素性である。また, AM の屈折タイプは名詞とは異なる「形容詞的な」ものを持つため, 「名詞的な」屈折タイプは AM にはないものと考えた¹¹。AM は屈折タイプをのぞけば実質名詞と同じ文法素性を持つこととなる。ロシア語には, 性・数・有生性を語彙的に決まった本来の素性としただけで, とくに形態的に名詞であることを表示せずに名詞化している名詞が多くある。

これら形容詞タイプの名詞には, 例えば *животное*「動物(中性・有生)」や *столовая*「食堂(女性・無生)」、*чаевые*「チップ(複数・無生)」などがあり, またその他にも *Достоевский*「ドストエフスキー(男性・有生)」, *Толстой*「トルストイ(男性・有生)」などのある種の姓が形態的に形容詞と同じ変化タイプに属する。

これらは完全に名詞として用いられていると考えて差し支えないが, PcQP の N の位置に現れると, いずれも以下のように単数属格形ではなく複数属格形にな。

(37) два животных (Шведова и др. 1980:I:576)

two animal-genq.pl

「2匹の動物」

¹¹ 2.1.1. でも言及したように, 「形容詞的屈折タイプ」を持つとすることも可能であるが, ここでは「名詞的屈折タイプ」を持たない, とだけ考えることとする。

4. ロシア語の数体系をめぐって

- (38) два Достоевских
two Dostoevsky-genq.pl
「2人のドストエフスキー」

これらの形容詞タイプの名詞が示す振る舞いは PcQ が従える N が単数であると考えたと説明できず、何らかの特別なルールなどを、場合によっては ad hoc にてあれ、設定する必要があることになる。

4.4.1.6. 単数属格とは異なる形態

前述の通り、PcQP の N は一般に単数属格形となると解釈されており、事実ほとんどの語では PcQP の N の形態は通常の単数属格形と同一である。しかし、*час*「時間」、*ряд*「列」、*шар*「球」など、ごく少数ではあるが、通常の単数属格形と異なる形態になる語が存在することがしばしば指摘されている (例えば *Виноградов* 1972: 238 など参照)。例えば、以下の例で「2時間」というときの *час*「時間」の単数数量属格形と通常の属格支配の前置詞 *около*「約」に支配される単数属格形ではアクセントの位置に違いが生じる。

- (39) два часа́ / около́ часа
two hour-genq.sg about hour-gen.sg
「2時間／約1時間」

このようなごく少数の例の存在は、この通常の単数属格形とはわずかに異なる形態が具体的に何であるかを積極的に示すものでは決してない。しかし *Милославский* (1988: 46-48)は、このようなわずかな違いが、形態的に非常に似通っている2つの範疇が実際には異なったものであることを示すヒントになると述べている。実際 *Кузнецов* (1953: 76-77)や *Jakobson* (1984a: 124)はこのようなわずかな違いを根拠として、現代ロシア語における通常の属格と第2属格、通常の処格と第2処格をそれぞれ異なる格として区別すべきと考えている。

このことが厳密にこの形態が何なのかを立証することはできないが、少なくとも PcQP の N が示す形態が通常の単数属格形とは何か違うものであることを示していると考えられる。もちろんその違いは数が「単数」ではないことに理由があるものなのかも知れないし、あるいは 2.3. で述べたように通常の属格ではなく数量属格であるが故の違いなのかも知れない。

4.4.2. 複数と考えた場合の問題

以上、4.4.1. では PcQP の N が、一般的な理解通りの単数だと考えると別途説明が必要になる問題点を整理した。それに対して、仮に N が複数であると考えたと 4.4.1.1. で見た意味的な問題をはじめいくつかの問題は消失するが、一方で N が複数だと考えたら考えたで問題が生じる。本節では以下、それらの点を整理する。

4. ロシア語の数体系をめぐって

4.4.2.1. 性の対立

本稿では、2.4.で見たようにロシア語の文法性の対立は複数において消失すると考えて議論を展開する。そのことは多くの先行研究で主張されていることであり、また本稿のこれ以降の議論においても重要な意味を持つ。

一方、一部の PcQ は文法性に関する形態的な対立が存在している。

(40) два мальчи́ка / два пи́сьма / две кни́ги
two-nom.m/n boy-genq.m two-nom.m/n letter-genq.m two-nom.f book-genq.f
「2人の少年 / 2通の手紙 / 2冊の本」

PcQ に見られる性に関わる形態的な対立は男性・中性と女性の区別のみで3つの性全てが区別されているわけではないが、グロスに示したように PcQ *два*「2」は性に関する一致を行っている¹²。

仮に PcQP の N が複数だと仮定すると、本稿での前提である、複数では性の対立が消失しているという考え方と矛盾することになる。PcQ の性に関する情報がどこにもその出所がないことになるからである。

4.4.2.2. 異形態の生じる理由

まず第一の問題は、PcQP の N が複数属格形だと考えた場合、意味的な矛盾は消失するものの、形式的な問題が生じる。つまり、N に見られる形態が複数であると考えると、何故ここで通常の複数属格形ではなく単数属格形に似た異形が出てくるのか、特別な説明が必要になってしまう。やはり ad hoc でない説明は簡単ではないことは当然である。

ただし、説明を要する形態的現象は N が単数であると考えたとしても、4.4.1.で見たような別の問題が生じるので、複数であると考えることによって単数と考えた場合より状況が悪くなるということではない。N が単数だと考えれば形態的に複数になる箇所について説明が必要だが、複数だと考えれば形態的に単数になる部分に説明が必要になる。この表裏一体の問題は N を単数だと考えても複数だと考えても変わらず存在し、なくなることはない。

4.4.2.3. 絶対複数名詞との結合

ロシア語にも英語などと同様に単数形の存在しない絶対複数名詞 (pluralia tantum) が存在する。例えば、*ножницы*「ハサミ」、*сутки*「1日、1昼夜」、*ворота*「閘」、*часы*「時計」などがそれにあたる。

Аксенова (2001: 186)などが指摘するように、PcQP の N として絶対複数名詞を用い

¹² 他に性に関する一致を行う PcQ には *оба*「両方」、*полтора*「1.5」があるが、いずれも男・中と女の区別のみでの不完全な区別である。なお、*три*「3」、*четыре*「4」は性を一切区別しない。

4. ロシア語の数体系をめぐって

ることは以下の通り不可能である：

- (41) *два суток / *три ворот / *четыре ножниц
two-nom day-genq.pl three-nom gate-genq.pl four-nom scissors-genq.pl
「2日/3つの門/4本のハサミ」

このことは PcQ に続く N は、一般的な理解通り単数形でなければならないと考える
と説明ができる。絶対複数名詞に単数形は存在しないからである。

一方、通常の個数詞と異なる集合数詞 (collective quantifier, ColQ)¹³だと絶対複数名
詞と結合することが可能となる。以下は集合数詞の例である。

- (42) двое суток / трое ворот / четверо ножниц
two-nom day-genq.pl three-nom gate-genq.pl four-nom scissors-genq.pl
「2日/3つの門/4本のハサミ」 (Аксенова 2001: 186)

これは、個数詞 *два, три, четыре* (=PcQ) と異なり、ColQ の場合、たとえ PcQ と同じ
数量を表していても、従える名詞に HQ の場合と同様に、以下の通り複数形となるこ
とが求められるからと考えられる。

- (43) трое мальчиков
three-nom boy-genq.pl
「3人の少年」

すなわち、この点においても PcQP の N が単数であると考えた通常の理解は矛盾を来
さない。むしろ、複数であると考えるとこの点、説明がつかなくなってしまう。

さらに、主格・対格以外の語彙格環境における PcQP の振る舞いが興味深い。(29)
で見たように、主格とそれと同形の対格の場合を除き、すなわち語彙格環境におい
ては PcQP の N は形態的に複数形となる。これら語彙格環境においては、個数詞 *два,
три, четыре* (=PcQ) は絶対複数名詞を従えることが可能になる。以下はいずれも集合
数詞ではなく通常の個数詞の例である。

- (44)(a) в течение двух суток (Розенталь и др. 1994: 269)
in course two-gen day-gen.pl
「2日間の間に」
(b) с тремя ножницами (Розенталь и др. 1994: 269)
with three-ins scissors-ins.pl
「3本のハサミを持って」

¹³ 集合数詞には *двое*「2」、*трое*「3」、*четверо*「4」、*пятеро*「5」、*шестеро*「6」、*семеро*「7」、*восемьро*「8」、*девятеро*「9」、*десятеро*「10」があるとされているが、通常の個数詞でなく集合数詞を用いると「全体
で一緒に」というニュアンスが加わることが指摘されている (Розенталь 1994: 268, Аксенова 2001:
186 など参照)。ちなみに、Аксенова (2001: 186) は下に示すような語彙格環境で PcQ が絶対複数名
詞を従えている場合はこのようなニュアンスは消失すると指摘している。

4. ロシア語の数体系をめぐって

主対格では絶対複数名詞を従えられないが語彙格環境ではそれが可能となるという事実も、PcQPのNの「単数形に見える」形態が実際に単数であると考えたと矛盾なく説明ができることになり¹⁴、逆に複数であると考えたと矛盾が生じることになる。

以上、PcQと絶対複数名詞の結合可能性を考えると、Nが単数であると考えたと矛盾なく説明が可能で、複数であると考えたと矛盾が生じることを見た。

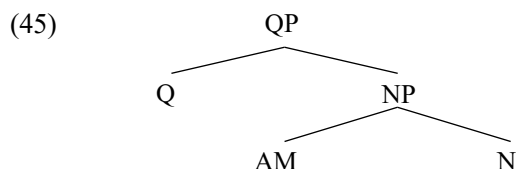
本節4.4.ではPcQPのNが伝統的な理解通り単数であると考えた場合に生じる問題点と、逆に複数と考えた場合に生じる問題を整理した。

4.5. 少数の導入

前節4.4.ではPcQPのNは単数であると考えてもあるいは複数と考えてもいずれにせ別途説明が必要な問題が生じることを見た。以下ではこれらの問題点を解消するために、秋山(2002)が提起したロシア語における3つめの数、すなわち少数(*paucal number*)を想定することでこれらの問題が解決できることを見る。

4.5.1. 秋山(2002)の提案

秋山(2002)はPcQPが示す数に関わる不可思議な振る舞いを説明するために、明確に数としての少数をロシア語に提案した。まず秋山(2002)は以下の様なQP内部のAMとNの数と格に着目する。



秋山(2002: 23-24)はQが「1」の場合、PcQの場合、HQの場合のQPの形態を以下の例を示しながら議論を開始する¹⁵。

(46)(a) один умный студент
one-nom.m clever-nom.m student-nom.m

¹⁴ この現象については説明がつくが、その場合、その一方でなぜ語彙格環境ではNが単数から複数に変わるのかの説明は別途必要である。

¹⁵ 本稿の考え方ではPcQとHQが付与する格は数量属格であり、通常の属格と異なる。しかし、秋山(2002)は数量属格を想定していない。秋山(2002)に従い本節ではグロスなどで通常の属格として全て示しているが、これは数量属格としても議論に影響はないと思われる。また、複数においてロシア語は性の対立が消失することは2.4.で見たが、ここでは文法性の他に語彙的に決まる指示対象の自然性が関係している。そのため、秋山(2002)に従い、「男子学生」を示す *студент* と「女子学生」を示す *студентка* だけは複数においても性を示している。

4. ロシア語の数体系をめぐって

「一人の賢い男子学生」

(b) два умных студента
two-nom.m clever-gen.pl student-gen.m

「二人の賢い男子学生」

(c) пять умных студентов
five-nom clever-gen.pl student-gen.pl.m

「5人の賢い男子学生」

(d) одна умная студентка
one-nom.f clever-nom.f student-nom.f

「一人の賢い女子学生」

(e) две умные/умных студентки
two-nom.f clever-nom.pl/-gen.pl student-gen.f

「二人の賢い女子学生」

(f) пять умных студенток
five-nom clever-gen.pl student-gen.pl.f

「5人の賢い女子学生」

ここでこれらの QP が主格環境にある場合、Q が「1」、PcQ、HQ のうちのいずれかによって N と AM の示す形態のパターンに違いが見られる。

N の示す形態の格と数についてまとめると以下の通りで、「1」、PcQ、HQ で異なる 3 つのパターンを示す：

(47) N の格と数

	「1」	PcQ	HQ
数	sg	sg	pl
格	Nom	Gen	Gen

すなわち、N における形態法を見ると「1」の場合は単数主格、PcQ の場合は単数属格、HQ の場合は複数属格と 3 項対立をしているとする。

一方、AM についても Q が「1」か PcQ かあるいは HQ で形態的な振る舞いがやはり 3 つのパターンを示している：

(48) AM の格と数

	「1」	PcQ	HQ
数	sg	pl	pl
格	Nom	Nom/Gen	Gen

Q が PcQ の場合、AM は 2 パターンが可能である。これは N が女性の場合、(46e) で見たように複数主格と複数属格の 2 つのパターンが選択的に可能だからである¹⁶。す

¹⁶ Гладина идр. (1976: 32)では複数主格形が 52.21%、複数属格形が 47.79%という数字が紹介されており、頻度にはそれほど大きな違いがないように見える。一方 Timberlake (2004: 187-188)では主格

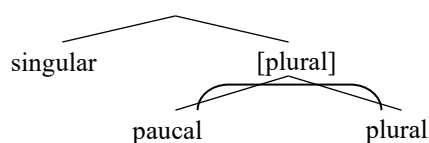
4. ロシア語の数体系をめぐって

なわち、AM の形態を見ると、「1」の場合は単数主格、PcQ の場合は複数主格(あるいは複数属格)、HQ の場合は複数属格とやはり 3 項対立が生じていると考える。

このように、AM、N とともに形態的に(一部選択的なものではあるものの)3つのパターンで対立を行い、この 3 項対立を秋山 (2002)は単数・少数・複数という数の 3 項対立を反映し、形態的に顕在化しているものであると考えた。

さらに、秋山 (2002)は Corbett (2000)が、類型論的観点から単数・少数・複数の 3 項で数に対立する場合、その数体系は以下の様に分岐しており、数の形態的対立が義務的なものでなく、つまり選択的な場合、それは少数と複数の間の対立であり、かつその対立が消失すると複数に合流すると指摘していることに着目する。

(49)



このことを受けて秋山 (2002)は 3 つの数のうち、少数(=PcQ の場合)と複数(=HQ の場合)の形態的対立が AM において選択的であることはこの一般化に反しないし、また少数と複数の対立が消失した場合、複数に合流するという一般化に反しないと指摘している。

秋山 (2002)によるこの洞察は、まだ未整理な部分があることは否めないものの、ロシア語の数に関わる形態法の奇妙な振る舞いを説明する重要な鍵となる鋭い洞察である。以下本章では秋山 (2002)に従い、現代ロシア語の数は単数・少数・複数の 3 項からなり、少数と複数の対立は場合によって消失すると考えて議論を展開する。

4.5.2. 少数の理論的整備

匹田 (2007b, 2010)では秋山 (2002)の提案を受けて、現代ロシア語において、以下の仮説を立てた。

(50)少数と複数の形態的対立は、名詞タイプの屈折を行う語以外では消失し、また数量属格以外の格ではその対立は消失する。複数との対立が失われた結果、少数は複数と融合する。

基本的には秋山 (2002)と Corbett (2000)にしたがったものであるが、名詞タイプの数量属格以外では少数と複数の対立が消えるという点が匹田 (2007b, 2010)が追加した点である。

また、匹田 (2018)は秋山 (2002)や Corbett (2000)の(49)の理解に従い、単数、複数、少数のそれぞれの数素性のあり方を以下の様に仮定した：

形の方がより一般的、との指摘がある。

4. ロシア語の数体系をめぐって

(51) [sg] = [-pl]; [pl] = [+pl]; [pc] = [+pl, +pc]

ここで Corbett (2010: 19, 2012: 20) の考え方に倣い、素性[±pc]は素性[+pl]に従属するものであり、[±pc]は[+pl]が存在する時のみ存在できる¹⁷。以上をまとめると、名詞タイプの屈折を行う語における数量属格以外で少数が複数になることを説明するために本稿では以下の規則を想定する：

(52) [GenQ]以外の格が与えられると [+pl, +pc] → [+pl]

以上の様にロシア語において少数を想定することで上記の様な様々な問題がどのように解決できるかを具体的に見る前に、まず 4.5.2.1.では、少数において性と屈折タイプの対立が存在するのを確認する。

4.5.2.1. 少数における性と屈折タイプの対立

ロシア語の文法性と屈折タイプは複数においてその対立が消失することは 2.4.と 2.5.でそれぞれ見た。では、本稿で採用する 3 つめの数、すなわち少数において性と屈折タイプの対立はどうであろうか。

まず、4.4.2.1.で見たように、PcQ のうち、「2」(及び *оба* と *полтора*) は性の一致を不完全ではあるが行う。

(53)(= 2-13)

(a) два стола / окна
two-nom.m/n desk-genq.pc.m window-genq.pc.n
「2つの机 / 窓」

(b) две книги
two-nom.f book-genq.pc.f
「2冊の本」

(a)は男性名詞の *стол*「机」を伴う場合と中性名詞の *окно*「窓」を伴う場合で男性と中性

¹⁷ 以下、この素性の組み合わせは議論上必要な場合のみ用い、議論にとくに関係のない場合はそれぞれ[sg], [pl], [pc]と略記する。

なお、Bailyn & Nevins (2008: 267)も明確に数として少数を想定している。そこでは単数が [+singular], 複数が [-singular], 少数が [-singular, -augmented] との素性を仮定している。単数を有標と考えていることなど微妙な違いはあるものの、本稿での素性の立て方と少なくとも現時点では意味のある違いはない。なお、Bailyn & Nevins (2008)と本稿の考え方には様々な違いが見られるが、Bailyn & Nevins (2008)の考え方では説明できない問題もある。

ちなみに光井 (2018)は性別に関わる一致の問題を議論するために、単数が [+sg, -pl], 複数が [-sg, +pl], 少数が [+sg, +pl] と仮定しているが、本稿とは説明しようと試みている対象が異なるため、この違いについてはここでは議論しない。

4. ロシア語の数体系をめぐって

いずれの場合も PcQ の形態は *два* であり、男性と中性の区別はない。(b)の女性の場合はそれらとは異なった形態となり、男中对女の対立のみ顕在的に見られることがわかる。この PcQ に見られる性は N に由来すると考えるのが自然であろう。従って、複数と異なり少数での性の対立はなくなると考えなければならない。

光井 (2016, 2018) はロシア語の性を [±feminine] と [±masculine] の二つの素性の組み合わせからなるとした上で、男性が [-feminine, +masculine], 中性が [-feminine, -masculine], 女性が [+feminine, -masculine] であると仮定した。匹田 (2018) でもこれに倣いかつ記法をあらためた上で、[±f] と [±m] の組み合わせによりロシア語の性ができていると考え、以下の様に 2 つの値の組み合わせによってなると考えた¹⁸。

(54) 男性 = [-f, +m]; 中性 = [-f, -m]; 女性 = [-m, +f]

ロシア語の性に対するこの捉え方に則り、匹田 (2019), Hikita (2020) では少数では二つの素性のうち、[±f] だけ残るが [±m] はないと考えた。従って、2.1.3. で見た性に関わる素性のスロットは、通常なら [±f ∅] と [±m ∅] の二つが存在するが、PcQ *два* の場合は、[±f ∅] のみで、[±m ∅] は存在しないと考えられる。

(55) (=2-14) PcQ *два* の素性と素性のスロット

数	×
性	[±f ∅]
有生性	[∅]
屈折タイプ	×
格	[∅]

ただし、同じ PcQ でも、性に関わる一致を全く行わない「3, 4」などは性に関わる素性のスロットが存在しないと考えられる。

(56) (=2-15) PcQ *три, четыре* の素性と素性のスロット

数	×
性	×
有生性	[∅]
屈折タイプ	×
格	[∅]

では、少数における屈折タイプの対立はどうであろうか。(50, 52)において示した仮説によると少数と複数の形態的対立は数量属格以外の格では消失し少数は複数に融合する。このことは(29)での斜格環境での N の形態がいずれも複数形になっていることで確認できる。そして、2.5. で見たとおり、複数において名詞の屈折タイプの対立は消失

¹⁸ 記法の改訂には簡略化以上の意味はない。ただし、光井 (2016, 2018) では総性名詞が [+feminine, +masculine] という素性を持つと考えているが、総性名詞については本稿の扱える対象ではないので、この点については議論しない。なお、仮に総性名詞の [+f, +m] が存在しないとしたら、[+pc] が [+p] に従属しているのと同じように [±m] は [-f] に従属している素性と言うことになるのかも知れないが、この点も本稿では議論の対象とせず、今後の課題として残す。

4. ロシア語の数体系をめぐって

する。

一方、主格環境にある場合、および主格の場合と同形態の対格環境にある場合、N は数量属格が付与されているので少数形は複数形とは異なる別個の(単数属格形に非常に似通った)形態を有している。そして、この少数数量属格の形態は、単数属格形と同様に、第一変化名詞で-a, 第二変化と第三変化名詞では-i となっており、[II]と[III]の形態に融合が見られるものの、2つの形態の違いは屈折タイプに対応していると考えべきであろう。その点で屈折タイプとは異なる音韻的な条件で異形態が決まる複数属格とは性質が異なっている。(複数属格の形態について詳細は 2.5. やそこで指摘した Levin 1978, Шведова и др. 1980: I 493-503, Jakobson 1984, Pertsova 2005, 2014, Bailyn & Nevins 2008, Nørgård-Sørensen 2011 などを参照。)

以下本稿ではロシア語の名詞の屈折タイプを以下の様に捉え、屈折タイプの形態的対立は少数においても消失しないと考えることとする。

(57)

	SG				PAUC			PL
	I	II	III	I	II	III		
NOM	-∅	-a	-∅	-i/-a				
ACC	↓	-o	-u	↓				
GEN	-a	-i	-i	-∅/-ej/-ov				
LOC	-e	-e		-ax				
DAT	-u			-am				
INS	-om	-oj	-ju	-ami				
GENQ	X			-a	-i	-i	-∅/-ej/-ov	

4.5.2.2. 説明すべき問題

PcQP の N が単数であると考え、あるいは逆に複数であると考えると生じる矛盾や説明できない問題にどのようなものがあるかについては 4.4. で概観した。本節では N が少数であると考え、それらの問題点が全て消失することを見る。

具体的な議論を始める前に(50)をルール化しておく。なお、主旨の半分は既に(52)で規則化している。

(58)(a)=(52) [GenQ]以外の格が与えられると [+pl, +pc] → [+pl]

(b) 名詞的に屈折しなければ [+pl, +pc] → [+pl]

4.5.2.2.1. 意味的な問題

もし PcQP の N が一般的な理解通りに単数であるとする、「単数」という意味と指示対象の数量に矛盾が生じることは 4.4.1.1. で見た。また、PcQ はいずれも具体的な数量を明らかにするものである以上、不可算名詞を従えることはできないので、当然不可算名詞であるが故の単数形ではあり得ない。しかし、N が少数であるとする

4. ロシア語の数体系をめぐって

と、このような矛盾は消失する。PcQ の表す、最小で「1.5」から最大で「4」という数量は少数という文法カテゴリーが示す数量としてはまったく妥当なものであると思われるからである。ちなみに、この意味的な問題については N の数が見た目に反して実は複数であると考えても、少数と考えるのと同様に問題は生じない。

4.5.2.2.2. 数を「支配」する数量詞

PcQP の N が一般的な理解の通り単数だとするとそれは PcQ が N に数を要求する、あるいは数を「支配」していると考えざるを得ないことは 4.4.1.2. で指摘した。確かにその考えに沿って説明を行っている先行研究もあるが、一般的にロシア語では他の語句に格以外の文法範疇を支配することは見られないので、例外的な規定が必要であることになる。

しかし一方で、本稿のように PcQP の N が単数ではなく少数であると考えたと、Q による要求・支配を規定しなくても意味的に決まることになる。ただし、少数と複数の対立は常に有るわけでは無く、時に消失するので、どのような場合にそれらが残るか、あるいは消失するかを正しく予測できなければならない。本稿では基本的に少数と複数の対立の有無に関する予測は(58)で述べた通りであるが、これで問題無いことは以下の各節で見えていく。

4.5.2.2.3. N のそれぞれの格環境における形態

すでに 4.4.1.3. で見たように、主格と対格以外の格環境では PcQP の N はいわゆる単数属格形、すなわち少数数量属格形で現れることはない。

(59)(=29)

	「2 脚の机」	「2 人の少年」
主格	два <i>стола</i> two-nom desk-genq.sg	два <i>мальчика</i> two-nom boy-genq.sg
対格	два <i>стола</i> two-acc desk-genq.sg	двух <i>мальчиков</i> two-acc boy-acc.pl
属格	двух <i>столов</i> two-gen desk-gen.pl	двух <i>мальчиков</i> two-gen boy-gen.pl
処格	двух <i>столах</i> two-loc desk-loc.pl	двух <i>мальчиках</i> two-loc boy-loc.pl
与格	двум <i>столам</i> two-dat desk-dat.pl	двум <i>мальчикам</i> two-dat boy-dat.pl
具格	двумя <i>столами</i> two-ins desk-ins.pl	двумя <i>мальчиками</i> two-ins boy-ins.pl

ここで主格環境と対格環境の *стола*、主格環境の *мальчика* だけが少数数量属格形(すなわち、いわゆる単数属格形)で、残りの格環境で N は全て複数形となっている¹⁹。

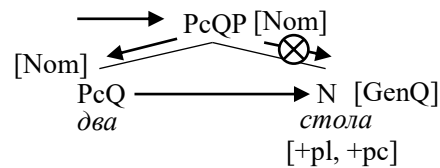
¹⁹ ちなみに、有生名詞の一部が対格環境で属格形になる、いわゆる有生性の一致を示すが、この場合本稿では対格形ではなく属格形であると考えている。詳しくは 5. で論じる。

4. ロシア語の数体系をめぐって

この言語事実は 2.3. で前提とした格の付与と浸透，上書きのシステムと(58)で正しく予測される。

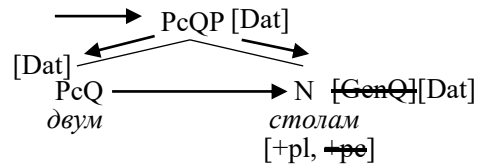
まず，構造格環境の例として「2脚の机」の主格環境の場合を見てみよう。以下の樹形図に見られるように，節点 PcQP に句の外部から[Nom]が付与されており，また PcQ が N に[GenQ]を付与している。PcQP から PcQ には邪魔するものがないので [Nom]が浸透することができるが，[Nom]と[GenQ]はいずれも構造格なので(2-45)に従い先に付与されている[GenQ]に後から浸透してくる[Nom]が上書きすることは不可能である。

(60)



続いて，語彙格環境の例として与格の場合を見てみよう。

(61)



まず PcQP 内部で PcQ が N に[GenQ]を付与するのは同じである。ただし，この場合は PcQP に付与された格は語彙格であるため，[Dat]は格のスロットが空の PcQ だけでなく既に[GenQ]が付与されている N にも浸透し[GenQ]を[Dat]で上書きすることになる(2-45 による)。その結果，少数は数量属格以外ではその対立が維持できないので(58a)に従い素性[+pc]が削除され，結果として複数[+pl]になる。それ故，語彙格環境における PcQP の N が複数形になると正しく予想される。

4.5.2.2.4. 一致定語の数

PcQP に現れる一致定語はいずれも複数形になることは 4.4.1.4. でみた。

4. ロシア語の数体系をめぐって

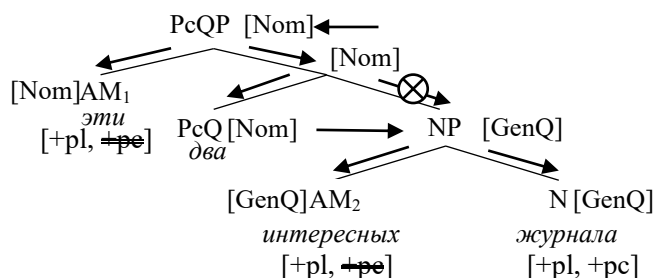
(62)(=34)

	「これら 2 冊の面白い雑誌」			
主格	<i>эти</i> this-nom.pl	<i>два</i> two-nom	<i>интересных</i> interesting-genq.pl	<i>журнала</i> magazine-genq.sg
対格	<i>эти</i> this-nom.pl	<i>два</i> two-acc	<i>интересных</i> interesting-genq.sg	<i>журнала</i> magazine-genq.sg
属格	<i>этих</i> this-gen.pl	<i>двух</i> two-gen	<i>интересных</i> interesting-gen.pl	<i>журналов</i> magazine-gen.pl
処格	<i>этих</i> this-loc.pl	<i>двух</i> two-loc	<i>интересных</i> interesting-loc.pl	<i>журналах</i> magazine-loc.pl
与格	<i>этим</i> this-dat.pl	<i>двум</i> two-dat	<i>интересным</i> interesting-dat.pl	<i>журналам</i> magazine-dat.pl
具格	<i>этими</i> this-ins.pl	<i>двумя</i> two-ins	<i>интересными</i> interesting-ins.pl	<i>журналами</i> magazine-ins.pl

このことは PcQP の N が単数であると考えたと説明がつかない現象である。

N は前節でも議論したとおり、一見「単数形」であったり複数形であったりするのに対して、AM は常に複数形である。この問題は N *журнала* の数が単数ではなく少数であると考えたと矛盾なく解決できる。(58b)により、名詞タイプの屈折を行わない形容詞などでは少数と複数の対立は消失し、少数は複数と融合するからである。構造格環境の例として主格の場合を見てみよう。

(63)



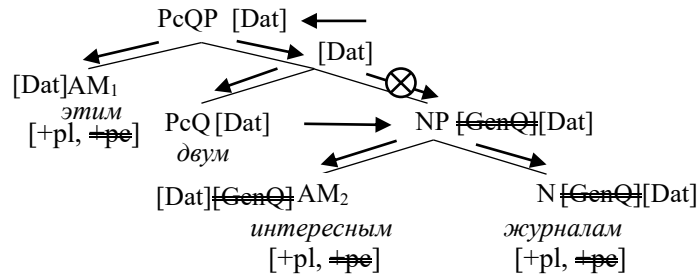
まず、AM₂ *интересных* と N *журнала* が併合し、NP が形成される。その結果、N の数素性 [+pl, +pc] が AM₂ にコピーされるが、*интересных* は形容詞であり、名詞タイプの屈折を行わない。そのため(58b)により複数と少数の対立は維持できないので [+pc] が消去され、結果、AM₂ の数素性は複数 [+pl] になる。PcQ *два* と NP が併合すると、PcQ によって NP に [GenQ] が付与され、それが AM₂ と N に浸透する。この場合、AM₂ の格は [GenQ] だが、そもそも形容詞タイプの屈折を行うので(58b)により少数は複数に書き換えられる。さらにそれに AM₁ *эти* が併合し節点 PcQP が形成されるとやはり N から数素性 [+pl, +pc] がコピーされる。この素性はこの時点では格が付与されていないので、格による条件では数素性にとくに変更は生じない。しかし *эти* は形容詞タイプの屈折を行うのでやはり(58b)により少数と複数の形態的対立は維持できない。その後、PcQP 全体が句外部の何らかの主格を付与する要素と併合すると PcQP に付与された [Nom] は下に浸透して行き、AM₁ や PcQ *два* は [Nom] を得る。一方、NP には

4. ロシア語の数体系をめぐって

既に PcQ により [GenQ] が付与されているので、同じ構造格どうしなので [Nom] によって [GenQ] が上書きされることはない。このように、構造格環境にある PcQP の形態は正しく予測されている。

では、語彙格環境にある場合はどうであろうか。与格環境の場合を例として検討する。

(64)



この場合は、まず AM₂ と N が併合し節点 NP が形成されると同時に N から AM₂ に数素性 [+pl, +pc] がコピーされる。AM₂ *интересным* は名詞と異なる屈折タイプに属する形容詞なので少数と複数の対立は(58b)により消失するので [+pc] はコピーされると同時に削除され、複数になる。N についてはこの時点では数素性に変更が加わる理由はない。続いて PcQ と NP が併合されると PcQ が NP に [GenQ] を付与し、それが AM₂ と N に浸透する。この付与と浸透を妨げるものはない。続いてその句に AM₁ が併合し、N から数素性 [+pl, +pc] を受け取る。AM₁ *этим* は名詞と異なる屈折タイプに属する指示代名詞なので形容詞の場合同様(58b)により [+pc] が削除され複数になる。その後何らかの格付与子が PcQP と併合し、PcQP に [Dat] が付与される。この [Dat] は下へと浸透して行くが、この浸透を妨げるものではなく、AM₁, AM₂, PcQ, N 全ての末端まで浸透する。NP とそれに支配される節点には既に [GenQ] が付与されているが、(2-45)の規定により、構造格の [GenQ] は語彙格の [Dat] に問題無く上書きされる。また、[Dat] が浸透して N も [GenQ] ではなく [Dat] になったため、(58a)の規定により、 [+pc] が削除され、N も複数になる。このように語彙格環境では、AM₁, PcQ, AM₂, N の全てが複数形になっていることは正しく予測されている。

4.5.2.2.5. 形容詞タイプの名詞

形容詞タイプの屈折を行う名詞は単数属格ではなく複数属格になるのは(58b)によって正しく予想される。少数と複数の対立は名詞の屈折タイプでなければ消失するからである。つまり、形容詞タイプの名詞は AM とまったく同じ理由で(58b)により複数になる²⁰。

²⁰ Siegel (1976)や匹田 (2000)などはロシア語の長語尾形容詞は何も修飾していないように見える場合でも何らかの見えない名詞を修飾しており、名詞句を構成していると述べている。もしこれが正

4. ロシア語の数体系をめぐって

(65)(=37) два животных
two animal-genq.pl.
「2匹の動物」 (Шведова и др. 1980:I:576)

(66)(=38) два Достоевских
two Dostoevsky-genq.pl
「2人のドストエフスキー」

この問題も、N が実は複数であると考えれば当然とも言えるかも知れない。もちろん、その場合は単数形に見える N の形の方が問題になる。

4.5.2.2.6. 性の対立

PcQ のうちいくつかのものは部分的にはあるが、性を形態的に区別することは 4.4.2.1. で示した。

(67)(=40) два мальчика / два письма / две книги
two-nom.m/n boy-genq.m two-nom.m/n letter-genq.m two-nom.f book-genq.f
「2人の少年 / 2通の手紙 / 2冊の本」

と言うことは、この性素性の出所として N に性の区別が必然的になくはないが、PcQP の N が実は複数であると仮定すると 2.4. で述べたとおり本稿では複数では性の対立がないと考えるので、この点に矛盾が生じてしまう。しかしこの点も、N が複数ではなく少数であり、少数には性の対立が部分的に残っていると考えれば問題は消失する。

2.1.1.1. で示したように、本稿では性を[±f]と[±m]の2つの素性の組み合わせによって表現し、男性:[+m, -f]、中性:[-m, -f]、女性:[-m, +f]とする。つまり、[±f]が女性かそれ以外か、女性の場合[±m]が男性か中性かを示すと考える。そして、PcQ のうち N の性の違いを形態的に表示するものはいずれも女性かそれ以外かだけである。従って以下では、少数における性の素性は[±f]のみになると考える。

(68) ロシア語の性のあり方

- (a) 単数:[±f, ±m]
- (b) 少数:[±f]
- (c) 複数:×

なお、少数が複数に融合した場合は結果として性の素性も消失することとなる。

4.5.2.2.7. 単数属格とは異なる形態

N が単数属格であるとする、以下の様に PcQP の N と通常の単数属格形でま

しいのなら、ここでの形容詞タイプの名詞も実は名詞を修飾する AM と考えて良いのかもしれない。

4. ロシア語の数体系をめぐって

形が異なる場合の条件が説明がつかないことは 4.4.1.6. で指摘した。しかし、PcQP の N は単数属格形ではなく少数・数量属格形であると考えれば、一部分であれ単数属格形と形態が異なるのはむしろ当然なことである。逆に言えば、形が異なる部分があるという事実が PcQP の N が単数属格形とは異なったものであることを示してくれていると言えよう。

(69)(=39) два часа́ / около́ часа́
two hour-genq.sg about hour-gen.sg
「2 時間／約 1 時間」

また、当然複数属格であると考えてもこの同じ問題はまったくなくなるが、少数と考えれば単数・複数のいずれとも形態が異なるのは当然と考えられる。

4.5.2.2.8. 絶対複数名詞との結合

PcQ が絶対複数名詞と結合できないという事実は、逆に PcQP の N が見た目に反して複数形であると考えると説明できない問題を生む。

(70)(=41) *два суток / *три ворот / *четыре ножниц
two-nom day-genq.pl three-nom gate-genq.pl four-nom scissors-genq.pl
「2 日 / 3 つの門 / 4 本のハサミ」

通常理解通り N が単数形であると考えると、PcQ が絶対複数名詞を従えられないことは自明の理であるが、仮に PcQP の N が複数形だと考えるとそこには何か特別な説明が必要となる。これが解決すべき 1 つめの問題である。

また、同じ「2～4」を表すものでも ColQ であれば絶対複数名詞と結合することが可能である。

(71)(=42) двое суток / трое ворот / четверо ножниц
two-nom day-genq.pl three-nom gate-genq.pl four-nom scissors-genq.pl
「2 日 / 3 つの門 / 4 本のハサミ」 (Аксенова 2001: 186)

この違いは何故生じるのか？これが 2 つめの問題である²¹。

さらに、PcQP の N が絶対複数名詞であっても、語彙格環境では問題がない。

(72)(=44) (a) в течение двух суток
in course two-gen day-gen.pl
「2 日間の間に」 (Розенталь и др. 1994: 269)
(b) с тремя ножницами
with three-ins scissors-ins.pl
「3 本のハサミを持って」 (Розенталь и др. 1994: 269)

²¹ ちなみに ColQ の付与する格は GenQ と考えられる。詳しくは 9.1.2. で議論する。

4. ロシア語の数体系をめぐって

なぜ、語彙格環境だと適格になるのか、これが3つめの問題である。

以下本節では、絶対複数名詞との結合可能性にまつわる3つの問題はPcQPのNが少数であると考えerること説明が可能となることを示す。その前に、少数に関わる理論的な問題をいくつか整理・確認しておきたい。

第1に、本稿では(51)に示したように、ロシア語の数の素性のあり方を以下の通りと理解する：

(73)=(51)[sg] = [-pl]; [pl] = [+pl]; [pc] = [+pl, +pc]

また、2.1.3.ではPcQの文法素性とそのスロットのあり方を以下の様に示した。

(74)=(2-14)PcQ「2」の文法素性とそのスロット

数	×
性	[±f ∅]
有生性	[∅]
屈折タイプ	×
格	[∅]

(75)=(2-15)PcQ「3, 4」の文法素性とそのスロット

数	×
性	×
有生性	[∅]
屈折タイプ	×
格	[∅]

つまり、2.1.3.での理解ではPcQはいずれも数に関する素性スロットはない。これはPcQがいずれも数による形態的対立を示さないことから至った考えであるが、本稿では形態的対立がないのは単に少数の名詞以外を従えることができないからであると考え、むしろなぜ少数以外のNが許されないのかを説明することを目指す。まず匹田(2018, 2019)、Hikita(2020)に従い、PcQは本来素性として少数を持っていると考える。つまり、上の「2」と「3, 4」の素性は以下の様に変更することになる。

(76)PcQ「2」の文法素性とそのスロット(改訂版)

数	[+pl, +pc]
性	[±f ∅]
有生性	[∅]
屈折タイプ	×
格	[∅]

(77)PcQ「3, 4」の文法素性とそのスロット(改訂版)

数	[+pl, +pc]
性	×
有生性	[∅]
屈折タイプ	×
格	[∅]

4. ロシア語の数体系をめぐって

この点において、通常の PcQ が数に関する素性を持たない、という理解とは大きく異なっていることになる。

ここで上で示した数に関わる以下の規則を思い返して頂きたい。

(78)(=58a) [GenQ]以外の格が与えられると [+pl, +pc] → [+pl]

この規則が絶対複合名詞との結合可能性について正しく予測してくれることを確認したい。例えば以下の例を見てみよう(素性の表記法はグロスでは簡略化する)。

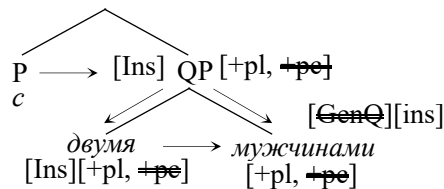
(79) два мальчи́ка
two-nom.pc.m boy-genq.pc.m
「2人の少年」

ここで PcQ *два* は本来的に数素性[pc](=[+pl, +pc])を持っており、それによって PcQ と N の一致関係が認められる。N が複数属格の *мальчиков* であれば一致関係が成立しないので、当然非文として排除されることになる。

以上は主格環境の例だが、語彙格環境に置かれた場合は素性に書き換えが起こる。以下は具格の場合である：

(80)(a) (...) познакомились с двумя мужчинами (...)
become_acquainted with two-ins.pl man-ins.pl
「2人の男性と知り合った」 (НКРЯ 2022.02.23)

(b)

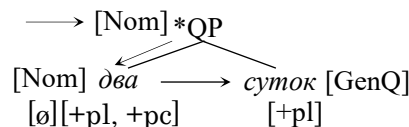


ここで、PcQ *двумя* と N *мужчинами* が併合すると、PcQ が N に [GenQ] を付与する。この時点で PcQ, N とともに数素性 [+pl, +pc] に変化はない。しかし具格付与子である前置詞 *с* と QP が併合すると、QP に付与された [Ins] が PcQ と N に浸透して行き、N の [GenQ] が [Ins] に書き換えられ、結果として PcQ, N とともに (78) によって数素性が少数から複数に変わる。

こう考えると PcQ が絶対複数名詞と結合できないことは説明がつく。

(81)(a)(=41) *два суток / *три ворот / *четыре ножниц
two-nom day-genq.pl three-nom gate-genq.pl four-nom scissors-genq.pl
「2日 / 3つの門 / 4本のハサミ」

(b)

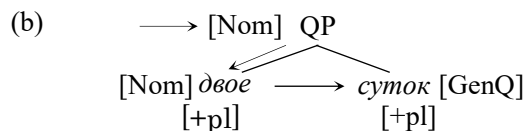


4. ロシア語の数体系をめぐって

ここで、PcQ *два* が数素性として少数[+pl, +pc]を持っているのに対して N *суток* は複数[+pl]を持っている。この間に一致の関係が成立しないため、非文となっているのである。なお、ここでは示さなかったが、PcQ *два* は性に関する一致を行うため、空の性のスロットを持っている。しかし絶対複数名詞には性が存在しようがないので、性に関わるスロットを埋めることはできない。この点も **два суток* が非文となることに関係していると言えよう。ただし、「3, 4」についてはそもそも性の区別がないのでこの点は問題とならない。

一方、本稿では ColQ は本来的に[+pl]を持っていると考える。そう考えれば以下のように絶対複数名詞を伴っても全く問題がないことが説明ができる。

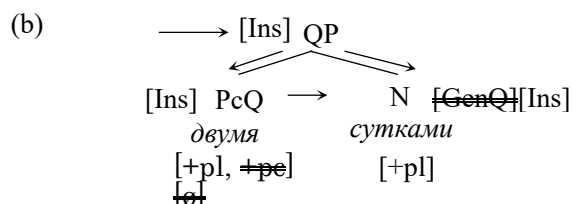
(82)(a)(=42) *двое суток / трое ворот / четверо ножниц*
 two-nom.pl day-genq.pl three-nom.pl gate-genq.pl four-nom.pl scissors-genq.pl
 「2日 / 3つの門 / 4本のハサミ」 (Аксенова 2001: 186)



こちらでは Q も N も同じ数素性を持っており、一致の関係が成立しており、適格となることが正しく予測されている。

また、語彙格環境だと PcQ も絶対複数名詞と結合できることも正しく予測できる。

(83)(a) *двумя сутками* (Зализняк 1964: 35)
 two-ins.pl day-ins.pl
 「2日間」



この場合、外から付与された語彙格の[Ins]が[GenQ]が既に付与されている N も含め全ての節点に浸透してくる。結果(78)により少数[+pl, +pc]は複数[+pl]になり、PcQ と N の間に一致の関係が成立し、適格であると正しく予測される。また、複数では数の対立が消滅するので、PcQ の性素性のスロットも以下の規則によって消滅するので、この点での問題もなくなる。

(84)(=2-70)[gender X] → ø, if [pl]

以上の様に、ロシア語の数に少数を想定することで絶対複数名詞との奇妙な結合の可否についても説明が可能である。本稿では以下 PcQ とそれに対応する ColQ の絶

4. ロシア語の数体系をめぐって

対複数名詞の結合可能性に関わる振る舞いを本来的に持っている数のあり方によるものと考えて議論を展開する。

ただし、この考え方にも問題がないわけではない。まず第1に、本稿ではこれまで一致の現象を原則素性のコピーによって説明してきた。しかし、PcQ と ColQ は本来的に数に関わる素性の値が定まっていると言うことは、N との一致が適格かどうかを判断するために素性照合のような素性のコピーとは全く別の手続きを想定しなければならないことになる。そしてそれがないと(81)だけでなく以下の例が非文である説明が不可能になる。

(85)*два студентов
two-nom.pc-f student-genq.pl
「2人の学生」

つまりこの場合、素性照合という別の手続きがなければ、PcQ と N の素性の値の違いを避けることはできない。

そこで本稿では、匹田 (2018, 2019), Hikita (2020)と同様に PcQ と ColQ の違いが数素性のあり方に関わるものであるとしながらも、その違いは素性の値ではなく、素性を受け入れるスロットがいくつあるかの違いによると考える。

(86)「2」の文法素性とそのスロット(再改訂版)

数	[$(\pm pl \emptyset), (\pm pc \emptyset)$]
性	[$\pm f \emptyset$]
有生性	[\emptyset]
屈折タイプ	x
格	[\emptyset]

(87)「3, 4」の文法素性とそのスロット(再改訂版)

数	[$(\pm pl \emptyset), (\pm pc \emptyset)$]
性	x
有生性	[\emptyset]
屈折タイプ	x
格	[\emptyset]

そして、ColQ の素性とそのスロットは以下の様に想定する：

(88)ColQ の素性とそのスロット

数	[$(\pm pl \emptyset)$]
性	x
有生性	[\emptyset]
屈折タイプ	x
格	[\emptyset]

すなわち、PcQ は少なくとも数量属格を与えられれば数の値を受け入れるスロットを2つ持つ一方、ColQ は1つしかないと考える。そしてその上で以下のある種の

4. ロシア語の数体系をめぐって

表層フィルターを想定する²²：

- (89)(a)*[(\emptyset)]
 (b)*[(x, y)]

まず、(a)はスロットが埋まらずに空のままでは非文となることを意味し、(b)は1つのスロットに2つの値が入っていると非文になることを表している。また、それに伴い(78)を以下の通り改める：

- (90)[GenQ]以外の格が与えられると $[\text{num } (\pm\text{pl } x), (\pm\text{pc } y)] \rightarrow [(\pm\text{pl } x)]$

これは、(78)が数量属格以外の格が与えられると少数[+pl, +pc]が複数[+pl]に書き換えられるという規則だったのに対して、値によって埋められているかどうかに関わらず数量属格以外の格では数のスロットが1つに減らされることを意味している。

これは規定の仕方こそ異なっているが、もたらす結果は同じである。いくつか例を確認しよう。まず PcQ の例である。

- (91)(a) два мальчика
 two-nom-pc boy-genq,pc
- (b) \rightarrow [Nom] QP [+pl, ~~+pc~~][an]
- два [Nom] [+pl, +pc] [-f][an]
 мальчикa [GenQ] [+pl, +pc] [-f][an]

この例では PcQ の数の2つのスロットが正しく1つずつの値を受け入れており適格となる²³。

以下は ColQ の例である。

- (92)(a) двое мальчиков
 two-ColQ.nom.pl boy-genq.pl
- (b) \rightarrow [Nom] QP [+pl][an]
- двое [Nom] [(+pl)][an]
 mal'čikov [genq] [+pl][an]

この場合は ColQ の1つしかない数のスロットが正しく1つの値で埋まっている。

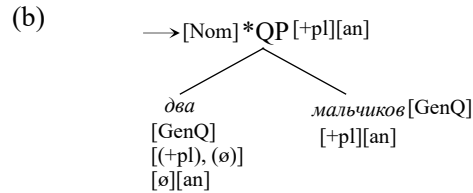
²² 本稿では他にも表層フィルターを設定する。8を参照。

²³ PcQ *два* が[Nom]を与えられているのに(90)によって数が[+pl]になっていないことは性素性[-f]が消失していないことに見て取れる。[+pl]なら(84)によって性が削除されているはずだからである。この問題は6で議論し、別の提案を行う。

4. ロシア語の数体系をめぐって

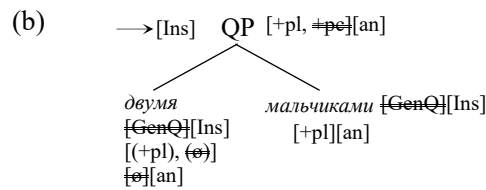
一方、以下の例は数のスロットが一つしか埋まらず空のスロットが残っているので非文である。

(93)(a) *два мальчиков
two-nom.pl boy-genq.pl



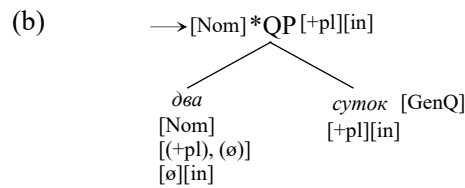
しかし、同じ PcQ でも語彙格では数のスロットが1つになるので N が複数でも問題なくなる。以下は具格の例である。

(94)(a) двумя мальчиками
two-ins.pl boy-ins.pl



PcQ と絶対複数名詞が結合できないのは2つある数のスロットが一つしかない絶対複数名詞の数素性では埋まらないからである。

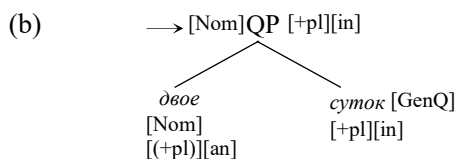
(95)(a) *два суток
two-nom.pl day-genq.pl



しかし、ColQ なら問題はない。数のスロットが1つしかないからである。

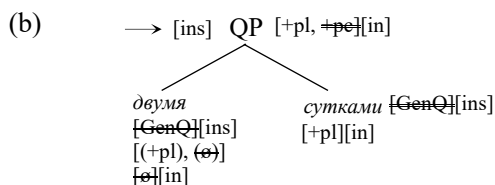
(96)(a) двое суток
two-ColQ.nom.pl day-genq.pl
「2日間」

4. ロシア語の数体系をめぐって



PcQ も語彙格環境であれば問題ない。数のスロットが1つ削除されるからである。

(97)(a) *двумя сутками*
two-ins.pl day-ins.pl
「2日間」



なお、本稿では HQ には数のスロットは存在しないと考える。それ故、HQ が少数・数量属格形の N と結合できないのは素性とそのスロットの問題ではなく、HQ は意味的に「少数」の N と結合不可能だからと考える。

(98) **пять мальчика*
five-nom boy-genq.pl

「5人の少年」

なお、このように PcQ が数に関して空のスロット[(∅), (∅)]を持っているとするならば、このことは PcQ の数が文脈的素性であることになり、AM や「1」と同じであることを意味する。

(99)

	1	PcQ	HQ	NQ	QCN
数	[(∅), (∅)]	[(∅), (∅)]	×	[sg/pl]	[sg/pl]

つまり、連続体の左端に位置する「1」と PcQ は AM 的性質である、数に関する空スロット(=文脈的素性)を持つものに対して、NQ や QCN は N 的性質である本来的素性を持っており、Q の持つ連続体的性質を綺麗に示していることになる。

4.5.3. PcQP を主語とする述語の一致

QP 内での一致定語(AM)の一致形態については少数を想定することで問題無くその言語事実が予測できることは上で見た。本節では、本章の当初の疑問点であった PcQP を主語とする場合の述語の一致が、少数を想定することで正しく予測されることを見る。このことは少数を想定することを支持する強い議論となる。

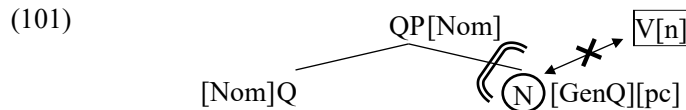
PcQP を主語とした場合の述語は上で見たように pl.3 の場合と n.sg.3 の場合の2パ

4. ロシア語の数体系をめぐって

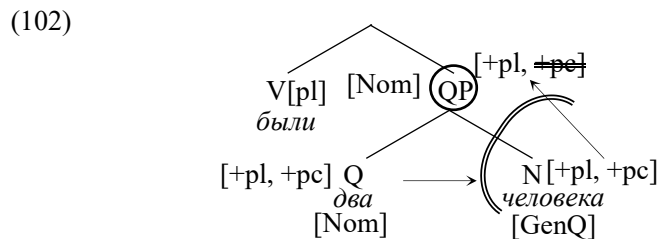
ターンの一致が可能である。以下の(a)で述語動詞は pl.3 での一致を、(b)では n.sg.3 での一致が見られる。

- (100)(=5)(a) Перед ним были два человека (...)
 in_fron_of he-ins be-pa.pl two-nom person-genq.sg
 「彼の前には2人の人がいた」(НКРЯ 2021.03.09)
- (b)(...)в одном городе было два человека (...)
 in one-loc city-loc. be-pa.n two-nom person-genq.sg
 「ある町に2人の人がいた」(НКРЯ 2021.03.09)

まず、(b)の n.sg.3 のパターンは 3.で議論し、また本章冒頭でも言及したように、QP では CB を越えて述語の一致の Ctrl を指定することができるが、数量属格を付与されている N を指定しても実際には主格ではないため一致を行うことができず、結果としてデフォルトの n.sg.3 の形態になると考えれば説明ができる。



では、(a)の pl.3 の場合はどうであろうか。以下は pl.3 の一致が見られる例文(100a)に対応し、関係する箇所のみ切り取ったものである。



まず、Q と N が併合し QP が形成されると Q が N に[GenQ]を付与し、N を囲むように CB が形成される。さらに、N から Q と QP に数素性[+pl, +pc]のコピーが行われる。このことは典型的 NP ではあり得ない CB を越えた素性のコピーではあるが、少なくとも数素性が CB を条件によっては越えてコピーできることが QP の典型的 NP と異なる特徴であると本稿では考える²⁴。続いて QP は何らかの動詞などと併合する。ここでは便宜上単に V とだけしておく。さらに QP の外にある何らかの格付与子によって主格が付与され、その結果(90)により少数[+pl, +pc]は複数[+pl]になる。そして○で囲んで示してあるように述語の一致の Ctrl に QP を指定すると述語は結果として pl.3

²⁴ PcQ *два* は性に関して部分的に一致をするので性の素性[±f]も CB を越えてコピーされると考えるべきであるが、ここでは述語の一致に関わらないのでその点は問題としない。どのような素性が CB を越えてどのような条件でコピーされるかは 5.と 7.で整理する。

4. ロシア語の数体系をめぐって

の一致を行うことが正しく予想される。

以上の様に、少数を想定することで PcQP を主語とする述語が pl.3 での一致を示すことを正しく説明・予測することが可能である。

4.5.4. N が女性名詞の場合

前節で示したように、PcQP では [PcQ - AM - N] と語が並び、かつそれが構造格環境にあるとき AM は少なくとも形態的には複数数量属格形となる。その形態は(103a)に見られる。その一方で、(103b)に見られるように、N が女性名詞の場合、同じ環境の AM が複数主格形になることも可能である。

- (103)(a) две красивые лампы
two-nom.+f beautiful-genq.pl lamp-genq.pc.f
- (b) две красивые лампы
two-nom.+f beautiful-nom.pl lamp-genq.pc.f
「2つの美しいランプ」 (Pesetsky 2013: 119)

ちなみに Граудина и др. (1976: 32)には、複数数量属格形が 47.79%、複数主格形が 52.21%という頻度に関するデータが紹介されている。一方、Кохтев и Розенталь (1984: 157)には複数主格形の方が「より頻繁に」用いられるとの言及があり、Бельчиков (2008: 259)は、複数主格形が「標準語の規範」であるとしながらも、現代の口語では、とくに N が人間を示す場合、複数数量属格形が主格形と並び「規範的」と認められる傾向にあるとしている。

ここで起こっていることは何なのか？AM が複数数量属格形になるメカニズムは上で示した通りだが、では N が女性の場合、どのようなメカニズムでもう一つの形態が可能となっているのであろうか？本節はこの点について議論を行う。

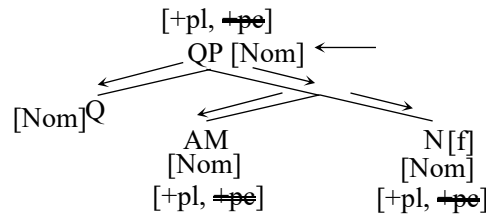
ロシア語の女性名詞は、不変化名詞をのぞくと第 2 変化と第 3 変化名詞に属するが、それらは原則単数属格形(ここで問題となるのは少数数量属格形であるが)と複数主格形がほとんどの場合同じ形態となる。例えば、第 2 変化名詞の *мама*「お母さん」であれば、*мамы* は単数属格形(あるいは少数数量属格形)であると同時に複数主格形である。

このことを踏まえて、匹田 (2019)は N が女性名詞の場合、PcQ が格付与能力を失うと考えた。つまり、(103b)は次のように再解釈される：

- (104)(a) две красивые лампы
two-nom.+f beautiful-nom.pl lamp-nom.pc.f

4. ロシア語の数体系をめぐって

(b)



ここで、N が女性名詞であることを理由に Q は格付与能力を失っている。そのため数量属格の付与による CB の形成は起こらず、句の外部から付与された主格[Nom]は妨げるものがなく、全ての末端まで浸透している。結果として、N とそこから数素性がコピーされた全ての節点の少数[+pl, +pc]が複数[+pl]に変わる。つまり、(103b)における解釈では N は少数数量属格であるとしているが、新しい解釈ではこれは複数主格形であることになる。

この考え方はまず、Corbett (2006: 196-192)が指摘する以下の事実に合致する。

- (105)(a) На столе лежало/ лежали четыре больших книги.
on_the_desk lie-pa.n -pa.pl four-nom big-genq.pl book-genq.pc
- (b) На столе *лежало/ лежали четыре большие книги.
lie-pa.n -pa.pl big-nom.pl book-nom.pl

「机の上に4冊の大きな本があった」(Corbett 2006: 196-197)

すなわち、AM が複数主格形の場合は、本来 PcQP が主語の場合 pl.3 と n.sg.3 の2パターンの述語の一致が可能であるはずなのに、pl.3 のみが可能である。このことは(104)で見たように AM が複数主格形である場合は PcQ による数量属格の付与が行われておらず、結果として句の内部の全ての節点が主格であると考えると問題なく説明できる。どの節点が一致の Ctrl に指定されても、一致できずに n.sg.3 の一致のパターンを述語に引き起こすことはあり得ない。n.sg.3 の一致が不可能で pl.3 のみ可能であると言うことをこの解釈は正しく説明できていることになる。

また、この解釈を採用すると(2-39, 2-40)の数量詞の連続体に連続体性を損なうことなく当てはめることができる。(2-40)の特徴「(ii)格を付与する」を改め、格付与関係の特徴を変更したのが以下のものである：

(106)

		形容詞的(dependent) ←					→ (head)名詞的	
		1	2	3, 4	5	100	1,000	1,000,000
(ii)	格を付与する	a					n	
(vii)	語彙格を付与する	a					n	

PcQ の範囲に格付与を行う場合と行わない場合があるものの、形容詞的特徴と名詞的特徴が表の左右に分かれて分布しているため連続体性は損なわれることはない。

4. ロシア語の数体系をめぐって

この点から見ても AM が主格の場合は格付与が行われていない、とする考えはこれまでの考え方に矛盾しないことになる。

また、女性名詞の単数(少数)属格(数量属格)形と複数主格形が基本的に同形態であることがこのような AM の形態が可能となることに関係があると推測されるが、数的には少数派ではあるものの、単数(少数)属格(数量属格)形と複数主格形でアクセントの位置が異なる語もある。例えば、*река*「川」の単数属格形は *реки*、複数主格形は *реки*、*страна*「国」ならそれぞれ *страны* と *страны*、*гора*「山」なら *горы* と *горы* となる。

Rappaport (2002: 338)はこのように、PcQP の N が単数属格と複数主格でアクセントが異なる女性名詞の場合は PcQ と N の間にある AM は複数(数量)属格形でなければならないと指摘する(アクセントは単数属格での位置にあることに注意)：

(107) две широких / *широкие реки
two-nom.+f broad-genq.pl broad-nom.pl river-genq.pl
「2本の広い川」 (Rappaport 2002: 338)

この指摘が事実であれば、AM が複数主格の場合、N はやはり複数主格でなければならないということになり、PcQ による格付与能力が失われていることを示唆していることになる²⁵。

しかし、この点に関しての先行研究における記述は微妙にニュアンスが異なる。例えば、Crockett (1976: 341)はこのような N の場合、AM が複数主格形になるのは「典型的な例ではない (not a typical example)」としており、また Граудина и др. (1976: 32)は AM が複数数量属格形の方が「好まれる (предпочитается)」と述べており、非文とは断言していない。さらに Мельчук (1985: 126-127)は主格、数量属格の両方が認められるとのみ言及しており、それが様々な意味的な要因で傾向に違いが出ると指摘している。また、Pereltsvaig (2010: 426)はこのような場合、複数主格形を 72.1%の話者が、複数数量属格形を 27.9%の話者がそれぞれ好ましいと答えている、というデータを紹介している。つまり、上の複数属格形でなければならない、という報告には注意が必要である。

一方、Исакадзе (1998: 54)は形容詞と名詞の中間的な屈折を行う *Иванова* のような女性の姓は以下の様に PcQP の N として用いられる場合、明らかに複数主格形にならないはず、複数数量属格形はあり得ない、としている。

(108) В нашем классе училились две Ивановы / *Ивановых.
in our class study-pa.pl two-nom.+f Ivanova-nom.pl Ivanova-genq.pl

²⁵ ただし、НКРЯで検索すると *две широкие реки* も少数ながら確認できることは秋山真一氏 (pers.com)から指摘を受けた。またネット上で *две высокие горы*「2つの高い山」も音声資料で2件確認できた。このデータの扱いは今後の問題としたい。

4. ロシア語の数体系をめぐって

「我々のクラスでは2人のイワノワが学んでいた」(Исакадзе 1998: 54)

この姓が形態的に形容詞的であることに複数主格形が可能であることを帰するとすれば、複数数量属格形も当然可能であることが予想されるが少なくともИсакадзе (1998)の指摘はそうではない。ちなみに、少数数量属格形(単数属格形)が不可能であることも、Franks (1995: 52)が指摘しており、名詞的な屈折とは異なることがわかる。

さらに、純粋に形容詞的な名詞の場合は、以下の様に複数主格と複数数量属格の両方の形態が可能である：

(109)(a) У меня были две знакомые.

at I-gen be-pa.pl two-nom.+f acquaintance-nom.pl

「私には二人の(女性の)知人がいた」 (НКРЯ 2022.03.08)

(b) Из других фамилий в списке было две знакомых (...).

from other surname in list be-pa.n two-nom.+f acquaintance-genq.pl

「他の姓ではリストに2人の(女性の)知り合いがいた」 (НКРЯ 2022.03.08)

以上の様に、女性の N の場合の AM の形態については説明できない現象がまだまだ多く、また、厳密なルール化は到底できているとは言えないし、なぜそのようなことが起こるのかも不明である。本稿ではとりあえず、この場合の AM が複数主格形であると考えた上で、残された問題を今後の課題とし、議論を先へ進めたい。

4.6. 本章のまとめ

前章でQPを主語とする述語の pl.3 での一致はNが複数であることによって引き起こされるもので、形式的な条件によって引き起こされると結論づけたのに対して、本章では PcQP の N が一般に「単数属格形」であると言われている問題を議論した。

(110)(=5a) Перед ним были два человека (...)

in_front_of he-ins be-pa.pl two-nom person-genq.sg

「彼の前には2人の人がいた」 (НКРЯ 2021.03.09)

通常理解通りこの N が「単数」だと考えると述語の pl.3 の形態は形式的な一致とは言いがたいことになる。この問題以外にも N の形態が「単数属格」であると考えたと説明できない問題、逆に仮に複数であると考えても説明できない問題は色々とみられ、4.4.ではそれらの問題点を整理した。

本章では、これらの問題は秋山(2002)が提案した、「少数」という3つめの数をロシア語に想定することで説明できることを示し、以下の様に規定することを提案した：

(111)(a)(=90) [GenQ]以外の格が与えられると $[\text{num } (+\text{pl } X), (+\text{pc } Y)] \rightarrow [(+\text{pl } X)]$

(b)(=58b) 名詞的に屈折しなければ $[\text{+pl}, +\text{pc}] \rightarrow [\text{+pl}]$

4. ロシア語の数体系をめぐって

また、ロシア語の数素性のあり方を以下の様に規定した：

$$(112)(=51) [\text{sg}] = [-\text{pl}]; [\text{pl}] = [+pl]; [\text{pc}] = [+pl, +\text{pc}]$$

さらに、複数では性と屈折タイプの対立は消失するとしながら、少数においては不完全ながら性の対立が見られるとし、 $[\pm f]$ のみの対立であるとした。さらに PcQ と同じ数量を示す ColQ の N の数の違いを説明するために、最終的に、*два*「2」と *три*「3」、*четыре*「4」の素性のあり方を以下の様に規定した。

(113)(=86)「2」の文法素性とそのスロット(再改訂版)

数	$[(\pm\text{pl } \emptyset), (\pm\text{pc } \emptyset)]$
性	$[\pm f \emptyset]$
有生性	$[\emptyset]$
屈折タイプ	×
格	$[\emptyset]$

(114)(=87)「3, 4」の文法素性とそのスロット(再改訂版)

数	$[(\pm\text{pl } \emptyset), (\pm\text{pc } \emptyset)]$
性	×
有生性	$[\emptyset]$
屈折タイプ	×
格	$[\emptyset]$

それに対して、ColQ の文法素性とそのスロットは以下の通りとなる。

(115)(=88) ColQ の素性とそのスロット

数	$[\pm\text{pl } \emptyset]$
性	×
有生性	$[\emptyset]$
屈折タイプ	×
格	$[\emptyset]$

以上、本章では少数という数の存在を想定し、少数は名詞の数量属格以外では複数との対立が消失し、複数に融合すると考えることによって様々な問題が整理され、説明が可能になることを見た。以下の各章ではこの考え方に基づいて議論を進めることとする。

5. 有生性の一致について

5. 有生性の一致について

ロシア語の一致定語(AM)は主要部名詞 N に対して性・数・格・有生性に関して一致するとされていることは 1. で見た。また、これらの文法範疇の中で格だけは名詞句の頂点に付与され、そこから下へ浸透して行くものであり、主要部名詞 N から句内の他の節点にコピーされる他の素性とは異なることも示した。以下本稿では、主要部名詞から他の節点にコピーされる素性のみを一致素性と呼び、格はそれに含まれないと考える。

有生性の素性は主要部名詞をその源としていることは間違いないと思われ、一致素性の一つと考えられるが、性や数と比べるとその振る舞いは異なる。本章は性や数と比べて特異な性質を持つ有生性の一致のメカニズムを整理し、かつ NP 内部での素性のやりとりや格境界(CB)を越えた素性のコピーについて整理することを目的とする。

5.1. 対格の3つの形態法

有生性が他の一致素性と異なる一つ目の点は、形態的には対格でのみその対立が見られる、という点である。その対格の形態法には大きく分類して3パターンがあるが、有生性を表すための独自の形態があるわけではない。

(1)(a)対格独自の形態

主格：эта	книга	対格：эту	книгу
<small>this-nom.f.in</small>	<small>book-nom.f.in</small>	<small>this-acc.f.in</small>	<small>book-acc.f.in</small>
「この本」		(匹田 2016: 54)	

(b)主格と同じ形態

主格：далекий	путь	対格：далекий	путь
<small>distant-nom.m.in</small>	<small>way-nom.m.in</small>	<small>distant-acc.m.in</small>	<small>way-acc.m.in</small>
「遙かな道」		(匹田 2016: 55)	

(c)属格と同じ形態

主格：мой	учитель	対格：моего	учителя
<small>my-nom.m.an</small>	<small>teacher-nom.m.an</small>	<small>my-acc.m.an</small>	<small>teacher-acc.m.an</small>
「私の教師」		(匹田 2016: 55)	

これらのうち、(1a)では、主要部 N も AM のいずれとも対格は主格と異なる独自の形態となっている(一本線で表示)。一方(1b)では N も AM のいずれも対格は主格と全く同形であり(破線で表示)、(1c)では N と AM は主格ではなく属格と同形となっている(二重線で表示)。これら3つのパターンのうち、N と AM がしばしば同じパターンをとるため、この対格の形態法のパターンの選択に関わる現象を有生性の「一致」と称

5. 有生性の一致について

することが多いが、有生性の一致は有生性以外の素性とそのパターン選択に強く関わる点でも、他の一致と異なる。

これらのパターンの現れ方について、多くの教育文法は以下の様な説明を最初の一步目として提示することが多い：

- (2) 《男性名詞(単数・複数とも)》および《女性名詞複数形》の対格は、その名詞が活動体であるか不活動体であるかによって語尾がちがいます。(東一夫・多喜子 1994:74)

東一夫・多喜子(1994)は以上の様に述べた上で例を示しながら名詞の性別ごとに以下のようにまとめ説明している。(i)男性名詞は単数・複数ともに有生名詞(=活動体)なら対格は属格と同形、無生名詞(=不活動体)なら対格は主格と同形になり、(ii)女性名詞は複数の場合、有生名詞は対格=属格、無生名詞は対格=主格となる、さらに女性名詞は単数では有生・無生に関わらず対格は独自の形態を持つ。詳細な説明はここでは省くが、この考え方では格に加えて**有生性, 数, 性**が対格の形態パターンを決める条件となっていると考えられる。また多くの教育文法が表現に違いはあるものの、同様のことをまず第1に述べている¹。

しかし、有生性, 数, 性だけが形態パターンを決定づける条件だとすると説明がつかない現象がある。

(3)(a)第2変化の男性名詞

主格：твой	папа	対格：твоего	папу
your-nom.m.an	dad-nom.m.an	your-acc.m.an	dad-acc.m.an
「君のお父さん」		(匹田 2016: 55)	

(b)第3変化の女性名詞

主格：красивая	дочь	対格：красивую	дочь
beautiful-nom.f.an	daughter-nom.f.an	beautiful-nom.f.an	daughter-nom.f.an
「美しい娘」		(匹田 2016: 54)	

下線で示したように男性名詞 *nana*「お父さん」は対格独自の形態となり、第3変化の女性名詞 *дочь*「娘」は主格と同形になっている。このことから、有生性, 数, 性だけではなく屈折タイプも対格の形態的パターンを決定する条件として組み込む必要があると思われる。また、(3)では(a, b)いずれの例でも対格の形態パターンは AM と N で異なっている。このような問題を説明する必要がある。いずれにせよ、教育の初期の段階で提示される多くの文法では必ず何らかの「但し書き」を追加することによ

¹ 教育文法では多くてもこのあたりまでを第1段階の情報提示としていることが多いようである。(例えば、Пехливанова и Лебедева 1990: 50-52, 佐藤 1994: 80, 林田 2005: 108-109, 中澤 2006: 84-86, Хавронина и Широценская 2007: 105, 116-117, 沼野他 2013: 94-95, Wade 2011: 68-69, 佐山他 2019: 172-174 など参照。)

5. 有生性の一致について

って説明をする必要がある².

このような伝統的とも言える教育文法での記述に対して、純粋に言語学的な説明理論として例えば Halle (1990, 1994a, 1994b)などがあるが、そこで提案されている規則を Rappaport (2003)が簡便に以下の様にまとめている。

(4) 対格のシンクレティズム (Rappaport 2003: 152)

[Case: Accusative]⇒

[Case: Genitive]

/__+[Animacy: +]+{[Number: Plural]/[Number: Singular; Declension Class: I]}

[Case: Nominative] elsewhere

(except/ __+[Number: Singular, Declension Class: II])

この規則は1行目にある対格が2行目の属格あるいは4行目の主格に書き換えられることを示している。3行目は属格に書き換えられる条件で、有生でかつ複数、あるいは有生でかつ単数かつ屈折タイプが第1変化 (Declension Class: I)の場合、対格は属格に書き換えられるとされている。4行目の主格に書き換えられるのは elsewhere すなわち「それ以外」の場合である。ただし、5行目にあるように、単数でかつ第2変化 (Declension Class II)の場合は、これらの書き換えは起こらない(そして対格独自の形態になる)。

なお、屈折タイプは本稿では名詞のみに当てはまる概念として用いているが、これらの一連の研究では形容詞などの AM にも当てはめられるものと考えられている。男性及び中性の AM は第1変化[Declension Class: I]、女性では第2変化[Declension Class: II]とされており、それによって(3)でみた AM と N の対格の形態パターンの違いの説明している。

AMについては間接的に性に関わってくるものの、少なくともNに関する限りこの考え方は対格の形態選択の条件として**有生性, 数, 屈折タイプ**を想定しており、有生性, 数, 性を考える伝統的な教育文法の考え方と異なっている。しかしながら、Halle (1994a)も認めているとおり、この考え方にはこのままでは説明できない例外が残る。

(5) Герой убил морское чудовище / *морского чудовища.

hero-nom killed marine-acc.n.an monster-acc.n.an marine-acc.n.an monster-acc.n.an

「英雄が海の怪物を殺した。」

(Halle 1994a: 202)

ここで *чудовище*「怪物」はロシア語では数少ない中性の有生名詞で、第1変化である。

²ただし、教育文法における文法に関する情報は教育的効果を考慮して提示する順番を変えたり、あるいは提示する内容を制限していることが通例である。従って、それらの著者が誤った一般化をしていると言うことには全くならない。

5. 有生性の一致について

この場合、破線を付した主格と同じ形態のパターンは適格であるが、二重線を付した属格と同形態のパターンは非文となる。このことを説明するためにはやはり「中性の場合は除く」という性を条件とした但し書きが必要となってしまう。

本章の以下の各節は、このような但し書きを必要としない対格の形態法の選択のための規則を議論することを目的とするが、Halle (1990, 1994a, 1994b)や Rappaport (2003)と同様に、3つの形態パターンは格の書き換え規則によってもたらせるものであるとの前提で議論を進める。その場合、対格の属格化と主格化の両方向を考えねばならない。次節ではまず属格化だけに絞って検討することとし、主格化については5.3.で考える。

5.2. 属格化の条件

前節では対格の形態のパターンを決定するために有生性と数、性を条件とする考え方と、有生性に加えて性と屈折タイプを条件とする考え方を概観し、いずれもその条件とは別に「但し書き」が必要であることを見た。

本論文では、匹田 (2015, 2017, 2018, 2019), Hikita (2020)で示した**有生性・性・屈折タイプ**を形態選択の条件とする以下の規則を想定する³：

(6) 属格化

有生[an], かつ性として[m]以外あるいは屈折タイプとして[I]以外がなければ
[Acc] → [Gen]

つまり[an]であっても[m]以外の性、[I]以外の屈折タイプがあると属格化が妨げられると言うことである。この規則では、有生性の他に性と屈折タイプを属格化の条件として数を条件に挙げていない点が上で触れた2つと異なる。このことは2.4.と2.5.で見たように複数において性と屈折タイプの対立が消失することと大いに関係がある。複数で性と屈折タイプの対立が消失することを匹田 (2017, 2018), Hikita (2020)では以下の様な素性の削除規則を設定して説明した：

(7)(=2-70) [gender x] → ∅, if [+pl]

(8)(=2-80) [DecType x] → ∅, if [+pl]

すなわち、規則(6)は数ではなく、数の値によって時に消失する性と屈折タイプによって条件付けられているということになる。

³ 匹田 (2015, 2017, 2018, 2019), Hikita (2020)では、技術的な理由から規則の表現が微妙に異なっているが、それらの違いは技術的な問題以外に意味はない。また、ここから先、屈折タイプもある種の一致素性の一つであると考え、グロスなどにも必要に応じて示すこととする。

5. 有生性の一致について

5.2.1. 典型的 NP の場合

まず、典型的な NP の場合の例を見よう⁴。(9)はいずれも男性・単数の第 1 変化名詞の例で、(a)は無生名詞、(b)は有生名詞の例である。

(9) (a) (...) принес [этот журнал] (...)
bring-pa this-nom.m.[n] magazine-nom.m.[n].I
「(...)この雑誌を持ってきた。」 (НКРЯ 2014.10.27)

(b) На семинарах я [этого студента] не видел (...)
on seminar-pl I-nom this-gen.m.an student-gen.m.an.I not see-pa
「セミナーで私はこの学生を見かけなかった」 (НКРЯ 2014.03.22)

AM である *этом*「この」は、名詞とは異なったパターンで屈折するので、名詞の屈折パターンの素性[I]を受け入れることはない。その一方で、(a, b)のいずれでも性[m]は N からコピーされているし、(a)では有生性[in]が、(b)では[an]が N からコピーされている。

この例で属格化は(b)でのみ起こっているが、(a)では起こっていない。(b)は(6)で示された条件のうち、有生[an]で、[m]以外の性がなく、[I]以外の屈折タイプもないので、属格化を妨げるものは何もないが、(a)には有生性[in]が AM と N の両方にあり、そのため(6)の条件を満たしていないので属格化が妨げられている。

続いて中性・単数の第 1 変化名詞の例で、(a)が無生、(b)が有生である。

(10)(a) Я получил [твое письмо].
I-nom receive-pa.m your-nom.[n] letter-nom.[n].I
「私は君の手紙を受け取った。」 (НКРЯ 2022.3.21)

(b) (...) автор заставляет [действующее лицо] замолчать (...)
author-nom make-pr.3.sg acting-nom.[n].an person-nom.[n].an.I fall_silent-inf
「作者は登場人物を黙らせている。」 (НКРЯ 2022.3.21)

(a)の *письмо*「手紙」は無生[in]なので属格化は起こりようがない。一方(b)の *лицо*「人物」は有生であるが、属格化は起こらない。中性[n]が(6)により属格化を妨げるからである⁵。

⁴ 以下、対格から書き換えられた属格形および主格形の名詞はグロスにも属格[Gen]、主格[Nom]と記すこととする。また、議論の対象となっている対格環境にある NP は[]で囲むことで示す。なお、本節では属格化が起こるか起こらないかだけを問題としているので、属格化している箇所だけを二重下線によって示し、属格化していない形態、すなわち対格独自の形態と主格形はとくに何も示さない。ただし、対格独自の形態と主格形の違いはグロスの格に関する情報によって示されている。なお、以下本章では属格化を妨げている素性はグロス中で四角く囲むことで示している。以下も同様である

⁵ 同じ第 1 変化でも有生・男性であれば属格化が起こるが有生・中性では起こらない。この点を説明する違いが性の違いなわけである。しかし、第 1 変化でも、単数主格形の語尾が-øになるもの(=大半の男性名詞)と-o/-e/-ëになるもの(=大半の中性名詞)で別の屈折タイプ(あるいは同じタイプの中

5. 有生性の一致について

次に(11)はいずれも女性・単数の第2変化名詞で、(a)は無生名詞、(b)は有生名詞を用いた例である。

- (11)(a)(...) знаю [эту книгу].
know-pr.1.sg this-acc.[in] book-acc.[in]
 「(...)この本を知っている。」 (НКРЯ 2014.10.27)
- (b)(...) знаю [эту женщину].
know-pr.1.sg this-acc.[an] woman-acc.[an]
 「(...)この女性を知っている。」 (НКРЯ 2014.10.27)

この場合、無生名詞の *книгу*「本」、有生名詞 *женщину*「女性」のいずれの場合でも対格独自の形態をとっており、属格化は生じていない。これは無生[in]であろうと有生[an]であろうと女性[f]と第2変化[II]が属格化を妨げるからである。

続いて以下は女性・単数の第3変化名詞の例である。(a)の *тетрадь*「ノート」は無生[in]、(b)の *дочь*「娘」は有生名詞である。

- (12)(a) Я получила [новую тетрадь] (...)
I-nom received new-acc.[in] notebook-acc.[in]
 「私は新しいノートをもらった。」 (НКРЯ 2022.03.22)
- (b) Я [вашу дочь] однажды видел (...)
I-nom your-acc.[an] daughter-acc.[an] once see-pa
 「あるとき私は貴方の娘を見かけた。」 (НКРЯ 2022.03.22)

ここでも有生[an]か無生[in]かに関わらず属格化は起こらない。AMでは女性[f]があり、Nでは女性[f]と第2変化[II]があるため、属格化が妨げられるためである。

次は男性・単数の第2変化名詞の例である。男性・第2変化の無生名詞は原則存在しない。

- (13)(...) Анжела любила [этого мужчину].
Angela loved this-gen.m.an man-acc.m.an

の下位タイプ)として区別する考え方がある。例えば、Шведова (1970)は前者を「男性変化」、後者を「中性変化」とし、Timberlake (2004)は前者を Ia、後者を Ib と区別している。男性の有生名詞と中性の有生名詞の対格における選択パターンの違いを説明するのに、場合によっては性ではなく屈折タイプによるものとも考えることも可能かも知れない。しかし、Зализняк (2008: 54)には、単数主格形の語尾が -o/-e となり、一見すると中性名詞に見える男性の第1変化名詞の存在が指摘されており、それらが有生の場合、対格環境に置かれると属格形になることが指摘されている。

- (i)(...) простил [своего подмастерья] (...)
forgive-pa self's-gen.m.an apprentice-gen.m.an
 「(...)自分の見習いを許した。」

この名詞は屈折タイプとしては明らかに「中性変化」あるいは Ib である。このことは屈折タイプより性別の違いが対格の形態的パターン選択の条件として重要であることを示唆している。また性が属格化の条件ではなく屈折タイプだけが条件だとすると、(10b)における AM が属格化しない理由は説明できない。

5. 有生性の一致について

「アンジェラはこの男性を愛していた」 (НКРЯ 2022.03.22)

ここでは AM である指示代名詞の *этого*「この」は属格化しているものの、N の *мужчину*「男性」は属格化していない。*мужчину* が属格化しないのは第 2 変化[II]が属格化を妨げるからだが、*этого* が属格化しているのは、AM は名詞と異なる屈折を行い、名詞の屈折タイプを受け入れないので、[II]がコピーされることがあり得ず、結果属格化を妨げる素性が存在しないからである。

以上の例を見ると、属格化が生じさせない条件となっている素性には無生[in]以外に、性と屈折タイプがあることがわかる。そして、上でも見たように性と屈折タイプは複数では(7)と(8)によって削除される。結果として有生で複数の場合、単数では属格化が起こらなかった名詞でも全て属格化が行われることが予想される。

まず、(14)は第 1 変化・有生の男性名詞の複数の例である。

(14) *Всему этому мы учим [наших студентов](...)*
all-dat this-dat we-nom teach-pr.1.pl our-gen.pl.an student-gen.pl.an
「このこと全てを我々は我々の学生たちに教えた」 (НКРЯ 2022.03.24)

第 1 変化の男性名詞は性が男性[m]、屈折タイプが第 1 変化[I]なので単数の場合でも属格化を妨げる素性はないが(9b)、複数の場合にそれらの性と屈折タイプがなくなっても属格化を妨げる素性がないことに変わりはない。結果、複数でも AM、N ともに属格化が起こる。

次に(15)は第 1 変化・有生の中性名詞の複数の例である。

(15) [*Должностных лиц*], *вышедших навстречу, они прогнали.*
official-gen.pl.an person-gen.pl.an having_gone-gen.pl.an to_meet they-nom drive_away-pa.pl
「出迎えに出てきた職員たちを彼らは追い払った」 (НКРЯ 2022.03.24)

(10b)で示したように第 1 変化の中性名詞で単数の場合は中性[n]が属格化を妨げるので N とそれをコピーされた AM のいずれとも属格化されることはない。しかし、複数になると性の素性は削除されるので、AM、N のいずれにおいても属格化を妨げるものはない。

続いて、(16)は第 2 変化・有生の女性名詞の複数の例である。

(16) *Ты знаешь [этих женщин]?*
you-nom know-pr.2.sg this-gen.pl.an woman-gen.pl.an
「君はこれらの女性を知っているか？」 (НКРЯ 2022.03.22)

第 2 変化・有生の女性名詞は単数の場合、女性[f]と第 2 変化[II]が属格化の条件に反するため、AM、N ともに属格化が起こらないが、複数になると、それらの素性はいずれも消失するため、属格化が起こる。

また、(17)は第 3 変化・有生の女性名詞の複数の例である。

5. 有生性の一致について

(17) Я хочу увидеть [своих дочерей] (...)
I-nom want-pr.1.sg see-inf self's-gen.pl.an daughter-gen.pl.an
「私は自分の娘たちに会いたい」 (НКРЯ 2022.03.24)

例(12b)単数の場合は、女性[f]と第3変化[III]が属格化を妨げるため、属格化が起こらないが、複数では、性と屈折タイプが削除されるため、妨げる素性が存在しないため、属格化が起こる。

次の(18)は第2変化・有生の男性名詞の複数の例である。

(18) [Этих мужчин] он уже видел в квартире Ветринова (...)
this-gen.pl.an man-gen.pl.an he-nom already see-pa.m in apartment Vetrinov-gen
「彼はこれらの男性に既にヴェトリノフの部屋で会ったことがある」
(НКРЯ 2022.03.22)

第2変化の男性名詞の場合、単数だとNは第2変化[II]によって属格化が阻まれるが、AMにとってNの屈折タイプは無関係なため[II]を受け取ることがない。結果、阻害する素性がいないためAMは属格化が起こる。一方複数になると、単数ではNにおける属格化を妨げる屈折タイプの素性[II]が削除されるため、AMだけでなくNにおいても属格化が起こることになる。

以上、単数の場合有生名詞の対格の属格化を妨げるのは[m]以外の性と[I]以外の屈折タイプであり、それらが削除される複数においては有生名詞の対格の属格化を妨げるものがなくなるを見た。

また、ロシア語の名詞の屈折タイプは2.1.1.3.で述べたように大きく3つに分類されるが、実際にはこれら3つの屈折タイプに属さない特殊な変化でも同じように性と屈折タイプが消失すれば複数では属格化が起こる。

ちなみに、名詞的タイプの主要な3つあるいは形容詞タイプに属さない名詞も少数ながら存在する。例えば *дитя*「子供(中性)」, *путь*「道(男性)」, *время*「時間(中性)」などがそれらにあたる。これらを屈折タイプとしてどう整理するかは議論が分かれ、例えば、Шведова (1970: 375-376), Шведова и др. (1980: I: 491-492), Timberlake (2004: 144-145), Barnetová (1979: 1: 466-467)はこれらをいずれも第3変化としているが⁷, Исаченко (1954: I: 213, 217)は *путь* を第3変化としながら, *время*, *дитя* は第4変化として3つの主要タイプと区別している。また, Виноградов и др. (1960: I: 132)は *время*, *путь*, *дитя* をいずれも不規則変化名詞(разносклоняемые имена)として主要3タイプと区別しているし, 和久利 (1961: 30-33)は *путь* を第1変化としているが, *время*, *дитя* を特殊変化として主要3タイプと区別している。また, Зализняк (2008: 40, 53, 55)は

⁶ *дитя* と *путь* は他に同じ変化を行う名詞はない。 *время* タイプも数が非常に限定されている。

⁷ 形態的に確かに第3変化に似ていると言えるが、あくまで異なる変化ではある。言ってみれば第3変化の「亜種」として捉えていることになる。

5. 有生性の一致について

путь は他に属さない一つのタイプをなし、*время* も同様に他と分けて分類しており、さらに *дитя* については「完全に異常(полностью аномально)」と表現している。本稿では、これらの名詞の屈折タイプによる分類の議論に寄与することはしない。ここでの議論に屈折タイプに関して重要なのは「第 1 変化かそれ以外か」だけであり、「第 1 変化以外の何か」は本稿では全く関係がないからである⁸。

この手のどの屈折タイプに属するか明確でない名詞をここでは仮に第 4 変化名詞としてグロスにも [IV] と記す。これらは基本的に無生名詞であるが、*дитя* だけは例外的に有生名詞である。また、*дитя* は中性名詞であり、有生の中性名詞であるという点でも例外的と言えよう。以下の (a) は単数の場合、(b) は複数の場合である。

(19)(a)(...)я воспитаю [твоё дитя].
 I-nom foster-pr.1.sg your-nom.□.an child-nom.□.an.[IV]
 「私は君の子供を育てている」 (НКРЯ 2022.03.22)

(b)(...)[ваших детей] будет воспитывать другой человек (...)
 your-gen.pl.an child-gen.pl.an will-pl foster-inf another-nom.m person-nom.m
 「貴方の子供は他の人が育てるだろう」 (НКРЯ 2022.03.22)

以上の様に、3つの主要な屈折タイプに属するとは言いがたい名詞に関しても複数で性と屈折タイプの素性が削除されると考えれば、(6)の属格化規則は正しく現象を予測できていることがわかる。

不変化名詞も例を確認しよう。ここでは不変化名詞の屈折タイプは仮に [indc] とする⁹。以下はいずれも不変化の有生名詞の例で、(a) は単数の場合、(b) は複数の場合である。

(20)(a)(...)убили [австрийского военного атташе].
 kill-pa.pl Austrian-gen.m.an military-gen.m.an attache-acc.m.an.[indc]
 「オーストリアの武官が殺された」 (НКРЯ 2022.03.24)

(b)(...)иностранцы присылают к нам (...) [военных атташе].
 foreigner-nom.pl send-pr.3.pl to us military-gen.m.an attache-acc.pl.an.[indc]
 「外国人たちは我々のところに武官を送ってくる」 (НКРЯ 2022.03.24)

⁸ ただし、*путь* に関しては、和久利 (1961) は第 1 変化としている。しかし、*путь* は第 1 変化より第 3 変化にむしろ似ている。それ故、他の先行研究では第 3 変化に分類しているものが多い。和久利 (1961) がどのような理由で *путь* を第 1 変化としたのかは明記されていないので不明だが、第 3 変化名詞は通常であれば女性名詞に限られるが、*путь* が男性名詞であることが関係していると思われる(第 1 変化には多くの男性名詞が含まれる)。いずれにせよ、*путь* は無生名詞であるため、属格化に関わることはそもそもあり得ない。

⁹ ただし、そもそも屈折タイプに関する素性を持たない、と言う可能性もある。ここでは仮に他の屈折タイプと同じようにグロスに [indc] を示すが、屈折タイプとは別の次元の問題と考えるべきなのかも知れない。この問題は未決問題として今後の課題としたい。

5. 有生性の一致について

(21)(a) Отпевали Жаклин, [первую леди] Америки (...)
 perform_a_funeral_ritual-pa.pl Jacqueline-acc.indc first-acc.f.an lady-acc.f.an.indc America-gen
 「アメリカのファーストレディ・ジャクリーンの葬儀が行われた」
 (НКРЯ 2022.03.24)

(b)(...) [первых леди] ждал концерт (...)
 first-gen.pl.an lady-acc.pl.an.indc wait-pa.m concert-m
 「ファーストレディたちをコンサートが待っていた」 (НКРЯ 2022.03.24)

これらの例で、不変化の N は不変化であるが故に形は変わらない¹⁰。が、単数と解釈される場合(a)では AM は他の名詞の場合と同様に N の性別に従った振る舞いを見せている¹¹。すなわち、女性の場合は [f] が属格化を妨げるが、男性の場合にはそれは起こらず属格化が行われる。また、複数の場合は、属格化を妨げる性素性が消失するので、AM で属格化が起こるか起こらないかに N の語彙的な性別は関係ない。有生ならば属格化し、無生ならば属格化しないだけである。

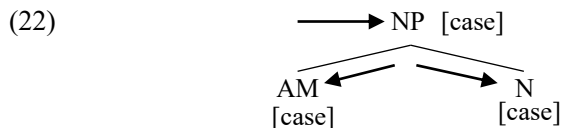
以上の様に、格の書き換え規則である(6)は正しく名詞句内の AM と N における対格の形態パターンを正しく予測していると考えられる。またこの考え方だと(2)や(4)のようにさらなる条件を後から追加する「但し書き」も必要ない。

しかし、(6)の考え方でまだ考え無ければならない問題はある。以下、5.2.2.では属格化が派生の中でいつ・どこで行われるかについて、5.3.では主格化について議論することとする。

5.2.2. 属格化はどこで起こるのか？

上で示したように、(6)の属格化規則は対格環境にある典型的な名詞句の形態を正しく予測しており、また別途条件を追加する必要もない。しかし、対格の属格化にはまだ厳密化しなければならない問題が残っている。

本稿では、2.3.で見たように、格は NP の頂点に外部から付与され、その後句の内部の末端まで浸透して行くとして議論を進めている。



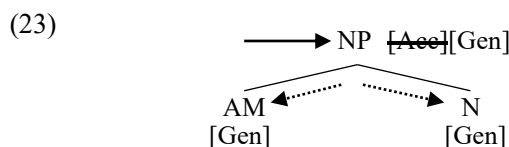
ここで考えなければならないのは、属格化規則(6)は格が付与された後、どこで適用されるのか、という点である。すなわち、属格化規則(6)は NP の頂点に付与されたら、

¹⁰ ただし、不変化名詞の持つ格は形態に現れようがないので、実際に主格、対格、属格のいずれなのかは議論の必要がある。ここでは不変化名詞の格は便宜的に対格と記してある。

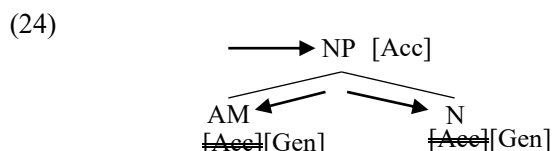
¹¹ *ammaue* は男性名詞、*леди* は女性名詞である。

5. 有生性の一致について

すぐに適用されるのか、それとも末端まで浸透してから適用されるのであろうか？
前者であれば、以下の様に頂点に付与された[Acc]はその場で(6)が適用され、条件を満たしていればその場で[Gen]に書き換えられ、その後[Gen]として末端に浸透して行く。



後者であれば、付与された[Acc]に対して頂点では何も起こらず、そのまま[Acc]が末端まで浸透したところで(6)が適用され、条件を満たしていれば、ここではじめて[Gen]に書き換えられる。



本稿では 2.1.2. で見たとおり、AM と N の素性のあり方については以下の様に考える。

(25)(=2-8)名詞の文法素性

数	[sg/pl]
性	[{m/n/f}]
有生性	[{an/in}]
屈折タイプ	[{I/II/III/IV/indc}]
格	[ø]

(26)(=2-9)AM の文法素性

数	[ø]
性	[ø]
有生性	[ø]
屈折タイプ	×
格	[ø]

名詞は格だけは他から与えられる文脈的素性であるが、その他の素性、すなわち一致素性は全て本来的素性である。それに対して、AMの格と一致素性はいずれも全て文脈的素性である。ただし、屈折タイプは名詞のものなので AM はそれを受け入れるためのスロットすら持たない。

その一方で句節点に対しては、Franks (1995)の以下の考え方に従い、主要部 N の全ての一致素性を受け入れられると考える。また AM と異なり、特定の素性を拒絶する理由が句節点にはない。

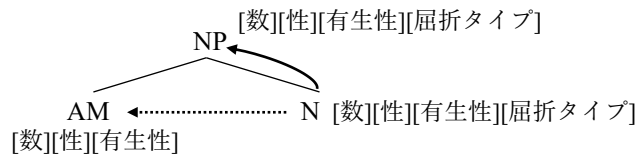
5. 有生性の一致について

(27)(=2-22) Everything else being equal, the values of the features of a node X and its phrasal projection XP are equivalent. (Franks 1995: 20)

「他の全てが同じであるなら，節点 X とその句投射 XP の素性の値は同一である。」

すなわち，句節点にはNの持つ全ての一致素性がコピーされるが，AMには数・性・有生性のみで，屈折タイプはコピーされないと考える。

(28)



この違いが，時に(13)におけるように AM と N の形態パターンに違いを生じさせるわけである。

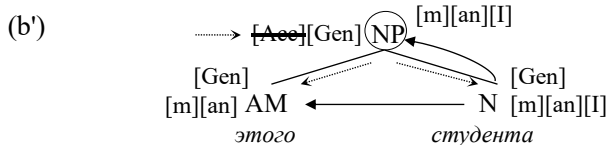
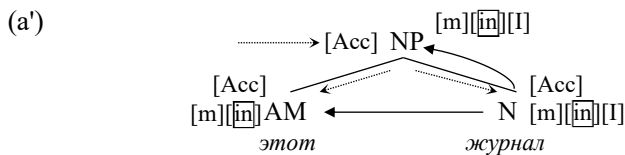
5.2.2.1. どちらでも問題無い場合

このような前提にのっとして考えると，属格化規則(6)が句節点で適用されても末端で適用されても多くの場合いずれも問題はない。どちらであっても予想される結果は同じである。例えば，以下の例を見てみよう。

(29)(=9)

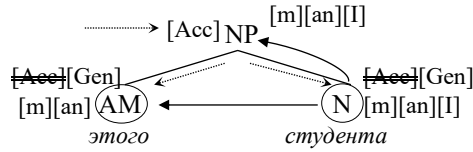
(a) (...)принес [этот журнал] (...)
bring-pa this-nom.m.[m][f] magazine-nom.m.[m][f]I
「(...)この雑誌を持ってきた。」 (НКРЯ 2014.10.27)

(b) На семинарах я [этого студента] не видел (...)
on seminar-pl I-nom this-gen.m.an student-gen.m.an.I not see-pa
「セミナーで私はこの学生を見かけなかった」 (НКРЯ 2014.03.22)



5. 有生性の一致について

(b'')



まず(29a')は N が無生名詞の例である。この場合，属格化規則(6)が頂点の NP で適用されてもまた末端の AM や N で適用されてもいずれも有生ではないため属格化は起こらない。

その一方で，(29b', b'')は有生名詞の例で，(b')は頂点の節点 NP で属格化が適用される場合，(b'')は末端の節点 AM と N で属格化が適用されると考えた場合である。(b')では NP に付与された対格が属格に書き換えられ，属格として末端に浸透して行くが，NP で対格が属格に書き換えられることを(6)は正しく予測している。NP が持っている一致素性は[m], [an], [I]であり，これらは属格化を妨げるものではないからである。また，(b'')のように末端で属格化が適用されると考えても正しく予測ができる。AM の持つ一致素性は[m]と[an]で，N の素性は[m]と[an], [I]なのでいずれの節点でも属格化が起こる条件は満たしているからである。

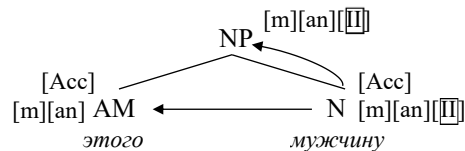
5.2.2.2. 末端で適用されなければならない場合

以上の様に多くの場合，属格化は頂点の句節点で適用されるときも末端の節点で適用されるときも予測される結果は変わらず，どちらでも構わないように見える。しかし，全ての場合においてそうというわけではない。

(30)(=13)(...)Анжела любила [этого мужчину].
 Angela loved this-gen.m.an man-acc.m.an.
 「アンジェラはこの男性を愛していた」 (HKPYA 2022.03.22)

この例では AM では属格化が起こっているが N では起こっていない。仮に属格化規則が適用されるのが頂点の NP であると考えれば，そこから両方の末端に属格が浸透してしまい，結果として*[этого мужчины]と AM と N の両方が属格形になり，非文になってしまう。また，以下の様に節点 NP に屈折タイプ[I]もコピーされ，ここでは属格化規則(6)の条件を満たしていないため，そもそも属格化が起こりえない。

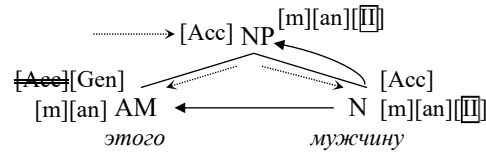
(30')



それに対して，末端の節点で属格化規則(6)が適用されるとしたら，その場合は正しく事実を予測できる。

5. 有生性の一致について

(30")



AM には素性が存在しないため属格化が起こるが、N には屈折タイプ[III]があるため属格化が起こらないのである。

このように考えると、属格化規則(6)は末端の節点で適用されると考えた方が良いでしょう。しかし、そうとは言えない現象も存在する。

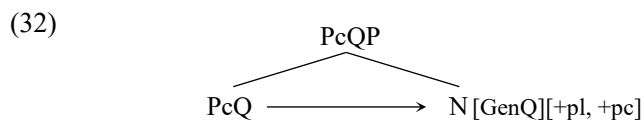
5.2.2.3. QP の場合

前節で示したように、属格化規則(6)が適用されるのは末端の節点においてと考えなければならない場合がある一方、逆に頂点の節点で適用されると考えざるを得ない場合もある。PcQP が対格環境にある場合がそれにあたる。

(31)(...)он убил [трех слонов] (...)
 he-nom kill-pa.m three-gen.an elephant-gen.pl.an
 「彼は3頭のゾウを殺した」 (НКРЯ 2022.03.27)

まず、この形態は PcQP が属格環境に置かれた場合の形態と同じである。つまり、PcQ が属格形でかつ N が複数属格形になっている。このことから句全体に属格が与えられている可能性があると言えるかも知れない。また、ここで PcQP の N の形態が複数属格形になっていることは 4. でみたように N の格が数量属格ではなく通常の属格であることを示している。

もう少し正確に状況を把握するために、まず、2.3. で見た本稿の議論の前提とする格の付与と浸透のシステムを確認しておこう。PcQP の場合、まず、PcQ と N が併合して PcQ が N に数量属格を付与する。4. での議論の通り、N の数は少数でなければならない。



これがさらに何らかの格付与子と併合して、PcQP に格が付与される。その際その格が N に浸透できるかどうかは以下の原則に従って決まる：

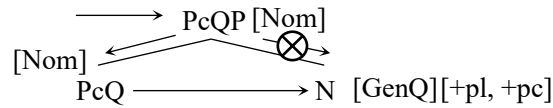
- (33)(a)(=2-29d) 語彙格 > 構造物
 (b)(=2-29e) 局所性原理により近いものが優先

従って、(a)構造物(以下の例では主格)の場合は頂点に付与された格は N には浸透せ

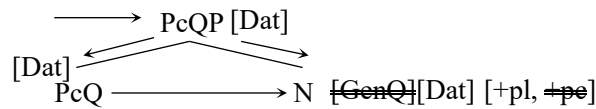
5. 有生性の一致について

ず、一方(b)語彙格(以下の例では与格)の場合は N にも浸透し数量属格に上書きされる。

(34)(a)

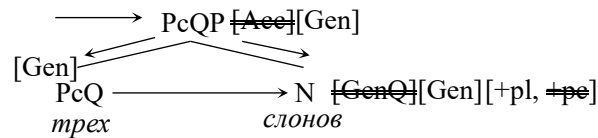


(b)



仮に(31)で属格化が頂点で起こると考えた場合、対格[Acc]は語彙格の属格[Gen]に書き換えられるので、既に N に付与されている数量属格[GenQ]を上書きすることができる。

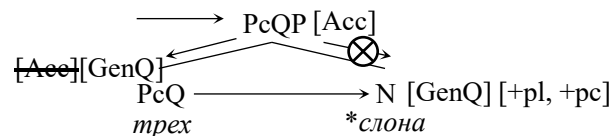
(35)



この場合、Nの少数は4.5.2.2.8.で見たように数量属格以外では複数との対立が維持できず複数と融合してしまう。結果として N が複数属格形になることを正しく予測している。

その一方で、仮に(31)で属格化が末端で起こると考えると、構造格の対格[Acc]は頂点ではそのままなので、同じ構造格である数量属格[GenQ]を上書きすることは局所性の原理により不可能である。また、数量属格を属格に書き換える規則は想定されていない。結果、予測される N の形態は少数・数量属格形となり、正しい形態を予測することはできていないことになる。

(36)



以上の点から少なくとも PcQP の場合は句の頂点に対格が付与された時点で属格に書き換えられると考える必要がある。

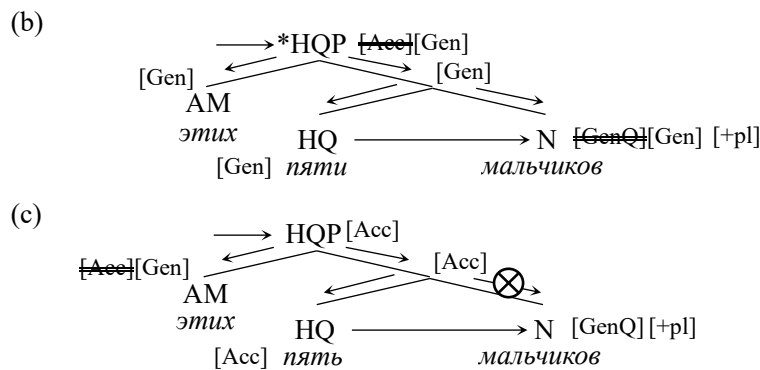
ただし、以下の様な HQP の場合は同じ QP でも末端で書き換えが起こっていると考えざるを得ない。

(37)(a) Я увидел [этих пять мальчиков].

I-nom see-pa this-gen.pl.an five-nom boy-genq.pl.an

「私はこれら 5 人の少年を見かけた」 (Babby 1987: 109)

5. 有生性の一致について



この場合、(b)のように頂点で属格化が起ると、末端の全ての節点に属格が浸透してしまい、非文となる。(c)のように対格[Acc]のまま浸透して末端で個別に属格化が起こるかどうか決めなければならない。

5.2.3. 属格化の場所

前節までで見たことから2つの問題点が明らかになる。

(38)(a)属格化規則はどこで適用されるか？

(b)数量詞によって異なる振る舞いを見せるのは何故か？

このうち(38a)について、匹田 (2015)は属格化規則(6)は適用する場所が決まっているわけではなく、時に頂点で、時に末端で適用されると考えた。つまり属格化するための条件、すなわち、対格・有生でかつ[m]以外の性と[I]以外の屈折タイプの素性がなければ、構造上の位置にかかわらずその場で適用される。言い換えれば規則適用の条件が揃っても別の機会まで適用を待つとすることをしないとすることであり、1.1.で本稿の基本的な考え方の一つとして示した早期適用原理に従っていることになる。以下、実際に条件が揃ったところで即時適用ということで矛盾が生じないかを確認する。

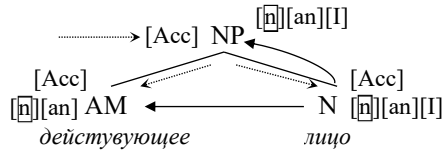
5.2.3.1. 典型的 NP の場合

まず典型的 NP の、N が有生名詞であるにもかかわらず属格化が起こらないパターンから見てみよう。この場合は頂点と末端のいずれの節点でも属格化の条件が揃っていないことが必要である。まず有生の中性名詞の場合である。

(39)(a)(=10b)(...) автор заставляет [действующее лицо] замолчать (...)
 author-nom make-pr.3.sg acting-nom.□.an person-nom.□.an.I fall_silent-inf
 「作者は登場人物を黙らせている」 (НКРЯ 2022.3.21)

5. 有生性の一致について

(b)

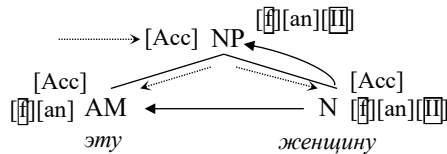


この場合、頂点の NP でも末端の AM と N でもいずれも中性[n]が属格化を妨げるものとなっており、まず NP に[Acc]が付与された時点では属格化が起こらず、また末端に浸透してもいずれの節点でも属格化は起こらない。

続いて有生で第2変化の女性名詞の場合である。

(40)(a)=(11b) (...) знаю [эту женщину].
 know-pr.1.sg this-acc.[n].an woman-acc.[n].an.
 「(...)この女性を知っている」 (НКРЯ 2014.10.27)

(b)



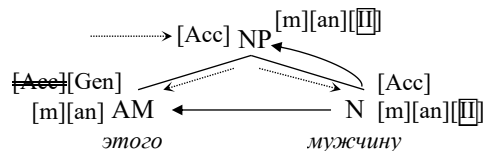
この場合は頂点の NP では、[f]と[II]が、末端の AM では[f]が、N では[f]と[II]がそれぞれ属格化を妨げる素性となっており、頂点・末端のいずれでも属格化は起こりえないことが正しく予測されている。なお、有生で第3変化の女性名詞の場合も、属格化を妨げる素性が[II]ではなく[III]になっているだけで全く同様に頂点・末端のいずれでも属格化は起こりえない。

(41)=(12b) Я [вашу дочь] однажды видел (...)
 I-nom your-acc.[n].an daughter-acc.[n].an.III once see-pa
 「あるとき私は貴方の娘を見かけた」 (НКРЯ 2022.03.22)

なお、AMとNのうちAMにだけ属格化が起こるタイプは上でも見たとおり、頂点では属格化の条件が揃っていないが、末端のAMでのみ条件が揃っている。

(42)=(30)(a) (...) Ангела любила [этого мужчину].
 Angela loved this-gen.m.an man-acc.m.an.
 「Ангелаはこの男性を愛していた」 (НКРЯ 2022.03.22)

(b)=(30")



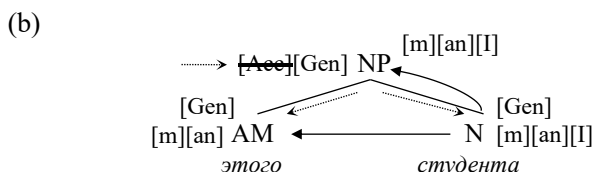
この例では、頂点の NP では[III]があるため属格化が起こらないので[Acc]はそのまま下に浸透して行く。そして、AM は属格化の条件が揃っておりここまで降りてきた[Acc]は属格に書き換えられる。一方 N では[III]が属格化を妨げ、結果、正しく形態が

5. 有生性の一致について

予測されている。

続いて、有生で第1変化の男性名詞の場合と、有生の複数形の名詞の場合である。これらは、上で頂点と末端のいずれで属格化が行われると仮定しても問題無いものとして指摘したものである。

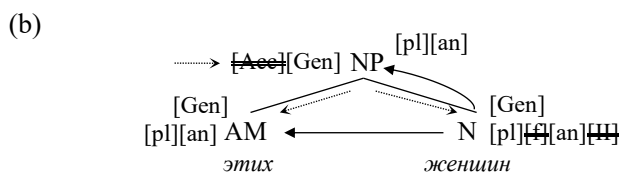
- (43)(a)(=9b) На семинарах я [этого студента] не видел (...)
 on seminar-pl I-nom this-gen.m.an student-gen.m.an.I not see-pa
 「セミナーでは私はこの学生を見かけなかった」 (НКРЯ 2014.03.22)



この例では、頂点にも末端のいずれの節点にも属格化を妨げる素性は存在しない。従って、どちらで属格化が起こっても問題ないが、「条件が揃ったら速やかに適用する」という原則に従うのならば、この場合は頂点に対格[Acc]が付与された時点で属格化規則(6)が適用され、そこから末端へと浸透して行くのは属格[Gen]であるということになる。

また、複数になると性も屈折タイプも消滅するため、Nが有生・複数の場合は性や屈折タイプに関わらずAMとNの両方に属格形が見られることは上で見た。以下は有生で女性の複数名詞の例である。

- (44)(a)(=16) Ты знаешь [этих женщин]?
 you-nom know-pr.2.sg this-gen.pl.an woman-gen.pl.an
 「君はこれらの女性を知っているか？」 (НКРЯ 2022.03.22)



この場合、Nの性[f]と屈折タイプ[II]は複数であるため消去され、AMと頂点のNPにコピーされるのは数[pl]と有生性[an]のみである。その結果、頂点のNPでも末端のいずれの節点でも属格化を妨げる素性は存在しない。そしてこちらでも「条件が揃ったら速やかに適用する」という原則に従い、NPに[Acc]が付与され、全ての条件が揃った節点NPで速やかに属格化が適用される。

5.2.3.2. QPの場合

前節までで疑問(38a)については、少なくとも典型的NPの場合は属格化がどこで起こるかを定める必要はなく、「条件が揃ったら速やかに適用」すれば問題無いことが

5. 有生性の一致について

わかった。では、QP に関しても同じと考えて良いのであろうか？またもう一つの疑問(38b)「数量詞によって異なる振る舞いを見せるのは何故か？」についてはどのように考えるべきであろうか？

QP の場合、いくつかのパターンがある。まず、*один*「1」の場合、格付与能力がなく、通常の AM と全く同じように一致する。従って、対格の形態法のパターンも全く同様である。

(45)*один*「1」の場合

(a)(...)он убил [одного человска] (...)
he-nom kill-pa.m one-gen.m.an person-gen.m.an.I

「彼は 1 人を殺した」 (НКРЯ 2022.03.31)

(b)Я видел [одну молодую женщину] (...)
I-nom. see-pa.m one-acc.♀.an young-acc.♀.an woman-acc.♀.an.Ⅱ

「私は 1 人の若い女性を見かけた」 (НКРЯ 2022.03.31)

(c)Маша увидела еще [одного мужчину] (...)
Masha-nom see-pa.f further one-gen.m.an man-acc.m.an.Ⅱ

「マーシャはもう 1 人の男性を見かけた」 (НКРЯ 2022.03.31)

(d)(...)они имели [одну дочь] (...)
they-nom have-pa.pl one-acc.♀.an daughter-nom.♀.an.Ⅲ

「彼らには 1 人の娘がいた」 (НКРЯ 2022.03.31)

(e)В начале он наметил еще [одно действующее лицо] (...)
in beginning he-nom select-pa.m further one-nom.♂.an acting-nom.♂.an person-nom.♂.an.I

「最初に彼はもう 1 人担当者を選んだ」 (НКРЯ 2022.09.10)

ここでは全ての例を見ることはしないが、(a)は第 1 変化の男性名詞の例だが、通常の AM を伴った(9b)と同様の形態パターンを示しており、(b)は第 2 変化の女性名詞で(11b)と同じ、(c)は第 2 変化の男性名詞で(13)と、(d)は第 3 変化の女性名詞で(12b)と、(e)は第 1 変化の中性名詞で(10b)とそれぞれ同じ形態パターンを示している。

PcQ からは通常の AM とは大きく異なってくる。格付与能力があるからである。

(46)(=31)PcQ の場合

(...)он убил [трех слонов] (...)
he-nom kill-pa.m three-gen.pl.an elephant-gen.pl.an

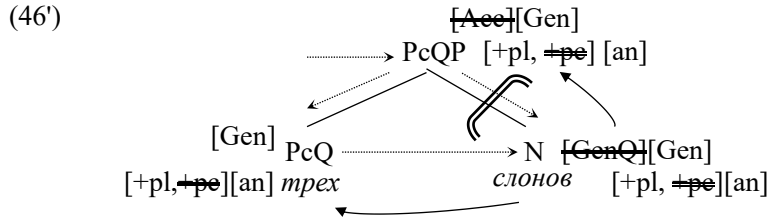
「彼は 3 頭のゾウを殺した」 (НКРЯ 2022.03.27)

上で述べたように、PcQP が対格環境に置かれると、属格化は句の頂点で行われていると考えなければならない。そのためには、少なくとも有生性の素性[an]が格境界(CB)を越えて PcQP の頂点までコピーされる必要がある。匹田 (2015, 2017)はこの CB を越えた素性のコピーがそれぞれの Q ごとに様々に可能であることが Q の特徴であり、その違いによって Q の名詞～形容詞の連続体の中での位置が決まると考えた。PcQ の他様々な Q が数の素性を CB を越えてコピーされると考えることは 3. で既に見

5. 有生性の一致について

た. また, *два*「2」についてはNと性の一致を示すので, 性もCBを越えてコピーできると考えるべきであろう.

この(46)のPcQPでは以下の様に素性のやりとりが行われていると考える:



ここでは, 節点PcQPにはCBを越えてNから数[+pl, +pc]と有生性[an]がコピーされ, PcQにも同様に数[+pl, +pc]と有生性[an]がコピーされる. PcQPに対格[Acc]が付与されると属格化の条件が揃っているので属格[Gen]に書き換えられ, その結果少数[+pl, +pc]は数量属格以外の格では維持できないので複数[+pl]になる. さらに[Gen]は末端のPcQとNに浸透する. その結果PcQによって既にNに付与されていた[GenQ]は[Gen]によって上書きされることになる. その結果NおよびPcQの少数[+pl, +pc]も複数[+pl]になる.

HQの場合は, CBを越えられる素性がPcQより減ることになる. まず, 性による一致は一切起らないので, 性素性がCBを越えることはない.

(47) HQの場合

(a)(...)убил [пять мух].

kill-pa five-nom fly-genq.pl.an

「5匹のハエを殺した」(НКРЯ 2014.08.17)

(b)(=37a) Я увидел [этих пять мальчиков].

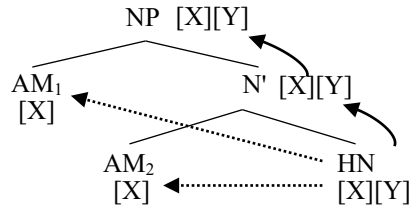
I-nom see-pa this-gen.pl.an five-nom boy-genq.pl.an

「私はこれら5人の少年を見かけた」(Babby 1987: 109)

また, 上で見たように**пяти мальчиков*のようにQも属格形にならず頂点で対格が属格に書き換えられると考えられないことから, 有生性[an]はPcQの場合と異なり, 頂点に[an]はコピーされていないと考えなければならない. ただし, AMでは属格化が起こるのでそこには[an]がコピーされていないと考えなければならない. つまり, CBを越えて, [an]は句節点へのコピー, すなわち2.2.での「上方向のコピー」(実線矢印)は行われませんが, AMへのコピー, すなわち「横方向のコピー」(点線矢印)は行われる, ということになる.

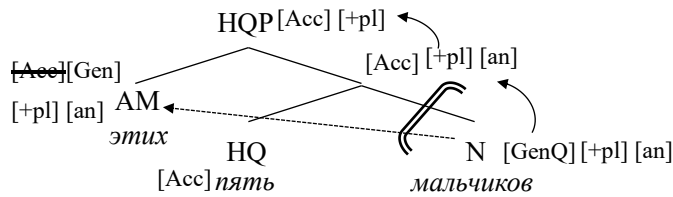
5. 有生性の一致について

(48)(=2-23)



なお、数に関しては3.で見たように述語の pl.3 での一致が可能なおから上方向のコピーは行われうるし、AMの形態から明らかかなように横方向も可能である。

(49)



この場合、Nの数[+pl]はAMと頂点HQPの両方にコピーされているが、有生性[an]はAMのみであり、上方向にはコピーされていない。結果としてHQPなどの句節点では属格化規則(6)が適用される条件が揃わず、末端のAMでは属格化の条件が揃っているため、[Acc]は[Gen]に書き換えられている。なお、この例では頂点から浸透して降りてくる[Acc]はNの[GenQ]を上書きすることはない。従って、мальчиков「少年」は形態だけでは複数・属格形なのか複数・数量属格形なのかがわからないが、この場合は複数・数量属格形であることになる。

続いて、NQとQCNの場合である。これらは、属格化を起こすことがないことから、いずれもQ自体が通常の名詞と同様に有生性[in]を持っていると考えられる。句節点にもAMにもNから有生性[an]がコピーされることはない。性も同様である。ただし、数だけは、3.で見たように述語が pl.3 での一致を示すことが可能なので、少なくとも頂点にはコピーされることが可能である¹²。

(50)NQ, QCNの場合

(a)(...)приняло на свое иждивение [первую тысячу русских студентов].
 accept-pa at_one's_expense first-acc.f.in thousand-acc.f.in Russian-gen.pl.an
 student-gen.pl.an
 「自らの負担で最初の1,000人のロシア人学生を受け入れた」
 (НКРЯ 2014.12.22)

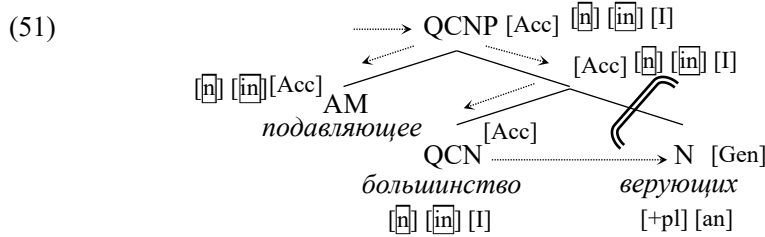
¹² AMへのNの数のコピーが可能かどうかは7.であらためて問題とするが、ここでは仮に不可能と考えて議論を進める。

5. 有生性の一致について

(b)(...) **набирал [новые тысячи рабочих].**
 collect-pa new-nom.pl.in thousand-nom.pl.in worker-gen.pl.an
 「新しい数千人の労働者を集めた」 (НКРЯ 2014.12.22)

(c) **Протестанты составляют [подавляющее большинство верующих(...)**
 protestant-nom.pl comprise-pr.3.pl overwhelming-nom.n.in majority-nom.n.in believer-gen.pl.an
 「プロテスタントは信者の圧倒的多数を構成している」 (НКРЯ 2022.03.30)

有生性に関する素性が CB から出られない以上、対格の属格化は起こりえない。



いずれの節点においても対格が属格化するための条件は揃っていない。

以上の様に、CB を越えた N の有生性[an]のコピーの可能性が Q によって違うと考えることでどの QP によって対格の形態パターンが異なることを説明できる。

5.2.4. Q の素性の整理

5.2.4.1. 一致素性と CB を越えさせる素性

Chomsky (1970, 1972) や Jackendoff (1977) などは素性の束として品詞を定義づけることで、それにより品詞間の共通点や相違点を明確化しようと試みた。匹田 (2017) はこの基本的な考え方に則り、それぞれの数量詞がどの程度形容詞近く、どの程度名詞に近いのか、連続体内での位置を素性の束として表すことを試みた。

まず、名詞と AM の持つ素性とそのスロットについてまとめると、以下の通りである。

(52)

	数	性	有生性	屈折タイプ	格
名詞	[sg/pl/pc]	[m], [f], [n]	[an], [in]	[I], [II], [III], ...	[ø]
AM	[ø]	[ø]	[ø]	×	[ø]

格については名詞も AM もいずれとも他から与えられる文脈的素性であり、空のスロットだけを持っている。それ以外の素性は名詞は全て本来的素性として持っているのに対して、AM は屈折タイプをのぞき全て名詞からコピーされる文脈的素性であり、それらを受け入れるための空のスロットだけを持っている。屈折タイプに関しては少なくとも名詞の屈折タイプは持たず、少なくとも名詞の屈折タイプを受け入れるスロットはない。

5. 有生性の一致について

数量詞についてはこれまでの議論を踏まえると、以下の通りである¹³。

(53)Q の一致素性とそのスロット

	1	PcQ		HQ		NQ	QCN
		2	3, 4	5~	100		
数	[(ø), (ø)]	[(ø), (ø)]	[(ø), (ø)]	×	×	[sg/pl]	[sg/pl]
性	[(ø), (ø)]	[ø]	×	×	×	[m], [f]	[m], [n], [f]
有生性	[ø]	[ø]	[ø]	×	×	[in]	[in]
タイプ	×	×	×	[III]	[IV]	[I], [II]	[I], [II], [III]
格	[ø]	[ø]	[ø]	[ø]	[ø]	[ø]	[ø]

格以外の一致素性について、数：[ø]，性：[ø]，有生性：[ø]，屈折タイプ：×，というのが AM のもので、全て本来の素性として持っているのが名詞の特徴だとしたら、PcQ と HQ については全てその中間的存在であることがわかる。さらに Q はこの表で言えば、左から AM 的な特徴が伸びており、右から名詞的特徴が伸びており、その中間的なところに AM 的でも名詞的でもない「×」が存在している。性と有生性についても同様である。屈折タイプについては他と少々異なっているが、AM 的な特徴が「×」、名詞的な特徴が本来の素性を有していることだとすると、やはり左から AM 的な特徴が伸び、右から名詞的な特徴が伸びていることになる。すなわち、(1-15)で見た Corbett (1978a, 1978b, 1978c) とその拡大版(3-22)の示した数詞の連続体同様に、Q の持つ一致素性のあり方は AM から名詞へとただらかに続く連続体を成していることが見て取れる。

匹田 (2017) では格付与能力についてもある種の素性として以下の通りまとめた。

(54)Q の格付与能力を示す素性

	1	PcQ		HQ		NQ		QCN
		2	3	5	100	1,000	100	
格付与	(i) asCase	-	+	+	+	+	+	+
	(ii) asLex	-	-	-	-	±	+	+

この中で (i)asCase とあるのは格付与能力の有無を表す。[+asCase] なら格付与能力を持っており、[-asCase] なら格付与能力を持っていないことを示す。「1」だけはマイナスだが、残りは全てプラスとなっている。また、(ii)asLex とあるのは格付与能力を持っているもののうち、それが語彙格かを示す。[+asLex] なら付与するのが語彙格、[-asLex] なら構造格を付与することを示す。

また、匹田 (2017) は N の素性の CB を越えたコピーの可否についても Q ごとにまと

¹³ HQ のうち *cmo*「100」の数については(1-28)で言及したように、一部の形態に数の対立が残っているとも言えるが(Corbett 1978a, 1978b 参照)、以後の議論には無関係な形でしか見られないので、ここでは数の対立が無いものとする。また、「100」の屈折タイプについては I~III までのどれにも当てはまらないため、ここでは仮に IV とするが、上でも言及したように、[I]以外の屈折タイプのどれかについては議論の中で問題となることはない。

5. 有生性の一致について

めた。

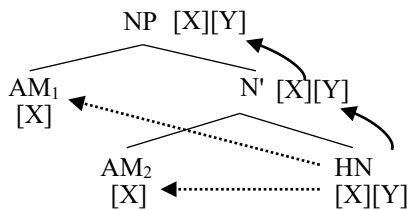
(55)Nの素性にCBを越えることを認める素性

		1	PcQ		HQ		NQ		QCN
			2	3	5	100	1,000	100万	
Nの素性の CBを越えた コピー	(iii) upNum	/	+	+	+	+	+	+	+
	(iv) horNum	/	+	+	+	+	-	-	-
	(v) horGend	/	+	-	-	-	-	-	-
	(vi) upAni	/	+	+	-	-	-	-	-
	(vii) horAni	/	+	+	+	+	-	-	-
	(viii) setCtrl	/	+	+	+	+	+	+	-

まず、「1」については、そもそも格付与能力がないので、CBも存在しないのでこれらの素性は持たない。

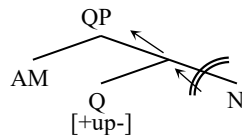
2.2.で見たように、一致素性のコピーは上方向のコピー(実線矢印)と横方向へのコピー(点線矢印)の2種類がある。

(56)(=2-23)



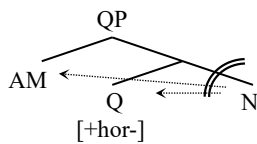
上で示した素性のうち up-で始まるものはCBを越えた上方向のコピーの可否、hor-で始まるものは横方向のコピーの可否を示している。

(57) up-



格領域を越えて上方向にコピーできる

(58) hor-



格領域を越えて横方向にコピーできる

また、(iii)[upNum]はNの数をCBを越えて上方向にコピーできるか、(vi)[upAni]は有生性を上方向に越えてコピーできるかを表し、(iv)[horNum]はNの数をCBを越えて横方向にコピーできるかを、(v)[horGend]は性を、(vii)[horAni]は有生性をコピーできるかをそれぞれ表している。

なお、一致素性の内、屈折タイプの横方向のコピーは理論的にあり得ない。横方向は具体的な語彙項目へのコピーになり、コピー先には当然ながら既にそれ自身の

5. 有生性の一致について

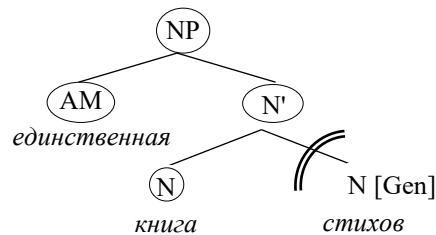
屈折タイプがあり、屈折タイプを受け入れるスロットがない。

また、格領域を越えて性を上に、屈折タイプを上と横にコピーすることを認めるための素性はそもそも想定する必要が無い。これらは HQ の場合の N はそもそも複数なのでこれらを持ってないし、PcQ の場合も数量属格以外の格を与えられることになり、結果として少数[pc]は複数[pl]に融合し、さらにその結果として、性と屈折タイプはいずれにせよ消滅するからである。

最後に(viii)の[setCtrl]は述語の一致の Ctrl に CB の下にある N を指定できるようにするものである。典型的 NP の場合、3.で議論したように、以下の例で○で囲んだ節点は全て一致の Ctrl として指定できるが、CB の下にある N[Gen]は Ctrl として指定できないのが原則であると本稿では考えている。QP の場合にそれが可能となるように指定して典型から逸脱させるのがこの素性である。以下は典型的 NP の例である。

(59)(a)(...)[единственная книга стихов] вышла после его смерти(...).
sole-nom.f book-nom.f verse-gen.pl come_out-pa.f after_his_death
「唯一の詩の本は彼の死後出た」 (НКРЯ 2017.07.13)

(b)



ただし、QP の N が Ctrl として指定された場合でも主格でなければ実際には一致ができず、述語はデフォルトの n.sg.3 の形態をとることは 3.4.4.2. でやはり議論した。

5.2.4.2. Q の素性と実際の形態

本節では前節で立てた素性を実際の例に当てはめることで QP やそれを主語とする述語の形態がどのようにして正しく予測されるかを見る。以下、格と一致素性は[] に下付文字による略記で何の素性かを示すことで格付与能力と格領域を越えさせるための素性と区別してある。なお、格付与能力に関わる素性と格領域を越えさせるための素性はその値が「+」の時のみ示すこととして、「-」の時は略する。また、節点のラベルは具体的な語彙項目の入る末端節点はそのまますpecificな語形で記している。また、この名詞句を主語とする述語の一致の Ctrl になり得る要素は四角く囲むことで示した。

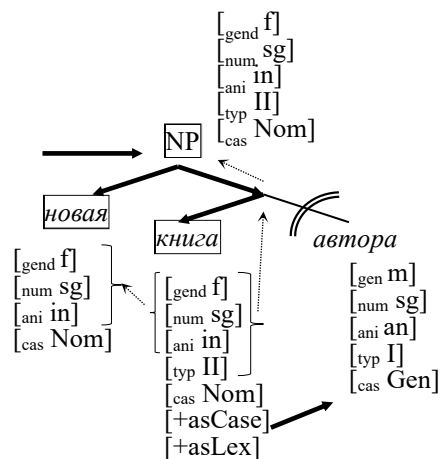
5.2.4.2.1. 典型的 NP と「1」の場合

まず典型的な NP と、格付与能力がなく通常の AM と同様に振る舞う数量詞 один 「1」の場合の QP から確認する。

5. 有生性の一致について

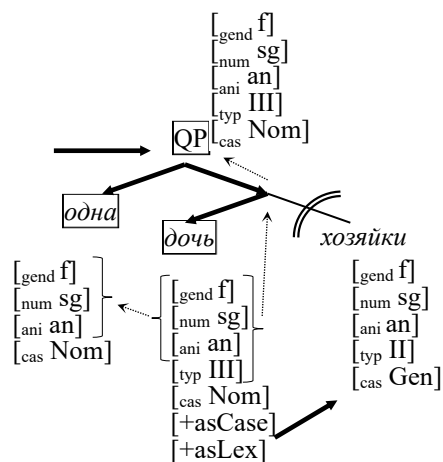
- (60)(a) новая книга автора
 new-nom.f.in. book-nom.f.in.II author-gen.m.an.I
 「作者の新しい本」 (НКРЯ 2017.07.14)

(b)



- (61)(a) одна дочь хозяйки
 one-nom.f.in. daughter-nom.f.in.III hostess-gen.f.an.II
 「女主人の一人の娘」 (НКРЯ 2017.07.15)

(b)



いずれの場合でも AM と「1」は格付与を行わないので、その姉妹の節点の上に CB が形成されることはないし、また N *книга*, *дочь* によって属格が付与¹⁴されて形成された CB の下との素性のやりとりは一切ない。上や横にコピーされた素性は全て *книга* と *дочь* からのものである。

¹⁴ 一般の名詞を含め、格付与能力について理論的にどのように整理するかは今後の課題である。本稿での素性は記述的な事実を反映させるためのものに過ぎない。

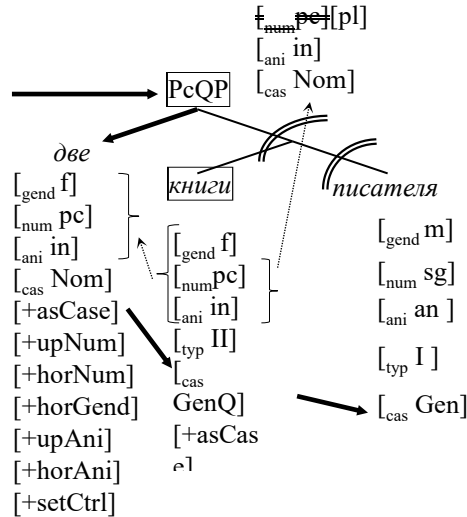
5. 有生性の一致について

5.2.4.2.2. PcQ「2」の場合

続いて PcQ *два*「2」の場合である。

(62) (a) *две* *книги* *писателя*
 two-nom.pc.f.in book-genq.pc.f.in.II writer-gen.sg.
 「作家の2冊の本」 (НКРЯ 2017.07.15)

(b)



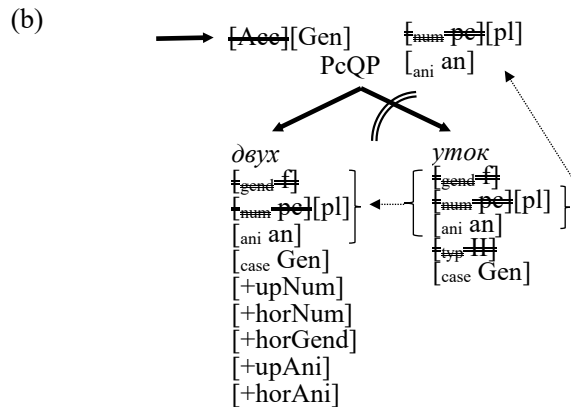
「1」の場合と違い、「2」はまず[asCase]がプラスで格(構造格の数量属格)を付与する能力があるため、CBの下にあるNの素性にCBを越えさせるための素性があり、そして「2」の場合それらの素性の値は全てプラスである。そのため名詞 *книги* の素性は横には性、数、有生性が、上には数、有生性がコピーされる。なお、頂点にコピーされた少数[pc]は主格が付与されたため、複数との対立を失い[pl]になる。名詞 *книги* には格付与能力があるものの、支配するNの一致素性に格領域を越えさせる能力は無い。従って名詞 *писателя* は一致に関しては一切無関係である。

なお、「2」の素性[setCtrl]はプラスなので名詞 *книги* が格領域を越えて述語の一致のCtrlとして指定されうるが、その場合主格ではないため述語はデフォルトのn.sg.3の形態をとる。また、この句の頂点の節点が一致のCtrlになった場合は、*книги* から格領域を越えて上がってきた素性[pc]が書き換えられた[pl]により、述語は複数形になる。

PcQでは有生性の素性が上方向にコピーされるため、有生[an]の場合は対格の属格化が起こるが、この点も正しく予測が可能である。

(63) (a) (...) *убил* [двух уток].
 kill-ra.m two-gen.pl duck-gen.pl.an.
 「2羽のカモを殺した。」 (НКРЯ 2014.09.19.)

5. 有生性の一致について

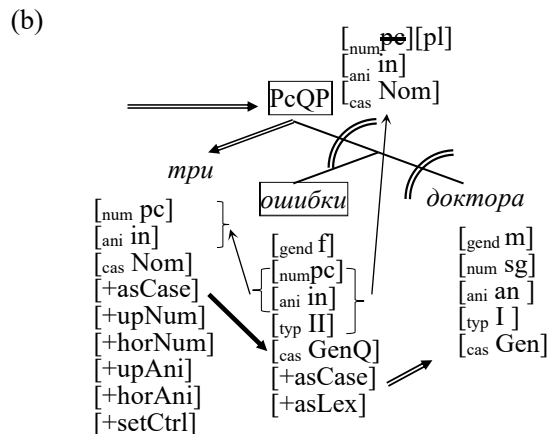


[+upNum]と[+upAni]によってNの数[pc]と有生性[an]が上にコピーされるが、[pc]は対格[Acc]が付与された時点で[pl]に変わる。属格化の条件が揃っているため、[Acc]は属格[Gen]に書き換えられ、その後下に浸透して行く。結果として末端はいずれも属格が与えられている。その結果、PcQとNの[pc]が[pl]に書き換わることで、性と屈折タイプの素性は削除されている。

5.2.4.2.3. PcQ「3, 4」の場合

数量詞 *три*「3」と *четыре*「4」から[horGend]がマイナスになり、格領域を越えた横方向の性のコピーがなくなる。「2」とちがってこれらの数量詞は性の一致を行わないからである。その他の素性は「2」と同じである。[+horNum]によって少数の素性の横方向のコピーはPcQ, そしてその更に左にAMがあればそこにも、行われる。Nの更に右にあるN[Gen] *доктора* は一致素性のやりとりには全く無関係である。

(64)(a) три ошибки доктора
 three-nom.pc. error-genq.pc.f.in.II doctor-gen.m.an.I
 「博士の3つの過ち」 (НКРЯ 2017.07.15)



[+horGend]がないので性が横向きにPcQにコピーされない点以外は「2」の場合と同じ

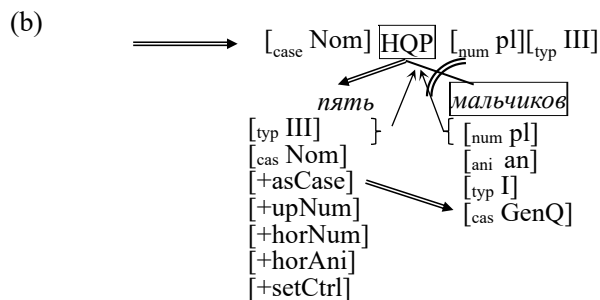
5. 有生性の一致について

である。主格が与えられている節点 PcQP, あるいは数量属格が与えられている N *ошибки* が述語の一致の Ctrl になった場合の述語の形態も「2」の場合と同様で、それぞれ pl.3 および n.sg.3 の形態を示す点、有生性の一致に関しても、「3」と「4」は「2」の場合と同様に振る舞う。

5.2.4.2.4. HQ の場合

「5」から「100」までの HQ は一致に関して同じ振る舞いを示す。(53)に示したように、連続体上「5」から先の HQ は本来的素性として性、数、有生性を持たず、名詞としての屈折タイプのみを一致素性として持つ。そのため、「5」から上は数量詞自身の屈折タイプに関する素性[III]が上方向にコピーされることになる。これについては格領域の境界を越えているわけではないので、特別にそれを示す素性を想定する必要は無い(もっとも、後続する名詞は複数なので屈折タイプと性はそもそも持っていないと考えられるが)。

(65)(a) ПЯТЬ мальчиков
 five-nom boy-genq.pl
 「5人の少年」



このタイプの Q には数に関する素性がなく、[upNum]がプラスなので N の数素性 [pl]が上方向にコピーされる。それ故頂点の接点が述語の一致の Ctrl になった場合、述語は複数形になる。また、[setCtrl]がプラスなので N *мальчиков* も Ctrl にはなれるが、主格ではないので述語は n.sg.3 の形となる。

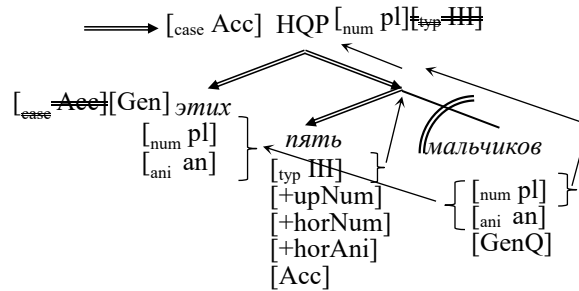
一方、[upAni]がマイナスになったので、N の有生性の素性が上方向にコピーされることはなくなり、また HQ にも有生性の素性がないので、属格化が起こることはない。ただし、上で見たように、HQ の左に更に AM が伴っていると異なる様相を呈することになる。すなわち、AM では属格化が起こるのである。

(66)(=37)

(a) Я увидел [этих] пять мальчиков].
 I-nom see-pa.m this-gen.pl.an five-nom.III boy-genq.pl.an
 「私はこれら 5 人の少年を見かけた」 (Babby 1987: 109)

5. 有生性の一致について

(b)



ここで、N *мальчиков* から CB を越えて上方向へコピーされるのは [+upNum] による数 [pl] のみで、屈折タイプは HQ からコピーされる。また、有生性の素性はどこからも上方向にコピーされることはない。結果、名詞句の頂点に付与された対格は、屈折タイプ [III] は [pl] があるので消されるが、そもそも有生性の素性 [an] がいないため属格化規則が適用されず、対格は属格に書き換えられることなく末端に浸透して行く。一方、左端の AM である指示代名詞 *этих* へは [+horNum] と [+horAni] により N から格領域を越えて横方向に [pl] と [an] がコピーされる。結果として *этих* に浸透してきた対格は、属格化規則(6)の格の書き換えを妨げる素性がないため、対格は属格に書き換えられる。一方 *пять* は自身の素性 [III] が属格化規則(6)の条件に合わないし、そもそも有生性の素性もないので、対格が属格に書き換えられることは無い。なお、N *мальчиков* は上から浸透してくる対格より *пять* からの数量属格が局所性原理により優先される。

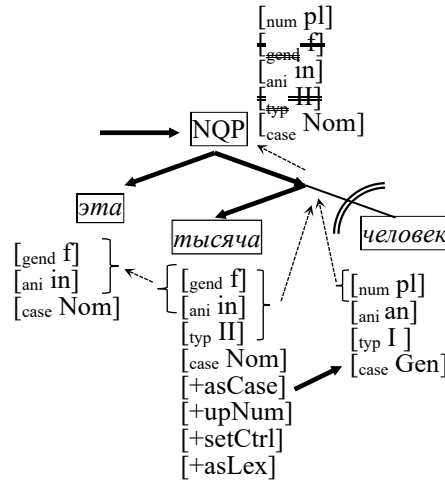
5.2.4.2.5. NQ の場合

(53)で示したように連続体中 *тысяча*「1,000」から先の NQ は自身の性と数、有生性、屈折タイプを持つようになる。また、[upNum] と [setCtrl] はプラスだが、[horGend] だけではなく [horNum] もマイナスになって N ではなく数量詞自身の性と数が横方向にもコピーされ、NQ に先行する AM は NQ の持つ性・数・有生性に一致する (Corbett 1979a: 74 は複数で一致する AM *эти* は不可としている)。さらにここからは通常の名詞と同じだけの一致素性を持つので数量詞自体が動詞の一致の Ctrl にもなり得る。そして、頂点の節点と Q という異なる一致素性を持つ主格の節点が2つあるため、n.sg.3 の形態以外に更に2つ、合計3種類の一致のバリエーションが述語に見られることになる。述語は頂点に一致すれば pl.3, NQ *тысяча* に一致すれば女性形、そして属格の N *человек* を一致の Ctrl に指定すれば n.sg.3 の形態をとる。また、Q に一致している AM である指示代名詞 *эта* を Ctrl とした場合も女性形である。

(67)(a) эта тысяча человек
 this-nom.f thousand-nom.f person-gen.pl
 「これら 1,000 人」

5. 有生性の一致について

(b)



なお、頂点に NQ からコピーされた性と屈折タイプは N から複数[pl]がコピーされてくると削除される。

また、[horAni]が連続体上ここからマイナスになり、NQ の有生性の素性[in]が NQ に先行する AM に対して横方向へもコピーされることになる。間に妨げる格領域の境界はないのでこのために特別な素性は必要ない。従って HQ の場合と違い、先行する AM だけ有生性の一致を行い対格が属格に書き換わることはない。

ただし、*тысяча*「1,000」が付与する格は、語彙格(即ち通常の属格)の場合と構造格(つまり数量属格)の場合があり、それ故(54)では素性[asLex]の値は[±]とした。このことが QP 全体に与えられた格が主格・対格以外の語彙格環境の場合に Q と N の格が一致するかしないかの揺れに見て取れることは 2.3.2. で見た(上の例は「+」の場合である)。 *миллион*「100 万」以降の数量詞にはそのような揺れは見られず[+asLex]である。

5.2.4.2.6. QCN の場合

ряд「多数, 一連」, *большинство*「大多数」, *часть*「一部」, *масса*「多量」などの数量的集合名詞は連続体の最も名詞よりにあるが、[setCtrl]がマイナスになるため述語に n.sg.3 の一致が起こることはない。一致の Ctrl になり得るのは QCN や頂点の節点など、CB より上の節点のみである¹⁵。

(68)(a) Приехала масса туристов.

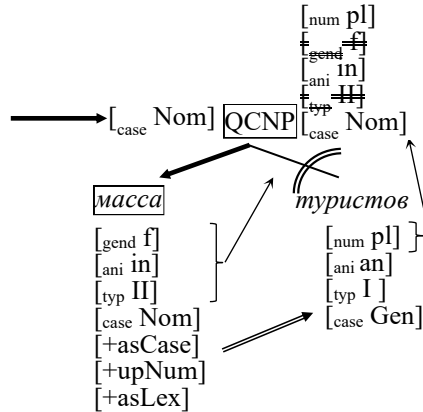
come-pa.f mass-nom.f tourist-gen.pl

「多量の観光客が到着した」 (匹田 2016: 367)

¹⁵ *ряд*「多数」などの QCN の setCtrl の値がマイナスであると言うことは、匹田 (2007a, 2010)における述語の n.sg.3 での一致が不可ということから得た帰結であるが、3.3.3. で見たように、この点の実態についてはより詳細な議論が必要である。ここでは本稿の議論にそれほど大きな影響を与えることがないので、これ以上は議論せず、今後の課題としたい。

5. 有生性の一致について

(b)



その他の点でNQとの違いはない。頂点にNから[pl]がコピーされると QCN からコピーされた性と屈折タイプが削除されるのも同じである。上の例は QCN *большинства* に一致した例だが、下の例は頂点の節点を Ctrl とした場合の例で、pl.3 での一致が見られる。

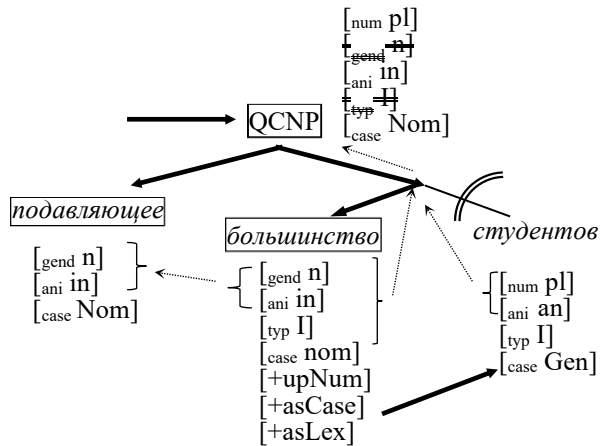
(69) Большинство студентов хорошо сдали экзамены.
 majority-nom.n student-gen.pl well pass-pa.pl exam-acc.nom.
 「大多数の学生が優秀な成績で試験に合格した」 (匹田 2016: 367)

QCN はいずれも無生[in]を持っているので、対格環境にあっても属格化が起こることはない。この点も NQ の場合と同じである。

また、QCN の前に AM を伴うことも当然可能である。その場合、AM は完全に QCN に一致する：

(70) (a) подавляющее большинство студентов
 overwhelming-nom.n.in majority-nom.n.in.I student-gen.pl
 「圧倒的多数の学生」 (НКРЯ 2017.07.15)

(b)



以上、本節では Q の持つ様々な一致素性とそのスロット (53), Q の持つ格付与能力 (54) と Q の持つ N の一致素性に CB を越えさせる素性 (55) の様々なあり方によって句

5. 有生性の一致について

の内部での一致，述語との一致，対格の形態パターンなど様々な問題が説明できることを示した。理論的なさらなる単純化を目指して，7.でさらに議論を整理することとする。

5.3. 主格化

前節までで対格が属格に書き換えられる仕組みについて考察してきたが，対格環境にある名詞句の形態を考える場合もう一つ残された問題がある。すなわち，対格が属格と同形になる場合の他に主格と同形になる場合である。

主格への書き換え規則は，属格への書き換えの後に適用され，既に属格に書き換えられている部分はこの規則のインプットにはならないと考え，以下の条件で行われるものであるととりあえず考えてみよう。

(71)以下のいずれかの素性の値以外のものがなければ

[Acc] → [Nom]

(i) 性：[m] & 有生性：[in]

(ii) 性：[n]

(iii) 屈折タイプ：[III]

例えば以下の場合，属格への書き換えは行われず，*этот* も *журнал* もともに素性[m]と[in]を持っているのでいずれも対格は主格に書き換えられている。

(72) (...)принес [этот журнал].
bring-pa.m this-nom.m.in magazine-nom.m.in.I
「(...)この雑誌を持ってきた」(НКРЯ 2014.11.11)

男性[m]の場合屈折タイプに関する条件を追加しないことで例えば *путь* 「道」のような第1変化以外のものについても正しく予想ができる。つまり，屈折タイプに関する条件を加えないことで，*путь* のような第1変化以外の男性名詞も主格になることを捉えることができるのである。

(73) (...)я нашел [свой путь] (...)
I-nom find-pa.m self's-nom.m.in way-nom.m.in.III
「私は自らの道を見つけた」(НКРЯ 2014.08.20)

また，第2変化の男性名詞については有生性に関する素性[in]を条件に加えることで活動体名詞では主格化が起こらなくなり，結果的に対格に固有の形態になる。なお，この場合の AM である所有代名詞 *твоего* 「君の」は属格化の規則(6)が既に適用され属格に書き換えられているので主格化の規則(71)のインプットとはならない。

(74)Я хорошо знаю [твоего папу].
I-nom well know-pr.1.sg your-gen.m.an dad-acc.m.an.II

5. 有生性の一致について

「私は君のお父さんをよく知っている」 (НКРЯ 2014.08.16)

複数の場合は性が無関係になるので性に関係なく全て条件 i)に従って主格への書き換えが行われる。以下の *дома*「家」は男性名詞, *песни*「歌」は女性名詞, *слова*「語」は中性名詞だが複数形ではその違いは無い。

(75)(...)знаю [эти дома / песни / слова].
know-pr.1.sg this-nom.pl.in house-nom.pl.in song-nom.pl.in word-nom.pl.in
「(...)これらの家/歌/語を知っている」 (НКРЯ 2014.08.20)

中性名詞の場合, 無生名詞でも有生名詞でも関係なく条件 ii)により主格への書き換えが正しく予想される。

(76)(...)прочитал [Ваше письмо].
have_read-pa your-nom.n.in letter-nom.n.in.I
「(...)あなたの手紙を読みました」 (НКРЯ 2014.08.20)

(77)Герой убил [морское чудовище].
hero-nom.m kill-pa.m maritime-nom.an monster-nom.n.an.I
「英雄が海の怪物を殺した」 (Halle 1994a: 202)

また, 条件(ii)には屈折タイプは関係ないので単数主格が-мя終わりの中性名詞の場合も正しく主格になることが予想される。

(78)(...)я знаю [ваше имя] (...)
I-nom know-pr.1.sg your-nom.n.in name-nom.n.in.III
「私はあなたの名前を知っています」 (НКРЯ 2014.08.20)

第2変化の女性名詞は, 活動体か不活動体かに関わらず(71)の条件(i-iii)のどれにも合致しないので主格に書き換えられることはなく, 結果として対格独自の形態になる。

(79)(...)знаю [эту женщину / книгу] (...)
know-pr.1.sg this-acc.f.an/in woman-acc.f.an.II / book-acc.f.in.II
「(...)この女性/本を知っている」 (НКРЯ 2014.11.11)

また, 第3変化名詞についてはその有生性の素性に関わりなく条件 iii)によって主格への書き換えが行われる。ただし, それを修飾する AM はいずれの条件にも合致しないので主格化は行われず対格のままであり, 結果的に対格固有の形態になる。

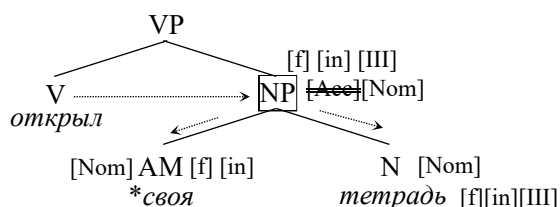
(80)(a)(...)открыл [свою тетрадь] (...)
open-pa self's-acc.f.in notebook-nom.f.in.III
「(...)自分のノートを開いた」 (НКРЯ 2014.08.20)

(b)(...)любил [свою дочь] (...)
love-pa self's-acc.f.an daughter-nom.f.an.III
「自分の娘を愛していた」 (НКРЯ 2014.08.20)

5. 有生性の一致について

属格化の規則(6)に比べると主格への書き換え規則(71)は適用条件が少々煩雑な感
は否めないものの、以上を見る限り正しく機能しているように見える。しかし、よ
り詳細に検討すると上手く説明が付かない現象がまだあることがわかる。(80)の例文
はいずれも上手く説明できているように見えるが、上下のどちらで書き換えが起こ
るのかを考慮に入れると問題があることがわかる。

(80a')

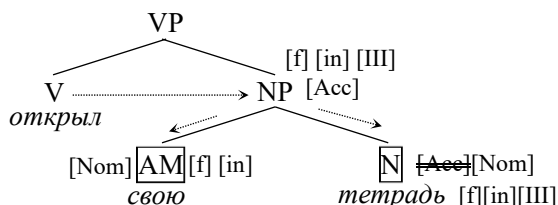


この場合、節点 NP は主格化の条件を満たしているが所有代名詞 *свою* 「自分の」は
対格固有の形態になっているので、節点 NP で一旦[Acc]→[Nom]の書き換えが行われ
その主格が AM に浸透した後そこで今度は[Nom]→[Acc]と書き換えられたと考えな
ければならなくなる。つまり逆の書き換え規則をもう一つ想定しなければならな
くなる。これは文法の簡略化という観点から甚だしく好ましくない事になってしまう
と言えよう。

そうすると、この問題を回避するためには、この場合節点 NP では格の書き換え規
則は適用されず、末端に降りてから主格化が行われている可能性を考えるべきなの
であろうか。しかし、節点 NP と末端の節点 N の持っている素性はいずれも[f] [in]
[III]と全く同じある。つまり、末端の N で書き換えが起こるのなら NP でも行われる
はずなのである。また、条件が揃っても末端に浸透するまで待たなければならない
としたら、それはそれで早期適用原理の観点から好ましくないと言えよう。

一方で属格への書き換えの場合と違い、主格化は条件が揃ったら上下どちらで行
われてもいいものではなく、以下のように末端でのみ行われるものと考えるとい
うことは、そのプロセスは統語論には関わらない純粋に形態論的な性質のものと思
えるべきということかも知れない。

(80a'')



また、主格化が純粋に形態論的な問題として生じる現象だとしたら、対格から主格
への格の書き換えは個々の語彙項目のパラダイムの問題として捉えることが可能で
ある。すなわち、以下のような形態的規則を考える：

5. 有生性の一致について

(81)対格に固有の形態がなければ[Acc] → [Nom]

そう考えれば、属格に書き換わるものを除けば女性形の AM と第2変化名詞以外の曲用するいわゆる名辞類(имя)は全て対格固有の形態を持たないので自動的に主格に書き換えられることになる。

Babby (1986)や, Rappaport (1986), Babyonyshev (1993)あるいは匹田 (1998)など様々な研究者が主格をデフォルトの格と捉えている。だとすると、パラダイムの欠損を補うために真っ先に主格が用いられるというのはそれほど無理のある考え方では無いと思われる。

ロシア語において対格が独自の形態を持っているのは、第2変化[II]の名詞と女性の AM であり、複数では対格独自の形態を持つものはない。これら以外の場合は属格化しない限り全て主格形と同じとなる。

(82)

	第2変化名詞[II]			AM女性[f]	
	本	女性	お父さん	大きい	この
主格	книга	женщина	папа	большая	эта
対格	книгу	женщину	папу	большую	эту
属格	книги	женщины	папы	большой	этой
処格	книге	женщине	папе	большой	этой
与格	книге	женщине	папе	большой	этой
具格	книгой	женщиной	папой	большой	этой

本章でここまで挙げた例文のうち、対格独自の形態が見られるものには以下のようなのがあった。まずは女性[f]の AM と第2変化[II]の N の組み合わせである。

(83)(=11)(a)(...) знаю [эту книгу].
know-pr.1.sg this-acc.f.in book-acc.f.in.II
 「(...)この本を知っている。」 (НКРЯ 2014.10.27)

(b)(...)знаю [эту женщину].
know-pr.1.sg this-acc.f.an woman-acc.f.an.II
 「(...)この女性を知っている。」 (НКРЯ 2014.10.27)

[f]も[II]も有生、無生に関わらず全て対格独自の形態になっている。[f]も[II]も属格化を妨げる素性であるからである。

続いての例は女性の AM と第3変化名詞の例である。同じ女性名詞でも第2変化と異なり、第3変化は独自の対格形を持たないため主格化している。

(84)(=12)(a) Я получила [новую тетрадь] (...)
I-nom received new-acc.f.in notebook-nom.f.in.III
 「私は新しいノートをもらった。」 (НКРЯ 2022.03.22)

(b) Я [вашу дочь] однажды видел (...)
I-nom your-acc.f.an daughter-nom.f.an.III once see-pa
 「あるとき私は貴方の娘を見かけた。」 (НКРЯ 2022.03.22)

5. 有生性の一致について

この場合も有生・無生は関係がない。Nが有生でも無生でもどちらの場合もAMが対格独自の形態、Nが主格になっている。

次の例はNが男性[m]の第2変化[II]、AMが男性の属格形の場合である。

(85)(=13)(...)Анжела любила [этого мужчину].
 Angela loved this-gen.m.an man-acc.m.an.II

「アンジェラはこの男性を愛していた」 (НКРЯ 2022.03.22)

第2変化名詞は有生・無生に関わらず対格独自の形態を持つ。ただし、男性の場合、有生であれば¹⁶、AMは属格化を起こすことは上で見たとおりである。

以下の例は全て主格化しているものである。これらはいずれも属格化が起こらなかったもので、いずれも対格の独自形が形態法上存在しないものばかりである。従って、上記の主格化規則(81)は正しく現象を予測していると考えられる。

(86)(=9a)(...)принес [этот журнал].
 bring-pa.m this-nom.m.in magazine-nom.m.in.I

「(...)この雑誌を持ってきた」 (НКРЯ 2014.11.11)

(87)(=10a)Я получил [твое письмо].
 I-nom receive-pa.m your-nom.n.in letter-nom.n.in.I

「私は君の手紙を受け取った。」 (НКРЯ 2022.3.21)

(88)(=75)(...)знаю [эти дома / песни / слова].
 know-pr.1.sg this-nom.pl.in house-nom.pl.in song-nom.pl.in word-nom.pl.in

「(...)これらの家/歌/語を知っている」 (НКРЯ 2014.08.20)

(89)(=78)(...)я знаю [ваше имя] (...)
 I-nom know-pr.1.sg your-nom.n.in name-nom.n.in.III

「私はあなたの名前を知っています」 (НКРЯ 2014.08.20)

また、いくつかQRの例も確認しよう。

(90)(...)Юрий купил [два билета на самолёт] (...)
 Yuri-nom.m buy-pa.m two-nom.-f.in ticket-genq.pc.-f.in to airplane

「ユーリーは2枚の航空券を買った」 (НКРЯ 2022.04.03)

¹⁶ Timberlake (2004: 131)は “Thus Declension-_{II} is feminine except for nouns referring to human beings whose syntactic gender follows referential gender.” 「このように第2変化はその統語的性が指示的性に従う人間を指示する名詞を除いて女性である。」と述べており、第2変化の男性名詞は全て活動体であるとしている。また、Зализняк (2002: 149, 2008: 74)によると、*доми́на* 「大きな家」、*стволи́на* 「大きな木の幹」のような指大形に男性・女性で揺れている第2変化名詞が若干あるが、これらは [эту доми́ну] 「この大きな家(対格)」となる場合にはNだけでなくAMも女性の対格独自形にならねばならない(すなわち女性名詞扱いしなければならない)。また、俗語において対格環境の場合でも *этот доми́но* のように男性のAM主格形を伴うこともあるとの指摘がある。この場合、第2変化の主格形 *доми́на*、第1変化の *доми́но*(つまり、第1変化の名詞のように)のいずれで綴るべきであるかは音声的には判然としないが、後者が適切である、とも指摘している。

5. 有生性の一致について

- (91) В доме я нашёл [две книги] (...)
in house-loc I-nom find-pa.m two-nom.+f book-genq.pc.+f
「家で私は2冊の本を見つけた」 (НКРЯ 2022.04.03)
- (92)(=37a) Я увидел [этих пять мальчиков].
I-nom see-pa.m this-gen.pl.an five-nom.III boy-genq.pl.an
「私はこれら5人の少年を見かけた」 (Babby 1987: 109)
- (93)(...) потеряли [миллион граждан] в год (...)
lose-pa.pl million-nom.m.in.I citizen-gen.pl in year-sg
「1年で100万人の国民を失った」 (НКРЯ 2022.04.03)
- (94)(...) планируют сократить примерно [тысячу сотрудников].
plan-pr.3.pl reduce-inf approximately thousand-acc.sg.f.in.II worker-gen.pl
「およそ1,000人の職員を削減する計画である」

これらの例で、最後の例をのぞく全ての Q が対格独自の形態を持っていないので主格化が起こっているが、最後の例の *тысячу*「1,000」だけが第2変化で対格独自の形態を持っている¹⁷。

以上、主格化については形態的な問題であるとし、属格化が起こらなかったものうち独自の対格形を持っていないものは全て末端の節点において主格に書き換えられると考えた。これによって正しい形態が予測できたことは間違いない。また、規則として(81)は(71)に比べて極めて単純で、簡潔に説明ができていると言えよう。

5.4. 本章のまとめ

以上本章では、以下に示す対格の3つの形態法のパターンの選択のメカニズムについて検討した。

(95)(=1)

(a) 対格独自の形態

主格: эта книга this-nom.f.in book-nom.f.in	対格: эту книгу this-acc.f.in book-acc.f.in
「この本」	(匹田 2016: 54)

(b) 主格と同じ形態

主格: далекий путь distant-nom.m.in way-nom.m.in	対格: далекий путь distant-acc.m.in way-acc.m.in
「遙かな道」	(匹田 2016: 55)

¹⁷ この後次章で PcQ と HQ は予め語彙の段階から [GenQ] を持っているとして結論づけるが、この主格化規則に関して影響を与えることはない。Q が予め [GenQ] を持っている場合、属格化していない [Acc] は Q まで浸透できず、主格化規則は Q で適用しようがないからである。また、PcQ は句節点で属格化が起こり、HQ は有生性の素性がないので、いずれも末端で属格化が適用されることはない。

5. 有生性の一致について

(101)(=55) N の素性に CB を越えることを認める素性

		1	PcQ		HQ		NQ		QCN
			2	3	5	100	1,000	100 万	
N の素性の CB を越えた コピー	(iii) upNum	/	+	+	+	+	+	+	+
	(iv) horNum	/	+	+	+	+	-	-	-
	(v) horGend	/	+	-	-	-	-	-	-
	(vi) upAni	/	+	+	-	-	-	-	-
	(vii) horAni	/	+	+	+	+	-	-	-
	(viii) setCtrl	/	+	+	+	+	+	+	-

また、5.3.では対格が主格になるのは形態的な問題として、末端の節点で適用される以下の規則を提案した。

(102)(=81)対格に固有の形態がなければ[Acc] → [Nom]

なお、対格に固有の形態があるのは女性の AM と第2変化名詞だけである。つまり、それ以外の場合は属格化していない限り、主格化する。この規則は対格形が存在しない場合に適用される「最後の手段」的性質のものなのかも知れない。

6. 語彙で予め付与されている数量属格

6. 語彙で予め付与されている数量属格

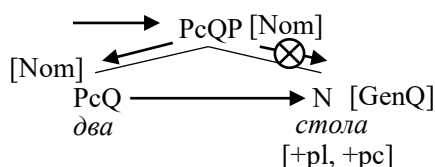
前章までの議論で、ロシア語の数量詞の文法素性とそのスロットのあり方を議論した。その結果、ロシア語の数量詞は一致素性と格に関して以下の値あるいはスロットを持っていると結論づけた。

(1)(=5-53)

	1	PcQ		HQ		NQ	QCN
		2	3, 4	5~	100		
数	[(\emptyset), (\emptyset)]	[(\emptyset), (\emptyset)]	[(\emptyset), (\emptyset)]	×	×	[sg/pl]	[sg/pl]
性	[(\emptyset), (\emptyset)]	[\emptyset]	×	×	×	[m], [f]	[m], [n], [f]
有生性	[\emptyset]	[\emptyset]	[\emptyset]	×	×	[in]	[in]
タイプ	×	×	×	[III]	[IV]	[I], [II]	[I], [II], [III]
格	[\emptyset]	[\emptyset]	[\emptyset]	[\emptyset]	[\emptyset]	[\emptyset]	[\emptyset]

ここで見るように、本稿ではここまでの議論の結果、PcQはNやAMあるいは他のQと同様に、格に関してはそれを受け入れるための空のスロット[\emptyset]を持っており、格付与と浸透によって具体的な値を得ると考えている。例えば、以下の主格環境にあるPcQPの場合、頂点に付与された主格[Nom]が空スロット[\emptyset]を持つPcQに浸透する。

(2)(=4-60)



この考え方は *два* が主格形であるとする伝統的な考え方と最も親和性が高いと思われるが、4.5.2.2.8.でも指摘した様にこの考え方にはいくつかの問題がある。

問題点を指摘する前に、本稿で提案した以下の2つの規則を確認する：

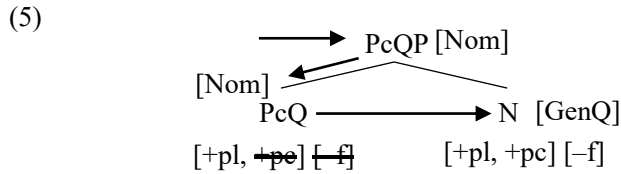
(3)(=4-90)[GenQ]以外の格が与えられると $[\text{num } (\pm\text{pl } x), (\pm\text{pc } y)] \rightarrow [(\pm\text{pl } x)]$

(4)(a)(=2-70) $[\text{gender } x] \rightarrow \emptyset$, if [+pl]

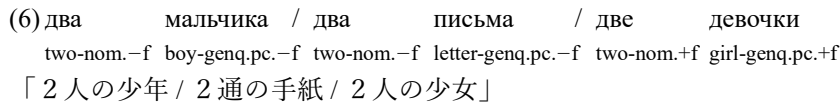
(b)(=2-80) $[\text{dec. type } x] \rightarrow \emptyset$, if [+pl]

このうち(3)は数量属格以外の格が与えられるとその節点の数のスロットが1つ削除される(≡少数が複数に書き換えられる)ことを意味し、(4a)は複数において性素性が削除され性の対立が消失することを意味する。つまり、数量属格以外の格、例えば主格が与えられると(3)により少数が複数に書き換えられ、それに伴い(4a)により性の対立が消失しなければならないことになる。

6. 語彙で予め付与されている数量属格



しかし、以下の様に、PcQ *два*「2」の場合、性の対立は以下に見るように消えることがない。

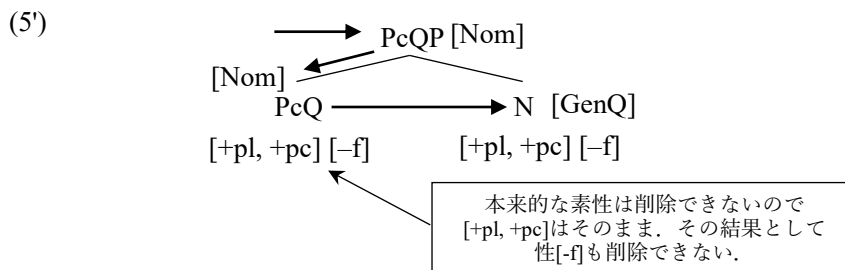


この点を正しく予測できる理論を構築することが本章の議論すべき問題である。

6.1. 過去の提案

6.1.1. 匹田 (2018)の改定

匹田 (2018: 58-61)はこの問題を本来的素性は消すことができない、とすることで説明しようとした。匹田 (2018)では、PcQは数の素性として(1)のように2つの空のスロットを持っているとは考えず、(4-76)のように[+pl, +pc]という値を本来的に持っていると考えていた。つまり、(5)での数素性は本来的なものであるため削除できず、結果として性の削除も起こりえない、と考えることで説明を試みた。



このことは、Chomsky (1965, 1995)などで一般的な原理として想定される「復元可能性原理 (Recoverability Principle)」によってもたらされる帰結と言って良いであろう。

Chomsky (1965: 177)は復元可能性原理を以下の様に簡潔に述べている。

(7) (...) deletions must be recoverable (...)

「削除は復元可能でなければならない」¹

さらに、この考え方は一般理論だけでなく、ロシア語の具体的な現象に基づく後

¹一方で、Fiengo and Lasnik (1972)もこの原理が極めて当然の帰結であることを明快に示しているの
 で参照されたし。

6. 語彙で予め付与されている数量属格

藤 (2015b, 2017) の指摘に対する回答でもある。後藤 (2015b, 2017) は以下の一連の例文を示し、ロシア語の名詞の性が複数においても消失していないと主張する。

(8)(a) Я доволен этими домами, каждый из которых по-своему хорош.
I satisfied this-ins.pl house-ins.pl each-nom.sg.m from which-gen.pl in_own_way good-sg.m
「私はこれらのそれぞれがそれなりに良い家に満足している」
(後藤 2015b: 52, Зализняк 1964: 31)

(b) один из студентов
one-nom.sg.m from student-gen.pl
「学生の一人」
(後藤 2015b: 53)

(c) Студентки принесли каждая по яблоку.
female_student-nom.pl bring-pa.pl each-nom.sg.f an_apple_each
「女子学生ら各々がリンゴを持ってきた」
(後藤 2015b: 54)

(d) Здесь инициатором может стать любая из сторон.
here initiator-ins can become-inf any-nom.sg.f from side-gen.pl
「ここでは、どちら側も主導者となり得る」
(後藤 2015b: 54, НКРЯ «2015.06.29»)

(e) Испытания не следовали одно за другим, а происходили
ordeal-nom.pl not follow-pa.pl one-nom.sg.n after other-ins.sg.n but occurred
одновременно.
simultaneously
「苦難は1つずつではなく、同時に起こった」
(後藤 2015b: 54, НКРЯ «2013.01.07»)

(f) золотая и серебряная медали
gold-nom.sg.f and silver-nom.sg.f medal-nom.pl.
「金メダルと銀メダル」
(後藤 2015b: 53, Кохтев & Розенталь 1984: 171)

(g) географический и исторический факультеты
geographical-nom.sg.m and historical-nom.sg.m faculty-nom.pl
「地理学部と歴史学部」
(後藤 2015b: 53, Кохтев & Розенталь 1984: 171)

これら(8)の例では、下線を付した要素が形態的に性を示しており、その性素性は波線を付した要素から受け取っていると考えるを得ない。しかし波線を付した要素はいずれも複数形であり、伝統的とも言えるロシア語の性に関する理解に基づく(4a)の規則によって性別は消失しているはずである。この点を捉えて、後藤 (2015b, 2017) は複数においても性は削除されないと考えた²。

² 後藤 (2015b, 2017) のこの主張は本稿での(5-6)の属格化の規則の議論と関連して示されたものである。しかし、複数においても性の対立が残っていると考えるとこの規則は正しく機能しなくなる。そのため、後藤 (2015b, 2017) は(5-6)に変わる以下の規則を提示している。

(i) 性, 屈折タイプ, 有生性に以下に示す以外の値がなければ[acc] → [gen]

(a) 単数形の場合: 性: [m]; 屈折タイプ: [I]; 有生性: [an]

(b) 複数形の場合: 有生性: [an]

6. 語彙で予め付与されている数量属格

後藤 (2015b, 2017)のこの指摘と主張は、本来的素性は削除できない、と言う匹田 (2018)の主張により説明できる。名詞の性はシンタックスに入る前から辞書で既に持っている素性だからである。

しかし一方で、本来的素性である数素性[+pl, +pc]が削除できないとすることで PcQ の性の対立が残っていることを説明する場合、いくつかの問題が残る。

まず第一にいわゆる斜格の場合、PcQ *два*「2」の性の対立は消失するが、この考え方を採用すると、素性的には少数が維持され、結果として性も残ってしまう。これは[+f]の場合と[-f]の場合でシンクレティズムが起こっていると解釈することになり、本稿の基本的な考え方の 1 つである(1-2f)に反するというできれば避けたいことになってしまう³。

さらに、以下の例を誤って非文と予測してしまうという問題もある。

- (9) (a) *двумя сутками*
 two-ins.pc day-ins.pl
 「2日間」 (Зализняк 1964: 35)
- (b)
-

この場合、PcQの数素性[+pl, +pc]が本来的な素性であるため削除できないとしたら、性のスロットも削除されない。また Милославский (1988: 11-12)が指摘するように単数形が存在しない絶対複数名詞 *сутки*「1日, 1昼夜」には文法性が存在しているとは考えられず⁴、結果として PcQ の性のスロットは空のまま埋められない、ということになる。このことは 4.5.2.2.8.で PcQ と絶対複数名詞の結合可能性を説明する中で提案した以下の表層フィルターに反することを意味するが、この予測は正しくない。

- (10)(=4-89a) *[(∅)]

言い換えれば、4.5.2.2.8.で展開した理論は、PcQ の数素性が本来的なものであるため

ただし、属格化が起こる条件を単数の場合と複数の場合と別に設定しなければならないなど、煩雑化は否定できない。

³ また、PcQ *два*「2」が、かつては双数形で屈折していたが現代語では *три*「3」、*четыре*「4」とともに斜格において複数形の屈折を獲得していることも少数が維持されていると考えたと説明がつかず、斜格においては少数が複数に変わっていると考える方が合理的と思われる。このことについては Иванов (1983: 323), Борковский и Кузнецов (2004: 243), Буслаев (2009: 188-189), Черных (2010: 232-235)などを参照。

⁴ (8a)の *домами* を *сутки* に入れ替えると *каждый, каждое, каждая* のいずれとも非文になり、複数の *каждые* だけが可能な形態である(Милославский 1988: 11)。

6. 語彙で予め付与されている数量属格

に削除不可能であるとする考え方を認めると成立しないことになる。

また、そもそもこの主張は PcQ が数に関して[+pl, +pc]という具体的な値を持っていないと成立しない。しかし、4.5.2.2.8.で議論での議論に従って(1)で示したように、本稿では PcQ は数の素性として具体的な値ではなく 2つの空スロットを持っていると考える。この前提は PcQ と ColQ の絶対複数名詞との結合可能性の違いを説明するために必要であり、この前提を覆すことになる匹田 (2018)の考えはその点でも好ましくないものであることになる。

以上の点から本稿ではこの考え方は採用しないこととする。しかし、本来的素性の削除を認めないと言う考え方では、そもそも後藤 (2015b, 2017)が指摘する(8)の一連の例における「一致」を説明するために考えたものであり、これを否定すると(8)の投げかける謎は変わらず残ってしまうことになる。そこで本稿で PcQ は匹田 (2018)と異なり(1)のように PcQ の数素性に関して決まっているのは具体的な値ではなくあくまで空のスロットと考える。PcQ の数素性が本来的なものと考えなければ仮に本来的素性が削除不可であっても矛盾は生じようがない。また、後藤 (2015b, 2017)が求めるのは N の性素性が残ることだけなので、そこからコピーされた AM や PcQ の素性は削除されても問題はないし、N 自体は他の要素と形態的に一致することはないので、その点でも問題はない。

しかし、N の本来的素性は削除されないとする、対格の形態法に関して考えなければならぬ問題が生じる。まず 5.2.で提案した対格の属格化規則を確認しよう。

(11)(=5-6) 属格化

有生[an]で、かつ性として[m]以外あるいは屈折タイプとして[I]以外がなければ
[Acc] → [Gen]

以下の例は有生の女性名詞の複数形が他動詞の直接補語となっている。

(12)(a)(...)она видела [молодых женщин] (...)

she-nom see-pa.f young-gen.pl woman-gen.pl

「彼女は若い女性たちを見かけた」 (НКРЯ 2022.05.03)

(b)(...)видел [женщин](...)

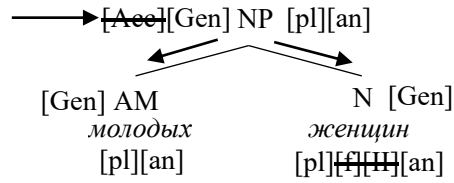
see-pa.m woman-gen.pl

「女性達を見かけた」 (НКРЯ 2018.07.26)

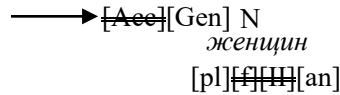
まず、N であれどこであれ、複数の場合性と屈折タイプが削除されると考えた場合、いずれも N が複数なので、性と屈折タイプは削除されるため以下のように、属格化を妨げる素性はない。

6. 語彙で予め付与されている数量属格

(13)(a)



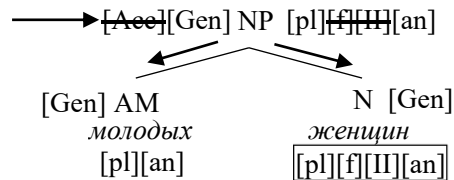
(b)



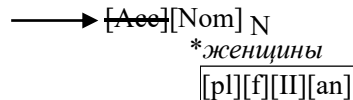
この場合、まず AM がある(a)の場合、N が複数のため[f]と[I]は削除され、[pl]と[an]が AM と頂点の NP にコピーされる。その NP に[Acc]が付与されると(11)によって対格の属格化が行われ、それが 2 つの末端に浸透して行く。一方 AM がない(b)の場合は、N の素性[f]と[I]は(4)によって削除される。そこに付与された[Acc]は(11)の条件によって属格化される。このように N においても性と屈折タイプの削除が行われると考えた場合、言語事実が正しく予測されている。

しかし、N の性と屈折タイプが本来的素性であるため削除されないと考えると、問題が生じる。以下の(a)は問題無く属格化が起こるが、(b)では属格化が起こらないと誤って予測されてしまう。(四角く囲んだ素性は本来的素性であるため削除できないもの)

(14)(a)



(b)



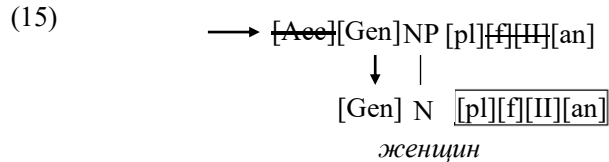
N の持つ素性[pl][f][an][I]はいずれも本来的素性であるため、削除は不可能と考えられる。(14a)の場合は、N で削除が起こらなくても句節点 NP での削除は可能で、そのため(11)の適用条件が NP で整い[Acc]が[Gen]に書き換えられ。その[Gen]が AM と N に浸透するので、AM と N が属格形になることを正しく予測できる。

一方(14b)の場合、AM が存在しないため、削除を可能とする句節点がないため(11)の条件が整うことはない。N の本来的素性は削除できない結果属格化が起こらない

6. 語彙で予め付与されている数量属格

という誤った予測を行ってしまうことになる⁵。すなわち、Nの本来的素性が削除できないと考えることは間違っていると考えられる。

この問題を回避するために、匹田(2018: 59)は末端のNの上にNを支配する最大投射NPがあると想定することを提案した：



つまり、Nの四角く囲んだ素性は本来的素性なので削除できないが、句節点NPではそれらは必要に応じて削除が可能である。NPは[p]なので[f]と[II]が削除され、結果NPで属格化規則(11)の条件が揃うので[Acc]は[Gen]に書き換えられ、そのまま末端のNに浸透して行く。このようにNの上にNPという別の節点があると仮定すれば正しく言語現象を予測することができるわけである。

ただし、後藤(2015b, 2017)の投げかけた問題の解決に本来的素性が削除不可、という説明で問題がないのかについては、どのような素性が削除可能でどのような素性が削除不可なのかも含め、今後のさらなる詳細な検討が必要である。そもそも(8)の例で指摘した性の「一致」がどのようなメカニズムで行われているのか、については本稿で議論している素性のコピーでは全く説明がつかず、何らかの別のメカニズムを考える必要がある。以後、本章の問題では本来的素性が削除できないから、という説明は採用せず、本稿の今後の議論においても本来的素性の削除の可不可の問題は関係しないので、この問題は本稿では考えず、今後の課題とする。

6.1.2. 匹田(2019)での再改定

匹田(2019: 121)は、(6)でPcQ *два*「2」の主格において性の形態的対立があることを説明するため、(3)を以下のように再度改定し、少数を複数に代える条件を「数量属格以外が与えられると」ではなく、「語彙格が与えられると」に改めた⁶：

(16) 語彙格が与えられると $[\text{num} (\pm\text{pl} \text{ X}), (\pm\text{pc} \text{ Y})] \rightarrow [(\pm\text{pl} \text{ X})]$

こうすることによって以下のPcQの性の対立が説明ができる。

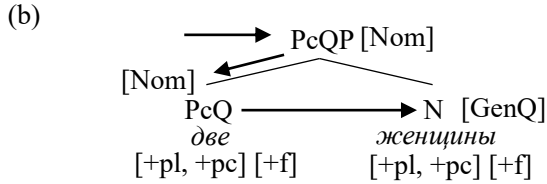
⁵ この場合、複数の名詞には対格独自の形がないため、5.3.で提案した以下の主格化規則が適用されるので結果としてNは主格形である：

(i)(5-81) 対格に固有の形態がなければ[Acc] \rightarrow [Nom]

⁶ ただし、匹田(2019)ではPcQは数素性として本来的に[+pl, +pc]という具体的な値を持っていると考えていたので、表現が若干異なる。ここでは4.5.2.2.8.での議論に従い、PcQが本来的に持っているのは具体的な値ではなく2つのスロットであると考え、規則の形式を改めている。

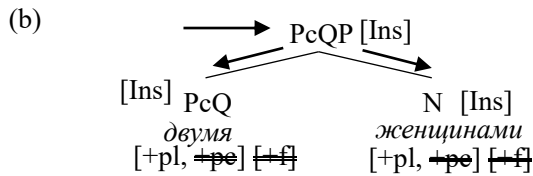
6. 語彙で予め付与されている数量属格

- (17)(a)(...)пришли две женщины(...)
 come-pa.pl two-nom.+f woman-genq.pc.+f
 「2人の女性がやってきた」 (НКРЯ 2022.05.04)



PcQ に浸透してきた[Nom]は語彙格ではないので(16)によって少数が複数に変わることはなく、それに伴い性素性[+f]も削除されることはない。一方、語彙格の具格が与えられた場合の例が以下のものである。

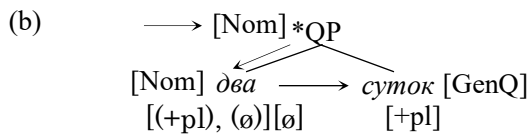
- (18)(a)(...)столкнулся с двумя женщинами(...)
 collide-pa.m with two-ins woman-ins.pl
 「2人の女性とぶつかった」 (НКРЯ 2022.05.04)



この場合、具格[Ins]は語彙格なので(16)に従い、PcQ の少数[+pl, +pc]は複数[+pl]に変わる。その結果、性の素性も削除されることになる。つまり、語彙格において PcQ が性の形態的対立を失うことが正しく予測されている⁷。

このことは 4.で議論した PcQ と絶対複数名詞の結合可能性についても正しく説明ができる。

- (19)(a)*два суток
 two-nom day-genq.pl
 「2日間」

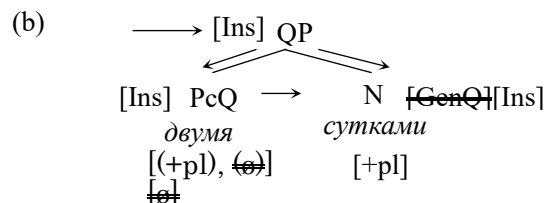


これが非文なのは、性のスロットが空のままであること、数のスロットのうちの一つがやはり空のままであることによる。しかし、語彙格の場合は事情が異なっている。

⁷ 前節 6.1.1.で N の本来的素性が削除されるかどうかは未解決のままにしてあるが、本稿の以下の部分では問題の煩雑化を避けるために、N の本来的素性も他と同様に削除可能と考えて議論を進める。

6. 語彙で予め付与されている数量属格

(20)(=4-83)(a) двумя сутками
 two-ins.pl day-ins.pl
 「2日間」 (Зализняк 1964: 35)



語彙格の場合は、語彙格である[Ins]が末端の PcQ に浸透してくると数素性のスロットの1つが削除され、それに伴い性のスロットも削除される。結果として主格環境の場合と異なり全く適格なものとなる。

以上の様に、(16)を採用すると上手くいくように見える。しかし、この考え方にも問題は残る。匹田 (2019: 121)でも言及したが、(16)でも望まぬシンクレティズムが生まれることはやはり変わりがない。もし(16)が正しいと考えると、全ての名詞の複数での主格形(および主格形を用いた対格形)は、常に複数[+pl]と少数[+pl, +pc]の形態を兼ねていることになる。しかし、これらを数量属格環境以外で区別する名詞は存在しない。

(21)(a)主格形(対格環境では属格形が用いられる場合)

кошки; собаки; студенты ...
 cat-nom.pl/pc dog-nom.pl/pc student-nom.pl/pc
 「ネコ; イヌ; 学生」

(b)主格形・主格形を用いた「対格形」

карандаши; ручки; имена ...
 pencil-nom/acc.pl/pc pen-nom/acc.pl/pc name-nom/acc.pl/pc
 「鉛筆, ペン, 名前」

このようなシンクレティズムは数の形態的対立がある名詞全てにあるものであり、しかも区別される場合がない。このように全ての名詞にあり、かつ違いが顕在化することが全くないシンクレティズムは本稿の基本方針(1-2f)以前に好ましいものとは言えないだろう。従って、これとは別の方策を以下模索することとする。

6.2. PcQ の格

以上の議論を経て、Hikita (2020)は全く異なる仮説を立てた。すなわち、ここまで主として検討していた少数[+pl, +pc]を複数[+pl]に変換するために設定したスロットの削除規則(3)の条件には変更を一切加えず、その代わりに PcQ はシンタックスに入る前に語彙において既に数量属格[GenQ]を持っているとするものである。つまり、(1)は以下の様に改められる。

6. 語彙で予め付与されている数量属格

(22)

	1	PcQ		HQ		NQ	QCN
		2	3, 4	5~	100		
数	[(\emptyset), (\emptyset)]	[(\emptyset), (\emptyset)]	[(\emptyset), (\emptyset)]	×	×	[sg/pl]	[sg/pl]
性	[(\emptyset), (\emptyset)]	[\emptyset]	×	×	×	[m], [f]	[m], [n], [f]
有生性	[\emptyset]	[\emptyset]	[\emptyset]	×	×	[in]	[in]
タイプ	×	×	×	[III]	[IV]	[I], [II]	[I], [II], [III]
格	[\emptyset]	[GenQ]	[GenQ]	[\emptyset]	[\emptyset]	[\emptyset]	[\emptyset]

これまでの議論では、Q の格は辞書では空のスロットがあるのみであったが、この一覧では[GenQ]という具体的な値を持っている。言い換えれば、PcQ の変化パラダイムは以下の様なものになり、主格と対格形が存在しない(主格、対格が数量属格を上書きすることはあり得ないので)。

(23)

	「2」		「3」	「4」
	男・中	女		
主格				
対格				
数量属格	два	две	три	четыре
属格	двух		трех	четырёх
処格	двух		трех	четырёх
与格	двум		трем	четырем
具格	двумя		тремя	четырьмя

以下本節では、この仮説が含意することを考察し検証する⁸。

6.2.1. 通時的変化

本節では、PcQ には数量属格[GenQ]が語彙で予め与えられているという解釈が現実の言語現象を矛盾せずに予測できるか確認する前に、通時的にどのような変化がこれまで起こってきたのかを確認する。

PcQ に関わる通時的変化については 4.2. で概観した。そこで示したように、通時的変化にともない、[PcQ два + N] という構造の要素それぞれの格と数に関わる再解釈が通時的変化として起こっていることがしばしば指摘されている (例えば, Иванов 1983, Babby 1987, 原 1996b, 三谷 1998, Борковский и Кузнецов 2004, Буслаев 2009, Колесов 2009, Черных 2010, 佐藤 2012, 井上 2019 など参照) :

⁸ なお, Goto (2020) は本稿とは全く異なる方向から QP にアプローチしており, 語彙で格が既に付与されているとは考えないものの, 一般に主格あるいは対格形と考えられている Q の形態が実は数量属格形であると主張している点で本稿と同じである。

6. 語彙で予め付与されている数量属格

(24)

	PcQ “2” + N
OR(Old Russian)	Nom.du + Nom.du
MR(Modern Russian)	Nom + Gen.sg

これらの変化・再解釈はロシア語の数カテゴリーから双数が消失したことがきっかけとなって生じていると考えられる(Борковский и Кузнецов 2004: 243).

一方、本稿では 2.3. で示したように PcQ や HQ の付与する格は通常の属格[Gen]ではなく数量属格[GenQ]であると考えられることで様々な現象を説明している。また 4. では様々な議論の結果として単数[sg], 複数[pl]に加えて少数[pc]というもう一つの数を設定するべきとの結論に達した。その結果、N の格は[Gen]ではなく[GenQ]に、数は[sg]ではなく[pc]となったと考える。結果として以下の様な解釈の変化が起こったと考えていることになる。

(25)

	PcQ “2” + N
OR	Nom.du + Nom.du
MR	Nom + GenQ.pc

さらに、匹田(2018, 2019)や 4.5.2.2.8.での議論によって PcQ は N と数によって一致しているとの結論に達し、それによって絶対複数名詞との結合可能性を説明できることが明らかになった。その時点で OR から MR への再解釈は以下の様に行われたと考えていることになる：

(26)

	PcQ “2” + N
OR	Nom.du + Nom.du
MR	Nom.pc + GenQ.pc

また、PcQ “3, 4”については、18 世紀後半までには「2」と形態的に統一されたと指摘されており(Иванов 1983: 291, Борковский и Кузнецов 2004: 248, Буслаев 2009: 188-189, Черных 2009: 232-235, 井上 2019: 51 など参照)、かつては複数・主格という形態であったものの、現代語では「2」と同じになっていると考えるべきであろう。

(27)

	PcQ “2” + N	PcQ “3, 4” + N
OR	Nom.du + Nom.du	Nom.pl + Nom.pl
MR	Nom.pc + GenQ.pc	

本稿でのここまでの議論では、基本的にこのように通時的变化・再解釈が起こっていると考えて議論を進めてきた。

仮に上で述べた PcQ は数量属格[GenQ]をシンタックスに入る以前に語彙で既に与えられている、という考えをここで採用するとするならば、MR における PcQ の格は

6. 語彙で予め付与されている数量属格

以下の様に[Nom]ではなく[GenQ]であることになる。

(28)

	PcQ “2” + N	PcQ “3, 4” + N
OR	Nom.du + Nom.du	Nom.pl + Nom.pl
MR	GenQ.pc + GenQ.pc	

つまり、Nom.du + Nom.du (あるいは Nom.pl + Nom.pl)が GenQ.pc + GenQ.pc へと変化したことになる。このことはこれまでの再解釈についての理解(27)では、かつて OR にあった PcQ と N の間の一致の関係が MR では失われたことを意味するが、ここで提案する再解釈の理解(28)では一致の関係は変わらず保たれている。N において「双数・主格」であったものが双数の消失に伴い「少数・数量属格」に再解釈されたのであるとしたら、それと一致していた PcQ も、一致の関係が失われることなく、「双数・主格」から「少数・数量属格」に再解釈されたと考える方が自然なことであるようにも思われる。少なくともこの再解釈にそれほど無理はなさそうに見える。すなわち、他では見られない語彙で既に格が付与されていると言う現象は、双数が消失したことをきっかけに PcQ と N の両方で Nom.du が GenQ.pc に再解釈されたために生じたと言うことになる。

6.2.2. 具体例での検証

本節では以下、上で想定したように PcQ がシンタックスに入る前に辞書で「予め与えられている数量属格(Preassigned GenQ, 以下 PreGenQ と略記)」を持っていると考えたと、これまで見てきた様々な言語現象が、ここまでに構築してきた理論と矛盾なく説明ができるかどうかを検証する。

6.2.2.1. 格環境によるちがひ

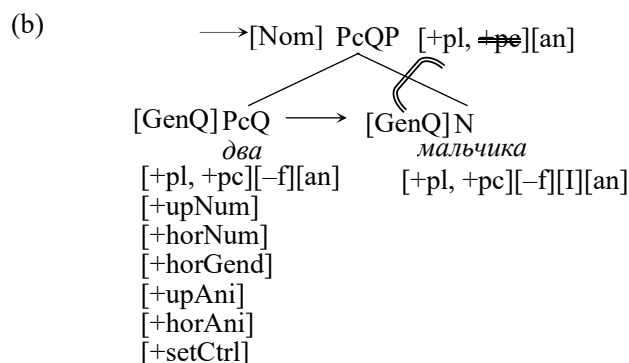
ロシア語の PcQP と HQP では 2.3. で見たように、構造格環境と語彙格環境で Q と N の示す格が異なる場合(heterogeneous な場合)と同じになる場合(homogeneous な場合)があった。PcQ に PreGenQ が与えられていると考えた場合、一連の現象は正しく予測ができるのであろうか。

6.2.2.1.1. 主格環境

まず、構造格環境に置かれた場合はどうであろうか。以下は主格環境の場合である。

- (29)(a) Солистами были [два мальчика] (...)
 solist-ins.pl be-pa.pl two-genq.pc.-f boy-genq.pc.-f
 「ソリストだったのは2人の少年だった」 (НКРЯ 2022.05.06)

6. 語彙で予め付与されている数量属格



この例で、QP には構造格である主格が与えられているが、N には PcQ によって付与された数量属格[GenQ]があり、PcQ には PreGenQ がある。主格、対格、数量属格はいずれも構造格であり、この場合 2.3.3.で示した以下の原則によって先に付与されている PcQ と N の[GenQ]に後から浸透してくる[Nom]が上書きされることはない。

(30)(2-45) 語彙格は構造格に上書きすることが可能であるが、他の上書きは不可能である。

従って、句節点 PcQP の格は[Nom]だが、末端の PcQ と N は[GenQ]である。

また、N の一致素性に格境界(CB)を越えることを可能にさせる素性[+upNum], [+horNum], [+horGend], [+upAni], [+horAni]によって CB を越えて N の一致素性がいくつか PcQ と PcQP にコピーされるのは 5.2.4.で見たのと全く変わらない。また、[+setCtrl]によって N が述語の一致の Ctrl になり得ることも同様である。つまり、これらの素性に関わる振る舞いについては PcQ に PreGenQ を想定しても何も変わることはない。

以上、構造格環境の場合、PcQ に PreGenQ の存在を想定しても取り立てて問題は生じないことを見た。なお、同じ構造格である対格環境の場合、N が無生であれば、主格と同じような振る舞いを見せるが、有生の場合は様相を異にする。対格の形態については 6.2.2.1.3.で改めて見る。

6.2.2.1.2. 語彙格環境

続いて、語彙格環境においても問題ないか確認する。以下は PcQP が順に属格、処格、与格、具格の格環境に置かれている例で、いずれも格付与子は [] で示した PcQP の直前にある前置詞である。

(31)(a)属格環境

Это программа для [двух роялей].
 this-nom program-nom for two-gen piano-gen.pl
 「これは2台のピアノのためのプログラムだ」 (НКРЯ 2022.05.08)

6. 語彙で予め付与されている数量属格

(b) 処格環境

(...)нахожусь в [двух местах] одновременно.
 be_located-pr.1.sg in two-loc place-loc.pl simultaneously
 「私は2つの場所に同時の存在する」 (НКРЯ 2022.05.08)

(c) 与格環境

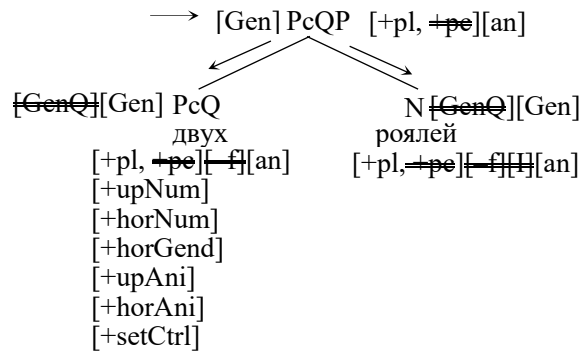
Не смотрел до этого по [двум причинам] (...)
 not watch-pa.m till this-gen for two-dat reason-dat.pl
 「これまで2つの理由で見たことがなかった」 (НКРЯ 2022.05.08)

(d) 具格環境

(...)я с [двумя друзьями] снял квартиру.
 I-nom with two-ins.pl friend-ins.pl rent-pa.m apartment-acc
 「私は2人の友人とアパートを借りた」 (НКРЯ 2022.05.08)

基本的に語彙格環境であればこれらの PcQP の文法的振る舞いの違いは格以外になく、それ以外は全て同じである。ここでは例として属格環境のものを見てみよう。

(31a')



この場合、語彙格は構造格を上書きすることが可能であるため、PcQ と N の [Gen] は [GenQ] を上書きする。結果、PcQ と N の格も語彙格である属格になるため、数が少数から複数に変わり、それによって PcQ と N の性も消失する。それらの結果として *двух роялей* という形態になると正しく予測されている。また他の語彙格環境でも同様である。

以上、語彙格環境においても Q と N の形態を正しく予測できていることが確認できた⁹。

⁹ ちなみに 2.3.2. で、Babby (1987) などは構造格環境での Q と N の格のパターンと語彙格環境でのパターンをそれぞれ Q と N の格が異なる heterogeneous なパターンと Q と N の格が等しい homogeneous なパターンと呼んでいることを指摘したが、構造格パターンの PcQ が [GenQ] を持っているとするなら N と格が同じになり、heterogeneous なパターンという呼び方は不適切なものになるのかも知れない。

6. 語彙で予め付与されている数量属格

6.2.2.1.3. 対格環境

前章 5. で名詞句とその構成要素に付与された対格は以下の 2 つの規則に従い属格あるいは主格に書き換えられることを論じた。

(32)(=5-6) 属格化

有生[an]で、かつ性として[m]以外あるいは屈折タイプとして[I]以外がなければ

[Acc] → [Gen]

(33)(=5-81) 主格化

対格に固有の形態がなければ [Acc] → [Nom]

このうち属格化は条件が揃ったらどこでも適用されるのに対して、主格化は末端の語彙要素の形態法の問題なので、統語的操作が全て終わったところで適用される。

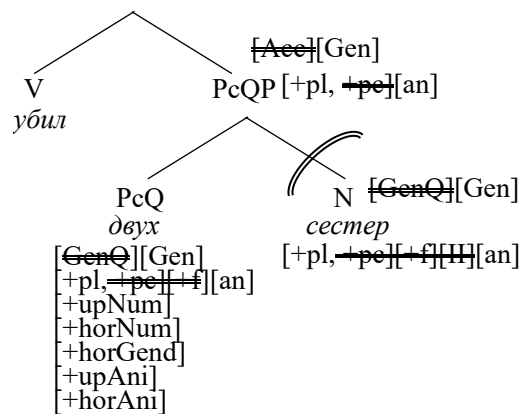
まず、N が有生で属格化が起こる場合から見ていこう。

(34) (a) (...) он убил [двух сестер].

he-nom kill-pa.m two-gen sister-gen

「彼は 2 人の姉妹を殺した」 (НКРЯ 2020.08.04)

(b)



ここではまず、PcQ と N が併合して[GenQ]が N に付与され、[+upNum]と[+upAni]に従って数と有生性が PcQP に、[+horNum]と[+horGend]、[+horAni]に従って数、性、有生性が PcQ にコピーされている。V によって PcQP に[Acc]が付与されると(3)によって少数が複数に変わる。また PcQP で(32)の属格化の条件が揃い、[Acc]は[Gen]に書き換えられる。語彙格の[Gen]は(30)により、構造格の[GenQ]に上書きすることが可能なので、[Gen]は末端の PcQ と N に浸透する。その結果 PcQ は数が少数から複数に変わり、性が削除される。N ではそれに加えてさらに屈折タイプ[II]の削除も行われる。結果として PcQP 内で見られる形態は全て(31a)の属格環境の場合と同じである。

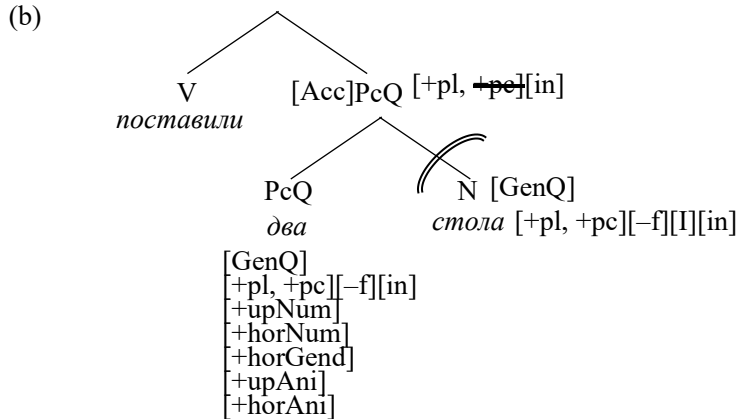
続いて N が無生で属格化が起こらない例である。

(35) (a) (...) мы поставили два стола.

we-nom place-pa.pl two-genq.-f.in desk-genq.-f.in.I

6. 語彙で予め付与されている数量属格

「我々は2脚の机を置いた」 (НКРЯ 2020.08.04)

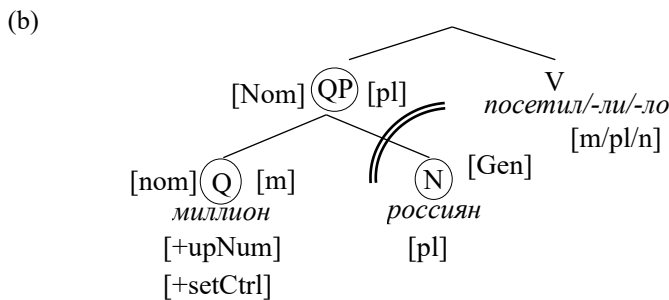


この場合は、Nが無生[in]でPcQPにも[in]があるので属格化は起こらない。また、PcQとNには既に構造格である数量属格[GenQ]があるためPcQPに付与された[Acc]は(30)により浸透不可とされる。従って、PcQとNは最後まで[GenQ]のままであり、属格化することはそもそもあり得ない。NだけでなくPcQも[GenQ]である点がPreGenQを想定していなかった(2)と異なる点である。[GenQ]なので少数を維持し、その結果性が削除されることもない。また、[GenQ]を[Nom]に書き換えることはできないため、(33)の主格化も起こらない。以上の様に正しく現実の形態を予測できていると言える。

6.2.2.2. 述語の一致

NQPを主語とする場合、述語の一致はNQとの一致、pl.3での一致、n.sg.3での一致の全部で3パターンが可能であることは3.で見た通りである。

(36)(a) Миллион россиян посетил/-ли/-ло Америку.
million-nom.m Russian-gen.pl visit-pa.m/-pa.pl/-pa.n America-acc
「100万人のロシア人がアメリカを訪れた」 (匹田 2016: 366)



この場合は、Q, QP, Nのいずれもが述語の一致のCtrlになることができ、QをCtrlとした場合述語はQに一致し[m]に、QPをCtrlとした場合はpl.3, [+setCtrl]によりNをCtrlにした場合はn.sg.3での一致を示す。

6. 語彙で予め付与されている数量属格

それに対して、PcQP や HQP の場合述語の一致のパターンは 2 通りのみで、3.4.4.2.2.では PcQP や HQP の場合、NQ や QCN の場合と異なり Q が一致の Ctrl として指定されることはできず、その理由はこれらの Q には文脈的素性であれ本来的素性であれ、数素性がないからであるとした。

しかし、確かにこれらの Q には数に関する形態的対立がなく、伝統的に数がないと考えられているが(2-14, 2-15 参照)、本稿では 4.5.2.2.8.での議論から PcQ は数のスロット $[(\emptyset), (\emptyset)]$ を持っている、すなわち文脈的素性として数の素性を持っていると結論づけた(4-86, 4-87 参照)。

PcQ と HQ に述語が一致していないことは形態的に明らかだが、これらの Q は一致の Ctrl に指定はされるものの、一致のための素性が不十分であるために述語は結果としてデフォルトの形態、すなわち n.sg.3 の形態を取ると考えることは可能かも知れない。しかし、これらの Q が述語の一致の Ctrl に指定できないということは 4.5.4.で示した以下の例からも伺える。

(37)(=4-105)

(a) На столе лежало/ лежали четыре больших книги.

on_the_desk lie-pa.n -pa.pl four-nom big-genq.pl book-genq.pc

(b) На столе *лежало/ лежали четыре большие книги.

lie-pa.n -pa.pl big-nom.pl book-nom.pl

「机の上に 4 冊の大きな本があった」(Corbett 2006: 196-197)

N が女性の場合に N を修飾する AM が数量属格形ではなく主格形にもなり得ることを示すこの例については 4.5.4.で検討し、詳細なメカニズムは明らかにはできなかったものの、このような場合、Q の格付与能力が失われていると(仮に)結論づけた。

仮にこの場合の Q も述語の Ctrl として指定できると考えると、(37b)が示すように AM が複数主格形の場合述語の一致形態が pl.3 に限られることと矛盾が生じる。すなわち、Q が Ctrl に指定されればデフォルトの n.sg.3 の形態が可能になるはずだからである。

次に、これまで検討してきた Q それぞれの一致素性を整理し直して、連続体性に合致した様相を呈しているか見てみよう。

(38) Q の一致素性

	1	PcQ		HQ		NQ	QCN
		2	3, 4	5~	100		
数	$[(\emptyset), (\emptyset)]$	$[(\emptyset), (\emptyset)]$	$[(\emptyset), (\emptyset)]$	×	×	[sg/pl]	[sg/pl]
性	$[(\emptyset), (\emptyset)]$	$[\emptyset]$	×	×	×	[m], [f]	[m], [n], [f]
有生性	$[\emptyset]$	$[\emptyset]$	$[\emptyset]$	×	×	[in]	[in]
タイプ	×	×	×	[III]	[IV]	[I], [II]	[I], [II], [III]

一方 N と AM の一致素性が以下の通りであることは 2.で検討した。

6. 語彙で予め付与されている数量属格

(39)名詞の文法素性

数	[sg/pl]
性	[{m/n/f}]
有生性	[{an/in}]
タイプ	[{I/II/III/IV/indc}]

(40)AM の文法素性

数	[ø]
性	[ø]
有生性	[ø]
タイプ	x

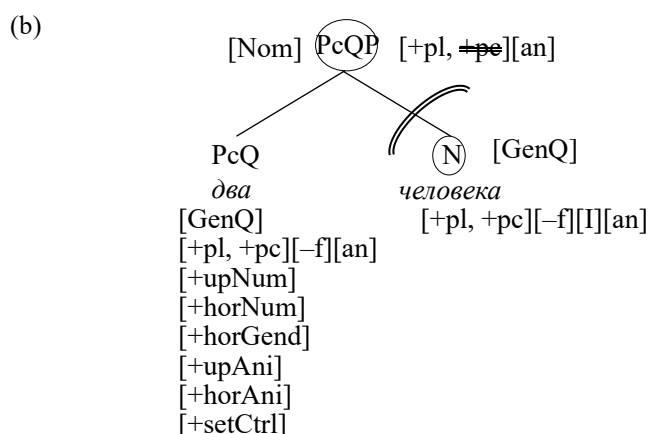
一致素性に関して名詞は全て本来の素性であり、AMについては全て文脈的素性、すなわち空のスロットだが、屈折タイプだけは名詞のものということで無関係であり、スロットがない。一方、Q について(38)を見ると、AM 的特徴である空スロットの存在が左から右に向かって伸び、屈折タイプも AM 的な×が左から右に伸びているのに対し、右から名詞的特徴である本来の素性の存在が左に伸びている。またこれらが交わらない箇所にはそのどちらでもない×があり、このような素性のあり方を想定することで、左に行くほど AM 的、右に行くほど名詞的という 1.で確認したロシア語の数量詞の連続体性を正しく反映できていることがわかる。

上述の通り 3.4.4.2.2.で PcQ や HQ を述語の一致の Ctrl に指定することができず、それは数素性がなく名詞として不完全であるためと考えた。しかし本稿の結論としては文脈的なものであるとは言え、PcQ は数素性を持っている。そうすると、PcQ、HQ に共通して欠損が見られる素性は性である。「2」の場合は性の形態的対立が残っているが、それは[±f]のみで[±m]は消失しており、不完全なものである。これらの Q が述語の一致の Ctrl になることを妨げている要因を正確に特定することはできないが、ここでは仮に「性が不完全だから」と仮定し、PcQ と HQ は述語の一致の Ctrl になれないことを確認するにとどめる。そう考えないと(37b)で n.sg.3 での一致が不可能であることを説明できないからである。

では、PcQ が述語の一致の Ctrl に指定できないとする場合、PcQ が語彙から PreGenQ を持っていると考えても問題無いであろうか？以下の PcQP を主語とする例で見てみよう。

- (41) (a) (...) были/-ло два человека (...)
 be-pa.pl/-pa.n two-genq.-f.an person-genq.pc.-f.an
 「2 人の人がいた」 (НКРЯ 2022.05.22)

6. 語彙で予め付与されている数量属格



ここで、PcQP に付与された[Nom]は PcQ, N のいずれにも浸透することはない。PcQ はシンタックスに入る前から、N は PcQ と併合した時点で PcQ によって[GenQ]を与えられているからである。PcQP の数[+pl, +pc]は[Nom]が与えられた時点で(3)によって[+pl]になる。節点 PcQP が述語の一致の Ctrl に指定された場合は述語は複数形、すなわち pl.3 で一致する。それに対して[+setCtrl]の存在によって CB の下にある N が Ctrl に指定された場合、格が主格でないため一致することができず、デフォルトによる n.sg.3 のパターンでの一致となる。また上述のように、PcQ は述語の一致の Ctrl になることはできない。

このように、PcQ には語彙から PreGenQ があると考えても PcQP を主語とする述語の一致は正しく予測される。

では、(37)で見た次の例における違いもこの考え方で正しく予測されるであろうか？

(42)(=37)

(a) На столе лежало/ лежали четыре больших книги.

on_the_desk lie-pa.n -pa.pl four-nom big-genq.pl book-genq.pc

(b) На столе *лежало/ лежали четыре большие книги.

lie-pa.n -pa.pl big-nom.pl book-nom.pl

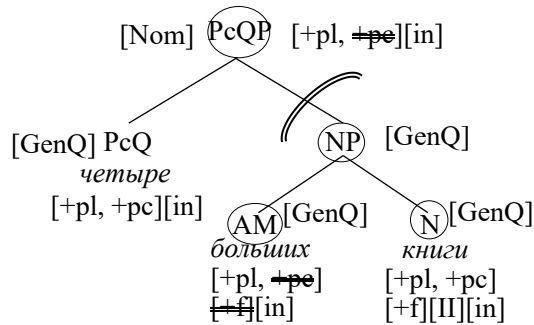
「机の上に4冊の大きな本があった」(Corbett 2006: 196-197)

4.5.4.ではNが女性名詞の場合 PcQ と N の間に入る AM が(42a)のように複数属格形になる場合と(42b)のように複数主格(対格)形になる場合と両方が可能であり、後者の場合、PcQ が格付与能力を失っていると考えた。

(42a)の場合は、基本的に PreGenQ を想定しない(5)の場合と同じである。

6. 語彙で予め付与されている数量属格

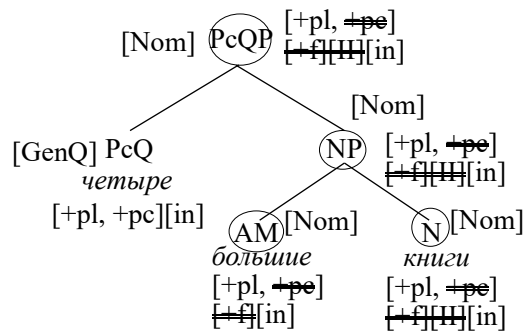
(42a')



この例では(5)と異なり PcQが[GenQ]を付与するのが1語からなるNではなく、AM+Nで構成される NP である¹⁰。述語の一致に関して(5)と違う点は CB の下にある節点が全て一致の Ctrl として指定しうる、という点である。ただし、いずれも格が[GenQ]であるため述語の形態はデフォルトの n.sg.3 になる。また PcQP が Ctrl となった場合は pl.3 の形態になる。結果として pl.3 と n.sg.3 のパターンが可能であり、(5)と同じである。

では、本稿で PcQ が格付与能力を失っていると仮定した(42b)の場合はどうであろうか。

(42b')



ここで PcQ が[GenQ]を付与する能力を失っていると考えると、頂点 PcQP に付与された[Nom]は PreGenQ を持っている PcQ をのぞき PcQP が支配する全ての節点に浸透する。この場合は PcQ による格付与が行われておらず CB が形成されていないので N の持つ [+pl, +pc] と [in] は PcQP 内の全ての節点にコピーされる。 [+f] と [II] は PcQP, NP, AM にコピーされるが、これらは格が[Nom]になり数が少数 [+pl, +pc] から複数 [+pl] に変わり、その結果性 [+f] と屈折タイプ [II] が消去される。PcQ *четыре* は性と名詞の屈折タイプに関わる素性のスロットは持っていないためそれらを受け取ることはない。

また、上でそもそも述語の一致の Ctrl に指定され得ないと想定した PcQ をのぞき

¹⁰ 本稿では 1.3.1. で示したように厳密に名詞句内の bar-level を議論することはなく、bar-level として示されたものは全て便宜的なものである。

6. 語彙で予め付与されている数量属格

全ての節点が Ctrl になり得る。それらはいずれも [Nom] であるためにデフォルトの n.sg.3 の一致を引き起こすことはない。また、いずれも複数であるため、述語は pl.3 のパターンでの一致を行うことになる。結果、(42b)での述語の一致が pl.3 のみで n.sg.3 が認められないことを正しく予測していることになる。

以上、本節では PcQ に PreGenQ を想定しても述語の一致のバリエントを正しく予測できていることは変わらないことを見た。

6.3. 分配の前置詞 по をめぐって

ロシア語には QP を補語とし¹¹、一般に「分配の前置詞」と呼ばれる前置詞がある。以下の例における *по* がそれに当たる。

(43) Студенты получили по сто рублей.
student-nom.pl receive-pa.pl dist hundred-acc? rouble-genq?pl
「学生たちは 100 ルーブルずつ受け取った」 (匹田 2016: 277)

日本語に訳せば「～ずつ」という程度になり¹²、この例では「100 ルーブル」は学生たちそれぞれに「分配」されることを意味する。

この分配の *по* は以下に示すように、極めて不可思議な振る舞いを示し、ロシア語の文法研究にとって困難な問題をもたらしているが、本稿で仮定した PreGenQ がこの *по* の振る舞いの説明に新たな可能性をもたらしてくれる。

6.3.1. по が付与する格について

議論を開始するにあたって、以下の例を提示する。いずれも *по* によって導かれる前置詞句が対格環境に置かれている場合である。

¹¹ ただし、数詞 *один*「1」は顕在的に現れないこともしばしばある。

(i) ты его по часу в день видел
you-nom he-acc dist hour-dat?sg.m in day-sg see-pa.m
「君は彼に 1 日に 1 時間ずつ会った」 (НКРЯ 2022.05.25)

по の補語である *часу* の前にそれに一致する「1」を入れて *по одному часу* としても問題ない。ちなみにこの環境以外でも数詞の「1」はしばしば顕在化しない。

(ii) Он целый час кушал (...)
he-nom whole hour-sg eat-pa.m
「彼は丸 1 時間食べていた」 (НКРЯ 2022.05.25)

上の例(i)の *день* も同様である。本稿の議論に「1」はほとんど関わってこないのに、「1」の省略の可能性についてはここでは議論しないが、恐らく、名詞の文法的な数が単数であることが大いに関係していると思われる。

¹² 英語の前置詞にこれに相当するものは存在しない。それ故グロスでは *dist* とだけ記すこととする。また、後述するように *по* がその補語に付与する格が何なのかはそれなりの議論が必要である。議論によって明確な結論を提示するまではグロス中で格については「一見そう見える」格を示しそれに「?」をつけることとする。

6. 語彙で予め付与されている数量属格

(44)(a) по одному рублю
 dist odin-dat? rouble-dat?
 「1 ルーブルずつ」 (Franks 1995: 140)

(b) по два рубля
 dist two-acc? rouble-genq.pl
 「2 ルーブルずつ」 (Franks 1995: 140)

(c) по пять рублей
 dist five-acc? rouble-genq.pl
 「5 ルーブルずつ」 (Franks 1995: 140)

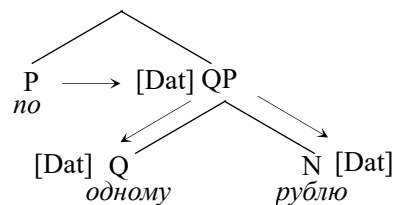
(d) по пяти рублей
 dist five-dat? rouble-genq.pl
 「5 ルーブルずつ」 (Franks 1995: 140)

(e) по миллиону рублей
 dist million-dat?sg rouble-gen.pl
 「100万ルーブルずつ」 (Franks 1995: 142)

これらの例では *no* によって Q に付与されている格がまるで格付与を受ける Q 次第で異なっているようにも見え、これらの Q の格が何かを特定するのは困難である。

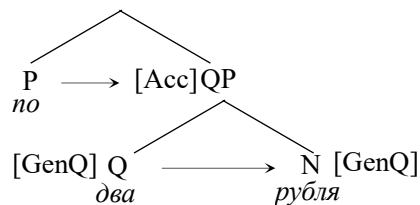
具体的に格形態を見てみよう。例えば(44a)で QR *одному рублю* は与格形に見える。この場合、QP に *no* が与格[Dat]を付与し、それが末端に浸透したと考えれば全く問題はない。「1」に格付与能力はないので格の浸透を妨げるものはないからである。

(44a') *no* が与格を付与と想定



一方 PcQ「2」の場合は(44b)では、対格を付与しているように見える。

(44b') *no* が対格を付与と想定



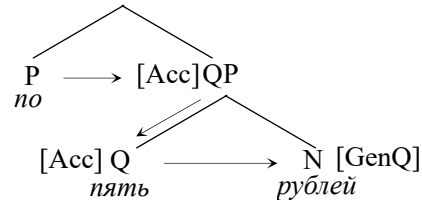
本章での想定通り PcQ が PreGenQ を語彙から既に持っていると考えた場合、*no* が QP に付与する格が同じ構造格の[Acc]なら Q や N に浸透することはできず、正しく形態が予測される。また(a)の場合と同様に語彙格の[Dat]を付与すると考えると[GenQ]に上書きすることが可能になってしまい、**no двум рублям* となることが予想

6. 語彙で予め付与されている数量属格

され誤った予測となる。

HQ の(44c)についても対格だと考えると問題無く説明ができる。

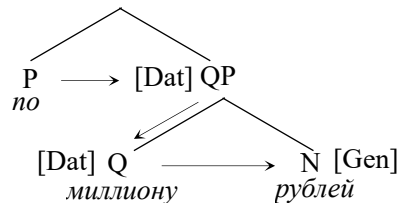
(44c')*no* が対格を付与と想定



HQ の場合は語彙で予め[GenQ]を得ていないので[Acc]は Q まで浸透する。N に浸透しないのは Q によって N に[GenQ]が付与されているからである。

その一方で、NQ の(44e)では *миллиону* は与格形であり、*no* は与格を付与していると考えられる。

(44e')*no* が与格を付与と想定



[Dat]は語彙格だが、NQ が付与する格も構造格の[GenQ]ではなく語彙格の[Gen]なので N で[Dat]が格の上書きをすることはない。

以上の様に、(44a, e)では与格が、(44b, c)では対格が付与されているように見え、それは Wade (2011: 472), Розенталь (1998: 157)などの指摘とも合致している。このように同じ前置詞が同じ用法で付与対象によって与える格が異なるということは奇妙なことである。しかし事実はそれ以上に複雑で不可解である。

まず PcQ の場合、(44b)のように N が無生の場合は *no* が付与する格は対格だと考えると正しい形が予測されるが、有生の場合、正しい予測はなされない。

(45)(...)по два студента.
 dist two-acc? student-genq.pc
 「学生 2 人ずつ」 (匹田 2016: 277)

この有生名詞の例を見ると *no* が付与する格は対格ではあり得ない。5. で見たように PcQP の場合、N が有生だと属格化が起こるはずだからである。以下は確実に対格を付与する前置詞 *по*「～について」の例であるが、*двух студентов* となり属格化が起こっていることが確認できる。

6. 語彙で予め付与されている数量属格

(46)(...)про двух студентов (...)

about two-gen student-gen.pl

「2人の学生について」

(НКРЯ 2020.08.05)

Зализняк (2002: 51)は(45)のような場合, *no* の付与する格が主格である可能性を示唆しているが, 通常主格付与の前置詞というのではないため, 仮にそうだとしたら, 奇妙な印象は拭えない¹³.

(44c)の場合は HQ なので N が有生でも形態的に違いはなく *no* が対格を付与していると考えても問題ないが, 同じ HQ の場合に認められるバリエーションの(44d)が問題を投げかかける。(44d)では HQ の形態が *пяти* となっている点で(44c)と異なっている。(このバリエーションの存在については Панов 1962, Виноградов 1972, Crockett 1976, Шведова и др. 1980, Мельчук 1985, Franks 1995, 原 1996a, Розенталь 1998, Wade 2011, Narves 2003, Бельчиков 2008, Vailyn 2012 などを参照。)

HQ *пять* は第 3 変化に属し, 主格: пять, 対格: пять, 属格: пяти, 処格: пяти, 与格: пяти, 具格: пятью と変化し属格と処格と与格が同形である¹⁴。Розенталь (1998: 157)はこの場合の HQ の格を与格であると考えている。なぜなら, (44a, e)で *no* は明らかに与格を付与している様に見える, またこの場合の *пяти* は対格形ではあり得ないからである。しかし, この考え方には説明できない問題が残る。2.3.3.で見たように, 語彙格の与格[Dat]は HQ によって付与された[GenQ]を上書きして浸透するはずだからである。すなわち, *no* が付与するのが与格だとすると(44d)の *студентов* は与格の **студентам* になるはずである。以下は間違いなく与格を付与すると考えられる前置詞 κ「～までに」の例である。

(47)(a)(...)приходи к пяти часам в библиотеку!

come-imp by five-dat hour-dat.pl to library-acc

「5時までに図書館に来なさい」 (НКРЯ 2023.02.08)

¹³ Зализняк (2002: 49-52)は前置詞が主格を付与している可能性がある例として以下の様な表現の存在を指摘している。

(i) пошел в солдаты

go-ra.m into soldier-nom?pl

「兵隊になった」

(Зализняк 2002: 50)

Зализняк (2002)は他にもこの場合の *солдаты* が実際には集合名詞的なもので有生名詞ではない, あるいは対格ではない別の格を設定するべきかもなどいくつかの考えを提示しているが, 結論は出していない。

また, ひょっとすると以下の例の前置詞 *за* も主格を付与する前置詞と言えるのかも知れない。

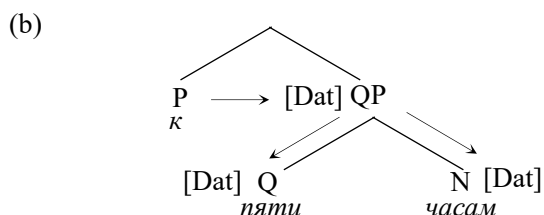
(ii) Что это за женщина?

what this for woman-nom

「それはどう言う女性ですか?」 (匹田 2016: 282)

¹⁴ このような属格・処格・与格にシンクレティズムが見られるのは他の多くの HQ も同様である。

6. 語彙で予め付与されている数量属格



このような点をとらえて、Мельчук (1985), Neidle (1988), Timberlake (2004)などはこの場合の *no* が付与しているのは与格ではなく属格であるとしている。確かに、属格が付与されさらに Q と N に浸透していると考えれば(44d)の Q と N の形態は正しく説明できていることになる。

ここまでの考察をまとめると、分配の前置詞 *no* が付与する格として考えられる候補は主格、対格、属格、与格の 4 つの格であることがわかる¹⁵。以上の考察を踏まえて、以下で議論しなければならない問題は以下の 2 つである：

(48)(a)分配の前置詞 *no* が QP に付与している格は何か？

(b)何故 HQP には 2 つの可能な形態的バリエントがあるのか？

以下の各節では、この 2 つの問題への回答を探るとともに、その解決に本章で仮定している、PreGenQ が大きな意味を持つことを論じる。

6.3.2. 通時的に見た по пять/пяти という 2 つのバリエント

議論を開始する前に(44c, d)の 2 つのバリエントはどのような関係にあるのかを確認する。まず、(44c)の形態 *пять* は上での検討において主格あるいは対格の可能性があり、以下ではこれらを仮に「直格形」とし、属格及び与格の可能性がある(44d)の *пяти* を仮に「斜格形」と呼ぶことにする。

上述のように *no* に支配される HQP の HQ の形態に直格・斜格のバリエントがあり得ることは様々な先行研究において指摘されているが、その中でも Панов (1962: 53), Виноградов (1972: 240), 原 (1996a: 166), Timberlake (2004: 201–203), Harves (2003: 236)などは斜格形の方がより古い形態であり、斜格形の使用が減少していることを指摘している。

これらが指摘する通時的な変化はロシア語ナショナルコーパスでも確認が取れる。以下は Hikita (2020: 43)で示した検索結果とその件数を創作年代ごとにまとめたものである。

¹⁵ 分配の前置詞 *no* が付与している格の可能な候補の洗い出しについては既に宮内(2015)が行っている。本稿でのこの 4 つの格という結論は宮内(2015: 133)に従ったものである。

6. 語彙で予め付与されている数量属格

(49)

	創作された年			
	18世紀	19世紀	20世紀	21世紀
斜格形 (<i>по пяти</i> + N[gen.pl])	53	246	160	9
直格形 (<i>по пять</i> + N[gen.pl])	2	13	304	157

ここで、斜格形は明らかに 21 世紀に向けて減少傾向にあり、直格形が増加傾向にあることが見て取れる(21 世紀はまだ全体の 1/5 が終わったに過ぎないことに注意しなければならない)。さらに、ある若い母語話者(20 代半ばか後半)は斜格形を明確に非文として排除すらした。

また、Гришина (2011: 2)は HQ を含む数量詞が分配の *по* の補語となっている場合の格の変遷についてロシア語ナショナルコーパスで調査した結果として以下のデータを紹介している。

(50)

年代 \ 格	斜格形	直格形
18世紀	100%	0%
19世紀前半	90%	10%
19世紀後半	86%	14%
20世紀前半	39%	61%
20世紀後半	3%	97%

これらのデータからも通時的に斜格形から直格形への変化が進行していることが見て取れる¹⁶。また、Гришина (2011: 2)はこの変化がとりわけ 20 世紀前半に進行しているとして以下のデータも紹介している。

(51)

年代 \ 格	斜格形	直格形
1900年代	100%	0%
1910年代	90%	10%
1920年代	86%	14%
1930年代	39%	61%
1940年代	3%	97%

このデータから斜格形から直格形という従来のモデルの激しい崩壊が 1920 年代に

¹⁶ Гришина (2011)は本稿での斜格形を「与格形」、直格形を「対格形」と呼んでいる。なお、Гришина (2011: 2)は 18 世紀は事実上 100%斜格形、20 世紀末から 21 世紀初頭は事実上 100%直格形と述べている。

6. 語彙で予め付与されている数量属格

起こったと Гришина (2011)がは見ている。

以上、直格形と斜格形という2つの形態的バリエーションは現在進行中の言語変化を反映しているものであることがわかる。以下、斜格形がより古く消滅しつつあるもの、直格形が新しく、未来においてこちらだけになると思われる形態と捉え議論を進めることとする。

では、どのような変化がロシア語の文法において現在起こっているのでしょうか？以下の議論では、上で仮定した PreGenQ がこの問題の鍵となる。

6.3.3. Franks (1995)による説明

ロシア語の前置詞 *no* に先導される QP の様々な形態を統一的に説明する試みは Franks (1995: 139-157)が行っている。以下本節では Franks (1995)におけるこれらの形態のバリエーションに対する説明の試みを概観する。

Franks (1995)はまず第1に *no* が付与するのが数量与格(Dative of quantification, 以下本稿では DatQ と略記)という特別な格であり、かつ DatQ は通常の与格と異なり構造格であると考え、形態的には通常の与格と同じ形態で顕在化する。それによって、(44b, c)の N の数量属格形を説明できるとする。つまり、同じ構造格である DatQ はすでに付与されている GenQ に上書きすることはできない。

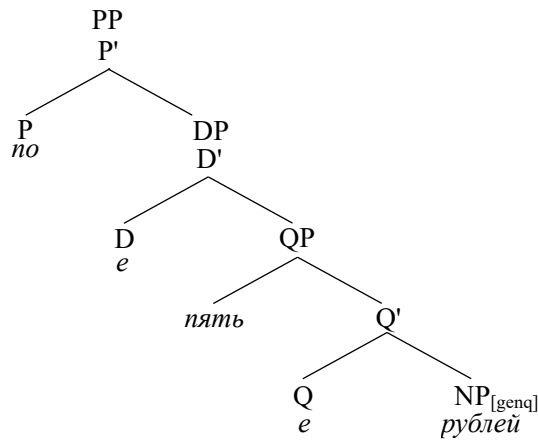
また、Franks (1995)は(44a)で *один* は「2」以上の数詞と異なり品詞素性として持っているのが[+Q]ではなく[-Q]であると考え、そのためこの場合、通常の NP と同じに格付与が行われると考える一方、(44b)では *два* は格の無い(caseless)形態であるとする。それは PcQ は HQ などと異なり「形容詞的数詞(adjectival numeral)」であり、*no* が格付与できるのは「名詞的数詞(nominal numeral)」のみだからとしている。何故形容詞的数詞が格を受け取ることができないかは「それらが名詞句として機能できないから」(Franks 1995: 145)と述べるにとどまっている。ちなみにこの考え方はすなわち、(44b)の直格形の PcQ はそもそも「格が与えられていない」と考えていることになる。

では、(44c, d)の違いはどう説明しているのか？Franks (1995)は、まず直格形の方の HQ *пять* の形態をここでもやはり「格が無い」形態と考えている¹⁷。その上で、*no* の補語となる同じ [数量詞+名詞] からなる句に、DP と QP という2つの異なった構造を以下に示すように想定する。まずは DP の場合である。

¹⁷ Панов (1962: 53)もこの形態を格が無いことによる主格であるとしている。

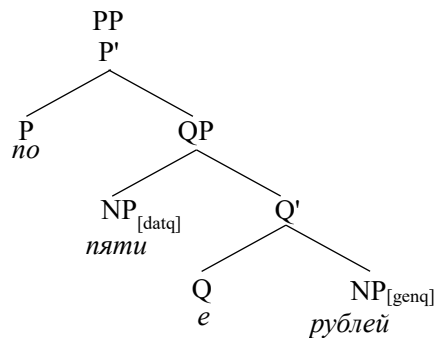
6. 語彙で予め付与されている数量属格

(52)DP の場合



この場合、DP の中に QP が埋め込まれる形になっている。この場合、*no* と QP の間に DP が挟まっているため、*no* によって *пять* に格付与されることはない。一方、次は QP と想定した場合である。

(53)QP の場合



この場合、*пяти* は QP の specifier の位置にあり、そのため ECM (Exceptional Case Marking) によって [DatQ] の付与が可能であるとしている。しかし、DP の場合はそれは不可能であり、2つのパターンの違いが説明できる。

一方、この考え方で行くと、(44e)のような NQ の場合は [DatQ] 付与された QP のパターンしかないが、これは NQ には「格の無い形」が存在しないからとしている。

Franks (1995) は以上の様に説明を試みるが、PcQ に直格形しかないことや NQ に斜格形しかないことに対する説明は少々 ad hoc な感が否めないし、また2つの統語構造を想定するなど少々複雑すぎると思える。また Franks (1995) は2つの統語構造のあり方を例えば述語との一致の複数のパターンを説明するのにも利用しているが、だとすると、通時的変化の方向性とこの2つの構造を結びつけるのには少々無理があるようにも見える。

本章では以下の各節で、これらの形態的パターンの違いを説明するために、前節までに提案した PreGenQ を利用できることを示す。

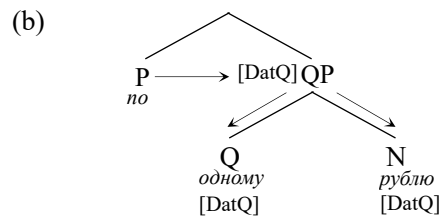
6. 語彙で予め付与されている数量属格

6.3.4. PreGenQ と DatQ

上では PcQ にシンタクスに入る以前から語彙レベルで設定されている数量属格 (PreGenQ) を想定することとした。また Franks (1995) は分配の *no* が付与する格は構造格である数量与格 (DatQ) であると仮定し、それに加えて諸々の装置を仮定することで *no* が導く前置詞句内の QP の格形態を説明することを目指した。本節では *no* が付与するのは [DatQ] であると Franks (1995) に従って考え、PreGenQ と DatQ の両方を組み合わせることで *no* に導かれる QP の格形態を正しく説明できることを示す。

まず、「1」の場合から見てみよう。

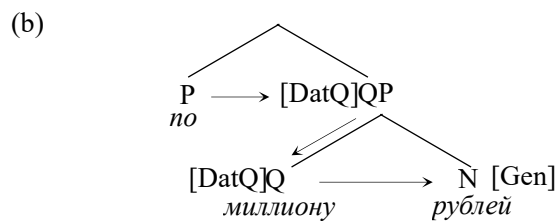
(54)(a)(=44a) по одному рублю
 dist one-datq rouble-datq
 「1ルーブルずつ」 (Franks 1995: 140)



「1」の場合は格付与能力を持たないし、それ自体も格については通常の形容詞と同様に空のスロットを持っているのみである。従って、QP に付与された [DatQ] は Q にも N にも問題無く浸透することができ、正しく QP の形態を説明できている。

続いて NQ の場合である。

(55)(a)(=44e) по миллиону рублей
 dist million-datq.sg rouble-gen.pl
 「100万ルーブルずつ」 (Franks 1995: 142)

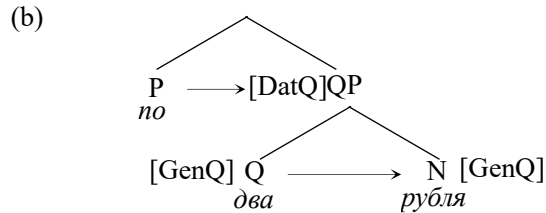


NQ の場合、語彙格の [Gen] を付与する能力があり、N と Q が併合すると N に [Gen] が付与される。そのため、QP に付与された [DatQ] が N に浸透することはできない。NQ は PreGenQ を持たず、通常の名詞と同様に格を受け入れる空のスロットがあるため、[DatQ] は問題無く Q にも浸透することができる。そのため Q と N の形態を正しく説明できていることがわかる。

それに対して、PcQ の場合は PreGenQ を持っている点が「1」や NQ と異なる点である。PcQ の場合を見てみよう。

6. 語彙で予め付与されている数量属格

(56)(a)(=44b) по два рубля
 dist two-genq rouble-genq.pc
 「2ルーブルずつ」 (Franks 1995: 140)



PcQ は N に [GenQ] を付与し、かつ PcQ 自身は PreGenQ をシンタックスに入る前から持っている。そのため、QP に付与された [DatQ] は Q と N のいずれにも浸透することはできない。このことは実際の形態を正しく説明している。

「2」以外の PcQ の場合でも同じである。

(57)(a)(...) по три ошибки (...)
 dist three-genq.pc mistake-genq.pc
 「失敗 3 回ずつ」 (НКРЯ 2020.08.15)

(b)(...) по четыре доллара (...)
 dist four-genq.pc dollar-genq.pc
 「4 ドルずつ」 (НКРЯ 2020.08.15)

PcQ「3, 4」の場合は「2」の場合と異なり、性に関する形態的対立がない点だけ異なり、PreGenQ を持っていることなどは同じである。従って、PcQ にも N にも [GenQ] が [DatQ] の浸透を妨げている。

なお、「1」と PcQ は N が有生名詞の場合、対格環境に置かれると属格形と同じ形態を示す、すなわちいわゆる有生性の一致を行うことは 5. で見たが、no に導かれる QP には N が有生名詞の場合でもそのような形は現れない¹⁸。

(58)(a)(...) выбрали по одному лётчику (...)
 choose-pa.pl dist one-datq.m.an pilot-datq.m.an
 「パイロットを 1 人ずつ選んだ」 (НКРЯ 2022.06.05)

¹⁸ ちなみに、Pesetsky (1982: 72), Babby (1985b: 107, 1986: 185), Wade (2011: 473-474) などは分配の no に導かれる句が主格及び対格環境でしか現れることができないことを指摘している。例えば、以下の例で動詞 *заниматься*「勉強する」はその補語に具格を付与する。

(i) *Они занимаются по три языка.
 they-nom study-pr.3.pl dist three-genq language-genq.pc
 「彼らは 3 つずつ言語を勉強している」 (匹田 2016: 278)

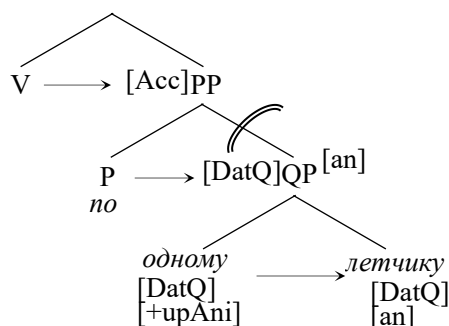
なぜそうなのかは本稿で扱える問題ではない。今後の課題とする。一方 King (1995: 40) はこの分配の no に導かれる句は他動詞と非能格動詞の主語として現れない、と述べている。このタイプの句が現れられる環境についても今後の課題としたい。

6. 語彙で予め付与されている数量属格

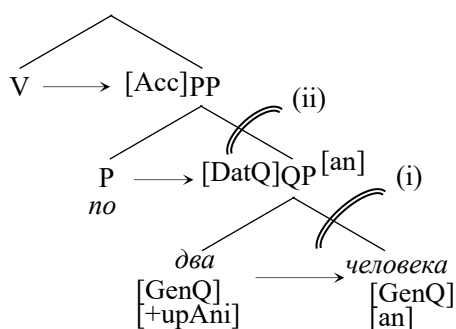
(b)(...)принимают по два человека в день (...)
 accept-pr.3.pl dist two-genq.pc.an person-genq.pc.an in_a_day
 「1日に2人ずつ受け入れている」 (НКРЯ 2022.06.05)

PP に格が付与され得るのかと言う問題は当然議論しなければならないが、仮にこの手の PP にも格が付与されると考えたとしても問題は起こらない。

(59)(a)



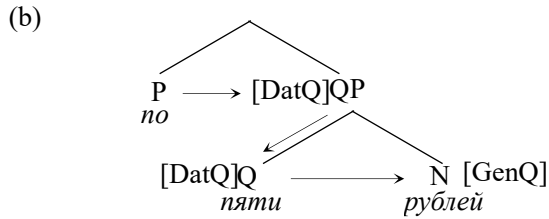
(b)



(a, b)いずれの場合でも N の有生性を示す素性[an]は QP まではコピーされる。(a)の「1」の場合は「1」に格付与能力がないため妨げる CB は存在しないし、(b)の PcQ の場合は [+upAni] が存在するため、QP まで N の [an] がコピーされる。しかし、それより上には no の [DatQ] の付与によって形成される CB があるため [an] は PP にはコピーされない(ある意味当然であろう)。そのため、仮に節点 PP に [Acc] が付与されたとしても、[Acc] がそこで属格化されることはない。そして [Acc] は構造格であるため、[DatQ] を上書きすることはできず、結果 QP 以下の格に変更は起こらないのである。次に HQ のうち、(44d) の斜格形の場合を検討する。

(60)(a)(=44d) по пяти рублей
 dist five-datq rouble-genq.pl
 「5ルーブルずつ」 (Franks 1995: 140)

6. 語彙で予め付与されている数量属格

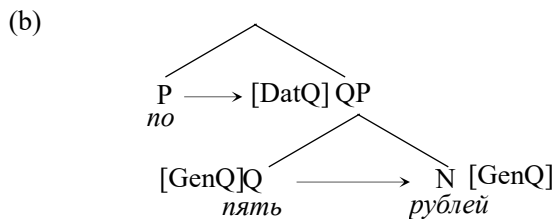


HQ の場合に可能な 2 つのバリエントのうち、斜格形の場合、格に関しては NQ の場合とよく似ている。HQ が N に [GenQ] を付与するので、頂点の QP に付与された構造格である [DatQ] は [GenQ] により N への浸透を妨げられる。また HQ は通常の名詞と同様に格の素性を受け入れる空のスロットを持っているので、[DatQ] は HQ には浸透することができる。そのように Q と N の形態を説明できる。

では、もう一つのバリエントである直格形(44c)はどう説明されるのであろうか？ Hikita (2020)はこの違いを説明するために、現代ロシア語では HQ も PreGenQ を持つようになりつつある、と考えた。すなわち、現在古い形である(44d)から新しい形である(44c)へと変化しつつあるとするならば、そこで起こっているのは PreGenQ の PcQ から HQ への拡大であると考えられる。

以下の Q が直格形を示している例において、*пять* は斜格形の場合と異なり、PreGenQ を持っている。そのため、QP に付与された [DatQ] は Q に浸透することができない。また、N には Q により [GenQ] が付与されているので N にもやはり [DatQ] が浸透することはない。この考え方で直格形の *по пять рублей* という形態を説明することができる。

(61)(a)(=44c) по пять рублей
 dist five-genq rouble-genq.pl
 「5 ルーブルずつ」 (Franks 1995: 140)



HQ にも PreGenQ を想定するということは、PcQ の場合と同様に主格形と対格形が存在せず、代わりに数量属格形がある、ということの意味する。以下は「5」*пять* の想定される変化表である。

6. 語彙で予め付与されている数量属格

(62)

	「5」
主格	
対格	
数量属格	ПЯТЬ
属格	ПЯТИ
処格	ПЯТИ
与格	ПЯТИ
具格	ПЯТЬЮ

なお、主格形、対格形が存在しないということは主格環境、対格環境に HQP が現れることができないと言う意味ではない。HQ 自体が主格と対格の素性を持つことがあり得ない、と言うだけである。

次節では、HQ にも PreGenQ が拡大しつつある、とするとそれがどのような通時的変化が進行中であることを含意しているのかを考える。

6.4. ロシア語の数量詞の受けている言語変化

4.2.でも述べたように、元々ロシア語において PcQ「2, 3, 4」は形容詞であり、主要部名詞と一致しており、そのうち「2」は主要部名詞と双数で、「3, 4」は複数で一致していた(三谷 1998: 10, 井上 2019: 4, Буслаев 2009: 188, 佐藤 2012: 79, Черных 2010: 235, Борковский и Кузнецов 2004: 248)。16 世紀頃までにはロシア語の文法から双数が消失し(井上 2019: 5, 原 1996b: 244 など参照)、そのことが引き金となりロシア語の Q に変化が生じることとなる。この双数の消失に関連して、6.2.1.で示したように、以下の様な再解釈が生じたとするのが Babby (1987: 101)など一般的な解釈である。

(63)(=24)

	PcQ “2” + N
OR	Nom.du + Nom.du
MR	Nom + Gen.sg

この再解釈は後に「3」や「4」にも拡大している。

しかし、本稿での議論では、MR の PcQ と N の数は単数[sg]ではなく少数[pc]であり、格も PcQ, N いずれも数量属格[GenQ]であると結論づけた。従って、再解釈は以下の様に起こったと考える。

(64)(=28)

	PcQ “2” + N	PcQ “3, 4” + N
OR	Nom.du + Nom.du	Nom.pl + Nom.pl
MR	GenQ.pc + GenQ.pc	

OR において PcQ と N が格と数において一致している、すなわち同じ値を示しているのなら、MR においても再解釈の結果 PcQ と N が同じ値を示していると言うことは十分にあり得ることだと思われる。また、この歴史的変化は同時に、PcQ が N に対して格付与を行い始めたことを意味する。井上 (2019: 5)はこのような変化は 16 世紀

6. 語彙で予め付与されている数量属格

以降に起こったものであると指摘している。

HQ も 16 世紀以降変化を被っている。HQ はかつてはそれ自身の性を持つ名詞であったが、後に性を失っている (Babby 1987: 102, Черных 2010: 236, 井上 2019: 5 など参照)。以下は OR の例である。

(65) та пять бутылок
 that-nom.f five-nom.f bottle-gen.pl
 「それら 5 本のビン」 (Babby 1987: 102)

AM である指示代名詞 *та*「その」が女性の *пять* に一致して女性形になっている。一方 MR では HQ に性がなく、AM は複数形となる¹⁹。

(66) те пять бутылок
 that-nom.pl five-nom bottle-genq.pl
 「それら 5 本のビン」 (Babby 1987: 105)

さらに、以下の例などから OR では HQ が数量属格[GenQ]ではなく通常の属格[Gen]を付与していたと考えられる。以下の OR の例を見ると、MR と異なり、語彙格である具格環境にあっても N まで具格が浸透することはなく、N は属格形のままである。

(67)「それら 5 本のビン(具格)」 (OR における例) (Babby 1987: 103)

(a) тою пятью бутылк
 that-ins.f five-ins.f bottle-gen.pl

(b)*тою пятью бутылками
 that-ins.f five-ins.f bottle-ins.pl

既に 2.3. で議論したように、語彙格の具格は構造格の数量属格には上書きができるが、同じ語彙格の通常の属格には上書きできない。従って、(a) が適格で (b) が非文であると言うことは、OR において HQ が付与していたのは通常の属格[Gen]であったと考えなければならないことを意味する。

ここまできると以下の 2 点となる：(i) PcQ は通時的変化によって数量属格[GenQ]の付与能力を得て、(ii) HQ は語彙格である[Gen]を付与する能力を失い、構造格の[GenQ]を付与するようになった。ロシア語の形容詞がそれが修飾する N に対する格付与能力を持たないことを考えると、以上の変化によって PcQ は何某かの形容詞的特徴を失いより名詞的になったことを意味する。またロシア語の名詞が構造格ではなく語彙格の[Gen]の付与能力を持っていることを考えると、上記の言語変化によって HQ は何らかの名詞的特徴を失い、形容詞に近づいたことになる。ということ

¹⁹ 例文の出典は Babby (1987) であるが、*бутылок* の格は本稿での理解に従い数量属格としている。また *пять* の格も上の議論でのより新しい解釈であれば数量属格とするべきである。なお、AM が複数になるメカニズムについては 5.2.4. で議論した。また井上幸義(pers.com.)から *пять* に性が残る時点でロシア語に既に *бутылка* という後が借用されていたかは疑わしいという指摘を頂いた。

6. 語彙で予め付与されている数量属格

は、ここで見ている言語変化によって PcQ と HQ は形容詞から名詞へと連なる連続体の中で、以下に示すように互いに近づき合ったのかも知れない²⁰。

(68)

形容詞	「1」	PcQ→	数量詞	←HQ	NQ	QCN	名詞
-----	-----	------	-----	-----	----	-----	----

そして、この互いに近づき合うことで目指しているのがひょっとするとロシア語に生まれつつあるいわば「数量詞(Quantifier, Q)」というカテゴリーの中心なのであろうか。そして PcQ と HQ が近づきつつあることを示しているのは、格付与能力だけでなく、本節で議論したこれらの数量詞のもつ PreGenQ と考えられる。つまり、PcQ と HQ は[GenQ]の付与能力と PreGenQ の獲得によって、一つの Q というカテゴリーを形成しつつあるように見える。

ちなみに、多くの伝統的なロシア語文法において、しばしば PcQ と HQ のみが「数詞(числительные)」であるとされ、「1」や NQ と異なった扱いを受けている(例えば Шведова 1970, Виноградов 1972, Шведова и др. 1980, Белошапкова 1997 など)。本稿では 1. で議論したように品詞と品詞の境界線がしばしば非離散的なものでありうると考え、とりわけ Q にその連続体性が顕著に見られるという点が全ての議論の出発点になっているので、ここでも PcQ と HQ のみが Q であり、「1」や NQ が Q ではない、と主張するつもりはない。ただ、[GenQ]の付与能力の獲得に加えて PreGenQ の獲得という点でこれらは今まさに接近しつつあるとみることができよう。

6.5. PreGenQ を持つ他の Q

ここまで PreGenQ を持つものとして議論の対象としてきたのは「2, 3, 4」あるいは「5」などの個数詞のみであったが、他にも PreGenQ を持っている(あるいは獲得しつつある)と考えられる Q はある。

以下は集合数詞(ColQ)の例である。

(69) В каждой комнате помещалось [по двое человек].
 in each room-loc go_in-pa.n dist two-genq person-genq.pl
 「それぞれの部屋に 2 人ずつ入れられた」 (Crockett 1976: 157)

この例で、[]で示した前置詞句全体は主格環境に置かれている。一方 ColQ *двое* は斜格形ではなく直格形を示している。すなわち、*no* の付与する構造格である [DatQ] が ColQ に浸透できないのは本稿で PcQ や HQ に仮定したのと同じように、ColQ にも PreGenQ が備わっていると考えるのが、順当であろう²¹。

²⁰ Stepanov & Stateva (2018: 791) も参照。

²¹ 斜格(与格)形の *по двоим, по троим* も НКРЯ(2021.07.18)でそれぞれ一例ずつヒットしているが、いずれも 1920-1923, 1875-1881 と創作年が古いものだけであった。HQ と同様に PreGenQ を獲得し

6. 語彙で予め付与されている数量属格

さらに、後続する N の形態が「2~4」の場合と同じ少数数量属格形になる PcQ *полтора*「1.5」も同様に *no* の補語になると直格形となる。つまり、*полтора* も PreGenQ を持っていると考えべきである。

(70)(...)сидеть по полтора часа (...)
sit-inf dist one_and_half-genq hour-genq.pc
「1 時間半ずつ座る」 (НКРЯ 2020.08.10)

例えば *много*「多くの」、*несколько*「いくつかの」などの不定数量詞(неопределенно-количественное числительное)も同様に数量属格を付与すると考えられるが、それらは直格形と斜格形の両方が可能であることがしばしば指摘されている。つまり、PreGenQ を持っていると考えられる場合とそうでない場合が見られる。

(71) по несколько / несколькоу дней
dist some-genq some-datq day-genq.pl
「何日かずつ」 (Шведова и др. 1980: I: 580)

前者の *несколько* が直格形、後者の *нескольку* が斜格形である。そして、これまでの議論から直格形は PreGenQ を持っている場合、斜格形は PreGenQ がないため DatQ が Q に浸透している場合と考えられる。このことはいずれの場合でも *дней*「日」が数量属格複数形になっており、HQ の(44c, d)と同じであることから見取れる。

Граудина и др. (1976: 267), Шведова и др. (1980: I: 580), Розенталь (1998: 158)などは、これらの形態的バリエーションは直格形がより口語的で、斜格形がより文語的なものであると指摘している。仮により口語的なバリエーションがより新しいものであると言えるとしたら、これらの不定数量詞は HQ の場合と同じ状況にあり、より古い斜格形からより新しい直格形へと変化しつつあると言えるだろう。つまり不定数量詞も HQ 同様、PreGenQ を獲得しつつある。すなわち、PreGenQ は数量属格を付与する他の Q にも拡大しつつある(あるいは拡大した)と言えるだろう。

6.6. 本章のまとめ

以上、本章では PcQ がシンタックスに入る前から語彙で既に数量属格を持っているとの仮説について議論した。さらに 6.4.での議論により、HQ も PreGenQ を獲得しつつある、あるいは既に獲得したと考えられる。以下の議論では HQ は PreGenQ を既に獲得していると考えて議論を展開する。

PcQ と HQ に PreGenQ を想定するとロシア語の Q は以下の様な文法素性とそのロットを持っていることになる。：

つつあるか、あるいは既に獲得していると考えられるかも知れない。

6. 語彙で予め付与されている数量属格

(72)

	1	PcQ		HQ		NQ	QCN
		2	3, 4	5~	100		
数	[(ø), (ø)]	[(ø), (ø)]	[(ø), (ø)]	×	×	[sg/pl]	[sg/pl]
性	[(ø), (ø)]	[ø]	×	×	×	[m], [f]	[m], [n], [f]
有生性	[ø]	[ø]	[ø]	×	×	[in]	[in]
屈折タイプ	×	×	×	[III]	[IV]	[I], [II]	[I], [II], [III]
格	[ø]	[GenQ]	[GenQ]	[GenQ]	[GenQ]	[ø]	[ø]

また、PcQ の形態的パラダイムは以下の通りとなり、主格と対格が欠損していることになる：

(73)(=23)

	「2」		「3」	「4」
	男・中	女		
主格	/			
対格	/			
数量属格	два	две	три	четыре
属格	двух		трех	четырёх
処格	двух		трех	четырёх
与格	двум		трем	четырем
具格	двумя		тремя	четырьмя

また、分配の前置詞 *no* に先導される QP の以下の様な奇妙な格形態を説明するために、この PreGenQ が次第に HQ にも拡大しつつあると考えることが共時的にも通時的にも有効であることも見た。

その結果、HQ も以下の様に PcQ 同様に主格と対格に欠損のある形態的パラダイムに移行しつつあることになる。

(74)(=62)

	「5」
主格	/
対格	/
数量属格	пять
属格	пяти
処格	пяти
与格	пяти
具格	пятью

この言語変化は他の様々な文法変化と合わせて、以下の様にロシア語に数量詞というカテゴリーが名詞と形容詞の間に現在新たに形成されつつあることを示していることを意味しているのではないか。

(75)(=68)

形容詞	「1」	PcQ→	数量詞	←HQ	NQ	QCN	名詞
-----	-----	------	-----	-----	----	-----	----

7. Nの素性にCBを越えさせる素性をめぐって

7. Nの素性にCBを越えさせる素性をめぐって

5.での議論において、QP内の素性のやりとりやQPを主語とする述語の一致の典型的NPの場合とは異なる振る舞いを説明するために、Qが自身の格付与によって形成されるCBを越えるNの一致素性のコピーを可能とするための素性があると考えた。そしてQの互いの振る舞いの違いを正しく説明するために、それぞれのQが持つ素性を以下の様に設定した。

(1)(=5-55)

		1	PcQ		HQ		NQ		QCN
			2	3	5	100	1,000	100万	
Nの素性の CBを越えた コピー	(iii) upNum	/	+	+	+	+	+	+	+
	(iv) horNum	/	+	+	+	+	-	-	-
	(v) horGend	/	+	-	-	-	-	-	-
	(vi) upAni	/	+	+	-	-	-	-	-
	(vii) horAni	/	+	+	+	+	-	-	-
	(viii) setCtrl	/	+	+	+	+	+	+	-

これらにより、一定の記述的な妥当性を達成することができたことは間違いないが、いかにも煩雑であるし、また上方向のコピーと横方向のコピーでの違いについても何故そのような違いが生じるのかも疑問であり、検討すべき問題は多い。本章ではそれらの問題を検討することでよりシンプルにより多くの現象を説明できる理論の整理を目指す。

以下、7.1.ではNP内部の素性のコピーに関して検討し、7.2.では述語との一致も含めて議論の対象とし、述語の一致を含めて議論した場合の残された問題点なども考える。

7.1. NP内部でのCBを越える素性のコピーに関して

まず、これらのCBを越える素性のコピーを認める素性のうち、[±setCtrl]はNP内部での素性のやりとりとではなくNPの内部と述語の間の素性のコピーについてのものなので、ここではまずNP内のCBを越えた素性のコピーの可否について指定する[±upNum], [±horNum], [±horGend], [±upAni], [±horAni]について考えることとする。

上方向の素性のコピーは句節点へのコピーであるため、受け入れられる素性に語彙的な制限はない。しかし一方で横方向のコピーは具体的な語彙項目に素性がコピーするため、語彙項目が何かによって受け入れるためのスロットに違いがあり、当然何を受け入れられるかはその語彙項目によって違ってくる。

まず、AMについては以下の様に、一致素性としては数、性、有生性を受け入れる

7. Nの素性にCBを越えさせる素性をめぐって

ための空のスロットが準備されている。

(2)(=2-9)AMの文法素性

数	[ø]
性	[ø]
有生性	[ø]
タイプ	×
格	[ø]

これらは形容詞，所有代名詞，指示代名詞，所有形容詞など全てのAMに共通と考えて良い。しかし，Qについてはこれまでの議論で明らかになったようにそれぞれにそれぞれの素性とそのスロットがあるため，一様ではない。

(3)(=6-72)

	1	PcQ		HQ		NQ	QCN
		2	3, 4	5~	100		
数	[(ø), (ø)]	[(ø), (ø)]	[(ø), (ø)]	×	×	[sg/pl]	[sg/pl]
性	[(ø), (ø)]	[ø]	×	×	×	[m], [f]	[m], [n], [f]
有生性	[ø]	[ø]	[ø]	×	×	[in]	[in]
タイプ	×	×	×	[III]	[IV]	[I], [II]	[I], [II], [III]
格	[ø]	[GenQ]	[GenQ]	[GenQ]	[GenQ]	[ø]	[ø]

また，格付与能力の有無によってCBの形成の有無が決まり，結果それを越える素性のコピーが不可能になることがある。5.2.4.1でQの格付与能力については以下の通りにまとめた。

(4)(=5-54)Qの格付与能力を示す素性

	1	PcQ		HQ		NQ		QCN
		2	3	5	100	1,000	100	
格付与	(i) asCase	-	+	+	+	+	+	+
	(ii) asLex	↖	-	-	-	±	+	+

以上を踏まえた上で，少なくとも横方向のコピーをCBを越えて行うことを認める素性に関しては，それがなくても同じ予測が可能であるか次節で検討する。

7.1.1. 横方向のコピーについて

素性の横方向のコピーは，具体的な語彙項目へのコピーである。それ故，素性のコピーが行われるかどうかは，素性を受け取る側，つまり一致のcontrollerではなくcontroleeがどのような空のスロットを持っているかによって決まると言うて良い。すなわち，AMが数，性，有生性の素性をNから受け取るのは，その空のスロットを埋めるために必要で，そのための値をNに求めたからである。

(5)(a) (...) смотрит на красивую картинку...

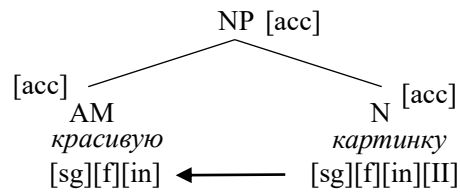
look-pr.3.sg at beautiful-acc.sg.f.in picture-acc.sg.f.in

「美しい絵を見ている」

(НКРЯ 2022.06.19)

7. Nの素性にCBを越えさせる素性をめぐって

(b)



この場合、Nの素性[sg], [f], [in]がAMにコピーされるのは¹、AMがそれらの素性を受け入れるための数、性、有生性の空のスポットを持っているからである。それらを正しく埋めるためにAMはNにその具体的な値を持つ素性を求めると考えられる。

この理解はChomsky (2000, 2001)などで提案される一致のcontroleeを探索子(probe)とし、controllerである目標(goal)に一致できる素性を探しに行く、と言う考え方に似ている。原口他(2016: 657-658)は例として以下のものを示しており、そこでは値のない[uø: _]が探索子として[iø: 3sg]に値を求めている。

(6)(a) John loves Mary.

(b)[TP T [uø: _] [vP John {iø: 3sg} [uCase: _] v [VP loves Mary]]]

(c)[TP T [uø: 3sg] [vP John {iø: 3sg} [uCase: Nom] v [VP loves Mary]]]

この例は主語・述語の一致を説明するためのものであるが、本稿で議論の対象としているNP内の一致についても同様なことが起こっていると以下考えることとする。つまり上のAMの空の素性は探索子として値を目標のNに探し出し、そこから必要な素性の値を取ってくると言っても良い。

なおロシア語において、通常CBを越えて探索子が目標を探すことはできない。以下は典型的NPの例である。

(7)(=1-6)(a) На английском языке вышла [замечательная книга

in English come_out-pa.f wonderful-nom.f book-nom.f

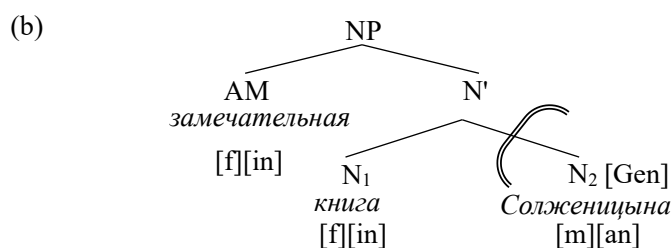
[Солженицына]](...).

Solzhenitsyn-gen

「ソルジェニーツィンの素晴らしい本が英語で出た」(НКРЯ 2021.08.02)

¹ ロシア語の性は2.4.で示したように複数においては消失する。そのため本稿ではグロスなどに文法情報を記す際、性や屈折タイプが記されていればそれだけで単数であることを含意し、数[sg]は記さない、として来たが、もちろんそのような場合でも数[sg]が存在しないわけではない。ここでは数もコピーされていることを明確にするために、敢えて性と数[sg]を記している。

7. Nの素性にCBを越えさせる素性をめぐって

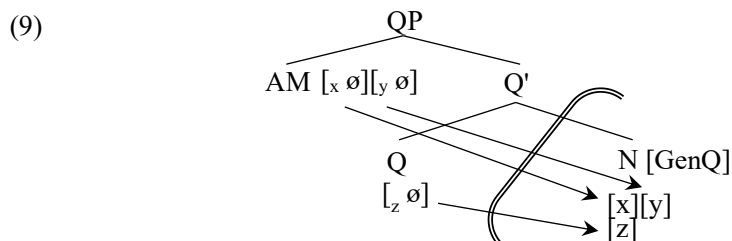


この例では、N₁によって[Gen]を付与されたN₂の上にCBができるので、AMにコピーされている素性はN₁からのもののみで、N₂からのものはない。

その一方で、QPにおいては必要ならCBの下に探索に行くのも可能である。5.ではQPにおけるCBを越えた横方向の素性のコピーを認める素性を設定することでこのそのことを説明したが、本章ではその代わりに、以下の様に規定することで現象の説明が可能であることを示す。

(8) QPにおいて探索子はQによる格付与で形成されるCBの下でも必要なら目標を探すことができる。

つまり、もしCBの上に必要な一致素性がなければ、その下にも探しに行って良いというのが、QPと典型的NPの違いである。

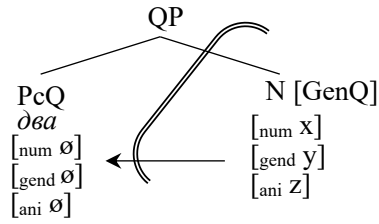


これによって、[±horNum], [±horGend], [±horAni]と同じ効果が得られる。これは謂わばある種の「最後の手段(last resort)」とすることができよう。もちろんCBの上に必要な素性があればそこから素性を受け取ることは言うまでもない。

まず、横向きのコピーによってQが一致素性を得るのは、通常のAMと同じ一致素性を受け入れるスロットがある「1」をのぞくと、PcQのみである。(3)によるとNQやQCNは名詞と同じ本来的素性を持っているのでこれ以上一致素性を受け入れる余地はないし、またHQは数、性、有生性は本来的素性として持っていないだけでなく文脈的素性として受け入れる空スロットもない。屈折タイプは本来的素性として持っているので一致素性として受け入れることはない。結果、PcQだけが一致素性を受け入れる空スロットを持っている。すなわち、「2」は数、性、有生性を、「3,4」は数と有生性の空スロットを持っている。結果として、Qのうち上の規定(8)によって一致素性を得るのはPcQのみである。以下は「2」の場合である。

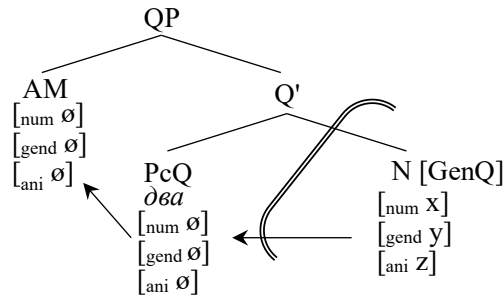
7. Nの素性にCBを越えさせる素性をめぐって

(10)

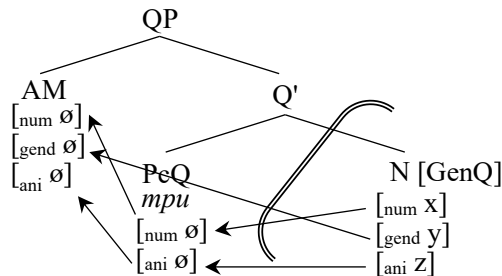


また、AMはAMとして全ての一致素性を受け入れる空スロットがあるが、もし必要な素性をQが持っていればQから受け取るが、QになければCBの下にNにまで探索の手を伸ばさなければならない。例えば、PcQPの場合、PcQ「2」は数、性、有生性をNから受け取っているのも、AMはそれらをQから受け取ることができる。ただし、「3, 4」の場合は性を持っていないので、CBの下まで取りに行かなければならない²。以下は(a)が「2」、(b)が「3」の場合である。AMの性の由来が異なっている。

(11) (a)



(b)



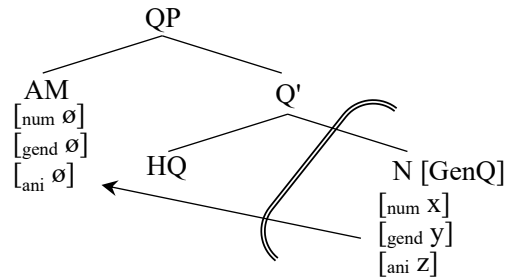
一方HQPの場合、HQはそれらの一致素性を一切持っていないため、それら全てをCBの下にNに探索の手を伸ばして受け取る必要がある³。

²ただし、この性は結局削除される。具体的には7.2.2を参照。

³ただし、HPQの場合、Nは複数なので性を持っていない。AMの性の空スロットも[+pl]がNからコピーされるのでやはり削除される。

7. Nの素性にCBを越えさせる素性をめぐって

(12)



NQP と QCNP の場合は、それらの素性を通常の名詞と同じだけ全て持っているの
で、AM はそれらを CB の上の Q から受け取ることができ、CB の下の N まで探索の
手を伸ばす必要はない。

7.1.2. 上方向のコピー

上方向の素性のコピーの場合、横方向と異なり、句節点へのコピーである。それ
故、具体的な語彙項目と異なり、どの文法素性を受け取らなければならないか、あ
るいはどの文法素性を受け取ることができるかは句節点によって決まることではな
い。別の言い方をすれば、NP 内にある名詞的な素性は全て受け入れることができ
るとも言えよう。

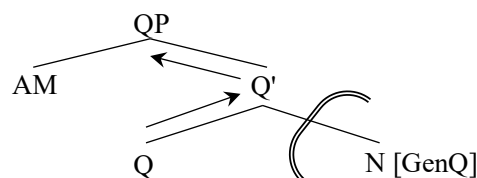
また、2. で見たように Franks (1995) が以下の様に述べている考え方に則るとするな
らば、素性のコピー元は主要部と言うことになる。

(13)(=2-22) Everything else being equal, the values of the features of a node X and its phrasal
projection XP are equivalent. (Franks 1995: 20)

「他の全てが同じであるなら、節点 X とその句投射 XP の素性の値は同一である。」

また 1. で述べたように、ロシア語の QP における主要部性は様々な程度で Q と N に分
散していると考えられるが、少なくとも Q の格付与によって形成される CB の上にあ
る主要部性を持っていると考えられる範疇は Q である。

(14)

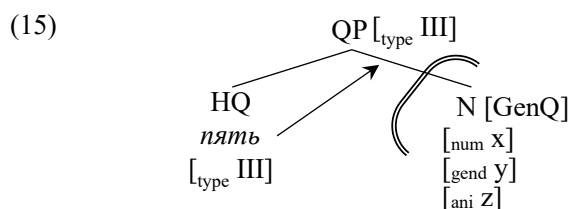


従って、QP において句節点にコピーされる文法素性はまず第 1 に Q からのものであ
ることになるが、本節ではその他に CB を越えて N から句節点に向けてコピーされる
文法素性もあることを示す。

まず、「1」の場合は CB が存在しないので N の持っている素性が全て上方向に句節

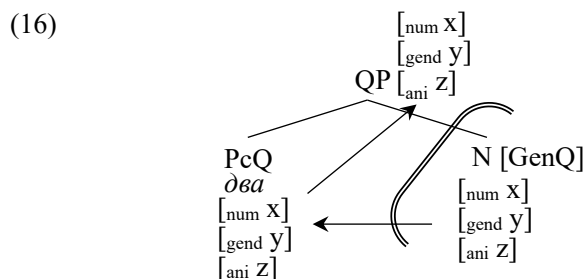
7. Nの素性にCBを越えさせる素性をめぐって

点にコピーされる。また NQ と QCN の場合は、Q が名詞と同じ一致素性を全て持っているので句節点にも Q の素性がコピーされる。それに対して、HQ の一致素性は屈折タイプ以外はないし、N から値を受け取るスロットもない。それ故 HQ から句節点に上方向にコピーされるのは屈折タイプの素性のみである。また、具体的な語彙項目と異なり句節点には素性を受け入れるための空のスロットが予め準備されているわけではないので CB の下の N まで素性を探しに行くこともない。その点は横方向と異なる点である。以下は「5」の場合である。



つまり HQ の場合、[+upNum]による QP への数素性のコピーは「1」と異なり予測ができない。

PcQ の場合だとどうなるであろうか？ PcQ は HQ と異なり本来的に持っている一致素性はないが、その代わりに、「2」は数、性、有生性の空スロットを持ち、「3, 4」は数と有生性の空スロット持つ。従って CB の下にある N から受け取った値が PcQ から句節点にコピーされることが可能である。



以上、QP 内部での素性のコピーに関して見る限り、PcQ に関しては(1)のような CB を素性に越えさせることを認める素性で説明したのと同じ効果を得ているように見える。一方 HQ では[+upNum]の効果はそれなしでは予測されない。

7.2. 述語との一致をめぐって

述語の一致についても考慮に入れた場合、これらを完全に無くしてしまうと記述的に問題が生じることが明らかになる。以下ではその点について議論する。

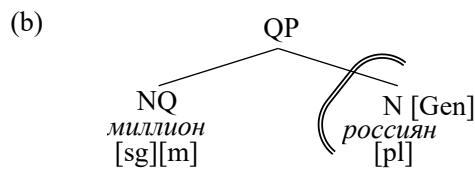
7.2.1. [+upNum]について

3.で詳細に示したように、QP を主語とする述語の一致にはいくつかのバリエント

7. Nの素性にCBを越えさせる素性をめぐって

が認められている。中でも pl.3 の一致は「1」の場合をのぞく全ての QP で可能であり、それは句の頂点の節点である QP を一致の Ctrl と指定した場合に可能となるものであることも同様に 3. で述べた。以下は最も多い 3 パターンの一致が可能な NQ の例である。

(17)(a)(=3-2) Миллион россиян посетило/ посетил/ посетили Америку.
 million-nom.m Russian-gen.pl visit-pa.n -pa.m -pa.pl America-acc
 「100万人のロシア人がアメリカを訪れた」 (匹田 2016: 366)



この場合、NQ を一致の Ctrl に指定すれば動詞の過去形は男性形の *пришел* になり、QP を指定すれば複数形(pl.3)の *пришли*, N を指定すれば主格ではないためデフォルトの中性形(n.sg.3)の *пришло* になる。

しかし、[±upNum]をなくしてしまうと、節点 QP に N の持つ素性[pl]がコピーされる理由がなくなってしまう。その点、PcQ の場合は(16)で見たように N の数、性、有生性の素性が PcQ を経由することで句節点にもコピーされるので問題ないが⁴、空の数のスロットも持たない HQ では同様に句節点への[pl]のコピーは不可能である。また QCN の場合も同様である。

以上のことから、CB を越える素性のコピーの可否は全てが Q や AM の持つ素性やスロットによって決まるものではなく、他とは異なり少なくとも[±upNum]は無しで済ませることができないものであることがわかる。

7.2.2. いくつかの例の確認: PcQP と HQP

ここまで、CB を越える素性の横向きのコピーを認めるための素性は全て素性を受け入れる AM や Q の文法素性とそのスロットのあり方に帰結できるので不要であること、また[±upNum]以外の上向きのコピーを認めるための素性も同様であることを見た。ここからいくつかの具体例を見てその点を確認することにしたい。

具体例を見る前に、これまでの議論で提案し、以下の議論で関係する規則をいくつか確認しておく：

⁴ただし、PcQ の持つ数は複数ではなく少数であり、QP に[GenQ]以外の格が付与されることではじめて複数になる。述語との一致が起こるためには当然その QP には主格が付与されているので、この点は問題にならない。また、複数になった結果性の素性が削除される。

7. Nの素性にCBを越えさせる素性をめぐって

(18)(=2-70) 複数における性の削除

[gender X] → ∅, if [pl]

(19)(=2-80) 複数における屈折タイプの削除

[DecType X] → ∅, if [pl]

(20)(=4-90) 数量属格以外での少数の複数化

[GenQ]以外の格が与えられると [num (±pl X), (±pc Y)] → [(±pl X)]

(21)(=5-6) 対格の属格化

有生[an], かつ性として[m]以外あるいは屈折タイプとして[I]以外がなければ

[Acc] → [Gen]

(22)(=5-81) 対格の主格化

対格に固有の形態がなければ[Acc] → [Nom]

さらに、4.5.2.1.での議論に基づき以下の少数における性に関する規則をここで提案する。この規則は少数において[±m]が削除され、性の対立が[±f]だけになることを意味する。

(23) 少数における性の素性の削除

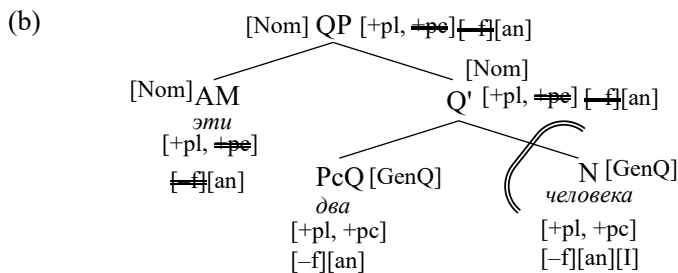
[gender ±m, ±f] → [gender ∅, ±f], if [pc]

以下の議論では、以上の規則を全て前提として具体例を考察することとする。

まず PcQP が主格環境にある場合から見る。

(24) PcQP, 主格環境

(a) (...)эти два человека были похожи (...)
 this-nom.pl two-genq.pc.-f person-genq.pc.-f be-pa.pl alike-pl
 「これら2人は似ていた」 (НКРЯ 2022.06.26)



この例では、まず PreGenQ を持つ PcQ と N が併合すると、PcQ が N に [GenQ] を付与し、PcQ はその空スロットを埋めるために N から数 [+pl, +pc], 性 [-f], 有生性 [an] を受け取る。さらに [+upNum] によって N の数 [+pl, +pc] が Q' に上方向にコピーされ、また PcQ から性と有生性も Q' にコピーされる⁵。N の屈折タイプ [I] はとくにどこにもコ

⁵ この場合、Q' にコピーされる数素性は PcQ からコピーされても結果は同じになるが、下で見る HQP の場合だと結果が異なってくるので [+upNum] によって N からコピーされると考える。この点

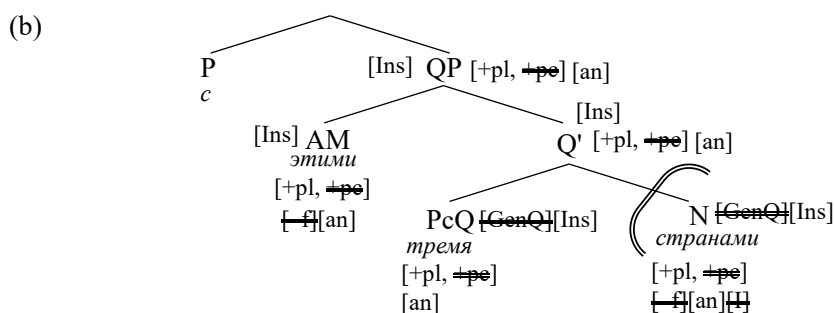
7. Nの素性にCBを越えさせる素性をめぐって

ピーされる理由がない。AMとQ'が併合してQPが形成されるとQ'の素性は全てQPにコピーされ、また同じ素性がAMの空スロットを埋めるためにAMにもコピーされる⁶。また句の外にある格付与子からQPに[Nom]が付与されると、AMとQ'に浸透する。PcQとNには浸透しないのはそれらには既に[GenQ]があるからである。QP, AM, Q'が[GenQ]以外の格、すなわち[Nom]を得たことで、それぞれの節点の少数[+pl, +pc]が複数[+pl]に変わり、さらにそれによって性[-f]が削除される。

続いて語彙格環境のPcQPである。以下の例で前置詞c「〜と」は具格を付与する。

(25) PcQP, 語彙格環境

- (a) С этими тремя странами связана вся моя жизнь (...)
 with this three-ins country-ins.pl.in tied-f all-nom.f my-nom.f life-nom.f
 「これら3カ国と私の全人生は関係している」 (HKPЯ 2022.06.27)



まずこの例ではQが同じPcQでも「2」ではなく「3」である。「3」には性の空スロットがなく、「3」にNの性[-f]がコピーされることはないのでPcQ, Q', QPには性の素性がない。そのためAMの性の空スロットはNまで目標を探してそこから[-f]を受け取ることになる。この点が「2」と「3」の違いであるが、性素性は結局消えてしまう。それ以外の一致素性のQP内でのコピーについては、頂点QPに格が付与される前に全て済んでしまうので、格環境によって変わることはないが、頂点に付与される格が浸透する際に各節点の一致素性に変更がある場合もある。主格の場合は頂点に付与された主格はPcQとNには既に[GenQ]があるので浸透できなかったのに対して、語彙格である具格の場合は[GenQ]を[Ins]が上書きすることになる。結果として、主格環境の場合と異なりAMとQP以外でもPcQとNの数が少数[+pl, +pc]から複数[+pl]になり、それによってAM, QPおよびPcQとNの性とNの屈折タイプが消失する。

主格と同じ構造格の対格の場合はNが無生の場合は主格と同じで、対格[Acc]はAMとQ'までしか浸透することはない。しかし有生名詞の場合は属格化が起こるため

の厳密化は7.2.3で議論する。

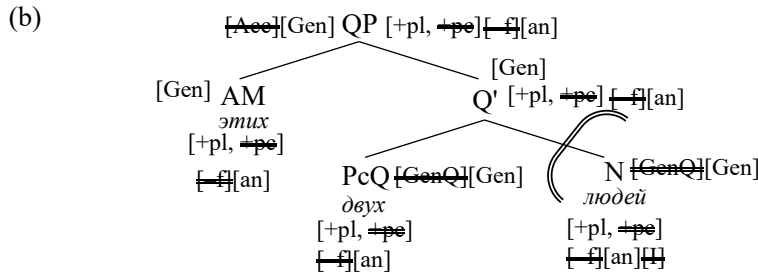
⁶ AMの探索子が目標を探す対象としてPcQではなくQ'に探索の手を伸ばすのは、とりあえずAMが最も近くc統御しているのがQ'だからである。Chomsky (2000: 122)は探索子が目標を探す領域に関して“Locality reduces to “closest c-command”「局所性は最も近いc-commandに帰結できる」としている。

7. Nの素性にCBを越えさせる素性をめぐって

事情が違ってくる。

(26) PcQP, 対格環境, Nが有生

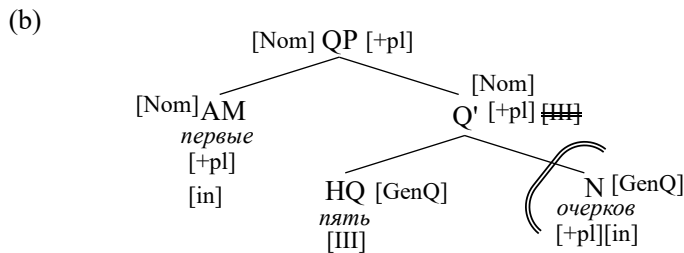
(a) (...)я никак не мог соединить этих двух людей (...)
 I-nom by_no_means not can-pa.m unite-inf this-gen.pl.an two-gen.an person-gen.pl.an
 「私はどうしてもこれら2人を1つにできなかった」 (НКРЯ 2022.06.27)



頂点のQPに格が付与される以前に起こることは上と同じである。QPに[Acc]が付与されると、Nの有生性が無生[in]であれば主格の場合と同じだが、有生[an]の場合はここで属格化の条件が揃い[Acc]は[Gen]に書き換えられる。そして[Gen]は語彙格であるため構造格の[GenQ]に上書きされることが可能である。そのため構造格の場合と異なり、PcQやNまで[GenQ]は浸透できる。結果として、AM, PcQ, Nのいずれも属格形になっていることが正しく予測できている。

続いてHQPが構造格である主格環境に置かれた場合を見てみよう。以下はHQとして *пять*「5」が用いられている。

(27)(a) Первые пять очерков появились в печати в 1949 году.
 first-nom.pl five-genq study-genq.pl appear-pa.pl in print-loc in year-loc
 「最初の5つの研究は1949年に刊行された」 (НКРЯ 2022.06.28)



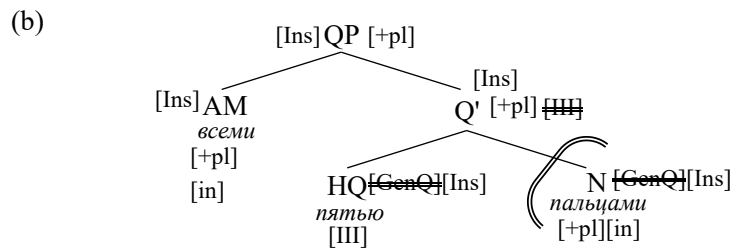
HQの場合、一致素性については本来的素性として屈折タイプを持っているのみで、空のスロットは持っていない。この点で性、数及び有生性あるいは数と有生性の空スロットを持っているPcQと異なり、そのことがHQPとPcQPの形態的違いを生み出す原因となっている。まずHQとNが併合しQ'を形成すると[+upNum]によってNからQ'に数[+pl]がコピーされ、HQからQ'に屈折タイプ[III]がコピーされる。ただし、屈折タイプは複数の場合削除されるので[III]は即時削除される。その後AMとQ'が併合するとQ'からAMとQPに[+pl]がコピーされる。[III]はQ'で既に削除されているの

7. Nの素性にCBを越えさせる素性をめぐって

でどこにもコピーされない。句節点であるQPには空スロットが有るわけでは無いので、[+pl]だけでも問題ないが、AMはそうはいかない。[+pl]があるので性と屈折タイプはスロットが削除されるので問題ないが、有生性の素性はそのスロットを埋めるために受け取る必要がある。CBの上のc統御する領域には有生性の素性はないが、(8)により探索の手をCBの下のNにまで伸ばしそこから有生性の素性[in]を受け取り、スロットを埋める。このことは無生の場合はあまり意味を持たないが、下で言及する有生の場合には大きな意味を持つ。なお、HQにはPreGenQがあるし、NにはHQと併合した時点で付与されるGenQがあるので、頂点のQPに付与された格が構造格である主格[Nom]の場合、HQとNに[Nom]が浸透することはない。

続いて語彙格が付与された場合の例を見てみよう。以下は具格[Ins]の例である。

- (28)(a) Он ударил по струнам всеми пятью пальцами (...)
 he-nom hit-pa.m at string-dat.pl all-ins.pl five-ins finger-ins.pl
 「彼は5本の指全てで弦を叩いた」 (НКРЯ 2022.06.29)



主格の場合との最大の違いは、QPに付与された語彙格(この例では具格[Ins])はHQとNにも構造格の[GenQ]を上書きすることで浸透する、という点である。結果としてAM, HQ, Nのいずれも具格形になる。またこの場合、それ以外の素性の削除などには影響は全く与えていない。

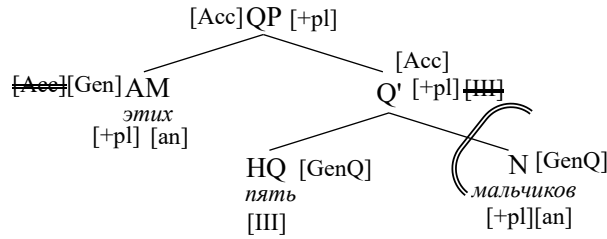
続いて、HQPが対格環境にありNが有生の場合であるが、上述の通り無生名詞の場合は主格環境と違いはない。[Nom]の代わりにQPに付与されるのが[Acc]であるだけである。[Acc]は構造格であるために既に[GenQ]があるHQとNに浸透できない点も[Nom]の場合と同じである。異なるのはNが有生の場合である。Nが有生の場合の振る舞いはPcQPの場合の(26)と大きく様相が異なる。

- (29)(=5-37)

- (a) Я увидел [этих пять мальчиков].
 I-nom see-pa.m this-gen.pl.an five-genq.III boy-genq.pl.an
 「私はこれら5人の少年を見かけた」 (Babby 1987: 109)

7. Nの素性にCBを越えさせる素性をめぐって

(b)



まずHQとNが併合するとQ'にHQから屈折タイプ[III]が上がり、Nからは[+upNum]のために数[+pl]が上がる。すると複数では屈折タイプは消失するので[III]はその場で消える。この時点でHQにはPreGenQがあり、NにはHQによって付与された[GenQ]がある。続いてAMとQ'が併合するとAMは最も近いc統御によりQ'から[+pl]を受け取り、その結果性と屈折タイプのスロットは削除される。しかしAMの有生性のスロットは空のままであるため探索子の手をCBの下のNにまで伸ばし、そこから有生性[an]を得る⁷。句節点であるQPもQ'も語彙的に決まっている素性のスロットを持っているわけではないので[an]をCBの下まで探して得るといふことはしない。次に頂点のQPに格付与子(この場合は他動詞の *увидел*「見かけた」)から対格[Acc]が付与されるとそれはAMとQ'には浸透するがHQとNには浸透しない⁸。それらには既に[GenQ]があるからである。構造格の[GenQ]を同じ構造格の[Acc]が上書きすることはできない。[Acc]を受け取ったQP、Q'、AMのうちAMでだけは属格化の条件が揃っているためAMだけは属格化し *этих* と属格形になるが、QPとQ'では[Acc]のままである。このように対格環境にある有生名詞を含むPcQPの例(26)では句の頂点で属格化が起こっているのに対してHQPでは末端のAMでのみ属格化が起こることを正しく予測できていると言える。

なお、他のHQ、例えば *сто*「100」でも同様にAMでのみ属格化が生じる。以下はHQ「100」を含むHQPが対格環境に置かれている場合である。「5」の場合と同様にAMでのみ属格化が起こっている。

(30)(...)любит [свое хозяйство], [своих сто коров] (...)
 love-pr.3.sg self's-nom.n enterprise-nom.n.in self's-gen.pl.an hundred-nom cow-genq.pl.an
 「自分の仕事、自分の100頭の牛を愛している」 (НКРЯ 2022.07.02)

この例では、他動詞 *любит*「愛する」が対格を付与する環境に2つの句、即ちNPと

⁷ 実はHQに有生性[in]を本来的に持たせるという分析も多くの場合では可能である。しかし、HQに[in]を持たせるとAMがHQから[in]を受け取ってしまい、この例の *этих* という形態が説明できなくなる。

⁸ なお、5.での議論ではPreGenQを想定していなかったためHQまで[Acc]が浸透し、その後主格化が起こる、すなわちこのHQの形態は主格形であると考えていたが、ここではそうではない。つまり、HQの形態は数量属格形である。

7. Nの素性にCBを越えさせる素性をめぐって

QP が置かれているが、1つめの名詞句の N *хозяйство*「事業」は無生名詞であり、2つめの QP の N *коров*「牛」が有生名詞である。結果2つめの QP の HQ の前にある AM だけが属格化の条件を満たしており属格形になっている。

なお、NQ については諸々の問題があるので次節で触れる。

7.2.3. AMの存在と述語の一致

[±upNum]だけは5.で提案した一致素性にCBを越えさせるための素性の中でも他と異なり、QやAMの持つ素性と空スロットに帰結されることができず、なくすことができないことは見た。しかし、[±upNum]を残すだけでは説明できないことがまだ他にあることもまた事実である。以下、その問題を議論する。

7.2.3.1. [+upNum]の代わりに

まず、Franks (1995: 100)は以下の様に、複数主格のAMを持つQPが主格環境に置かれ述語の一致のCtrlになる際、述語はpl.3の一致のみが可能でn.sg.3の一致が不可能であることを指摘している。以下はHQの例である。

- (31) Эти пять красивых девушек пришли / *пришло.
this-nom.pl five-genq beautiful-genq.pl girl-genq.pl come-pa.pl come-pa.n
「これら5人の美しい娘がやってきた」 (Franks 1995: 100)

また、Бельчиков (2008: 244)も同様の指摘をしており、以下の様なPcQPの例をあげ、このような場合、述語はpl.3の形態になると指摘している。

- (32) Прошли первые два месяца работы Саши в Сибири.
pass-pa.pl first-nom.pl two-genq.pc month-genq.pc work-gen Sasha-gen in Siberia
「サーシャのシベリアでの仕事の最初の2ヶ月が過ぎた」 (Бельчиков 2008: 244)

なぜこの位置に複数主格のAMがあると述語の一致がpl.3だけに限定されn.sg.3は不可になるのか。ここまでの説明ではこの問題を適切に説明することはできない。このことを説明するために、本稿では[±upNum]もなくして、以下の2点を仮定する。

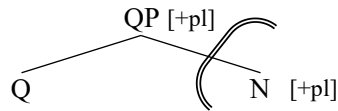
(33) [±upNum]に代わる提案

- (a) QPにおいてNからCBを越えた上方向の数素性のコピーは選択的に行われ、その代わりQから数素性が上方向にコピーされることはない。
(b) 述語の一致のCtrlの指定の際もAMの探索子同様、最も近くc統御するものをCtrlとして指定する。

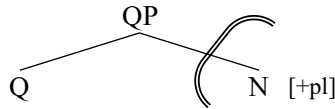
つまり(33a)により、Nからの数素性[+pl]は以下の様にQPにCBを越えて上がる場合と上がらない場合があることになる。また、上がらない場合でもQから(あったとしても)数の素性がQPに上がることはない。

7. Nの素性にCBを越えさせる素性をめぐって

(34)(a)NからCBを越えてQPに[+pl]が上がる場合



(b)NからCBを越えてQPに[+pl]が上がらない場合

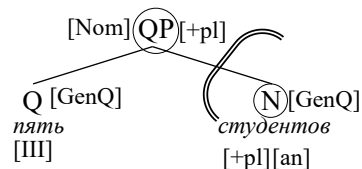


また、3.では述語の一致のCtrlとして指定できるものは複数あり、そのうちどれを選択するかによって述語の一致形態に違いが出ると考えたが、(33b)により、述語の一致のCtrlになり得るのは指定されうる範疇のうち、句構造上最も高い位置にあるものだけということになる。例えば、以下のHQPの例を見てみよう。

(35)(=3-3b) Пришли / Пришло пять студентов.
come-pa.pl come-pa.n five-nom student-genq.pl
 「5人の学生が来た」 (匹田 2016: 362)

この場合、2つの一致の可能性があるが、3.4.4.2.2.ではそれは一致のCtrlとして指定可能な範疇が2つ、すなわちQPとCBの下のNがあるからと考えた。

(36)



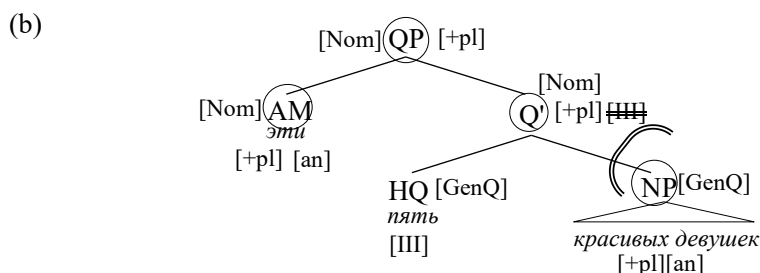
すなわち、QPが一致のCtrlに指定された場合、述語はpl.3で一致し、NをCtrlに指定した場合は格が[Nom]ではなく[GenQ]であるために実際に一致することができず結果デフォルトのn.sg.3の一致となる。

ただし、これだけだと(31)の投げかけた疑問に答えることはできない。AMの有無に関わらずQPをCtrlに指定するのも、NをCtrlに指定するものどちらも可能だからである。しかし実際には複数主格のAMが存在するとn.sg.3の一致は排除される。

(37)(a)(=31) Эти пять красивых девушек пришли / *пришло.
this-nom.pl five-genq beautiful-genq.pl girl-genq.pl come-pa.pl come-pa.n
 「これら5人の美しい娘がやってきた」 (Franks 1995: 100)

⁹ 本稿では3.4.4.2.2.での議論によりPcQとHQは述語の一致のCtrlにはなり得ないとする。

7. Nの素性にCBを越えさせる素性をめぐって



この場合、円で囲んだQP, AM, Q', およびCBの下にあるNPがいずれも述語の一致のCtrlに指定できることになる。AMが存在していることはこの点に何の影響も与えない。QP, AM, Q'のいずれかがCtrlに指定された場合は述語はpl.3の形態となる。しかし、NPを指定した場合、格が[Nom]ではなく[GenQ]であるため、述語は一致できずデフォルトの形態であるn.sg.3になる。つまり、このままではn.sg.3の形態が非文であるという言語事実を正しく予測できずに、pl.3とn.sg.3の両者が可能であると誤って予測してしまう。この問題を説明するために、上の(33)は[±upNum]を廃し、その代わりに異なる考え方を提案している。(33a)については上で確認したが、AMの存在が述語の一致形態に影響を与えることを説明するためには、以下に繰り返す(33b)の規定も重要な意味を持っている¹⁰。

(38)(=33b) 述語の一致のCtrlの指定の際もAMの探索子同様最も近くc統御するものをCtrlとして指定する。

この考え方だと、その都度述語のCtrlに指定されうるものは原則、最も高い位置にある1つのみである。ではなぜpl.3とn.sg.3の2つの一致形態が可能になるのか。

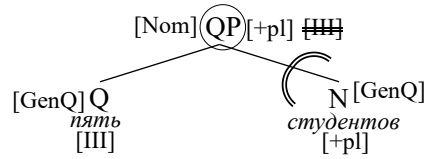
7.2.3.2. AMのない場合

まずAMのない場合で考えてみよう。まず、(33a)の規定により、NからCBを越えた上方向の数素性のコピーは選択的なものであって義務的なものではない。さらに同様にQから上方向に数素性がコピーされることはないと規定しているので、結果として句節点には数素性がある場合とない場合の両方の可能性がある。(35)のHQ *пять студентов*「5人の学生」を例に取れば、以下の通りである。

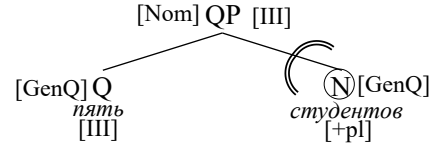
¹⁰ ただし、主格主語に一致する要素、すなわち *controlee* がどこにあるのかを厳密に特定することは今後の課題としておく。例えば、Franks (1995: 118-119)は、少なくとも基底語順では、主語NPをc統御する位置にIを、原口他(2016: 658)はTをそれぞれ仮定している。本稿ではこれらに従い、派生の何らかの段階で主語NPをc統御する位置にそれらから一致素性を受け取るIやTなどの何らかの機能範疇が存在すると仮定して議論を進める。

7. Nの素性にCBを越えさせる素性をめぐって

(39)(a)



(b)

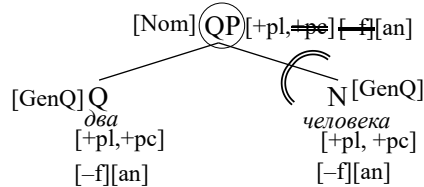


(33a)の規定により N から の CB を越えた上方向の数素性のコピーは選択的なものであるが、(39a)では N から上方向に数素性[+pl]が CB を越えてコピーされているのに対して、(39b)ではコピーが起こっていない¹¹。ここで[+pl]がある(39a)のQPは述語の一致のCtrlに指定されるだけの条件を備えているが、数を持たない(39b)のQPはCtrlに指定されるための条件を備えていない。また、HQは3.4.4.2.2で述語の一致のCtrlになり得ないと結論づけた。このとき、(33b)の規定により、(39a)では最も高いところにある一致のCtrl候補であるQPがCtrlに指定される一方、(39b)では最も高いところにある一致のCtrl候補はCBの下にあるNということになりNが述語の一致のCtrlに指定される。そして、QPが指定された場合、述語はpl.3の形態を取り、Nが指定された場合は主格でないために実際に一致することはできず、結果として述語はn.sg.3の形態となる。このようにして、NからCBを越えた数素性の選択的コピーが実際に起こったかどうかによってCtrlに指定される節点がちがうことになり、それによって2つの形態的バリエーションを説明できることになる。

このことはPcQPの場合でも同様である。

(40)(a) Перед ним были два человека (...)
 in_front_of he-ins be-pa.pl two-genq.pc person-genq.pc
 「彼の前に2人の人がいた」 (НКРЯ 2022.07.09)

(a')

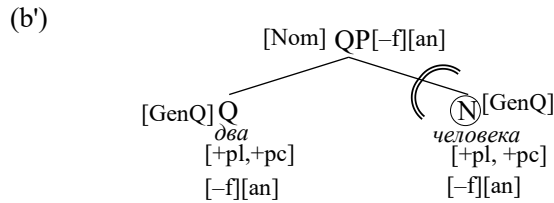


(b) И было два человека.
 and be-pa.n two-genq.pc person-genq.pc

¹¹ この場合、[+pl]がQPにコピーされている(39a)ではQからコピーされた屈折タイプが(19)により[III]が消去されるが(39b)ではそれは起こらず[III]は残るが、このことはとくに影響はない。影響がないという点では屈折タイプが形態的に大きな影響を与える対格環境においても有生性の素性がないため同様である。

7. Nの素性にCBを越えさせる素性をめぐって

「そして2人の人がいた」 (HKPЯ 2022.07.09)

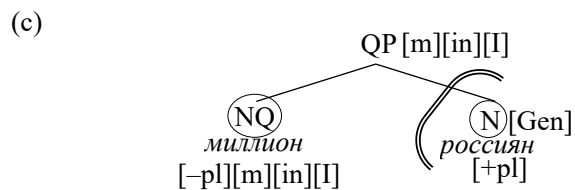
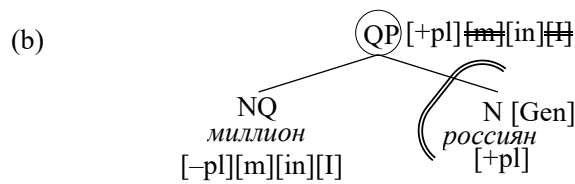


まず(a)の例では pl.3 の一致が見られるが、この場合は(33a)により QP に Q ではなく N から数素性[+pl, +pc]がコピーされているが、QP に[Nom]が付与されると(20)により少数[+pl, +pc]は複数[+pl]に変わり、その結果、Q からコピーされた一致素性のうち、性素性[-f]が(18)により削除される。この例では最も高い位置にある Ctrl 候補は QP であり、pl.3 での一致が正しく予測される。

一方(b)では n.sg.3 の一致が見られる。この場合は QP に N からの数素性[+pl, +pc]のコピーは起こっていない。また(33a)の規定により Q から数素性が上方向にコピーされることはない。結果、節点 QP は数素性がなく、述語の一致の Ctrl とはなり得ない。また 3.4.4.2.2.での議論により Q も Ctrl とはなり得ないので、最も高い位置にある述語の一致の Ctrl の候補は N である。ただし、与えられている格が[GenQ]であり[Nom]ではないので実際に一致はできず、結果述語はデフォルトの n.sg.3 の形態を取る。

続いて NQ の場合を見てみよう。PcQ や HQ の場合と異なり、3 パターンの述語の一致形態が可能である。

(41)(a)=(3-2)Миллион россиян посетило/ посетил/ посетили Америку.
 million-nom.m Russian-gen.pl visit-pa.n -pa.m -pa.pl America-acc
 「100万人のロシア人がアメリカを訪れた」 (匹田 2016: 366)



この例では、(b)が N からの数素性が QP に上がっている場合で、それに伴い NQ から来た一致素性のうち性[m]と屈折タイプ[I]の削除が起こっている。(c)が上がっていない場合である。

7. Nの素性にCBを越えさせる素性をめぐって

このうち(b)のQPに数素性がある場合、最も高い位置にある述語の一致のCtrl候補になるのはQPである。従って、(33b)によりQPが述語の一致のCtrlに指定される。QPをCtrlに指定した場合は述語はpl.3で一致するのはHQやPcQの場合と同じである。すなわち、NからQPに数素性が上がった場合、述語は複数形の *посетили* となる。

それに対して、(c)のQPにNから数素性が上がっていない場合は、QPの他の素性には影響がないものの、数素性がないためQPは一致のCtrlの候補になり得ない。この場合Ctrl候補は同じ高さに2つ、すなわちNQとNが存在する。HQやPcQと異なり、NQは名詞と同じだけの一致素性を完全に備えており、一致のCtrlに指定されることが可能だからである。つまり、QPにNの数素性が上がらない場合は平等にNQとNという2つの一致のCtrlが選択可能であることになる。そしてNQが選択された場合、NQは主格であるため述語はNQに一致する。この例の場合なら男性形 *посетил* である。それに対してCBの下にあるNが一致のCtrlに指定した場合、Nは主格ではないため実際には述語が一致することはできず、結果としてデフォルトのn.sg.3のパターンを取る。この例では中性形の *посетило* である。

以上はAMのない場合を見た。PcQ, HQ, NQいずれの場合でもQP内部の形態も、述語の一致形態も、そのバリエーションも含め正しく予測できていることがわかった。

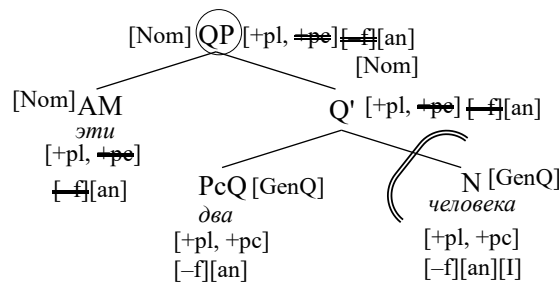
7.2.3.3. AMの存在する場合

以下本節ではAMが存在する場合を検討し、本節で扱う(31)で提起された問題、すなわち複数主格のAMがあると何故述語はpl.3でのみ一致が可能なのか、についてどこまで説明が可能か検討することとする。

7.2.3.3.1. PcQとHQの場合

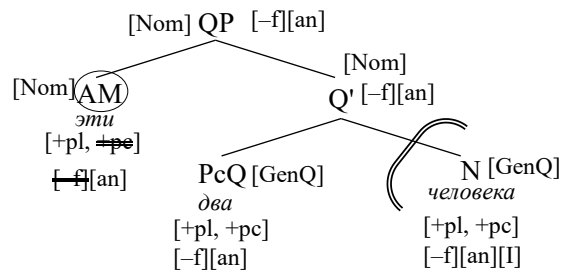
本節ではAMのあるPcQPとHQPの場合について検討する。まず、PcQPの場合から見てみよう。

- (42)(=24a)(a)(...)эти два человека были похожи (...)
 this-nom.pl two-genq.pc.-f person-genq.pc.-f be-ra.pl alike-pl
 「これら2人は似ていた」 (НКРЯ 2022.06.26)
- (b) Nから数素性が上に上がる場合



7. N の素性に CB を越えさせる素性をめぐって

(c) N から数素性が上に上がらない場合



この例で樹形図(b)は N から句節点 QP と Q' に数素性が上方向にコピーされている場合、(c)はコピーされていない場合で、その結果として QP と Q' には数がない。

数素性が上がる場合、つまり(b)の場合、句節点 QP と Q' には N から数素性 [+pl, +pc] がコピーされ、同時に PcQ もその数のスロットを埋めるため N から [+pl, +pc] を取ってくる。また PcQ から性 [-f] と有生性 [an] が QP と Q' にコピーされている。ただし、数 [+pl, +pc] は主格 [Nom] が与えられると(20)により複数 [+pl] に変わり、それによってさらに(18)によって性素性 [-f] が削除される。AM には数、性、有生性の空のスロットがあるのでそれらを受け取る必要があるが、それらを持っており、かつ AM が最も近く c 統御するのは Q' である。それ故、AM はこれらの素性を全て Q' からコピーされる。QP に主格 [Nom] が付与されると AM と Q' までは [Nom] が浸透するが、PcQ と N には既に [GenQ] があるので [Nom] はそれらには浸透しない。また、AM でも QP 及び Q' と同じように数が複数になり、それに続いて性が削除される。この場合、述語の一致の Ctrl として考えられる節点は QP である。それ以外にも候補になる条件を満たしている節点はあるが、最も高い位置にあり、句の外の一致要素により最も近く c 統御を受けているのは QP である。

一方(c)は N から数素性が上方向にコピーされなかった場合である。(b)との違いは、QP と Q' に N から上がってくる数素性がなく、結果それらの節点の性の削除が起こらないという点と、AM の数素性を含む一致素性が Q' から受け取ることができないので PcQ か N に探索子を伸ばしてそれらから数を受け取らなければならないという点である。PcQ と N はいずれも AM によって最も近く c 統御されているのでどちらからでも数を含む必要な一致素性を受け取ることができるが、どちらから受け取ったとしても違いはない。AM に主格が浸透して来ると数が少数から複数になり、それによって更に性が削除されるというのは(b)の場合と同じである。ただし、QP, Q' で性の削除は起こらない。また(c)の場合は数素性が QP と Q' にないため述語の一致の Ctrl 候補になり得ない。そのため、最も高い位置にある、すなわち述語の一致を担う要素に最も近く c 統御されているのは AM であり、述語は AM から必要な素性を受け取り pl.3 のパターンでの一致を行うことになる。

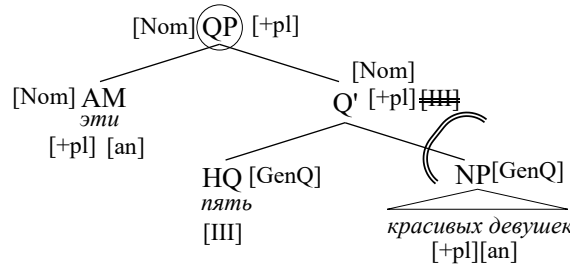
以上の様に、PcQP に AM がある場合、AM は複数形にしかかなりようが無く、また述語の一致は pl.3 の形態しか取りようがないことが正しく説明・予測されている。

7. N の素性に CB を越えさせる素性をめぐって

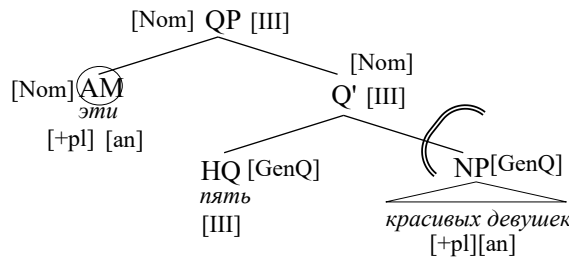
続いて HQ の場合である。(以下の例では HQ が格付与する範疇は名詞 1 語からなるものではなく AM+N の 2 語からなる句である。そのため HQ が[GenQ]を付与する範疇のラベルは NP としてある。)

(43)(a)(=31) Эти пять красивых девушек пришли / *пришло.
 this-nom.pl five-genq beautiful-genq.pl girl-genq.pl come-pa.pl come-pa.n
 「これら 5 人の美しい娘がやってきた」 (Franks 1995: 100)

(b) N *девушек* から数素性が上がる場合



(c) N *девушек* から数素性が上がらない場合



樹形図(b)は NP から数素性[+pl]が CB を越えて Q' と QP にコピーされている場合である。HQ からコピーされた屈折タイプ[III]は Q' で削除される。そこに[+pl]があるからである。[III]は Q' で削除されるのでそこから更に上の QP にはそもそもコピーされない。AM эти は数素性[+pl]を最も近く c 統御する Q' から受け取る。これが [+pl]であるため性と屈折タイプのスロットは削除されるためそれらを探し求める必要はないが、有生性のスロットは空のまま残っている。探索子はそれを有生性の素性を持っている最も近く c 統御する節点 NP に求める。この場合 QP の外にある述語の一致を担う範疇が最も近く c 統御すると考えられる節点は QP であり、述語の一致の Ctrl に指定されるのは QP である。また QP は主格を付与されているので Ctrl に指定されれば実際に述語が一致することが可能である。その結果として述語は pl.3 の形態を取ることになる。

続いて樹形図(c)は NP の数素性[+pl]が CB を越えて Q' と QP にコピーされていない場合である。Q' と QP には[+pl]がないため HQ からコピーされた屈折タイプ[III]は Q' でも、そしてさらに QP でも削除されることはない。また、(b)の場合と異なって Q' に[+pl]がないため、AM の数の空スロットを埋めるため探索子は CB の下の NP に数素性を求めなければならない。有生性を NP に求めるのは(b)と同様である。この場合、

7. Nの素性にCBを越えさせる素性をめぐって

QPに数素性がないため、節点QPは述語の一致のCtrlに指定することができない。結果、Ctrlに指定可能な節点のうち、述語の一致を担う範疇が最も近くc統御するのはこの場合[+pl]を持つAMである。またAMは主格が与えられているので実際に述語が一致することができる。その結果としてこの場合述語は(c)の場合でもpl.3の形態で一致しなければならないことになる。

以上のことから(b)の場合でも(c)の場合でも複数で一致しているAMがある場合PcQの場合と同様に述語はpl.3の形態しか取りようがなく、またAMは複数形で一致せざるを得ないことが正しく予測されている。

7.2.3.3.2. 対格の形態法について

ここまで[±upNum]に替わって(33)を提案することで、QPを主語とする述語の可能な一致のパターンについても正しく説明でき、また、少なくともPcQPとHQPの場合については、(31)の投げかけた謎、すなわち何故複数形のAMがあると述語も複数形での一致しかあり得ないのか、にも答えを出すことができた。しかし、(33)を代案とすることで検討しなければいけない問題が生じる。すなわち、対格の形態法のパターンである。5.で提案した属格化規則(21)は複数において性と屈折タイプの素性が削除されると規定した(18, 19)を利用することによって成立していた。しかし、(33a)はNからCBを越えた上方向の数素性のコピーを選択的なものとしている。すなわち句節点QPやQ'には数素性がコピーされないことがあり得るが、そのことは文法の予測能力に影響を与えないのであろうか。

まず、HQの場合、以下の例のように、Nが有生名詞でも属格化が起こるのはQPの最も外側にあるAMのみで、Qでは属格化が起こらないことは5.で示した通りである。

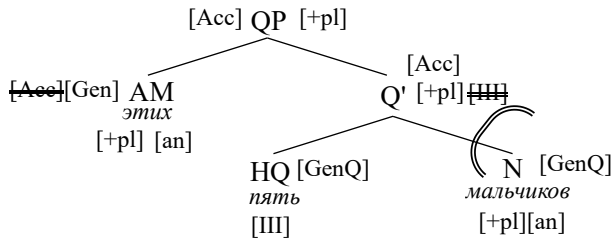
(44)(=5-47)(a)(...) убил [пять мух].
kill-PA five-nom fly-genq.pl.an
「5匹のハエを殺した」 (НКРЯ 2014.08.17)

(b) Я увидел [этих пять мальчиков].
I-nom see-PA this-gen.pl.an five-nom boy-genq.pl.an
「私はこれら5人の少年を見かけた」 (Babby 1987: 109)

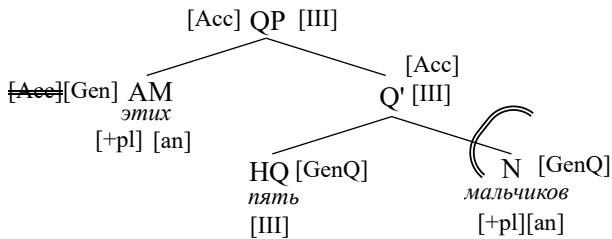
この点については(43b, c)で見たように、数素性がNからCBを越えて句節点にコピーされるされないに関係なく、有生性[an]がコピーされる節点はAMのみであり、それ以外にはないので属格化はAM以外の節点では起こりえない。

7. Nの素性にCBを越えさせる素性をめぐって

(45)(a)数が上がる場合



(b)数が上がらない場合



数が上がっても上がらなくてもいずれの場合においても、属格化が起こるための条件が揃っているのはAMのみであり、正しく言語事実が予測されている。なお、Nが無生名詞であれば違いはそのAMにおける有生性の素性[an]が[in]に変わるだけで、当然属格化は起こらない¹²。

(46) Почему же не построили эти пять заводов тридцать лет назад?
 why ever not build-pa.pl this-pl.nom five-genq factory-genq.pl thirty_years_before
 「何故これら5つの工場を30年前に作らなかったのか？」 (НКРЯ 2022.07.18)

以上、HQPの場合は、対格環境におけるQPの形態が正しく予測されている。

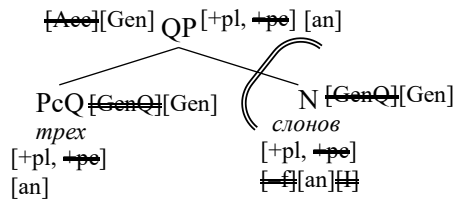
では、PcQの場合はどうであろうか。PcQPではHQPの場合と異なり、属格化が起こるとしたら句の頂点でそれが起こる。

(47)(a)(=5-31)(...) он убил [трех слонов] (...)
 he-nom kill-pa.m three-gen.an elephant-gen.pl.an
 「彼は3頭のゾウを殺した」 (НКРЯ 2022.03.27)

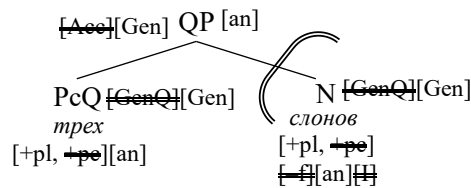
¹² Гроссにおいて *эти* に主格とあるのは(22)によって主格化が起こっているからである。このような場合にГроссで主格と記す(属格化が起こっていれば属格と記す)と言うことは5.2.1.で述べた。

7. Nの素性にCBを越えさせる素性をめぐって

(b) 数素性が上がる場合



(c) 数素性が上がらない場合



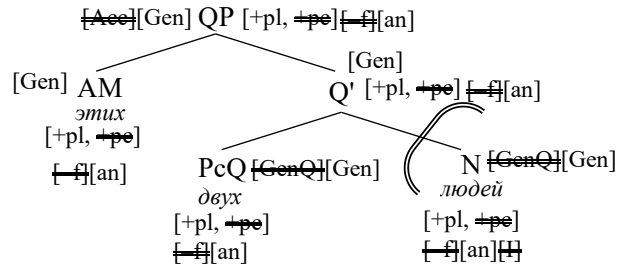
これらのうち、(b)は数素性がNからCBを越えてQPに上がっている場合、(c)は上がっていない場合である。いずれの場合でも節点QPで対格の属格化が行われること、すなわち *трех слонов* という形態が正しく予測されている。

しかし、以下の例では問題が生じる。

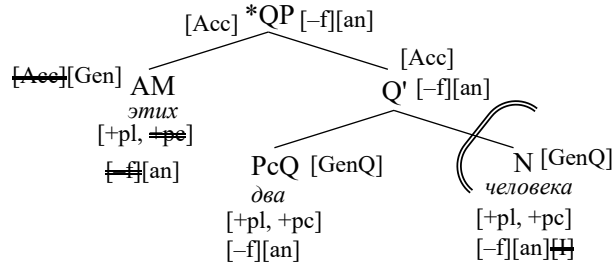
(48)(a)(=26a)

(...)я никак не мог соединить этих двух людей (...)
 I-nom by_no_means not can-pa.m unite-inf this-gen.pl.an two-gen.an person-gen.pl.an
 「私はどうしてもこれら2人を1つにできなかった」 (НКРЯ 2022.06.27)

(b)



(c)



やはり樹形図(b)はNからCBを越えて上に数が上がっている場合、(c)は上がっていない場合である。

(b)の場合は、問題無く正しく事実が予測されている。QPに[Acc]が付与されることで(20)により数が少数[+pl, +pc]から複数[+pl]に変わり、その結果(18)によって性[-f]

7. Nの素性にCBを越えさせる素性をめぐって

が削除され、(21)の属格化の条件が揃うので[Acc]が[Gen]に書き換えられる。その[Gen]は下に浸透して行き、既に[GenQ]を持つPcQとNにも問題無く上書きされる。構造格の[GenQ]よりも語彙格の[Gen]の方が優先順位が高いからである。その結果としてAM, PcQ, Nの全てが属格形となることを正しく予測しているのである。

しかしNから数素性が上に上がっていない(c)の場合は検討すべき問題が生じる。(c)の樹形図を見ると節点QPとQに数素性がないため、性素性[-f]の削除のための規則(18)の条件が揃うことはなく、[-f]は残ったままである。一方、対格の属格化規則(21)では属格化が起こる条件に性として「[m]以外がない」ことを挙げている。

(49)=(21) 対格の属格化

有生[an], かつ性として[m]以外あるいは屈折タイプとして[I]以外がなければ
[Acc] → [Gen]

ここで「[m]以外」という条件をそのまま理解すれば、「[+m, -f]以外」ということになり、(c)の[-f]は[+m, -f]以外のものと考えざるを得ない。結果としてQPでもQでも属格化が起こらないことになる(PcQから数を取ってきたAMでは起こるが)。すると、Qまで浸透してきた[Acc]は既に[GenQ]があるPcQやNにまでは降りていくことができず、結果 *два человека* という形態に変化はなく、間違った形態が可能と予測されることになる。

しかし、5.2.2.3.で見たようにPcQPの場合、頂点の節点で属格化が起こらなければならない。そのために本稿では以下の対格の属格化規則を以下の通り微修正する。

(50) 対格の属格化(ver.2)

有生[an]であり、かつ性素性[-m]も[I]以外の屈折タイプもなければ
[Acc] → [Gen]

本論文では、2.1.1.1.で示したようにロシア語の性は2つの素性の組み合わせからなり、男性が[+m, -f], 中性が[-m, -f], 女性が[-m, +f]であると考えられる。また(23)で定めたように、少数においては2つの性素性の値のうち、[±m]が消失する。従って、主格環境・対格環境にあるPcQPの場合、Nの数は少数であり、それ故性の値は[±f]しかない。結果としてPcQPの場合は頂点での属格化を妨げる性素性は存在しないことになり、(50)に従えば、期待通り頂点での属格化が行われる。上の例は男性名詞の場合だが、以下は女性名詞、中性名詞の例である。これらにおいても正しく属格化が頂点で起こることが(50)は予測している。

また、[-m]を持っているのは男性以外の中性と女性の場合だけなので、(50)によって典型的な名詞句においても男性以外の性の場合に属格化が起こらないことが正しく予測される。

7. Nの素性にCBを越えさせる素性をめぐって

(51)(a)(...)встречаю только этих двух пожилых женщин (...)
meet-pr.1.sg only this-gen.pl.an two-gen.an elderly-gen.pl.an woman-gen.pl.an
「これら2人の年輩の女性にだけ会う」 (НКРЯ 2022.07.26)

(b)(...)связывало двух лиц отношениями продавца и покупателя
tie-pa.n two-gen.an person-gen.pl.an relationship-ins.pl seller-gen.sg and buyer-gen.sg
「売り手と買い手の関係によって2人を結びつけた」 (НКРЯ 2022.07.26)

上は(a)が女性名詞の例、(b)が中性名詞の例であるが、いずれも予測通り属格化が頂点で起こっている。

また、光井 (2016: 54-55, 2018: 86-87)は総性名詞の性素性を[+m, +f]と2つの素性とも値がプラスであることを想定している¹³。本稿ではこの解釈の正否について議論することはないが、光井 (2016, 2018)の仮定が正しいと考えても(50)は対格の属格化が句の頂点で行われることを正しく予測し、光井(2016, 2018)と矛盾することはない。以下の例の *убийца*「暗殺者」と *сирота*「孤児」はいずれも総性名詞である。

(52)(a)Драгомира подслала к Людмиле двух убийц (...)
Drahomira-nom.f send-pa.f to Ludmila-dat two-gen.pl assassin-gen.pl
「ドラホミーラはルドミラのところに2人の暗殺者を送った」
(НКРЯ 2022.07.26)

(b)(...)воспитывала двух сирот (...)
foster-pa.f two-gen.pl orphan-gen.pl
「2人の孤児を育てた」 (НКРЯ 2022.07.26)

なお、屈折タイプについては、PcQが名詞の屈折タイプに関わる素性を必要としないため、性とは異なりNの屈折タイプがPcQを経由してQPやQ'に上がるということはないので、PcQPでは属格化を妨げる要因になることは無い。

7.2.4. NQをめぐる問題

ここまでPcQとHQの場合なら[+upNum]ではなく(33)によって(31)の投げかけた謎を解決してくれることを見てきた。また対格の形態法を正しく予測するために対格の属格化規則を(50)に改める必要があることも見た。しかしNQの場合、それでもいくつもの問題が生じてしまう。本稿ではそれらの問題を解決することはできず、未解決の今後の課題として残しておくことになるが、本節でそれらの問題を指摘しておきたい。

まず、NQ(とQCN)はHQやPcQと異なり、名詞としての素性を完全に持っている。

¹³ ただし、光井 (2016, 2018)では正確には[+masculine, +feminine]としているが、ここでは本稿での記法で統一した。

7. Nの素性にCBを越えさせる素性をめぐって

(53)(=2-18) NQの文法素性

数	[sg/pl]
性	[{m/f}]
有生性	[in]
タイプ	[{I/II}]
格	[ø]

このことは NQP では AM が NQ と一致することが可能であることを意味する。以下の例では NQ *тысяча*「1,000」が用いられている。

(54) Сначала, когда прошла первая тысяча лет от Рождества Христова,
 at_first when pass-pa.f first-nom.f thousand-nom.f year-gen.pl from birth-gen Christ-gen
 отпал от истинной веры Рим.
 fall_off-pa.m from true-gen.f faith-gen.f Rome-nom.m (НКРЯ 2022.07.28)
 「まずキリスト生誕から最初の 1,000 年が過ぎた頃ローマが真の信仰から離れた」

NQ *тысяча* は女性の第 2 変化でここでは単数形である。AM *первая*「最初の」も述語動詞の *прошла*「過ぎた」も NQ に従い女性形になっている。

ここで生じる疑問はいくつかある。第 1 は「AM は NQP において複数形で一致できるか」、第 2 は「NQ などの場合と同様に、AM が複数なら述語の一致も pl.3 で AM が Q に一致しているなら述語もそれに一致するのか」である。以下、これらの問題についてわかる範囲で概観する。

7.2.4.1. AMの複数での一致の可否

Ionin & Mtushansky (2018) は NQ を修飾する複数形の AM は(NQ に一致する場合と同様)以下の様に可能であると指摘している。

(55) Откуда возьмутся эти миллион / тысяча человек?
 wherefrom be-taken-3.pl this-nom.pl million-nom.m thousand-nom.f person-gen.pl
 「この 100 万/1,000 人をどこから連れてきたか?」(Ionin & Matushansky 2018: 172)

この例で AM は単数形の NQ *миллион/тысяча* に一致せず複数で一致している。しかし一方、Corbett (1979a: 74) は AM の複数での一致は不可であると明言している¹⁴。

このような AM の複数での一致を示す例は НКРЯ でも確認が取れる。試みに *этом* 「この」を NQ *миллион/тысяча* につけたものを検索すると以下の結果になった：

¹⁴ それ故、(5-55)では NQ(と QCN)は[-horNum]を持っているとした。

7. Nの素性にCBを越えさせる素性をめぐって

(56)AM+NQの例：НКРЯでの検索件数と創作年代

	検索件数	創作年代
<i>эта</i> [sg.f] тысяча	23 例	1875～2013
<i>эти</i> [pl] тысяча	4 例	1875, 1905, 1910, 1913
<i>этот</i> [sg.m] миллион	47 例	1859～2015
<i>эти</i> [pl] миллион	2 例	1916, 1928

あくまでも試みの検索結果ではあるが、(56)を見ると明らかに複数形でAMが一致している例よりも単数でNQに一致している例の方が多いことが見て取れる。以下はНКРЯで検索したAMが複数でNQに一致している例の一部である。

(57)Словно *эти* тысяча человек танцовали хорошо разученный ими
 as_if this-nom.pl thousand-nom.f person-gen.pl dance-pa.pl well learned they-ins
 балет.
 ballet

「これら1,000人はまるでよく練習したバレエを踊っていたようだった」

(НКРЯ 2021.07.12, 1905年創作)

(58)Спрашивается, равны ли были *эти* миллион миллиардов планет?
 it_raises_some_questions equal-pl whether be-pa.pl this-nom.pl million-nom.m billion-gen.pl planet-gen.pl
 「これら数1,000兆の惑星は同等なのか疑問が生じる」

(НКРЯ 2021.07.12, 1928年創作)

さらに、(56)からAMが複数で一致しているものはいずれも年代が比較的古いものばかりであることも見て取れる。いずれも20世紀前半が最も新しい例である。このことはひょっとするとAMのNQに対する複数での一致は通時的に消えつつある(あるいは既に消えてしまった)現象ととらえられるのかも知れない。

ただし、その一方でШульга(2019: 98)は同じНКРЯでの調査によって、この複数でのAMの一致は19世紀の最終四半世紀以降に見られる現象であることを指摘している。これらの観察が正しいとすれば、NQを含むQPにおけるAMの複数での一致は短い期間で現れ、そして消えた現象であるということになる。NQに対するAMが複数形で一致することの可否についてはより正確に状況を確認する必要がある。

7.2.4.2. AMの一致形態と述語の一致形態

では、仮にAMの複数での一致が可能であるとして、NQが主格主語として機能しており、複数形のAMがある場合、述語の一致はHQPやPcQPにおけるのと同様、上の(57, 58)のように複数形でなければならないのであろうか？またAMがNQに単数形で一致している場合、述語の形態は以下の(59, 60)のようにNQに一致する形態でなければならないのであろうか？これが2つめの問題である。

7. Nの素性にCBを越えさせる素性をめぐって

(59) *Эта тысяча миллиардов звезд Млечного Пути образует две крупные структуры — сферическое гало и рассекающий его по центру плоский диск (что-то вроде линзы с утолщением в центре).*
 this-nom.f thousand-nom.f billion-gen.pl star-gen.pl Milky_Way-gen form-pr.3.sg two-genq.+f
 big-nom.pl structure-nom.pl spherical-nom.n halo-nom.n and cut-ap.m it-acc along
 center-dat flat-m disk-m something like lens with bulge in center

「銀河系のこれら1兆の星々は2つの巨大な構造、すなわち球形のハローとそれを中心で分断する平らな円盤（真ん中が膨らんだレンズのようなもの）を形成している」
 (НКРЯ 2022.07.27, 2011年創作)

(60) *Там, в столице, думали все, дела пойдут лучше, ведь, что ни говори, в большом городе живет полмиллиона мальчиков и полмиллиона девочек, и почти у всех есть папы и мамы, и этот миллион детей требует каждый день миллион развлечений.*
 there in capital think-pa.pl everybody affair-nom.pl go-pr better because whatever_you_say
 in big city live-pr.3.sg half_a_million boy-gen.pl and half_a_million girl-gen.pl
 and almost at everybody be-pr dad-pl and mom-pl and this-nom.m million-nom.m kid-gen.pl
 require-pr.3.sg every day million amusement-gen.pl

「首都では状況はより良くなるとみんな思っていた。だって何しろ大都市には50万の少年と少女が暮らしておりかれらのほぼ全てに両親がいるし、これら100万の子供たちが毎日100万の娯楽を求めているのだ」

(НКРЯ 2022.07.27, 2007年創作)

上で提案した(33)に従えばAMが複数なら(57, 58)のように述語も複数すなわちpl.3の形態に、AMがNQに一致し単数なら(59, 60)のように述語もNQに一致し単数になるはずである。このことに関して、Шульга (2019: 98)はAMが複数形になっている例では述語も複数形であるとしている。

さらに上記(56)の検索を行った際に、同時に述語の形態も確認した結果が以下の通りである¹⁵：

(61)AMの形態と述語の形態

	全検索件数	うち Pred[sg]	うち Pred[pl]
<i>эта</i> [sg.f] тысяча	23 例	15 例	1 例
<i>эти</i> [pl] тысяча	4 例	0 例	4 例
<i>этот</i> [sg.m] миллион	47 例	16 例	0 例
<i>эти</i> [pl] миллион	2 例	0 例	2 例

これらの結果を見ると *эта тысяча* と単数のAMの例で述語が複数になっている例が一つだけ見られているが、それ以外ではAMが単数なら述語も単数、AMが複数なら

¹⁵ 「全検索件数」はNQPが主格主語として一致する述語を従えている例ばかりではない。それ故Pred[sg]とPred[pl]の和が全検索件数になるとは限らない。

7. Nの素性にCBを越えさせる素性をめぐって

述語も複数, という関係が見られる.

なお, 例外的な例は以下のものである:

(62) Когда Ромео грезит наяву, прикованный взором к такой же юной красоте, —
 when Romeo daydream-pr.3.sg chained-m glance-ins to such emph young beauty
 вся эта тысяча мужчин и влюбленных в артиста дам в зале
 all-nom.f this-nom.f thousand-nom.f man-gen.pl and in_love-gen.pl to artist lady-gen.pl in hall
 переживают самое сладкое состояние на земле.
 live-pr.3.pl most sweet condition on earth

「ロミオがその若い美しさに視線が釘付けになり夢うつつでいるとき, 1,000 人
 全ての男性とそのアーティストに恋する婦人たちは地上で最も甘い状況を過
 ぎしていた」 (НКРЯ 2022.07.27, 創作 1903 年)

この場合, NQ тысяча に一致する 2 つの単数形の AM を持つ NQP вся эта тысяча
 мужчин и влюбленных в артиста дам「1,000 人全ての男性とそのアーティストに恋す
 る婦人たち」が主語でそれに pl.3 の переживают「過ごしている」が述語として働いて
 いるとおもわれるが, AM は単数, 述語は複数となっている. この例は(33)での提案
 では説明がつかない例外であるように見える.

しかし, 多くの先行研究(例えば Crockett 1976, Кохтев и Розенталь 1984, Розенталь
 ред. 1984, 匹田 1995, Timberlake 2004, 匹田 2011 など参照)において 2 つあるいはそれ
 以上の単数形の名詞による等位接続構造が主語の場合, 述語は複数形あるいは等位
 接続構造を成す要素の片方だけに一致して単数形の両方が可能であることが指摘さ
 れている. 以下の例で述語は(a)では複数形で, (b)では単数形で一致している.

(63)(a) Зима, весна и дождливое лето прошли в боях.
 winter-nom.f spring-nom.f and rainy-nom.n summer-nom.n pass-pa.pl in battle-pl
 「冬, 春, そして雨がちの夏が戦いの中で過ぎた」 (Розенталь ред. 1984: 560)

(b) Пропала контурность, выпуклость земных предметов.
 disappear-pa.f contour-nom.f clearness-nom.f earthly-gen.pl object-gen.pl
 「地上にあるものの輪郭と明瞭さが消えた」 (Розенталь ред. 1984: 560)

ここで注意すべきは(62)の主語名詞句の内部では[мужчин]と[влюбленных в артиста
 дам]が等位接続している. このことが述語の形態に関わっているのか, あるいは(62)
 がある種の破格, あるいは間違いなのか, 今後正確に実態を把握する必要があるこ
 とは間違いない.

また, 単数の AM で複数の述語となる例は QCNP にも見られる. 一般に QCN は複
 数形の AM は取らないと思われるが¹⁶, 単数の AM が存在する場合でも以下の様な例
 において述語の複数の一致がしばしば見られる.

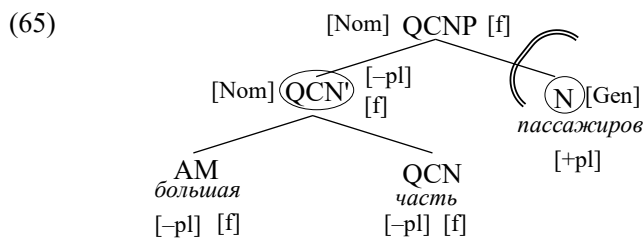
¹⁶ (5-55)ではこの前提に立ち QCN は[-horNum]を持っているとした.

7. N の素性に CB を越えさせる素性をめぐって

- (64)(a) Начнем с того, что абсолютное большинство россиян живут
begin-pr.1.pl from it that absolute-nom.n majority Russian-gen.pl live-pr.3.pl
в двадцать первом веке в условиях постоянных стрессовых ситуаций.
in twenty_first century in condition constant stressful situation
「絶対的多数のロシア人が21世紀において恒常的にストレスがある条件で暮
らしているということから始めよう」 (НКРЯ 2022.08.01, 創作 2015 年)
- (b) Подавляющее большинство немцев верили фюреру и разделяют
overwhelming-nom.n majority-nom.n German-gen.pl believe-pa.pl Fuhrer-dat and share-pr.3.pl
ответственность за его преступления.
responsibility for his crime
「圧倒的多数のドイツ人は総統を信じ、彼の犯罪の責任を共有している」
(НКРЯ 2022.08.01, 創作 2017 年)
- (c) Чудо, что большая часть пассажиров уцелели.
miracle that larger-nom.f part-nom.f passenger-gen.pl survive
「大部分の乗客が無事だったのは奇跡だ」 (НКРЯ 2022.08.01, 創作 2011 年)

これらの例ではいずれも QCN に一致する単数形の AM が伴っているが、いずれも述語は複数形である。このような例はコーパス上でも比較的頻繁に見られ、何らかのミスが紛れ込んだだけとは考えにくい。従って、(33)では説明ができない例であることになる。

現時点でこれらがなぜ述語に pl.3 での一致を認めるのかに答えを示すことはできないが、абсолютное большинство「絶対的多数」、подавляющее большинство「圧倒的多数」、большая часть「大部分」は AM と QCN の結びつきが強く、ひょっとすると AM+QCN がまず結びつき、それ全体が N と結びついている可能性は検討する価値があるかも知れない。そうすれば、述語の一致を担う範疇に最も近く c 統御されるのは AM だけではなくるのである。



上図は N から数[+pl]が QCNP に上がっていない場合だが、QCNP に[+pl]が上がれば [f]が消え、QCNP が Ctrl に指定されることになる。

しかし、これは今後検討すべき仮説の一つに過ぎない。まず言語事実を正しく整理した上で様々な方向から検討する必要がある。また、QCN や NQ において Q 自身の数と N の数のどちらが上方向にコピーされるのか、そのメカニズムを慎重に検討する必要がある。いずれも今後の課題としたい。

7. Nの素性にCBを越えさせる素性をめぐって

7.3. 本章のまとめ

以上、本章では 5. で提案したそれぞれの Q が持つとした以下の素性をより簡略化することを目指し理論の整備を行った。これらによって記述的に一定の成果が得られたものの、いかにも煩雑である。

(66)(=1)

	1	PcQ		HQ		NQ		QCN
		2	3	5	100	1,000	100	
Nの素性の CBを越えた コピー	(iii) upNum	/	+	+	+	+	+	+
	(iv) horNum	/	+	+	+	+	-	-
	(v) horGend	/	+	-	-	-	-	-
	(vi) upAni	/	+	+	-	-	-	-
	(vii) horAni	/	+	+	+	+	-	-
	(viii) setCtrl	/	+	+	+	+	+	+

まず 7.1. では CB を越える N からの横方向の素性のコピーについては素性の受け手、すなわち一致の *controlee* の持っている空のロットによって決まるものであることを指摘した。それぞれの Q が持つ素性とそのロットはここまでの議論で以下の通りと考えている：

(67)(=6-72)

	1	PcQ		HQ		NQ	QCN
		2	3, 4	5~	100		
数	[\emptyset]	[(\emptyset), (\emptyset)]	[(\emptyset), (\emptyset)]	×	×	[sg/pl]	[sg/pl]
性	[\emptyset]	[\emptyset]	×	×	×	[m], [f]	[m], [n], [f]
有生性	[\emptyset]	[\emptyset]	[\emptyset]	×	×	[in]	[in]
タイプ	×	×	×	[III]	[IV]	[I], [II]	[I], [II], [III]
格	[\emptyset]	[GenQ]	[GenQ]	[GenQ]	[GenQ]	[\emptyset]	[\emptyset]

すなわち QP 内の一致に関しては、空のロットが探索子となり目標を探すという理解に加えて以下の規定があればいくつかの素性が不要になる。

(68)(=8)QP において探索子は Q による格付与で形成される CB の下でも必要なら目標を探すことができる。

これによって、[\pm horNum], [\pm horGend], [\pm horAni] と同じ効果が得られる。

さらに、7.1.2. では全ての素性を Q を経由させれば上方向についても [\pm upNum] 以外は不要であるとし、7.2. では QP を主語とする述語の一致の問題を考慮に入れてそのことを確認した上で [\pm upNum] の代わりに以下を提案することで多くが説明できることを示した。

(69)(=33) [\pm upNum] に換わる提案

- (a) QP において N から CB を越えた上方向の数素性のコピーは選択的に行われ、その代わりに Q から数素性が上方向にコピーされることはない。

7. Nの素性にCBを越えさせる素性をめぐって

- (b) 述語の一致の Ctrl の指定の際も AM の探索子同様、最も近く c 統御するものを Ctrl として指定する。

これによって、述語の一致のバリエーションが2つあるいは3つあることも正しく説明できるだけでなく、以下の例が投げかける疑問についても正しく答えられる。

(70)(=31) Эти пять красивых девушек пришли/ *пришло.
this-nom.pl five-genq beautiful-genq.pl girl-genq.pl come-pa.pl come-pa.n
「これら5人の美しい娘がやってきた」 (Franks 1995: 100)

つまり、QP に複数形で一致する AM があると、述語の一致が pl.3 のみに限られるという問題が上の提案で説明をつけることができた。

ただし、上の提案で説明が完全にできるのは PcQ や HQ までで、NQ や QCN の場合は、実際の言語現実の把握も含め、様々な問題が生じる。7.2.4.ではそれらの問題を指摘し、整理し、解決は今後の課題として残した。

8. 典型から逸脱する性の一致

8. 典型から逸脱する性の一致

人間、とりわけ職業や肩書、身分、社会的役割などを表すロシア語の名詞はしばしば男性名詞でも女性の人物を指示することが可能である。例えば、*врач*「医師」などはこの類の名詞の例としてしばしば挙げられるが、これらは単に女性の人物を指示するだけでなく文法的に女性での一致を引き起こすことも可能である。

(1) Врач *пришла* / *пришел*.
doctor-nom.m come-pa.f come-pa.m
「医師がやってきた」 (Шведова и др. 1980: II: 245)

この例は女性の医師を示している場合であるが、述語動詞の形態が女性形でも男性形でも可能である¹。ただし、これらはいわゆる総性名詞 (*существительное общего рода*) ではないこともしばしば指摘されており²、総性名詞とは異なる奇妙な振る舞いを示す。

本章ではここまで組み立ててきた理論体系でこのような男性名詞のふるまいも説明できるように理論に追加・改訂を行う。以下、8.1.ではその非典型的な振る舞いを概説し、8.2.ではこの問題に取り組んだ光井 (2018a)らの先行研究による記述と提案を概観する。

8.1. 性の一致についての非典型的ふるまい

Corbett (1979b)や Pesetsky (2013)あるいは光井による一連の研究(光井 2014a, 2015, 2016, 2018a, 2018b など)は、名詞句内の AM やその名詞句を主語とする述語の性の一致がしばしば1つに決まらずバリエーションが見られることを指摘している。上述のような職業や身分などを表す男性名詞が女性を指示する場合、一致が女性で起こることがあり、かつ男性での一致と女性での一致が混在することすら可能であることが指摘されている。以下の例では *врач*「医師」が女性を指示している場合である。女性形で一致しているものはイタリックで示す。

¹ このような男性名詞に例えばどのようなものがあるかは、Граудина и др. (1976: 98-99)にリストがある。

² その具体的な根拠については例えば、Шведова и др. (1980: I: 468), Милославский (1988: 11-13), 油家 (2007)などを参照。また、*общий род* の日本語訳として色々なものが混在しており、未だ定訳があるとは言えない状況である。例えば、八杉 (1939), 和久利 (1961), 城田 (2010)は「総性」を用い、宇多 (2009)は「両性」、油家 (2007)は「共通性」、山口 (1970, 2005)は「通性」としている。なお、日本ロシア文学会用語委員会 (1996)には「両性」とあり、それに加えて「総性」が「使用を避けるべき用語」とされている。本稿では「総性」を用いることとする。

8. 典型から逸脱する性の一致

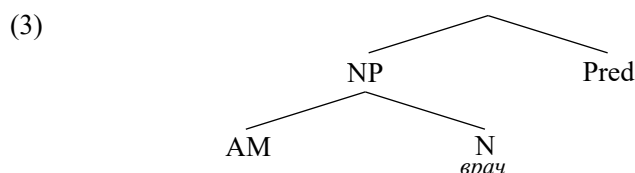
- (2)(a) Новый врач сказал.
 new-nom.m doctor-nom.m say-pa.m
 (b) Новый врач сказала.
 new-nom.m doctor-nom.m say-pa.f
 (c) Новая врач сказала.
 new-nom.f doctor-nom.m say-pa.f
 (d) *Новая врач сказал.
 new-nom.f doctor-nom.m say-pa.m

「新しい医師が言った」

(いずれも Corbett 1979b: 221)

この例で(a)は AM も述語動詞もいずれも男性形で一致している。(c)は逆に AM も述語もいずれとも女性形で、(b)と(d)では男女の一致形態が1つの文中に混在している。ちなみに、この例における男性形で的一致は語の文法特徴によって決まっているものであり「統語的一致 (syntactic agreement)」, 女性形で的一致は実際に指示している意味内容によって決まると言うことで「意味的一致 (semantic agreement)」と Corbett (1997b, 1983)などが呼びしばしば区別される³。

ここで注目すべきは男女の形態が混在する(b, d)の場合, AM が男性で述語が女性の場合の(b)は適格だが, AM が女性で述語が男性の(d)は非文であるということである。この非対称性を説明するために, Corbett (1979b, 1983)は「統語的距離 (syntactic distance)」による説明を試みている。すなわち, 名詞 *врач* から AM と述語では AM の方が統語的により近い位置にあり, 述語の方がより遠い位置にあると考え, より遠いものほど意味的一致を行いやすい, あるいは意味的一致の優先順位が高いと考える⁴。この文の構造が概略以下の様なものであると考えれば, この考え方は直感的には受け入れ安いものであると思われる。



つまり, N からより遠い述語が意味的一致を行いより近い AM が統語的一致を行って

³ 統語的一致は他にも「文法的一致 (grammatical agreement, грамматическое согласование)」(Comrie and Stone 1978, Розенталь 1998 など), 「形式的一致 (formal agreement)」(Corbett 2006 など)とも呼ばれるが, いずれも「意味的一致」と対立する概念である。なお, QP を主語とした場合の述語の n.sg.3 での一致が「統語的一致」, pl.3 での一致が「意味的一致」としばしば呼ばれる。

⁴ Corbett (1979: 204, 1983: 10)は AM と述語だけでなく, 関係代名詞 (relative pronoun) と人称代名詞 (personal pronoun) についても説明の対象として, 以下のような「一致の階層 (agreement hierarchy)」を提示している。

(i) attributive – predicate – relative pronoun – personal pronoun.

本稿では関係代名詞と人称代名詞については議論の対象外として今後の課題とする。

8. 典型から逸脱する性の一致

いる(b)は優先順位の点から問題ないが、より近い AM が意味的一致を起こしより遠い述語が統語的一致を行っている(d)は認められない。

しかし、光井 (2014a: 43)も指摘するように、Corbett (1979b, 1983)は「統語的距離」という概念に厳密な定義を与えていない。それに対して Pesetsky (2013)は Ж という「ゼロ形態素」を想定することでこの問題を形式的に説明しようと試みている。Pesetsky (2013: 39)は Ж について以下の様にまとめている。

(4)

(a) An optional null morpheme Ж ‘female’ may be merged at any point above a certain structural threshold within NP. Low adjectives fall below this threshold.

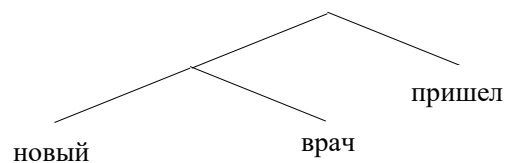
(b) Once Ж merges, the nominal counts as feminine for agreement purposes from then on.

「(a)選択的なゼロ形態素 Ж‘女性’は NP 内の特定の境界 (threshold)の上のいかなる点にも併合することができる。「低い形容詞 (low adjectives)」はこの境界の下にある。

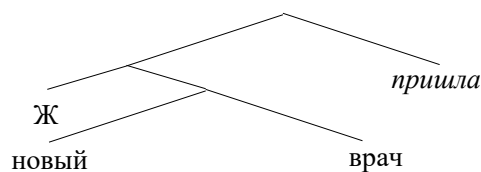
「(b)Ж が併合されるとその名詞 (the nominal)はそれ以降一致にとって女性であると見なされる。」

すなわち、以下の様に Ж がどこに併合するかによって、そこより「上」(あるいは「外」?)ではその名詞が一致上は女性扱いされると考える。

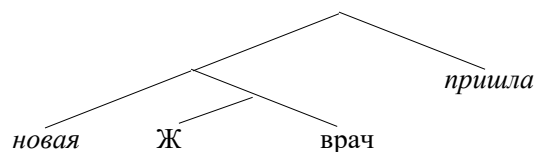
(5)(a)



(b)



(c)



この例で、(a)は Ж が併合されていないので、AM も述語も統語的一致、すなわち男性形で一致している。それに対して(b)では NP [новый врач]のすぐ上に Ж が併合されており、それより下にある AM は男性形で、それより上にある述語のみ女性形になっている。また(c)では、Ж が врач のすぐ上に併合されており、それより上にある

8. 典型から逸脱する性の一致

AM, 述語のいずれも女性形で一致している。当然のことながら, AM が女性で述語が男性というパターンはこの考え方で排除できることになる。

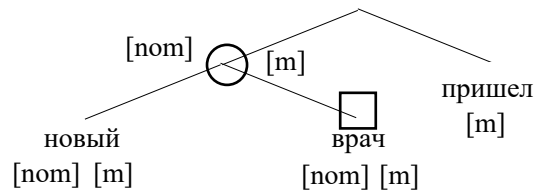
ちなみに, この考え方は 7.2.3.1.で提案した以下の考え方, とりわけ(b)と親和性が高い。

(6)(=7-33) [±upNum]に代わる提案

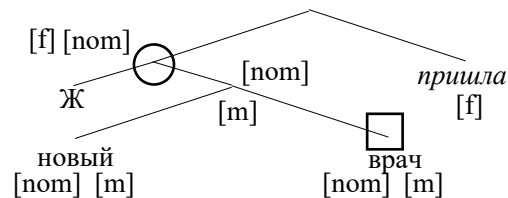
- (a) N から CB を越えた上方向の数素性のコピーは選択的に行われ, その代わり Q から数素性が上方向にコピーされることはない。
- (b) 述語の一致の Ctrl の指定の際も AM の探索子同様, 最も近く c 統御するものを Ctrl として指定する。

すなわち, (b)によって一致の Ctrl に指定されるのは最も近く c 統御するものと考えているので, Жがあれば必然的に Жより高い位置にある節点が一一致の Ctrl に指定されるはずである。

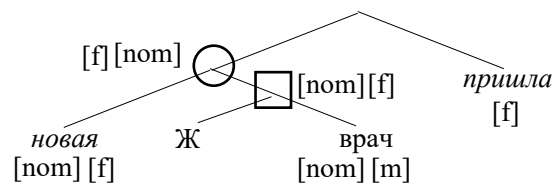
(7)(a)



(b)



(c)



この樹形図で, ○で囲んだ節点が述語動詞(あるいは述語の一致を担う何らかの要素)がもっとも近く c 統御する, すなわち述語の一致の Ctrl になる節点, □で囲んだ節点が AM が最も近く c 統御する, すなわち AM の一致の Ctrl になる節点であり, 正しく AM と述語の一致形態を予測している。3.での議論のように「指定できる節点ならどの節点でも一致の Ctrl に指定できる」という考え方で, 7.で提案した(6b)の規定がなければ, 実際には指定される述語の一致の Ctrl が Жより下の節点ではあり得ないとい

8. 典型から逸脱する性の一致

うことを何らかの方法で別途規定する必要があった。

このように Corbett (1979b, 1983)とそれを受けた Pesetsky (2013)の提案は明快に性に関する意味的一致のパターンを説明していると言え、光井 (2018a)も匹田 (2018)も(4)を採用している。しかし、それでも説明できない現象があることを光井 (2018a)は数多く指摘し、そこから新たな理論を構築している。次節 8.2.では光井 (2018a)の記述と理論の全体像を概観する。

8.2. 光井 (2018a)らによる記述と説明

Pesetsky (2013)の説明は少なくとも AM と述語の性に関わる意味的一致に関してはその奇妙な非対称性を正しく説明していると言える。しかし、光井 (2018a)はこれだけでは説明しきれない現象が観察されることを指摘する。光井 (2018a)は以下のように、同じ女性を指示することが可能な男性名詞でも第1変化名詞、第2変化名詞、不変化名詞では女性での意味的一致に関わる振る舞いが異なっており、また主格とそれ以外の格では振る舞いが異なっていることを指摘する。以下の例はいずれも女性が指示対象の場合である。

まず、次の例は第1変化の男性名詞では主格とそれ以外の格形態では振る舞いが異なる。すなわち主格だと一致する AM が女性形になることは可能だが、それ以外の格ではそれが不可能である⁵。

(8)第1変化の男性名詞

(a)主格環境

наша врач
our-nom.f doctor-nom.m.I

「我々の医師が」

(Шведова и др. 1980: I 468)

(b)斜格環境

*с *нашей врачом*
with our-ins.f doctor-ins.m.I

「我々の医師と」

(Шведова и др. 1980: I 468)

しかし、第2変化の男性名詞⁶だと主格だけでなく斜格でも AM が女性形になることは可能である。

⁵ 光井 (2018a)は主格以外の格を「斜格」と呼んでいる。6.で用いた「斜格」とは微妙に異なるが、本節では以下主格以外の格を光井 (2018a)に従い「斜格」とする。なお主格の場合は AM だけでなく述語の一致も女性形が可能ということになる。それ以外の格では述語と一致することはないので述語は無関係である。

⁶ これは第2変化の男性名詞の中でも指示対象の自然性に言及のない“asexual”な名詞だけの話で、*папа*「お父さん」、*дядя*「おじさん」、*мужчина*「男性」など指示対象の性が語義に含まれる第2変化名詞は女性を指示することができないのでここでは無関係である。ちなみに *принц*「王子」のような第

8. 典型から逸脱する性の一致

(9) 第2変化の男性名詞

(a) 主格環境

Дело *рассматривала* *районная* *судья*
case examine-pa.f districtual-nom.f judge-nom.m.II
「事件を審査したのは地区の判事だった」 (Шведова и др. 1980: II 245)

(b) 斜格環境

Я *нашла* *сорокалетнюю* *судью*.
I-nom. find-pa.f forty_year_old-nom.f judge-nom.m.II
「私は40歳の裁判官を見つけた」 (Граудина и др. 2001: 134)

不変化の男性名詞でもやはり同様に主格だけでなく斜格でも AM が女性形になることが可能である。

(10) 不変化の男性名詞

(a) 主格環境

наша *конференсье*
our-nom.f conferencier-nom.m.indc
「我々の司会者」 (光井 2018a: 2)

(b) 斜格環境

Я *видела* *нашу* *конференсье*.
I-nom. see-pa.f our-acc.f conferencier-acc.m.indc
「私は我々の司会者を見かけた」 (光井 2018a: 4)

さらに、PcQ の一つである *оба*「両方の」は主格・対格環境以外でも、[±f] だけではあるが、性の形態的対立を有する唯一の数量詞である⁷。これは主格では女性形になることはできないが、斜格ではそれが可能になる。これは通常の AM とは逆の振る舞いを見せていることになる。

(11) *оба*「両方」を伴う第1変化の男性名詞

(a) 主格環境

**обе* *врача*
both-nom.+f doctor-genq.pc.m.I
「両方の医師」 (Pesetsky 2013: 42)

(b) 斜格環境

к *обеим* *врачам*
to both-dat.+f doctor-dat.pl

¹ 変化の場合も同様である。

⁷ 同じ PcQ でも *два*「2」は主格・対格環境以外で性を形態的に区別することはない。主格・対格環境以外で性を区別する PcQ は *оба* のみであり、その点でこの語は極めて特殊なものであることがわかる。この問題は 10. であらためて言及する。

8. 典型から逸脱する性の一致

「両方の医師の方へ」 (光井 2018a: 6)

PcQ *оба* と第 2 変化の男性名詞を組み合わせると、主格・斜格のいずれの環境でも *оба* は女性形になることが可能である。

(12) *оба*「両方」を伴う第 2 変化の男性名詞

(a) 主格環境

обе *судьи*
both-nom.+f judge-genq.pc.m.pl

「両方の医師が」 (光井 2018a: 5)

(b) 斜格環境

обеих *судей*
both-gen.+f judge-gen.pl

「両方の医師の」 (光井 2018a: 5)

また、不変化の男性名詞と結合すると *оба* はやはり主格環境、斜格環境ともに形態的に性の区別を行い女性形となることが可能である。

(13) *оба*「両方」を伴う不変化の男性名詞

(a) 主格

обе *конференсье*
both-nom.+f conferencier-genq.pauc.m.indc

「両方の司会者が」 (光井 2018a: 5)

(b) 斜格

с *обеими* *конференсье*
with both-ins.+f conferencier-ins.indc

「両方の司会者とともに」 (光井 2018a: 5)

以上の様に、同じ男性名詞でも女性形で一致することが可能な場合とそうでない場合があり、その可否には奇妙な規則性があるということがわかる。少なくとも Pesetsky (2013) の提案した Ж だけでは到底説明がつかない事実が広がっていることを光井 (2018a) は明らかにした。

光井 (2018a) は男性名詞が指示対象の自然性によって女性の一致を引き起こすことが不可能な場合は、Ж が「非活性化」していると考えた。その上で Ж が非活性化するためには一致の「コントローラー」となる名詞に以下の条件が全て揃う必要があるとした⁸：

⁸ 性の素性の表記法は光井 (2018a) のもの ([±masculine, ±feminine]) から本稿でのものに改めてある。また、光井 (2018a) での「コントローラー」とはこの場合なら当該の男性名詞のことであるが、光井 (2018a) はこのような条件が句節点を含めたそれぞれの節点でなく名詞で揃うことを条件としている。本稿との大きな違いである。

8. 典型から逸脱する性の一致

(14)Жが非活性化される条件：

性[+m, -f], 屈折タイプ[I], 数[+sg], 格[OBL] (光井 2018a: 90)

さらに、この非活性化の条件が正しく機能するために、光井 (2018a)はロシア語の数と性の素性のあり方を以下の通り想定する⁹：

(15) (a)単数は[+sg, -pl], 複数は[-sg, +pl], 少数は[+sg, +pl] (光井 2018a: 87)

(b)男性は[+m, -f], 女性は[-m, +f], 中性は[-m, -f], 総性は[+m, +f] (光井 2018a: 87)

Жの非活性化の条件(14)に従うと、(8)~(13)の例のうち、第2変化と不変化の男性名詞の場合(すなわち9, 10, 12, 13)では主格、斜格のいずれでも女性扱いが可能だと言うことが正しく予測できる。いずれの場合でも屈折タイプ[I]がないため、Жの非活性化が起こらないからである。

また、第1変化の男性名詞の場合、(8a, b)での女性扱いの可否も格の違いによって正しく予想されている。すなわち(a)では格[OBL]がないのでЖの非活性化が妨げられるので女性扱いが可能だが、(b)では[OBL](この場合は[Ins])があるためЖの非活性化が起こり、結果として女性での一致が不可能になる。

また、*оба*が第1変化の男性名詞を伴っている主格の(11a)で女性扱いが不可能であることも正しく予測されている。条件となる性[+m, -f], 屈折タイプ[I], 数[+sg], 格[OBL]が全て揃っているため非活性化が起こっているからである。

一方、斜格の(11b)では、性[+m, -f], 屈折タイプ[I], 数[+sg], 格[OBL]という条件が全て揃っているにもかかわらず女性扱いが可能、つまりЖの非活性化が起こっていない。この問題を処理するために光井(2018a: 97)は以下の様な数素性の書換規則を提案する¹⁰：

(16)数量属格[GenQ]が語彙格に変わると[+sg]の素性が[-sg]に書き換わる

これによって数[+sg]が[-sg]に書き換えられることでЖの非活性化のための条件が一つ欠けてしまい、結果として*обем*の女性形での一致が可能になる。

ちなみに、これはすなわち数量属格に語彙格が上書きされると¹¹少数が複数に書き換えられる、と言うことであり、名詞の形態にも現れていることである。また、本稿で提案している以下の規則と主旨は同じであると言えよう。

⁹ 数の素性のあり方は本稿とは大きく異なる。性については総性名詞が考慮に入れられている点、少数でも[±f]のみにならない点が本稿との違いである。本稿は総性名詞を議論の対象としていないが、光井 (2018a)の総性は[+m, +f]であるとしている。この点は今後の課題である。

¹⁰ 格の表記法のみ本稿の方式に改めてある。

¹¹ 光井 (2018a)も本稿同様に格の浸透と格の上書きを想定している。

8. 典型から逸脱する性の一致

(17)(=4-90) 数量属格以外での少数の複数化

[GenQ]以外の格が与えられると $[\text{num } (\pm\text{pl } x), (\pm\text{pc } y)] \rightarrow [(\pm\text{pl } x)]$

ただし、本稿での数の書き換え規則は[GenQ]以外で適用されるが、光井 (2018a)では「語彙格」の場合適用される点異なる。

以上、光井 (2018a)の記述と説明のための提案を概観した。光井 (2018a)とそれに先行する一連の研究はとりわけ言語事実の記述面において多大な貢献をしたことは間違いない。ただし、本稿とは説明しようとする研究の対象・範囲に違いがあり、それ故これまでに本稿の議論の中で提案してきた規則や素性のあり方などとの相違が目立つ。

本章の次節 8.3.では光井 (2018a)の成果を本稿の枠組みに取り込むために理論の整備・修正を検討する。

8.3. 理論的整備

Pesetsky (2013)のゼロ形態素 \mathcal{K} の提案(4)およびそれにさらに強い説明力を持たせるための光井 (2018a)の \mathcal{K} の非活性化の提案(14)によって記述的にも理論的にも大きな成果が得られたことは間違いないだろう。しかし、光井 (2018a)は本論文と異なる研究対象と理論的前提を持って議論を展開しており、本論文で提示されている体系の中に組み込むためにはそれなりの修正が必要である。以下の各節では Pesetsky (2013)と光井 (2018a)の成果を本稿の体系に取り込むための議論を行う。まず 8.3.1.で Pesetsky (2013)と光井 (2018a)の提案及び本稿でこれまでに提案してきた規則等を全てまとめて確認する。続いて 8.3.2.で本稿での新しい提案を示した上でその提案の是非を具体例に当てはめることで確認する。

8.3.1. これまでの確認

この後の議論を始める前に、まずここまでに出てきた Pesetsky (2013)、光井 (2018a)の提案、及び本稿でこれまでの議論において提案された規則や素性のあり方などをまとめて確認する。

まず Pesetsky (2013)におけるゼロ形態素 \mathcal{K} の提案である。

(18)(=4) Pesetsky (2013: 39)のゼロ形態素 \mathcal{K}

(a) An optional null morpheme \mathcal{K} ‘female’ may be merged at any point above a certain structural threshold within NP. Low adjectives fall below this threshold.

(b) Once \mathcal{K} merges, the nominal counts as feminine for agreement purposes from then on.

「(a)選択的なゼロ形態素 \mathcal{K} ‘女性’は NP 内の特定の境界 (threshold)の上のいかなる点にも併合することができる。「低い形容詞 (low adjectives)」はこの境界の下にある。

8. 典型から逸脱する性の一致

(b)ㄨ が併合されるとその名詞はそれ以降一致にとって女性であると見なされる。」

続いて、光井 (2018a)による ㄨ が非活性化されるための条件は以下の通りである。

(19)(=14)光井 (2018a: 90)の ㄨ が非活性化される条件：

性[+m, -f], 屈折タイプ[I], 数[+sg], 格[OBL]

光井 (2018a)はこの非活性化の条件が正しく言語事実を予測するための前提として数と性の素性を以下の通りとしている：

(20)(=15)光井 (2018a)における数と性の素性

(a)単数は[+sg, -pl], 複数は[-sg, +pl], 少数は[+sg, +pl] (光井 2018a: 87)

(b)男性は[+m, -f], 女性は[-m, +f], 中性は[-m, -f], 総性は[+m, +f] (光井 2018a: 87)

また、光井 (2018a)は以下の数の書き換え規則を提案している。

(21)(=16)光井 (2018a: 97)の数の書き換え規則

数量属格[GenQ]が語彙格に変わると[+sg]の素性が[-sg]に書き換わる

さらに、本稿のここまでの議論で以下の削除規則と書き換え規則が提案されてきた。

(22)(=2-70) 複数における性の削除

[gender x] → ∅, if [pl]

(23)(=2-80) 複数における屈折タイプの削除

[DecType x] → ∅, if [pl]

(24)(=7-23) 少数における性の素性の削除

[gender ±m, ±f] → [gender ∅, ±f], if [pc]

(25)(=4-90) 数量属格以外での少数の複数化

[GenQ]以外の格が与えられると [num (±pl x), (±pc y)] → [(±pl x)]

(26)(=7-50) 対格の属格化(ver.2)

有生[an]であり、かつ性素性[-m]も[I]以外の屈折タイプもなければ

[Acc] → [Gen]

(27)(=5-81) 対格の主格化

対格に固有の形態がなければ[Acc] → [Nom]

これに加えて、前章 7.では以下を提案した。

(28)(=7-8)QP において探索子は Q による格付与で形成される CB の下でも必要なら目標を探すことができる。

8. 典型から逸脱する性の一致

(29)(=7-33) [\pm upNum]に代わる提案

- (a) N から CB を越えた上方向の数素性のコピーは選択的に行われ、その代わり Q から数素性が上方向にコピーされることはない。
- (b) 述語の一致の Ctrl の指定の際も AM の探索子同様、最も近く c 統御するものを Ctrl として指定する。

また、これまでの議論でロシア語の Q は以下の素性と素性のスロットを持っていると考えられる。

(30)(=6-72)

	1	PcQ		HQ		NQ	QCN
		2	3, 4	5~	100		
数	[(\emptyset), (\emptyset)]	[(\emptyset), (\emptyset)]	[(\emptyset), (\emptyset)]	×	×	[sg/pl]	[sg/pl]
性	[(\emptyset), (\emptyset)]	[\emptyset]	×	×	×	[m], [f]	[m], [n], [f]
有生性	[\emptyset]	[\emptyset]	[\emptyset]	×	×	[in]	[in]
タイプ	×	×	×	[III]	[IV]	[I], [II]	[I], [II], [III]
格	[\emptyset]	[GenQ]	[GenQ]	[GenQ]	[GenQ]	[\emptyset]	[\emptyset]

さらに、ロシア語の数と性の素性は以下の通り複数の値の組み合わせからなると考える。

(31)(=4-51)[sg] = [-pl]; [pl] = [+pl]; [pc] = [+pl, +pc]

(32)(=4-54)男性 = [-f, +m]; 中性 = [-f, -m]; 女性 = [-m, +f]

光井 (2018a) と本稿の違いのうち、光井 (2018a) が明確に示している点としてはまず、(15)にあるように数素性が [\pm sg, \pm pl] の組み合わせで表現されているのに対して、本稿では(31)のように、 [\pm pl, \pm pc] の組み合わせで表されている点、さらに光井 (2018a) は(21)で述べられているように、「数量属格[GenQ]が語彙格に変わると」少数[+pl, +sg]が複数[+pl, -sg]に変わるとしているが、本稿では少数の複数化規則(25)にあるように「数量属格以外」で少数は複数に書き換えられるとしている。つまり、光井 (2018a) は主格と対格になっても少数の複数化は起こらないし、また数量属格から語彙格への格の上書きが起こらなければ、つまり最初に付与された格が語彙格だった場合は少数の複数化は起こらないということになる。

本稿での少数の複数化と光井 (2018a) のそれは、恐らくほぼ同様の主旨の規則であると思われるが、厳密な定式化に関しては詰める必要があるだろう。

次節からの議論は以上を出発点として展開する。

8.3.2. 意味的一致に関わる新しい提案

本節では Pesetsky (2013) のゼロ形態素 \mathcal{K} と光井 (2018a) の \mathcal{K} の非活性化を本稿の体系に取り込むための方法を検討する。

8. 典型から逸脱する性の一致

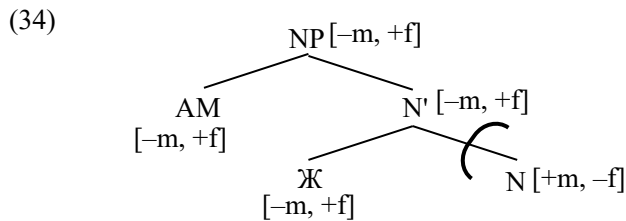
8.3.2.1. Pesetsky (2013)のЖについて

まず第一に、本稿では基本的に Pesetsky (2013)のゼロ形態素 Жを採用するが、(18)のままだと本稿での議論に組み込みづらい点もあるので、以下のように改めることとする。ただし、表現が変わっただけであって、その主旨自体は全く変更がない。

(33)ゼロ形態素 Жの再定義

- (a) Жは名詞句内の任意の箇所に併合されうる
- (b) Жがc統御する節点の上には性素性が出ることを許さない境界が形成される
- (c) Жは素性[-m, +f]をもち境界の外のNP内の節点にその素性がコピーされる

すなわち、以下の図のように ЖがNと併合した場合、Жがc統御するNの上には境界(以下仮に「Ж境界」と呼び、図中是一本線の弧で表す)が形成され、そこからNの性素性[+m, -f]はバリアの外にコピーされることはない。一方 ЖからはNP, AM, N'とバリアの外にある節点に性素性[-m, +f]がコピーされる。



ちなみに(33a)は Pesetsky (2013)の(18a)に相当する部分である。ここで提案した(33a)には(18a)の「特定の境界の上の」と「低い形容詞 (low adjectives)はこの境界の下にある」の部分に相当する箇所がない。この「低い形容詞」を Pesetsky (2013: 37)は「通言語的に名詞句の最も低い位置に現れる種類の形容詞」と説明しているが、これらはたとえ女性を指示しているとしても男性名詞を修飾している場合女性形で一致を行うことはない。Скоблиникова (1971: 183)は名詞と結合して「職業・職種などの不可分な一つの名称」を成すものとしている。

- (35) *Главный / *Главная врач поликлиники сказала, чтобы я
 main-nom.m main-nom.f doctor-nom.m clinic-gen say-pa.f that I-nom
 прошла ВТЭК.
 pass-pa.f Medical_comission_of_experts*

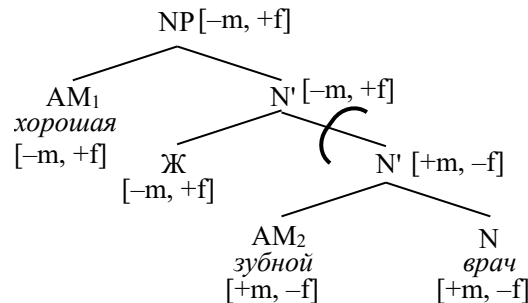
「主任医師は私に医療労働審査委員会にかかるべきだと言った」(Crockett 1976: 96)

Скоблиникова (1971: 183)はこのような職業・肩書き名の例として他に *зубной врач*「歯科医」、*старший технолог*「主任技術者」、*старший мастер*「主任職工」などを挙げている。つまり、このような形容詞より上に Жは併合しなければならない。なお、Жの上に更に形容詞があれば以下の様に性の異なる形容詞が混在することもあり得る。

8. 典型から逸脱する性の一致

- (36) (a) У нас *была* очень *хорошая* зубной врач.
 at we-gen be-pa.f very good-nom.f dental-nom.f doctor-nom.m
 「我々にはとても優秀な歯科医師がいた」 (Crockett 1976: 97)

(b)



この場合、Жは *хорошая* の下、*зубной* の上に併合しているので、*хорошая* は「意味的一致」をして女性形だが、*зубной* は *врач* に「統語的一致」をして男性形になっている。

ただ、この類の「低い形容詞」と思われるものが女性形になるのは完全に不可能なのかはより正確な調査が必要である。ネット上であれば低い形容詞が女性形になっている *зубная врач*「歯科医」、*главная инженер*「主任技師」のような表現は散見されるからである¹²。本稿では Ж が「低い形容詞」より上に併合しなければ統語的に非文になるのか、それともそれは強い傾向に過ぎないのかは今後の課題としてこれ以上言及しないこととし、(18a)の「特定の境界の上の」と「低い形容詞 (low adjectives)はこの境界の下にある」の部分の考慮に入れえないこととする。

また、Pesetsky (2013)の(18b)では「Ж が併合されるとその名詞はそれ以降一致にとって女性であると見なされる。」とあり、AM の一致と述語の一致を一つにまとめて「それ以降」は全て女性形、と言う形で説明している。一方本稿では(29b)のようにどちらも「最も近い c 統御」によって説明している。ただし名詞句内での c 統御か、名詞句外から名詞句内への c 統御かの違いはある。すなわち、述語の一致は名詞句外から各節点への最も近い c 統御によって予測されるので(33c)で Ж から性素性[-m, +f]がコピーされるのは NP 内の節点と限定した。

8.3.2.2. 光井 (2018a)のЖの非活性化にかわる提案

光井 (2018a)の Ж の非活性化によって Pesetsky (2013)の Ж だけでは達成できなかった記述的説明力を得ることができたのは間違いないが、本稿とは説明を試みている範囲が異なるため、このままでは色々と不都合な点があることは否定できない。そこで本稿では匹田 (2018: 83)に従い、光井 (2018a)の Ж の非活性化に変わるものとし

¹² ただし НКРЯ では確認が取れなかった。

8. 典型から逸脱する性の一致

て以下の表層フィルターを提案する¹³.

(37) *[+f] & [I]

すなわち、同じ節点に性素性[+f](≡女性)と屈折タイプ[I]が併存すると非文となる、と考えた。

8.3.2.2.1. 記述的観点からの検討

まずこの「女性」と「第 1 変化」が共存することはできないと考えるこのフィルターに、本稿の理論だけではなく一般的な記述的事実から見ても妥当性があることを確認したい。まず、この点に関して Nørgård-Sørensen (2011)は明快に以下の様に述べている：

(38) (...) the feature *female* is incompatible with DECL1 (...)

「素性「女性」は第 1 変化と両立しない」 (Nørgård-Sørensen 2011: 65)

また、ここまではっきりとは述べていないものの、Мирославский (1988: 22-23)も同様にとらえていることが伺える。

言語事実として具体的に「女性と第 1 変化が両立しない」ことが伺える点としてしばしば指摘されることがいくつかある。

(i) ロシア語の初学者向けの学習書などではしばしば「末尾が子音の名詞は男性名詞、末尾が-a 終わりは女性名詞」と説明されていることが多い。これを学習者向けのわかりやすさを考慮せずにもう少し厳密に言えば「単数主格の語尾が-ø で第 1 変化の名詞は男性、単数主格の語尾が-a で第 2 変化の名詞は女性」と言うことになる。しかし、それでも正確にはこの一般化は間違っている。мужчина「男性」、папа「お父さん」、дядя「おじさん」、Никита「ニキータ：男性名」、Валера「ワレーラ：男性名・愛称」などをはじめとして第 2 変化の男性名詞は多数存在するからである。この点は多くの初学者向け教科書でも言及されていることである。しかしその逆に、Crockett (1976: 98)が指摘するように、第 1 変化の女性名詞は存在しない。なお、Зализняк (2008)にも第 1 変化の女性名詞は掲載されていない。

以上の様に、「第 2 変化の男性名詞はあるのに第 1 変化の女性名詞は存在しない」という事実は「女性と第 1 変化は両立しない」という Nørgård-Sørensen (2011: 65)の言述を根拠づけていると言えそうである。

(ii) 略語は名詞句そのまま略さない場合の主要部名詞の性に従って文法性が決ま

¹³ このフィルターは匹田 (2018:83)のバージョンでは性素性の部分が[+f]ではなく[-m, +f]であった。本稿でこのような変更を加えた理由には、男性[+m, -f], 中性[-m, -f], 女性[-m, +f]の中で[+f]があるのは女性だけであるということ、いずれにせよ PcQP では数が[pc]であるために[±m]は削除されてしまうのでそのままでは場合によっては正しく機能しなくなる、などがある。

8. 典型から逸脱する性の一致

る場合と、略された語形の形態によって(可能ならば)文法性が決まる場合がある。例えば、以下の略語の場合を見てみよう。イタリックになっているのが主要部名詞である。

(39)(a)МАПРЯЛ

=Международная *ассоциация* преподавателей русского языка и культуры
international association-f teachers-gen Russian_language_and_culture
「国際ロシア語・ロシア文学教員連盟」

(b) ГЭС = Гидроэлектрическая *станция*
hydro-electric station-f
「水力発電所」

いずれも主要部名詞の性に従うなら女性、略語の語形で決まるなら男性となるが、女性の場合は不変化名詞となり、第1変化で屈折するのはあくまでも男性の場合のみである。

(40)(a)男性の場合

выступал в Пражском МАПРЯЛе
make_a_speech-ra.m in Prage-A.loc.m MAPRYAL-loc.m.I
「プラハの МАПРЯЛ で発言した」 (Милославский 1988: 23)

(b)女性の場合

(...)на строительстве Братской ГЭС (...)
on building-loc Bratsk-A.gen.f hydroelectric_power_station-gen.f.indc
「ブラーツクの水力発電所建設で」 (НКРЯ 2022.08.08)

МАПРЯЛ が第1変化で屈折している(a)では AM が男性形で一致しているが、ГЭС が不変化の(b)では AM が女性形で一致している¹⁴。(他にも Граудина и др. 1976: 83-85, Wade 2011: 99, Бельчиков 2008: 123-128, Nørgård-Sørensen 2011: 64-67 など参照。)

このように、略語の振る舞いを見ると、「女性と第1変化は両立しない」という Nørgård-Sørensen (2011: 65)の表現は正しいように見える。

(iii) ロシアの姓は *Иванов/Иванова, Смирнов/Смирнова, Толстой/Толстая* など男性と女性で形態が異なるものも多いが(いずれも前者が男性, 後者が女性), ロシアあるいはスラブ以外に起源を持つものには男女で形態に違いがないものもある。

そのうち、単数主格形の末尾が子音のもの、すなわち単数主格で-ø 語尾のもの、

¹⁴ このように主要部名詞が女性であるにもかかわらず男性扱いが可能な略語は通常の語と同じように発音するものだけである。上の2つはいずれもそのまま[мапрjаl], [гэс]と発音する。文字の名称を用いて[эм-а-пэ-эр-я-эл], [гэ-э-эс]ではない。文字の名称で発音する略語、たとえば ГДР [гэ-дэ-эр](=Германская демократическая республика)「ドイツ民主共和国」は主要部名詞 республика「共和国」に従い女性扱いされるが屈折することはない。

8. 典型から逸脱する性の一致

例えば *Апресян, Зализняк, Даль* などそれが男性名の場合は第1変化で屈折するが、女性名の場合は不変化になることがしばしば指摘されている(Wade 2011: 96, Бельчиков 2008: 123-128 など. また *Зализняк* 2008: 731-786 の «Приложение: Имена собственные» も参照).

(41)(a) (...) многочисленных дискуссий с Андреем Анатольевичем
numerous-gen.pl discussion-gen.pl with Andrey-ins.m Anatolyevich-ins.m
Зализняком. (...)
Zaliznyak-ins.m.I

「アンドレイ・アナトリエヴィッチ・ザリズニャークとの多くの議論の」

(НКРЯ 2022.08.08)

(b) В работах Анны Зализняк была показана плодотворность (...)
in work-loc.pl Anna-gen.f Zaliznyak-gen.f.indc be-pa.f shown-f fruitfulness-nom.f

「アンナ・ザリズニャークの業績には有効性が示されていた」

(НКРЯ 2022.08.08)

この例で(a)の *Зализняк* は *Андрей Анатольевич* が男性の名と父称であることから男性だが、(b)では *Анна* が女性名であることから女性であることがわかる。そして、男性の(a)だけが第1変化で屈折し、女性の方は不変化となっている。

このことは外国の姓についても同じことが見て取れる。以下は *Билл Клинтон* 「ビル・クリントン」と *Хилари Клинтон* 「ヒラリー・クリントン」夫妻の例である。

(42)(a) (...) послание от Билла Клинтона (...)
epistle from Bill-gen.m.I Clinton-gen.m.I

「ビル・クリントンからの書簡」

(НКРЯ 2022.08.08)

(b) Приезд Хилари Клинтон в Пакистан (...)
arrival Hillary-gen.f.indc Clinton-gen.f.indc to Pakistan

「ヒラリー・クリントンのパキスタン到着」

(НКРЯ 2022.08.08)

ビル・クリントンは第1変化で屈折しているが、ヒラリー・クリントンは変化していないことが見て取れる¹⁵。

また、女性名詞は第1変化で屈折することがないのは姓だけでなく名でも同じである(ロシアの名前にはほとんどないが)。例えば、以下の例で見るように *Маргарет Тэтчер* 「マーガレット・サッチャー」は姓名いずれも子音終わりだがいずれも変化することはない。

(43) (...) в Англии при Маргарет Тэтчер (...)
in England-loc in_the_time_of Margaret-loc.f.indc Thatcher-loc.f.indc

「英国でマーガレット・サッチャーの時代に」

(НКРЯ 2022.08.08)

¹⁵ ただし、外国の姓の場合著名な人物でないと屈折させると単数主格形がわからなくなると言う問題もあり、男性でも屈折させないこともしばしばある。

8. 典型から逸脱する性の一致

以上の様に、姓が屈折するかしないかについても「女性と第1変化は両立しない」という Nørgård-Sørensen (2011: 65)の言述が正しいことが見て取れる。

ここまで3つの点から(37)で提案した表層フィルターが理論以前の記述的観点からも妥当なものであることを見た。うち、(ii)の略語と(iii)の人名の例は同じ語が男女によって屈折するかしないかに違いがあるということだが、これは、男性名詞のように見える語が何らかの理由で文法性が女性でなければならない場合に、表層フィルター(37)に触れないようにするための一つの方策であると見ることができよう。つまり女性のΓƆCを変化させるとしたら(末尾が子音なので)第1変化しかあり得ないが、第1変化にしてしまうと表層フィルター(37)に触れてしまうので不変化にすることでそれを避けているのである。女性の人名の場合も同様である。

ここでもう一つ注目しなければならない言語事実が存在する。上で示した通り、第1変化の男性名詞は主格環境ではAMや述語の一致によって女性名詞扱いすることは可能だが、斜格環境ではそれがあり得ない。このことは上で言及した光井 (2018a)の他、Граудина и др. (1976: 101), Crockett (1976: 92), Шведова и др. (1980: I: 468), Corbett (1983: 86), Милославский (1988: 12), 光井 (2016)など多くの先行研究で指摘されている。

(44)(=8)第1変化の男性名詞

(a)主格環境

наша врач

our-nom.f doctor-nom.m.I

「我々の医師が」

(Шведова и др. 1980: I: 468)

(b)斜格環境

*с *нашей* врачом

*with our-ins.f doctor-ins.m.I

「我々の医師と」

(Шведова и др. 1980: I: 468)

この「主格だけ女性扱いが可能」という不可思議な問題は光井 (2018a)が「Жの非活性化」によって説明しようとした重要なポイントである。

ちなみに Crockett (1976: 53-54)は、女性名 *Нина*「ニーナ」は第2変化の女性名詞だが、それに指愛・指小接尾辞の1つ-чикを付した *Нинчик*「ニンチク」は女性名であるものの第1変化の男性名詞である。そして AM は通常男性形で一致するとしている。その一方で斜格ではなく主格の場合、女性での一致を完全に否定するのにはためらいを感じる話者がいることも指摘している。

(45)(a)Приходи со своим / *своей Нинчиком.

come-imp with self's-ins.m self's-ins.f Ninčik-ins.

「自分のニンチクと一緒に来なさい」

(Crockett 1976: 53)

(b)Вот пришел наш / ??пришла наша Нинчик.

here come-pa.m our-nom.m ??come-pa.f our-nom.f Ninčik-nom.I

「ほら私たちのニンチクがやってきた」

(Crockett 1976: 54)

8. 典型から逸脱する性の一致

つまり、この場合でも女性を表す男性名詞は斜格よりも主格の方がより女性での一致を受け入れ易いのである。

一方上でも見たように、同じ男性名詞でも第2変化や不変化なら斜格でも女性での一致が可能であることを Crockett (1976: 98), Граудина и др.(2001: 134), 光井 (2018a: 4-5, 14-15)は指摘している。以下は第2変化の男性名詞の例である。

(46)(=9b) Я нашла сорокалетнюю судью.
 I-nom find-pa.f forty_year_old-nom.f judge-nom.m.II
 「私は40歳の裁判官を見つけた」 (Граудина и др. 2001: 134)

ここでも第1変化と女性が両立しがたい、と言う事実が見て取れるのである。ではなぜ主格だとそれが容認されるのであろうか？

匹田 (2018)はこれを(37)に抵触しないように男性名詞を女性扱いするためのもう一つの方法であると考えた。要するに上で子音終わりの略語や第1変化の姓名などは女性扱いするために第1変化ではなく不変化にすることで(37)に抵触しないようにした一方、第1変化の男性名詞にЖが併合することで女性扱いする場合、第1変化ではなくするために不変化にするのではなく、主格以外の形態をなくすことで屈折タイプをなくしてしまい、結果(37)に抵触しようがなくなるという方策である。

ここまでをまとめると、第1変化名詞を女性扱いする際に(37)への抵触を避けるために講じることができる方策がロシア語には2つある。

- (47)(a) 第1変化名詞を不変化にする(第1変化の姓名、略語の場合)
- (b) 第1変化名詞の主格以外の形態をなくす(第1変化の男性名詞の場合)

この場合、それぞれの変化パラダイムは次のように変わる。

(48)(a)

	第1変化の姓
主格	Зализняк
対格	Зализняка
属格	Зализняка
処格	Зализняке
与格	Зализняку
具格	Зализняком

	不変化名詞
主格	Зализняк
対格	Зализняк
属格	Зализняк
処格	Зализняк
与格	Зализняк
具格	Зализняк

(b)

	第1変化の男性名詞
主格	врач
対格	врача
属格	врача
処格	враче
与格	врачу
具格	врачом

	主格のみ
主格	врач
対格	/
属格	
処格	
与格	
具格	

主格のみで変化しなければ屈折タイプもなく、結果として(37)に触れようがなくなるわけである。

8. 典型から逸脱する性の一致

しかし、問題は「不変化名詞」はロシア語の名詞にしばしば見られるタイプだが、「主格だけしかない」という名詞は何なのか？この疑問には本稿では答えることができず、残された問題とするしかないが、少なくともパラダイムに欠損が存在する名詞類は他にも存在することは確かである。

(i)まず、いわゆる絶対複数名詞(pluralia tantum)に単数形が存在しないことは、初歩の学習者でも知っている事実である。

(ii)逆に絶対単数名詞(singularia tantum)と言われるものは、例えば以下の вино「ワイン」は物質名詞であるが、「様々な種類の」と言う含意があると実際には複数形が用いられ得る。

(49) Он постоянно приносил разные вина (...)

he-nom constantly carry-pl.m various-pl wine-pl

「彼はひっきりなしに色々なワインを持ってきた」 (НКРЯ 2022.08.13)

しかしその一方で、Зализняк (2002, 2008)などは молоко「ミルク」のようにそのような場合でも複数形を用いることができない名詞も存在することを指摘している。

(iii)また再帰代名詞 себя「自分」と相互代名詞 друг друга「お互い」には主格形が当然のことながら存在しない。

(iv)Зализняк (2008)は数量詞 мало「少し」、немало「少なからぬ」、этого「それほどの」には主格(及びそれと同形の対格)以外の形態は存在しないと指摘している¹⁶。

(v)本稿 6.では PcQ と HQ は語彙で既に PreGenQ を持っている結論づけた。このことは一般的に主格(あるいはそれと同形の対格)と考えられているこれらの Q の形態が主格(及びそれと同形の対格)ではなく、それらの Q には主格・対格の形態が存在しないことを意味する。また Goto (2020)は本稿と全く異なる理由から同様のことを主張している。

(vi)Зализняк (2008)は сбродить「怖じ気づく」、сбродить「盗む」、лямзить「こっそり盗む」などいくつかの語について 1 人称単数非過去形が存在しないと指摘している。

(vii) Шведова (1970: 388)は огонь「火」と пламень「炎」も主格と対格形以外存在しないとしている。ただし、Зализняк (2002: 522)は огонь については огонь の主格と対格の詩的かつ古い形であるとしている。

これらのパラダイムの欠損にはそれぞれ何らかの理由があると思われるが、少なくともパラダイムの欠損自体はそれほど特殊な現象ではないことがわかる。また(iv)は本稿で問題としている男性名詞のパターンと同じ格形で欠損が生じている。

¹⁶ 更に小林祐 (2020)は много「多くの」、больше「より多くの」、столько「それほどの」、несколько「いくつかの」と、一般にそれらのパラダイムの一部を成すと考えられており AM の形態法を持つ многий, больший, столький, несколькокий が実際には別の語であり, много, больше, столько, несколькоなどは мало と同様に主格(及びそれと同形の対格)以外の形態を持たないと主張する。

8. 典型から逸脱する性の一致

一方、川本 (2021)がポーランド語では *doktor*「医師」、*profesor*「教授」などの男性名詞が女性を指示する際、不変化になると指摘していることが興味深い。ポーランド語では(47)でみた2つの方策のうち(a)を人間を指示する第1変化の男性名詞についても用いているのである。ポーランド語の「方策」の取り方はロシア語でもやはり(37)に抵触しないための「方策」が取られていることを示唆しているように思える¹⁷。

以上、残された問題はあつたものの、女性[+f]と第1変化[I]が両立しないという理解には記述的な面からも妥当性があり、表層フィルター(37)が妥当なものと考えられることを見た。次節では(37)が実際に正しく機能するかどうかを見る。

8.3.2.2.2. 具体例の確認

光井 (2018a)は、(8)~(13)の例文に見られる意味的一致を説明するために(14)の条件に従って \mathcal{K} が非活性化すると提案したが、それを本稿の体系に取り込むために、本章では \mathcal{K} の再定義及び \mathcal{K} の非活性化の代わりとなる表層フィルターを提案した。

(50)(=33)ゼロ形態素 \mathcal{K} の再定義

- (a) \mathcal{K} は名詞句内の任意の箇所に併合されうる
- (b) \mathcal{K} が c 統御する節点の上には性素性が出ることを許さない境界が形成される
- (c) \mathcal{K} は素性[-m, +f]をもち境界の外の NP 内の節点にその素性がコピーされる

(51)(=37) *[+f] & [I]

さらにこれに加えて、以下の2つの方策をとることによって必要に応じて[+f]と[I]の衝突を避けることもありうるとした。

(52)(=47)(a)第1変化名詞を不変化にする(第1変化の姓名、略語の場合)

(b)第1変化名詞の主格以外の形態をなくす(第1変化の男性名詞の場合)

以下本節ではこれらが正しく機能するか確認するために具体例を検討する。まずは典型的な NP における第1変化の男性名詞の例である。順に NP が主格環境に置かれている場合と斜格環境に置かれている場合を検討する。

(53)(=8)第1変化の男性名詞

(a)主格環境

наша *врач*
our-nom.f doctor-nom.m.I

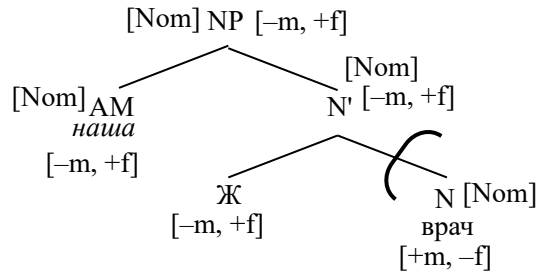
「我々の医師が」

(Шведова и др. 1980: I 468)

¹⁷ ちなみにロシア語でも、光井明日香(pers.com.)によると女性の一致定語を持つ場合、*врач* は不変化になるとした母語話者がいたとのことである。しかし、そのような事実は他では確認できていない。

8. 典型から逸脱する性の一致

(a')



(b)斜格環境

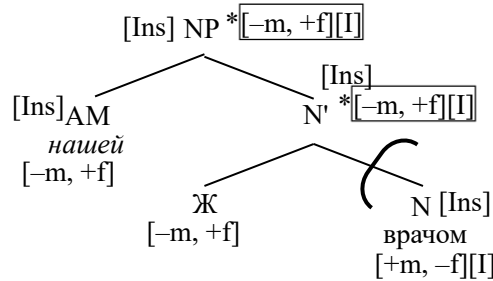
*с *нашей* врачом

*with our-ins.f. doctor-ins.m.I

「我々の医師と」

(Шведова и др. 1980: I 468)

(b')



第1変化の男性名詞が女性を指示しているときは主格環境にある場合(53a, a')はAMが女性形で一致しても適格だが、斜格環境にある場合(53b, b')はAMが女性だと非文となる。主格環境では適格なのは(52b)が適用可能だからである。その結果上の(a')には屈折タイプの素性[I]がない。その結果フィルター(51)に抵触することはあり得ず、(53a, a')は適格となる。その一方で斜格環境の時は(52b)の適用は不可能である。主格以外の格形態がないものは斜格環境では使えない。従って、節点NPとN'でЖからコピーされた[+f]とNからコピーされた[I]が併存することになり、(51)により(53b, b')は非文となる。以上の様に、第1変化の名詞の場合、表層フィルター(51)は主格と斜格での適格性の違いについて正しく予測している。

続いて、第2変化の男性名詞が女性を指示している場合である。

(54)(=9) 第2変化の男性名詞

(a)主格環境

Дело *рассматривала* районная *судья*

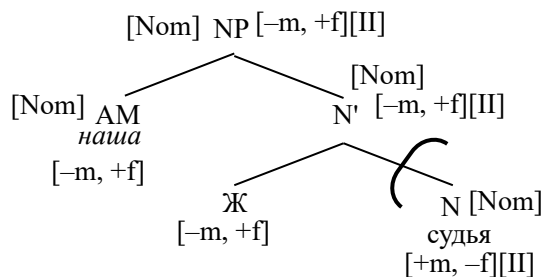
case examine-pa.f districtual-nom.f judge-nom.m.II

「事件を審査したのは地区の判事だった」

(Шведова и др. 1980: II 245)

8. 典型から逸脱する性の一致

(a')



(b) 斜格環境

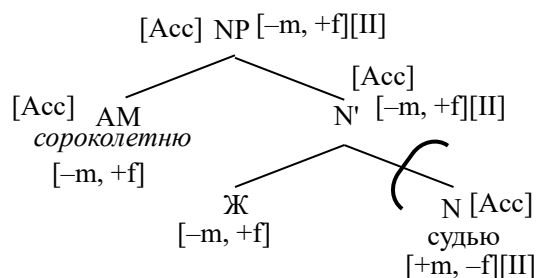
Я нашла сорокалетнюю судьбу.

I-nom find-pa.f forty_year_old-nom.f judge-nom.m.II

「私は40歳の裁判官を見つけた」

(Граудина и др. 2001: 134)

(b')



第2変化名詞の場合、屈折タイプ[I]はどこにもない。従って主格であろうと斜格であろうと関係なく、女性扱いしても(51)に触れることはあり得ない。従って主格・斜格のいずれの環境でも適格となる。

この点是不変化の男性名詞でも同様である。

(55) 不変化の男性名詞

(a) 主格環境

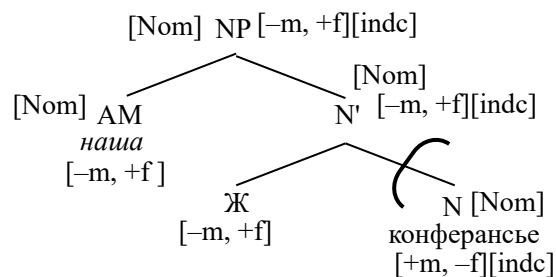
наша конференсье

our-nom.f conferencier-nom.m.indc

「我々の司会者」

(光井 2018a: 2)

(a')



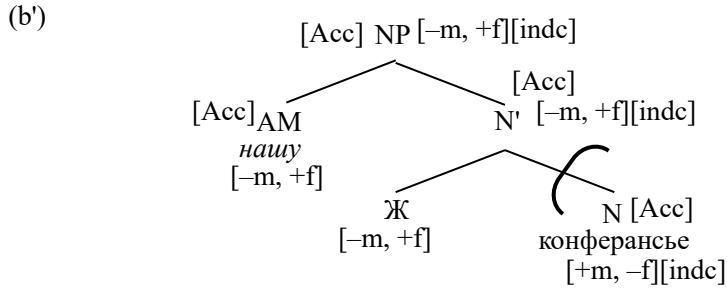
(b) 斜格環境

Я видела нашу конференсье.

I-nom see-pa.f our-acc.f conferencier-acc.m.indc

8. 典型から逸脱する性の一致

「私は我々の司会者を見かけた」 (光井 2018a: 4)



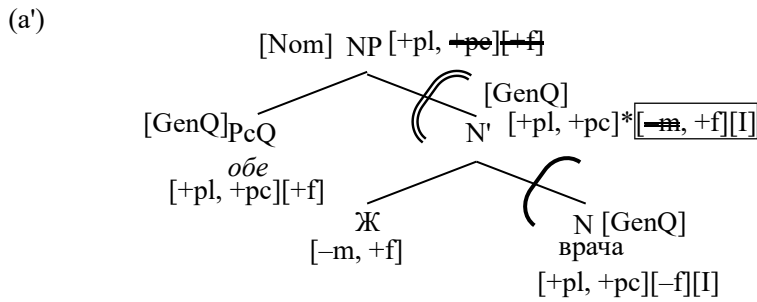
第 2 変化の男性名詞の場合と同様に [I] がどこにもない以上 (51) に抵触することはあり得ない。従って主格・斜格のいずれの環境においても適格となる。

次に問題となるのはこれらの男性名詞が PcQ *оба*「両方の」と結合した場合である。典型的な名詞句の場合 (53) とは逆に主格環境で非文，斜格環境で適格となる。なお PcQ は N に数量属格 [GenQ] を付与するので，この場合 Ж の併合による Ж 境界と [GenQ] の付与による CB の 2 つの境界線が形成されることになる。

(56) *оба*「両方」を伴う第 1 変化の男性名詞

(a) (=11a) 主格環境

**обе* *врача*
 both-nom.f doctor-genq.pc.m.I
 「両方の医師」 (Pesetsky 2013: 42)

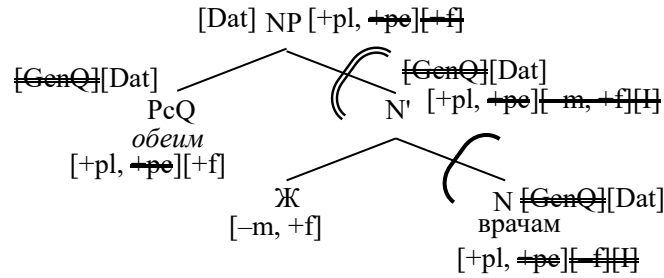


(b) (=11b) 斜格環境

к обеим *врачам*
 to both-dat.f doctor-dat.pl
 「両方の医師の方へ」 (光井 2018a: 6)

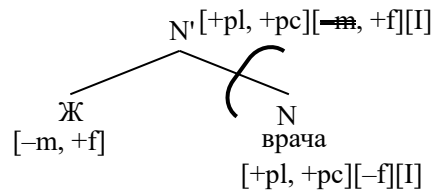
8. 典型から逸脱する性の一致

(b')



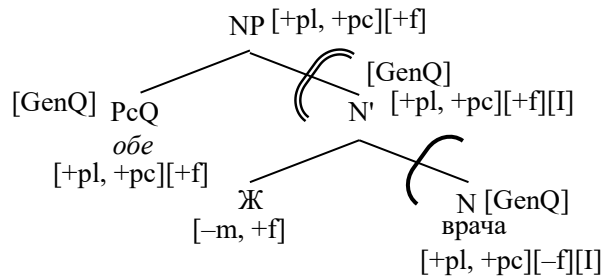
少々複雑になるので順を追って説明する。まず(56a)の主格環境の場合から見る。まず Жと N врачa が併合し N'を形成する¹⁸。さらに Жがあるため Nの上に Ж境界が形成される。また、Nには数素性[+pl, +pc], 性[-f], 屈折タイプ[I]があり, N'には Nから[+pl, +pc]と[I]が, Жから[-m, +f]がコピーされる。また(24)により N'の[+m]が削除される。

(57)



次に PcQ *обем*と N'が併合し NPを形成する。すると PcQが N'に[GenQ]を付与し, それが Nにも浸透する。PcQの[GenQ]は PreGenQである。また, PcQに[+pl, +pc]と[+f]がコピーされ, さらに NPに PcQから[+f]が, N'から(29b)に従って CBを越えて[+pl, +pc]がコピーされる。(CBを越えた数のコピーは選択的なものなので起こらないこともあり得る。その場合, 結果には影響がない。)

(58)



そして次に NPの外に何らかの[Nom]の付与子が併合すると NPに[Nom]が付与される。PcQと N'には[GenQ]が既にあるので, [Nom]は下に浸透することはない。NPに[GenQ]以外の格が付与されたので NPの数は(25)に従い複数になり, それによってさ

¹⁸ 1.3.1.で述べたように, 本稿では統語範疇のラベルにおける bar-level は文中での区別のための便宜上のものである。ここで N'と指名していることにはいかなる本質的な意味もない。

8. 典型から逸脱する性の一致

らに(22)により性素性が削除される。さらに最終的に(51)により N'にある[+f]と[I]の組み合わせが排除され(56a')に示されているように非文となる。

一方斜格環境にある場合は、PcQとN'が併合するまで、すなわち(58)までは全く同じである。しかし語彙格である[Dat]がNPに付与されると、[Nom]と異なり[GenQ]に上書きができるので、PcQとN'およびNにまで浸透して行く。結果、それらの節点の数が少数から複数になり、さらにそれによって性と屈折タイプの素性が削除される¹⁹。最終的に(56b')のように(51)に抵触する素性が存在しないため適格となる。

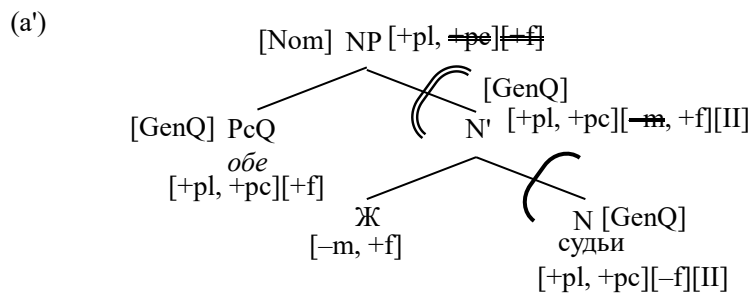
以上の様に、第1変化男性名詞とPcQ *оба*が結合した場合、主格環境で非文、斜格環境で適格という違いが正しく予測できたと言える。また典型的NPの場合(53)は逆に主格で適格、斜格で非文となるが、これは *оба*と結合した場合、Nが主格以外の格を付与されてしまうので(51)に抵触することを避けるための方策(52b)が使えずその数は斜格で複数になるのに対し、典型的なNPの場合、(52b)の適用が可能であるもののその代わりに常に数が単数であるため数と屈折タイプが削除されることがない、という違いによるものである。

続いてPcQ *оба*と第2変化および不変化の男性名詞が結合したPcQの場合である。これらは主格環境・斜格環境のいずれでもNを女性扱いすることが可能である。

(59) *оба*「両方」を伴う第2変化の男性名詞

(a)(=12a)主格環境

обе *судьи*
both-nom.f judge-genq.pc.m.pl
「両方の医師が」 (光井 2018a: 5)



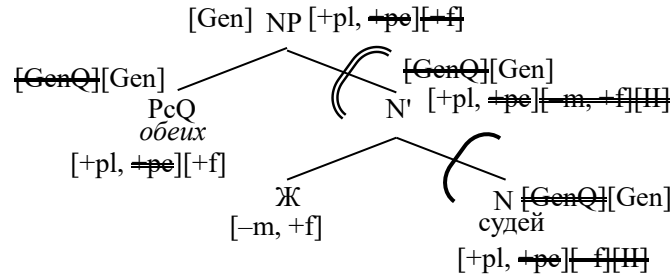
(b)(=12b)斜格環境

обоих *судей*
both-gen.f judge-gen.pl
「両方の医師の」 (光井 2018a: 5)

¹⁹ ただし、*обеим*と言う形態からも明らかな通りPcQの性素性[+f]は削除されていない。複数なのに性素性が削除されないのか、それとも*оба*の場合数素性が少数のままなのかは現況全く不明である。[GenQ]以外の格が与えられても性の形態的区別を維持しているPcQは他に存在しない。更には言えば複数で性の形態的対立を維持している語はロシア語でこれだけである。*оба*に限らずPcQは非常に限られた語彙しかなく、文法と言うよりもそれぞれの語彙項目ごとの特異性と見なすべきなのかも知れない。この問題は10.2.でも再度言及する。

8. 典型から逸脱する性の一致

(b')



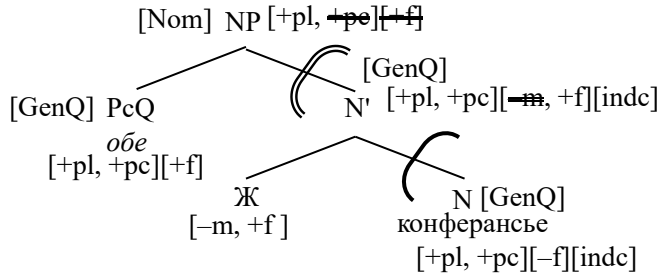
(60) оба「両方」を伴う不変化の男性名詞

(a)(=13a)主格

обе конференсье
 both-nom.f conferencier-genq.pauc.m.indc
 「両方の司会者が」

(光井 2018a: 5)

(a')

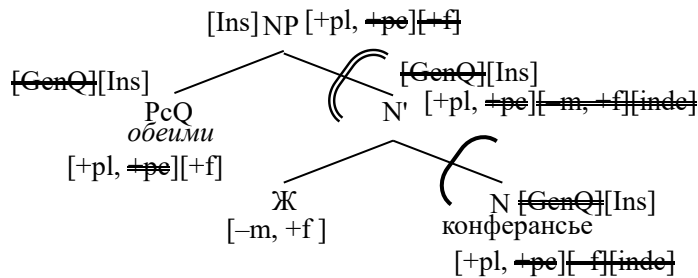


(b)(=13b)斜格

с *обеими* конференсье
 with both-ins.f conferencier-ins.indc
 「両方の司会者によって」

(光井 2018a: 5)

(b)



第2変化と不変化の男性名詞の場合も併合や素性の削除・書き換えに関しては第1変化の場合と全く同じである。ただし、これらの場合屈折タイプの素性が[II]か[indc]であるためフィルター(51)に抵触しようがない。従って主格環境・斜格環境に関わらずいずれも適格となる。

以上、光井(2018a)が説明した言語事実を光井(2018a)のЖの非活性化条件(14)によらず同じ記述的成果を説明し、本稿の体系に取り込むことができた。

8. 典型から逸脱する性の一致

8.4. 本章のまとめ

本章では Pesetsky (2013)と光井 (2018a)が構築した女性を指示する場合の男性名詞が示す意味的一致の説明理論を本稿の議論に組み込むための試みを行った。その結果、以下の表層フィルターとロシア語が利用するそれに抵触しないための方策を示すことで光井 (2018a)が \mathcal{K} の非活性化条件によって説明した現象を同様に説明ができることが明らかになった。

(61)(=51) * $[+f]$ & $[\text{I}]$

(62)(=52) (a)第1変化名詞を不変化にする(第1変化の姓名, 略語の場合)

(b)第1変化名詞の主格以外の形態をなくす(第1変化の男性名詞の場合)

これらは記述的にも妥当であり(8.3.2.2.1.参照), また理論的にも正しく機能する(8.3.2.2.2.参照)ことが確認できた。

ただし, *РсQ оба* の得意な振る舞いなど積み残された問題もある。

9. ロシア語の Q の連続体性と本稿の説明の妥当性

前章までにロシア語の非典型的な名詞句、とりわけ数量詞句(QP)についてその一致に関わる特異な現象について説明を試みてきた。その中で本稿は最初に示したように、ロシア語の Q が形容詞と名詞の間に横たわる連続体として存在していることを出発点として議論を展開し、それを離散的な文法体系によって整理することを目指した。本章ではこれまで議論を展開し構築してきた理論体系を総括し、その妥当性を確認する。

以下、9.1.ではこれまで本稿でQの連続体性をどのようにまとめたかを概観し、9.2.では連続体性とは無関係ではあるがロシア語の Q について包括的な理論構築を試みた Pesetsky (2013)と本稿を比較することで本稿の妥当性を確認したい。

9.1. 連続体としての Q の中での PcQ

Corbett (1978b, 1978c)が明らかにしたようにロシア語の数詞は形容詞から名詞へと連なる連続体を成している。以下本節ではこの連続体としての Q の中で PcQ をはじめとする Q がどのように位置づけられているか、関係づけられているかを確認する。

9.1.1. 本稿での連続体の改訂

まず、数量詞の連続体性を明らかにしたのは Corbett (1978b, 1978c)である。この事実は以下の表に明瞭に表現されている。

(1)(=1-15) Corbett (1978b: 64, 1978c: 2)における数詞の連続体

	1	2	3, 4	5	100	1,000	100 万
(i) 名詞と数で一致する	+	-	-	-	-	-	-
(ii) 全ての格で格が一致する	+	-	-	-	-	-	-
(iii) 性で一致する	+	(+)	-	-	-	-	-
(iv) 有生性を表示する	+	+	+	-	-	-	-
(v) 自身の複数形を持たない	+	+	+	+	(-)	-	-
(vi) 一致する定語を持たない	+	+	+	+	+	-	-
(vii) 常に属格名詞を支配するわけではない	+	+	+	+	+	±	-

ロシア語の数詞の見せる連続体性について本稿では 1.3.1.で言及し、本稿の議論の出発点とした。Corbett (1978b, 1978c)はこの連続体性について個数詞のみを議論の対象にしているが、本稿での議論の中で、この連続体に取り込むことができる数量詞(Q)は他にもあることが明らかになった。つまり、「数詞の連続体」と言うより「数量詞の連続体」が成立していると考えられるべきである。

例えば 3.では、個数詞の他に QCN (Quantificational Collective Noun, 数量的集合名詞)もこの数量詞の連続体に取り込むことが可能で、最も名詞寄りの連続体の右端に位

9. ロシア語の Q の連続体性と本稿の説明の妥当性

置ることが示された。

また、本稿では上記の連続体で見られる Q ごとに様々に異なる振る舞いを分析することで、それぞれの Q の持つ素性とそのスロットが具体的に明らかになってきた。とりわけ 7.での議論によって、その振る舞いの違いの多くの部分はそれぞれの Q が持つ文法素性やそのスロットのあり方によって導けるものであることもわかった。また、6.での議論によって PcQ と HQ はシンタクスに入る前に語彙で既に数量属格 [GenQ]を持っていると考えるべきだと結論づけた。

ここまでの結果をまとめると以下の通りとなる。

(2)(=6-72) Q の文法素性とそのスロット

	1	PcQ		HQ		NQ	QCN
		2	3, 4	5~	100		
数	[(ø), (ø)]	[(ø), (ø)]	[(ø), (ø)]	×	×	[sg/pl]	[sg/pl]
性	[(ø), (ø)]	[ø]	×	×	×	[m], [f]	[m], [n], [f]
有生性	[ø]	[ø]	[ø]	×	×	[in]	[in]
屈折タイプ	×	×	×	[III]	[IV]	[I], [II]	[I], [II], [III]
格	[ø]	[GenQ]	[GenQ]	[GenQ]	[GenQ]	[ø]	[ø]

また、格付与能力については「1」は格付与能力がないが、PcQ と HQ は構造格、すなわち [GenQ] の付与能力があり、NQ は語彙格、すなわち [Gen] の付与能力を持っていることを(2-38)に示した。さらに以下の例では QCN に語彙格が付与されていてもそれに後続する N の格は属格のままである。このことから QCN の付与する格は構造格の [GenQ] ではなく語彙格の [Gen] であることがわかる。

(3)(a)(...)выгодны абсолютному большинству избирателей(...)

profitable absolute-dat majority-dat voter-gen

「有権者の絶対的多数にとって有益だ」 (НКРЯ 2022.08.13)

(b)(...)в Москве, Мадриде, Токио и ряде других городов мира(...)

in Moscow-loc Madrid-loc Tokyo-loc and number-loc other-gen.pl city-gen.pl world-gen

「モスクワ、マドリッド、東京とその他の世界の多くの都市で」

(НКРЯ 2022.08.13)

この情報(2-38)を(2)に付加したものが以下の表である(格付与能力には[+]を付して単なる格の値と区別する。)。

(4) Q の文法素性とそのスロット ver. 2

	1	PcQ		HQ		NQ	QCN
		2	3, 4	5~	100		
数	[(ø), (ø)]	[(ø), (ø)]	[(ø), (ø)]	×	×	[sg/pl]	[sg/pl]
性	[(ø), (ø)]	[ø]	×	×	×	[m], [f]	[m], [n], [f]
有生性	[ø]	[ø]	[ø]	×	×	[in]	[in]
屈折タイプ	×	×	×	[III]	[IV]	[I], [II]	[I], [II], [III]
格	[ø]	[GenQ]	[GenQ]	[GenQ]	[GenQ]	[ø]	[ø]
格付与	×	[+GenQ]	[+GenQ]	[+GenQ]	[+GenQ]	[+Gen]	[+Gen]

9. ロシア語の Q の連続体性と本稿の説明の妥当性

これらのうち太線より上の数, 性, 有生性及び屈折タイプ, すなわち本稿で「一致素性」ととらえているものだけを見ると, 綺麗に形容詞的なものから名詞的なものへと並んでいることがわかる.

つまり, 形容詞(≡AM)は数, 性, 有生性を受け入れる空のスロットを持つ一方, 屈折タイプは名詞のものなので無関係である. それに対して名詞は数, 性, 有生性, 屈折タイプの本来の素性を全て持っている. その点で「1」は全て AM と同じ, PcQ のうち「2」は数, 性, 有生性について AM と同じだが性は実際には[±f]しかなく[±m]がなくなっているので「1」よりは AM 的性質を失っている. 更に同じ PcQ でも「3, 4」は性が無関係になって空スロットもないので「2」よりさらに AM 性を失っている. HQ は AM 的な空スロットを全て失い, その代わりに本来の素性として屈折タイプを得たので名詞的になっている. そして NQ と QCN は完全に名詞と同じ全ての本来の素性を持っている.

ここまで一致素性に関して見ると, (1)とはまた別の形で形容詞から名詞への連続体を形成していることがわかる.

では, 格と格付与能力についてはどうであろうか? この2点については, 連続体の中央に語彙で「予め与えられた[GenQ](=PreGenQ)」と[+GenQ]があるが, これらは形容詞か名詞のどちらかによっていないので, どちらの特徴でもない. これに関しては 6.で形容詞と名詞の間に以下の様に通時的に「数量詞(Q)」という新たな文法範疇が形成されつつあると仮定した.

(5)(=6-68)

形容詞	「1」	PcQ→	数量詞	←HQ	NQ	QCN	名詞
-----	-----	------	-----	-----	----	-----	----

つまり, 形容詞～名詞の連続体は形容詞～数量詞～名詞の連続体へと変貌しつつあることになる. そして, Q をまとめている特徴が PreGenQ と[+GenQ]だと考えた.

以下ではこれまでの本稿での議論を踏まえて, 他に数量詞をまとめる特徴がないか検討するが, その前に本稿 4.の議論の中に出てきた集合数詞(ColQ)が連続体上のどこに位置しているのかを確定させたい.

9.1.2. ColQ について

連続体(4)に ColQ は組み込めるのか, また組み込めるとしたらどこに納まるのか, それを明らかにするために以下, ColQ の数, 性, 有生性, 屈折タイプ, 格, 格付与能力について確認していく.

まず数であるが, 以下の様に PcQ と ColQ の絶対複数名詞との結合可能性に違いがある. その振る舞いの違いを説明するために 4.5.2.2.8.で両者の数のスロットの違いがあると結論づけた.

9. ロシア語の Q の連続体性と本稿の説明の妥当性

(6)(a)(=4-41) *два суток / *три ворот / *четыре ножниц
 two-nom day-genq.pl three-nom gate-genq.pl four-nom scissors-genq.pl
 「2日/3つの門/4本のハサミ」 (Аксенова 2001: 186)

(b)(=4-42) двое суток / трое ворот / четверо ножниц
 two-nom day-genq.pl three-nom gate-genq.pl four-nom scissors-genq.pl
 「2日/3つの門/4本のハサミ」 (Аксенова 2001: 186)

この違いを説明するために 4.5.2.2.8. では PcQ と ColQ でそれぞれ以下の様に数素性のスロットを考えるべきと結論づけた。

(7)

	PcQ	ColQ
数	[_(±pl) ∅], [_(±pc) ∅]	[_(±pl) ∅]

なお、PcQ だけでなく *один*「1」や形容詞などの AM も数素性のスロットは 2 つ持っている。ただし、2 つめのスロットは [GenQ] 以外の格が与えられると削除されるし、また AM は少数のための形態を持っておらず、派生の最後まで形態的に 2 つめのスロットが残ることはない。PcQ などは PreGenQ を持っているので最後まで 2 つの数のスロットが残ることができるのである。

続いて性についてだが、ColQ はいずれも性についての形態的対立がない。従って性の素性とスロットは存在しないと考えるのが適切であろう。

有生性について以下の例文(a-c)の ColQP は全て対格環境に置かれているが、(a, b) は *N студентов*「学生」、*детей*「子供」がいずれも有生名詞で、形態的には属格環境にあるときと同形になっている。それに対して(c)は *ворот*「門」は無生名詞で、形態的には主格環境にあるのと同形になっている。

(8)(a)(...)один подросток пугал [двоих студентов]игрушечным
 one-nom teenager-nom frighten-pa.m two-ColQ.gen student-gen toy-A.ins
 ПИСТОЛЕТОМ.
 pistol-ins

「1人の少年が2人の学生をおもちゃのピストルで脅した」

(НКРЯ 2022.08.14)

(b)(...)уже имел [пятерых детей](...)
 already have-pa.m five-ColQ.gen child-gen.pl

「もう5人の子供がいた」

(НКРЯ 2022.08.14)

(c)На территорию посольства можно войти через [двое ворот](...)
 to territory embassy-gen possible enter-inf through two-ColQ.genq gate-genq.pl

「大使館の敷地には2つの門を通して入れる」

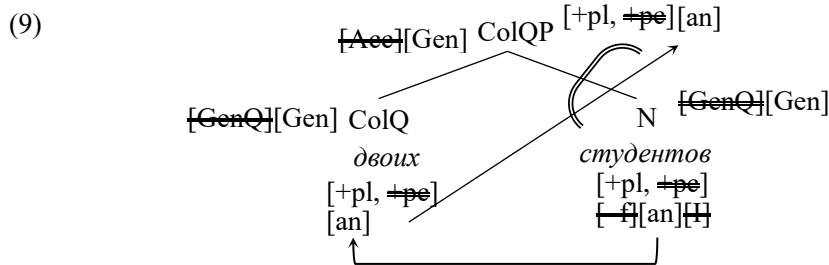
(НКРЯ 2022.08.14)

すなわち、ColQP には有生性の一致が確認される。このことから ColQ は有生性のスロット [∅] を持っており、N から有生性に関わる素性を受け取っていると考えられる必要があると判断できる。また、*пятеро*「5」以上の場合でも ColQ は HQ と異なり有生性

9. ロシア語の Q の連続体性と本稿の説明の妥当性

に関して空のスロットを持っている。そのことは(b)の *пятерых* が属格形と同じになっていることで確認できる。HQ の場合、主格環境で用いられる数量属格形のままであることと対照的である。

以下は *двоих студентов*「2 人の学生」の場合の樹形図である。



この場合、PcQ の場合も同様であるが、有生性[an]は ColQ を経由して節点 ColQP にコピーされると考える。そのため、ColQ に有生性の空のスロット[ø]がないとしない。

屈折タイプについては明らかに名詞的な屈折タイプとは異なっている。以下に例として *двое*「2」と *пятеро*「5」の変化表を示すが、いずれも名詞的と言うよりも形容詞的(あるいは AM 的)に変化していることがわかる。

(10)

主		двое	пятеро
対	無生	двое	пятеро
	有生	двоих	пятерых
属		двоих	пятерых
処		двоих	пятерых
与		двоим	пятерым
具		двоими	пятерыми

このことから ColQ は(名詞の)屈折タイプに関しては無関係であることがわかる。

ColQ が PcQ や HQ のように PreGenQ を持つかどうかは、6.3.での議論から、分配の前置詞 *по* の補語となった場合の Q の形態が直格形か斜格形かによって判断できると考える。以下を見るといずれも ColQ は直格形、すなわち主格環境の場合と同じ形態となっている。

- (11)(a)(...)каждый раз перед приходом гостей они не спят [по двое
 every time before arrival guest-gen.pl they not sleep-pr dist two-ColQ.genq
 суток]
 day-genq.pl
 「毎回客が来る前は彼らはそれぞれ2日ずつ寝なかった」 (НКРЯ 2022.08.14)

9. ロシア語の Q の連続体性と本稿の説明の妥当性

(b) Вы собирались [по трое, по пятеро и даже по десятеро
you gather-ra.pl dist three-ColQ.genq dist five-ColQ.genq and even dist ten-ColQ.genq
и даже по сотеро и тысячеро]!
and even dist hundred-ColQ.genq and thousand-ColQ.genq
「君たちは3人, 5人, そして10人, 100人, 1,000人ずつですら集まってきた」
(НКРЯ 2022.08.14)

このことから, ColQ も PcQ や HQ と同様に PreGenQ を持っていると考えられる¹.

続いて, ColQ の付与している格が数量属格[GenQ]なのか通常の属格[Gen]なのかを検討する. 2.3.2.での議論に基づき, QP 全体を格変化させたときに主・対格環境では N が属格形, 残りの語彙格環境では N の格と同じ格になれば Q が付与する格は[GenQ], 全ての格環境で N が属格形であれば Q は[Gen]を付与すると考えて良い. 前者の例が(12)で後者の例が(13)である. ただし, 6.2.での議論から[GenQ]を付与する Q は PreGenQ を持っているとして仮定したため, (12a, b)において Q と N の格が「一致しない」という表現は不正確なものとなってしまった. むしろ[GenQ]どうして Q と N の格が一致している, と表現するべきかもしれない(全体の格とは異なるが). 以下では(12a, b)の Q *пять* の格に関するグロスは“genq”としている.

(12)(=2-28)「5冊の本」

- (a) 主格: пять книг
five-genq book-genq.pl
- (b) 対格: пять книг
five-genq book-genq.pl
- (c) 属格: пяти книг
five-gen book-gen.pl
- (d) 処格: пяти книгах
five-loc book-loc.pl
- (e) 与格: пяти книгам
five-dat book-dat.pl
- (f) 具格: пятью книгами
five-ins book-ins.pl

(13)(=2-34)「100万ルーブル」

- (a) 主格: миллион рублей
million-nom rouble-gen.pl
- (b) 対格: миллион рублей
million-acc rouble-gen.pl
- (c) 属格: миллиона рублей
million-gen rouble-gen.pl
- (d) 処格: миллионе рублей
million-loc rouble-loc.pl

¹ ちなみに(b)の *сотеро, тысячеро* は通常は認められていない形である.

9. ロシア語の Q の連続体性と本稿の説明の妥当性

- (e) 与格 : миллиону рублей
million-dat rouble-dat.pl
- (f) 具格 : миллионом рублей
million-ins rouble-ins.pl

ColQP の場合の格による変化のパターンを見るために、それぞれの格環境における例を確認したい。

(14)(a) 主格環境

Ей на помощь пришли [двое мужчин] (...)
she-dat for help come-pa.pl two-ColQ.genq man-genq.pl
「彼女を手伝うために 2 人の男性がやってきた」 (НКРЯ 2022.08.14)

(b) 対格環境・無生名詞

Они [двое суток] прожили в вокзале(...)
they-nom two-ColQ.genq day-genq.pl spend-pa.pl in station
「彼らは 2 日間駅の中で過ごした」 (НКРЯ 2022.08.14)

(c) 対格環境・有生名詞

[Двоих моряков] удалось всё же спасти (...)
two-ColQ-gen sailor-gen.pl succeed-pa.n nevertheless rescue
「2 人の船員がそれでも救助できた」 (НКРЯ 2022.08.14)

(d) 属格環境

Все было одинаковым у [двоих друзей] (...)
all be-pa.n same at two-ColQ-gen friend-gen.pl
「2 人の友人は全て同じだった」 (НКРЯ 2022.08.14)

(e) 処格環境

(...) нет ни слова о [двоих беглецах] (...)
is_not no word-gen about two-ColQ.loc fugitive-loc.pl
「2 人の逃亡者に関しては一言もない」 (НКРЯ 2022.08.14)

(f) 与格環境

(...) подошла к [двоим преследователям] (...)
approach-pa.f to two-ColQ.dat pursuer-dat.pl
「2 人の追っ手に近づいた」 (НКРЯ 2022.08.14)

(g) 具格環境

Остался Мишка только с матерью да с [двоими братишками].
remain-pa.m Mishka-nom.m only with_mother and wih two-ColQ.ins brother-ins.pl
「ミーシカは母と 2 人の兄妹とだけ残された」 (НКРЯ 2022.08.14)

これらを見ると、主格環境と無生名詞の場合の対格環境の例(14a, b)では N, Q ともに格が[GenQ]である一方、有生名詞の場合の対格環境の例も含めその他の格環境の例は全て N と Q の格が語彙格で一致している。つまり ColQP の格環境による変化パラダイムは以下の通りとなる。

9. ロシア語の Q の連続体性と本稿の説明の妥当性

(15)

		ColQ	N
主		[GenQ]	[GenQ]
対	無生	[GenQ]	[GenQ]
	有生	[Gen]	[Gen]
属		[Gen]	[Gen]
処		[Loc]	[Loc]
与		[Dat]	[Dat]
具		[Ins]	[Ins]

以上の点から、ColQ は PcQ や HQ と同様に付与する格は[GenQ]であると考えたと問題なさそうである。

ここまでの ColQ の素性についての考察をまとめると、数：[_(+pl) ∅], 性：×, 有生性：[∅], 屈折タイプ：×, 格：[PreGenQ], 格付与能力：[+GenQ]となる。

これらは適切に連続体(4)に組み入れることはできるであろうか？ PcQ と HQ の間に入れれば適切に納まるのがわかる。

(16) Q の文法素性とそのスロット ver. 3

	1	PcQ		ColQ	HQ		NQ	QCN
		2	3, 4		5~	100		
数	[(∅), (∅)]	[(∅), (∅)]	[(∅), (∅)]	[(∅)]	×	×	[sg/pl]	[sg/pl]
性	[(∅), (∅)]	[∅]	×	×	×	×	[m]...	[m]...
有生性	[∅]	[∅]	[∅]	[∅]	×	×	[in]	[in]
屈折タイプ	×	×	×	×	[III]	[IV]	[I]...	[I]...
格	[∅]	[PreGenQ]	[PreGenQ]	[PreGenQ]	[PreGenQ]	[PreGenQ]	[∅]	[∅]
格付与	×	[+GenQ]	[+GenQ]	[+GenQ]	[+GenQ]	[+GenQ]	[+Gen]	[+Gen]

これらの素性のうち、数、性、有生性、屈折タイプは形容詞～名詞の連続体のどちらよりかを示すのに対し、格と格付与能力は形容詞と名詞の間に形成されつつある数量詞的特徴である。その他にも Q 的な特徴は存在する。

まず3.で見たように多くの Q は述語の一致の Ctrl として CB の下の節点を指定することも可能である。このことは以下の通りまとめる。

(17)Q の格付与によって形成された CB の下の節点を述語の一致の Ctrl に指定することが可能である。

これによって結果として述語が n.sg.3 の形態で一致することができる。(3-70)では PcQ, HQ, NQ でこれが可能であるとしている。では、ColQ はどうであろうか。以下の例文で明らかのように、n.sg.3 での述語の一致が可能であるため、(17)の特徴を有していることがわかる。

9. ロシア語の Q の連続体性と本稿の説明の妥当性

(18) Там тоже было [двое детей].
there also be-pa.n two-ColQ.genq child-genq.pl
「そこにも 2 人の子供がいた」 (НКРЯ 2022.08.15)

(19) У меня было [четверо двоюродных братьев] (...)
at I-gen be-pa.n four-ColQ.genq cousin-genq.pl
「私には 4 人の従兄弟がいた」 (НКРЯ 2022.08.15)

従って、PcQ, ColQ, HQ, NQ が(17)の特徴を有していることになる。

7.で確認した以下の各点も典型的な NP では無関係な Q 的な特徴と言えよう。

(20)=(7-8)QP において探索子は Q による格付与で形成される CB の下でも必要なら目標を探すことができる。

(21)=(7-33a)QP において N から CB を越えた上方向の数素性のコピーは選択的に行われ、その代わり Q から数素性が上方向にコピーされることはない。

まず(20)であるが、CB が形成される Q のうち PcQ と HQ については(5-55)で提案した N の素性に CB を越えさせる素性の[+horAni](PcQ のうち「2」については[+horGend]も)の代わりに提案されたものである。従って、PcQ と HQ は[+horAni](と[+horGend])があるので(20)の特徴が当てはまると言えるだろう。以下の例文でこのことが確認できる。

(22)=(5-63a)(...)убил [двух уток].
kill-pa.m two-gen.pl duck-gen.pl.an.
「2羽のカモを殺した。」 (НКРЯ 2014.09.19.)

(23)=(5-66a)Я увидел [этих пять мальчиков].
I-nom see-pa.m this-gen.pl.an five-nom.III boy-genq.pl.an
「私はこれら 5 人の少年を見かけた」 (Babby 1987: 109)

では、ColQ はどうか。上の(8)の例文とその概念的な樹形図(9)で示したように、探索子である ColQ は CB の下の N まで有生性の素性[an]を探しに行っている。従って ColQ は(20)に従って自身や AM が探索子として CB の下の目標を探すことができる。

また、NQ と QCN はそれぞれ全ての一致素性を本来的素性として持っており空のスロットはないので、これらが探索子として N に素性を求めることはない。Q の上にある AM も Q に一致素性を求めれば良いので、CB の下の N まで取りに行く「必要はない」。以上の理由から(20)に従って CB の下の目標まで素性を探せるのは PcQ, ColQ, HQ であると考え²。

最後に(21)の特徴について見ると、数素性が上方向に N から CB を越えて主格を付与されている句の頂点にコピーされることによって述語の pl.3 の一致が可能になるこ

² ただし、7.2.4.で示したように、NQ と QCN の AM の形態についてはわからないことが多い。正確なことは今後の課題とする。

9. ロシア語の Q の連続体性と本稿の説明の妥当性

とは 3. と 7. で見た。また PcQP, HQP, NQP, QCNP のいずれも主語として機能した場合述語に pl.3 での一致が可能であることも 3. と 7. で見た。つまり、PcQ, HQ, NQ, QCN のいずれも特徴(21)の特徴を示していることになる。また以下の例を見ると ColQ も同様のようである。

(24) Среди пассажиров были двое маленьких детей (...)
among passenger-gen.pl be-pa.pl two-ColQ.genq small-genq.pl child-genq.pl
 「乗客の中に 2 人の小さな子供がいた」 (НКРЯ 2022.08.15)

(25) (...) живы были пятеро мужчин (...)
alive-pl be-pa.pl five-ColQ.genq man-genq.pl
 「5 人の男性が生きていた」 (НКРЯ 2022.08.15)

以上から PcQ, ColQ, HQ, NQ, QCN が特徴(21)を示していることがわかる。

ここまで検討した Q 的特徴(17, 20, 21)と上でやはり Q 的にとらえた格と格付与能力についての振る舞いをまとめると以下の通りである。ここでは Q 的特徴を持っているかどうかの主眼を置くため、Q 的特徴を持っていれば「+」、なければ「-」とした。PreGenQ と [GenQ] の付与能力についても同様である。

(26) Q 的特徴

	1	PcQ		ColQ	HQ		NQ	QCN
		2	3, 4		5~	100		
PreGenQ	-	+	+	+	+	+	-	-
GenQ を付与	-	+	+	+	+	+	-	-
CB の下に述語の Ctrl	-	+	+	+	+	+	+	-
CB の下を探索	-	+	+	+	+	+	-	-
CB を越えて上に数	-	+	+	+	+	+	+	+

このように、述語の Ctrl を CB の下に指定できるという特徴は NQ まで見られ、CB を越えて上に数をコピーできるのは QCN まで広がっている特徴であることが確認できる。

9.2. Pesetsky (2013) と本稿の比較

前節では ColQ の性質を確認するとともに、ロシア語の形容詞～数量詞～名詞と連なっている連続体として存在する数量詞(Q)のそれぞれの特徴を見た。(26)を見ると PcQ, ColQ, HQ は Q 的特徴を全て持ち合わせているように見え、Q の中核を成す範疇であると言えよう。

以下ではこれらの Q について本稿とは異なる立場から体系的・形式的に考察した Pesetsky (2013) と本稿の説明の違いを比較・検討し、本稿の方がより単純に事実を説明することができることを示す。

9. ロシア語の Q の連続体性と本稿の説明の妥当性

9.2.1. Pesetsky (2013)の概要

具体的現象の説明方法について比較する前に、まず Pesetsky (2013)の概要を紹介する。Pesetsky (2013)は連続体として Q を捉えることを考えていない。この点は Pesetsky (2013)と本稿の大きな違いと言えるだろう。

Pesetsky (2013)の考え方の基本は以下の 3 点である：(i)品詞と格を同一視すること；(ii)格の接尾辞は複数のもので与えられることがあり得るが、具現化するの最後のものだけであること；(iii)PcQ は数標識そのものであり、後続する名詞は数を持たない形であること。以下、本節ではこれらの点を概観する。

9.2.1.1. “You are what you assign.”

Pesetsky (2013: 7)はロシア語の格は独立した範疇ではなく、様々な品詞が接辞として具現化したものであると考え、以下の通りに品詞に還元できるとしている。

(27) ロシア語の格の品詞範疇への還元

Genitive = N Accusative = V
Nominative = D Obliques = P

つまり、N はそもそも属格であり、V はそもそも対格、D は主格、P は斜格と考え、またそれらは以下の規則³によって他の語にコピーされるとすることでこれらの品詞による格付与や一致定語の格の一致を説明する(Pesetsky 2013: 28)。

(28) 素性の付与(Feature Assignment, FA), version 2 of 6

(a)**Copying**: When α merges with β , forming [α α β], if α has satisfied its complementation requirements, its grammatical features are immediately copied onto β ...

(b) **Realization**: ... and are realized as morphology on all lexical items dominated by β .

「(a)コピー： α が β と併合し[α α β]を形成するとき、もし α がその補部要求を満たしているならその文法素性は直ちに β にコピーされる... (b)具現化：... として β に支配されている全ての語彙項目で形態法として具現化される。

なおこの考え方だと、何か他の品詞によって別の格が付与されない限り名詞は属格形になるということになる。また、上記以外の格をそれぞれが与える場合は別途何らかの形で規定する必要があるということになる。

9.2.1.2. The One-Suffix Rule

上述のように名詞はそもそも属格を持っていることになるが、実際には他の格形

³ この FA は Pesetsky(2013)で順次バージョンアップし、それに従って複雑化していく。ここでは煩雑さを避けるため議論に最低限必要な version 2 に基本的に言及することとする。なお、最終の version 6 は(82)に示した。

9. ロシア語の Q の連続体性と本稿の説明の妥当性

になって現れることが多々ある。Pesetsky (2013: 101)ではそれらを説明するために、格は複数回付与されることがあり得、かつ最後に付与されたものだけが具現化すると考え、次のように規則化している：

(29) 1つのプロトタイプ規則(The One-Prototype Rule)

In the configuration [$\beta n x [\beta n y \dots \beta \dots]$] (order irrelevant), where x and y are the realization of prototypes, delete y .

「配列[$\beta n x [\beta n y \dots \beta \dots]$]において(語順は関係ない)、 x と y がプロトタイプの具現化したものである場合、 y を削除せよ。」

これは議論の中で改定を受けたバージョンだが、改定前のバージョンは以下の通りである(Pesetsky 2013: 11)。恐らくこちらの方が直感的にその主旨が理解しやすいと思われる：

(30) 1つの接尾辞規則(The One-Suffix Rule)

Delete all but the outermost case suffix.

「最も外側にある各接尾辞以外は削除せよ。」

例えば与格を持つ N について説明すると、名詞の与格形は、まず N は最初から属格を持ち、それに D から主格を受け、さらに顕在的ではない P から与格を受ける。そして、最後に付与された与格の接辞のみが具現化される。以下は *стол*「机」と *лампа*「明かり」の単数与格の例である：

(31) Pesetsky (2013: 13)

stem	NGEN	DNOM	POBL	
стол	(-a)	(-ø)	-y	→ столу
лампа	(-ы)	(-a)	-e	→ лампе

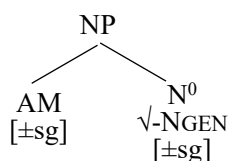
本稿での格の「上書き」も後から与えられた方が具現化するので、この考え方はそれと似た考え方と言って良いのかもしれない。

9.2.1.3. NBR features and NBR morphology

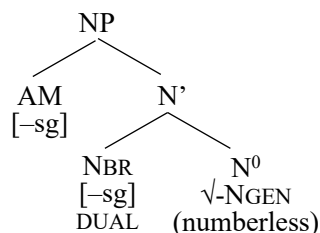
Pesetsky (2013: 25)は PcQ を分析的な数(NBR)の標識と捉え、語根($\sqrt{\quad}$)は numberless と考える。つまり、他の Q の場合は統合的に $\sqrt{\quad}$ に数標識があるが、PcQ では $\sqrt{\quad}$ は数を持たず、代わりに分析的に Q が数標識としての機能を果たす。

9. ロシア語の Q の連続体性と本稿の説明の妥当性

(32) 統合的数(Synthetic NBR)



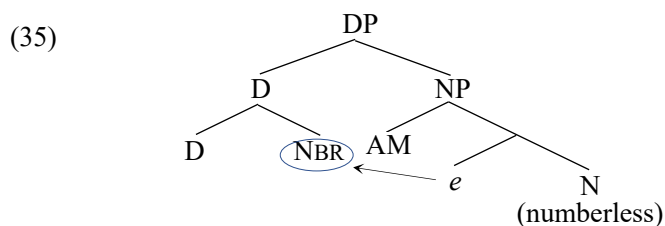
(33) 周辺的雙数



さらに、通常の複数[-sg]以外に PcQ は dual, trial, quadral といった素性も持ち、形容詞は[-sg]として複数形に、名詞は numberless としてデフォルトの単数形になるとしている。ただし、これだけでは以下の例の語順が説明できない(グロスは Pesetsky 2013 のまま)。

- (34)(a) два новых стола
two-nom new-gen.pl table-gen.sg
(b) *новых два стола
new-gen.pl two-nom table-gen.sg
「2つの新しい机」 (Pesetsky 2013: 26)

そのため、以下のような義務的な NBR-to-D movement を想定している。



ちなみに、この考え方だと、絶対複数名詞はその性質上 numberless であり得ないので、PcQ が絶対複数名詞(pluralia tantum)と結合できないことも説明できる。

以上が Pesetsky(2013)の理論的枠組みの根幹部分である。次節 9.2.2. でこれと比較するために本稿のこれまで提案してきた要点をざっと概観する。

9.2.2. 本稿のここまでの要点

本稿ではこれまで以下の各点を提案することで様々な言語事実の説明を試みてき

9. ロシア語の Q の連続体性と本稿の説明の妥当性

た.

(36)(=2-70) 複数における性の削除

[gender X] → ∅, if [pl]

(37)(=2-80) 複数における屈折タイプの削除

[dec. type X] → ∅, if [pl]

(38)(=7-23) 少数における性の素性の削除

[gender ±m, ±f] → [gender ∅, ±f], if [pc]

(39)(=4-90) 数量属格以外での少数の複数化

[GenQ]以外の格が与えられると [num (±pl X), (±pc Y)] → [(±pl X)]

(40)(=7-50) 対格の属格化(ver.2)

有生[an]であり、かつ性素性[-m]も [I]以外の屈折タイプもなければ

[Acc] → [Gen]

(41)(=5-81) 対格の主格化

対格に固有の形態がなければ [Acc] → [Nom]

なお、これまでの議論で Q の持つ一致素性とそのスロットは以下の通りで、これから Q が形容詞～名詞の間に連なる連続体を成していることが見て取れる。

(42) Q の連続体(形容詞～名詞)⁴

	1	PcQ		ColQ	HQ		NQ	QCN
		2	3, 4		5~	100		
数	[(∅), (∅)]	[(∅), (∅)]	[(∅), (∅)]	[(∅)]	×	×	[sg/pl]	[sg/pl]
性	[(∅), (∅)]	[∅]	×	×	×	×	[m]...	[m]...
有生性	[∅]	[∅]	[∅]	[∅]	×	×	[in]	[in]
タイプ	×	×	×	×	[III]	[IV]	[I]...	[I]...

さらにこれに加えて、7.では以下を提案した。

(43)(=7-8)QP において探索子は Q による格付与で形成される CB の下でも必要なら目標を探すことができる。

(44)(=7-33) [±upNum]に代わる提案

(a) N から CB を越えた上方向の数素性のコピーは選択的に行われ、その代わり Q から数素性が上方向にコピーされることはない。

(b) 述語の一致の Ctrl の指定の際も AM の探索子同様、最も近く c 統御するものを Ctrl として指定する。

(45)(=17)Q の格付与によって形成された CB の下の節点を述語の一致の Ctrl に指定することが可能である。

⁴ この表は上の(16)から一部項目を削除したものである。

9. ロシア語の Q の連続体性と本稿の説明の妥当性

そして、これらそれぞれの Q が示す一致に関する振る舞いと格に関する振る舞いが形容詞と名詞の間に形成されつつある Q という範疇をそれたらしめている Q 的特徴であると考え以下の様にまとめた。

(46)(=26) Q 的特徴

	1	PcQ		ColQ	HQ		NQ	QCN
		2	3, 4		5~	100		
PreGenQ	-	+	+	+	+	+	-	-
GenQ を付与	-	+	+	+	+	+	-	-
CB の下に述語の Ctrl	-	+	+	+	+	+	+	-
CB の下を探索	-	+	+	+	+	+	-	-
CB を越えて上に数	-	+	+	+	+	+	+	+

さらに、本稿ではロシア語の数と性の素性は以下の通り複数の値の組み合わせからなると考える。

(47)(=4-51)[sg] = [-pl]; [pl] = [+pl]; [pc] = [+pl, +pc]

(48)(=4-54)男性 = [-f, +m]; 中性 = [-f, -m]; 女性 = [-m, +f]

これらに基づいた議論により 8. では Pesetsky (2013) が提案し、光井 (2018a) も利用する \mathcal{K} を以下の通り再定義を試みた。

(49)(=8-33) ゼロ形態素 \mathcal{K} の再定義

(a) \mathcal{K} は名詞句内の任意の箇所に併合されうる

(b) \mathcal{K} が c 統御する節点の上には性素性が出ることを許さない境界が形成される

(c) \mathcal{K} は素性[-m, +f]をもち境界の外の NP 内の節点にその素性がコピーされる

それに加えて以下の表層フィルターを提案することで、性に関わる意味的一致の可否に関する現象を説明した。

(50)(=8-37) * [+f] & [I]

さらに、素性のスロットは必ず1つの素性によって埋められなければならないとして、以下のフィルターも提案した。

(51)(=4-89) (a) * [∅]

(b) * [(x, y)]

本稿でこれまで提案してきたこれらの規則等の多くは理論とは別の記述的に既に先行研究で指摘されていたものを形式化したものであることも重要なポイントである。

9. ロシア語の Q の連続体性と本稿の説明の妥当性

9.2.3. PcQ に関わるいくつかの現象をめぐって

前節で Pesetsky (2013)の理論の概観と本稿及びそれに先行する匹田 (2007, 2010, 2013, 2015, 2017, 2018)でこれまでに提案してきた知見についてまとめ直した。以下 Pesetsky (2013)と本稿での提案に従ってそれぞれの理論が実際の現象をどう説明しているか、数と格の不一致(9.2.3.1.), 女性の一致を引き起こす男性名詞(9.2.3.2.), PcQP のいわゆる単数属格形(9.2.3.3.), 対格の形態(9.2.3.4.), 女性名詞を含む PcQP の形容詞の形態(9.2.3.5.), 述語の一致(9.2.3.6.), 絶対複数名詞との結合(9.2.3.7.), Q に先行する形容詞 *добрых, целых* などの形容詞(9.2.3.8.)の順で見えていき、2つの理論を具体的な現象説明の議論において比較する。

9.2.3.1. 数と格の不一致

QP が示す典型的な NP と異なる振る舞いとしてしばしば指摘される点に、通常なら一通りしかない格と数が1つの QP 内に複数混在することがあるという点がある(グロスとは本稿でこれまで提案しているものではなく一般的な解釈のものである)。

(52)(a) эти последние два красивых стола (Pesetsky 2013: 1)
this-nom.pl last-nom.pl two-nom beautiful-gen.pl desk-gen.sg

(b) этим последним двум красивым столам (Pesetsky 2013: 2)
this-dat.pl last-dat.pl two-dat beautiful-dat.pl desk-dat.pl

「これら最後の2つの美しい机」

(53)(a) эти последние пять красивых столов (Pesetsky 2013: 2)
this-nom.pl last-nom.pl five-nom beautiful-gen.pl desk-genq.pl

(b) этим последним пяти красивым столам (Pesetsky 2013: 3)
this-dat.pl last-dat.pl five-dat beautiful-dat.pl desk-dat.pl

「これら最後の5つの美しい机」

これらの例で(a)は QP は主格環境にあるが、(52a)では、*стола* と *эти, последние, красивых* とで数が異なっており、*красивых стола* と *эти последние два* とで格が異なっている(ように見える)。一方(53a)では、*эти последние пять* と *красивых столов* とで格が異なっている(ように見える)。しかし斜格(この場合は与格)の(b)ではいずれも(数の対立のない Q を除き)全て複数・与格で数にも格にも違いは無い。何故このような「不一致」が生じるのか？

9.2.3.1.1. Pesetsky (2013)の説明 この現象を説明するために Pesetsky (2013)は上記(28)の他に以下の規定を加える。

(54) 格形態法の数がいかに特定されるか (Pesetsky 2013: 33)

Morphology assigned by α to β under FA reflects

- a. the NBR value of β if β is valued for NBR, and
- b. the NBR value of α otherwise.

9. ロシア語の Q の連続体性と本稿の説明の妥当性

「 α によって β に FA のもと付与される形態法は以下を反映する

- a. もし β が数の値をもっているのなら β の数の値(the NBR value), そして
- b. さもなくば α の数の値」

さらに、以下の各点を特別な規定として追加している：

(55) a paucal obligatorily occurs with a null QUANT (Pesetsky 2013: 54)

「paucal⁵は義務的に \emptyset の QUANT とともに現れる」

(56) NBR (...) is attracted by a feature of QUANT – and moves to QUANT

(Pesetsky 2013: 53)

「NBR は QUANT の素性によって引き寄せられ、QUANT に移動する」

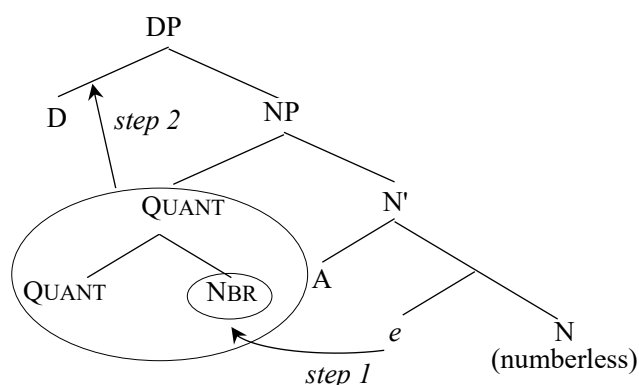
(57) D uniformly attracts QUANT. (Pesetsky 2013: 56)

「D は一義的に QUANT を引き寄せる」

以上を基に、まずは以下のような PcQ の例を 2 段階に移動するとして説明する：

(58) (a) два красивых стола
two-nom beautiful-gen.pl desk-gen.sg
「2つの美しい机」

(b) 2 段階理論 (A two-step theory) (Pesetsky 2013: 54)



N は(27)で規定したようにそもそもから属格で、単数属格形として具現化するが、実際その数は単数ではなく、numberless である。A は N から属格を、NBR から数を受け取る。そして NBR は最終的に主格を D から受け取る。このように格と数が均等でないことを説明する。

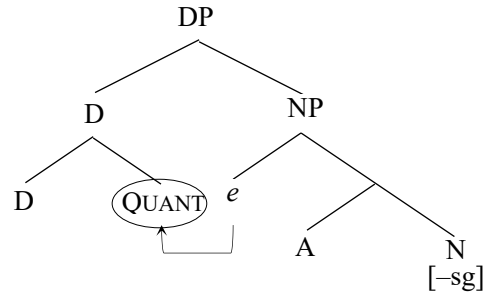
一方 5 以上の数量詞では格が異なっても、数は同じである。それは *пять* は paucal(本稿での PcQ)と異なり最初から QUANT にあり、N は複数という数を持っているからである。*пять* は最初から QUANT にあるのでここでは D までの 2 段階の移動は起こらない。

⁵ “paucal”は本稿での PcQ のこと。

9. ロシア語の Q の連続体性と本稿の説明の妥当性

(59)(a) *пять красивых столов*
 five-nom beautiful-gen.pl desk-gen.pl
 「5冊の美しい本」

(b) QUANT-to-D movement



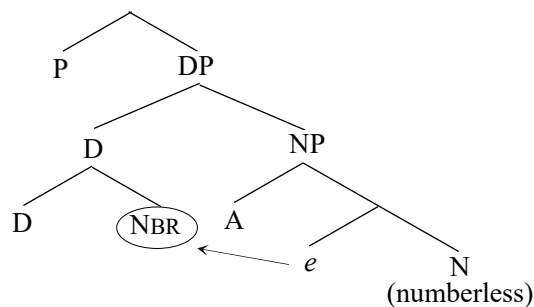
次に QUANT の前後の一致定語についてどう考えているのかを見る：

(60) [DP эти [D' последние [D' D+два [NP красивых [_{тpауcaл} стола]]]]] (Pesetsky 2013: 29)

D が NP と併合した時点ではまだ(28)の *complementation requirement* が満たされていないので主格が NP に付与されることはない。QUANT が移動してはじめて主格が付与されるが、このときは「遅すぎる」ので NP への主格の付与は行われぬ(Pesetsky 2013: 28)。しかし、その後 *эти, последние* などが併合したときにはすでに補部要求 (*complementation requirement*) は満たされているので、それらには主格が付与されると説明される。

斜格の場合、(27)で見たように、顕在的かどうかは別として P が存在することが前提とされている。

(61) P の併合 (Pesetsky 2013: 31)⁶



そして、以下のように規定することによって、格の不統一が消失すると説明している：

⁶ (58)で見たように NBR は QUANT を経由して D に移動するが、ここでは煩雑さを避けるためそれは無視する。

9. ロシア語の Q の連続体性と本稿の説明の妥当性

(62) P (unlike D) has no second complementation requirement that motivates head movement to it. Such a P should uniformly assign its morphology to all the terminal elements of DP.

(Pesetsky 2013: 31)

「(D と異なり)P はそこへの移動を理由づける 2 次的補部要求を持たない. このような P は一義的にその形態法を DP の全ての末端要素に与えなければならない」

また、これだけでは(52b)の例で数についての不統一も消失していることが説明できない. そこで、次のような P に関する規定を追加することでその問題も説明している:

(63) We thus conclude that prepositions (both null and overt) bear an unvalued, presumably uninterpretable number feature ($u\text{NBR}[]$), which receives its value by acting as a probe and triggering Agree with the closest bearer of valued NBR. (Pesetsky 2013: 32)

「(\emptyset であろうと顕在的であろうと)前置詞は値を持たないおそらくは解釈不可能な数素性 ($u\text{NBR}[]$)を持ち、その素性は、探索子として振る舞い最も近くにある値のある NBR を持つものとの一致の引き金を引くことによって、その値を受け取る」

9.2.3.1.2. 本稿での説明

一方、本稿では 2.3.2. で見た Babby(1987)の格に関する以下の捉え方を採用し、さらにロシア語の数にもう一つの少数([+pl, +pc])という名詞の数量属格形以外では複数と融合する数を想定することで説明を試みている.

(64)(=2-29) Babby (1987)の理論

- (a) GenQ という 7 つめの格を想定
- (b) 構造格: Nom, Acc, GenQ
- (c) 語彙格: Gen, Loc, Dat, Ins
- (d) 語彙格 > 構造格
- (e) 局所性原理により近いものが優先

これらを想定することで、Pesetsky (2013)と同じ以下の例文の格と数の形態について説明を試みた(例文のグロスには伝統的な理解によるもの).

(65)(=52)

(a) ЭТИ последние два красивых стола (Pesetsky 2013: 1)
this-nom.pl last-nom.pl two-nom beautiful-gen.pl desk-gen.sg

(b) ЭТИМ последним двум красивым столам (Pesetsky 2013: 2)
this-dat.pl last-dat.pl two-dat beautiful-dat.pl desk-dat.pl

「これら最後の 2 つの美しい机」

9. ロシア語の Q の連続体性と本稿の説明の妥当性

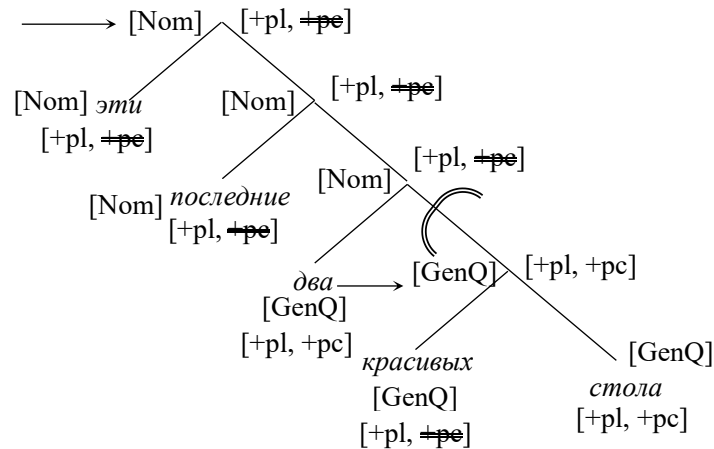
(66)(=53)

(a) эти последние пять красивых столов (Pesetsky 2013: 2)
 this-nom.pl last-nom.pl five-nom beautiful-gen.pl desk-genq.pl

(b) этим последним пяти красивым столам (Pesetsky 2013: 3)
 this-dat.pl last-dat.pl five-dat beautiful-dat.pl desk-dat.pl
 「これら最後の5つの美しい机」

(65, 66)ともに(a)は主格環境, (b)は斜格環境(この場合は与格)にあるQPの例であり, 以下の(67)は主格環境(a)の場合を樹形図で示したものである. この場合, まず PcQ *два* は PreGenQ を持っており, それが少数[+pl, +pc]を持った *красивых стола* に併合して[GenQ]を付与しそれが句の末端まで浸透する. *стола* の少数[+pl, +pc]は格が[GenQ]なので変更はないが, AM *красивых* は形容詞であり, 名詞と異なり形態的に少数と複数を区別することはない. そのため[+pc]が削除され複数形になっている⁷. その後句の外部から[Nom]が付与されると[GenQ]を既に与えられているところ以外には浸透し, [GenQ]以外の格が与えられたので(39)により数が少数[+pl, +pc]から複数[+pl]に書き換えられる. 結果として句の中に主格 [Nom]と数量属格 [GenQ]という2つの格および複数 [+pl]と少数 [+pl, +pc]という2つの数が併存していることになる.

(67)

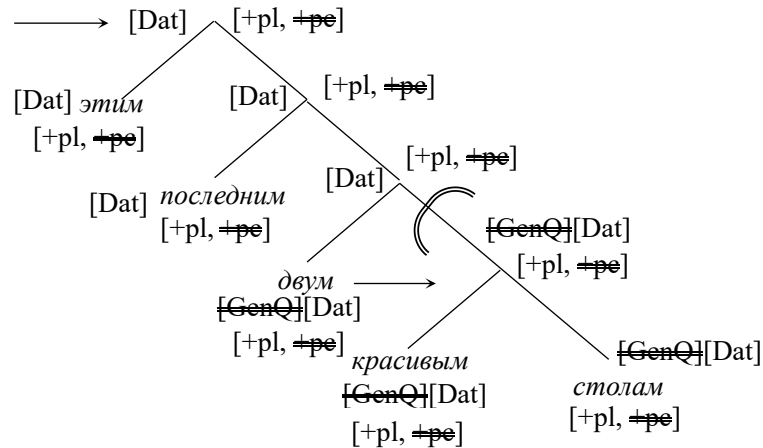


一方(68)は斜格環境(b)の場合を樹形図で示したものである.

⁷ただし, 形容詞なので[+pc]が削除されて素性的に複数になっているのか, あるいは形容詞などのAMは単に形態的に少数と複数の区別が一切ないだけで数素性自体は[+pl, +pc]のままなのかは今後の課題である. 現時点では[+pc]が削除されたと考えておく.

9. ロシア語の Q の連続体性と本稿の説明の妥当性

(68)



斜格環境(b)と主格環境(a)の違いは頂点に斜格(この例では与格)が付与されるか主格が付与されるかだけの違いであり、それが結果として(a)と(b)の句の内部での格と数の混在を引き起こしている。つまり(a)では頂点に付与された[Nom]は既に[GenQ]が与えられている節点までは(64e)によって浸透することができないが、(b)では、頂点に付与された[Dat]は(64d)により語彙格の[Dat]は構造格の[GenQ]に優先されるので既に[GenQ]がある節点にも上書きして浸透することができる。その結果として(39)により全ての節点の数が複数[+pl]に統一される。

このようにして、本稿での説明では主格環境と斜格環境での異なった格と数の分布を頂点に付与された格が何かによってシンプルに説明ができています⁸。

9.2.3.2. 女性的一致を引き起こす男性名詞

8.で見たようにロシア語の男性名詞のうち職業名などを表すものはしばしば実際の指示対象の自然性に従い女性での一致が可能な場合がある。以下は全て女性の医師を指示している例である：

(69) (a) Новый врач пришел.
new-nom.m doctor-nom.m come-3a.m

(b) Новый врач пришла.
-m -m -f

(c) *Новая врач пришел.
-f -m -m

(d) Новая врач пришла.
-f -m -f

「新しい(女性の)医師が来た」(Pesetsky 2013: 36)

⁸ 具体的に樹形図で示したのは PcQP の場合だけだったが、HQ の場合でも HQ と N の当初の数が異なるがそれ以外は PcQP の場合と全く同じである。

9. ロシア語の Q の連続体性と本稿の説明の妥当性

上の例では(c)のみ非文である。また、以下のように *РсQ два*「2」、*оба*「両方」、*полтора*「1.5」は主格環境では女性で一致することはできない。

(70) *два/*две / оба/*обе / полтора/*полторы* *врача*
two-genq.-f/+f both-genq.-f/+f one_and_a_half-genq.-f/+f doctor-genq.pc
「2人の/両方の/1.5人の(わずかの)医師」 (Pesetsky 2013: 42)

しかし、斜格環境だと女性での一致が可能になる。

(71) (a) 与格：*обеим врачам* (Pesetsky 2013: 44)
both-dat.+f doctor-dat.+f
(b) 具格：*обеими врачами* (Pesetsky 2013: 44)
-ins.+f -ins.+f
(c) 処格：*обоих врачах* (Pesetsky 2013: 44)
-dat.+f -dat.+f
(d) 属格：*обоих врачей* (光井 2018b: 30)
-gen.+f -gen.+f
「両方の医師」

以上の様に容認可能性が変わるのは何故か？

9.2.3.2.1. Pesetsky (2013)の説明

Pesetsky (2013: 39)は(69)の例の可否を説明するために音形を持たない Ж という形態素を導入した⁹。

(72) I propose that “feminization” is the consequence of the adnominal merger of a phonologically null morpheme whose denotation is ‘female’ (...)

「私は「女性化」は「女性」という意味を持つ音形的にゼロの形態素を名詞に併合させた結果であることを提案する」

(73)(=8-4)

(a) An optional null morpheme Ж ‘female’ may be merged at any point above a certain structural threshold within NP. Low adjectives fall below this threshold.

(b) Once Ж merges, the nominal counts as feminine for agreement purposes from then on.

「(a)選択的なゼロ形態素 Ж‘女性’は NP 内の特定の境界 (threshold)の上のいかなる点にも併合することができる。「低い形容詞 (low adjectives)」はこの境界の下にある。

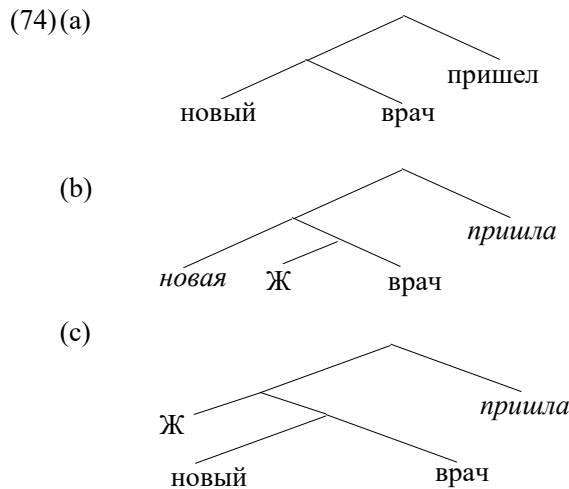
「(b)Ж が併合されるとその名詞 (the nominal)はそれ以降一致にとって女性であると見なされる。」

つまり、Ж は名詞句の任意の位置に併合しそこから上(あるいは外)では女性形で一致を行うという性質を持つ。Pesetsky (2013)はこれを利用して女性を指示する男性名詞

⁹ Pesetsky (2013)によるこの問題に対する説明は既に 8.でも行っている。

9. ロシア語の Q の連続体性と本稿の説明の妥当性

が女性で一致を起こすことが可能なパターンを説明した。



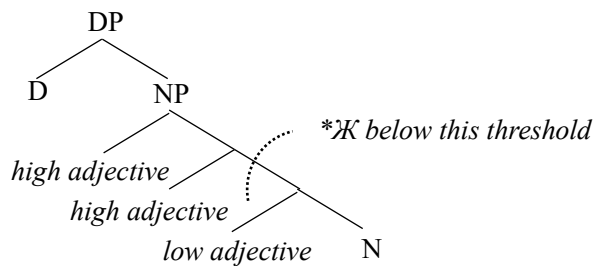
(a)では Ж の併合が行われていないので AM も述語も男性形のままである。(b)では *врач* のすぐ上に Ж が併合して、結果 *новая* と *пришла* の両方が女性形になっているが、(c)では形容詞の上に Ж が併合している。その結果、こちらでは形容詞 *новый* は男性形だが、述語動詞 *пришла* は女性形となっている。この考え方では当然のことだが、述語動詞が男性形で形容詞が女性形という(69c)のようなパターンはあり得ないことになる。

また、イディオムとしての解釈を受けるような形容詞、すなわち名詞句内で最も低い位置に現れる形容詞(low adjective)は以下のように女性形で一致することが不可能であることがしばしば指摘されている：

(75) *Главный/ *Главная врач поликлиники сказала, (...)*
 main-nom.m -nom.f doctor-nom.m clinic-gen say-pa.f
 「医院の主任医師は言った」 (Pesetsky 2013: 37)

このことから、Ж は low adjective より上に併合されなければならないとしている。

(76) Pesetsky (2013: 40)より図の一部のみ抜粋



次に主格環境と斜格環境での女性での一致の可否の違いについては以下の様に説

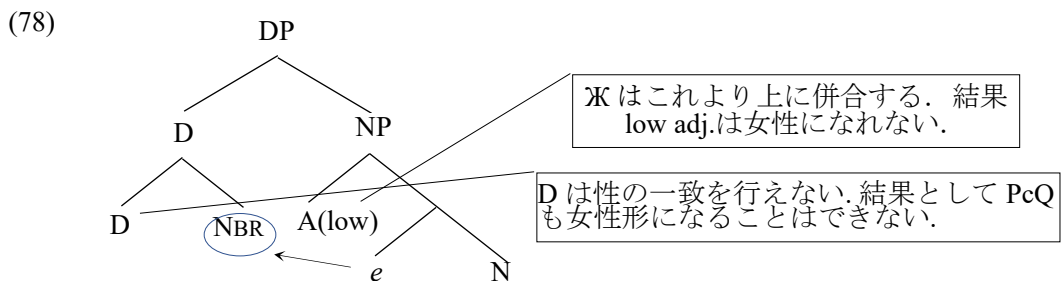
9. ロシア語の Q の連続体性と本稿の説明の妥当性

明している。まず主格環境では、上述のように \mathcal{K} は low adjective より上にしか併合できない。名詞の数表示である PcQ は必然的に low adjective より下に併合されなければならないので移動前に PcQ が女性の素性を受け取ることはない。その後 PcQ は QUANT を経て D へと移動するが、Pesetsky (2013: 43) は以下のように規定している：

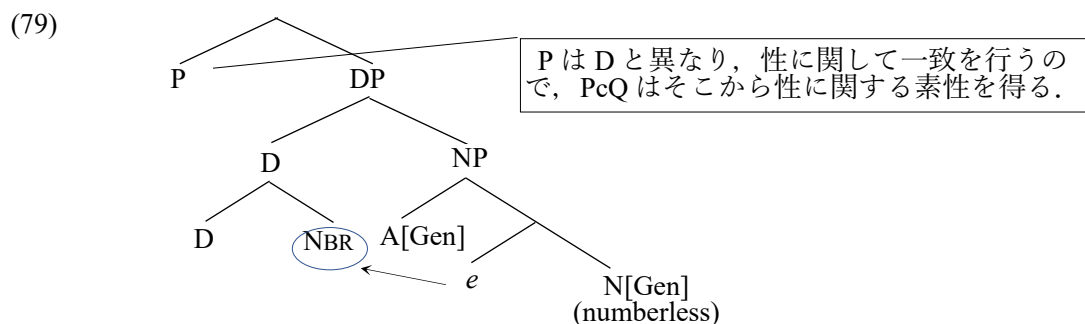
(77) D does not bear an unvalued gender feature in Russian (unlike adjectives and demonstratives).

「ロシア語において D は値のない性素性を持たない」

結果として D は性の一致を行うことができないので、PcQ は D から女性素性を受け取ることができず、主格環境で女性の一致を行うことはできない。



主格環境で PcQ が女性で一致することができないことは上のように説明したが、では、斜格環境で可能なのは何故であろうか。Pesetsky (2013) は P は D と異なり数と性の空の素性を持っているとここで規定する。すなわち P は性と数に関して一致するので、PcQ はそこから性に関する素性を得ることができる。



ただし Pesetsky (2013) は属格を斜格に入れていないため、この議論の考慮の対象にはなっていないが、(71d) に示したように光井 (2018b) は属格においても PcQ が女性で一致することは可能であるとしている。Pesetsky (2013) は後置修飾名詞の属格について別途議論を展開している。まず、(28) の FA では以下の例は説明できない。*стол* の数素性は最初から値を持っており、それが FA によって後置修飾名詞にコピーされるこ

9. ロシア語の Q の連続体性と本稿の説明の妥当性

とになってしまうからである：

- (80) красивый стол [_{gen} ЭТИХ последних двух молодых актеров]
beautiful desk this-gen.pl last-gen.pl two-gen young-gen.pl actor-gen.pl
「これら最後の 2 人の若い俳優の美しい机」 (Pesetsky 2013: 95)

そこで Pesetsky (2013: 97) は Prototype という概念を導入する：

- (81) Prototype (Pesetsky 2013: 97)

A feature matrix $\alpha\cdot$ is the *prototype* of a lexical item α whose part of speech is x if and only if

- a. for every feature F of some lexical item in x , $F \in \alpha\cdot$; and
- b. for every feature $F \in \alpha\cdot$, F is valued if and only if F is a part-of speech feature.

「素性のマトリックス $\alpha\cdot$ は以下の場合に限りその品詞が x である語彙項目 α のプロトタイプである.

- a. x における何らかの語彙項目の全ての素性 F にとって、 $F \in \alpha\cdot$ である；そして
- b. 全ての素性 $F \in \alpha\cdot$ にとって、 F が値を持つのは F が品詞の素性である場合だけである。」

つまり、 $N\cdot$ は品詞情報以外は値を持たないということである。これを利用して(28)を以下のように改訂する：

- (82) 素性の付与(FA), version 6 of 6 (Pesetsky 2013: 99)

(a) **Copying:** When α merges with β , forming $[\alpha \alpha \beta]$, if α has satisfied its complementation requirements and is designated as a feature assigner for β , its prototype $\alpha\cdot$ is immediately merged with β , forming $[\alpha \alpha [\beta \alpha\cdot \beta]]$.

(b) **Realization:** A prototype $x\cdot$ is realized adjacent to the smallest available element dominated by its sister.

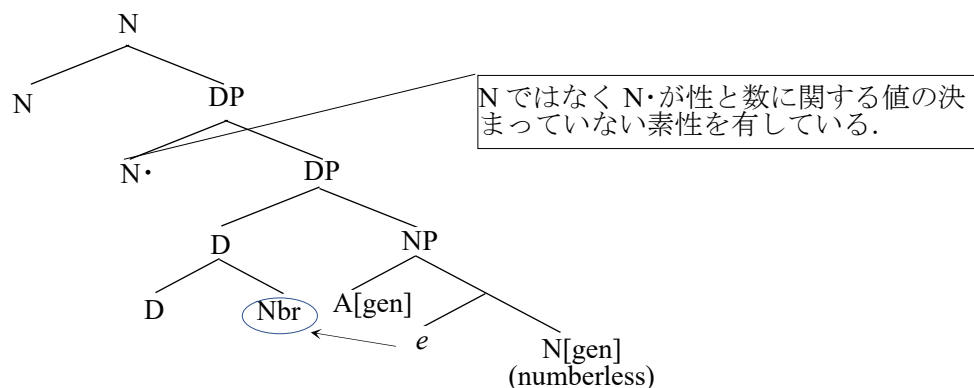
「(a)コピー： α が β と併合し $[\alpha \alpha \beta]$ を形成するとき、もし α がその補部要求を満たし、かつ β の素性付与子とされているなら、そのプロトタイプ $\alpha\cdot$ は β と直接併合して $[\alpha \alpha [\beta \alpha\cdot \beta]]$ を形成する.

(b)具現化：プロトタイプ $x\cdot$ はその姉妹によって支配される可能な最小の要素に付加して具現化される。」

つまり、 α ではなく $\alpha\cdot$ が β の末端要素の形態を決める、と考える。

9. ロシア語の Q の連続体性と本稿の説明の妥当性

(83)



以上のやり方で Pesetsky(2013)は職業などを表す男性名詞が PcQ に対して女性形で一致することを斜格においてのみ認めるという事実を説明している。

9.2.3.2.2. 本稿での説明

既に8.で示したように、光井(2018a)はPesetsky(2013)で提案されたЖを取り入れ、さらにその説明の範囲を様々に拡大している。匹田(2018)も光井(2018a)に従い、(69a-d)を説明するのにЖを導入した。しかし、光井(2018)は(70, 71)についてはPesetsky(2013)とは全く異なる説明を行った。さらに8.3.2.2.で以下の表層フィルターを設定することで光井(2018)での説明を本稿の体系に取り込むことを試みた：

(84)(=50) * [+f & I]

つまり、第1変化で女性であることは認められないということであるが、これによって主格環境と斜格環境の例の可否が説明できる：

(85)(a) *обе врача
both-genq.f doctor-genq.pc.m
 「両方の医師」 (Pesetsky 2013: 42)

(b)к обеим врачам
to both-dat.+f doctor-dat
 「両方の医師の方へ」 (光井 2018b: 6)

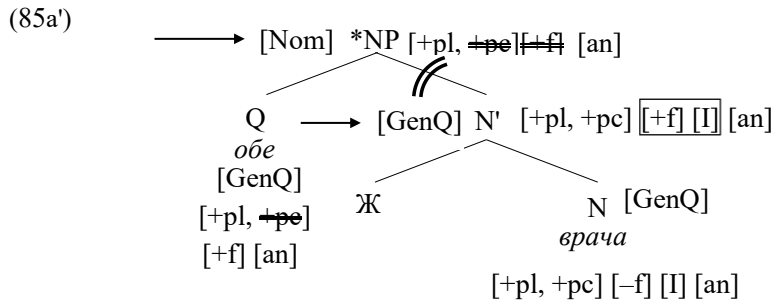
(85a)では主格環境で女性形が非文となり、(85b)では斜格環境で女性形が適格となっている。

これらの違いを本稿では以下の様に説明する：まず(a)の場合、節点 N'には Ж から性[-m, +f]が、*врача*からは数[+pl, +pc], 有生性[an], 屈折タイプ[I]が上がり、NPには*врача*から数が上がるが性と屈折タイプは、[GenQ]付与によるCBをNから性と屈折タイプに越えさせることはないが。*обе*には Ж から[+f]¹⁰が、Nから[an]がコピーされ

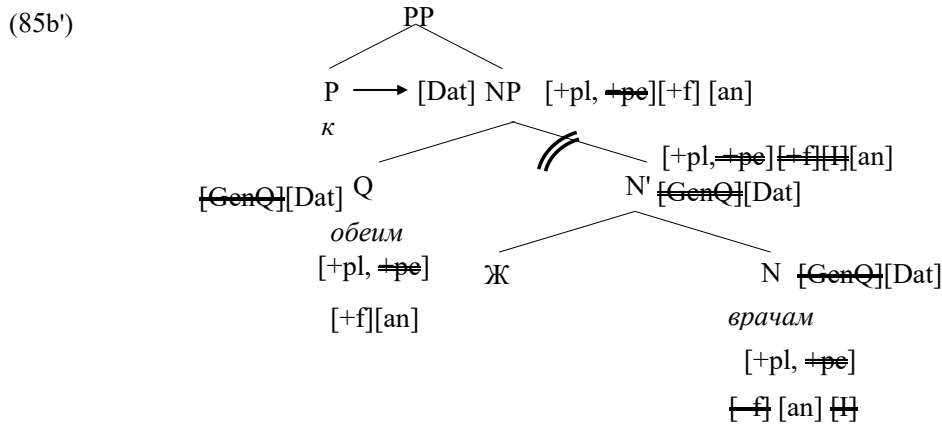
¹⁰ Ж からコピーされる素性は[-m, +f]であるが、*обе*は Ж から性素性がコピーされた時点で数は[+pl, +pc]であるため(38)によって[-m]は削除される。従って*обе*の性のスロットが(51)で規定した

9. ロシア語の Q の連続体性と本稿の説明の妥当性

ているのでそこから NP に [+f] がコピーされ、数は *врача* からコピーされる。NP には [Nom] が付与されるが *обе* による [GenQ] に N' への浸透が阻まれる。また *обе* も PreGenQ を持っているので [Nom] が浸透することはない。主格を付与された NP では少数の [+pc] が (39) により消されて複数になるが数量属格が付与される N' では少数は維持される。最終的に N' の [+f] と [I] が (84) に抵触するので非文となる。



一方、(b)では前置詞 *κ* が併合するまでは(a)と全て同じである。前置詞 *κ* によって与格が付与されるが、(64d)により [Dat] は [GenQ] より優先されるために与格は一番下まで浸透していく。すると [GenQ] 以外の格になるため (39) によりそれらの節点の少数が複数に変わり、その結果として (36, 37) により (a) を非文にしていた [f] と [I] が消えることで適格となっている¹¹。



このような第1変化と女性という素性の共存が不可能だということは 8.3.2.2.1.でも示したように、記述的事実から導かれたものであり、理論の矛盾を解消するために純粹理論的にのみ考案されたものではない。この意味で表層フィルター (84) には重みがあると思われる。

ように1つしか値を受け入れられなくても問題がない。

¹¹ 8.の注20でも言及したように、*обеим* の性が何故削除されないかは残された課題である。

9. ロシア語の Q の連続体性と本稿の説明の妥当性

9.2.3.3. PcQP のいわゆる単数属格形

PcQP が従える名詞は一般に単数属格形といわれるが、以下のようにいくつかの男性名詞で通常の単数属格形とアクセントの位置が異なるものがある。

(86) два часа́ / около́ часа́
two hour about hour
「2 時間 / 約 1 時間」

このことは PcQ に後続する名詞を単純に単数属格形と解釈できないことを意味する。

9.2.3.3.1. Pesetsky (2013)による説明

Pesetsky (2013)は PcQ に後続する名詞も属格であることは変わりがないと考える。一方、9.2.3.1.1. で見たように数は PcQ が示すので名詞自体は数を持たないと考える。数のない名詞は結果としてデフォルトの単数形で現れている。

一致定語や斜格における名詞が複数になるのはやはり 9.2.3.1.1. で見たように、Q が移動し、D や P を通じて Q の数を得るからと説明している。

では、デフォルトとしての単数形がなぜ(86)のように一部で PcQ に後続するとアクセントの移動が起こる、つまり別の形態になるのであろうか。この点についてはまず、以下のように述べている：

(87) (...) no proposal is likely to be able to predict the anomalous behavior of the five nouns that display the stress shift (...) (Pesetsky 2013: 90)

「いかなる提案もアクセントの移動を示す 5 つの名詞の異常な振る舞いを予測することはできないように見える」

(88) The strongest argument that could ever favor one analysis over another must therefore concern degree of anomaly: to what extent does a given proposal provide an independently motivated pigeonhole into which the anomaly fits? (Pesetsky 2013: 91)

「ある分析を他のものより良いとする最強の議論はそれ故、その異常さがうまく当てはまり独立した根拠のある分類をその提案がどの程度もたすことができるのか、という異常の程度の問題なのである」

つまり、厳密な説明は不可能で、あくまで程度の問題としている訳である。

その一方で、両者を同じ属格とするこの考え方なら、少なくとも「分節音的同一性 (segmental identity)」は予測ができるともしている (Pesetsky 2013: 91)。

また、通常の属格とアクセントが異なる名詞は全て単数形と複数形でアクセントの位置が異なり、このアクセントの移動は複数形でのアクセント移動が例外的に numberless form に拡大したものであり、PcQP での N のみの特異な現象ではないとしている。

9. ロシア語の Q の連続体性と本稿の説明の妥当性

9.2.3.3.2. 本稿での説明

本稿では 4. で述べたように秋山(2002)の提案を受けロシア語の数を：単数[-pl], 複数[+pl], 少数[+pl, +pc]の 3 項で対立すると考え、かつ 2.3. で触れたように Babby (1980b, 1984, 1985a, 1985b, 1986, 1987)に従い Q が付与する格は通常の属格[Gen]ではなく数量属格[GenQ]であると考えた。つまり PcQ に後続する名詞は「少数数量属格形」である。なお、少数は名詞の数量属格以外ではその対立を失い(=[+pc]を失い), 複数[+pl]に融合する。

つまり、この考え方を採用すると(86)の2つの N が異なる形態であることが明確になり、2つの「単数属格形とされているもの」の形態が何故異なるのかも説明できる。また、何故同じ名詞が単数形になったり複数形になったりするのか、あるいは単数形の名詞と一致するはずの一致定語が何故複数形になるのかが(36)~(39)に挙げたいくつかのルールで極めて単純に説明ができる。

9.2.3.4. 対格の形態

5. で見たようにロシア語の対格を示す形態には 3 種類が存在する。

(89)(a)対格独自の形態

主格：эта	книга	対格：эту	книгу
this-nom.f.in	book-nom.f.in	this-acc.f.in	book-acc.f.in
「この本」		(匹田 2016: 54)	

(b)主格と同じ形態

主格：далекий	путь	対格：далекий	путь
distant-nom.m.in	way-nom.m.in	distant-nom.m.in	way-nom.m.in
「遙かな道」		(匹田 2016: 55)	

(c)属格と同じ形態

主格：мой	учитель	対格：моего	учителя
my-nom.m.an	teacher-nom.m.an	my-gen.m.an	teacher-gen.m.an
「私の教師」		(匹田 2016: 55)	

これらのパターンの使い分けについては、主要部 N と AM が上の例のように同じパターンになること、そしてこれらのパターンの選択に有生性が大きく関わっていることから「有生性の一致」とも呼ばれるが、実際にはこれらのパターンが複雑に混在することもある。以下本節では Pesetsky (2013)と本稿がそれぞれこの現象をどう説明しているかを見る。

9.2.3.4.1. Pesetsky (2013)による説明

Pesetsky (2013)は実際に現れる対格の形態を説明するために、以下の規則を立てた。

9. ロシア語の Q の連続体性と本稿の説明の妥当性

まず、対格付与は次の条件で行われる¹².

(90) VACC 付与に対するロシア語特有の制約

V assigns VACC to β under FA only if

(a) β is [+f] and not [-sg], or

(b) β is [+an], or

(c) β is [+pronominal]. (Pesetsky 2013: 66)

「V は β に対して FA に基づき以下の場合に限り VACC を付与する

(a) β が [+FEMININE] でかつ [-SINGULAR] ではない、または

(b) β が [+ANIMATE] である、または

(c) β が [+PRONOMINAL] である。」

これに当てはまらない場合は対格が付与されず、D による主格形となる。次は AM を屈折クラス (=declension class) に分けるための規則である：

(91) 屈折タイプを一致する要素に付与するための規則

(a) [+FEMININE] → class 2

(b) Otherwise → class 1 (Pesetsky 2013: 66)

これによって、名詞と一致定語の対格形を同じ規則で規定することができる。次の規則は複数において屈折タイプの対立を消失させるための規則である。

(92) [-SINGULAR] の語に対する屈折クラス付与

base → class 1 / __ [suffix, -SINGULAR] (Pesetsky 2013: 67)

なお、数は前述の(54)によって決まる。最後に対格がどのように具現化するかを規定するのが以下の規則である。

(93) VACC の具現化規則

(a) VACC is realized as *-yŋo* (adjectives) or *-y* (other elements) / class 2 __

(b) VACC is syncretic with NGEN / class 1 __

(c) Otherwise, VACC is not realized. (Pesetsky 2013: 67)

「(a)VACC は *-uju* (形容詞) または *-u* (他の要素) として具現化される / クラス 2 __

「(b)VACC は NGEN と同形である / クラス 2 __

「(c) それ以外の場合、VACC は具現化しない。」

規則(93c)によって対格が具現化しないとされたものは結果として主格形になる。都合、最終的に主格形になるものは(90)によって対格の付与から除外されるものと(93c)

¹² VACC とは対格のことである。9.2.1.1. で示したように Pesetsky (2013) は格は品詞が具現化したものと捉えている。

9. ロシア語の Q の連続体性と本稿の説明の妥当性

によって対格の具現化から除外されるものの2種類があることになる。

具体例を見てみよう。(90a)による対格独自形には一本線, (93b)による属格形の場合は二重線, (93c)によって対格が具現化せず主格形の場合は破線を付す。以下に *мы видели...*「我々は～を見かけた」という文を挙げるが、その対格補語には3種類の形態が現れている。まずは数量詞を含まない通常の DP の例である。

(94)対格が(90a)によって付与 (Pesetsky 2013: 68)

(a) Мы видели эту красивую лампу. 「この美しいランプを」
this beautiful lamp

(b) Мы видели эту красивую тетрадь. 「この美しいノートを」
notebook

(95)対格が(90b)によって付与 (Pesetsky 2013: 68-69)

(a) Мы видели этого молодого отца. 「この若い父親を」
this young father

(b) Мы видели эту молодую женщину. 「この若い女性を」
this young woman (90a によっても対格が付与)

(c) Мы видели этого молодого мужчину. 「この若い男性を」
this young man

(d) Мы видели эту молодую мать. 「この若い母親を」
this young mother

(e) Мы видели этих молодых отцов / женщин / мужчин / матерей.
this-pl young-pl father-pl woman-pl man-pl mother-pl

「これら若い父親・女性・男性・母親を」(92 によって屈折タイプの対立が消失)

Pesetsky (2013)は名詞の屈折タイプについて具体的に言及していないものの、Шведова и др. (1980:I: 483)などが示す一般的な分類法を採用していると思われるが、この考え方だと *лицо*「人・人物」や *чудовище*「怪物」のような中性の有生名詞が class 1 になるので分類に修正が必要である。

次に「有生性の一致」が見られる PcQP の例：

(96)対格が(90b)によって付与 (Pesetsky 2013: 69)

Мы видели двух молодых отцов / женщин / мужчин / матерей.
two young-pl father-pl woman-pl man-pl mother-pl

「2人の若い父親・女性・男性・母親を」(92 によって屈折タイプの対立が消失)

動詞は前置詞と同様一致によって数素性を受け取り、結果として格とともに DP 全体が複数になる。では HQ ではどうなるか。

(97)対格が(90b)によって付与 (Pesetsky 2013: 71)

Мы видели пять молодых отцов / женщин / мужчин / матерей.
five

「5人の若い父親・女性・男性・母親を」

Pesetsky (2013: 70)は *пять* は(あるいは *много* なども)文法的には複数であるが、例外

9. ロシア語の Q の連続体性と本稿の説明の妥当性

的に単数の形態法を持っているとし、それ故(92)に当てはまらないため(93c)により対格が具現化しないことになる、と「例外的」に扱っている。ちなみに、*пять* が複数であるのは以下の例で Q の前にある指示代名詞と形容詞が複数形であることから確認できるとしている。

(98)(=66)「これら最後の 5 つの美しい机」(Pesetsky 2013: 2-3 グロスも)

(a) ЭТИ ПОСЛЕДНИЕ ПЯТЬ КРАСИВЫХ СТОЛОВ
 this-nom.pl last-nom.pl five-nom beautiful-nom.pl desk-gen.pl

(b) ЭТИМ ПОСЛЕДНИМ ПЯТИ КРАСИВЫМ СТОЛАМ
 -dat.pl -dat.pl five-dat -dat.pl -dat.pl

なお、本稿はこの場合の複数の出所は Q ではなく名詞であると結論づけた。

Pesetsky (2013: 140)は *миллион*, *миллиард* などの大きな数値を示す NQ は Q ではなく属格名詞句を従える通常の名詞としている。しかし、本稿で既に示したように、これらは述語の一致などに関して通常の名詞句とは異なる振る舞いを示している。1.で示した連続体で名詞寄りの位置を示しているとはいえ、通常の名詞と同じではない。

9.2.3.4.2. 本稿での説明

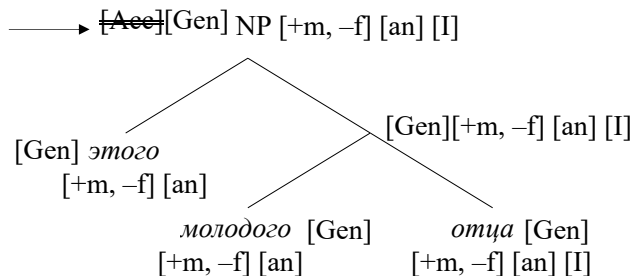
本稿は、5.で論じたように(40)の属格化と(41)の主格化を中心に対格の形態法を説明した。それに加えて 9.2.2.で挙げた他の規則や素性のあり方が関係している。以下、5.で示した例のうち、ポイントとなるものをいくつか挙げる。

まず、まず典型的な名詞句の例を見てみよう。この例では頂点 NP で(40)の条件が揃っているため、付与された対格がそこで属格に変わり、属格が下に浸透している。結果として全ての末端が属格形になっている。

(99)(=95a) Мы видели ЭТОГО МОЛОДОГО ОТЦА.
 this young father

「我々はこの若い父親を見かけた」 (Pesetsky 2013: 68)

(99')



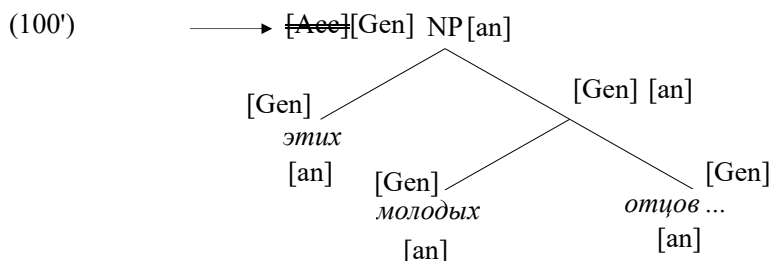
複数の場合、本来的素性としてそれを持っている主要部名詞を除き性と屈折タイプは(36)と(37)によってその対立を失う。その結果として頂点の NP で(40)の条件が揃い、そこ属格化が起こる。その後全ての末端に属格が浸透していき、結果全ての末

9. ロシア語の Q の連続体性と本稿の説明の妥当性

端が属格形で現れることになる。

(100)(=95e) Мы видели этих молодых отцов / женщин / мужчин / матерей.
 these young fathers women men mothers

「我々はこれらの若い父親・女性・男性・母親を見かけた」



ちなみに、前節で言及したように Pesetsky (2013)の方法では中性の有生名詞の場合がうまく予測できていなかったが、本稿の方法でなら単数では属格化が起こらず、複数では属格化が起こることが正しく予想できる。以下は数少ない中性の有生名詞 *чудовище*「怪物」の例である：

(101)(a) Герой убил морское чудовище.
 hero killed maritime-sg.n monster-sg.n.I
 「英雄が海の怪物(sg)を殺した」 (Halle 1994a: 202)

(b) Герой убил морских чудовищ.
 hero killed maritime-pl monster-pl
 「英雄が海の怪物(pl)を殺した」 (Halle 1994a: 202)

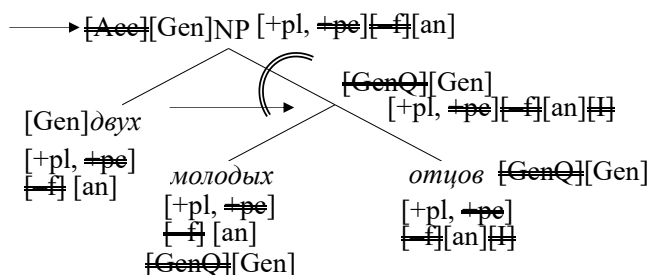
このうち(101a)では *чудовище* が中性であるため(40)の条件が揃わず属格化は起こらない。そして最終的に(41)に従って形容詞 *морское* も名詞 *чудовище* も主格形となっている(第 1 変化名詞も中性の形容詞も、単数形であれ複数形であれ、対格独自の形態を持たない)。一方(101b)では複数であるため(36)と(37)によって性と屈折タイプの素性を失う。結果中性という(40)による属格化を妨げる素性がなくなったため、属格形となる。

次に QR の場合である。

(102)(=96)Мы видели двух молодых отцов / женщин / мужчин / матерей.
 two young fathers women men mothers
 「我々は 2 人の若い父親・女性・男性・母親を見かけた」(Pesetsky 2013: 69)

9. ロシア語の Q の連続体性と本稿の説明の妥当性

(102')



この例では PcQ *два* が含まれており状況が異なっている。まず PcQ によって付与された数量属格によって CB が形成されるが、N の数素性[+pl, +pc]は(44a)によって CB を越えて NP にコピーされうる。また(43)によって PcQ は N の有生性[an]と性[-f]を N に求める(厳密には PcQ が最も近く c 統御する節点)。頂点の NP に対格が付与されると(39)により[+pc]が消され少数は複数に変わる。また(40)の条件が揃っているため対格は属格に書き換えられ、句の中の全ての節点に属格が降りていく。それによって(39)によってやはり少数が複数になり、(36)と(37)によって性と屈折タイプの素性が削除される。

以上の様に、本稿での説明の多くは他のところでも有効でシンプルな規則を組み合わせることによって現象を説明している。

9.2.3.5. 女性名詞を含む PcQP の形容詞の形態

既に 4.5.4. で説明したように、PcQP が主格環境に置かれ、Q に後続する名詞が女性名詞の場合、Q と N の間の形容詞が複数属格ではなく複数主格形になりうることが指摘されている。ちなみに、多くの女性名詞では少数数量属格形(=単数属格形)と複数主格形は同じ形である。

(103)「2つの美しいランプ」 (Pesetsky 2013: 119)

(a) две красивых лампы

two-f beautiful lamp

(b) две красивые лампы

形容詞の属格形は上で触れたように数量属格形として説明できるが、この主格形はそれぞれどのように説明されるのであろうか。(本節では形容詞の複数属格形は二重線で、複数主格形は破線で示す。)

9.2.3.5.1. Pesetsky (2013)の説明

Pesetsky (2013)は主格の形容詞が現れた場合は、形容詞+名詞のいずれも主格であると考え、それを説明するために以下の通り QUANT-to-D 移動が選択的なものとしている。

9. ロシア語の Q の連続体性と本稿の説明の妥当性

(104) QUANT-to-D 移動の選択性 (Pesetsky 2013: 120)

QUANT-to-D movement is optional in a feminine nominal phrase if NBR has moved to QUANT.

「QUANT-to-D 移動は NBR が QUANT に移動した場合女性名詞句では選択的である」

これにより主格が QUANT だけでなく NP の全ての要素に付与されると考えている¹³。それに加えて、形容詞の格に関連して以下のような事実を指摘している。

(105)「机の上に 4 冊の大きな本があった」(Corbett 2006: 196-197)

(a) На столе лежало/лежали четыре БОЛЬШИХ книги.

on_the_desk lie-ra.n -ra.pl four big book

(b) На столе *лежало/лежали четыре БОЛЬШИЕ книги.

つまり、形容詞が複数属格だと述語の一致は pl.3 と n.sg.3 の両方が可能だが、複数主格形になると述語の一致が pl.3 のみ可能になる。さらに、PcQ ではないが、これと似た違いが以下の例にも現れているとしている。以下の(a)の *пять*「5」は先述の通り後続の名詞が(数量)属格形になるが、*многие*「多くの」は名詞を修飾する AM と同様に振る舞い、述語動詞はやはり pl.3 の形態に限られる。

(106)「机の上に 5 つの/多数の大きな物体があった」(Pesetsky 2013: 120-121)

(a) На столе лежало/лежали пять БОЛЬШИХ предметов.

-ra.n -ra.pl five big-genq. object-genq.pl

(b) На столе *лежало/лежали многие БОЛЬШИЕ предметы.

-ra.n -ra.pl many-nom.pl big-nom.pl object-nom.pl

Pesetsky (2013)は QUANT-to-D 移動の有無がこの違いに関わっているとしているが、なぜ形容詞が複数主格だと述語が複数でしか一致できないのかの説明はない。

9.2.3.5.2. 本稿と匹田 (2019)での説明

本稿では形容詞が複数属格になるのは、仮に、名詞が女性の際単純に PcQ が格付与能力を失うからと考える。そもそも格付与能力を失うとしたら当然名詞も複数主格ということになり、その点では Pesetsky (2013)と同じ考え方をしていることになるが、格付与能力の選択的消失という考え方には、(46)に組み込みやすいという意味がある。つまり、以下の様に PcQ の「GenQ を付与」の値を「-/+」に変えることで連続体の中心に集まる Q 的特徴の図を歪めることはない。

¹³ ただし、9.2.3.1.1.で示したように、D が主格を付与するためには補部要求を満たさなければならず、そのためには D への QUANT の移動が必須であるとしていた。この場合、選択的なのは D の補部要求と考えていると思われる。

9. ロシア語の Q の連続体性と本稿の説明の妥当性

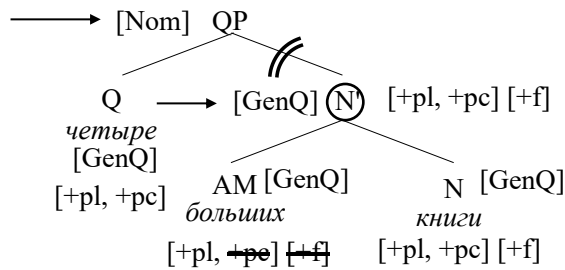
(107)

	1	PcQ		ColQ	HQ		NQ	QCN
		2	3, 4		5~	100		
GenQ を付与	-	-/+		+	+	+	-	-

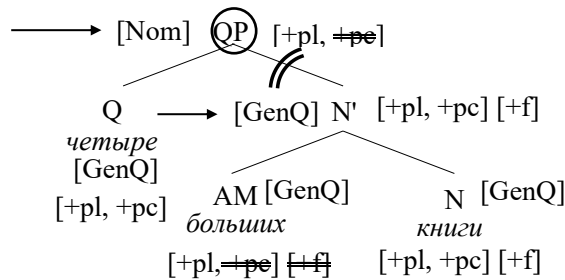
Pesetsky (2013)の説明だとこのように連続体の中に落とし込むという発想は不可能である。

一方、(105)の投げかかけた問題も上で見た(44)により無理なく説明ができる。まず(105a)については以下の通りである。

(105a') N から数が CB を越えて上がらない場合



(105a'') N から数が CB を越えて上がる場合

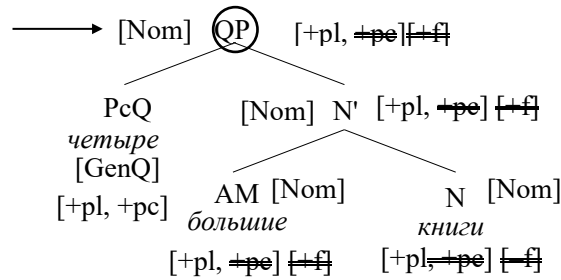


まず、(44a)により CB を越えて N の数素性が上方向にコピーされるかどうかは選択的であり、(105a')が上がらなかった場合、(105a'')が上がった場合である。述語の一致の Ctrl に指定されるのは(44b)により可能なもののうち述語の一致を担う範疇により最も近く c 統御される節点(≡句の中で最も高い節点)なので、(105a')では N'、すなわち n.sg.3 の一致、(105a'')では QP、すなわち pl.3 の一致となり、(105a)には 2 パターンの一致が可能であることが正しく予測される。(3.4.4.2.2. で見たように PcQ と HQ は Ctrl には指定できないと考える。また、(a)の QP には数がないので Ctrl に指定できない。)

また、(105b) については以下の通りとなる。

9. ロシア語の Q の連続体性と本稿の説明の妥当性

(108)



上で述べたように、格付与能力を失うので、PreGenQ を持っている PcQ 以外は全て [Nom] になり、CB も形成されない。その結果性も削除され、(44b)により述語の一致の Ctrl になるのは QP で、述語は pl.3 での一致を行うことになる。なお(106)についても同様に説明が可能である。

以上、本稿での考え方にに基づき「女性 N の場合 PcQ が格付与能力を失う」とすると、体系の他の部分と矛盾することなく説明が可能であることを見た。ただし、「N が女性だと PcQ が何故格付与能力を失うのか」という問題は残るし、またその規則をどのように厳密に形式化するかは今後の課題として残る。

9.2.3.6. 述語の一致

QP が主語の場合、最大で3つの述語の一致の可能性がある。

(109)(=3-3)

(a) Один студент пришел.

one-nom.m student-nom.m come-pa.m

「1人の学生が来た」 (匹田 2016: 365)

(b) Пришло/ Пришли пять студентов.

come-pa.n -pa.pl five student-genq.pl

「5人の学生が来た」 (匹田 2016: 362)

(c) Миллион россиян посетило/ посетили/ посетил Америку.

million-nom.m Russian-gen.pl visit-pa.n -pa.pl -pa.m America-acc

「100万人のロシア人がアメリカを訪れた」 (匹田 2016: 366)

この述語の一致がどのようなメカニズムで複数のバリエントがあり得るのか、という問題は Pesetsky (2013)はほぼ扱っていない¹⁴。以下、本稿での考え方でこれらの現象をどう説明しているかをざっと見る。

この問題については本稿の 7. で扱いそこで提案した(44)によって複数のパターンによる述語の一致の可能性を説明した。すなわち、N から CB を越えて数素性が上方向にコピーされるかされないかによって最も近く c 統御される節点が変わることで指定

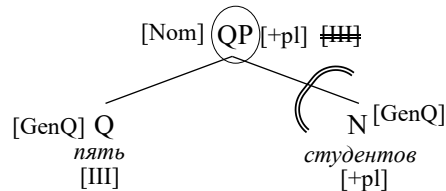
¹⁴ なお、Pesetsky (1982)と Franks (1995)での説明については 3.4.1. で言及したとおりである。それでも述べたように、問題が残っている。

9. ロシア語の Q の連続体性と本稿の説明の妥当性

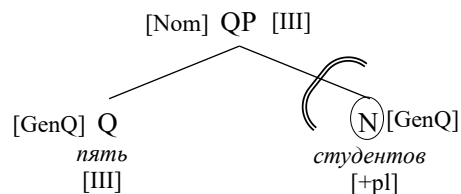
可能な Ctrl が変わり、結果複数の一致のバリエントが保証される。

詳細は 7. を参照していただきたいが、ここでは簡単に全体像を見るのみにとどめる。以下は(109b)で N の数素性が CB を越えて QP にコピーされ、節点 QP が一致の Ctrl になる場合と QP まで N の数素性が上らず節点 N が Ctrl になっている例である。

(110)(a)



(b)



前者では述語は pl.3 に、後者では n.sg.3 の形態をとる。このようにして2つのバリエントが可能であることを説明した。

また、Q の前に主格の AM がつくると述語は pl.3 の一致のみが可能で n.sg.3 は不可能であることもこの方法でシンプルに説明ができる。

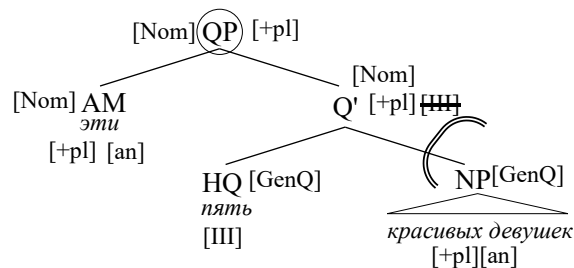
(111)(=7-43)(a) Эти пять красивых девушек пришли / *пришло.

this-nom.pl five-genq beautiful-genq.pl girl-genq.pl come-ra.pl come-ra.n

「これら 5 人の美しい娘がやってきた」

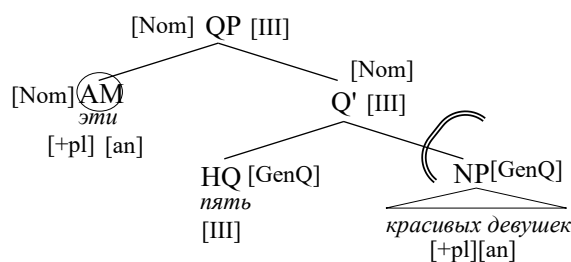
(Franks 1995: 100)

(b) N девушек から数素性が上がる場合



9. ロシア語の Q の連続体性と本稿の説明の妥当性

(c) N *девушек* から数素性が上がらない場合



例文(a)に対して(b)が N から数素性が CB を越えて上がる場合、(c)は上がらない場合であり、(b)では QP が述語の一致の Ctrl に、(c)では AM が Ctrl になるが、いずれの場合でも pl.3 の一致以外はあり得ない。

以上の様に本稿の 7. では述語の一致のパターンについて正しく予測ができることが示された。

9.2.3.7. 絶対複数名詞との結合

Зализняк (1964: 35-36), Шведова и др. (1980:I: 474), Мельчук (1985: 376)など多くの文献で以下の様に PcQ は絶対複数名詞(pluralia tantum)と結合できないことが指摘されている。ロシア語で例えば *сутки*「1日」は絶対複数名詞である。

(112) *два / две / три / четыре суток
 two-genq.-f two-genq+f three four day-genq.pl
 「2/3/4日」

ただし、集合数詞(ColQ)の *двое*「2」、*трое*「3」、*четверо*「4」なら問題はない。

(113) двое суток
 two day-genq.pl
 「2日」

また集合数詞でなくとも斜格環境であれば問題が無くなる。以下は具格の例である。

(114) двумя сутками
 two-ins day-ins.pl
 「2日」 (Зализняк 1964: 35)

このような現象はいかにして起こるのか？

9.2.3.7.1. Pesetsky (2013)の説明

Pesetsky (2013: 55)は(112)のように主格・対格環境において PcQ が絶対複数名詞と共に起できないことを以下の様に説明している：

9. ロシア語の Q の連続体性と本稿の説明の妥当性

(115) Because a *plurale tantum* noun must be grammatically plural, it lacks the numberless form that a paucal requires.

「絶対複数名詞は文法的に複数でなければならないのでそれは少数が要求する数のない形態を持たない」

つまり、絶対複数名詞は必然的に複数であるのに対して、9.2.3.1.1.で説明したように少数の NBR は数をもたない名詞とともに用いなければならないのでこのような結合は不可能となる。

それに対して集合数詞は *нямь* 等と同様に QUANT であり、複数の名詞と結合することは問題ない。また、集合数詞が QUANT であることは格変化のパターンがそれらと同じであることを根拠としている (Pesetsky 2013: 55)。

斜格なら PcQ でも問題ないことを Pesetsky (2013: 56) は以下の点から説明する：

(116) (...) unpronounceable numberless NGEN morphology on N is expected to be overwritten by plural POBL morphology (...)

「N における発音不可能な数を持たない NGEN の形態法は複数の POBL の形態法に上書きされることが期待される」

つまり、斜格では P を通じて格と数を受け取るので問題が無いとしている。

9.2.3.7.2. 本稿での説明

以上の問題を本稿では 4.5.2.2.8. で見たように PcQ と ColQ に以下の様な素性のスロットを想定し、かつ以下の様なロシア語の数素性のあり方、2 つの表層フィルター、数素性の削除規則を設定することで説明した。

(117) それぞれの素性のスロット

(a) (=4-86)PcQ「2」

数	[_(±pl) ∅, (_(±pc) ∅)]
性	[_(±f) ∅]
有生性	[∅]
屈折タイプ	×
格	[∅]

(b) (=4-87)PcQ「3, 4」

数	[_(±pl) ∅, (_(±pc) ∅)]
性	×
有生性	[∅]
屈折タイプ	×
格	[∅]

9. ロシア語の Q の連続体性と本稿の説明の妥当性

(c)(4-88)ColQ

数	[[_{±pl} ∅]]
性	×
有生性	[∅]
屈折タイプ	×
格	[∅]

(118)(=4-54)[sg] = [-pl]; [pl] = [+pl]; [pc] = [+pl, +pc]

(119)(=4-89)2つの表層フィルター

(a)*[∅]

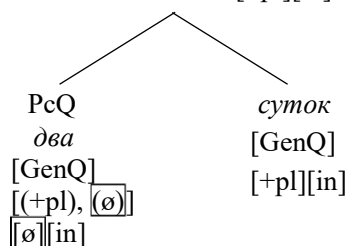
(b)*[x, y]

(120)(=4-90)数素性の削除規則

[GenQ]以外の格が与えられると [_{num} (_{±pl} x), (_{±pc} y)] → [[_{±pl} x]]

まず PcQ を用いた(112)が非文となるのは以下の様に空のスロットが残ってしまうからである。

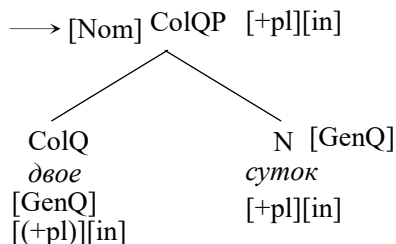
(121)(=4-95b) → [Nom] *PcQP [+pl][in]



(118)にあるように複数の場合は値が1つだけ、少数の場合は値が2つである。絶対複数名詞は数素性は複数[+pl]なので値は1つしかない。しかし PcQ は(117a, b)で示したように数素性に2つのスロットがある。また PcQ のうち「2」は性素性も埋める必要がある。しかし絶対複数名詞は性がないので埋めようがない。以上の点が(119a)に抵触し非文となる。

一方、ColQ を用いた(113)が適格になるのはこちらは(117c)にあるように数素性のスロットが1つの値しか受け入れられないからである。

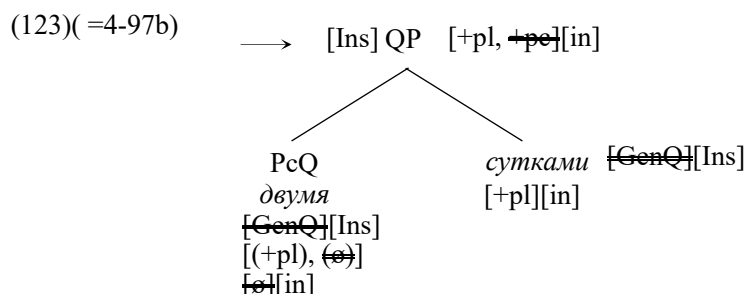
(122) (=4-96b)



9. ロシア語の Q の連続体性と本稿の説明の妥当性

また, ColQ は性のスロットもないので, その点でも問題ない.

さらに, (114)は PcQP でも斜格環境(この例では具格)の場合である. この場合は主格環境と異なり適格となる.



斜格つまり語彙格の場合, (2-29d)の優先順位により既に存在する構造格の[GenQ]を上書きすることで[Ins]は末端まで浸透することができる. その結果(120)により数のスロットが1つ減り, それに伴い(36)により性の素性・スロットも削除される. それらの結果, (119a)に抵触することがなくなるので適格となる.

本稿では以上の様に(112, 113, 114)の適格性の違いを説明した.

9.2.3.8. Qに先行する добрых, целых などの形容詞

例(65a, 66a)からも見て取れるように, 主格環境に置かれたQPでは, Qの前に置かれるAMは主格, Qと名詞の間に置かれるAMは属格形となるのが原則である. ところが, いくつかのAMはQの前に置かれても属格形になることがしばしば指摘されている. (本節では複数属格形のAMは波線, 複数主格形は二本線で示す.)

(124)(a) добрых пять красивых столов
good five beautiful desk-genq.pl
「5つもの美しい机」 (Pesetsky 2013: 57)

(b) целых четыре штуки
whole five piece-genq.pl
「まるまる4個」 (Crockett 1976: 343)

このように想定外の位置に何故複数属格形のAMが現れるのか?

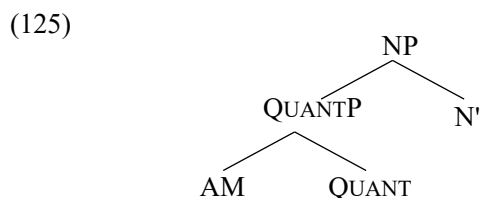
9.2.3.8.1. Pesetsky (2013)の説明

Pesetsky (2013)は上で見たようにQUANTはDに義務的に移動すると考え議論を展開している. また, この奇妙なAMの格と語順の問題を説明するためにこのようなAMも同様にDに移動すると考えている.

また, Crockett (1976)に従って Pesetsky (2013)もこれらの形容詞は名詞ではなく Q

9. ロシア語の Q の連続体性と本稿の説明の妥当性

を修飾しているとする¹⁵。明確な構造は示していないものの、概ね次のような構造を想定していると考えられる：



その上で、まず AM が D に移動し、それに続いて QUANT が移動すると考える。AM は移動する前に N から属格を受け取り次いで D に移動する。この時点で D の QUANT に対する補部要求は満たされていないので FA は適用されず、主格は付与されない。次に QUANT が移動して D の補部要求が満たされることで主格付与が行われ主格が QUANT に付与される。この様にして格と語順を説明している。

ただし、なぜ(124)で主格が *добрых* や *целых* にも与えられないのかは構造をはっきりと示していないのでわからないし、なぜ形容詞と QUANT は別々に動くのか、またなぜ形容詞は D に移動する必要があるのか、など不明な点が多く、ad hoc な部分は否定できないであろう。

9.2.3.8.2. 本稿での説明

この問題に関して考えられるのは、大きく分けて基底でこの場所に AM を置き何らかの方法で属格を与える考え方と、まず通常の属格の AM が現れる位置に置きその後移動する、という 2 つである。Pesetsky (2013) は移動説の一種であるが、QUANT の移動を伴うのでそれによって必然的に AM も移動しなければならなくなったという側面もある。一方で、もともと QUANT を修飾する位置にあったという点では基底説と同じとも言える。

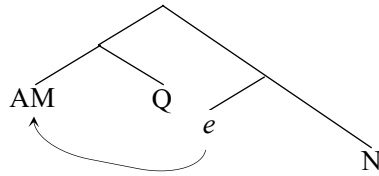
本稿ではこれまでこの問題に関しては一切言及していないし、またこの問題の結論を提示することもできないが、匹田 (2019) では QUANT の移動を伴わない前提での移動と基底生成の両者を以下に示すように比較検討した。

Corbett (1979) は通常の形容詞の位置から(126)のように Q の姉妹(sister)の位置に移動すると考えた。

¹⁵ Crockett (1976: 346) はこれらの形容詞は Q がなくなると意味を成さなくなることを指摘している。

9. ロシア語の Q の連続体性と本稿の説明の妥当性

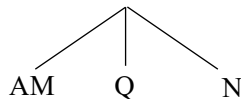
(126)



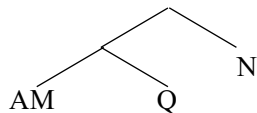
こう考えると形容詞の格と数の形態についてはストレートに説明ができる。ただし、この考え方だと「何故移動するのか？」を説明はできない。

一方、Babby (1987)はこのような移動は ad hoc だし、この基底構造には意味的な理由がないとして、(127a)のような構造で基底生成されると主張し、さらに N への格付与の問題から(127b)での基底生成を否定した。

(127)(a)



(b)



ただし、(127a)は近年多くの理論が避けている「3 分枝」の句構造を想定していること、意味的には(127b)の方がよりストレートに Q と AM の関係を示せること、など議論しなければならない問題が残る。一方(127b)についても AM が何故複数形になるのか、という問題は Babby (1987: 127)だけではなく Franks (1995: 102)も指摘している。

また、ロシア語の格付与は動詞によるもの、前置詞によるもの、形容詞によるもの、名詞によるものいずれでも(少なくとも基本語順においては)左から右に向かって行われている。しかしここでは形容詞に対して Q から左に向かっていると考えると「何故ここだけ？」という疑問は当然であろう。確かに格付与子の Q が被付与子の AM を c 統御しているが、それにしても何故ここだけなのか不思議ではある。

これらのいずれが正しいか、本稿では結論を出すことができないが、いずれにせよ極めて限られた語彙でのみ起こる現象であり、Pesetsky (2013)同様 ad hoc な基底を考えるのは不可避なのかもしれない¹⁶。

ただし、移動があろうと無かろうと名詞句の中で何らかの方法で形容詞に数量属格を付与する方法を想定すれば、前述の(124)のいずれの例もここまで本稿で想定した仕組みで問題なく説明できる。この NP 全体に対して主格(あるいは対格)が付与されても下に浸透することはない。Q や N には[GenQ]があるし、AM も同様である。こ

¹⁶ いずれにせよ、このような位置で可能な AM はいくつかの形容詞に限られ、語彙的な特異性は避けて通れない。ad hoc になることはそういう意味で仕方のないことなのかも知れない。

9. ロシア語の Q の連続体性と本稿の説明の妥当性

これらの[GenQ]が主格の浸透を妨げるからである。

また、Pesetsky (2013: 58)が指摘する以下の2つの例も同様に本稿の方法で問題無く説明がつく。

(128)(a) Последние целых семь лет!

last whole seven years

「ここまるまる7年間も！」

(b)(...)с цельми пятью крупными клиентами (...)

with whole-ins.pl five-ins major-ins.pl client-ins.pl

「まるまる5人の主要な顧客と」

(128a)については最も外側に[GenQ]が与えられていない AM がありそこには主格/対格が浸透することが可能である。一方、(128b)では名詞句全体に付与されている格が具格、つまり語彙格であるため全ての形容詞、名詞、Q に具格が浸透する。数量属格よりも語彙格の浸透が優先されるからである。これらの現象は *добрых, целых* などの AM にどのように数量属格を与えるか、これらは移動しているのかそれとも基底でこの位置に置かれているのかなどのいくつかの点を明らかにすればそれほど矛盾なく本稿の方法に組み込んで説明できると思われる。この点は複雑で抽象的な理論体系によって説明を試みた Pesetsky (2013)とは異なる点である。

9.3. 本章のまとめ

以上、本章では本稿において試みた連続体としての Q とその形式的文法構築がどの程度成功しているのか、効果を上げているのかを検討した。その結果、Pesetsky (2013)との比較において、本稿は説明が可能な範囲は現時点ではまだまだ狭いものの、説明において想定した純粋に理論的な構築物は Pesetsky (2013)より遙かに少なく、極めてシンプルな体系で説明が行えたと考えて良さそうである。さらに設定した規則やフィルターなどの多くは本稿の理論とは別の領域で記述的に既に指摘されてきたものであり、理論のみに依存していない分説得力は高いと言える。また理論から予測される言語事実はその多くがそれぞれの語彙項目の文法素性とそのスロットのあり方に依存している。それらは本稿の理論とは別にいずれにせよ語彙で設定しなければならないものであり、決して理論のためののみ作ったものではない。さらに、複雑な理論体系を想定していないので、まだ説明ができない現象を説明するために新たな規則などを大きな矛盾を引き起こすことなく組み込みやすいのも本稿のアドバンテージなのかも知れない。

しかし、問題は当然残る。次章では全体を振り返りまとめるとともに、残された問題点についても概観したい。

10. まとめと残された課題

10. まとめと残された課題

本稿は数量詞句などの非典型的名詞句を含めたロシア語の名詞句内外での一致と格の振る舞いを、できるだけ多くの現象をできるだけ単純に説明できるように理論構築することを試みた論考である。以下本章では本稿で論じてきた内容をまとめ(10.1.), 次いで本稿では説明できなかった問題と今後の展望を示す(10.2.).

10.1. まとめ

第1章ではまず 1.1.で議論を始める前に本稿の議論を展開するための筆者の基本的な考え方を確認した。それは以下の6点である。

(1)(=1-2) 基本的な考え方

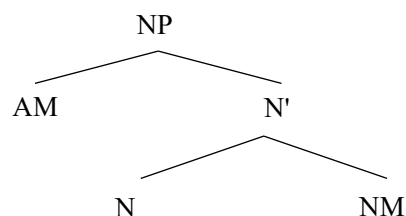
- (a) 同じ現象を説明できるのなら説明はできるだけ単純な方が良い。
- (b) 見えない範疇など抽象的な想定物はなるべく少なめな方が良い。
- (c) できるだけ早期適用原理(Earliness Principle)に従う。
- (d) 先読みはできるだけしない。
- (e) 抽象理論ではなくできれば具体的記述的事実に基づいている方が良い。
- (f) 具体的形式に支えられていない素性の想定はなるべく避ける。(シンクレティズムはなるべくない方が良い。)

続いて 1.2.では議論の出発点として、ロシア語において典型的な振る舞いを示す典型的名詞句がどのようなものかをざっと概観した。ロシア語の典型的名詞句は以下の構造のものと考えた。

(2)(=1-7)

(a) [AM [HN [NM]]]

(b)



ここで AM = Agreeing Modifier(一致定語) ; NM = Nonagreeing Modifier(不一致定語)である。また、典型的な名詞句について以下の一般化が可能であることも確認した。

(3)(=1-9)

- (a) AM は主要部名詞 N に、性、数、格、有生性に関して一致する。

10. まとめと残された課題

- (b)NP を主語とする述語は必要に応じて主要部名詞 N と一致する.
- (c)NM は AM, 主要部名詞 N, 述語といかなる素性に関しても一致しない.
- (d)主要部名詞 N は NM に格付与することが可能である.

そして、これらの原則から逸脱する例がロシア語には以下の例で見るように散見されることも指摘した.

(4)=(1-11) 数量詞句

Прошло/ Прошли [два месяца]. (НКРЯ 2021.08.06)
 pass-pa.n pass-pa.pl two-nom.m month-gen.m
 「2ヶ月が過ぎた。」

(5)=(1-12)人間を表す男性名詞

[Новая / Новый врач] пришла / пришёл. (Pesetsky 2013: 40-41)
 new-nom.f -nom.m doctor-nom.m come-pa.f -pa.m
 「新しい医師が来た。」

(6)=(1-13)等位接続構造と擬似的等位接続構造

(a) Пришли / пришёл [машинист и помощник]. (Граудина и др. 1976: 31)
 come-pa.pl -pa.m driver-nom.m and assistant-nom.m
 「操縦士と助手が来た。」

(b)[Брат с сестрой] уехали / уехал в деревню.
 brother-nom.m with sister-ins.f go_away-pa.pl -pa.pl to village
 「兄と妹は村へ行ってしまった。」 (Кохтев и Розенталь 1984: 152)

さらに 1.3. ではこれら非典型的な名詞句のうち本稿の主要な研究対象となる数量詞句について概観した. 1.3.1 では Corbett (1978a, 1978b, 1978c)が明らかなようにロシア語の個数詞が形容詞から名詞へと連なる連続体を成していることを示した.

(7)=(1-15) Corbett (1978b: 64, 1978c: 2)における数詞の連続体

	1	2	3, 4	5	100	1,000	100 万
(i) 名詞と数で一致する	+	-	-	-	-	-	-
(ii) 全ての格で格が一致する	+	-	-	-	-	-	-
(iii) 性で一致する	+	(+)	-	-	-	-	-
(iv) 有生性を表示する	+	+	+	-	-	-	-
(v) 自身の複数形を持たない	+	+	+	+	(-)	-	-
(vi) 一致する定語を持たない	+	+	+	+	+	-	-
(vii) 常に属格名詞を支配するわけではない	+	+	+	+	+	±	-

そしてこのことが以下に示すことを含意するとした.

(8)=(1-34)

- (a)品詞の境界線が曖昧なものでありうる
- (b)主要部と従属部の境界線も曖昧なものでありうる
- (c)X'-syntax の bar-level が曖昧なものでありうる

10. まとめと残された課題

このことを踏まえた上で1.3.2.では数量詞(Q)と言う範疇は離散的に他の品詞と境界線が引けるような厳密な定義が可能なものではないこと、さらに数量詞句(QP)とは[QN]からなる句のことであり、名詞句の一部を成しているだけでNPとQPの名称上の区別は便宜的なものに過ぎないことを示した。

そして、以上を踏まえて第1章の最後に、本稿の目指すものは以下の各点であることを確認した：(i)ロシア語のNPの内外における格や一致素性のやりとり・コピーを明らかにすることを目的とするが、その際、(ii)典型的なNPだけではなくQPなどより多くの非典型的NPも含めた説明を可能とすることを目指し、(iii)Qという語類がなだらかな連続体を成すいわば非離散的なものであることを離散的な説明理論に組み込むことを目指す。また、(iv)構築する説明理論は可能な限り最節約性原理に従ったものとする。

第2章では議論を展開するための基盤となるロシア語文法に関わるいくつかの記述的事実と理論的前提を概観した。

2.1.では名詞句内で関わる一致素性を整理した。まず関係する一致素性とその値には以下のものがある。()内に記したのは簡易的な表記法である。

(9)(=2-6)

性=男性：[+m, -f](=[m]), 女性：[-m, +f](=[f]), 中性：[-m, -f](=[n])

数=単数：[-pl](=[sg]), 複数：[+pl](=[pl])

有生性=有生：[+an](=[an]), 無生[-an](=[in])

屈折タイプ=第1：[I], 第2：[II], 第3：[III], 第4：[IV], 不変化：[indc]

また、名詞とAMの素性あるいはそのスロットをまとめると以下の様になる。

(10)(=2-8)名詞の文法素性

数	[sg/pl]
性	[{m/n/f}]
有生性	[{an/in}]
屈折タイプ	[{I/II/III/IV/indc}]
格	[ø]

(11)(=2-9)AMの文法素性

数	[ø]
性	[ø]
有生性	[ø]
屈折タイプ	×
格	[ø]

更にそれに加えていくつかのQの素性についても以下の通りまとめた。

10. まとめと残された課題

(12)(=2-12)「1」

数	[\emptyset]
性	[\emptyset]
有生性	[\emptyset]
屈折タイプ	x
格	[\emptyset]

「1」については AM と全く同じである。

(13)(=2-14)「2」(PcQ)

数	x
性	[\emptyset]
有生性	[\emptyset]
屈折タイプ	x
格	[\emptyset]

(14)(=2-15)「3, 4」(PcQ)

数	x
性	x
有生性	[\emptyset]
屈折タイプ	x
格	[\emptyset]

(15)(=2-17)「5~100」(HQ)

数	x / ([sg/pl])
性	x
有生性	x
屈折タイプ	[{III/IV}]
格	[\emptyset]

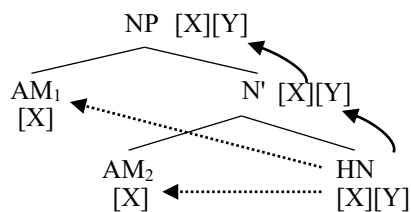
(16)(=2-18)「1,000~」(NQ)

数	[sg/pl]
性	[{m/f}]
有生性	[in]
屈折タイプ	[{I/II}]
格	[\emptyset]

なお、これらの Q の素性については以後の議論で修正が加えられていく。

次に 2.2. では名詞句内での一致素性のコピーは句節点への「上方向」のものと、具体的な語彙項目への「横方向」のものがあったとした。

(17)(=2-23)

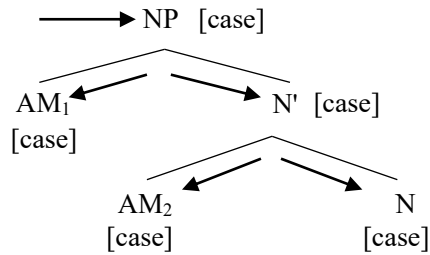


10. まとめと残された課題

実線の矢印が上方向のコピー，点線の矢印が横方向のコピーである。

2.3.では Babby (1987)などに従い，格素性は一致素性とは異なり NP の頂点に付与され，その後以下の様に末端まで浸透するとした。

(18)(=2-27)



さらに Babby (1987)は以下の様にロシア語の格を捉え，その付与の優先順位を考えることで名詞句内の複数の格が混在する様を説明している。

(19)(=2-29)Babby (1987)の理論

- (a) GenQ という 7 つめの格を想定
- (b) 構造格：Nom, Acc, GenQ
- (c) 語彙格：Gen, Loc, Dat, Ins
- (d) 語彙格 > 構造格
- (e) 局所性原理により近いものが優先

また，これに伴い Q の格付与能力は以下の通りと考えられる。

(20)(=2-38)数量詞が付与する格

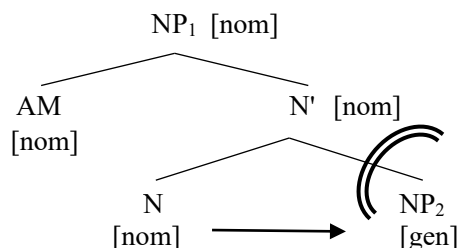
один	PcQ	HQ	NQ
×	GenQ	GenQ	Gen

ただし，Babby (1987)はどちらの格が実際に与えられるかを優先順位による与えられる格の選択の問題としているが，本稿では優先順位の低い格を優先順位の高い格で上書きすることが可能，と捉えている。

また，NP に格を付与することによってそこから一致素性が外に向けてコピーできなくなる，つまり格が「蓋」のように振る舞うことを指摘し，格付与によってその節点の上に形成されるものを格境界(CB)と名付けた。

10. まとめと残された課題

(21)(=2-56)



さらに 2.4.と 2.5.において、ロシア語における性と屈折タイプは複数では対立が消失することを示し、以下の様な素性の削除規則を設定した。

(22)(=2-70) 性の削除規則

$[\text{gender } x] \rightarrow \emptyset, \text{ if } [\text{pl}]$

(23)(=2-80) 屈折タイプの削除規則

$[\text{DecType } x] \rightarrow \emptyset, \text{ if } [\text{pl}]$

第3章では主語と述語の一致の問題を議論した。QP が主語の場合、述語の一致は最大3パターンの一致が可能である。

(24)(=3-3)

(a) 「1」(N との一致)

Один студент пришел.
one-nom.m student-nom.m come-pa.m

「1人の学生が来た」 (匹田 2016: 365)

(b) PcQ と HQ (複数, 中性での一致)

Пришли / Пришло пять студентов.
come-pa.pl come-pa.n five-nom student-genq.pl

「5人の学生が来た」 (匹田 2016: 362)

(c) NQ (複数, 中性, Q との一致)

Миллион россиян посетило/ посетил/ посетили Америку.
million-nom.m Russian-gen.pl visit-pa.n -pa.m -pa.pl America-acc

「100万人のロシア人がアメリカを訪れた」 (匹田 2016: 366)

これらのうち、「1」は典型的 NP の AM と全く同じで、主要部名詞と全て一致する。

(b)と(c)に見られる複数での一致は pl.3, 中性での一致は n.sg.3 での一致と呼ぶ。

3.3.2.ではまずこれらの一致のどのパターンが可能なのかを Q ごとにまとめた：

10. まとめと残された課題

(25)(=3-29)

		形容詞的(dependent) ← → (head)名詞的							
		1	2	3,4	5	100	1,000	100万	QCN
(viii)	Qとの一致	-				+			
(ix)	pl.3での一致					+			
(x)	n.sg.3での一致	-				+			-

そこから以下の疑問が生じる.

(26)(=3-30)

- (a) なぜ複数の一致のパターンが可能なのか？
- (b) 他の一致パターンが可能なのに何故「最後の手段」のデフォルトが可能なのか？
- (c) 連続体上でなぜデフォルトがここに位置するのか？
- (d) pl.3での一致は「形式的な一致」なのか？

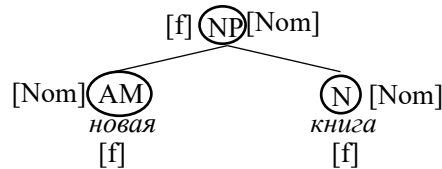
これらの疑問に対してまず(d)に関しては 3.3.3.で、従える N が単複両方の形態が可能な QCN (Quantificational collective noun, 数量的集合名詞) を例に N が複数の場合のみ pl.3 の一致が可能であることからこれは意味ではなく形式によって決まる一致だと結論づけた。

続いて 3.4.4.ではまず、以下の様に名詞句内で述語の一致の Ctrl になりうるものが複数あるからであると考えた。

(27)(=3-55)

- (a) [Новая книга] адресована студентам (...) (НКРЯ 2021.09.20)
new-nom.f book-nom.f address-pp.
「新しい本は学生たちに向けられたものである」

(b)



そして、このうち Q を一致の Ctrl に指定すれば Q との一致、すなわち(24c)なら миллион に一致した男性形の посетил となり、QP を指定すれば N から CB を越えてコピーされた[pl]があるので pl.3 の一致(посетили), N を指定すれば主格でないためデフォルトの n.sg.3 の一致(посетило)となる。

つまり、QP の通常の典型的 NP の違いは CB を越えた素性のコピーと Ctrl の指定が

10. まとめと残された課題

可能であるという点にある。その点を踏まえて(25)は以下の様に読み替えられる。

(28)=(3-69)

		形容詞的(dependent) ← → (head)名詞的							
		1	2	3,4	5	100	1,000	100万	QCN
(viii)	Qとの一致	-				+			
(ix)	CBの下から素性のコピーが可					+			
(x)	CBの下の要素をCtrlとして指定可				+			-	

「1」は格付与能力を持たないためCBが形成されない。そのため(ix)と(x)については無関係である。すると(26c)の疑問は解消される。形容詞よりもn.sg.3の一致が可、名詞よりも不可があり、連続体性を損なっていないからである。また(26b)についても、Ctrlの指定と一致を別の操作と考えることで、一旦指定されるとデフォルトで一致する以外方法がなくなり、n.sg.3の一致が「最後の手段」であるデフォルトの一致となる。本稿では(1d)で見たように先読みはできないからである。

第4章では第3章で残された問題の1つの解決を目指した。すなわちPcQPのNは一般に単数属格形と理解されているが、だとすると3.での結論の1つである「pl.3での述語の一致は形式的なもの」という知見に矛盾が生じてしまう。PcQPが主語の場合でもpl.3の一致が可能だからである。

(29)=(4-5a)

Перед ним были два человека (...)
 in_front_of he-ins be-pa.pl two-nom person-genq.sg
 「彼の前には2人の人がいた」 (НКРЯ 2021.03.09)

この形態は歴史的には双数主格形だったものが双数の消失とともに単数属格形と再解釈される様になったものであるが、4.4.で詳述したように単数と考えると、また複数と考えると説明できない矛盾が生じてしまう。そこで本稿では秋山(2002)が提唱する少数という数を導入し、以下の様に規定することでこの問題を解消する。

(30)=(4-50)少数と複数の形態的対立は、名詞タイプの屈折を行う語以外では消失し、また数量属格以外の格ではその対立は消失する。複数との対立が失われた結果、少数は複数と融合する。

さらにロシア語の少数を含めた数素性を以下の様に規定し、少数が複数に融合する規則も仮定した。

(31)=(4-51)[sg] = [-pl]; [pl] = [+pl]; [pc] = [+pl, +pc]

(32)=(4-52) [GenQ]以外の格が与えられると [+pl, +pc] → [+pl]

これらを仮定することで上で示したPcQPを主語とした場合なぜpl.3の一致が可能な

10. まとめと残された課題

のかと言う問題の他, 4.4.で示した様々な問題が解決することを見た.

なお, PcQ は絶対複数名詞とは主格において結合できないのに, 意味的に同じ数値を示している ColQ(集合数詞)だと可能なのは何故か説明するためにそれぞれに以下の様な素性のスロット, さらに素性のスロットに入る値に関する表層フィルターを設定した.

(33)(=4-86)「2」の文法素性とそのスロット(再改訂版)

数	[(±pl ∅), (±pc ∅)]
性	[±f ∅]
有生性	[∅]
屈折タイプ	×
格	[∅]

(34)(=4-87)「3, 4」の文法素性とそのスロット(再改訂版)

数	[(±pl ∅), (±pc ∅)]
性	×
有生性	[∅]
屈折タイプ	×
格	[∅]

(35)(=4-88)ColQ の素性とそのスロット

数	[(±pl ∅)]
性	×
有生性	[∅]
屈折タイプ	×
格	[∅]

(36)(=4-89)(a)*[∅]

(b)*[(x, y)]

また, この場合素性の値そのものではなく素性のスロットの削除ということもあるので上記の規則(32)を以下に改訂した.

(37)(=4-90)[GenQ]以外の格が与えられると [num (±pl X), (±pc Y)] → [(±pl X)]

第5章ではいわゆる「有生性の一致」について検討した. ロシア語には3つのパターンの対格の形態があることが知られている.

(38)(=5-1)

(a)対格独自の形態

主格: эта книга
this-nom.f.in book-nom.f.in

「この本」

対格: эту книгу
this-acc.f.in book-acc.f.in

(匹田 2016: 54)

10. まとめと残された課題

(b)主格と同じ形態

主格：далекий путь 対格：далекий путь.
distant-nom.m.in way-nom.m.in distant-acc.m.in way-acc.m.in
「遙かな道」 (匹田 2016: 55)

(c)属格と同じ形態

主格：мой учитель 対格：моего учителя
my-nom.m.an teacher-nom.m.an my-acc.m.an teacher-acc.m.an
「私の教師」 (匹田 2016: 55)

これら 3つのパターンで多くの場合 AM と N とでパターンが同じになるのでこれらの現象を「有生性の一致」としばしば呼ぶ。しかし、以下のようにそれらが同じパターンになるとは限らない。

(39)(=5-3)

(a)第 2 変化の男性名詞

主格：твой папа 対格：твоего папу
your-nom.m.an dad-nom.m.an your-acc.m.an dad-acc.m.an
「君のお父さん」 (匹田 2016: 55)

(b)第 3 変化の女性名詞

主格：красивая дочь 対格：красивую дочь
beautiful-nom.f.an daughter-nom.f.an beautiful-nom.f.an daughter-nom.f.an
「美しい娘」 (匹田 2016: 54)

このような「不一致」の場合も含め極力例外なく説明するために、まず属格化規則として本稿では以下の規則を設定した。

(40)(=5-6) 属格化

有生[an], かつ性として[m]以外あるいは屈折タイプとして[I]以外がなければ
[Acc] → [Gen]

これに上で設定した(22)と(23)を組み合わせることで実際の言語現実を説明することに成功している。

しかし、ここでさらなる問題が生じる。

(41)(=5-38)

(a)属格化規則はどこで適用されるか？

(b)数量詞によって異なる振る舞いを見せるのは何故か？

これらの問題のうち、(b)については以下の様にそれぞれの Q が持っている素性を設定すれば問題なく説明ができることを示した。

10. まとめと残された課題

(42)(=5-53)Q の一致素性とそのスロット

	1	PcQ		HQ		NQ	QCN
		2	3, 4	5~	100		
数	[ø]	[(ø), (ø)]	[(ø), (ø)]	×	×	[sg/pl]	[sg/pl]
性	[ø]	[ø]	×	×	×	[m], [f]	[m], [n], [f]
有生性	[ø]	[ø]	[ø]	×	×	[in]	[in]
タイプ	×	×	×	[III]	[IV]	[I], [II]	[I], [II], [III]
格	[ø]	[ø]	[ø]	[ø]	[ø]	[ø]	[ø]

(43)(=5-54)Q の格付与能力を示す素性

	1	PcQ		HQ		NQ		QCN
		2	3	5	100	1,000	100万	
格付与	(i) asCase	-	+	+	+	+	+	+
	(ii) asLex	-	-	-	-	±	+	+

(44)(=5-55)N の素性に CB を越えることを認める素性

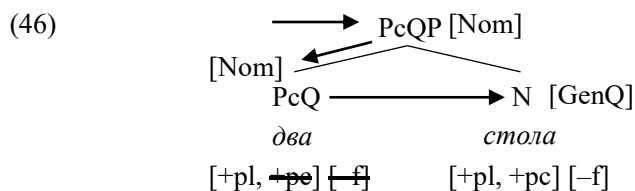
	1	PcQ		HQ		NQ		QCN
		2	3	5	100	1,000	100万	
N の素性の CB を越えた コピー	(iii) upNum	+	+	+	+	+	+	+
	(iv) horNum	+	+	+	+	-	-	-
	(v) horGend	+	-	-	-	-	-	-
	(vi) upAni	+	+	-	-	-	-	-
	(vii) horAni	+	+	+	+	-	-	-
	(viii) setCtrl	+	+	+	+	+	+	-

また(a)に関しても同様で(32)の適用条件が揃ったらその場で適用すればよく、それが句節点で起こるか末端で起こるかは Q によって違うと結論づけた。ちなみにこの考え方は(1c)に合致するものである。

また、5.3.において主格形になる場合の問題を検討した結果、主格化は属格化と異なり純粋に形態的な条件で引き起こされ、以下の規則に従って起こると結論づけた。

(45)(5-81) 対格に固有の形態がなければ[Acc] → [Nom]

続いて第6章では(42)に改訂を加え、PcQなどのQはシンタックスに入る前に語彙の段階で既に[GenQ]が与えられていると結論づける。問題の発端は以下の通りである。



ここで(37)に従うと、[Nom]が与えられた PcQ は少数が複数に変わる。しかし、そうすると(22)により性の素性が削除されるはずである。しかしこの位置にある PcQ *два*

10. まとめと残された課題

は性の対立を保っている。

この問題を解決するために、本章では PcQ(と HQ)に語彙で予め与えられている [GenQ]を想定した。

(47)(=6-72)

	1	PcQ		HQ		NQ	QCN
		2	3, 4	5~	100		
数	[(ø), (ø)]	[(ø), (ø)]	[(ø), (ø)]	×	×	[sg/pl]	[sg/pl]
性	[(ø), (ø)]	[ø]	×	×	×	[m], [f]	[m], [n], [f]
有生性	[ø]	[ø]	[ø]	×	×	[in]	[in]
屈折タイプ	×	×	×	[III]	[IV]	[I], [II]	[I], [II], [III]
格	[ø]	[GenQ]	[GenQ]	[GenQ]	[GenQ]	[ø]	[ø]

このことは以下の様な「分配の前置詞 *no*」の格形態に関する不可思議な振る舞いを説明することができる。

(48)(=6-4)

(a) по одному рублю
 dist odin-dat? rouble-dat?
 「1 ルーブルずつ」 (Franks 1995: 140)

(b) по два рубля
 dist two-acc? rouble-genq.pc
 「2 ルーブルずつ」 (Franks 1995: 140)

(c) по пять рублей
 dist five-acc? rouble-genq.pl
 「5 ルーブルずつ」 (Franks 1995: 140)

(d) по пяти рублей
 dist five-dat? rouble-genq.pl
 「5 ルーブルずつ」 (Franks 1995: 140)

(e) по миллиону рублей
 dist million-dat?sg rouble-gen.pl
 「100 万ルーブルずつ」 (Franks 1995: 142)

すなわち、Franks (1995)が想定した *no* が付与する構造格である数量与格[DatQ]を想定すると PreGenQ(=語彙で予め持っている[GenQ])を持つ場合に Q がまるで主格のような形態(ここでの考え方では数量属格形)になり、PreGenQ がない Q の場合は数量与格形になると考えることでこの問題に説明を加えた。

なお、(c)と(d)のように両方の形態が HQ では可能だとされている問題は、実際に現代語では(d)の形態(つまり数量与格形)はますます使用頻度が下がっていることから HQ が PreGenQ を獲得しつつある、あるいは既に獲得していると考えた。

また、この PreGenQ と[GenQ]の付与能力の獲得が、以下に示すように形容詞と名詞の間の連続体の中心に数量詞(Q)という範疇が現在形成されつつあることを示しているのではないかと、と言う仮説も立てた。

10. まとめと残された課題

(49)(=6-68)

形容詞	「1」	PcQ→	数量詞	←HQ	NQ	QCN	名詞
-----	-----	------	-----	-----	----	-----	----

第7章では5.で設定した(44)の単純化を行った。これは記述的には事実を正しく捉えることに成功したと言えるが、一方でいかにも煩雑である。

まず横方向のコピー(すなわち[±hor-]について)であるが、これは具体的な語彙項目であり、その素性のコピーを受けるとしたら Q か AM のみである。Q へのコピーは Q がその素性に関して空スロットを持っているかによって決まるし、AM へのコピーは N より近いところにある Q が該当する素性を持っていれば N から行われる必要はない。このことに関係し本稿では以下の通り規定を加えた。

(50)(=7-8) QP において探索子は Q による格付与で形成される CB の下でも必要なら目標を探すことができる。

このように規定すれば Q も AM も必要なら CB の下の N まで素性を取りに行くことができると考えた。これで[±hor-]はなくても問題なくなった。

一方上方向のコピーは句節点へのコピーなので受け入れる節点に特定の空スロットが予め決まてはいない。まず基本的に上方向へのコピーは Q からであって N からなされるものではないとした上で、Q が N から受け取った素性をいわば Q を経由させる形で句節点にコピーすることは問題ないとした。そうすれば[+upAni]は不要になる。

問題は[+upNum]である。HQ は数素性を具体的な値も空スロットも持っていないし、NQ や QCN はたとえそれらが単数であっても句節点には[+pl]があると考え無ければならないこともある。そう考えないと述語の一致が pl.3 になることが説明できなくなるからである。

この問題を説明するために、以下の提案を行った。

(51)(=7-33) [±upNum]に代わる提案

- (a) QP において N から CB を越えた上方向の数素性のコピーは選択的に行われ、その代わり Q から数素性が上方向にコピーされることはない。
- (b) 述語の一致の Ctrl の指定の際も AM の探索子同様、最も近く c 統御するものを Ctrl として指定する。

これらによって pl.3 と n.sg.3 の2種類の述語の一致が説明できる。

(52)(a)(=3-3b) Пришли / Пришло пять студентов.

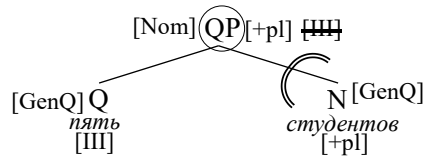
come-ra.pl come-ra.n five-nom student-genq.pl

「5人の学生が来た」

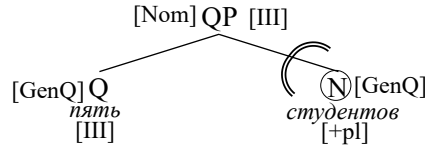
(匹田 2016: 362)

10. まとめと残された課題

(b)(=7-39a)



(c)(=7-39b)



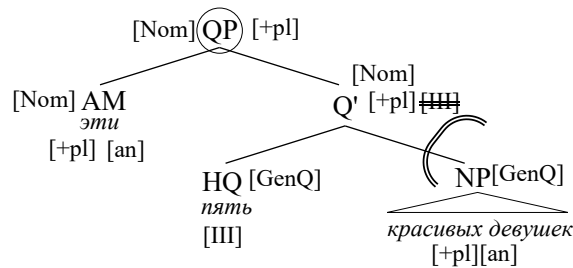
すなわち, [+pl]がNからQPに上がれば, 最も近くc統御されるのはQPで結果pl.3での一致, [+pl]が上がらなければ最も近くc統御されるのはNで結果n.sg.3での一致となる。

また, QPの先頭に複数形のAMがあると述語はpl.3での一致以外認められないことが指摘されているが, この問題も上記の提案で説明が可能である。

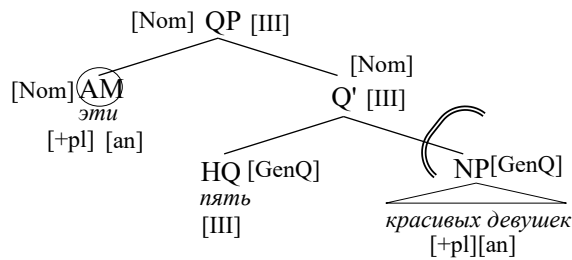
(53)(=7-43)(a) Эти пять красивых девушек пришли / *пришло.
 this-nom.pl five-genq beautiful-genq.pl girl-genq.pl come-pa.pl come-pa.n

「これら5人の美しい娘がやってきた」 (Franks 1995: 100)

(b) N девушекから数素性が上がる場合



(c) N девушекから数素性が上がらない場合



[+pl]がQPに上がればQPが一致のCtrlになりpl.3, 上がらなければAMがCtrlになりやはりpl.3での一致となり, n.sg.3での一致はあり得なくなる。ちなみに, AMの[+pl]は前者の場合はQから, 後者の場合はNから受け取ったものである。

なお, 5.で提案した対格の属格化規則は本章で以下の通り修正された。

10. まとめと残された課題

(54)(=7-50) 対格の属格化(ver.2)

有生[an]であり，かつ性素性[-m]も [I]以外の屈折タイプもなければ

[Acc] → [Gen]

このように，7.での規則などの改変によりさらに多くの現象をシンプルに説明することができるようになった。しかし，7.2.4.で述べたように，NQ および QCN にはそもそも言語事実の把握に始まり様々な問題がある。NQ と QCN に関しては今後の課題とせざるを得なかった。

第8章では職業などの人間を表す男性名詞が女性を指示対象としている場合に AM や述語が女性で一致することが可能という現象の説明について議論を行った。この問題は単に女性での一致が起こるだけでなく，以下の様に(d)のパターンだけは不可能という問題がある。

(55)(=8-2)

- (a) Новый врач сказал.
new-nom.m doctor-nom.m say-ra.m
- (b) Новый врач сказала.
new-nom.m doctor-nom.m say-ra.f
- (c) Новая врач сказала.
new-nom.f doctor-nom.m say-ra.f
- (d) *Новая врач сказал.
new-nom.f doctor-nom.m say-ra.m

「新しい医師が言った」

(いずれも Corbett 1979b: 221)

この問題を説明するために Pesetsky (2013)は以下の様に Ж という「 \emptyset 形態素」を設定する。

(56)(=8-4)

(a) An optional null morpheme Ж ‘female’ may be merged at any point above a certain structural threshold within NP. Low adjectives fall below this threshold.

(b) Once Ж merges, the nominal counts as feminine for agreement purposes from then on.

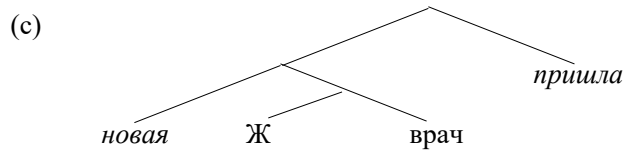
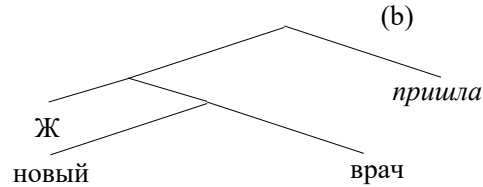
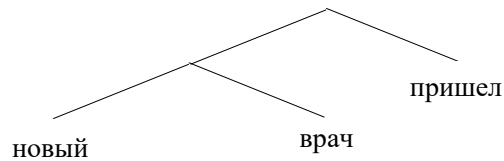
「(a)選択的なゼロ形態素 Ж‘女性’は NP 内の特定の境界 (threshold)の上のいかなる点にも併合することができる。「低い形容詞 (low adjectives)」はこの境界の下にある。

「(b)Ж が併合されるとその名詞 (the nominal)はそれ以降一致にとって女性であると見なされる。」

これにより，上の一致に関する振る舞いを説明する。

10. まとめと残された課題

(57)(=8-5)(a)



光井 (2018)はこの Ж を採用しているが、一方それだけでは説明がつかない現象があることを指摘している。

(58)(=8-8)第1変化の男性名詞

(a)主格環境

наша врач
our-nom.f doctor-nom.m.I

「我々の医師が」

(Шведова и др. 1980: I 468)

(b)斜格環境

*с *нашей врачом*
with our-ins.f doctor-ins.m.I

「我々の医師と」

(Шведова и др. 1980: I 468)

(59)(=8-11)оба「両方」を伴う第1変化の男性名詞

(a)主格環境

**обе врача*
both-nom.f doctor-genq.pc.m.I

「両方の医師」

(Pesetsky 2013: 42)

(b)斜格環境

к *обеим врачам*
to both-dat.f doctor-dat.pl

「両方の医師の方へ」

(光井 2018a: 6)

これらの非対称的な容認可能性の違いを説明するために光井 (2018)は Ж を非活性化させることを考え、その条件として以下の通りのものを設定した。

(60)(=8-14)Ж が非活性化される条件：

10. まとめと残された課題

性[+m, -f], 屈折タイプ[I], 数[+sg], 格[OBL] (光井 2018a: 90)

この光井 (2018)の考え方は記述的に大きな成果を挙げているが、本稿の方法に組み込むには不都合がある。そのため 8.では以下の表層フィルターを提案することで同様の効果を出すことを試みた。

(61)(=8-37) *[+f] & [I]

なお、この[+f]と[I]が相容れないということは他にも様々な領域で必要で決してここだけのために設定すべきものではないことは 8.3.2.2.1.で確認している。

最後に**第 9 章**においてはここまでの議論を一旦まとめ直した上で、それを踏まえて PcQ も含めて数量詞と数量詞句の特異な振る舞いを体系的に説明することを試みている Pesetsky (2013)による説明と本稿の説明を比較した。その結果、Pesetsky (2013)には目立たぬ形で様々な ad hoc な規定が散見され、本稿の方法の方がよりシンプルであることが見て取れたのではないかと思う。また本稿も様々な見方によっては ad hoc とも見える規則やフィルターを設定しているようにも見えるが、本稿のそれらの多くは全く別の文脈で指摘されている記述的事実に基づいたものであり、いずれにせよ何らかの形で規定せざるを得ないものであると言える点が大きな違いである。

以上、本稿ではロシア語の典型てき名詞句と典型から逸脱するする名詞句としての数量詞句の内外での一致と格形態の振る舞いをできるだけ多くの現象を包括できるように説明することを試みた。それに際してとくに意識した点は(1)で挙げたものの他に：

- (i)数量詞のもつ連続体性を離散的で形式文法の方法論で記述・説明する。
- (ii)生成文法の理論で提案されている様々な理論的装置は必要なら利用するがとくに必要がなければ前提としない。
- (iii)以上を踏まえた上で説明できる範囲を可能な限り広げていく。

などがある。

匹田 (2007)で最初に当該テーマで論文を作成してから当初は曖昧であった問題も少しずつより正確かつより広範な説明が可能になってきたと言って良いと思う。また、生成文法の既存の体系に謂わば「リセット」をかけ、最初からやり直したことでひょっとすると少なくとも当該の問題を説明するためだけなら、かなりシンプルな説明理論が構築できていると思われる。またその説明の範囲も広く強力である。

また、記述的に伝統的に指摘されている規則・法則であれ、生成文法の原理として指摘されているものであれ、本稿で定式化し直したのものには少なくとも今のところ説明できてない例外的現象が従来より少ない。この点でも理論全体による縛りが

10. まとめと残された課題

存在しないことが良いのかもしれない。ただ、現況本稿での説明体系はその説明の範囲は名詞句の外へはほとんど出ていない。今後その説明範囲を拡大した場合どうなるのかは不明であり今後の課題である。

10.2. 残された課題と展望

本稿には当然ながらまだ説明できていない現象がある。その中でもとくに大きな問題を以下いくつかピックアップし、今後の研究の方向性を示したい。

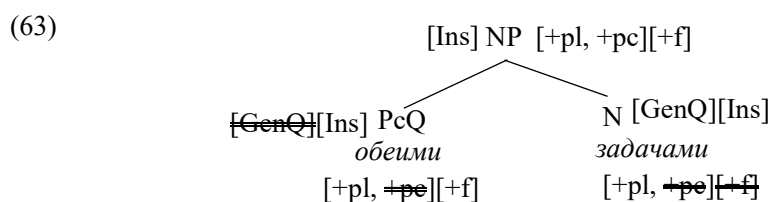
10.2.1. обаについて

PcQ *оба* は意味だけでなく、性[±f]に関して一致するという点でも、また形態法上も *два* とよく似た特徴を有している。ただし、斜格においてもその一致が行われるという点が *два* とは異なっている。以下の(a)は男性名詞の例、(b)は女性名詞の例で、いずれも具格環境にある。

(62)(a)(...)мы встретились с обоими историками (...)
 we-nom meet-pa.pl with both-ins.-f historian-ins.pl
 「両方の歴史学者に会った」 (НКРЯ 2022.08.24)

(b)И с обеими задачами он успешно справился.
 and with both-ins.+f task-ins.pl he-nom successfully deal-pa.m
 「そして両方の課題を彼は上手く処理した」 (НКРЯ 2022.08.24)

しかし、これまで議論してきた規則の体系でこの現象を説明するには問題が残る。PcQ *оба* は、斜格において性の対立が形態上なくなる。



今までに想定した以下の2つの規則により *обеими* の性素性は消失しなくてはならないはずである。

(64)(=4-52) 数量属格以外での少数の複数化
 [GenQ]以外の格が与えられると [+pl, +pc] → [+pl]

(65)(=2-70) 複数における性の削除
 [gender X] → ∅, if [pl]

上の例では PcQ が持っていた [GenQ] は NP から浸透してきた [Ins] に上書きされてしまい、その結果(64)により数が少数から複数に変わる。さらにそれによって(65)により

10. まとめと残された課題

性が削除されることになっているからである。ところが、形態的に *обеими* には性が残っていると考えざるを得ない。

この問題は、まずどこに問題があるのかから特定しなければならない。すなわち、(64)に反して[GenQ]でなくなっても少数の複数化が起こっていないのか、それとも(65)に逆らって複数になっても性素性が消えないのか、あるいは、文法の問題として解決すべきなのかそれとも語彙的な特性として解決すべきなのか、検討しなければならない問題は多い。

ただ、このような複数で斜格環境でも性の表示を失わないのはロシア語には *оба* の1語しかない¹。多分に語彙項目ごとの辞書での説明の方が文法による説明よりも合理的なのかもしれない。なお、本稿で説明できないのは「何故性が消えないのか」であって、上の *обеими* が[+f]を持っていることは予測できる。つまり、PcQとNが併合した時点ではNの[+f]は少なくともいったんはPcQにコピーされるからである。問題はこれが何故消えないかである。

ちなみに、Виноградов (1972: 236), Граудина и др. (1976: 256), Зализняк (2002: 77)等で口語では女性名詞を修飾している場合でも斜格で *обоих*, *обоим*, *обоими* といった男性・中性と同じ形態を用いることがあると指摘されている。つまり、斜格において *оба* は性の対立を失っている。

また、通常 *оба* は斜格においても絶対複数名詞と結合することはできない。これは斜格でも性が消えない *оба* は性を持たない絶対複数名詞とは一致できないからである。それにもかかわらず、Розенталь (1998: 157), Бельчиков (2008: 182)は口語で上記の斜格の形態(*обоих*, *обоим*, *обоими*)が絶対複数名詞と結合しようと指摘している。このことは口語で *оба* は斜格において少数が複数に融合し性の対立を失うことがあり得ることをやはり示している。

Виноградов (1972: 236)は *оба* が斜格において性を区別する現象を「人工的(искусственно)」と形容している。上で指摘された *оба* の斜格における性の対立の消失は、このように違和感を覚え、かつ特定の語彙項目にのみ起こる例外を無くし、体系を整えようとしているのかもしれない²。

¹ Виноградов и др. (1960: I: 380), Бельчиков (2008: 181)は «числительные *оба* (мужского и среднего рода) и *обе* (женского рода)「数詞 *оба*(男性及び中性)と *обе*(女性)」と表現しているがこの場合の「数詞」は複数形を用いている。つまり男性・中性の *оба* と女性の *обе* は別個の語彙項目であると考えていることが伺える。その理由は明記されていないが、斜格においても性の区別があることがその理由なのかも知れない。

² ただし、光井明日香(pers.com.)は母語話者への聞き取り調査の中でこのタイプの例は一切確認が取れていないと指摘する。場合によっては変化に揺戻しが起きているのかもしれない。

10. まとめと残された課題

10.2.2. полтора について

本稿ではほとんど言及されてこなかったが、ロシア語に PcQ の 1 つと考えられるものに *полтора*「1.5」もある。以下の例に見るように構造格環境ではいわゆる単数属格形(=少数数量属格形)、語彙格環境では複数・語彙格(以下の例では具格)形になる。これは PcQ と同じ振る舞いである。

(66)(a) Эти полтора года должны быть использованы (...)
this-nom.pl one_and_half year-genq.pc must-pl be-inf used-pl
「これらの 1 年半は利用されなければならない」 (НКРЯ 2022.08.24)

(b)(...) он вернулся с полутора рублями
he-nom return-pa.m with one_and_half-ins rouble-ins.pl
「かれは 1.5 ルーブルもって戻ってきた」 (НКРЯ 2022.08.24)

また、分配の前置詞 *по* の補語となると直格形を取ることから PreGenQ も持っていることがわかる。

(67) Уроки идут блоками по полтора часа.
lesson-nom.pl go-pr.3.pl block-ins.pl dist one_and_half-genq hour-genq.pc
「授業はブロック単位で 1.5 時間ずつ行われる」 (НКРЯ 2022.08.24)

Фасмер (1987: 319)によると *полтора* は **роль втора* (= половина второго) に遡ることができ、名詞的な特徴を有する *роль* を中心として形成されている合成語的な特徴を持っているとされている。そのことは現代語の斜格形が *полтора* と語の中程が変化していることにも見て取れる。このような性質は PcQ の中で他になく、Виноградов (1972: 236) は *полтора* を孤立している (изолированный) としてその特殊性を強調している。*полтора* は名詞句的なものから PcQ の体系の中に現在入り込もうとして揺れている最中なのかもしれない。

体系に入り込もうとして揺れ動いていることを感じさせる特徴は色々ある。例えば、*полтора* は上述のように性の形態的対立があるが、Ломоносов (2013: 103) の記述ではそれはなく、斜格では形容詞の複数形のように変化している。

また、アクセントが移動して *пóлтора* であれば絶対複数名詞と結合できることは Виноградов (1972: 236), Worth (1959: 128), Barnetová et al. (1979: I: 508) などが指摘しており、さらに Бельчиков (2008: 181) は *полтора* は全ての格で絶対複数名詞と結合できるとしている：

(68)(a) Последние полутора суток у мальчика была высокая температура.
last-acc.pl one_and_half-genq day-genq.pl at boy was high temperature
「ここ 1 日半少年は高熱があった」 (Бельчиков 2008: 181)

(b) В течение последних полутора суток погода не менялась.
during last-gen.pl one_and_half-gen day-gen.pl weather not changed
「ここ 1 日半天気は変わらなかった」 (Бельчиков 2008: 181)

10. まとめと残された課題

他にも、Worth (1959: 128)は *два* などの他の PcQ であれば属格環境では後続する名詞は複数(数量)属格形になるが、*полтора* の場合、単数属格になることがあり得ると指摘する。

(69) в течение полутора часа
during one_and_a_half-gen hour-gen.sg
「1時間半の間に」 (Worth 1959: 128)

これはまさに *полтора* が名詞的に振る舞っていることになるが、НКРЯ で検索し創作年代を調べると *полтора часа* は 1980 年が 1 件ある以外残りの全ては 1923 年までのもの、大半は 18-19 世紀のものであった。逆に複数属格形の *полтора часов* は 19 世紀から現代まで使われている。名詞的な性質を近年失っているのだろうか。

以上のように、*полтора* は他の PcQ には見られない奇妙な振る舞いが見られるが、これらは比較的新しくロシア語に生まれた *полтора* がロシア語の PcQ、そして Q の体系に入り込もうと揺れ動いている姿と捉えられるかもしれない。

10.2.3. 複数における性の対立

本稿では 2.4.において「ロシア語の性は複数でその対立が消失する」と考えとし、それを前提として全ての議論を展開している。この考え方自体は決して目新しいものではなく、Шведова и др. (1980: I : 466)などでも触れられている、伝統的とも言える考え方である。しかし、Зализняк (1964), Милославский (1988), 後藤 (2015b, 2017)は以下の様な例文を挙げて、複数にも性はありと主張する。例えば、以下の例における下線部の性はいずれも二重下線部の複数形の名詞に由来すると考える以外にない。

(70)(a) Я доволен этими домами, каждый из которых по-своему хорош.
I satisfied this-ins.pl house-ins.pl each-nom.m from which-gen.pl in_own_way good-sg.m
「私はこれらのそれぞれがそれなりに良い家に満足している」
(Зализняк 1964: 31, 後藤 2015b: 52)

(b) один из студентов
one-nom.m from student-gen.pl
「学生の一人」 (後藤 2015b: 53)

(c) Студентки принесли каждая по яблоку.
female_student-nom.pl bring-pa.pl each-nom.f an_apple_each
「女子学生ら各々がリンゴを1つずつ持ってきた」 (後藤 2015b: 54)

(d) Здесь инициатором может стать любая из сторон.
here initiator-ins can become-inf any-nom.f from side-gen.pl
「ここでは、どちら側も主導者となり得る」 (後藤 2015b: 54)

(e) Испытания не следовали одно за другим, а происходили одновременно.
ordeal-nom.pl not follow-pa.pl one-nom.n after other-ins.n but occurred simultaneously
「苦難は1つずつではなく同時に起こった」 (後藤 2015b: 54)

10. まとめと残された課題

ただし、Зализняк (1964: 31)も指摘するようにこれらはいずれも通常の、AM や主述の一致とは異なる類いの一致である。つまり、普通の一致とは異なる要因が何か介在している可能性があり、全く異なる説明が必要とされているのかも知れない。しかし、後藤 (2015b)が指摘する以下の例で見られる AM と主要部名詞の関係は、等位接続が関係しているとは言え、一般的な AM と主要部名詞の関係であり、しかもその場合の主要部名詞は「性の対立が失われている」と考えなければならない複数形である。

(71)(a) золотая и серебряная медали
gold-nom.f and silver-nom.f medal-nom.pl
「金メダルと銀メダル」 (Кохтев & Розенталь 1984: 171, 後藤 2015b: 53)

(b) географический и исторический факультеты
geographical-nom.m and historical-nom.m faculty-nom.pl
「地理学部と歴史学部」 (Кохтев & Розенталь 1984: 171, 後藤 2015b: 53)

以上の様な例を踏まえ、後藤 (2015b, 2017)はロシア語では複数においても性の対立は失われていないと結論づける。その上で、匹田 (2015, 2017)が想定した以下の格の書き換え規則³の修正を提案する：

(72)(=7-50) 対格の属格化(ver.2)
有生[an], かつ性素性[-m]も [I]以外の屈折タイプもなければ
[Acc] → [Gen]

理由は、このままだと以下の例が正しく説明できないからである：

(73)(a) нашел этих женщин (НКРЯ «2014,10,27»
find-pa.m this-gen.pl woman-gen.pl
(b)*нашел эти женщины (後藤 2017: 129)
this-nom.pl this-nom.pl woman-nom.pl
「それらの女性を見つけた」

これらの例のうち(a)は対格が属格化しており適格である。一方(b)は主格形になっており非文と判断される。複数では性の対立が存在せず、また同様に複数では屈折タイプも対立が失われる(2-80)ため、上の(72)の条件のうち有生性[an]さえあれば属格への書き換えが起こるからである。

しかし、もし複数でも性の対立が失われないと考えると性[f]([-m, +f])によって属格への書き換えが妨げられてしまい、(b)が適格というあやまった予想を行ってしま

³ 後藤 (2015)の時点での同規則は以下の通り規定していた。

(i)性, 屈折タイプ, 有生性に以下に示す以外の値がなければ[acc]→[gen]
性[m]; 屈折タイプ[I]; 有生性[an]

変更は技術的な問題であり規則の本質に変更はない。

10. まとめと残された課題

うことになる。そこで後藤(2017: 130)は上記(72)を以下の様に修正することを提案した⁴：

(74) 性, 屈折タイプ, 有生性に以下に示す以外の値がなければ[acc]→[gen]

(i) 単数形の場合：性: [m]；屈折タイプ: [I]；有生性: [an]

(ii) 複数形の場合：有生性: [an]

言ってみれば[acc]→[gen]の書き換えに関して複数において性の対立を見えなくするという考え方である。

後藤(2015b, 2017)らが指摘する一連の言語事実は非常に重要で、複数で性はその対立を失うとする伝統的な知見に疑問を突きつけるものである。一方、性の対立が消失して見えるのはロシア語の文法の多くの側面に共通して見られる現象で、有生性に関わる場合に限られたものではない。従って後藤(2017: 130)の提案を包含する、より一般的な形で規則を立てる方が好ましいと言えるのかも知れない。

10.2.4. 数詞「2～4」の animacy での一致について

1. で数詞「2～4」は有生性について一致をするとされていたが、Corbett (1978b, 1978c)には言及されていないものの、Corbett (1978a: 46)ではこれらの数詞の特徴(iv)の値は「+」だけでなく「(-)」も併記されている。これは Шведова и др. (1980), Димитрова (1994), Мельчук (1980)などが示すように、これらの数詞が場合によっては有生性に関して一致しない(=属格形にならない)ことがあるからである。以下にそれらの例を確認してみよう。

まず、Мельчук (1980: 61), Borrás & Christian (1971: 391)などが合成数詞の最後の数詞がこれら「2～4」の場合、通常数詞は有生性の標示を行わない(=属格形にならない)ことがあると指摘している。Borrás & Christian (1971: 391)はこの場合、属格形にならない方が規範的であるとしている。

(75) 合成数詞

Она обслужила вчера двадцать два клиента.

she serve-pa.f yesterday twenty two-acc client-gen.sg.an

「彼女は昨日 25 人の顧客のために仕事をした」 (Мельчук 1980: 61)

一方 Мельчук (1980)は *в, на, за, через, по* などのいくつかの対格支配の前置詞の補語となる PcQP が属格の形態にならないことを指摘している。

⁴ 後藤 (2017)は匹田 (2015, 2017)に対しての改訂を提案している。上述の様に本稿では匹田 (2015, 2017)の規則の表現に修正を加えた。それに合わせて後藤 (2017)の表現も改めたが内容に違いはない。

10. まとめと残された課題

(76)ある種の前置詞 (Мельчук 1980: 55)

(a) силой ровно в три медведя
poser-ins exactly into three-genq bear-genq.pc
「ちょうどクマ3頭分と同じ力」

(c) Апельсины кончились за четыре человека до меня.
orange-nom.pl finish-pa.pl for four-genq.person-genq.pc before I-gen
「オレンジは私の4人前でなくなった」

これらの PcQP いずれも対格環境におかれており、かつ N は全て有生名詞であるが、いずれも属格化が起こっていない。このようなことが起こる例は他にも種々見られ、その点は様々な研究で指摘されている。

10.2.5. 分割文

Шведова и др. (1980: II: 330)に以下の例が示されている。

(77)「村に幼稚園は1つだ / 幼稚園は村に1つだ」

(a) В селе [один детский сад].
in village-loc one-nom.m kindergarten-nom.m

(b) Детский сад в селе [один \emptyset].
kindergarten-nom.m

(c) Детских садов — [один \emptyset].
kindergarten-gen.pl

(78)「その本には2つの序文がある / 序文はその本には2つある」

(a) В книге [два предисловия].
in book two-genq.-f preface-genq.pc.-f

(b) Предисловия в книге [два \emptyset].
preface-genq.pc.-f

(c) Предисловий в книге [два \emptyset].
preface-gen.pl

これらのうち、(a)の例は通常の QP を主語とする文である。(77)では Q が「1」であるので格環境に従って N は単数・主格形に、(78)では Q が PcQ の「2」であるため少数・数量属格形になっている。(b)ではいずれも N を主題化するために QP から文頭へと移動している(ように見える)。注目すべきは(c)である。ここでも N はおそらく主題化のため文頭に置かれているが、いずれも QP の中で Q に後続する位置にある場合の形態と異なって、N がいずれも複数・属格形になっている。この(c)での N の形態が可能であることは Шведова и др. (1980)の他にも、井上 (2001, 2003, 2006)、Крылов (2005)など様々な研究で指摘されており、その中でも井上 (2003)ではどのような統語的環境でこれらが可能か、意味的な要因は何かなどの詳細な観察・分析が行われている。

10. まとめと残された課題

その一方で、本稿の観点からこの現象を見ると、どのようなメカニズムでこの複数・属格形が可能となっているのかと言う疑問が生じる。(b)と(c)は何が違うのか？ またそもそもこれは複数・属格なのか？ 当然数量属格である可能性も検討すべきである。

さらに、上では(b)と(c)はいかにも N の移動が行われているように示したが、井上(2003: 124)は「変形(移動)は想定しない立場をとる」としている。この問題も明確な答えを求める必要がある。

10.2.6. その他本稿が研究対象としなかったこと

ここまで本稿で具体的に説明ができなかった問題についていくつか概観した。他にもそもそも本稿が扱っていない問題が残る。

(i)まず第1に、本稿は純粹に形式的問題のみを議論の対象としており、意味的、機能的、あるいは用法的な問題は考慮に入れていない。例えば、複数の形態的バリエーションが同時に可能な例がそれぞれどのように使い分けられているのかについては基本的に説明対象としていないし、文体差も考慮されていない。

(ii)第2に、形態的バリエーションが認められる場合、それぞれの形態の統計的な頻度についてはほとんど目が向けられていない。つまり、複数のバリエーションのうち、より用いられやすいのがいずれか、という観点はない。どのバリエーションが可能か不可能かのみ議論している。Corbett (1983)は本稿で扱ったような問題について“sentence-level”ではなく“corpus-level”での規則を考えるべきであると主張している。

(iii)第3に、本稿での議論では「何が数量詞か」という疑問に答えることはできない。従って、本稿で数量詞として議論に上がっているものが全てではない。本稿では数量詞の連続体の中に組み込んだものを数量詞と扱っており、数量詞を定義してはいない(数量詞の特徴としているものは7.で示したが)。例えば、*много*「多くの」、*несколько*「いくつかの」などのいわゆる不定数量詞は本稿ではまだその性質を明確にすることができていないが、恐らく数量詞の連続体においていずれかの位置に置かれるものであると思われる。今後はより多くのものを連続体に取り込むことを目指す必要がある。またより多くの振る舞いについて数量詞を観察する必要もある。

以上、本稿での議論には様々な解決すべき問題が残っている。それは本章で言及したもの他に、本文中で言及したものもあり、また本稿では言及できなかったものもある。これらの中には次に解決すべき問題として、当該研究の方向を示してくれるものがあると考えている。

文献

- Аксенова, М.Д. ред. (2001) *Энциклопедия для детей*, т. 10, Языкознание, Русский язык, 3-е изд. перераб. и доп., Москва: Аванта+.
- Баранов, М.Т., Т.А. Костяева, А.В. Прудникова (1989) *Русский язык: Справочные материалы*, Москва: Просвещение.
- Белошапкина, В.А. ред. (1997) *Современный русский язык*, Издание 3-е, исправленное и дополненное, Москва: Азбуковник. (First edition appeared in 1981)
- Бельчиков, Ю.А. (2008) *Практическая стилистика современного русского языка*, Москва: АСТ-ПРЕСС КНИГА.
- Боброва, А.В. (1999) *Грамматика русского языка*, Москва: Цитадель.
- Борковский, В.И., П.С. Кузнецов (2004) *Историческая грамматика русского языка*, Изд. 2-е, исправленное, Москва: Едиториал УРСС. (First edition appeared in 1963)
- Буслаев, Ф.И. (2009) *Историческая грамматика русского языка: синтаксис*, Изд. 8-е, М.: ЛИБРОКОМ.
- Виноградов, В.В. и др. (1960) *Грамматика русского языка*, в 2 тт., Москва: Издательство Академии наук СССР. (т. 1 著 В.В. Виноградов, Е.С. Истрина, С.Г. Бархударов ред., т. 2 著 В.В. Виноградов, Е.С. Истрина ред.)
- Виноградов, В.В. (1972) *Русский язык (грамматическое учение о слове)*, Изд. 2-е, М.: Высшая школа. (Reprinted by Nauka, Tokyo in 1978) (First edition appeared in 1947)
- Граудина, А.К., В.А. Ицквич, А.П. Каталинская (1976) *Грамматическая правильность русской речи: опыт частотно-стилистического словаря вариантов*, Москва: Наука.
- Граудина, А.К., В.А. Ицквич, А.П. Каталинская (2001) *Грамматическая правильность русской речи: опыт частотно-стилистического словаря вариантов*, 2-е изд., испр. и доп., Москва: Наука.
- Гришина, Е.А. (2011) “Дистрибутивная конструкция с предлогом *по* в русском языке 18-20 вв.”, *Лексико-грамматические инновации в современных славянских языках*, Материалы V Международной научной конференции, Днепропетровский национальный университет имени Олеся Гончара, Днепропетровск, Украина, 7-8 апреля 2011г., 82-87. [https://studiorum.ruscorpora.ru/text/grishina_distributive/] (ただし、本稿で参照したインターネット公開版はページが 1-6 となっており、本稿で言及する際はそちらの数字で引用している。)
- Димитрова, С. (1994) *Исключения в русском языке*, Columbus: Slavica.
- Зализняк, А.А. (1964) “К вопросу о грамматических категориях рода и одушевленности

- в современном русском языке”, *Вопросы языкознания*, 4, 25-40.
- _____, (2002) *Русское именное словоизменение: с приложением избранных работ по современному русскому языку и общему языкознанию*, Москва: Языки славянской культуры. (First edition appeared in 1967)
- _____, (2008) *Грамматический словарь русского языка: словоизменение*, Изд. 6-е, М.: АСТ-ПРЕСС КНИГА. (First edition appeared in 1977)
- Иванов, В.В. (1983) *Историческая грамматика русского языка*, Изд. 2-е, исправленное и дополненное, М.: Просвещение. (First edition appeared in 1964)
- Иноуэ, Ю. (2006) “Что лежит на границе числительных «4» и «5»? Принципиальное различие в восприятии количества, определяемого числительными ЧЕТЫРЕ и ПЯТЬ”, *Мир русского слова*, No. 4, 56-62.
- Иомдин, Л.Л. (1990) *Автоматическая обработка текста на естественном языке: модель согласования*, Москва: Наука.
- Исакадзе, Н.В. (1998) *Отражение морфологии и референциальной семантики именной группы в формальном синтаксисе*, Диссертационная работа на соискание ученой степени кандидата филологических наук, Московский государственный университет им. М.В. Ломоносова. [<https://studylib.ru/doc/1809995/n.v.isakadze>]
- Исаченко, А.В. (1954) *Грамматический строй русского языка в сопоставлении с словацким: морфология, часть первая*, Братислава: Издательство Словацкой академии наук.
- Касаткин, Л.Л., Е.В. Клобуков, П.А. Лекант (1995) *Краткий справочник по современному русскому языку*, издание второе, исправленное и дополненное, Москва: Высшая школа (The first edition appeared in 1991).
- Колесов, В.В. (2009) *Историческая грамматика русского языка*, СПб.: Факультет филологии и искусств СПбГУ; М.: Академия.
- Кохтев, Н.Н. и Д.Э. Розенталь (1984) *Популярная стилистика русского языка*, Москва: Русский язык.
- Крылов, С.А. (2005) “Количество как понятийная категория”, Н.Д. Арутюнова (ред.) *Логический анализ языка: Квантификативный аспект языка*, Москва: Индрик, 44-65.
- Кузнецов, П.С. (1953) *Историческая грамматика русского языка: морфология*, Москва: Издательство Московского университета. [<https://archive.org/details/B-001-001-50/page/n3 /mode/2up>]
- Ломоносов, М.В. (2013) *Российская грамматика Михаила Ломоносова*, Москва: Книга по требованию. (Originally published in 1755)
- Мельчук, И.А. (1980) “О падеже числового выражения в русских словосочетаниях типа (больше) на два мальчика или по трое больных”, *Russian Linguistics*, 5, 55-74.

- _____, (1985) *Поверхностный синтаксис русских числовых выражений*, Wien: Wiener Slawistischer Almanach.
- Милославский, И.Г. (1988) *Зачем нужна грамматика?*, Москва: Просвещение.
- Мицуи, А. (2019) “Классификация существительных, имеющих родовую пару в русском языке”, 『ロシア語研究』, No. 30, ロシア語研究会「木二会」年報.
- Панов, М.В. (1962) “Словоизменение” в книге С. К. Кенсебаев (ред.) *Русский язык и советское общество: Проспект (Материалы Всесоюзной конференции посвященной закономерностям развития литературных языков народов СССР в советскую эпоху)*, Алма-Ата: Издательство Академии наук Казахской ССР, 52-68.
- Пехливанова, К.И. и М.Н. Лебедева (1990) *Грамматика русского языка в иллюстрациях*, Издание 5-е, исправленное и дополненное, Москва: Русский язык. (First edition appeared in 1984.)
- Пешковский, А.М. (1956) *Русский синтаксис в научном освещении*, издание седьмое, Москва: Государственное учебно-педагогическое издательство Министерства просвещения РСФСР. (First edition appeared in 1914.)
- Розенталь, Д.Э. (1998) *Практическая стилистика русского языка*, Москва: Издательство АСТ-ЛТД.
- Розенталь, Д.Э. (ред.) (1984) *Современный русский язык*, Издание четвертое, исправленное и дополненное, Москва: Высшая школа.
- Розенталь, Д.Э., И.Б. Голуб, М.А. Теленкова (1994) *Современный русский язык*, Москва: Международные отношения.
- Розенталь, Д.Э., И.Б. Голуб, Н.Н. Кохтев (1995) *Русский язык для школьников 5-9 классов: Путешествие в страну слов*, Москва: Дрофа.
- Савко, И.Э. (1999) *Весь школьный курс русского языка: пособие для учащихся старших классов и абитуриентов*, 3-е издание, исправленное и дополненное, Минск: Современный литератор.
- Скобликова, Е.С. (1971) *Согласование и управление в русском языке: пособие для учителя*, Москва: Просвещение.
- Фасмер, М. (1986-1987) *Этимологический словарь русского языка*, перевод с немецкого и дополнения члена-корреспондента АН СССР О.Н. Трубачева, под редакцией и с предисловием проф. Б.А. Ларина, издание 2-е, стереотипное, в 4 тт., Москва: Прогресс (Original German version published in Heidelberg, 1950-1958).
- Хавроница, С.А. и А.И. Широценская (2007) *Русский язык в упражнениях*, 16-е издание, переработанное и дополненное, Москва: Русский язык.
- Черных, П.Я. (2010) *Историческая грамматика русского языка*, Изд. 4-е, М.: ЛИБРОКОМ. (First edition appeared in 1952)

- Шанский, Н.М. (ред.) (1988) *Современный русский литературный язык*, Ленинград: Просвещение.
- Шведова, Н.Ю. (1970) *Грамматика современного русского литературного языка*, Москва: Наука.
- Шведова, Н.Ю., Н.Д. Арутюнова, А.В. Бондарко, Вал. Вас. Иванов, В.В. Лопатин, И.С. Лукуханов, Ф.П. Филин (ред.) (1980) *Русская грамматика*, в 2 тт., Москва: Наука.
- Шульга, М.В. (2019) “Динамика форм имени числительного в современном русском языке”, *Вестник Волгоградского государственного университета, Серия 2, Языкознание*, Т. 18, № 4, Федеральное государственное автономное образовательное учреждение высшего образования «Волгоградский государственный университет», 88-104. [<https://cyberleninka.ru/article/n/dinamika-form-imeni-chislitel'nogo-v-sovremennom-russkom-yazyke>]
- Янко-Триницкая, Н.А. (1982) *Русская морфология*, Москва: Русский язык.
- Babby, L.H. (1975) *A Transformational Grammar of Russian Adjectives*, The Hague: Mouton.
- _____, (1980a) *Existential sentences and Negation in Russian*, Ann Arbor: Karoma.
- _____, (1980b) “The Syntax of Surface Case Marking”, *Cornell Working Papers in Linguistics*, 1, pp.1-32.
- _____, (1984) “Case Conflicts and Their Resolution: A Contribution to EST Case Theory”, *Cornell Working Papers in Linguistics*, 6, 1-21.
- _____, (1985a) “Noun Phrase Internal Case Agreement in Russian”, *Russian Linguistics*, 9, 1–15.
- _____, (1985b) “Prepositional Quantifiers and the Direct Case Conditions in Russian”, in S. Flier & R.D. Brecht (eds.) *Issues in Russian Morphosyntax*, Columbus: Slavica.
- _____, (1986) “The Locus of Case Assignment and the Direction of Percolation: Case Theory and Russian”, in R. D. Brecht & J. S. Levine (eds.) *Case in Slavic*, Columbus: Slavica Publishers, 170–219.
- _____, (1987) “Case, Prequantifiers, and Discontinuous Agreement in Russian”, *Natural Language and Linguistic Theory*, 5, 91–138.
- Babyonyshev, M. (1993) “Acquisition of Russian Case Systems”, in C. Phillips (ed.) *Papers on Case & Agreement II*, MIT Working Papers in Linguistics vol. 19 (1993), 1-43.
- Bailyn, J.F. (2012) *The Syntax of Russian*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Bailyn, J.F. & A. Nevins (2008) “Russian Genitive Plurals are Impostors”, in A. Bachrach & A. Nevins (eds.) *Inflectional Identity*, Oxford: Oxford University Press, 237-270.
- Baker, M.C. (2008) *The Syntax of Agreement and Concord*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Barnetová, V., H. Běličová-Křížková, O. Leška, Z. Skoumalová, V. Straková (1979) *Русская*

- Грамматика*, в 2 тт., Praha: Academia.
- Bloomfield, L. (1984) *Language*, Chicago: University of Chicago Press. (Originally published in 1933 by Holt, Rinehart and Winston, Inc.).
- Borras, F. M., R. F. Christian (1971) *Russian Syntax: Aspects of Modern Russian Syntax and Vocabulary*, Second edition, Oxford: Oxford University Press.
- Chomsky, N. (1965) *Aspects of the Theory of Syntax*, Cambridge: The MIT Press.
- _____, (1970) “Remarks on Nominalization”, in R.A. Jacobs & P.S. Rosenbaum (eds.) *Readings in English Transformational Grammar*, Waltham: Ginn and Co., 184-221.
- _____, (1972) *Studies on Semantics in Generative Grammar*, The Hague: Mouton.
- _____, (1981) *Lectures on Government and Binding*, Dordrecht: Foris.
- _____, (1982) *Some Concepts and Consequences of the Theory of Government and Binding*, Cambridge: The MIT Press.
- _____, (1986) *Barriers*, Cambridge, London: The MIT Press.
- _____, (1993) “A Minimalist Program for Linguistic Theory”, in K. Hale and S.J. Keyser (eds.) *The view from Building 20: Essays in Linguistics in Honor of Sylvain Bromberger*, Cambridge: The MIT Press, 1-52.
- _____, (1995) *The Minimalist Program*, Cambridge, London: The MIT Press.
- _____, (2000) “Minimalist Inquiries: The Framework”, in R. Martin, D. Michaels, J. Uriagereka (eds.) *Step by Step: Essays on Minimalist Syntax in Honor of Howard Lasnik*, Cambridge, London: The MIT Press, 89-155.
- _____, (2001) “Derivation by Phase”, in M. Kenstovicz (ed.) *Ken Hale: A Life in Language*, Cambridge, London: The MIT Press, 1-52.
- Cubberley, P. (2002) *Russian: A Linguistic Introduction*, Cambridge, New York: Cambridge University Press.
- Comrie, B. & G. Stone (1978) *The Russian Language since the Revolution*, Oxford: Oxford University Press.
- Corbett, G.G. (1978a) “Numerous Squishes and Squishy Numerals in Slavonic”, in B. Comrie (ed.) *Classification of Grammatical Categories*, Edmonton: Linguistic Research, 43–73.
- _____, (1978b) “Universals in the Syntax of Cardinal Numerals”, *Lingua*, 46, 61–74.
- _____, (1978c) “Problems in the Syntax of Slavonic Numerals”, *The Slavonic and East European Review*, Vol. 56, No. 1, 1-12.
- _____, (1979a) *Predicate Agreement in Russian*, Birmingham: The Department of Russian Language and Literature, University of Birmingham.
- _____, (1979b) “The Agreement Hierarchy”, *Journal of Linguistics*, 15, 203-224.
- _____, (1983) *Hierarchies, Targets and Controllers: Agreement Patterns in Slavic*, University Park: The Pennsylvania State University Press.

文献

- _____. (1993) “The Head of Russian Numeral Expressions”, in G.G. Corbett, N.M. Fraser, S. McGlashan (eds.) *Heads in Grammatical Theory*, 11-35, Cambridge: Cambridge U.P.
- _____. (2000) *Number*, Cambridge: Cambridge University Press.
- _____. (2006) *Agreement*, Cambridge: Cambridge University Press.
- _____. (2010) “Features: Essential Notions”, in A. Kibort & G.G. Corbett (eds.) *Features: Perspectives on a Key Notion in Linguistics*, Oxford: Oxford University Press, 17-36.
- _____. (2012) *Features*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Corbett, G.G. & N.M. Fraser (2000) “Default Genders”, in B. Unterbeck, M. Rissanen, T. Nevalainen & M. Saari (eds.) *Gender in Grammar and Cognition*, Trends in Linguistics: Studies and Monographs 124). Berlin: Mouton de Gruyter, 55-97.
- Crockett, D.B. (1976) *Agreement in Contemporary Standard Russian*, Cambridge: Slavica.
- den Dikken, M. (2001) “Plurals, Pronouns and Quirky Agreement”, *The Linguistic Review*, 18, 19-41.
- Fiengo, R. & H. Lasnik (1972) “On Nonrecoverable Deletion in Syntax”, *Linguistic Inquiry*, 3, 528.
- Franks, S. (1986) “Case and the Structure of NP”, in R.D. Brecht and J.S. Levine (eds.) *Case in Slavic*, Columbus: Slavica Publishers.
- _____. (1995) *Parameters of Slavic Morphosyntax*, New York, Oxford: Oxford University Press.
- _____. (2017) *Syntax and Spell-Out in Slavic*, Bloomington: Slavica Publishers.
- Freidin, R and L.H. Babby (1984) “On the Interaction of Lexical and Syntactic Properties: Case Structure in Russian”, *Cornell Working Papers in Linguistics*, 6, 71-103.
- Gazdar, G., E. Klein, G. Pullum, I. Sag (1985) *Generalized Phrase Structure Grammar*, Oxford: Basil Blackwell.
- Goto, Y. (2020) “Some Remarks on Agreement in Animacy in Russian”, 『ロシア語研究 ロシア語研究会木二会年報』, 第 30 号, 57-87. [<http://repository.tufs.ac.jp/handle/10108/106419>]
- Halle, M. (1990) “An Approach to Morphology”, *Proceedings of the Northeast Linguistic Society*, 20, 150-184.
- _____. (1994a) “The Morphology of Numeral Phrases”, in S. Avrutin, S. Franks, L. Progovac (eds.) *Annual Workshop on Formal Approaches to Slavic Linguistics: The MIT Meeting 1993*, Ann Arbor: Michigan Slavic Publications, 178-215.
- _____. (1994b) “The Russian Declension: An Illustration of the Theory of Distributed Morphology”, in J. Cole & C. Kisseberth (eds.) *Perspectives in Phonology*, Stanford: CSLI, 29-60.
- Harves, S. (2003) “Getting Impersonal: Case, Agreement, and Distributive *Po*-phrases in Russian”, in W. Browne, J.-Y. Kim, B.H. Partee, R.A. Rothstein (eds.) *Annual Workshop on*

- Formal Approaches to Slavic Linguistics: The Amherst Meeting 2002*, Ann Arbor: Michigan Slavic Publications, 235–254.
- Hikita, G. (2020) “The Preassigned Case of Russian Quantifiers”, 『ロシア語研究』, No. 30, ロシア語研究会「木二会」年報. [<http://repository.tufs.ac.jp/handle/10108/106418>]
- Huddleston, R. & G.K. Pullum (2005) *A Student's Introduction to English Grammar*, Cambridge, New York: Cambridge University Press.
- Ionin, T. & O. Matushansky (2018) *Cardinals: The Syntax and Semantics of Cardinal-Containing Expressions*, Cambridge, London: The MIT Press.
- Jackendoff, R. (1977) *X̄ Syntax: A Study of Phrase Structure*, Cambridge, London: The MIT Press.
- Jakobson, R. (1984a) “Morphological Observation on Slavic Declension (The Structure of Russian Case Form)”, in *Russian and Slavic Grammar: Studies 1931-1981*, Berlin: Mouton, 105-133. (The first Russian version published in *American Contribution to the Fourth International Congress of Slavists*, The Hague: Mouton, 1958)
- _____, (1984b) “The Relationship between Genitive and Plural in the Declension of Russian Nouns”, in *Russian and Slavic Grammar: Studies 1931-1981*, Berlin: Mouton, 135-140. (First published in *Scando-Slavica*, 3, 1957)
- King, T.H. (1995) *Configuring Topic and Focus in Russian*, Stanford: CSLI Publications.
- Levin, M.I. (1978) *Russian Declension and Conjugation: A Structural Description with Exercises*, Columbus: Slavica.
- Mel'čuk, I.A. (1980) “Animacy in Russian Cardinal Numerals and Adjectives as an Inflectional Category”, *Language*, 56-4, 797-811.
- _____, (1982) “Is *Odin* a Numeral in Russian?”, in H. Fix, A. Rothkegel, E. Stegentritt (eds.) *Sprachen und Computer: Festschrift zum 75. Geburtstag von Hans Eggers*, Saarbrücken: AQ-Verlag, 275-285.
- Miyauchi, T. (2018) “Syntactic Structures of Relative Clauses in Russian: A View from Binding Phenomena”, 『ロシア語研究』, ロシア語研究会「木二会」年報, 第28号, 105-128.
- Neidle, C. (1988) *The Role of Case in Russian Syntax*, Dordrecht: Kluwer Academic Publishers.
- Nørgård-Sørensen, J. (2011) *Russian Nominal Semantics and Morphology*, Bloomington: Slavica Publishers.
- Pereltsvaig, A. (2010) “As Easy as Two, Three, Four?”, in W. Browne *et al.* (eds.) *Annual Workshop of Formal Approaches to Slavic Linguistics: The Second Cornell Meeting 2009*, Ann Arbor: Michigan Slavic Publications.
- Pertsova, K. (2005) “How Lexical Conservatism Can Lead to Paradigm Gaps”, *UCLA Working Papers in Linguistics*, 11, 13-30.
- _____, (2014) “Morphological Markedness in an OT-Grammar: zeros and syncretism”, in

- JohnKingston, Claire Moore-Cantwell, Joe Pater, and Robert Staubs (eds.), *Proceedings of Phonology 2013*, Washington DC: Linguistic Society of America. [<http://journals.linguisticsociety.org/proceedings/index.php/amphonology/article/view/33>]
- Pesetsky, D. (1982) *Paths and Categories*, Unpublished Ph.D. Dissertation, Massachusetts Institute of Technology.
- _____, (1989) *Language-Particular Processes and the Earliness Principle*, Ms., MIT, Cambridge.
- _____, (2013) *Russian Case Morphology and the Syntactic Categories*, Cambridge, London: The MIT Press.
- Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech, J. Svartvik (1972) *A Grammar of Contemporary English*, London: Longman.
- Rappaport, G.C. (1986) "On the Grammar of Simile: Case and Configuration", in R. D. Brecht & J. S. Levine (eds.) *Case in Slavic*, Columbus: Slavica Publishers, 244-279.
- _____, (2002) "Numeral Phrases in Russian: A Minimalist Approach", *Journal of Slavic Linguistics*, vol. 10, no.1-2, 327-340.
- _____, (2003) "The Grammatical Role of Animacy in a Formal Model of Slavic Morphology", in R.A. Maguire, A. Timberlake (eds.) *American Contributions to the 13th International Congress of Slavists*, Vol.1: Linguistics, Bloomington: Slavica, 149-166.
- Reinhart, T. (1983) *The Syntactic Domain of Anaphora*, Unpublished Ph.D. dissertation, MIT. [<https://dspace.mit.edu/handle/1721.1/16400>]
- Sauerland, U. & P. Elbourne (2002) "Total Reconstruction, PF Movement, and Derivational Order", *Linguistic Inquiry*, 33, pp. 283-319.
- Siegel, M. (1976) "Capturing the Russian Adjective", in B.H. Partee (ed.) *Montague Grammar*, New York: Academic Press, 293-309.
- Sober, E. (2012) "Anthropomorphism, Parsimony, and Common Ancestry", *Mind and Language*, Vol. 27, No. 3, 229-238.
- _____, (2015) *Ockham's Razor: A User's Manual*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Stepanov, A. & P. Stateva (2018) "Countability, Agreement and the Loss of the Dual in Russian", *Journal of Linguistics*, 54, 779-821.
- Timberlake, A. (1993) "Russian", in B. Comrie & G.G. Corbett (eds.) *The Slavonic Languages*, London, New York: Routledge.
- _____, (2004) *A Reference Grammar of Russian*, Cambridge, New York: Cambridge University Press.
- Wade, T. (2011) *A Comprehensive Russian Grammar*, Third Edition, Oxford, Cambridge: Blackwell. (First edition published in 1992)
- Worth, D.S. (1959) "Grammatical and Lexical Quantification in the Syntax of the Russian Numeral", *International Journal of Slavic Linguistics and Poetics*, I/II, 117-131.

文献

- 秋山真一 (2001)「ロシア語数詞句とその統語構造」, 『ロシア語研究 ロシア語研究会木二会年報』, 第 14 号,, 42-61.
- _____, (2002)「ロシア語数詞句の統語構造と数カテゴリーの問題について」, 『ロシア語研究 ロシア語研究会木二会年報』, 第 15 号, 19-27.
- _____, (2004)「数詞句を主語にもつ文の述語形態について ～研究ノート～」, 『ロシア語研究 ロシア語研究会木二会年報』, 第 17 号, 59-69.
- 東一夫, 東多喜子(1994)『改訂版標準ロシア語入門』, 東京:白水社.
- 油家みゆき(2007)「ロシア語の身分・職業をあらわす「男性」名詞に対する形容詞の一致について」, 『学苑』, No. 799, 24-34.
- 井上幸義 (2001)「ロシア語の数詞と名詞の結合における類像性(iconicity)の現れ」, 『外国語学部紀要』, 第 36 号, 上智大学, 95-119.
- _____, (2003)「ロシア語における数詞を含む分割文について」, 『外国語学部紀要』, 第 38 号, 上智大学, 107-129.
- _____, (2006)「数詞<<4>>と<<5>>の境界に横たわるものはなにか?—数詞 четыре と пять によって規定される数量の認識における根本的相違—」, 『外国語学部紀要』, 第 41 号, 上智大学, 217-241.
- _____, (2019)「ロシア語の数詞と結合する名詞の形態について—数詞<2~4>と<5>以上のそれぞれと結合する名詞の形態的相違および分割文«Книг было две.»における名詞の複数生格形の意味—」, 『ロシア語研究』, No.29, ロシア語研究会「木二会」年報, 3-60.
- 宇多文雄 (2009)『ロシア語文法便覧』, 東京:東洋書店.
- 恩田義徳 (2020)「東京外国語大学附属図書館所蔵ロモノソフ『ロシア文法』について」, 『スラヴ文化研究』, 18 号, 東京外国語大学, 38-54.
- 川本夢子 (2021)「ポーランド語の「礼儀」に関する社会言語学的考察—謝罪表現のケース・スタディー—」, 『言語・地域文化研究』, 第 27 号, 271-286.
- 雲越繁 (2005)「ロシア語ナショナルコーパス (Национальный корпус русского языка) について」, 『ロシア語研究 ロシア語研究会木二会年報』, 第 18 号, 49-70.
- 後藤雄介 (2015a)『ロシア語における成句 один за другим の形態統語的特徴について』, 未刊行修士論文, 東京外国語大学.
- _____, (2015b)「ロシア語における名詞の性の対立をめぐって—一致の観点から—」, 『スラヴィアーナ=Slaviana』, 第 7 号, 日本スラヴ人文学会, 49-60. [https://ynu.repo.nii.ac.jp/?action=repository_uri&item_id=8324&file_id=20&file_no=1]
- _____, (2017)「ロシア語における有生性に関する一致と性の対立について」, 『スラヴ文化研究』, 第 15 号, 東京外国語大学, 119-135. [http://repository.tufs.ac.jp/bitstream/10108/91375/1/20180410_7_3.%20後藤研究ノート.pdf]

文献

- 小林潔 (2003) 「ドイツ・テュービンゲン大学のロシア語コーパス」, 『ロシア語研究 木二会年報』, 第 16 号, 64-85.
- 小林祐 (2020) 『ロシア語における数量詞と形容詞の関係について』, 未刊行卒業論文, 東京外国語大学.
- 佐藤純一 (1994) 『新ロシア語入門』, 東京: NHK 出版.
- _____, (2012) 『ロシア語史入門』, 東京: 大学書林.
- 佐山豪太 (2018) 『派生接辞を用いたロシア語の効率的な語彙学習法の検討 —コーパスが提示する頻度データの言語学的な分析に基づいて—』, 博士学位論文, 東京外国語大学. [[http:// repository.tufs.ac.jp/bitstream/10108/92268/1/dt-ko-0253.pdf](http://repository.tufs.ac.jp/bitstream/10108/92268/1/dt-ko-0253.pdf)]
- 佐山豪太, 光井明日香, 後藤雄介, 宮内拓也, ツォイ・エカテリーナ, ヴァフロメーエフ・アナトリー (2019) 『ゼロからスタート ロシア語 文法編』, 東京: Jリサーチ出版.
- 城田俊 (2010) 『現代ロシア語文法』, 改訂新版, 東京: 東洋書店.
- 中岩諒 (2020) 「ロシア語の比較級を用いた文における基準と対象の格の合致について」, 『ロシア語研究 ロシア語研究会「木二会」年報』, No.30, 89-114. [<http://repository.tufs.ac.jp/handle/10108/106420>]
- 中澤英彦 (2006) 『一冊目のロシア語』, 東京: 東洋書店.
- 日本ロシア文学会用語委員会 (1996) 『初歩のロシア語教育に用いる用語のガイドライン』, 日本ロシア文学会.
- 沼野恭子, 匹田剛, 前田和泉, イリーナ・ダフコクワ (2013) 『大学のロシア語 I : 基礎力養成テキスト』, 東京: 東京外国語大学出版会.
- 原求作 (1996a) 『ロシア文法の要点』, 東京: 水声社.
- _____, (1996b) 『ロシア語史講話』, 東京: 水声社.
- 原口庄輔, 中村捷, 金子義明 (2016) 『増補版チョムスキー理論辞典』, 東京: 研究社.
- 林田理恵 (2005) 『新装版初級中級ロシア語入門』, 東京: 南雲堂フェニックス.
- 匹田剛 (1995) 「ロシア語における主語・動詞の一致と主格の付与をめぐる」, 『小樽商科大学人文研究』, 第 89 輯, 211-234.
- _____, (1996) 「ロシア語における連結動詞と主格名詞句を先導する это をめぐって」, 『小樽商科大学人文研究』, 第 91 輯, 287-314.
- _____, (1998) 「ロシア語の主格名詞句をめぐる」, 『小樽商科大学人文研究』, 第 95 輯, 173-206.
- _____, (2000) 「ロシア語における長語尾形容詞述語の句構造をめぐる」, 『言語センター公報 *Language Studies*』, 第 2 号, 小樽商科大学言語センター, 67-79.
- _____, (2007a) 「ロシア語の文法における連続性について」, 中澤英彦・小林潔編 『ロシア語学とロシア語教育』, 東京: 東京外国語大学, 5-26.
- _____, (2007b) 「ロシア語の数量詞と一致が示すいくつかの問題点」, 『語学研究所論集』,

文献

- 第 12 号, 31-60.
- _____, (2010)「ロシア語における主語・述語の一致をめぐって」, 『北海道言語文化研究』, 第 8 号, 129-159.
- _____, (2011)「ロシア語の等位接続構造をめぐって」, 『東京外国語大学論集』, 第 83 号, 1-29.
- _____, (2013)「ロシア語の一致に関する覚え書き」, 『ロシア語研究』, No.23, ロシア語研究会「木二会」年報, 65-91.
- _____, (2015)「ロシア語の有生性の一致について」, 『ロシア語研究』, No.25, ロシア語研究会「木二会」年報, 43-82.
- _____, (2016)『これならわかるロシア語文法：入門から上級まで』, 東京：NHK 出版.
- _____, (2017)「ロシア語の名詞句の構造と文法素性について」, 『ロシア語研究』, No.27, ロシア語研究会「木二会」年報, 33-66.
- _____, (2018)「ロシア語の性素性と他の素性の相関関係」, 『ロシア語研究』, No.28, ロシア語研究会「木二会」年報, 41-76.
- _____, (2019)「ロシア語の少数数量詞をめぐって」, 『ロシア語研究』, No.29, ロシア語研究会「木二会」年報, 91-128.
- 三谷恵子(1998)「再解釈, 顕在化, 多重解釈—ロシア語の‘2’, ‘3’, ‘4’ と名詞の結合パターンの変化について—」, 『文藝言語研究. 言語篇』, 33, 1-29.
- 光井明日香 (2014a)『ロシア語における性に関する一致について～一致のバリエントと性の分類を再検討する～』, 未刊行修士論文, 東京外国語大学.
- _____, (2014b)「ロシア語におけるいわゆる総性名詞について」, 『スラヴ文化研究』, 12 号, 東京外国語大学, 118-153.
- _____, (2015)「ロシア語における名詞の性の分類について」, 『ロシア語研究 ロシア語研究会「木二会」年報』, No.25, 83-117.
- _____, (2016)「現代ロシア語における不変化名詞のふるまいをめぐって—性の一致にバリエントがあるものを中心に—」, 『スラヴ文化研究』, 14 号, 東京外国語大学, 41-61.
- _____, (2018a)「現代ロシア語の性に関する一致と女性化形態素 Ж をめぐって」, 『ロシア語研究』, ロシア語研究会「木二会」年報, 第 28 号, 77-103.
- _____, (2018b)『性の連続体と文法素性』, 2018 年度日本ロシア文学会大会パネル「ロシア語の名詞句をめぐって」配付資料, 名古屋外国語大学.
- 宮内拓也 (2015)「ロシア語の分配の no を含む句の句構造をめぐる諸問題」, 『ロシア語研究』, No.25, ロシア語研究会「木二会」年報, 119-146.
- _____, (2016a)「束縛現象とロシア語名詞句の統語構造」, 『スラヴ文化研究』, 13 号, 東京外国語大学, 69-106.
- _____, (2016b)「ロシア語における名詞句内の要素の語順：タイプ理論による考察」,

文献

- 『ロシア語研究』, No.26, ロシア語研究会「木二会」年報, 35-64.
- __, (2022) 『ロシア語における名詞句の統語構造と意味解釈の研究：顕在的冠詞がない言語における名詞句の統合構造の問題によせて』, 未刊行博士論文, 東京外国語大学.
- 森元良太 (2019) 「擬人主義はまじな科学的研究プログラムか：最節約性と統計的仮説検定に基づく議論」, 『哲学』, No. 142, 269-296.
- 八杉貞利 (1939) 『新解 ロシヤ語文法』, 東京：白揚社.
- 山口巖 (1970) 「名詞の性をめぐって」, 『ロシヤ語ロシヤ文学研究』, No. 2, 1-16.
- __, (2005) 『ロシア文法の周辺 一般言語学への招待』, 古代ロシア研究特別号, 日本古代ロシア研究会.
- 和久利誓一 (1961) 『テーブル式ロシア語便覧』, 東京：評論社.